魔法少女リリカルなのはStrikerS 術式を潰す少年

粉／　＼´´ナナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　術式を潰す少年

【Ｎコード】
Ｎ３４７６Ｔ

【作者名】
粉／＼´、´ナナ

【あらすじ】
退屈な生活をしていた少年がトラックにひかれ、転生した。転生した先は、なのはとフェイトの息子！？
なのはとフェイトの才能を受け継いだ天才魔導士として、機動六課に入った少年に敵はいるのか！？　とか何とか書いて置いて実際は苦戦の連続！
ただいまデビルとの戦いが終わり、ようやく一息。高町家になぜかアインハルトも加わり大家族に……

作者は、これが処女作です。ダメ文で、独自解釈があり、表現の間違いが多々あるかもしれませんが、最後までやるので、生暖かく見守っていただければ幸いです。

プロローグ（前書き）

投稿小説の経験は、まったくないのでよく分かりませんが、頑張って書いたので見ていって下さい。

プロローグ

人ゴミの中を、一人の少年が歩いていた。回りの人は、しゃべったり、笑っていたりと明るい雰囲気を出している。
その中で少年は浮いていた。
背は百七十二?程の背丈。制服を着ているがこの時間帯なら変ではない。その少年は、髪を染めていたり派手な行動をしている訳でもない。
しかし、少年は浮いている。
その少年の目には・・・光がないからだ。

その、少年は昔から優秀だった。
勉強をし、親の言う事は必ず守り、名門と言われる高校にも受かり、その高校でも優等生として慕われている。
誰もが優秀だと思っているその少年には、一つの悩みがあった。

それは・・・退屈な事だ。
少しでも点数が下がると怒る親。
勉強の事ばかり話すつまらない友達。
社会に出ても余り自分を取り巻く環境は変わらないだろう・・・そう考えると自然に

「くだらない」

と、口が動いてしまう。
赤色になっている信号機の前に止まった。
下を見、タイルがどんな色をしているか観察する。そんな無意味な行動がなぜか、少年に癒しを与えてくれる。

「おい、あの婆さん大丈夫か？」
「誰か、助けた方がいいんじゃない？」

急に辺りが騒がしくなる。
少年は何事かと思い、顔を上げると、赤信号の中をゆっくりと歩く老婆がいた。
その老婆は、赤信号の中を歩いているというのに慌てる様子を見せない。

ブオォォォン

少年が老婆を見た瞬間ものすごい量の車の音が聞こえた。
回りの視線が一斉に音のする方へ向く。音のする車はトラックだった。
少年は思った。

変だ。

なぜこんな所で、あれ程の音を出すのか・・・
その疑問は運転席を見た瞬間にすぐに分かった。居眠り運転だ。
少年がその事に気がついた瞬間、嫌な予感がし、慌ててさっきの老婆を見た。

その老婆は・・先程の場所から移動していなかった。このままトラックが進めば、間違いなく老婆はひかれしまうだろう。

「クソが」

少年は荷物を投げ捨て老婆の元へと走った。
自分でもなぜこんな事をしているのか分からない。

いや、もしかしたら分かっていた。
いや、期待していたのかもしれない。

ドン

少年が老婆を付きとばす。そして・・・少年はひかれた。

その時少年は、笑っていた。
少年は、期待していたんだ。

転生することを・・・

プロローグ（後書き）

長いのか短いのかまったく解らないｏｒｚ
アドバイス、誤字脱字等ありましたら、教えて下さい。
それを基に頑張ります。

プロローグ2（前書き）

この話から、編集していきたいと思います。

プロローグ2

ここは管理局本局の一つの病室である。そして、一人の少女・・・まだ十三歳位のその子の回りに何人もの人が居た。その人達は願うような、祈るような顔をして、少女を見ていた。
少女は長い栗色の髪をしていて目はサファイアの様に綺麗で、顔もかわいいというイメージが出る整っている顔だ、そして苦しそうな顔をしてうめき声を上げている。

「頑張って、なのはちゃん」
「後もう少しで産まれるから」

そう、なのはは今出産の真最中なのだ。何故十三少女が出産をしているのか・・・それはこの世界の文明が関係あるのかもしれない。少年が死んだ世界とは全く別の世界、窓から見える外、機械、言語、技術、等様々な違いがあった。

「う～～はぁ」

少女は苦しそうな声を上げながら、しかし最後は出しきった用な声を上げた。その顔は凄い運動をした後の様にきつそうだ。無理は無い、第二次性徴期を済ませた大人がするような行為をまだ十三の少女がしたのだ。

「オギャア～～!!??」

赤ん坊の泣き声が聞こえる。

「やったわなのはちゃん、元気な男の子よ」

無事に産まれた、なのははそのことをとても嬉しく感じているのか、先の顔とは違う嬉しそうな表情をしている。

「ハァハァ、シャマルさん、見せて下さい」

シャマルと言われた女性は赤ん坊を優しく抱きながら、なのはの元へ移動した。

「この子が私とフェイトちゃんの・・」

「なのは！」

なのはが何かを言おうとした瞬間に、一人の少女がものすごい勢いで病室に入ってきた。その少女は、金色の髪を長く伸ばし腰の所で、髪を結んでいた。顔はかなり整っており、真紅の瞳がきれいな少女だ。

「なのは大丈夫!?　赤ちゃんは?　それに、すごく苦しそうな声出してたけど今きつくない?」

金髪の少女は、なのはに物凄い覇気を出して問いかける。自分を心配してくれていたことが嬉しいようだ。なのはの顔が更に明るくなった。

「にゃははは、相変わらず心配性だな～フェイトちゃんは。私も赤ちゃんも元気元気」

「本当?」

フェイトはなのはのことを信用して無い訳ではないのだが、やはり気になったのかもう一度確認する。

「大丈夫よフェイトちゃん、なのはちゃんもこの子も体に異常はないわ」

フェイトの問にシャマルが答える。それを聞いたフェイトは安心したようだ。息をホッと吐いた。

「それよりほら、パパなんだから抱っこして上げて」

なのはがフェイトに優しく、少し恥ずかしそうに呟く。

「うん」

フェイトは、未だに泣いている赤ん坊の所へ行き、シャマルから受け取り優しく抱く。

「なのは、この子の名前今思い付いたよ」

赤ん坊を見、微笑みながら言う。それは父親のような母親のような、どちらとも言えないが、親としての顔だった。

「サンなんてどうかな?」
「サン・・・太陽のことね」
「いい名前だと思うけどどうして?」

疑問に思ったなのははフェイトに問う。子供の名前にはやはり理由が無いといけない。聞くのは当然だ。

「なのはと私が使う魔法のイメージって星と雷って感じがしない?」

なのはの得意な魔法はスターライトブレイカー、フェイトは電気の魔力変換物質を持っているので、使う魔法はそれを使ったのが多い。確かにそういうイメージを持っても不思議ではないだろう。

「言われてみればそうだね」

フェイトの意見を聞いてなのはは頷く。だが何故サンなのかが未だに分からないようだ。

しかし、その疑問もフェイトの次の言葉で無くなった。

「だから、私やなのはとは違う光り方をして欲しいんだ。そう、太陽の用に・・」

プロローグ2（後書き）

こんなダメ文でも書くのは難しいです。
誤字脱字、アドバイス等ありましたら感想に書いて下さい。

魔導士としての始まり（前書き）

前のはひどいかったです。良く今までこれを放置していたなっと思いました。
今回も改変しました。

魔導士としての始まり

高町なのはとフェイト・テスタロッサ・ハラオウンとの間に産まれた高町サンは悩んでいた。何故産まれたばかりの子供が自我を持って悩んでいるのか、それはサンが前世の記憶を持っているからだ。

【俺ってババアを突飛ばしてその後トラックにひかれて・・・・やっぱ転生したってことなのか？】

そう、サンの前世はあの時の少年だった。
そして今一実感がないようだ。まあ前世の記憶を持ったまま産まれるなんて、信じられない事だから当然といったら当然だろう。

【確かに転生した事は嬉しいし、この世界には魔法があるから退屈しなくてすみそうだが・・・】

「オギャア～～（なんで親が二人とも女なんだ～～）」

高町サンの両親は女である。高町なのはとフェイト・テスタロッサ・ハラオウンだ。魔法の存在があっても、このことだけは信じられないようだ。

「サンどうしたの？」

泣き声・・もとい叫び声に気づき、慌ててなのはが駆け付けて来た。
その姿はまさに母親だった。そしてもう一人なのはと一緒に男性が来た。

「お腹空いているんじゃないのか？　なのは達が小さい頃もそうだ

ったし」

この人は高町士郎なのはの父親、つまりサンの祖父にあたる人物だ。

「オギャギャギャ！？（あんた何言ってんだ！？）」

士郎は当然のことを言ったのだが、サンには最悪以外の何物でもない。産まれたばかりの赤ん坊が胃に収める物といえば当然母乳である。前世では高校生だったサンにとって母乳を飲むことは社会的に死ぬと言っても過言ではない。

「分かった、分かったすぐあげるから良い子にしようね～」

なのはは、母乳を出す準備をしている。士郎も気を使って部屋から出て行った。

「はーいミルクだよ～」

「うぎゃ～～！！！？？」

サンのプライドが壊れてからすでに一年半たった。サンは、精神が壊れそうになりながら（他にも色々な赤ちゃんプレイ的なものをしてしまった）も回りの話聞いたり、直接自分から聞いたりし、情報を集めていた。

【一旦情報を整理してみるか】

一　どうやら俺はロストロギアという、いわゆるオーバーテクノロジー的な物でなのは母さんに宿ったらしい。なんでも神の雫というロストロギアだそうで、願い事を一つ叶えさせてくれる変わりに、新しい生命を産まなければならないそうだ。

二　母さんの願いは怪我を治し、もう一度フェイト父さん（二人とも母さんだとややこしいため）　と空を飛ぶ事らしい。

三　どうやら俺はフェイト父さんの血も受け継いでいるらしい。このことは、専門家でさえ分からなかったそうだ。が、両親やその回りの人達は愛の力って事で納得してるらしい。何なんだそれ。

四　どうやら俺は魔導士として、かなり将来を期待されているらしい。理由としてはまず、エースオブエース高町なのはと、大魔導士プレシア・テスタロッサの血を引く天才魔導士フェイト・テスタロッサ・ハラオウンの息子。まあ期待されない方がおかしいだろう。
そして期待される理由のもう一つが、神の雫だ。ロストロギアの力によって産まれた子は、前代未聞みたいで、何人もの化学者が俺を調べた結果、俺には数多くの魔力変換物質があるらしい。良く知らないが、両親が喜んでいたから良いことなんだろう。

五　これは俺にとっては嬉しくないことだ。それは、俺の中にブラックボックスがあるらしい。
沢山の人が調べた結果これは本当のことらしい。
この時俺は泣いたね。おもいっきり泣いた。ずっと泣いていたから母さんが無理矢理ミルクを飲ませてきた。

ちなみにサンは、アースラにいる。今から同窓会があるからだ。一通り情報を整理し終わったサンは首を動かし時計を見る。みんなが帰ってくる時間を確認するためだ。

「サン～飾り付けお願いしてもいい？」

この人はリンディ・ハラオウン、フェイトの義理の母である。つまりサンの祖母だ。リンディは料理の途中だったようだが、一旦止めてサンに近づいた。

「うん、何すればいいの？」

サンは自分が転生者だとばれない用に、子どもっぽく話す。

「このヒラヒラを壁につけて欲しいんだけど・・やっぱり無理かしら？」

「それだったら僕が手伝いますよ」

二人が声のする方に視線を動かすとユーノ・スクライアが居た。彼はなのはとフェイトの昔からの友人なので、当然同窓会には呼ばれていたのだ。

「僕も一緒にしてもいいかな？」

ユーノはサンに優しく問いかける。

サンは、自分では出来ないことが分かっているので「お願いします」と答えた。

ユーノが肩車をしサンを乗せ、サンがヒラヒラを壁に着けていく。

サンはどうすれば早く終わるか等、前世の記憶があったので、あっ

という間に作業が終わった。

「「ただいま戻りましたー」」

任務に出ていたメンバーが帰って来た。
なのはにフェイトに八神はやて　ヴォルケンリッターの、シグナム・ヴィータ・シャマル・ザフィーラ、後ユニゾンデバイスのリィンフォースツヴァイ。

「サン良い子にしてた？」

なのはがサンに聞く。やはり保護者は小さな子供と少しの時間を離れてから会うと、これを言うようだ。

「うん、リンディお婆ちゃんのお手伝いもしたよ」

と、笑顔でなのはに返したが、裏では百八十度反対のことを考えていた。

【あー正直やってられねー】

やはり、小さい子の口調で話すのは嫌なようだ。
それを聞いていたフェイトがサンに向って言う。

「えらいね～じゃあ今日は、なんでも好きな物食べてもいいよ」
「あーフェイトちゃんまた甘やかして」
「大丈夫だよ、一日くらい」

「駄目だよ、一度甘やかしたらなかなか直らないかもしれなんだよ。サンの好き嫌いが激しくなったらどうするの？」
「大丈夫だよ、サンはほとんど好き嫌いないし」

二人共段々口調が激しくなってくる。サンも自分のことで両親が喧嘩するのが嫌なようで、二人の間に入ろうとした瞬間に、はやての声が聞こえた。

「あー、お二人さん、痴話喧嘩ならよそでやってや」

二人の言い合いを、はやてがからかいの言葉も入れて止める。あえてからかう事で、二人を一旦冷静にさせたのだ。なかなかの話術だ。そして二人はだんだん頭が冷めてきたようだ。その証拠に、先程までの怒っている表情とは違い、申し訳無い表情だった。

「ごめんなさい」

先になのはが謝る。自分から先に厳しく言ったのがこたえているのだろう。

「ううん、謝るのは私の方。ごめんねなのはの考えを無視して勝手に言って」
「でもでも、サンは好き嫌い少ないからちょっと位自由に食べさせても大丈夫だと思うし。それにサンは、良い子だから・・・やっぱり私に母親は勤まらないのかな？」

なのはの目から少しだけ涙が落ちる。あれ程頑張って出産したのに、その後が上手く出来ていないと思うと当然涙は出る。その様子を見たフェイトはなのはを慰める為にある行動に出る。

「大丈夫だよ」

優しく呟いてフェイトはなのはを抱きしめる。

「フェ、フェイトちゃん？」

なのはは急に抱しめられた為、顔が赤面して声が上がってしまう。

その様子を見て少し笑いながらフェイトはなのはの耳元でそっと呟く。

「私達はまだ子供だけど、一緒にいろんなことをして、いろんなことを学んだりしよう。時には失敗することもあるけどそれも二人で支え合って、それを大人になっても、お婆さんになっても、ずっと一緒にやっていこう」

フェイトのプロポーズとも言える言葉になのはの顔は更に真っ赤になる。しかしフェイトはお構いなしにどんどん続けていく。

なのはを一旦離してゆっくり、優しく髪を撫でる。その力が抜けてしまうテクニックになのはは目をトロンとしてしまう。

そのなのはを見たフェイトはゆっくりと自分の唇となのはの唇を接近させる。

そして二人は・・・・キスをした。

二人の桃色空間が消滅した時は、すでに料理はほとんどなくなっていた。まああれからも色々と甘い行動をしていたので、当然と言ったら当然である。

「ひどーい」

なのはは、料理がほとんどなくなったことに非難の声をあげる。

「バーカ、いつまでもイチャイチャしているお前らが悪いんだろう」

その声を聞いたヴィータがもっともなことを言う。

「うーー」

なのはは納得いかないようだ。自業自得というのに気づいて無いのか、フェイトの甘い囁きによって動けなくなったから、自分のせいじゃ無いと言いたいのか。まあなのはの心境はどちらでも良いが、確かに食べられないのは可哀そうである。

「ママ、これ」

サンはなのはの前に皿を出す。その上にはいくつかの食べ物が置いてあった。サンは二人がしばらく食べようとしないということを予想して、先にいくつか取っておいたのだ。

「これ、いいの？」

サンは、首を縦にコクンと振る。

次の瞬間なのははサンに抱きつき嬉しかったのか、急に泣き始めた。先程厳しい言葉を言った自分に優しくしてくれたのが嬉しかったのだ。母親にしか分からない喜びなのだろう。

なのはを泣き止ませたり、フェイトの保護児童の話等をしていたら、気がつくともうすぐ解散の時間だ。

「誰か最後に言うことはないか？」

はやてが皆に聞く。サンは、慌てて手を上げる。慌てていることから何か重要な話なのかもしれない。

「サンはなんや言いたいことでもあるん？」

はやての言葉にサンは頷く。そして全員から見える用にと移動した。

そして息を吸って深呼吸をする。

「皆さん・・・僕に魔法を教えて下さい」

この発言が高町サンの魔導士としての始まりである。

魔導士としての始まり（後書き）

なのフェイが上手く書けなかったｏｒｚ
もっとなのフェイはイチャイチャしているはずなんだが。（作者の頭の中では）
アドバイス等ありましたらお願いします。

オリキャラ紹介（前書き）

今回は、主人公とそのデバイスを紹介したいと思います。

追伸　矛盾が出てきたので少し変えます。

オリキャラ紹介

高町サン

容姿　　髪は栗色に少しだけ入っている金髪。長さ肩までである。
幼少期の凛々しいフェイトに似ている。
目の色は、赤と青のオッドアイ。
身長は、百十五？

性格　　前世の鬱憤を晴らすためか、かなりやんちゃな性格。
テレビや、漫画で見た、と理由を付け前世と同じ様な話し方をする。
公私はちゃんと別けられる。

好きな物　　戦うこと。魔法を使うこと。
人には言わないがなのはとフェイトのことが一番好き。

嫌いな物　　シグナム（ものすごく厳しく鍛えられたから）
甘い物全般

能力　　魔力値は、ＡＡランク。
風、電気、氷、水の魔力変換物質を持っている。
魔力変換物質や前世の記憶を使いオリジナル魔法を沢山持っている。
体の中にブラックボックスがある。

リリース（インテリジェントデバイス）

モード　剣とマシンガンが一瞬になった、デュアルウェポン（可変式剣）

今の所これしかなれない。

サンがなのはに頼んで、サン用に作ってもらったデバイス。

サンの急な行動に対応しようと頑張る苦労人。

好きな物　　レイジングハート。バルディッシュ。（どちらも憧れ）

嫌いな物　　何も考えずに行動すること。

突拍子な計画。

オリキャラ紹介（後書き）

無難なキャラ設定でした。

ブラックボックスの正体が、分かった時もう一回書きたいと思います。

始まりの試験（前書き）

修行内容すっとばして一気にＳｔｒｉｋｅｒＳに入ります。

初めての戦闘描写で、伝わりにくい所があると思います。

温かい目で見てくれるとうれしいです。

始まりの試験

新暦七十五年ミッドチルダ。

試験を受けるためサンは廃ビルの上にいる。
今は試験を受けている二人組が終わるのを待っている所だ。どうやらその二人は残り数秒の所でゴールしたようだ。

「いよいよだな」
『ええ、ミスしないようにして下さいよ。これで落ちたらあの部隊に行けないかもしれませんから』
「わーてるよ」

この声はサンのデバイス、名前はリリース。サンはリリと呼んでいる。

サンの前に大きなモニターが出てくる。モニターには一人の女の子が映っていた。

「こんにちは～本日の試験官を勤めさせていただくリィンフォースツヴァイ空曹長です。よろしくですよ～」
「よろしくお願いします」

サンとリィンフォースは知り合いだが、公私を分けて敬語で挨拶をする。まあ時空管理局は軍隊に近い組織なので当然のルールなのだが。

「高町サン三等陸士。保有している魔導士ランクは陸戦Cランク、本日受験するのは陸戦魔導士Bランクへの昇格試験で間違いないで

すよね」
「間違いありません」
「サン三等陸士はそこからスタートして各種に設置されたポイントターゲットを破壊、もちろん破壊してはダメなダミーターゲットもありますからね、妨害攻撃に気をつけて全てのターゲットを破壊、制限時間内にゴールを目指して下さいです。何か質問は？」
リィンフォースツヴァイが淡々と試験の説明をしていく。
「ありません」
質問も無かったのでそう答えた。
「それではゴールを目指して頑張って下さいね」
そう言い終えるとモニターの画面が変わりスタートまでのカウントがされていく。
スタートの合図がなった。
サンはすぐに走りビルから飛び降りる。その顔は緊張の欠片も無く、笑っていた。
「リリ、セットアップだ」
『了解しました』
次の瞬間サンの手にマシンガンの用な物が現れ、服装が白と黒をベースにしたバリアジャケットになる。
そして、空中で向きを変え、ターゲットがいるビルに向かって銃を連射する。

ドガガガガ

弾丸の一発一発が無駄なくターゲットに当たる。しかし、ダミーターゲットには当たっていない。

魔導士の弾丸といったら普通は球状のスフィアだが、サンの弾丸は違う。

サンの使う弾丸は質量兵器が使う弾丸に似ていて面積が小さい。

その分速さや、貫通力、魔力消費量が少ない。

もっとも、管理世界育ちの人にとってはイメージしにくい形なので、一般的とは言えない。

サンは一旦撃つのを止め地面に着地する。

派手な行動をしたので、ターゲットがサンの存在に気づき攻撃してくる。

マシンガンの状態のリリを剣に変える。しかし、デバイスのモードが変わった訳ではない。マシンガンと剣の二つを兼ね備えた武器、これがサンの使っているデュアルウェポン（可変式剣）だ。

ビルにいるターゲットに向かって低姿勢になりながら走る。五歳児の低姿勢だ。ターゲットからするとかなり当てにくい敵だろう。

サンは、自分に当たりそうな攻撃だけを弾き、ビルの中に入る。

「雷神装」

そう呟くと、リリが光りサンの回りが微かに明るくなる。電気の魔力変換物質を使った魔法を使ったからだ。

「おらぁ〜〜」

次の瞬間ターゲットは、全て破壊された。剣の斬り跡がある事から、恐らく全て斬ったのだろう。

「そらそらそら～」

『マスター、少し落ち着いて下さい』

リリの言う事にサンは耳を傾けず、そのまま次々とターゲットを破壊して行き、ビルのターゲットを全て破壊した。

サンの目の前にはターゲットがあり、攻撃をしてきた。それなのにサンは全く慌てず動かずにリリを構える。

「さて、ここもミス無しにクリア～っと」

そう言いながらターゲットに向かって弾丸を撃つ。

『次はこの上ですね』

「確か集中砲火がくるそうだな」

この上の場所はなかなかの難問で、今までの受験者は必ず迂回するのが当然だった。

『はい、だから迂回し・・』

「よし、突っ込むか」

特別に気合いを入れた声を出すのでは無く、いつも通りの声でそう

言った。そして常識があるリリは当然反論する。

『マスター！？　何言っているのですか？　先日の私の話を聞いていなかったのですか！？　ここは今までの受験者全員が迂回したのですよ。突撃した受験者は皆不合格なのです』

リリの意見はもっともだろう。集中砲火がくると分かっているのにわざわざそこに向かうなんて、それこそ腕に自信がある人物か、よっぽどの馬鹿位だろう。

「俺はな、こんな所で迂回して戦う程気が長く無いんだよ！」

そう叫び、回転しながら跳ぶ。

そしてターゲットが見える位置まで上がると、ターゲットはすぐにサンに気づき一斉射撃をしてくる。文字通り三百六十度全てが敵だ。回転しているサンはマシンガンを連射する。さらにスフィアを展開し、死角にいる敵を倒す。更にリリのおかげで相手の居場所が分かる。それを利用してダミーに当たらないように、ターゲットに当たるようにと連射する。

ドガガガガ

ダミーターゲット意外のターゲットは全て撃破された。

『・・・マスターは何故Cランクなのかが不思議に思います』

呆れたような声を出して呟く。リリの今までの受験者のデータに、このターゲットの群をこれ程まで早く破壊した人物はいなかったからだ。

「まあ、昇格試験受け初めたのはつい最近だからな・・それよりとっとと行くぞ」

そう言って再び走りだした。

この試験を見ている人物がリィンフォース以外にも五人いた。
まずヘリの中から映像を見ている、フェイトとはやて。サンの前に試験を受けていた二人。そして、なのはである。
彼女達は、ちょっと・・いやかなり驚いていた。

二人は、サンのことを知らなかったので、この中で最も驚いている。自分達が散々苦労した所も、一人で楽々とクリアしていく人物がいる。それが自分達の背丈の半分しかない少年なのだ。驚くのも無理ないだろう。

サンのことを知っていた三人も驚いたようだ。いくら天才といっても、やはり五歳児なのだ。現在のサンの位置まで来るのに今までの受験者は二倍以上かかっていたのだ、正直ここまでとは思ってなかったらしい。

五人は、試験の映像から目が離せなくなった。

少し走ると、太陽の光がまぶしい場所へ出た。

『マスター、エネルギー反応が』

リリがそう言った瞬間ビルの中から、エネルギー弾が出てきた。なかなか大きく、当たったらかなりのダメージがくるだろう。

「ッチ」

サンは舌打ちをし、すぐに飛び込んでかわす。そのまま受け身を取り、エネルギー弾が跳んできた方向に向かってマシンガンを連射するが、かなり遠くにあるために、当たらない。

『マスター・・どうしますか?』
「あれ・・やるしかないだろう」
『あれって・・何ですか?』
「あれっていったら決まってんだろ・・・飛ぶんだよ!」

サンは心の底からの叫びを上げる。無駄に熱くなる時があるのだ。それもリリの一つの悩みでもある。

『ハァ?　マスター頭でも打ったんですか?』

リリの意見はもっともである。そもそも、陸戦魔導士とは、飛べないから陸戦魔導士として働いている。飛べる陸戦魔導士なんて聞いたことない。

『だいたいどうやって飛ぶつもりですか?』
「風圧?」
『何で疑問形・・しかし確かにマスターの魔力変換物質に風はありましたが・・』

サンの試験に対する余裕な理由。それは、数多くの魔力変換物質を持っている事だ。魔力変換物質とは、自分の魔力を使う事である一

定の物質に変換する能力である。
一つあれば十分、二つあれば優秀と言われる魔力変換物質をサンは既に四つ持っている。その中の一つに風の魔力変換物質がある。つまりサンは、その能力を使って飛ぼうと考えたのだ。

『マスターの急な考えにはいちいち驚いてはデバイスとしてやっていけませんね・・分かりました、やってみましょう』

それを聞いたサンは頷いて、自分で考えた魔法を使用する為に構える。

「いくぞ」

サンは魔力を使い、銃口に風を集める。風の集まりが肉眼でも確認できる。

「うぉぉぉお」

そして一気に風を噴射した。

ブォォォォ

凄い音を出しサンは風圧を使い飛ぶ。あっという間に、ビルの中に入れた。そして目に入ったのは、最近導入されたという大型のスフィアだった。

「なるほど、大型スフィアか・・だが相手が何であろうと関係ない」

サンはマシンガンを連射する。だがスフィアはバリアを使って防いだ。

スフィアはサンにエネルギー弾を発射する。サンはそれをかわして接近する。
リリを剣にし、電気の魔力を流し強化して、一気に突きさした。
大型スフィアはバリアを使って防ぐ。しかしサンには関係の無いことだった。
何故なら・・・・

「リリ！」
『アイスウォール』

サンが叫んで、リリが魔法名を言った瞬間に、スフィアの下から突然氷の柱がでてきた。
魔力変換物質氷を使った魔法だ。

スフィアは下からの攻撃に対処できなかったようだ。と、いうより自分が相手を惹き付け、その間にリリが術式を完成させてアイスウォールを出した。
つまり、作成勝ちである。大型スフィアは真ん中に穴を開け爆発した。

「リリ残り時間は？」

先程の会話で結構時間をくったと思ったサンは少し慌てた声を出した。

『まだ余裕があります、安心して下さい』

それを聞いたサンは安心してコースに戻った。後は、ただ走るだけ

だった。

始まりの試験（後書き）

ハァハァ　　な、なんとか投稿できた。
一気に投稿したんで疲れましたｗｗ
矛盾点や、誤字脱字、アドバイス等ありましたら感想お願いします。

試験結果と憂鬱（前書き）

お気に入りにして頂いた皆様、ありがとうございます。

少しずつ増えていくように頑張りたいと思います。

試験結果と憂鬱

管理局地上本部のとあるロビーにサンは呼ばれていた。
隣にはスバル・ナカジマ二等陸士と、ティアナ・ランスター二等陸士。
向かい側には、フェイトとはやて。この場合は、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官と八神はやて二等陸佐と言った方が良いだろう。
スバルとティアナとは挨拶をする程度の時間は有ったので、その時にお互い簡単な自己紹介をした。

フェイトとはやてが、三人に新部隊設立のことを話した。

「部隊名は、時空管理局本局遺失物管理部、機動六課」
「登録は陸士部隊。ＦＷ陣は、陸戦魔導士が主体で、特定遺失物の捜査と保守管理が主な任務や」

はやてとリィンフォースが、機動六課の説明をして行く。

「遺失物・・ロストロギアですね」

ティアナは、機動六課の仕事の内容が分かったようだ。

［機動六課の仕事は、これだったんですね］

リリが念話を使ってサンに話しかける。

［そうみたいだな。数年前は教えてくれなかったし、最近は皆忙しくて会ってなかったからな］

数年前という言葉を使う五歳児は、恐らくサンしかいないだろう。

「広域捜査は、一課から五課までが担当するから、うちは、対策専門」

「そうですか」

サンとティアナの声が重なる。

スバルは、落ち着かない様子だ。内容が分かっていないのだろう。

「本題は、ここや。スバル・ナカジマ二等陸士、ティアナ・ランスター二等陸士、それと高町サン三等陸士」

「はい」

三人は、名前を呼ばれたので返事をする。

「私は三人を機動六課のＦＷとして、迎えたいと考えとる。厳しい仕事にはなるやろうけど、濃い経験は積めると思うし、昇進機会も多くなる。どないやろう？」

【キター】

［聞いたかリリ、機動六課に行けるってよ］

サンは、それこそ五歳児らしく喜ぶ。こんなサンは珍しいのでリリは少し驚いたが、すぐに落ち着き冷静に呟く。

［マスター今は、話を聞いていた方がよろしいかと・・］

このデバイスの言うことは、もっともである。

「スバルは、高町教導官に魔法戦を直接教われるし」

「執務官志望のティアナには、私でよければ、アドバイスとかもできると思うし」

「サンは、実戦が沢山できると思うから、レベルアップができる」

「どうかな？」

それぞれの利点を言うフェイト。

「とんでもない・・というか、恐縮です、といいますか」

ティアナが三人の代表として意見を言う。余りにも良い話だったので、ティアナの声は少し裏返っている。

「えーと、取り込み中かな？」

オフィスの方からなのはが来た。手にはいくつかの書類を持っており、試験の結果などが書いてあるのだろう。

「平気やよ」

はやてが、なのはに答える。

なのはは、サン達が座っている反対側に座り、試験の結果を言う。

「まず、二人から。二人とも技術はほぼ問題なし。でも、危険行為や報告不良は見過ごせるレベルを越えています」

なのはは淡々と結果を言いその後に、少し説教をする。二人も不合格と判断して、顔を俯かせる。

「だから、二人共残念ながら不合格・・・なんだけど」

「「え？」」

予想外の言葉に、二人は同時に顔を上げる。

「二人の魔法値や能力を考えると、次の試験まで半年間もCランク扱いにして置くのは、返って危ないかも。と、いうのが私と試験官の共通見解」

「ということでこれ」

二人の前に書類が出された。

「特別講習に参加するための申請用紙と、推薦状ね。これを持って本局武装隊で三日間の特別講習を受ければ、四日目には、再試験を受けれるから」

書類の説明をして少し厳しく、しかし優しくなのはは、言葉を告げる。スバルとティアナの表情が明るくなった。

「で、次にサン。サンは、技術も完璧だし、魔力値については、既にＡＡランク並み、試験の終了時間も過去最速だし問題なし」

「よし！」

サンは、嬉しさ余りにガッツポーズをする。

「なんだけど」

「へ？」

なのはの予想外の言葉に対応できず、思わずまぬけな声をあげる。

「敵に自らを知らせる用な行動、集中砲火が来ると分かっていながらもその中に入る、試験中にデバイスも知らない魔法を使う・・以上のことから少し常識を学んだ方がいい、というのが私と試験官の共通見解」

なのはの言葉に固まるサン。リィンも頷いていて、フェイトとはやても苦笑いしている。

「と、いうことでこれ」

サンの前に書類が出される。

「な、なんですかこれ？」

動揺しながら言う。しかし、敬語というのが、まだ理性を失っていない証拠・・・かもしれない。

「これは命令書。これを持って本局武装隊で三日間の特別講習を受けないと、Cランクのままだから。」

「・・・ハアー！？　どういうことだよ母さん！」

「母さん！？」

まったく予想していなかった結果に、思わずサンの本音が出る。

しかしもっと驚いたのは、スバルとティアナだ。
エースオブエースに、子供がいるなんて聞いたことないからだ。余りの新事実に二人は固まる。

「ＡＡランクの魔力値保持者なのに受けないとＣランクのままって・・さっきと反対じゃないか」
「それだけサンは、非常識ということですよ～」

サンの言葉にリィンフォースが答えた。

「そ、そんな・・・本局武装隊に五歳児を入れるなんて、あんたそれでも母親か！？」
「でもライオンは、子供を谷に落とすっていうよ？」

なのはは、天然に返す。

「いやいやいや、あれは子供に厳しさを教えることによって野生で生きれるようにするだけであって、実際落とさないから。つーか落としたら死ぬから！」
「じゃあ大丈夫だよ。武装隊の人達非殺傷設定にしているから」
「当たり前だーーていうか魔法くらうの前提！？」

管理局地上本部に、幼い子供の叫び声が響いた。

サンは、管理局地上本部の中庭に居り溜め息を吐いている。本局武装隊に行くことが嫌なのだ。

そしてサンの頭の中は

【Cランクのままでもいいかな?】

なんて、勿体無いことを考えていた。

その様子を見ていたなのはとはやては。

「なあ、なのはちゃん。もしかしてあの子Cランクのままでもいいかな～とか思ってるんとちゃう?」

はやては、若干呆れた感じに呟く。確かに本局武装隊は厳しいがそこまで嫌がるレベルでは無い筈なのだが。それに対してなのははこうしか言えなかった。

「にゃはは、大丈夫だと思うよ・・・多分」

試験結果と憂鬱（後書き）

原作の会話を入れると文字数が増えてしまいますね。

なのはとフェイトが、付き合っている描写を書きたいんで、これからは、ちょくちょく原作の会話を飛ばしたいと思います。

機動六課の始まりの日（前書き）

今回は、原作になかったシーンを自分なりに考えました。
楽しんでいただければなによりの幸せです。！

機動六課の始まりの日

Bランク昇格試験から数週間。

サンとなのはは、フェイトの運転する車に乗り、機動六課隊舎に向かっている。

サンは、凄く不機嫌なようだ。その様子を見てなのはは問う。

「サン、まだ本局武装隊の特別講習に行かせたこと怒ってるの？」

「怒ってるんじゃなくて納得いかないんだよ。何で過去最速にゴールしたのに特別講習受けなきゃいけなかったんだよ」

「だ～か～ら～、あれは・・・」

「ははは・・・」

なのはとサンの言い合いにフェイトは、苦笑いをするしかなかった。それもそうだろう。車を運転し初めてから、すでにこの会話は四回目だ。

いい加減止めようと、言い合いの中に入る。

「それよりサン、特別講習はどうだった？」

フェイトの質問にサンは、嫌そうな顔をする。

【もしかして、地雷踏んだ！？】

なんてフェイトが思っていたのが分かったんだろう。サンはなのはとの言い合いを止め質問に答えた。

「正直楽しくなかったね。訓練内容は、基本的なことばっかだったし・・ああいうことしたらさ、個性がなくなると思うんだよ。俺ってそういうの嫌いなんだ」

なのはとフェイトは、息子の妙に大人っぽい所に、苦笑いした。

しばらく沈黙が流れた。

未だに不機嫌そうなサンを見てなのはは【少し厳しすぎたかな?】と、思い始めサンをチラチラ見る。

その様子を見てサンは、何か閃いたようだ。

「ねえ母さん、俺の質問に答えてよ。そしたらもう怒らないからさ」

もう怒らないという言葉に惹かれ、なのはは「いいよ」と返した。

「それじゃあ聞くけど母さんは、いつ父さんと結婚するつもり?」

「ブー!」

なのはとフェイトは、予想外の質問に驚いた。

更に、フェイトに至っては、動揺してしまいハンドルを右へ左へときってしまう。

「そんな驚くなよ。同居に、子持ち、左手の薬指には、婚約指輪。結婚しない方がおかしいだろ？」

サンの言葉に、二人はどんどん顔が赤くなっていく。

「で、でも私達まだ十九だし」

「ミッドでも地球でも結婚できる年齢だろ」

なのはの答えにサンは理論的に返す。

「でもほら、私達女同士だし」

今度はフェイトが答える。

『ミッドでは、同性の結婚は認められています』

今度は、リリが理論的に返す。

フェイトは何か他に無いかと考えていると、六課の隊舎が見えた。

それを理由に逃げようと判断した。

「あ、つ、着いたよ」

フェイトが慌てた感じの声を上げる。外を見るとすぐ目の前に、機動六課隊舎がある。

「あ、ほ、ほんとだ。じゃあサン、私とフェイトちゃんははやてちゃんに用があるから先に集合場所に行ってて」

二人は、あっという間に車から降り、走って行った。

『逃げられましたね、マスター』
「ったく。なんでいっつもあんなにイチャついてんのに、こういう話に弱いんだ？」
サンは首を傾げながら呟く。サンの頭の中にはこの五年間のなのはとフェイトのイチャつきの映像と、先の恥ずかしがっている時の映像が流れる。
【今度はやてさんにでも聞こうかな】
と、思いながらサンは集合場所に向かった。
はやてが居る部隊長室に行く途中二人は、さっきのサンの発言のことで話し合っていた。
「ど、どうしようフェイトちゃん。あの時慌てて出てきたけど、サン怒ってないかな？」
やはり、息子には嫌われたくないのだろう。
「大丈夫だよ。あの子かなり大人っぽいし。それに今思うとあの質問、私達をからかっていたんだと思う」
サンのことを考え、そわそわしているなのはをフェイトが落ち着かせる。

「だと良いんだけど・・・」

等、会話をしているとあっという間に部隊長室前に着いた。

「なのは、とりあえず今からお仕事モードで」

「うん」

二人は、部隊長室に入りはやてと正式な挨拶をした。

そして、はやてと一緒に集合場所に向かった。

集合場所に向かう途中なのはは、仕事中と分かっていながらもやはり気になったのか、はやてに先程のことを相談した。

すると、はやては一つの質問をする。

「そもそも二人は、何で結婚せえへんの？」

はやてにとってなのはとフェイトの関係は、同居に、子持ち、左手の薬指には婚約指輪、更に小学生からの万年バカップル、とのイメージがあるため、サンの意見は最もだと思っていた。

その質問にフェイトはこう言う。

「ミッドじゃ確かに同性の結婚は認められているけど、決して風当たりが良いとは限らないんだ」

と、答え更になのはが

「それに、自慢じゃないけど私達って有名だし、結婚したら世間に知られちゃうと思うから・・・」

「だから息子であるサンに迷惑がかかる、そう思ってるんやな？」

はやては、なのはとフェイトの悩みが分かったようだ。

【なるほど。これはなかなか難しい問題やな】

手を顎に当てながらはやては、考える。

「取り敢えずサンと話すのが一番ええんとちゃうか？　あの子、かなり大人っぽいやろ？　二人の悩みも話すと意外に解決すると思うんよ」

とりあえずこの場を凌ぐために、はやては言う。

二人も、その意見に納得したようだ。

【まあ、二人のことやからそう簡単には話せへんと思うけど・・・昔から無駄に頑固やったからな～】

はやては、心の中でため息を吐く。

部隊長の悩みが、早くも出来た様だ。

ロビーにて、六課のメンバーが集まっている。その前にはやては立

ち、演説を始める。

「機動六課課長、そしてこの本部隊舎の総部隊長、八神はやてです」

拍手が流れる。

「平和と法の守護者時空管理局の部隊として事件に立ち向かい、人々を守っていくことが私達は使命であり、成すべきことです」

そして機動六課のメンバーの長所を話し、長い挨拶は嫌われる、と言い演説を終えた。

首都クラナガンに行くヘリに乗る為に、フェイトはヘリポートに向かっていた。

隣に居るシグナムは、フェイトの見送りだ。

二人は、久しぶり、という所から話を始めた。

「そういえばお前は、私の直属の上司だったな」

敬語で話してくるフェイトにそう言う。フェイトは、そのことがなんとも落ち着かないようだ。

「上司の部下だからな。テスタロッサにお前呼ばわりは良くないか。敬語で喋った方がいいか？」

シグナムは、口元を僅かに上げながら言った。

「そ、そういう意地悪はやめて下さい。いいですよ、テスタロッサで、お前で」

僅かに微笑みながら言う。やはりシグナムとは昔のままの関係が良いのだろう。

「そうさせてもらう」

そう言い一端話しを終えた。

「そういえば、サンとも同じ部隊だったな。今度久しぶりに、手合わせでもするとするか。主はやても強くなっていたと、言っておられたしな」

シグナムがさっきとは違う、少し不気味に口元を上げながら言う。

「て、手加減してやって下さいね。まだ五歳なんですから」

その様子を見てフェイトが、慌てながら注意した。

ゾクッ

サンの背筋に悪寒が走った。間違いなく先のシグナムの発言が関係しているだろう。

『どうされました、マスター?』

サンが、急に青ざめた顔色になったので、心配になったようだ。

「いや、自分で立ててないのに死亡フラグが立った気が・・・」

『マスターの勘は、良くあたりますからね。注意して下さいよ』

しかし、このフラグは、折ることの出来ないフラグであった・・・

機動六課の始まりの日（後書き）

作者のはやてへのイメージは、優しいお姉さん的なイメージがあったので、今回はこのように書きました。
後、なのフェイ分を少しでも取れられたら嬉しい限りです。

戦う相手（前書き）

今回頑張った所は、シグナムとヴィータの会話の所です。
シャマルさんは、出てきません。

戦う相手

お互いに名前、経験、レアスキルの確認や、部隊分けとコールサインを決めたＦＷ陣は、今海の上にある小さな人工島の前に集まって、なのはの話しを聞いていた。

「今返したデバイスには、データ記録用のチップが入ってあるから、ちょっとだけ大切に扱ってね」

ちょっとだけというのが、これから厳しく鍛えるよ。という風に聞こえたサンは、僅かに武者震いをしてしまう。

そして、なのはの横に居た女性が挨拶を始める。眼鏡をかけた陽気そうな女性だ。年はなのはより数個下くらいだろう。

「メカニックデザイナー研、機動六課通信主任のシャリオ・フィニーノ一等陸士です。皆は、シャーリーって呼ぶので良かったらそう呼んでね」

後、デバイスを改良したり調整したりするから、時々訓練を見ると言い。

「デバイスについての相談とかあったら、遠慮なく言ってね」

「「はい」」

ＦＷ陣が返事をする。

「じゃあ早速訓練に入ろうか」

「は、はい」

早速という言葉に引っ掛かったのかスバルが曖昧な返事をする。そして、もう一度だけ辺りを確認する。

「でも、ここでですか？」

ティアナが質問する。ここには人工島意外何もないのだ。ティアナの意見最もで、スバルの行動も無理はない。

「シャーリー」

なのはがシャーリーに頼む感じで名前を呼ぶと、シャーリーはモニターを出してキーボードらしき物に触り始めた。

「機動六課自慢の訓練スペース、なのはさん完全監修の陸戦用空間シュミレーター。ステージセット」

シャーリーが言い終えると、突然人工島が光りたくさんの廃ビルが現れた。

「魔法って何でもありだよな・・」

サンが驚きながら念話を使い呟く。この世界の魔法は科学で証明されているが、やはりこの廃ビルは魔法を使った物だと判断したからだ。前世では考えられない物を見た瞬間だった。

「魔力変換物質を四つ持っているマスターが言ったらあまり驚いた感じがしませんね」

魔力変換物質・・・未だに謎が多い能力で、科学で解明されたこ

の世界の魔法である意味本当の魔法と言える物だ。サンはそれを四つも持っているのだ。リリのツッコミは的確だ。

この廃ビルの群を別の場所から見ている人物がいた。赤い髪を三つ編みにしている少女だ。だが、とても少女が出すものとは思えない雰囲気を出している。この少女の名前は、ヴィータだ。

「ヴィータ、ここにいたか」

凛とした声がヴィータの耳に聞こえた。ヴィータは後ろを振り向かずにその人物が分かった。シグナムだ。シグナムとヴィータの付き合いは、考えられない程長いため、聞いただけで分かったのだ。

「新人達は早速やってるようだな」
「ああ」
「お前は、参加しないのか？」

二人ともお互いの顔を合わせずに、新人達の方を向いて話す。ヴィータは教員免許を持っている、教えるのは得意なはずだ。それが疑問に思ったため聞いたのだ。

「五人共まだよちよち歩きのひよっこだ。私が、教導を手伝うのは、もうちょっと先だな」
「そうか・・・サンは、どうなのだ？」
「あいつは、確かに強い・・だが、あいつは挫折ということを知らねえからな。いきなりマンツーマンで教えて、下手な自身でもついたらいけねぇからな」

ヴィータの意見にシグナムは納得したようだ。確かにサンは今まで負けたことは何度もあるが、それは高ランク魔道士との戦いだけであって、自分と近いランクの魔道士とは戦ったことが無いのだ。

「それに、自分の訓練もしたいしさ。同じ分隊だからな。あたしは、空でなのはを守ってやらなきゃいけねぇ」

「ッフ」

それを聞いたシグナムが微かに笑う。ある人物達の映像が頭に浮かんだからだ。

「何だよ。あたし何か変なこと言ったか？」

余り笑わないシグナムが笑ったのだ、ヴィータは驚いた。

「いや、お前の発言が変な訳ではない。ただ、テスタロッサが聞いたらどんな反応をするかと思ってな」

ヴィータは、そう言われ少し想像してみた。

「・・・言うなよ、あいつらに」

何を考えたのかは、よく分からないが、声が震えているのは確かだ。

「分かっている」

なのは、シャーリー、ＦＷ陣が、それぞれの位置に着いた。

［皆聞こえる？］

なのはは、念話が届いているかを確認する。全員聞こえたようで、同じく念話で返事をする。

［じゃあ、早速ターゲットを出していこうか］

「まずは、軽く十一体から」

近くにいるシャーリーを見る。

「動作レベルＣ、攻撃精度Ｄって所ですかね」

「うん」

シャーリーの言葉に頷くなのは。

［私達の仕事は、捜索指定ロストロギアの保守管理。その目的のために私達が戦うことになる相手は、これ］

するとＦＷの前に魔法陣が現れ、その中から縦に細長い形をした機械が現れる。なのはが説明をする。

自立行動型の魔導機械。ガジェットというらしい。このタイプは近付くと攻撃してくるようだ。と、いうことは他の種類もあるみたいだ。

しかし皆はそんなことは頭の片隅にしか入らない。既に戦える状態になっているからだ。

［ミッション目的は、逃走するターゲット十一体の破壊、または捕

獲。十五分以内］

［それでは］

シャーリーが

［ミッション］

なのはが

［［スタート］］

開始の声を上げた。

戦う相手（後書き）

なかなか話が進まないｏｒｚ

たくさん投稿して、話を進めたいとおもいます。

機動六課の初めての戦い、蛙の子は蛙？（前書き）

頑張って書きました。
今回は、前回の続きですが、何故かフェイトの過去がでます。

追伸　ミスがあったので書き換えました。

機動六課の初めての戦い、蛙の子は蛙？

一番ガジェットに近いのは、スバルだ。ローラーの機動力を使い追跡する。そして、ガジェットの群の中に魔力弾を放つ。が、当たらない。外見からはとても考えられないスピードで回避したのだ。

「なにこれ。動き速！？」

ガジェットは、あっという間に、スバルの視界から出る。

逃げた先に居たのは、エリオだ。

ガジェットが、エリオに向けて魔力弾を撃つ。エリオはそれを跳んでかわし、刃物状の魔力を出して攻撃する。しかし、不規則に動くガジェットにその攻撃は当たらなかった。

サンは、ビルからビルに飛び移りマシンガンを連射している。弾丸の一発一発の軌道は、間違いなくガジェットに当たるはずなのに、ガジェットの近くで魔力弾が消えてしまった。

「フィールド系か！？」

フィールド系とは一定の範囲内にある能力を使うことを言う。ちなみに魔道士のフィールド系は自分に対する物だ。このことを知ったサンは、すぐに全員に念話をする。

［どうやらこのターゲット魔力を消す力があるみたいです。自分が使った魔力弾の威力が低いからかもしれませんが注意して下さい］

その念話を聞いていたなのはとシャーリーはある会話をしていた。

「さすが、なのはさんとフェイトさんの息子。状況判断が早いですね」

「にゃはは、説明しなくても良いみたいだね」

なのはは息子が褒められて嬉しいような、仕事が取られて悲しいような、曖昧な顔をしながらも皆を見守る。

ガジェット達の逃走方向の近くのビルに、ティアナとキャロは居た。

「取り敢えず様子見のために一発強いのを・・・ちびっこ威力強化お願い」

ティアナは魔法無効果能力を越える一撃を撃つために、デバイスの銃口に魔力を集める。

「はい、ケリュケイオン」

キャロがデバイスの名前を言うと、グローブ状のデバイスが光った。

すると、ティアナの魔力弾が更に大きくなった。

「シュート」

大きい魔力弾が放たれた。かなりの速さだ。ガジェット達は移動するのを止め、一機のガジェットを中心に集まる。ティアナは、魔力弾をその中心に行かせる。しかし、全てのガジェットが一気に魔法無効果能力を発動し、魔力弾を消した。

「「そんな」」

サンと、ティアナ意外のメンバーが叫ぶ。その中でサンと、ティアナは、微かに笑っていた。

【さっきの行動を見る限り、一機の無効果できる量は決まってるみたいね】

【情報は得れた。しかし、集まったままだといつまでたってもこのままだな・・・】

ティアナとサンはガジェットの能力をあらかた理解したようだ。そしてサンはどうやって破壊するかを考える。

［皆さん、ちょっとやってみたいことがあるんで時間稼ぎお願いします］

何かを思いついたようだ。サンはそれだけを言って一方的に念話を切る。

［あ、ちょっと］

慌ててティアナが念話をするが、サンに繋がらない。僅かに溜め息を吐く。

［みんな、聞いたわね。あいつらを見失わないように注意しなさい］

［［了解］］

ガジェットの群をスバルが追いかける。その、進行方向の橋の上にエリオがいる。

「ストラーダ、カートリッジロード！」

カートリッジロード・・・魔力圧縮した、カートリッジをロードすることで、瞬時に爆発的な魔力を得ることのできるシステム。それをエリオは使い、橋を崩していく。数機、空中に出て橋の崩壊から、脱出した。

「潰れてろ～」

その一機に向かってスバルは、おもいっきり拳を叩きつける。が、魔法無効果能力を使い、衝撃を和らげるガジェット。やはり魔力を封じられると、威力がでないのだろう。

「そんなら」

後ろにいるガジェットを蹴りで叩きつけ、マウントポジションになる。そして、右手に付いているリボルバーナックルで殴る。

ドガァァァン

ようやく一機撃破した。

「フリード、ブラストフレア。ファイア」

キャロの召喚獣フリードが、炎を吐き出す。ガジェットの進行方向に、向かって吐き出させたキャロ。ガジェットは、それを回避し別の道に入る。

［ガキんちょ、そっちに行ったわよ］

実はさっきの攻撃はティアナがキャロに、わざと当たらない用に攻撃させたのだ。理由は勿論誘導。

キャロの攻撃では、全機破壊できないと判断したので、誘導に使ったのだ。そして、全員は空中にいるサンに視線を移した。

［ありがとうございます。だけど、ガキんちょは止めて下さい］

［だったら私達に、ただのガキんちょじゃないって証明しなさい］

［なあ、リリ。ティアナさんって俺の試験見てたんだよな？］

リリにだけ念話する。

［まだ認めてないってことじゃないですか？］

と、言うが、実際リリは、ティアナがサンに少し厳しい理由がなんとなくだが分かっていた。嫉妬や、妬みだ。だが、五歳のサンに、そんなことは言えない。そして少し天然の所があるサンはそれに気

づかなかった。

「そういうことか・・・」

それで納得したようだ。サンは、息を吸い込む。

「ティアナさん。俺は貴女に証明する・・・俺が、高町サンがどういう人間かを！」

サンは叫びながら告白と言われてもおかしくない言葉を、ティアナに伝える。

この声を聞いた、サンの母親とデバイスはあることを思った。

【この子・・・父親に似ている！？】

なのははサンの父親・・・つまりフェイトの昔の言葉を思い出す。

「え？このチョコくれるの？ありがとうなのは。だけどね・・・私が一番食べたいのは、なのはなんだよ？」

や、小学校のある時

「テスタロッサってなんかイメージ変わったよな・・・なんか可愛くなったっていうか／／／」

男子が告白してきたのに

「うん、私はなのはのおかげ変われたんだ」

なんて言い男子を泣かせたこともあった。

この声を聞いた、二人の保護児童は先の人物達と同じことを考えていた。

【この子、父親に似ている!?】

二人は、フェイトとと一緒に出かけに行った時のことを思い出した。

ある女性がフェイトにぶつかって転んだ時に、

「すいません」

女性が謝ってくると、フェイトは手を差しのべ

「怒ってないよ、むしろ嬉しいよ。二人目の羽のない天使に出会えたから」

や、手を冷やしている少女に

「私でよければ手、暖めるよ。大丈夫、君を見てたら体、暑くなったから」

と、言い、回りの人の顔を真っ赤にさせたこともあった。

どうやらこの父子は、天然のタラシのようだ。当然その言葉を受けたティアナの顔は真っ赤だ。

さて、話を訓練に戻す。魔方陣を足場にして空中にいるサンは、体をガジェットが見えるようにし、銃状態のリリを持っている右手を体の反対側に向かせる。

「いくぞ、リリ」

サンは、銃口に風を集める。試験の時に使った技だ。サンは足を曲げ、左手を自分の進行方向に向ける。
すると足場に使っている魔方陣とは違う、魔方陣が出てきた。

「ダウンバースト！」

サンが、叫んだ瞬間銃口に溜まっていた風が爆発的に噴射された。物凄い勢いで、ガジェットに向かう。さらに、展開されていた魔方陣を抜けた瞬間さらにスピードが上がる。ガジェット達は、サンに気づき魔法無効果能力を発動する。風の勢いが僅かに弱まったが、既にものすごい勢いがついているので、速度は余り変わらない。

リリを剣に変えガジェットを斬る。

一閃

二閃

三閃

四閃
五閃

全てのガジェットを撃破した・・・と、皆が思っていた。突然スバルの前から二機のガジェットが出てきた。いきなりだったのでスバルは、反応できなかったようだ。だが、すぐにそのことを伝えようと、念話する。

［まだ二機残っていたよ。ティアがいる方に向かってるみたい］

それだけを報告して急いでガジェットを追い始めた。

ティアナは、ガジェットを見つけたようだ。

「こちとら射撃型。無効果されて、はいそうですかって下がってたんじゃ生き残れないのよ」

銃口を移動するガジェットに向け二発のカートリッジロードをし、魔力弾を作る。

【スバル、上から仕留めるから、そのまま追ってて】
【了解】

魔力弾を作るティアナを見てシャーリー疑問に思った。

「魔力弾？ＡＭＦがあるのに？」

ＡＭＦ・・・魔法無効果能力のことだ。

『いいえ、通用する方法があります』

なのはの首にかけてある、レイジングハートが答える。それに頷くなのは。

「攻撃魔法の弾を無効果フィールドに消される前に膜状バリアをフィールドを突き抜けるまで持てば、本命の弾が、ターゲットに届く」

ティアナは、魔法弾を包む膜を作る。かなりの技術が必要のようで、包むだけにでも凄い神経を使っているようだ。なのはの話によると、ＡＡランク魔道士の技術のようだ。

「ヴァリブルシュート」

膜状バリアで包んだ魔力弾がものすごい速さでガジェットに向かう。ガジェットがＡＦＭを使い防ぐ。膜状バリアが消されたが、本命の弾は見事にＡＭＦを突破し、そのまま二機破壊した。

今回のミッションは、無事にクリアした。

その日の夜、なのはとフェイトの部屋で話をしていた。当然新人達の話だった。

「新人達、手応えはどお？」

フェイトは上着を脱ぎながら聞いた。なのは上着を受け取りながら言う。

「みんな元気でいい感じ」

「そう。あ、上着ありがとう」

フェイとは上着をかけてくれたなのはの方を見ながら言う。こういう細かなことでもやってくれるのは助かるので、一応の感謝の言葉だ。

「私達恋人同士なんだから、気にしない気にしない」

なのはは少し顔を赤く染めながらもフェイトに返す。その何気無い行動がなのはの幸せのようだ。それを見たフェイトは微笑みながらベッドに座る。

「立派に育っていってくれるといいんだけどね」

フェイトがそう呟くと、なのはは教導官としての顔になり魂の入った声を優しく出す。

「育てるよ。あの子達がちゃんと自分の道を戦っていけるように、ね」

星空を見ながら言う。その綺麗で幻想的な姿を見てフェイトは思わず唾を飲み込んでしまう。その音が聞こえたなのははフェイトの体調に異変があるかと心配になり、慌てて近寄る。

「大丈夫フェイトちゃん？」

なのはは地面に膝をついて、フェイトを見上げる。

そしてフェイトから見たなのはの姿は、上目使いに小動物の様なかわいい顔、パジャマが緩くなって見えている綺麗な白色の谷間・・・・・フェイトの理性が切れた。

「なのは、少しだけ立ってくれる？」

フェイトの言葉になのはは疑問に思い、立ちながら何故かと聞く。

「それより体調は良　んぅ～～！？」

なのはの言葉はフェイトの唇によって遮られた。更にフェイトはそれでは止まらず、そのまま舌をなのはの口に入れ、なのはの唾液をたっぷりと味わう。なのはの顔がみるみる真っ赤になる。

しばらくして　二人は唇を離す。二人の口が銀色の糸によって繋がっている。なのはの表情は惑わされているように視線が定まっていない顔で、フェイトは全ての女性が見惚れそうな優しく、少しサディスティックな表情だ。

「今日は、たっぷりと可愛がってあげるよ・・・なのは」

優しい声に魅了され、なのはは首を縦に振った。

機動六課の初めての戦い、蛙の子は蛙？（後書き）

読者の皆様が、少しでもニヤニヤできたのなら嬉しい限りです。

戦闘シーンは、大分原作と違いますがどうだったでしょうか？

しかし、今回一番頑張った所は、なのはとフェイトの部屋での話でしたｗｗｗ

兄と姉（前書き）

今回は、漫画版の話しです。

まだまだ、短いですｏｒｚ

兄と姉

訓練が始まって今日で４日目。現在ＦＷ陣は、デスクワークをしている。前線メンバーだからと言ってずっと訓練付けではない。

「そういえばさ・・・」

モニターに目を向け、手を動かしながらティアナが呟く。

「サンが使ってる魔方陣、ミッド式でもベルカ式でもないけど、あれって何？」

「あ、それ私も気になる。その魔方陣通り抜けた瞬間に、威力やスピードが上がってたよね」

スバルも気になったようだ。エリオとキャロも気になっているのか、耳を傾けている。その様子を見て少し笑いながらサンが答える。

「俺のオリジナル魔法です。俺は、強化陣って言っています」

「「強化陣？」」

四人とも聞き慣れない単語が出てきたので、思わず復唱したようだ。

「誰に、どのくらいのブーストを与えるとか考えずに、ただ通り抜けた物全てに一種類のブーストをさせる魔法です」

「で、でもそしたら相手の攻撃が通ったら・・・」

キャロは、強化陣の意味が分かったようだ。

「はい、相手の攻撃をブーストしてしまいます」

「じゃあ、相手に気づかれたら危なくないですか？」

エリオが問う。確かに相手にも効果のあるブースト魔法が相手に知れたら結構戦いにくいだろう。

「いや、自分で展開する場所を決めれるから余り問題はありません」

「「へ～」」

四人は納得したようだ。

しばらくすると、アナウンスがなる。

「隊員呼び出しです」

「スターズ分隊、スバル・ナカジマ二等陸士」

「同、ティアナ・ランスター二等陸士」

「同、高町サン三等陸士」

「ライトニング分隊、エリオ・モンディアル三等陸士」

「同、キャロ・ル・ルシエ三等陸士」

「十分後にロビーに集合してください」

五人は呼び出された。

「呼び出しなんて初めてだね。なんだろうね」

「「はい」」

スバルはティアナを呼んだ。しかしティアナが来ないので気になってそちらを見ると、腕を押えている姿があった。どうやら筋肉痛のようだ。

「あの、ランスター二士。よろしければ、簡単な治療をしますが・・・」

それを見たキャロがティアナに聞く。得意なのは支援魔法なので、治療もある程度は出来るのだ。

「あぁ・・・ヒーリングも出来るんだっけ。お願いしちゃおうかなぁ」

キャロは、ティアナにヒーリングを開始する。ヒーリングを受けているティアナの顔は凄く気持ちよさそうだ。マッサージ感覚なのかもしれない。

「エリオとサンは、平気？」

スバルが隣に居る二人の子供に聞く。確かにＦＷ陣最年長のティアナが筋肉痛なのだ。スバルが心配するのも無理はない。

「はい、なんとか」
「俺も大丈夫です」

どうやら本当に大丈夫なようだ。それを聞いたスバルが言う。

「さすが、ちっちゃくても騎士だねぇ。今度一対一で組み手とかしてみよっか」
「はい！お願いします。ナカジマ二士」
「光栄であります」

二人の話し方に違和感を持つスバル。

「あー楽になった。ありがとねキャロ　」
筋肉痛だった腕を回して痛くないかどうかを確認する。
「恐縮であります」
キャロの話し方に違和感を持つティアナ。
「あのさ三人とも、なんつうかこう」
「チームメイトだしもうちょっと柔らかくていいよ。階級付きで、呼ばなくても」
スバルとティアナは、言葉を繋げながら言う。確かにこれから一年間チームなのだ。ずっとこの口調で話されたら嫌だろう。
「では、なんとお呼びすれば」
「スバルとティア！」
「「いいんでしょうか？」」
エリオとキャロは確認する。サンは一応二人のことを名前で呼んでいるので、確認はしなかった。
「いいんじゃないの」
ティアナもそれでいいようだ。
「では、スバルさんと、ティアさんで」
四人は少し壁がなくなったようだ。この調子でいけば数週間後には大丈夫だろう。そしてもう一人居る。

「サンも固くならなくていいよ。本当の喋り方じゃないんでしょ？」

ティアナはデバイスと会話している時のサンの口調を思い出す。今の口調とは百八十度違うと言っても過言では無い。

「しかし私はこの話し方と、本来の話し方しか知りませんから・・・」

本当の話だ。前世での親のしつけで、砕けたしゃべり方と、敬語の間を上手くとれないのだ。ちなみに、子供っぽい話し方は論外だ。

「別にいいわよ。あんたの本来の話し方を知っててスバルは、言ってんだし・・・私も別にいいし」

「ホントによろしいのですか？」

サンはもう一度だけ確認を取る。結構真剣な表情だ。

「うん、二人もいいよね」

エリオとキャロに聞く。

「「はい」」

それに頷く二人。

「いや～ありがと。前から面倒だったんだよね～敬語」

突然砕けた話方をし始めたサン。

「「・・・」」

予想していたとはいえ物凄い変わりように、ついていけなくなる四人。いくら良いと言われたとはいえ、普通はちょっとずつ変えていくものだと四人は考えていたからだ。

「う～ん？　どうしたんだ？　四人とも」

その様子を見て質問するサン。

「あ～いや～、ちょっと驚いただけだよ。ね、皆？」

それにスバルが苦笑いしながら答え、ティアナ、エリオ、キャロに振る。三人もスバルと同じ表情で頷いている。

「まあ良いが、それよりそろそろ行ったほうがよくね？」

サンの言葉を聞いてハッとする四人。集合のことを忘れてしまってたのだろう。皆は慌ててロビーへと走った。

走っている最中でティアナがある疑問を持ったので、聞く。

「あんたっていつそんな言葉使い覚えたの？」

五歳児がここまで砕けた言葉と敬語を話しているのだ。普通賢くてもどちらか片方だろう。疑問に思うのは当然と言える。

「ハハハ・・・まあ、いろいろ見たり聴いたりして」

少し冷や汗をかきながら答えるサン。まあ前世のことを知られると色々面倒なので、適当に答えたのだ。

「でも、今思ったんですがその喋り方、なのはさんは許しているんでしょうか？」

エリオがサンに聞く。かなり不思議そうな表情をしている。

「私も気になりました。フェイト隊長から話を聞いたことがあるんですが、なのはさんは結構しつけに厳しい方だと・・」

エリオの質問に、さらに質問を重ねていくキャロ。皆の視線が一気にサンに集まる。

「ある時にな、どーしてもこの話し方にしたかったからさ、思いきって使ってみたんだよ。そしたら母さんが、サンが不良になってしまった～～って泣き出したんだ」

「「えー！？　なのはさんが！？」」

四人は凄く驚いた。自分達を鍛えてくれている人が、あの不屈のエースオブエースが、そんなことに泣いたのである。しかし、四人の声を無視して話を続けるサン。

「それで、父さん・・・フェイト父さんが来てな、俺に何で、話し方を変えたのかを聞いてきたんだ。俺はこういう喋り方に憧れるからって言ったんだ」

サンは、一旦区切る。四人はフェイト父さんという言葉に驚きながらも、サンの話を聞く。

「父さんは納得してくれたんだけど、母さんがなかなか許してくれなくてな。口論をしていたらだんだん激しくなったんだ。それがいつの間にか喧嘩になって魔法戦になったんだ」

サンが、とんでもないことを暴露した。当然それにツッコム人物がいた。

「あんた、当時何歳だったの？」

ティアナが信じられない物を見るような目で、サンを見ながら言う。魔法戦をしたことがある最年少が五歳と言われている。サンの話方からすると、少なくとも一年以上は前と予想したのだ。

『そういえば、私もその話は知りませんね』

「リリを貰うきっかけにもなったからな、この話は」

リリの疑問に答える。

「当時は三歳くらいだったかな？」

全員驚く。二重の意味で驚いたのだ。三歳で魔法戦ができたこと、なのはが三歳の子供と戦ったことだ。

「そ、それでどうなったんですか？」

キャロが思わず声を上げて言う。

「もちろん惨敗」

サンは自虐気味に笑う。

「じゃあ何故今その話し方をしてるのですか？　負けたから駄目なんじゃ・・・」

エリオが問い、その問いにあっさりと答える。

「実は、スターライト・ブレイカーをくらったんだよ、俺」

「「え～～～～！！！」」

今日はよく声が重なる日だ。まあ驚いて当然だ。スターライト・ブレイカーは管理局指折りの砲撃魔道士高町なのはの必殺技だ。皆も噂程度だが、凄い魔法ということは知っている。

「くらった後も俺はこの喋り方で話してな。それ見て母さんも許してくれるようになった。って話だ」

「じ、じゃあサンは、三歳の時にスターライトブレイカーをくらったことがあるってこと！？」

スバルはサンに顔を近づけながら叫ぶ。サンは耳を塞ぎながら言う。

「まあ、そういうことになるな。まあ大丈夫だったよ、非殺傷設定だったし」

「「当たり前だーー」」

その様子を見ていたリリは【デジャブですね・・・今回はマシターがボケてますが】と、地上本部での会話を思い出していた。

『しかしマスター。この話は、私とは関係ないのでは・・』

そう、この話に未だにリリは入っていない。

「実は、この話には続きがあってな。その後母さんがな」

「ごめんね、かっとなってやり過ぎちゃって・・・って泣きながら謝ってきてな。なかなか泣き止まないから、デバイスくれたら許してあげる、って言って、次の日お前と会ったって訳」

『そうですか・・・って行動が速すぎませんか！？』

リリのデバイスのモード、デュアルウェポンは管理世界でもサン以外にそういないだろう。つまりリリを一から作ったということになる。しかしデバイスの制作は最低でも一週間はかかるはずだ。

「なんでも沢山の人とＯＨＡＮＡＳＨＩしたんだって」

【マスターの非常識は、母親譲りなのかー！】

リリのキャラが変わってしまったが、話が終わったようだ。

ロビーに集合した理由は六課の施設や人員の紹介だそうだ。案内人は、リィンのようだ。リィンにいろんな場所を案内してもらい、最後に着いたのは食堂だった。一通り案内し終わったので、ここで解散した。

「じゃあお昼食べちゃおっか」

「うん！エリオ達も一緒に・・・」

等、二人が話していると後ろからスバルを呼ぶ声が聞こえた。

「スバルー、ちょっといい？」

「はーい」

どうやら、頼まれごとができたようだ。先に食べてて、と言い残して呼ばれた方に向かって言った。

・・・・・・

エリオとキャロとサンの間に沈黙が流れる。その様子を見てティアナが指摘する。

「あのさ、三日前から思ってたんだけど、あんたたち三人ってお互い全然しゃべんないわよね」

「え」

「あ、そ・・・そうでしょうか？」

二人は動揺する。あまり自覚が無いのかもしれない。ただサンは無言だった。

「あんたたち三人兄弟みたいなものだって聞いたんだけど・・」

質問するティアナ。

「実際に会ったのは、六課に来たときが初めてです」

「私達二人はフェイトさ・・・フェイト隊長が保護責任者なのです

が、別々の場所で過ごしていましたので」

二人が答えるが、サンは未だに無言だ。ティアナもその様子を見て、あえてサンには聞かなかった。

「そっか。ごめんねあんたたちもいろいろ複雑なんだ」

「いえ」

「フェイト隊長からも、なるべく三人で仲良くして欲しいと言われていますので」

これを聞いたティアナは、しっかりしてるわね・・・と、思う。

「フェイトさんの言うことはちゃんと聞かないとね」

「「はい」」

二人は元気よく明るい表情で返事をする。

皆で食べ物を運ぶ途中に、サンはティアナに念話をする。

［悪いけど一回三人だけにしてくれないか？］

サンは早く、エリオとキャロとゆっくりと話がしたかったのだ。ティアナにはその意図が分かったようだ。

［分かったわ、しかしあんたってホントに五歳らしくないわね］

［ははは、よく言われるよ］

ティアナはすぐに行動した。

「私ちょっと用事思い出したから行ってくるね。先食べていーからね」

そう言って席を立ちどこかに行った。

・・・・・

またまた沈黙が流れる。

サンが呼ぶと二人がビクッとし声を上げて返事をする。

「「あのさあ二人とも」」

「「は、はい！」」

「二人はさ～、俺に申し訳ないとか思ってるのか？」

二人は顔を見合せ首を縦に振る。

「どうしてだ？」

サンの言葉にエリオは椅子を勢いよく立ち大きな声で言う。

「だって僕のせいでサンさんの、フェイトさんとの時間を・・・うーうん、なのはさんとの時間まで奪ってしまった」

そう、なのはとフェイトがエリオとキャロを保護児童にしてからは、サンの家族の時間が少なくなってしまったのだ。どうやらそれが心にあるようだ。

「別にずっとって訳ではなかったろ」

しかしサンは冷静に返す。特別気にしている様子は無いようだ。

「で、でも僕の下らない独占欲でサンさんは、遊園地に行けなかった」

エリオがフェイトに三人だけで行きたいと、言ってサンを連れてこさせないようにしたことがあったのだ。まあ当時のエリオは色々と複雑で、当然サンはそのことを知っていた。

「キャロは？」

エリオの話は一旦置き、今度はキャロに質問する。

「わ、私もモンディアル三士と同じで、サンさんと会おうとしなかったことが・・・」

二人の意見を聞き、サンが出した言葉はこうだった。

「しゃーねーよ。二人ともその時まだ五歳や六歳くらいだったんだろう？　そんくらいの頃に親に会ったんだ、独占欲の一つや二つ出ても可笑しくね～よ」

その言葉を聞いたエリオとキャロは、サンが怒ってないということに喜びと安心した。やせ我慢している雰囲気でも無かったからだ。

「それにさ、俺って二人のこと兄さんと姉さんって思ってるしさ」

サンは笑顔でそう言う。

「兄さん」「姉さん」

二人は小さい声で復唱する。

「やっぱ、いやだったか？」

落ち込みながら呟く。あまり大きな声ではなかったので、感情が上手く分からなかったのだ。

サンは前世では一人っ子だったので、兄弟が欲しかったのだ。自分だけが兄弟だと思っていた、と落ち込む。

「ううん、違います、スッゴク嬉しいです」

キャロが大きな声で訴える。言葉に連動して体も動いたようだ。手は強く拳を握っていた。

「僕もサンさんと兄弟になれたらな、と思ってました」

今度はエリオが大きな声で、訴える。キャロと同じなのか、拳を握っていた。二人の言葉を聞き、サンは・・・・笑った。

「クックック」

「な、なにか変なこと言いましたか？」

二人はオタオタしさっきの言葉が変だったか確認する。

「弟に敬語使う兄や姉がどこにいる」

サンが笑った理由はこれだ。

「「あ！」」

エリオとキャロも気付いたようだ。

・・・・・・

少し沈黙が流れ・・・

「これからよろしくな、兄さん、姉さん」

「こちらこそよろしく、サン」

「私達のこと許してくれてありがとう、サン。これからよろしくね」

三人は笑いながら、お互いの手を握り合った。

兄と姉（後書き）

エリオとキャロを兄さんと姉さんにしました。
以外に無かったので書いてみました。

ちなみに、ティアナにフラグは立っていません。
あくまで、恥ずかしい言葉を受けたから赤面しただけです。

ファーストアラート（前書き）

な、なんとか書けました。

あ、主人公はしばらくチートではありません。

ファーストアラート

機動六課が始まり、今日で一週間がたった。ＦＷメンバーは、今日もなのはの訓練を受けている。

「はい、整列」

上空にいるなのはが、ＦＷ陣を集合させる。皆息を切らしており、かなり疲れているようだ。

「みんな、まだ頑張れる？」

「「はい」」

全員同じ返事をする。

「じゃあ、シュートインベーションをやるよ。レイジングハート」

なのはが次の内容を言い、レイジングハートを呼ぶ。次の瞬間なのはの周りにスフィアが展開される。

「私の攻撃を五分間、被弾なしで回避しきるか、私にクリーンヒットをいれればクリア。誰か一人でも被弾したら、最初からやり直しだよ。がんばっていこう」

再び返事をする。

「このボロボロ状態の中、なのはさんの攻撃を五分間かわししきる自信ある？」

ティアナの中では、既にクリアの方法は決まっているようだ。

「ない」
「同じくです」
「一発いれる方が楽だな・・」

スバル、エリオ、サンはそれぞれの意見を言う。自信満々に言うことから、自分達となのはの力の差を自覚しているようだ。

「じゃあ、なんとか一発いれよう」
「はい」
「ティア、今回の俺のポジションは？」

サンは基本的にどの位置でも戦える。だから毎回ティアナに聞き、自分の仕事を決めてもらうのだ。

「あんたは、なのはさんの注意を。あとエリオに強化陣を」

ティアナの指示にサンは頷く。

「いくよ、エリオ」
「はい、スバルさん」

その様子を見ていたなのはは開始の言葉を言う。

「準備はＯＫだね。それじゃあレディーゴー」

なのはが、腕を降り下ろした瞬間スフィアが向かってきた。

「全員、絶対回避。二分以内に決めるわよ」

やる気の声を上げ、全員スフィアを回避する。

なのはの近くの空中に青色の道が表れる。スバルの魔法、ウイングロードだ。
それに乗ってスバルはなのはに接近する。さらにその反対方向にティアナがなのはを狙っている。
なのははスフィアを使い二人の方へ一機ずつ向かわせる。スフィアが二人に当たった瞬間二人が消えた。

「シルエット、やるねティアナ」

そう、さっきの二人はティアナが作った幻だ。

次の瞬間、なのはの後ろに新たなウイングロードが表れ、それを使いスバルは接近し、右手をおもいっきり叩きつける。なのははそれを右手で防ぎ、先程のシルエットに使ったスフィアをスバルの方に向かわせる。

スバルは、んとかそれに気付き、紙一重でかわす。

「うん、いい反応」
「褒めてる場合かな？」

なのはの上で声がする。慌て見ると魔法陣を足場にして、銃口を後ろに向けているサンが居た。

「ダウンバースト！」

もの凄い勢いでなのはに近づき、剣を振る。手を上にし防ぐなのは。

「いまだ、リリ！」

『アイスウォール』

なのはの下から氷の柱が出る。それは一気になのはに接近する。

「甘いよ、サン」

なのはは片腕を氷柱の方に向け魔法を発動させる。すると桜色の輪が氷柱を縛り、動きを止めた。そしてサンを弾き飛ばす。

今度は、ティアナの魔力弾が四つ表れた。

二つはなのはの方、残りの二つはスバルを追っているスフィアの破壊のためだ。二つの弾を舞うようにかわすなのはだが、さらに上からのフリードの攻撃がきたので、少し慌てて回避する。

そして、エリオとキャロを見つけた。

「エリオ今！」

ティアナが指示を言う。

［兄さん、姉さんのブーストプラス強化陣、いけるか？］

［任せて、サン］

サンの確認に元気よく答える。

「いっけー！」

ストラーダから噴射されるエネルギーを使い、なのはの元へと飛ぶ。サンはなのはの注意を少しでもこちらに引かせる為に、マシンガンを連射し、エリオの攻撃の延長線上に、可能な限りの強化陣を展開する。なのはは弾丸に気付き止まって左手で防ぐ。

エリオが、強化陣を通り抜ける度にどんどん加速する。

エリオとなのはが衝突した。

「うわ～～」

エリオは弾き飛ばされたのか、後ろに飛んで行く。そして慌ててなのはの方を見るが、土煙が舞っていて確認できない。

「エリオ！」

「「外した（か）？」」

スバルはエリオを呼び、サンとティアナは結果を気にした。土煙の中からなのはが表れる。

「いたたた～、お見事ミッションコンプリート」

なのはを見てみるとバリアジャケットの一部に大きな穴が空いていた。

「「やったー」」

ＦＷメンバーは喜ぶ。やはりエースオブエースに一撃を加えれたのは嬉しいようだ。

今朝の訓練が終わり、一旦集合する。なのはは機動六課の制服に戻り、それぞれの良かったところを言う。

すると、フリードが鳴き声を上げる。

「フリード、どうしたの？」

いつもと違うフリードの鳴き声にキャロが聞く。

「そういえば何か」

「焦げ臭くねぇか？」

エリオとサンも気付いたようだ。

「あ、スバルあんたのローラー」

みんなの視線がそこを見る。そこには、嫌な音を出しながら煙を上げているローラーがあった。

「うわ、やば！　あっちゃ～、しまった～無茶させちゃった」

「オーバーヒートかな？　後でメンテスタッフにみてもらおう」

「はい」

「ティアナのアンカーガンも、結構厳しい？」

「はい、騙し騙しです」

なのはが、二人のデバイスの心配をする。

「みんな、訓練にも慣れてきたし・・・そろそろ実践用の新デバイスに切り替えかな～？」

独り言のように呟くなのは。

「新」

「デバイス？」

隊舎に戻っているＦＷとなのは。一旦シャワーを浴びてロビーに集まることになった。

「あの車って・・・」

ティアナの視線の方に皆も向く。サンとなのはには、よく見る車だった。こちらに気づいたのか、車の窓が無くなり中が見えるようになった。

「フェイトさん、八神部隊長！」

みんなは車に近づく。

「凄ーい。これ、フェイト隊長の車だったんですか？」

「そうだよ、地上での移動手段なんだ」

「みんな練習の方はどないや？」

「頑張ってます」

ティアナが答える。

「五人とも良い感じに慣れてきているよ。いつ出動があっても大丈夫。二人はどこかお出かけ？」

「教会方面でカリムと会談や、夕方には戻るよ」

「父さん、くれぐれも教会のシスターに恋をさせるようなことしないでね」

その瞬間なのはの周りの温度が下がった。サン以外のＦＷ陣はそれに気づき、思わず背筋が伸びる。

「そ、そんなことしないよ」

しかし、それに気づかない父子。それを見たはやては、声を殺して爆笑している。

「聞いた話しによると既に機動六課で、父さんのファンクラブができてるみたいだし」

そのことを聞いたなのはは、更に気温を下げる。エリオとキャロに至っては、泣きそうな顔をしている。

「本当!?　そんなものができる覚えはないんだけど・・・」

フェイトは腕を組、真剣に考える。

「いつの間にかじゃないの?父さんって天然のタラシだし」

この瞬間父子以外の全ての者が

【お前が言うなーー!!】

と、全く同じことを考えていた。

いや、どうやらなのはそんなことを考えていなかったようだ。周り

の温度が、徐々に上がっていくと同時になのはの目から雫が落ちる。

「フェ、フェイトちゃん　グス　わ、私のこと　グス　飽きちゃったの？」

恋愛のことで泣き出した上司が隣に、四人は凄く居づらくなる。それに気づいたはやては、四人に念話をする。

［フェイトちゃんのタラシモードが見れるで～］

なんて、陽気な声だった。

「・・・なのは、こっちにおいで」

何を言われるかは、分からないが愛する人の言うことに逆らえないなのはは、フェイトの言う通りに動く。フェイトは、車から降りなのはの前に立つ。

そして、なのはに優しいキスをする。すぐに唇を離し、その唇を動かして囁く。

「なのはの心が私を思っているように、私の心もなのはを思ってるんだよ」

そう、自分の胸に手を当てながら言い、すぐ車に乗って出発しに行った。

「「・・・」」

あまりに急なことに、空いた口が塞がらない四人。サンは、さすが

父さん・・・と、一人で頷いている。
そして、なのははというと

「フェイトちゃん・・・」

と、うっとりした声と表情をしていた。

FW陣は、今シャワーを浴びていた。

「でも驚いたよね～なのはさんと、フェイトさんが付き合っていたのは知ってたけど、まさかあれほどだったなんて・・・」

スバルが呟きながら、先の映像と言動を思い出す。そうすると自然に顔が引きつってしまう。

「確かになんと言うか・・・バカップルって表現が一番合ってるわね。キャロはお二方の関係、知ってた？」

ティアナもスバルと同じ心境のようだ。そして、保護児童であるキャロに聞く。

「昔から付き合っているのは知っていたんですが、まさかあそこまでとは・・・」

またまたキャロも同じ心境のようだ。しかし、言われて思い出してみると確かにあんなことをしている時の姿があった。キャロはそれを伝えると二人は「そっか・・・」と、何やら脱力した声で発した。

女子シャワー室に沈黙が流れた。

一方男子シャワー室でも同じ話題になっていた。

「兄さんは、父さんと母さんの関係知ってたか？」

「うん・・・だけどあそこまでは予想してなかったかな。いつもあんな感じなの？」

エリオは先程のキスの現場を思い出してしまう。昔から手を繋いでいる現場は何度も見たことがあったが、キスまでは見たことなかったので改めて二人が愛し合ってるということを実感した。サンは、どうやら兄さんの前ではイチャついてなかったみたいだな・・・と、少し安心する。

エリオの数年前にあんなシーンを見せたら現在のエリオが居ないかもしれない、と考えると背筋がぞっとしてしまう。

「あれは酷い方だがな。そうだな、結構イチャついてるな。俺が小さい時から」

「今も小さいでしょ！」

なんてツッコミはしなかった。いや、してはいけなかったのだ。この子は自分よりも精神年齢が高いと判断していたからだ。

色々と話すことが無くなった二人は、無言でシャワーを浴び続けた。

男子シャワー室に沈黙が流れた。

シャワーを浴び終わったＦＷ陣は今、デバイス室にいる。理由はもちろん新デバイスを貰う為だ。

「これが私達の新デバイス、ですか？」

スバルとティアナの前に、宝石のような物と、カードのような物が浮いている。

「そうでーす」

後ろに居るシャーリーが元気良く答える。そして設計者や、協力者の名前を言う。その声も元気だった。どうやらデバイスが完成してテンションが高いようだ。

「ストラーダとケリュケイオンは、変化なしかな？」

「うん、そうなのかな？」

エリオとキャロの前には、前と変わらない姿のデバイスがあった。確かに見ただけでは何も変わってなかった。しかし、その意見に反対する声がする。

「違いま～す」

リィンが上から現れ、エリオ達に見える位置まで降りた。そして、リィンは二人にデバイスの変化点を言う。なんでも今までのは最低限のフレームと機能だけだったようだ。今までも十分の力を発揮

していたデバイス達を思い出して、二人は驚いた。

「シャーリー、リリと俺の新デバイスは？」

サンがシャーリーに聞く。

「なのはさんが、持ってくるみたいだよ」

そして、リィンが全体のデバイスについての説明・・・というより助言をする。

「この子たちはまだみんな生まれたばかりですが、いろんな人の思いや願いが込められれて、いっぱい時間をかけてやっと完成したです」

それぞれのデバイスをそれぞれの持ち主の元へ優しく渡す。

「ただの道具や武器と思わないで大切に・・・だけど、性能の限界まで思いっきり使ってあげて欲しいです」

それを聞いて皆はデバイスを大切に握りしめた。

「ごめんごめんお待たせ」

リィンの話が終わった直後に、なのはが部屋に入って来た。

「さっきはごめんね。情けない所見せちゃったね」

皆に少し恥ずかしそうに言う。先のなのはは部下が居ることを完璧に忘れてしまっていたようだ。

「あ～いえ」
「だ、大丈夫です」

なのはの言葉に苦笑いしながら答える。皆に謝ったなのははサンに近づいてアクセサリーを二つ渡す。一つが黄色いビー玉のようで、もう一つが三角形の赤い形をしていた。

「はい、リリと新しいデバイス」

そして、二つのアクセサリーを大切に渡す。それを受け取ったサンの表情は嬉しそうだ。

「え？　二機なんですか？」
「サンが、もう一機欲しいらしかったからね。もしかして皆も欲しかった？」

なのはが問う。四人は慌てて首を横に振る。デバイスを二機持つには、スキルをかなり上げなければいけないと知ってたからだ。シャーリーとリィンがなのはに今の状況を説明する。

「まずその子達みんな、何段階に別けて出力リミッターをかけているのね」

なので一番最初の段階だと性能が上がってもそんなに変わらないらしい。

「で、確実が今の出力を扱えるようになったら、私やフェイト隊長、リィンやシャーリーの判断で解除してくから」
「ちょうど一緒にレベルアップしてく感じですね」

三人がリミッターの説明をしていく。

「出力リミッターっていうと、なのはさん達にも掛かってますよね？」

「私達はデバイスだけじゃなくて、本人にもだけどね」

なのはの言葉に驚くＦＷ陣。勿論サンもだ。

隊長や副隊長達全員にあるらしい。理由は部隊ごとに保有できる魔導士ランクを合わせる為で、その出力リミッターを解除できるのは騎士カリムか、クロノ提督の許可がないといけないようだ。

再びデバイスの説明を始める。それを聞いたなのははこう言った。

「便利だよね～最近は」

「ちょ、母さん、そのセリフ年老「何かな？サン」」

サンの言葉を遮る。

「いや、だから年「何かな？」なんでもない」

なのはのオーラに押し負けたようだ。

ウーウーウーウー

突然アラートがなった。このアラートの正体を皆知っていた。

「一級警戒体制！？」
「グリフィス君」
なのはが呼んだ瞬間モニターが表れる。
「教会の方から出動命令です」
「なのは隊長フェイト隊長グリフィス君、こちらはやて」
返事をし、状況を聞く隊長二人。
「レリックらしき物が見つかったんよ。対象は、山岳リニアレールで移動中。内部に侵入したガジェットのせいで車両の制御が奪われてる。リニアレール内のガジェットは、最低でも三十体。未確認タイプも出てるかもしれん。意気なりハードな初出動や、なのはちゃんフェイトちゃんいけるか？」
はやてが状況説明をし、二人に聞く。二人は「大丈夫」と答える。
「スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、サン、みんなもＯＫか？」
「「はい」」
声を揃え返事をする。
はやてが、それぞれに指揮権を与え、現場の指揮はなのはとフェイト、はやてが戻るまでの間のロングアーチの指揮はグリフィスに頼んだ。
「それじゃあ、機動六課ＦＷ部隊出動」
「「はい」」

こうして、機動六課の初任務が始まった。

ファーストアラート（後書き）

長かったｏｒｚ
なのフェイは、上手く書けてたでしょうか？
アドバイスなどありましたら感想にお願いします。

苦労人とは決して人とは限らない（前書き）

今回は、二回に分けて投稿します。

なのはとリィン、ＦＷ陣はヘリに乗って現場のリニアレールへと向かっている。

「新デバイスでぶっつけ本番になっちゃったけど、練習通りで大丈夫だから」

不安を取ろうとするなのは。これが一番最初の任務なのでこういうことは大事だ。特にエリオ、キャロ、サンに関しては人生初の任務といってもよい。

「はい」
「がんばります」
「了解」

スバルとティアナ、サンはしっかりと声を出して答えた。当然三人にも不安があるようだが、新デバイスのおかげであまり不安が無いみたいだ。

「エリオもキャロ、フリードもしっかりですよ」

今度はリィンが元気ずける。二人と一匹はそれぞれ返事をする。

「あぶない時は私やフェイト隊長、リィンがいるから、思いっきりね」
「「はい」」

しかし、キャロは不安そうだ。それに気づいたエリオは「大丈夫？」

と声をかける。
サン、スバル、ティアナは新しいデバイスを見ている。

『よお、あんたが相棒か？』
「「へ？」」

突然ふざけた感じの声が聞こえ、ＦＷ陣は変な声を上げる。なのは
は苦笑しリィンは怒った表情になる。声の元はサンの新しくもらっ
たデバイスからだ。

「もう、サンは貴方のマスターなんですからそんな話し方はいけま
せんよ」
『そうです、マスターに相棒だなんて無礼ですよ』

リリとリィンがサンの持っているデバイスに向かって注意するが、
次の声を聞いて全く言うことを聞いてないと感じた。

『別にいいじゃねえか、なあ相棒？』

リリとリィンは怒った雰囲気を出すが、サンはに笑い始めた。

「いいぜ。よろしくなオーバー」
『オーバー？　俺の名前か？』

今度はオーバーが驚く。

「おう、前から名前を決めてたんだ。この名前に合う奴で良かった
よ」

そして二人は少し乱暴な言葉を使った会話を話をする。

「にゃははは、性格に問題があったんだけどこれで良かったみたいだね」
「リリ、色々と頑張ってくださいです」
『そ、そんな』
苦労人のデバイスに皆は優しい目を向けるしかなかった。

本部から連絡があった。どうやら空からガジェットがでたそうだ。
それを聞いた空戦魔道士のなのはの行動は決まっていた。
「ヴァイス君、私とフェイト隊長で空を抑えるから」
なのははパイロットに伝える。
「ウッス、なのはさんお願いします」
ヴァイスと言われた青年はハッチを開ける。そしてなのははハッチの近くまで歩いて、ＦＷ陣の方を見る。
「じゃあちょっと出てくるけど、みんなも頑張ってズバッとやっつけちゃおう」
「「はい」」
皆は元気な声で返したが、キャロの声が少し震えていた。
「キャロ、大丈夫そんなに緊張しなくても」

それに気づいたなのはは、近づいて手をキャロの頬に当てながら優しく言う。

「遠くに居ても通信で繋がっている。一人じゃないから・・・みんなピンチの時は助け合えるし、キャロの魔法は、みんなを守ってあげられる優しくて、強い力なんだから。ね？」

そう言ってゆっくりと手を放し、キャロが頷いたのを見てハッチに向かい飛び降りて行く。そして、空中でバリアジャケット姿になり飛んで行った。

その後にリィンがＦＷ陣に改めて任務の説明をする。

「任務は二つ。ガジェットを逃走させずに全機破壊すること。そして、レリックを安全に確保すること」

「だから、スターズ分隊とライトニング分隊・・・・あ、サンはライトニングと一緒にですよ」

「了解」

「そして、ガジェットを破壊しながら車両前後から中央に向かってください。レリックは、七両目の重要貨物室。スターズかライトニング先に到達した方が先に確保するですよ」

リィンが任務の内容を言う。

「「はい」」

「私も現場に降りて管制を担当するです」

「スターズ０１ライトニング０１エンゲージ」

ロングアーチが確認をする。

［こっちの空域は、二人で抑える。新人達の方フォローを御願い］

［了解］

本部が了承する。

［おんなじ空は久しぶりだね。フェ、フェイトちゃん］

なのはが顔を赤らめ、嬉しそうにフェイトに伝える。

［そうだね。たとえ相手が誰であろうとも、絶対私がなのはを守るから］

なんてイチャつく万年バカップル。

戦闘中の念話はロングアーチにも伝わるので、この会話を聞いたスタッフ達は皆、苦いコーヒーを飲んでいた。

なのはの後ろにガジェットが現れる。

なのはは、後ろに回り込んだ。すると、また別のグループがなのはの前に現れ、攻撃してくる。その攻撃をかわして砲撃魔法を撃つ。

回り込んだ方のガジェットは破壊できたが、攻撃してきたガジェットは破壊できなかった。

そのガジェットと入れ違ったなのはは、ターンし後ろに付く。

カートリッジをし、大量のスフィアを出し、破壊した。

一方フェイトはガジェットからの攻撃を、上下左右前後に飛びかわす。

そして、鎌状の魔力刃を放ち一気に二機破壊する。

高速戦が始まった・・・

「さーて新人共、隊長さん達が空を抑えてくれているおかげで安全無事に降下ポイントに到着だ。準備はいいか？」

ヴァイスが気合いを入れさせるためか、大声で言う。

「「はい」」

それに応えるＦＷ陣。

「スターズ０３スバル・ナカジマ」

「スターズ０４ティアナ・ランスター」

「「行きます」」

二人はヘリから飛び降りる。

「次、ライトニングとサン。チビ共気をつけてな」

「「はい」」

キャロは、心配そうだ。
それが分かったエリオは
「一緒に行こうか？」
と、言い手を伸ばす。
「サンも一緒に・・・」
エリオが振り向いた瞬間、サンが横切る。
「悪いけど、良い雰囲気の男女の間には入んないからな。スターズ０５高町サン行きます」
そして、飛び降りる。
『相棒、今の発言じゃあ同姓のカップルは邪魔するみたいじゃねえか？』
オーバーがケラケラ笑いながら言ってきた。
「お？ナイスツッコミじゃないか？」
『二人共今そんな話ししている場合じゃあないでしょう！？』
「同姓っつーか女同士のカップルがいても耐性ができたせいか、目の前でイチャつかれても大丈夫になったんだ・・・」
サンが焦る様子を全く見せずに答える。

『カッカッカ、相棒も大変だね～』
『二人共今現在落ちていることを理解してますか！？』
リリが、正論なツッコミをする。
「わ～てるよ。二人共、仲良くバリアジャケット展開してくれよ」
『了解～』
『分かりましたから早く！』
オーバーは、気楽に言うが、リリは物凄く慌てている。
「セットアップ」
サンが白色の光りに包まれる。
そして両手にデュアルウェポンが握られ、白と黒をベースにした姿になる。
ただ今までと違って銃の上に、剣の柄の部分に、カートリッジシステムがついてある。
リニアレールに着地したサンのすぐ後に、エリオとキャロもバリアジャケット姿になって降りてきた。
四人は、バリアジャケットを見、隊長似なのを喜んでいた。
その間、サン達は・・
『もう二度とあなた達と、飛び込みなんかしませんから！』
「まあまあ、そう怒るなって。楽しかったじゃねえか」

サン本人は、宥めているつもりなのだろう。

『全然楽しくありません。システムがダウンするかと思いました！』

『カッカッカ、デバイスなのにやたら人間的じゃないか？』

『なんですって！？』

「止めろって、今任務中だぞ？」

次の瞬間に

［［お前が言うな！！］］

とＦＷ陣、ロングアーチからもツッコミを受けた。

苦労人とは決して人とは限らない（後書き）

つまらないギャグでした・・・

誤字脱字アドバイス等ありましたら感想にお願いします。
特に、ギャグのアドバイスを期待しています。

何かを潰した時（前書き）

題名のせいで、おもいっきりネタバレですが、ツッコミはなしの方向でお願いしますｗ

何かを潰した時

スターズは、サンにツッコミをした後、すぐガジェットとエンカウントした。

リニアレールの屋根が一部盛り上がる。
内側から、衝撃がきているのだ。
そして盛り上がった部分から、ガジェットが使うエネルギー弾が出る。

その様子を見たティアナは、新デバイスのクロスミラージュを構える。
ガジェットが出てきた。
ティアナは、すぐに魔力弾を放つ。

「シュート」

リニアレールの上にいるガジェットを破壊した。

「うおぉぉお」

スバルが叫びながら、ガジェットが開けた穴を使い、中に入る。

入った瞬間、目に入ったガジェットに右手を降り下ろして、破壊する。
中にはまだ何体か居たようだ。
ケーブルが来る。
スバルはそれを持ち前の機動力を使いかわす。

「ハアァァ～！」

そして、かわした方向にいたガジェットを蹴りで一撃で撃破する。

しかし、まだガジェットはいる。
ガジェットは、スバルにエネルギー弾を発射する。
それをスバルは体を屈め回避し、勢いをつけて動く。
その勢いを使って壁を移動する。

「リボルバーシュート！」

壁沿いに居たガジェットを狙う。

ドガガガン

ガジェットは破壊したが、スピードを出しすぎたせいか、天井を突き破り外に出てしまう。

おそらく、デバイスが代わったので、制御がしにくかったんだろう。

「うわぁーっと、とと」

スバルが、空中でてんぱっていると、スバルのデバイス、マッハキャリバーがウイングロードを使い、リニアレールまでの道を作る。

「うわ～、マッハキャリバーもしかしてかなり凄い？加速とかグリップコントロールとか、それにウイングロードまで」

思わずたくさんの長所を言っていく。

『私はあなたをより強く、より速く走らせるために作り出されましたから』

マッハキャリバーが淡々と答える。

「でもマッハキャリバーはＡｉとはいえ心はあるんでしょ？だったらちょっと言い換えよう。お前はね、私と一緒に走るために生まれてきたんだよ」

スバルが、自分の足に付いているマッハキャリバーのコアの部分を見ながら優しく呟く。

『同じ意味に感じます』

デバイスだからよく分からないのだろう。

「違うんだよ色々と」

笑いながら指摘する。

『考えておきます』

その言葉にうん、と頷くスバル。

前の車両の中から煙が出ている。

中に居るのはティアナ、その回りにガジェットの残骸がある。

ティアナが破壊したのだろう。

［ティアナどうです？］

リィンから念話がくる。

［だめです、ケーブルの破壊効果なし］

車両の制御を取り戻すための行動だったようだ。

［車両の停止は、私が引き受けるです。ティアナはスバルと合流して下さい］

［了解］

リィンの指示に返事をする。

両手に持っていた銃を右手にだけ持つようにする。

そして、別の車両へと移動する。

「しっかし、さすが最新型。色々便利だし弾丸製作のサポートもしてくれるのね」

右手にある銃を見ながらティアナは、色々褒めていく。

『はい。不要でしたか？』

やはり普通のデバイスは、ここまで気を使うのが普通である。

サンの持っているオーバーは、そういう意味では欠陥品だ。

「あんたみたいな優秀な子に頼り過ぎると、私的には良くないんだけど・・・でも、実戦では助かるよ」

『ありがとうございます』

サン、エリオ、キャロの前には、大きなガジェットがある。

本部の通信によると、新型のようだ。
先に動いたのはガジェット。
巨大なアームを使い三人を攻撃する。
三人は、跳んで攻撃をかわす。
さらにサンは、跳んでいる途中に何発か弾丸を撃ち、強度を確認する。
かなりの固さだ。
一番ガジェットから距離をとったキャロはフリードに攻撃させる。

「フリード。ブラストフレア、ファイア」

フリードの口から炎が出る。
しかしアームを使い軽々と弾かれる。
「うおぉぉお」

エリオが叫びながらガジェットに近付く。
サンは、マシンガンを撃ちエリオの援護をする。

キィンキィンキィン

弾かれる音しかしない。

「ック、だったら強化陣を・・・」

強化陣を展開するが、数枚しか出せないので、結果は変わらない。

「だあ」

エリオが魔力で教化した攻撃でも効かなかった。

『マスター、ダウンバーストを使ってみては?』

「分かった」

そう言い風を集めるが・・・

突然魔力が、無くなった。

「「AMF」」

「こんな遠くまで・・」

キャロの居る場所はかなり離れている。

どうやら大きくなった分AMFの範囲が広くなったのだろう。

「う、うぅ」

エリオが押されてきている。

サンが慌ててエリオの元へ向かおうとする。

が、他の車両からガジェット一型が数機出てきた。

「兄さん、あれ片付けたらすぐに行くから待ってろ」

「分かった」

エリオに報告をする。

ガジェットの群れの方を見る。

「オーバー、カートリッジだ」

『了解、頑張れよ相棒』

オーバーの声は未だに緊張感がない。

そのことにサンは、少し笑う。

「雷神装」

電気の魔力変換物質を使った身体教化魔法だ。

そして、ガジェットの群れに向かう。

右手のリリで、左への斬り上げ。

左手のオーバーで、右への凪ぎ払い。

左足を軸にし、反時計回りに回転してリリで横に一閃。

オーバーを銃にして、左に居るガジェットへのゼロ距離攻撃。

問題なく破壊した・・・と、思っていたが。

『マスター破壊したガジェットからエネルギー反応です！』

『このエネルギーは、質量兵器のだ！』

オーバーも危険と判断したのか声が真面目だ。

だが、二人の注意は意味がなかった。

ドガーーン
ガジェットの群れが、物凄い音を出して爆発した。

「ガァーー」

爆発の真ん中に居たサンは、爆発をもろにくらう。

その様子を見ていた、本部は。

「なんや！あれは！？」

今までのガジェットを破壊してもあそこまでの爆発は起きなかったから、はやては驚く。

「ガジェットに爆弾を詰ませ、一定のダメージを受けると爆弾・・・おそらくそんな所だと思います！」

ある一人が報告をする。

「サンは大丈夫なんか！？」
「命に別状は・・・ただ戦闘は不可能だと・・」
「分かった」

はやては、どうやってサンを戦闘から離脱させるかを考え始めた。

サンは、車両の一番最後尾まで飛ばされる。

「サン！？」

声を上げたのはキャロだけだ。

［キャロ、サンの命は大丈夫だから、今は目の前のガジェットを］

キャロは、サンの心配をしながらも、本部の言うことに従う。

「うわーー」

エリオを見たら、アームに弾き飛ばされていた。
エリオは、アームに巻き付かれレールの上に出される。

そしてガジェットは、エリオを崖に投げ捨てた。

「あぁ」

キャロは、少ない間のエリオとのことを思い出す・・・
すぐに、飛び込んで助けに行きたかったが、一つの壁に当たった。

サンだ。

今のサンを一人にしたら、ガジェットに間違いなく殺されるだろう。

キャロが、悩んでいると
「行・・・け」
微かにだが声がした。

そちらを振り向くと、デバイスを杖に立とうとしている、サンの姿があった。

「早く行け！姉さん！！」

その言葉に押されキャロは頷き崖に飛び降りた。

キャロは空中でエリオに近づきながら願う。

【守りたい。私に笑いかけてくれる人達を、自分の力で・・・】

「守りたい！」

エリオの手を掴む。

ケルケイオンが光り落下速度が縮まる。

「フリード、今まで不自由な思いをさせてゴメン。大丈夫、ちゃんと制御するから」

隣にいるフリードに呟く。

その声を聞きエリオは、目が覚めたようだ。

「いくよ。竜魂召喚！」

その瞬間更に光りが強くなり、魔法陣が表れる。

その魔法陣から、巨大な竜が現れた。フリードの本来の姿だ。

「グオォォ」

フリードは吠え、サンの場所へと向かう。

キャロが飛び降りた後サンは・・・

こちらに気づくガジェット三型。

「ったく、五歳のガキにくらい優しくしろよな」

『相棒が五歳のガキらしくないからじゃねぇか？』

二人共のんきな声で言う。

『マスター、今は「分かっている」』

リリの言葉を遮る。

「あいつをぶっ壊す！」

リリとオーバーを剣にし、ガジェットに走って向かう。

「だてに三歳のころに、スターライトブレイカーをくらってんだ。あんな爆発で、戦闘不能になるかよ！」

「魔力変換物質水！」

サンが叫んだ瞬間、二つの刀身が水のようになる。

『『振動』』

リリとオーバーが言うと、刀身の水が音を出し始める。

「うおぉぉお」

ガジェットが、アームを使い攻撃してくる。
サンは、目の前でクロスさせていた剣を横に振り斬る。

アームを切断した。

その瞬間ガジェットは、サンから離れる。

『マスターエネルギー反応・・』

ドガーン

時は既に遅し。
アームが・・・爆発した。

「「サン！」」
「リィン曹長私達が救援に・・・」

スバルが叫んだ瞬間、三人の目の前にフリードとライトニングのふたりが居た。

「サンのことなら僕達に任せて下さい」

そう言ってサンの方に向かう。

「大丈夫みたい、ですよ」

エリオ達が見たガジェットは、アームが無くなっていた。
二人は、早くサンを助けるためにと攻撃する。

「フリード、ブラストフレイ、ファイア」

フリードが小さい時とは桁外れの炎を吐き出す。
しかし、装甲が固く破壊できない。

「あの装甲を砲撃で破壊するのは難しいよ。僕とストラーダがやる」
「うん」

エリオの案に頷くキャロ。

キャロが、ブーストの為の呪文を唱える。

「いくよ、エリオ君」
「了解、キャロ」

エリオは、フリードから飛び降りる。

「ツインブースト。フラッシュ&ストライク！」

ピンクの魔力がキャロの手から放たれ、ストラーダへと向かう。

「エリオ、爆発に注意して！」

本部からの注意がくる。
エリオは、分かりましたと返事をし、リニアレールの上に着地する。

「うおぉぉお」

エリオがガジェットに槍を突き刺そうとした瞬間。

サンの意識は、まだあった。
なんとか、二人の戦いを見ている。
エリオがガジェットに槍を突き刺そうとした瞬間。

『マスターエネルギー反応、桁外れです』『相棒遠隔操作だ、威力は桁外れだ』

二人の声が同時にする。
この瞬間、サンの思考が加速する。

【兄さんがすぐ退くことは・・いや、無理だモーションの直後で動けない。仮に動けたとしたらすでに退いているはずだ。じゃあ別の人物が・・・いやこれも無理だ。父さんや母さんがこっちにくると連絡がない。この状態で、兄さんに近づきガジェットから離すことは、スバルさんの機動力でも不可能だ。バリアをしてたら・・いや桁外れと言っていたから助かる可能性は・・・】

サンは、様々な可能性を考えるがどれも理論的に不可能だった。

【兄さんが・・・死ぬ？】

そんなの・・・

「ふざけんな～～！！！」

エリオは、死ぬのか？・・・と、諦めかけていた。

【ストラーダの話によると桁外れの爆発みたいだし】

そして、目をつぶる。

爆弾が爆発・・・・・しなかった。

そして、エリオの耳に本部にいる人の驚く声がする。

エリオが目を開くと、そこには

凛々しい顔のフェイトを、男らしくした人物の顔があった。

その人は、雷を纏ったような姿をしている。

ガジェットがいた方を見ると、そこには・・・砂しかなかった。

とある室内で、ある人物がモニター越しからその映像を見ていた。

「彼は、何者ですか？」

別のモニターに映っている女性が、その人物に聞く。

「高町サンということは分かる」

「では、変身制御の魔法ですか？」

変身制御・・・つまり、身体を変えることのできる魔法である。
最も戦闘中に変えたりする時間はないから戦闘向きではない。

「分からないが、ただの変身制御ではないことは確かだ。それにしても、やはりこの案件はすばらしい。興味深い素材が揃っている」

その人物の前に機動六課のメンバーが映っている。

「ガジェットに爆弾を詰ませて正解でしたね」

「あぁ。だが量産しにくく、すでに相手はこのことを知った。もう使わないよ」

「ッフ」

その人物が笑うとモニターが変わる。
そのモニターに映っているのは、フェイト、エリオ、そしてサン。

「この子達生きて動いているプロジェクトF、そしてロストロギア

から産まれた子供。実に実にすばらしい」

室内にその人物の不気味な笑い声が響いた。

何かを潰した時（後書き）

やっと主人公がチートの所を書けた。

ＳｔｒｉｋｅｒＳを見ると毎回フェイトさんカッコよす、と思ったので書きました。

こういうのを反省はしている、後悔はしていない、でしたっけ？ｗ

ブラックボックスの正体（前書き）

今回は全部自分で考えた話です。

ダメ出ししてくれて構いません。

追伸　古い方のデータを投稿してたので、新しい方に変えます。

ブラックボックスの正体

「あれ・・・ここは？」

サンの目には天井が見える。

「あ？サン気づいた？」

知ってる声が聞こえる、この声は・・

「シャマルさん」

とりあいず自分に害があることがないのを知ったサンは、安心する。

「ここはどこです？それに、俺はどうして寝ていて・・」

「ちょっと待ってて、サンが目を覚ましたら、はやてちゃんに連絡することになってたから」

シャマルがはやてに連絡をし始めた。

数分後に、はやてがやって来た。

「はやてさん・・あの「分かっとる」」

サンが質問しようとしたのを遮る。

「説明するな。ここは機動六課の医務室で、リニアレール事件から二日・・サンが寝とった理由は、おそらくこれ」

はやてとサンの間にモニターが表れる。そのモニターには、横たわっているサンの姿がある。
はやては、映像を再生する。

映像のサンは、ふざけんな!と、叫んだ瞬間に体が光り、次の瞬間身体が一般男性くらいの大きさになる。
サンは物凄いスピードで動きエリオの近くに居るガジェットに触れる。
サンが触れた瞬間にガジェットが砂になった。
そして、また元の大きさに戻り、気絶した。

「これは・・?」

サンは、かなり驚いた表情になりながらも、はやてに聞く。

驚くのも無理はない。自分が知らないうちに自分が知らない魔法を使ったのだ。
さらにこの姿・・自分とは信じられない。

「うちもそのことが知りたくて来たんや。まああんま期待はしてへんやったけどな」

こうは言っているが、実際は期待してたようだ。顔が若干落ち込んだ表情をしている。

その様子を見たサンは・・

「俺が言うのもなんですが、落ち込まないで下さい」

サンは、右手をそっとはやての頬に当てる。

「貴女の落ち込んでる姿は、綺麗なままだが、やはり似合わない。
貴女は笑った方がもっと綺麗ですから」

微笑みながら、呟く。

「〜〜／／／」

はやては、サンの言葉に顔を真っ赤にして、サンの青と赤の目を、
ぼおっとした表情で見る。

「ンッンン！」

咳払いが聞こえる。
二人がその方を見ると、シャマルが居た。

「二人共、私のこと忘れてませんでした？」
「え？そ、そんなことあらへんよ。なあサン？」

はやては、慌てた様子で答えサンにも聞く。

「えぇ。そもそも忘れる理由がありませんから」

サンは、当たり前のことを言う感じで答える。

それを聞いたはやては膝と手を床につけながら

「そやった。この子、フェイトちゃんの子供で天然のタラシやった」

と、ブツブツ呟く。

その様子を見たシャマルは、はやてに近づき、仲間を見る目で呟く。

「安心して下さいはやてちゃん。私なんて四歳の頃にやられてしまいましたから」

はやてはシャマルの方を向き、急に同士よ！と言い始める。

「何故にこうなった？」

サンの頭には疑問しかなかった。

サンは、機動六課をぶらついている。
あの後はやてに、今日は自由にしてて良いと言われたからだ。
今はデバイスルームに向かっている。
リリとオーバーを取りに行ってるのだ。

ウィィン

デバイスルームのドアが自動で開く。

「あ？サン！」

開けた瞬間に声がする。声をかけてきたのはシャーリーだ。

「もう大丈夫なの？」

「まあ、なんとかな。それよりリリとオーバーは？あいつらは何か知っていたか？」

一番近くに居たあの二人なら、さっきの映像のことを知ってるかもしれないと思ったからだ。

シャーリーは、サンの問いに首を横に振る。

「二機とも知らないみたい。ごめんね力になれなくて」

「いや、いいんだ。なんとなく聞いただけだし、シャーリーが気にすることじゃないからな」

シャーリーが謝ってきたので、慌ててフォローする。

「ありがとう。はい、リリとオーバー」

シャーリーは、お礼を言い、リリとオーバーをサンに渡す。

「サンキューシャーリー。じゃあな」

サンは、二人に何も話しかけずにシャーリーに礼を言い、デバイスルームを去る。

『マスター、実は・・』

廊下を歩いていると、急にリリが話す。

「分かってる。まだ人が居るから後にしろ」

サンは、リリの話を止めさせ、はや歩きで自分の部屋に向かう。

ウィィン

部屋のドアが開く。

サンは、すぐに二人から話を聞こうとしたが、不可能だった。

「サン！」

エリオが居たからだ。

驚いた表情をするが、すぐに戻しエリオに聞く。

「なんでここに居るんだ？」

「ハハハ、実は最近練習が上手くいかないからちょっと悩んでて・・」

エリオは、ソワソワしながら答える。

「大方俺のことだろ？」

「え？」

当たったらようだ。

「自分が失敗したからサンに無茶させて、ずっと目を覚まさなかったら自分のせいだ・・こんな所だろ？」

「いや、え～と」

「図星だな」

弟に見透かされて、もはや笑うしかないエリオ。

「俺は自分でしたくて助けたんだ。例え、目を覚まさなくても後悔はしない。父さんや母さんだってあの行動を批判したりはしないはずだ。もっとも、助けた時の記憶はまったくないんだがな」

その言葉を聞いてエリオの心にあった物がストンと落ちた。そして、ヘナヘナと崩れ落ちる。

「おい、どうした!?」

慌てて近づく。

「僕は・・・怖かったんだ。もしサンがずっと目を覚まさなかったら、そしたらなのはさんやフェイトさんに嫌われるんじゃないかって。ハハハ、駄目な奴だよね、弟の心配より自分の心配をするなんて・・・」

サンは、その言葉を聞いて、エリオにおもいっきりでこピンをする。

「いた」

物凄い音がした。かなり痛いでこピンだったのだろう。

エリオは額を押さえながら、サンの方を見る。

「ったく。あの父さんや母さんが兄さんを嫌いになる訳ないだろうが。あんな過去があったから深く考えてしまうのは無理ないが、あの二人は兄さんのこと・・いや兄さんだけじゃない。姉さんのことも、二人共本当の子供のように思ってるんだ。親を信じなくて何が

子供だ！」

エリオに説教するサン。なのはとフェイトのことを話して、最後はおもいっきり怒鳴りつける。

「本当なの？なのはさんとフェイトさんが　僕とキャロのことも本当の子供　だって・・・」

最初は、少し驚いた感じの話し方だったが、だんだん涙腺に近づいてきて声が途切れ途切れになる。

「本当だ。それと、泣くなら弟との前じゃなく親の前で泣け」

エリオは、サンの顔を見ずに頷き、部屋から走って出て行った。

「ハァ、世話のかかる兄だな」

溜め息をついているが顔は笑えるいる。

『カカカ、相棒は本当に五歳か？俺は人間のことはよく分からないが、相棒が変わっているということだけは分かるぜ』

オーバーがいつものようにケラケラと笑いながら言ってくる。

「五歳だ。お前なら体つきとかで分かるだろう」

サンも笑いながら言う。

が、すぐに真面目な顔になる。

「リリ、真実を知っているな？」

サンは、五歳児が出したとはとても思えないような、真剣な声を出す。

『はい。あの時マスターが光り始めた時にブラックボックスが解放されたんです』

リリがいつも以上に真剣な声で離す。
オーバーもこの空気を読んで黙っている。

「内容は把握できたか？」

これが一番重要な話だ。あの能力を使えるか使えないかで、かなり戦力が変わるだろう。

『残念ですが、僅か数秒だったものですから・・すいません』

リリが声を下げ謝る。
デバイスの義務とは、持ち主のサポート。それができなくて、くやしいのだろう。

「いや、しょうがないことだ。それより・・」

サンはモニターを出し、はやてから見せて貰った映像を再生する。

「これが俺のブラックボックスの正体・・・いったいなんなんだ？」

ベッドに座り、足を組ながら考え始める。

【そういやあの時何かを潰したような・・・】

サンはしばらくブラックボックスのことを考えていた。

なのはとフェイトは食堂で、一緒に食事をとっていた。

「フェイトちゃん、アーン」

なのはは、自分のおかずを箸で持ち、フェイトの口元へ持っていく。

「アーン」

フェイトがそれを食べる。

フェイトは、自分のおかずを口に入れる。
なのはは、アーンを期待していたんだろう。
落ち込むなのは。よほどアーンを楽しみにしていたんだろう。

なのはが落ち込んでいると、フェイトが手招きをしてくる。
なのはは何かと思いフェイトに近づく。

すると、フェイトはなのはのタイを掴んで顔を引き寄せ、そしてキスする。

「ンン～？」

急なキスについていけないなのは。
食堂に居た人達もついていけないようだ。口がおもいっきり空いて

いる。

フェイトは、キスだけでは止まらない。
フェイトは自分の口の中にあるおかずをベロを使い、なのはの口の中へと押し込んでいく。

二人は、唇を離す。

そしてなのはは自分の口にあるおかずを噛んで飲み込む。

「どお?私の味がした?」

いつも通りの話し方のフェイト。

余裕を持ったフェイトに対してなのはは

「バカ／／」

と、本当は思ってない悪口を言うしかなかった。

回りの人達は既に砂糖を吐いて気絶していた。中に、スバルやティアナ、キャロも居た。

他にも色々な甘い食事をしていると、急にエリオがやって来た。

「どうしたのエリ「うわ～～ん」」

急にエリオがなのはの膝で泣き始めた。

「ど、どうしたの？どこか痛いの？」

なのはは、何故エリオが泣いているのか聞く。

「な、なのはさんは、お、お母さんなんですか？」

「う、うん。（サンの）お母さんだよ」

エリオのよく分からない質問に答える。

「うわ～～ん！」

泣き声が更に強くなる。

「エリオどうして泣いてるの？」

隣に居るフェイトがエリオに聞く。

「サンが　なの、は　フェトさんが」

泣いているため途切れ途切れにしか分からない。

「なのは、とりあえず落ち着くまで待ってみようか」

しばらくエリオを宥めていたら・・

「スースー」

エリオが寝てしまったようだ。

「にゃはは、寝ちゃったね」

「最近色々あったから疲れが残ってたのかも」
なのはとフェイトは、エリオを見ながらそれぞれ呟く。
「この子サンって言ってたよね」
なのはが思い出したようだ。
「行ってみようか。たぶん自分の部屋に居ると思うよ」

ウィィン

部屋のドアが開いた。
サンは、誰が来たのかと思いドアの方を見ると、なのはとフェイトの姿があった。
だが、様子がおかしい。二人共腕を組んでいて、表情も怖い。

【俺、なんかしたか？】

なんて思い今日の行動を思い返す。
確かに一番に、二人の所へは行かなかったがここまで怒らないだろう。サンは、再び思考を開始する。

「「サン！！」」

二人の怒鳴り声が重なる。かなりの迫力だ。

急な怒鳴り声に驚き、サンはベッドから滑り落ちてしまう。

「なんだよ父さん、母さん、俺なんかやったか？」

サンは質問する。

「しらばっくれる気！？」

なのはがさっきの声より更に大きい声を出す。

「だから何のことだよ！？」

サンは、自分が何もしてないのに怒られているせいか、疑問を叫ぶ。

「実はエリオが私達の所に急に泣きに来てね、話を聞いた所だとサンに何かされたとしか考えられないんだ」

フェイトが落ち着いた声で説明してくる。

「ハァ」

両親の早とちりに思わず溜め息が出てしまう。

『相棒は、本当大変だよな～』

『こら！マスターのピンチに助けないで何がデバイスですか！』

オーバーの態度にリリが怒る。

「サン！こんな時に溜め息つくなんて、そんな風に育てたつもりはないよ」

「理由があるなら聞かせて。エリオと何かあったの？」

完全にサンが悪役だ。

「だからそうじゃなくて、実は・・・」

サンは、エリオとの会話のことを話始める。

「そうだったんだ。ごめんね、疑うような態度をとって」

フェイトが謝る。

「私もごめんね。早とちりしちゃったみたいだし、サンは良いことをしたのに・・」

なのはも一緒に謝る。

「いや、いいよ。俺も兄さんに親の前で泣けっての言ったからな。それで、兄さんは今どこに居るんだ？兄さんに聞いたらすぐに分かったのに・・・」

疑問に思ってたことを聞く。

これで何も理由なしだったらぶん殴ってやると、物騒なことを考えてるサン。

「にゃはは、実は泣き疲れたのかすぐ寝ちゃってね。だから勘違いしちゃったんだ」

それじゃあしょうがないか、とサンは思う。
そして、両親の行動について言い始める。

「しかしな～、普通二日ぶりに目を覚ました息子にあんな態度取るか？俺じゃなかったら間違いなく非行に走るぞ」

親の保護者としての行動に、指導する五歳児。
第三者が居たら間違いなくツッコミをするだろう。
主に、サンの五歳児らしからぬ言動に対して。

「いや、でも」
「私達は、サンのことを・・」
「信じてたんならこんなことしないよな？」

「「ごめんなさい」」

サンの正論にこう答えるしかない保護者達であった・・・

ブラックボックスの正体（後書き）

なのはとフェイトは、サンが既に意識が戻っていると連絡が入っている、設定です。

誤字脱字、アドバイス等ありましたら感想にお願いします。

サンの本気（前書き）

ヒロインを、ヴィータかヴィヴィオかどちらか悩んでいます。
ヴィータにしたらこの小説でくっつきますが、続編はなし。
ヴィヴィオは、良いところまでだがくっつかず、続編でイチャつく。
もしよろしければ感想にお願いします。

サンの本気

サンが目覚めた日から数日たった。
ＦＷ陣は、今日も訓練をしている。

スバルはヴィータから。
エリオとキャロはフェイトから。
ティアナはなのはから、それぞれの訓練をしている。

そうなると自然とサンの相手は決まってくる。

「やっぱシグナムさんですか・・」

サンが凄く嫌そうな声を出す。

「私では不満か？」

口元を上げながら言う。

自虐趣味がある人だったら喜んで受けるだろうが、サンにはそんな趣味はない。

「いや、しかし案外うれしいかもですね」

サンの口から意外な言葉が出る。

「お前は、私のことを嫌ってなかったか？」

シグナムは、少し驚いたようだ。

「嫌いっていうより苦手ですね・・だけど今は・・無性に戦いたいんですよね！」

「ッフ・・・ならば望み通り、戦りあうとするか！」

シグナムは、デバイスのレヴァンティンを構える。

サンもそれに答えリリとオーバーを構える。

「ハアァァァ」

先に動いたのはサンだ。

二丁のマサンガンを連射しながらシグナムに近づいて行く。

シグナムは、それをシールドを使いながらかわし、サンに接近する。

二人の距離が僅か数メートルになる。

【何故デバイスを剣にしない？】

シグナムは、サンの行動に疑問を持ちながらも接近する。

シグナムが剣を斜めに斬る。

サンはそれを左に飛び込んでかわし、受け身をとり、すぐに銃口をシグナムに向け撃つ。

「なるほど、近距離からの射撃か！」

レヴァンティンを使い弾丸を斬りながらシグナムは、サンの戦い方を指摘する。

「だが・・・烈火の将にそのような戦い方は通用せん」

おもいっきり足を踏み込み、サンに急接近する。

「あいにく射撃だけじゃないんでね！」

サンが叫んだ瞬間に、銃口の回りに魔力刃が出る。
二本の魔力刃を使いレヴァンティンを受け止める。

「ック」

だが、やはり力の差があったのかサンが押されている。

「銃型のデバイスに魔力刃を使うのは面白い発想だが、それだと力不足になるぞ」

「銃型にしたのは理由があるんですよ。こういうね」

サンは、リリを自分の後ろに持っていく。

「カートリッジロード。ダウンバースト　！」

サンの押す力が急に強くなる。風の力を使っているのだ。

「っな？」

予測外の行動に反応できずに、シグナムは弾き飛ばされる。

「まだまだー！」

魔力刃には少し隙間がある。銃弾を飛ばす為の隙間だ。

その隙間を利用し魔力刃があるまま、飛ばしたシグナムに連射し、強化陣を使って威力を上げる。

一気に土煙が舞う。

「ハァハァ・・少しは効いたか？」

「ふむ。なかなか良い戦術だったぞ。長年の戦いの記憶があるが、こんな戦い方は初めてだった」

土煙の中から凛とした良い声が聞こえてくる。

しかし、サンには悪魔の声にしか聞こえない。

『シグナムさんにダメージを与えるのは、剣の状態じゃないと無理のようですね』

『相棒、色々と頑張れよ。俺もサポートするから』

オーバーの励ましが、もの凄く辛く感じる。

「逝くぞ！雷神装」

『ケケケ、字が違うんじゃねえか？相棒』

『いや、ある意味これで合ってるんじゃないでしょうか？』

「リリにはツッコンで欲しかったな・・」

「ほう？私の前でそんな話ができるとはな」

三人の話に、若干イラついたシグナム。

「ちょっとした気合い入れですよ」

「ハアァァァ」

サンは二人を剣に変え、水の魔力を流す。

「振動する純水！」

どうやら、この魔法の名前のようだ。

「烈火の将に水を使うとは面白い。レヴァンティンカートリッジロード」

刀身の部分にあるカートリッジシステムが弾丸を補充する。

レヴァンティンから、炎が出る。火の魔力変換物質を使ったのだ。

「「ハアァァァ！」」

二人のデバイスが交わる。

剣と剣のぶつかり合いに起こるのは火花ではなく、水蒸気だ。

二人はお互いの武器にある物質が減っていく度にカートリッジシステムを使う。

「まさかここまでとはな・・・何故三型に手こずったのか不思議に思うぞ」

「ハァハァ。対人戦の方が得意なんでね・・」

そうは言っているが、既に体はボロボロだ。

一方シグナムに傷は無い。

サンの言葉に喜びを感じるシグナム。自分一人ではないが、やはり鍛えてきた子が自分とここまで戦えるのだ。

【高町やヴィータの気持ちが少し分かったかもしれんな】

「そろそろ集合の時間だからな。時間切れで終わるのは、余りにも惜しい。悪いが決めさせてもらう」

「こっちこそ」

お互いにデバイスを構える。

「ハアァァァ」

シグナムが叫んだ瞬間にレヴァンティンの刀身が鞭の用に伸びていく。

「飛竜一閃！」

不規則に動く鞭がサンに向かってくる。

「今だ！カートリッジロード！」

リリとオーバー二人のカートリッジシステムが弾丸を補充する。

「『激流ノ雨』」

三人の声が重なる。

すると、突然シグナムとレヴァンティンの上から物凄い勢いの雨が降ってきた。

「な！？」

隙間のない雨は、鞭状のレヴァンティンの攻撃を遅らせる。
サンは楽々飛竜一閃をかわし、魔法陣を展開する。

「凍る大地！」

サンが魔法名を言った瞬間にシグナムの周りの水が凍り、シグナムの体も徐々に凍っていく。

「なるほど、魔力変換物質を二つ使った攻撃か・・だが私が烈火の将ということを忘れたか！」

シグナムが叫ぶと、炎がシグナムを包み、氷を溶かしていく。

「な！？」

今度はサンが驚く。

慌てて次の魔法を使おうとするがもう遅く、レヴァンティンが首筋に向けられていた。

「最後まで油断しないほうが良いと思うぞ？」
「肝に命じて置きます・・」

少々馬鹿にしたような注意の仕方に、サンはこの人・・人に物教えるの苦手だな、と思いながらもシグナムに返事をした。

「はーい、じゃあ午前の訓練終了」

なのはが終了の合図を鳴らす。

「「ハァハァハァ」」

スバル、ティアナ、エリオ、キャロはかなりぐったりして息を切らせている。

「お疲れ、個別スキルに入るとキツイでしょ？」

「ちょっと　いうか　ハァ　かなり」

なのはの少しずれた質問に答えるティアナ。

「フェイト隊長は忙しいから、そうしょっちゅう付き合えねえけど、あたしは当分お前らに付き合ってやっからな」

ヴィータが優しいのか厳しいのかよく分からない言葉を言う。

「あ、ありがとう、ございい、ます」

スバルが微妙な顔をしながら答える。

そして、フェイトが四人に成長途中だから無茶をしないようにと、注意をする。

「すまん、どうやら遅れたようだな」

声がするほうに視線を動かすと、シグナムとサンの姿があった。

「シグナム」
「シグナムさん、サンはどうでしたか？」
なのはがシグナムに聞く。
「正直予想以上だ。こう言ってはなんだが、チーム戦より動きがかなり良い」
シグナムの答えに四人の視線が一斉にサンに向かう。
が、ヴィータはその行動を無視してシグナムに聞く。
「シグナムがそんなに言うのは珍しいな。何があったんだ」
「私と打ち合えたこともあるが、一番はやはり飛竜一閃をかわしたことだな」
「「えぇ！？」」
隊長陣に驚きが出る。
サンに視線を向けていた四人は、その声に釣られ隊長陣に視線が移動する。
「そんなに凄い技なんですか？」
キャロが聞く。
「正直私でも陸ではかわせるか分からないくらい、凄くて読みにくい攻撃なんだ」
「「へ～～って、じゃあサンはどうやってかわしたんですか！？」」

フェイトのスピードは管理局でもかなり指折りの方だ。そのフェイトがかわせるか分からない攻撃を、どうやってかわしたのかを質問するスバルとティアナ。

「雨です」
「「雨！？」」

サンの答えにシグナム以外の全員が声を上げる。

「魔力変換物質水を使って雨を大量に降らせ、飛竜一閃の動きを止めたんです」

皆サンの言葉に驚く。

なのはが口を開く。

「とりあえず細かいことは後でってことで・・お昼にしよっか」
「「はい」」

ＦＷ陣は元気よく返事をする。

機動六課の前で、はやてとリィンが車に乗ろうとしていた。
はやてが横を見ると、全線メンバーの姿があった。

「あ、みんなお疲れさんや」

メンバーは、はやてに近づく。

「はやてとリィンは外回り？」
「はいです。ヴィータちゃん」

ヴィータの質問にリィンが答える。

「今日ナカジマ三佐と話してくるよ」

ナカジマ三佐・・つまりスバルの父親だ。

「スバル、お父さんやお姉ちゃんに何か伝言とかある？」
「いえ大丈夫です」

スバルは、手を横に振りながら答える。

FW陣は、食堂で食事をしていた。

「なるほど、スバルさんのお父さんもお姉さんも陸仕部隊の方なんですか」
「そういえばはやてさんに聞いたっけな、ナカジマさんのこと。まさかスバルの親だったとはな」

キャロとサンがスバルの話を聞き、さっきの会話を納得する。

「サンが忘れるなんて、なんか不思議ね」

ティアナが言ってくる。

「まあ聞いたのは四年前の火事があった後の一回だったからな」

四年前・・つまりサンがまだ一歳のころだ。

「アハハハ・・その時に八神部隊長は、父さんの部隊で研修してたんだって」

サンの発言に苦笑いしながらも、説明していく。

「そういえばうちの部隊関係者繋がり多いですよね。隊長達も幼なじみ同士でしたっけ？」

ティアナが一緒に食べているシャーリーと、サンに聞く。

「そうだよ。なのはさんと八神部隊長は、同じ世界出身で」

「父さんは、子供の頃からその世界で暮らしてたらしいぞ」

シャーリーとサンがそれぞれ答える。

「えーと、確か管理外世界中の９７番」

「９７番って家のお父さんのご先祖様が居た世界なんだよね」

「確かにそんな名字の奴も居たな」

皆食べながら会話を進めていく。

「そっちの世界には、私もお父さんも行ったことないし、よく分からないんだけどね」

「ふーん」

話をしていく時にスバルは疑問に思ったことがあった。

「そういえばサンのこと未だに知らないことがあるんだけど・・」

「何だ？」

「サンってやっぱなのはさんとフェイトさんの息子なの？」

エリオとキャロは何言ってんの？と、思っているのか、質問の意味がよく分からないようだが、サンには分かった。

「ああ。受精の仕方は普通と違うが、それ以外は普通に産まれたぞ」

「「ブーー」」

最初の一文字を聞いてスバル、ティアナ、シャーリーはおもいっきり吐き出した。

「大丈夫ですか？どこか体長が・・」

それを見たキャロは慌てて三人に近づく。

「いや、大丈夫よ。そ、それよりサン！あんた何でそんな言葉知ってんのよ！？」

「え？普通に勉強してだが？」

当たり前のように返すサン。

「まあまあ、ティア落ち着いて。質問した私も悪かったんだし」

「「え？サン何か悪いこと言ったんですか？」」

エリオとキャロが声を合わせて聞いてきた。

「違うの、今のはスバルが悪かったんだ」

シャーリーが慌ててフォローする。

スバルは微妙な顔をしながら、首を縦に振った。

席を綺麗にして再び食事を始めた。

「そういえばエリオにも聞きたいんだけど、いいかな？」

「はい」

エリオが返事をする。

「エリオはどこ出身だっけ？」

この質問を聞いて、サンとシャーリーは、思わず額を手で押さえる。

「僕は本局育ちなんで」

そのことを聞いてティアナとキャロも、なんとなく分かったようだ。

しかし、鈍感なスバルはそれに気づかず話を進める。

「本局？住宅エリアってこと？」

「本局の特別保護施設育ちなんです。八歳までそこに居ました」

スバルもようやく分かったのだろう。しまったという顔をしている。

「あ、あの気にしないで下さい。優しくして貰えましたし、全然普通に幸せに暮らしてましたんで」

エリオが慌ててフォローをする。

「その時からだったよな？父さんと母さんが兄さんの保護責任者になったのは」

「うん」

エリオが頷く。

「物心ついたころから色々良くして貰って、魔法も僕が勉強を始めてからは、よく教えて貰ってて、本当にいつも優しくしてくれて、僕は今もフェイトさんとなのはさんに育てて貰ってるって思ってます」

「父さん達のこと父さんって呼ばないのか？」

サンが一旦区切ったのを見計らって聞く。

「あんなことがあったからちょっと恥ずかしくて・・」

他の皆はなんの話をしているのか、分からないようだった。

しかし、サンはそれを無視して、なるほど、と頷き再びエリオの話を聞く。

「フェイトさん、子供の頃に家庭のことでちょっとだけ寂しい思いをしたことがあるって。だから寂しい子供や悲しい子供のことほっとけないんだそうです。自分も、優しくしてくれる暖かく愛しい手に救って貰ったからって」

「「なのはさんだね（ですね）」」

全員が声を合わせて言う。

相変わらず分かりやすいカップルであった。

サンの本気（後書き）

今までのバランスが崩れましたがよは、サンは地上戦＋対人戦に強いという設定です。

ホテル・アグスタ（前書き）

今回は表現に頑張った方なんだが、全然のダメダメ文です。

ヒロインや、アドバイス等ありましたら感想にお願いします。

ホテル・アグスタ

ミッドチルダ首都南東地区上空に、一機のヘリコプターが飛んでいた。
中に居るのは、操縦士のヴァイス、はやて、なのは、フェイト、シャマル、ザフィーラ。あと、ＦＷ陣とリィン。
現在はやてが、事件の進展についてを説明している。

「ほんなら改めて、ここまでの流れと今日の任務のおさらいや」

ここに居る全員が前を向いている。
そこに、モニターがあるからだ。
そのモニターには一人の人物の顔写真が映っていた。
紫色の長い髪と黄色い瞳が特徴の人物だ。

「これまで謎やったガジェットドローンの製作者、及びレリックの収集者が現状ではこの男。違法研究で広域指名手配されてる人物、次元犯罪者ジェイル・スカリエッティの線を中心に操作を進める」

はやてが淡々と、しかし分かりやすい説明をする。
サンは当然分っているし、エリオとキャロも理解しているようだ。

「まあこっちの捜査は、主に私がやるんだけど皆も一応、覚えて置いてね」
「「はい」」

フェイトの言葉に頷くＦＷ陣。まあ、こんな目立つ人物、忘れたくてもそう簡単には忘れられないだろう。

リィンがモニターの近くまで飛ぶと画面が変わり、一つの建物が映る。
その建物は、かなりの大きさで、どこかＳＦチックな感じの建物だ。

「で、今日これから先向かうのはここ・・・ホテル・アグスタ」
「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護。それが今日のお仕事ね」

リィンが向かう場所を、なのはが仕事内容をそれぞれ伝える。

「取引許可の出ているロストロギアがいくつも出品されるので、その反応をレリックと誤認したガジェットが出てきちゃう可能性が高い・・・とのことで私達が警備に呼ばれたです」

リィンは仕事内容と、可能性の部分を説明していく。

「これらの大型オークションは、密輸の隠れ蓑にもなるし、油断は禁物だよ」

フェイトが注意点を言う。
モニターを見ながらはやては、今のホテルの状況を説明する。

「現場には昨夜から、シグナム副隊長とヴィータ副隊長他数名の隊員が張ってくれてる」

名前を呼ぶ度にその人物の画像が映る。

「私達は、建物の中の警備に回るから、前線は副隊長の指示に従ってね」

なのはが、ＦＷ陣の現場での行動は副隊長に任せてある、と付け加える。

「「はい」」

すると、キャロは先程から目で追っていたケースを見ながら手を上げる。

「あの、シャマル先生さっきから気になってたんですけどその箱って・・・」

それを聞いたサンはそちらに視線を動かす。

「隊長達のお仕事着」

妙に嬉しそうなシャマルの顔が、やけに印象に残ったサンだった。

ホテル・アグスタの受付で沢山の書名を見ていた受付人は・・・・いらっしゃいませ、とロボットの用に同じことを言っていた。

次の人物の番だ。その人物達を見て思わず息を飲んだ。

一人は栗色の長い髪をストレートに伸ばしている。ドレスは薄いピンクで、優しそうな顔と合っており、とてもふんわりとしたイメージを持てる。また、肩にかけてあるケープが色っぽさを出している。

二人目は、茶髪の肩にかかるくらいの髪を後ろでたくし上げて、金色の十字架のピアスをしている。ハデなピアスをしているが、優しい水色のドレスと白のケープのおかげでハデというイメージがない。むしろ、お姉さんオーラがあり、洋の服を着ているのに和のイメージがある。

三人目を見ると一段と驚いた。
その人物は、赤い目と整った顔。出ている所は出ていて締まるところはしっかりと締っている、モデルも裸足になって逃げていくような美貌を持っているが、問題が服だ。
その人物は、タキシードを着ていたのだ。おそらく伸ばしたらかなり有ろう後ろ髪を後ろに集め黒色の針で止めている。タキシードは、黒にラインがある物で、下のYシャツの第一ボタンは外してあり、僅かに見える白い肌がかなり女を誘惑するフェロモンを出している。さらにネクタイは緩くしてあり、これも女を誘惑するフェロモンを出す。全体的に見ても良い。タキシードの上は、先言ったところ以外はボタンは止めてある。さらにしっかりとお尻まで伸ばしてある丈。
そのお尻のところには隙間がなく綺麗に収まってあり、ダボダボ感がない。まさに、きっちりし同時にセクシーな、男性の完璧な姿をしていた。

周りの女性は目を文字通りハートにして、その女性を見ていた。

その女性達は、受付人の横にあるペンを持たずに、一枚の身分証明書を出してきた。
書いてあったのは、時空管理局部隊、機動六課部隊長と書いてある。

「え?まさか!?」

「こんにちは、機動六課です」
機動六課部隊長、八神はやてが挨拶をした。
オークション会場に二人の綺麗な女性が居た。
「会場内の警備はさすがに厳重っと」
そう、なのはとはやてだ。
「一般的なトラブルには、十分に対象できるだろうね」
「外は六課の子達が居るし、入り口には防災の非常シャッターもある。ガジェットがここまで入って来る用務はなさそうやしな」
二人はそれぞれの観察点を話し合う。
「油断はできないけど、少し安心」
なのはがホッとした表情になり独り言のように言う。
「まあ、どっちにしても私達の出番は、本間の非常事態だけや」
「じゃあ、その非常事態が起こらないように祈らなきゃね」
なのはは、はやての方を向きながら笑う。
「それよりなのはちゃんが祈らんといかんのは、フェイトちゃんがどこの馬の骨とも分からん人に連れ去られんよう、祈った方がええんとちゃう?」

はやてがニヤニヤしながら言う。
はやてが期待しているのは、慌ててフェイトの所になのはが向かい、そのままイチャイチャつき最後はキス・・・これをはやては見ようとしているのだ。

しかし、なのはは慌てる素振りを全く見せずに、のんびりはやてに話す。

「タキシード姿のフェイトちゃんが、タラシモードになって女性と何かしたら、必ず落ちる前に気絶するからね・・・だからそんなに心配じゃないんだ」

手すりに肘を乗せ、何か昔のことを思いだしているような顔をしていた。

「あ・・・そ、そうなんや」

なのはにもフェイトにも、さすがと思いながらも、口に出せたのはこれだけであった。

フェイトは、オークション会場の廊下を歩いている。

「オークション開始まで、あとどれくらい？」

フェイトは、胸ポケットに閉まってあるバルディッシュに聞く。

『三時間二十七分です』

それを聞きフェイトは頷く。

しばらく歩いているとフェイトは、何か異変に感じた。

【視線!?】

すぐにその正体に気がつく。フェイトが周りを見てみると、やけに女性から視線を受けていることに気がつく。

そして、ある女性がフェイトの前にやって来る。普通にかわいい子だ。

その女性は深呼吸した後、フェイトに向かってこう言った。

「もしかして、モデルさんですか?」

その言葉に驚くフェイト。この格好は自分が好きだから着ているのであって、決しておしゃれで着ている訳ではない。

それなのにモデルと言われたのだ、当然混乱する。

が、外から見たらその女性の目を真剣な目で見ている用にしか見えないようだ。

女性は顔を真っ赤にしている。

「とりあいず、管理局員とバレない方がいいですね。後で面倒事がおきるかもしれませんから」

念話でバルディッシュがフェイトに伝える。

ちなみにバルディッシュが言った面倒事とはストーカーだ。

フェイトのことだから、必ず女性を落としてしまう。だから、こちらの身元がバレてストーカーにあったら面倒だと判断したからだ。

念話を受けたフェイトはさっそく行動をする。

質問してきた女性の顎を、人差し指と親指で軽く掴み、こちらを向かせる。

「私なんかがモデルだったら、君はお姫様じゃないか」

「お、お姫様!?」

「うん、髪は凄く綺麗でサラサラしていて」

空いている方の手で髪を撫でる。

「肌は柔らかくて気持ちいし」

「ハ、ハウゥゥウ／／／」

今度は腕を触っていく。

「何より・・・私が君をお姫様だと思っている。これじゃあ駄目?」

女性の首を傾げる行動は普通、かわいいはずだかフェイトは違う。その全てを見透かしたような表情と目のせいで、まるで自分がどう答えるかを知ってる用に見える。

余りの甘い行動と、幻想的な姿に、老若小関係なく、周りの女性達は倒れてしまった。

「え?何?私何かやった」

あれだけのことをしたのに全くの自覚無しである。

『一旦ここから離れましょう』

バルディッシュは、いつものクールな感じの声ではなく、少し呆れたような声をしていた。

ホテル・アグスタの外を警備していたＦＷ陣の中で、念話をしている組が居た。

［でも今日は、八神部隊長の守護騎士団、全員集合か～］

この話し方はスバルだ。

スバルは、周りの様子を見ながらティアナに念話をする。

［そうね、あんたは結構詳しいわよね？八神部隊長や副隊長達のこと］

ティアナも周りの様子を見ながら返す。あくまでも、警備をしながら念話をしているのだ。

［うーん、父さんやギン姉から聞いたことくらいだけど、八神部隊長が使っているデバイスが魔導書型で、それの名前が夜天の書ってこと。

副隊長達とシャマル先生、ザフィーラは八神部隊長個人が保有している特別戦力だってこと。

で、それにリィン曹長を合わせて六人揃えば無敵の戦力ってこと。

まあ、八神部隊長達の詳しい実状とか能力の詳細は特秘事項だから、

あたしも詳しくは知らないけど」

自分ではそう言ってるが、かなり詳しい説明だった。

「レアスキル持ちの人は皆そうよね」

ティアナが怒っているような呆れているような、なんとも分からない声で念話をする。

「ティア、なんか気になるの？」

いつもと違う声の雰囲気に、スバルは疑問に思ったのだろう。

「別に」

「そう、じゃあまた後でね」

スバルからの念話が切れる。

そして、さっきのスバルの話と、今までのこと等を思いだしなら思考する。

六課の戦力は、無敵を通り越して明らかに異常だ。

八神部隊長がどんな裏技を使ったのか知らないけど隊長格全員がオーバーＳ。

副隊長でもニヤＳランク。

他の隊員達だって、前線から管制官まで未来のエリート達ばっかり。

あの年で、もうＢランクを取ってるエリオと、レアで強力な竜召喚士のキャロ、二人共なのはさんとフェイトさんの秘蔵子。

危なっかしくは有っても、潜在能力と可能性の固まりで、優しい家族のバックアップもあるスバル。

そして、サン。
エースオブエース高町なのはと、管理局指折りのスピードを持つ天才魔導士フェイト・テスタロッサ・ハラオウンの才能を持って産まれた子。
魔力変換物質を僅か五歳で四つ持っている、まさに神童。

【やっぱりうちの部隊で凡人は私だけか。だけど、そんなの関係ない。私は・・立ち止まる訳にはいかないんだ】

強い意思を感じる目で、ティアナは空を見上げた・・・

ホテル・アグスタ（後書き）

今回はほとんどサンは出てきませんでした。

理由としては、タキシード姿のフェイトさんを書きたかったからです。

ちなみになのフェイじゃなかったのは、すでになのはさんはフェイトさんのタキシード姿をみたことある・・という設定にしてしまったからですｏｒｚ

新たな敵　召喚士（改）（前書き）

すいません。なんらかのミスがあり、話の一部が飛んで意味不明な会話になってました。
本当にもうしわけありません。
ちゃんと見直しはしたんですが・・・

新たな敵　召喚士（改）

ホテル・アグスタの屋上に、一人の女性が居た。
シャマルだ。
現在シャマルは、広域探索魔法を使っている。もし、敵戦力が来た時にすぐに対応できるからだ。

キィィィン

突然何処からともなく音が聞こえた。
シャマルの指にあるデバイス、クラールヴィントが出したのだ。

「クラールヴィントのセンサーに反応・・シャーリー」

機動六課に居るロングアーチスタッフの、シャーリーに確認を取る。

［来ました。ガジェットドローン陸戦一型機兵３５、陸戦三型２、３、４」

この通信は当然部隊全員に聞こえている。
地下の警備をしていたシグナムは、隣に居る、エリオ、キャロ、ザフィーラに指示を出す。

「エリオ、キャロ、お前達は上に上がれ。ティアナの指揮でホテル前に防衛ラインを引け」

ＦＷ陣に指示権を与える。かなり、ティアナを信頼していると見える。

「「はい」」
「ザフィーラは、私と迎撃に出るぞ」
エリオ達の横に居る、青い狼に向きながら言う。
「心得た」
二人は驚く。おそらく知性はあるが、喋れるまではないと思ってたのだろう。
「守りの要はお前達だ。頼むぞ」
「う、うん」
「頑張る」
二人は少し動揺しながらも、しっかり返事をした。
再び視点を、屋上に居るシャマルに移す。
「前線各員、状況は広域防御戦です。ロングアーチ０１の解析と合わせて、私シャマルが現場指揮を行います」
シャマルは広域探索魔法を使用しながら、それぞれの前線メンバーに伝える。
［スターズ０３了解］
［ライトニングＦ了解］
［スターズ０５了解］
［スターズ０４了解］

全員から、確認の返事が届く。
すると、屋上にティアナがやって来た。クロスミラージュを持ってることから、魔法を使って来たのが分かる。

「シャマル先生、私も状況を見たいんです。先生のモニター貰えませんか？」

やはり、指示をするには情報が必要だ。ティアナの行動は厚かましく無く、むしろ必要な行動だ。

「了解、クロスミラージュに直結するわね」

シャマルはクラールヴィントに任せ、自分はシグナムとヴィータに指示を送る。

それに答え、数秒後に空に紫色の魔力光と赤色の魔力光が見えた。
紫がシグナムで、赤がヴィータだ。

ガジェットの群れが見える所まで飛んだシグナムとヴィータ。

「私が大型を潰す。お前は細かいのを叩いてくれ」
「おうよ」

シグナムの指示に、ヴィータが頷く。

シグナム、ヴィータ、ザフィーラはそれぞれ任された場所に止まり、防衛戦を始めた。

ホテル前に居るサン、スバル、ティアナは三人の戦いをモニターで見ていた。
すでに三人は、バリアジャケット姿で、いつでも戦える状態だ。
三人が見ているモニターには、シグナム、ヴィータ、ザフィーラが映っていた。

ヴィータは鉄球をグラーフアイゼンを使い、吹き飛ばして、上空からの遠距離攻撃をしていた。

シグナムは地上に降り三型の厚い装甲を、魔力変換物質を使った武器教化したレヴァンティンで斬っている。

ザフィーラは、大量のガジェット一型の攻撃をバリアだけで防ぎ、その状態のまま、地面から魔力刃を出してガジェットを破壊していた。

「副隊長達とザフィーラすごーい」

スバルが素直な感想を言う。

「これで・・・能力リミッター付き」

しかし、ティアナは誉めるというより悔しそうな声を出して、強く拳を握っていた。
その姿をサンは見ていた。

「ティア、今は集中するのが大事だからな。お前は俺達ＦＷの指揮官なんだからな」

サンは両手を頭の後ろに置きながら、いつもの話し方で言う。

「分かってるわよ」

そうは言ったが、まだ何か心残りがあるようだった。

エリオとキャロは、別の場所で、警備をしていた。

キィィィン

キャロのデバイスが突然音を出しながら光出した。

「キャロ？どうしたの？」

隣に居たエリオがキャロの方に振り向く。

「誰かが、召喚を使ってる」

当然このことにシャマルも気づいた。

「クラールヴィントのセンサーにも反応・・・だけどこの魔力反応って」

［お、大きい］

少し前にさかのぼる。

シグナム、ヴィータ、ザフィーラの戦いを見ていた人物が他にも居た。
一人は、黒い服を着た中年の男性で、その横にはローブを着ている小さな女の子が居た。
二人は高い所から肉眼で戦いを見ていた。
二人の前にモニターが表れる。

そこに映っていたのはなんと、ジェイル・スカリエッティだった。
スカリエッティは、男性の方をゼスト、女の子の方をルーテシアと呼び、二人に依頼を頼む。

この二人はどうやら、スカリエッティの協力者のようだ。しかし、ゼストとルーテシアはレリックにしか興味がないらしい。
ゼストは断ったがルーテシアは良いと答え、ルーテシアが今回の戦いに協力することになった。
ルーテシアは、着ていたローブをゼストに渡し魔法陣を展開する。

「我が甲、小さき物、羽ばたき物、言の葉に答え、我が命を果たせ・・・召喚、インゼクトツーク」

暗い紫色の魔法陣から触手のような物が何本か現れ、触手が音を出し、壊れる。中からは変な形をした昆虫が現れた。

「ミッション、オブジェクトコントロール・・・行ってらっしゃい」

少女が呟くと、周りにいた昆虫が一斉に飛んで行った。

昆虫達が向かっているのは、ガジェットの方だ。
そして、ガジェットと接触すると昆虫は消え、ガジェットが先程の少女・・・ルーテシアが使っていた暗い紫色の魔力光に光った。

ガジェットの異変に最初に気づいたのはシグナムだった。
既に、数機三型を撃破していた彼女は、次のガジェットに向かっていた。

「ハァァァア」

今までのガジェットはこのスピードに余り反応を出来なかったが、このガジェットは違った。アームを使い、レヴァンティンを受け止めた。

「なに？」

ガジェットは受け止めた状態から、おそらく顔であろう所からエネルギー弾を発射させる。
シグナムはすぐに間合いを取り、シールドを使い防ぎ一旦上空に戻った。

ヴィータも異変に気づいたのようだ、。今までの当たっていた上空にからの攻撃を、急にかわし始めたのだ。

「急に動きが良くなった」
「自動機械の動きじゃないな」

隣に来たシグナムが呟く。

シャマルやロングアーチの話によると、有人操作に切り替わり、相手には召喚士が居るとのことだ。

「ヴィータ、一旦ラインまで下がれ。向こうに召喚士が居るのなら、新人達の方に回り込まれるかもしれん」

「お、おう」

シグナムに言われて気づいたのだろう。ヴィータは慌てた声を出して、下がって行った。

ホテル前に居るＦＷ陣。

そして、キャロは何かに気づいたようだ。

「遠隔召喚・・来ます！」

次の瞬間にＦＷの前に五つの魔法陣が表れ、その中からガジェットが出てきた。

「召喚魔法陣？」

「召喚ってあんなこともできるの？」

エリオとスバルは、それぞれ疑問を言う。

「優れた召喚士は、転送魔法のエキスパートでもあるんです」

キャロが二人に答える。

「そんなことはどうでもいい、それより迎撃いくわよ」

「「おう！」」

サン以外の全員が頷く。
みんなはサンの声が聞こえないのに気づき、サンの方を向く。
サンは、顔を下に向きながら体を震わせていた。

「まさかあんた怖じけずいた訳じゃあないでしょうね!?」
『マスター、大丈夫ですか!?』
『相棒しっかりしろ!まさか、爆発のトラウマが・・・』

ティアナ、リリ、オーバーがサンの心配をする。

「ククククク」

突然サンが笑いだす。
みんなは恐怖の余りに狂ってしまったのかと思い、慌ててサンの前に集まりガジェットから守ろうとする。

しかし、違ったようだ。

「おィおィおィ〜〜よク俺のまぇに現れたなア〜〜!」

「三型クゥゥ〜〜ン!!」

「『ひい!?』」

サンがとても五歳児が、いや、人間が出したとは思えない叫び声を上げる。

あまりの狂気に思わずここに居る全員が恐怖の声を上げる。

「ぶっ壊シてや留よォォ～～！」

爆発の時の借りを返す為にと、ガジェット三型に走っていく。
ガジェット達から大量のエネルギー弾が来るが、低姿勢になり、不規則な走り方をして、全てかわし三型に向かう。

「振動スル純水ィィ～！」
『『ｓｉｒ－ｙｅｓ，ｓｉｒ』』

余りの恐怖に普通のデバイスが使う言葉を使うリリとオーバー。
ガジェットは、アームを使い迎撃しようとする。
しかしサンの前では無意味だった。サンが剣を振った途端、アームは綺麗に切断された。

そして、ガジェットの顔の前に立ち

「一匹目仕～留めたアア」

二本の剣を突き刺した。

その異様な光景を呆然と見ていた四人。
慌ててティアナは我に帰り、指示を出す。

「サンのことは放っておいて、私達も行くわよ！」

その言葉に釣られてスバル、エリオ、キャロも我に帰ったようだ。

「「お、おう！」」

戦い始めてから数分、ようやくサンは自我を取り戻したようだ。戻した理由としては、サンの回りにあるガジェットの残骸のお陰だろう。

「悪かったな二人共」
『い、いえ。大丈夫です』
『カ、カカカ。お、面白い物見れたしな』

二人共こうは言っているが、やはり動揺は隠せないようだ。デバイスがどうやって声を震わせているかは分からないが、今現在この二機がしているから、不可能ではないのだろう。

「で、ここどこ？」

そう、今サンは自分がどこにいるかが分からないのだ。

『安心しろ相棒。すぐ近くに防衛ラインがある』
『ここから南にあります』

デバイスってやっぱ便利だなと、サンは思いながら南に向かった。

サンが防衛ラインに戻った時、すぐに目に入ったのは、ウイングロードを使って派手に動き回っているスバルの姿だった。
すぐに囮だと判断したサンは、ティアナに念話をした。

［ティア、サンだ。さっきは悪かった。冷静になったから指示をくれ］
［うっさい。後にして！］

ティアナに怒鳴られるサン。
ティアナが怒るのはよくあることだが、冷静じゃないのは珍しい。
普通サン程の戦闘力を持つ人物の指示は、多少用事を後回しにしてでもしたい所だ。

「ティアの様子が何か変だな。リリ、オーバー、ティアは今何してる？」
『ティアナさんの方から大きめの魔力反応が出てます』
『ケケケ、あのお嬢さんにはこの威力はコントロールしにくいんじゃねぇか？』

とりあえず直接ティアナに会おうとし、走り出そうとした瞬間、ティアナの魔力光のオレンジ色のスフィアが見えた。
スフィアは次々とガジェットを破壊していくが、一発大きくずれた。
さらに、その直線上にスバルが居た。

「あの馬鹿！カートリッジロード、ダウンバースト！！」

二機のデバイスは、カートリッジシステムを使いサンに魔力を与え、指示された魔法を使う。
次の瞬間に爆風が噴射され、サンは上手く風を使い超スピードでスバルに向かう。

『マスター、両手がふさがってますが当然策があるんでしょう？』

リリの質問に対して、サンの答えは決まっていた。

「ない！」
『カカカ、相棒は相変わらず笑わせてくれるね～』
『マスターは威張って言わないで下さい！。あなたも笑ってないで何か策を考えて下さい！』
しかし、策が浮かんでももう遅い。
サンは既にスバルの前に来ていた。
ティアナのスフィアが、サンに激突した。
「「サン！？」」
全員が驚きと悲鳴が混じった声をして叫ぶ。
サンの目の前が真っ黒に・・・
ならなかった。
サンは空中に魔法陣を作る。地面に落ちるより、空中に魔法陣を展開することで、衝撃を少しでも和らげるためだ。
ドンッと音をたてて魔法陣に叩きつけられる。
「いっ～～て～～！！」
足場の魔法陣に横になりながらスフィアの当たった背中の部分を抑え、のたうち回る。

『カ～カカ相棒は俺を何処まで笑わせれば気がすむんだ？カ～カカ』
「笑ってる場合か？めっちゃ痛いんだぞ！」
サンは横に落ちてあるオーバーをおもいっきり睨みつける。まるで般若だ。
『そうです。マスターがどんな　ップ　辛い思いをしていると！』
リリがオーバーを怒鳴りつけるが、途中聞こえた笑い声のせいで、サンを馬鹿にしているようにしか聞こえない。
「おま！？ガジェット貫通する威力のスフィアをマスターがガチにくらったのに笑ってるって、忠誠はどうした忠誠は！？」
オーバーが笑うのはなんとなく許せるが、普段真面目なリリが笑ったのは気にさわったようだ。
『しかし、あまりにもリアクションが芸人に似ていて　ップ　駄目です、思い出すと笑いが・・・』
そのことを聞いてサンは、笑い声を上げるリリにガミガミと言い始める。とても先に大ダメージを受けたとは思えない。
「サン！大丈夫か！？」
ヴィータがこちらに飛んで来て、慌てて手を当ててくる。いつもの厳しい顔ではなく、心配そうな顔をしていた。
「な、なんとか」

そのことを聞いてヴィータは安心したようだが、すぐ怒った表情になった。

「ティアナこの馬鹿！無茶やった上に味方撃ってどうすんだ！」

ティアナは目を開いて呆然と立ち尽くす。自分のわがままな無茶のせいで、サンにダメージを与えたのが堪えてるのだろう。

「あの、ヴィータ副隊長今のは実はコンビネーションの内で・・・」

「ふざけろタコ。サンに当たったんだぞ！」

「違うんです。今のは私がいけないんです」

「うるせえ馬鹿共。もういい、後はあたしがやる。皆まとめて、引っこんでろ！」

「あのヴィータさん、俺まだ戦いたいんですが・・・」

ギロ、っという音を出してサンをおもいっきり睨む。実際は音なんて出ていないが、それ程迫力があったということだ。

「す、すいません」

この時のヴィータの顔は、般若をも凌駕していた程恐かったそうだ。

「全機撃墜」

ヴィータが自分の周りにあるガジェットの残骸を見下ろしながら呟く。

「こっちもだ。召喚士は追いきれなかったがな」
「だが居ると分かれば対策も練れる」

ヴィータの方に向かうシグナムとザフィーラは今回の戦いの戦果と、これからの方針に話す。

「だな。ん？ティアナは？」

シグナムとザフィーラの方を見ていたヴィータは、隣にティアナとスバルが居ないことに気づきエリオに聞く。

「裏手の警備に」
「スバルさんも一緒です」

そのことを聞いてヴィータは顔をしかめる。

しばらくして、現場検証の為の調査班が来た。
なのはとフェイトも機動六課の制服を着て、現在はＦＷ陣から報告を受けていた。

「えっと、報告は以上かな？現場検証は調査班がやってくれるけどみんなも協力してあげてね。しばらく待機して何もないようなら、撤退だから」

なのはが指示を出す。

「「はい」」

ティアナ以外のＦＷが返事をする。

「で」

なのははティアナの方を向く。今のティアナはいつもの気の強い感じは全くなく、目に光もない。誰が見ても、何かあった・・・としか思えないだろう。

「ティアナは・・・ちょっと私とお散歩しよっか」

なのはが優しい声でティアナを誘った。

サンはダメージを受けたから、シャマルの所で治療を受けていた。

「でも信じられない。四発カートリッジロードで作ったスフィアをもろに受けても、怪我がほとんど無いなんて」

シャマルは信じられないというか、呆れているというか微妙な顔をしている。

「ハハハ・・・三歳のころのスターライトブレイカー、シグナムさんの特訓、ガジェットの爆発、等々のおかげみたいですね」

サンが笑いながら過去の出来事を思い出し、口に出していた。

「ハァ、今日は余り無茶しないようにね」
「は～～い」

そう言ってサンは、治療の為に脱いでいた服を着て、緊急用のテントから出ていく。

今フェイトは、ユーノ・スクライア・・・いや、無限書庫の司書著長、更には古代遺跡の発掘や研究をしている考古学者のユーノ・スクライアを護衛していた。
もっとも、二人は前からの知り合いだったので話の内容は固い物ではない。そして、フェイトが自分が調査していた内容をユーノに話始めた。

「そう、ジュエルシードが」
「うん。局の保管庫から地方の施設に貸し出されてて、そこで盗まれちゃったみたい」

今までの話を聞く限り、どうやらジュエルシードがは、ジュエル・スカリエッティが持っているみたいだ。

「そっか」

ユーノが落ち込んだ表情をする。

「まあ、引き続き調査はしてるし私がこのまま六課で事件を追って行けば、きっとたどり着く筈だから」

ユーノを元気づけようと、フェイトは自分がどれだけ頑張っている

かを、そして、ジュエルシードが戻ってくることを、ユーノに伝える。

「フェイトちゃん、ユーノ君」

後ろから声が聞こえた。振り替えるとなのはがこちらに走って来るのが見えた。

「ちょうどよかった、アコース査察官が戻られるまでユーノ先生の護衛頼まれているんだ。交代お願いできる？」

「うん、了解」

なのはが嬉しそうな顔で答える。久し振りに友人と話せるからだろう。

「あ、それとなのは、ちょっとこっちに来て」

フェイトがなのはに向かって手招きをしている。

「なに？」

すぐ近くに居るのに何故更に近づかなければならないんだろうと、疑問に思いながらも歩いて行く。

「なのは」

フェイトがなのを、いきなり抱き締める。

「フェ、フェイトちゃん／／？」

急に抱きつかれたから驚いてしまったなのは。
すぐにフェイトから離れようとするが、予想以上に抱き締める強さが強く、なかなか抜け出せなかった。
ユーノはこれから何が起こるのかを知っているのだろう。後ろを向いて二人を見ないようにしている。

「もしかしたら今日は忙しくてプライベートで話せないかもしれないから先に言っておくね。今日のなのはは、一段と綺麗だったよ。ごめんね任務だったから余り一緒にいれなくて、不安にさせちゃった」
「べ、別に不安になんかなってないよ／／」
「なのはの目を見れば分かるよ。毎日毎日ずっと見ていたんだよ。だから分かるんだ、なのはが不安だって」

フェイトの余りに甘い告白に、乙女のなのはの心と頭は今、フェイトのことしか考えられないようだ。
その証拠に今までユーノを気にして、フェイトから離れようとしていた体が今は綺麗にフェイトの腕に収まっていた。

「だから、今度の夜・・・私の愛をなのはに刻ませて」
「～～～～／／／／／」

なのはの顔は、今までに無いくらい真っ赤だ。しかし嬉しいのだろう、なのははこう呟いた。

「お、お願いし、します／／／」
「うん。じゃあなのは、ユーノ先生の護衛お願いね」

そう言ってフェイトは、なのはを抱き締めていた腕をほどきエリオとキャロが居た場所へと向かって行った。

「アハハハ、相変わらずだね二人共」

今まで後ろを向いていたユーノがなのはの方を向いて言った。顔は・・・やはり苦笑いしている。

「ご、ごめんねユーノ君／／」

ユーノの声がするまで、完璧に存在を忘れていたなのはは慌ててユーノに謝る。

「いや、いいよ。気にしてないから」

「にゃははは、ありがとう。それにしても、今日は偶然なのかな？」

なのはは純粋に不思議そうな顔をしながらユーノに聞く。

「アコース査察官は、今回のオークションに機動六課が護衛に派遣されて来るってことはご存知だったみたいだよ。それで、オークションの見物がてらって、同行してくださったんだ」

「そうなんだ」

なのはは何となく分かったようだ。

二人はその他にも色々話し合った。

その時ユーノがある話題を出した。

「そういえばなのはは、いつフェイトと結婚するの？」

やはり、十年前からの友達同士の結婚は気になるようだ。

「ふぅぇぇえ!?な、何でそんなこと聞くの／／！?」
「個人的に気になるのもあるんだけど、一番の理由は無限書庫の仲間が二人の関係がどこまでいってるのか気になっててね」
ユーノがいつもの穏やかな表情のまま、さも普通のことを聞いているかのように聞く。
「ちょ、ちょっと待って。それって私とフェイトちゃんの関係を知ってるってこと!?」
なのはは凄く驚き、もの凄い勢いでユーノに顔を近づけ確認を取る。
まあ、驚くのは当然だろう、今まで隠していた関係を無限書庫の人が知っているのだから。
「え?なのは達って隠してるつもりだったの!?」
逆に驚くユーノ。あそこまでイチャイチャしていて隠してるつもりだったのだ、当然こちらも驚く。
ちなみにイチャイチャの内容は省かせてもらう。
「ふ、ふぅぇえ／／／！」
なのはは余りの恥ずかしさに悲鳴を上げた。
その悲鳴を聞いていた人物が居た。
サンだ。皆に気を使われ、今日は仕事を休めと言われブラブラと散

歩していたのだ。

「ふ、ふぅぇえ！」

「な、この声、母さん！？まさか何かあったのか？」

サンは、急いで声のした方に走って行く。

声の近くまで走っていたサンが見た物は・・・赤面しているなのはと苦笑いしていたユーノだった。

いつものサンなら何となく状況を理解できたはずだが、なのはの悲鳴を聞いて、冷静な判断ができなかったのだろう。

サンは、走りながらユーノが何かしたと判断してしまった。

「この泥棒フェレットがー！」

サンは今までの勢いを付けたまま、ユーノに向かって両足をおもいっきりぶつけた。いわゆるドロップキックというやつだ。

「ごふ！？」

ユーノはリアルなリアクションをして綺麗に放物線を描き地面にぶつかった。

「サン！何し「大丈夫、母さん？何かされの？悲鳴を聞いて来たんだけど」え～とサン、実は・・・」

自分のことを心配してくれた息子に少し喜びを感じながらも、誤解を解こうと説明する。

「すいませんでした！！」

誤解だと分かったサンは、地面にでこを当てながらユーノに謝る。

「そんな土下座しなくても。なのはに変なこと聞いた僕も悪かったんだし」

ユーノは、ドロップキックをくらった腰に手を当てながら土下座を止めさせようとする。

［機動六課前線メンバーの皆さん撤収準備が整いました。集合して下さい」

ロングアーチからの指示が来た。

「すいません。いつかお詫びしますんで。失礼します！」

「私も行かなきゃ。ちょうどアコース査察官も来られたから」

「うん。行っておいで」

ユーノは優しくサンとなのはを見送った。

機動六課に戻って来たＦＷは今、なのはとフェイトの話を聞いていた。

辺りは既に夕焼けになっていた。

「今日はお疲れ様。今日の午後の訓練はお休みね」

「明日に備えてご飯食べて、お風呂でも入ってゆっくりしてね」
「「はい」」

なのはとフェイトの助言に敬礼しながら返す。

機動六課局員用の寮に帰ろうとしていたＦＷだが、ティアナが足を止め独り言のように呟く。

「スバル、あたしこれから少し一人で練習してくるから」
「自主練？あたしもやるよ」
「じゃあ僕も」
「私も」
「俺も暴れ足りないんだけど」

皆手を上げて練習に参加しようとする。

「ゆっくりしてねって言われたでしょ。サンも少し休みなさい」

ティアナが優しい目でサン、エリオ、キャロを見つめながら言う。気を使ってくれてることが嬉しいのだろう。

「それにスバルも、悪いけど一人でやりたいから」
「うん」

スバルは、ティアナの言葉に落ち込みながらも頷く。

ティアナが練習しに歩いて行く。

「ティア、あんま無茶すんなよ。何かあった時に俺達に指示するの

はお前なんだからな！」

サンの大声を聞いて一瞬立ち止まる。

「分かってるわよ」

と、サン達に聞こえる声を出して、再び練習をするために歩き出した。

その時のティアナの顔は誰も知らなかった。

新たな敵　召喚士（改）（後書き）

自分にメールを送りその内容をコピーして投稿してるんですが、途中二回メールが来て、出てしまい内容が消えてしまったｏｒｚ

今回はきつかったです。

ティアナの理由（前書き）

初めてパソコンで下書きし、投稿しました。

・・・正直パソコン神すぎましたｗ

もっとも書いた内容はダメダメですけどｏｒｚ

ティアナの理由

ティアナが一人自主練習に行ったあと、サン、エリオ、キャロはスバルからティアナの話を聞いていた。
ティアナの無茶をする理由には過去が関係あるらしい。
それはティアナの兄、ティーダ・ランスターの死が原因だそうだ。

彼は執務官志望の魔導士だった・・・両親を事故で亡くしたティーダ・ランスターはティアナを一人で育てていた。二人は両親がいないながらも幸せに暮らしていた。だが、任務中に亡くなったそうだ。

「ティアがまだ十歳の頃にね。お兄さんは当時二十一歳で一等空尉、所属は首都航空隊だったんだ」

スバルが顔を下に下げ目も少し潤みながらも三人に話す。

「なかなかのエリートだな」

サンが簡単な返事をする。

「エリート、だからいけなかったのかな」
「どういうことですか？」

スバルの呟きに疑問を持ったキャロは、質問する。

「お兄さんが亡くなった時の任務は逃走中の違法魔導士を逮捕することだったんだ。なんとか手傷を負わせることはできたんだけど取り逃がしちゃって。地上の陸士部隊に協力を仰いだおかげで、犯人はその日の内に捕まったんだけど・・・ひどい上司の人がねティア

の前でこう言ったんだ」

スバルが、サン、エリオ、キャロの前にそれぞれ飲み物を置いて話を続ける。

「犯人を追いつめながらも取り逃がすなんて首都航空隊の魔導士としてあるまじき失態で、たとえ死んでも取り押さえるべきだったとか。もっと直球に任務を失敗するような役立たずは・・・いらない・・とか」

エリオもキャロも悲しい話に辛い表情をしていた。サンは、腕を組みながら考えておりそして口を開いた。

「証明する、自分の兄、ティーダ・ランスターの死は無駄ではない。兄が教えてくれた魔法はどんな所でも役に立ち通用するって・・・ティアが頑張る理由はこんな所か？」

スバルは驚いた表情をする。どうやらサンの言ったことはあっていたようだ。

そして、再びティアナのことを話始める。

「そう。だから残された夢を、お兄さんが叶えられないで終わっちゃった執務官になるって夢を叶えるんだって・・・ティアがあんなに一生懸命で必死なのは、そのせいなんだよ」

スバルの話が終わる。しかし、サンにはいくつかの疑問があった。

それは、本当にそれだけなのか？と、いうことだ。

ホテル・アグスタの時に、副隊長とザフィーラの戦いを見ていた時のティアナはとても悔しそうな、妬ましいような表情をしていた。

その他にも、隊長達がサンを褒める時にたまに、才能という言葉を使って褒める時があった。
その言葉を聞いた時のティアナの顔がサンの脳裏に焼きつきだす。

【まさかあいつの無茶する理由って・・・】

スバルの話を聞いてから既に四時間がたっていた。
サンはティアナが練習に行きそうな場所を手当たり次第に回っていた。

「もう四時間も続けてるぜ。いい加減倒れるぞ」

ヴァイスの声が聞こえた。サンは声がした方に向かって行くと、ティアナとヴァイスの姿が見えた。ティアナの周りには射撃訓練用のスフィアが展開されていた。
サンは慌てて茂みに隠れる。理由は、ティアナの無茶する理由が自分の考えと一致するかどうか確認するためだ。

【しかしなあ～、なんで俺がこんな乙女みたいなことをしなくちゃいけないんだ?】

サンは自分の右手にある弁当箱を見ながら溜息をつく。

『カカカ、相棒の料理姿なかなか見物だったぞ』
『しかしマスターはいつ料理を覚えたのですか?二年の付き合いですがその間マスターが料理している所を見たことありませんし』

二人はティアナとヴァイスに気づかれないように小声で呟く。
だが、集中して二人の話を聞いていたサンは、リリとオーバーの言葉に無視して視線を二人に合わせる。

ヴァイスはティアナに無理をしない方が良いと注意するが、ティアナは再びヴァイスに背中を向け練習を始める。

「それでも詰め込んで練習しないと上手くなんないんです。凡人なもんで」

【やっぱティアの悩みの理由はそれだったか】

どうやらサンの考えがあたっていたようだ。

「俺からすればお前は十分優秀なんだがな～、うらやましいくれえだ」

ヴァイスなりの励ましなんだろうが、ティアナはそれに耳を向けずに練習を続ける。

「ま、邪魔する気はねえけどよ、お前等は体が資本なんだ、体調には気をつけろよ。そこの坊主もな」
「え？」

ティアナは自分とヴァイス以外にここに誰か居ると分からなかったようだ。練習を止め、ヴァイスの視線の方に自分も目を向ける。

「やっぱばれてたか」

その茂みの中からサンが出てきた。

「サン！？」

いきなりの登場に驚くティアナ。そして今日の被弾のことで気まずいのだろう、サンから視線をずらした。

「さ～て、じゃあ俺は退散するとしますか」

「あ！ちょっと」

サンと二人っきりになるのが嫌なせいか慌ててヴァイスを止めようとするが、すでに先居た場所にはいなかった。

・・・・・

しばらく沈黙が流れる。

「なあティア、ちょっとこっち来てくんない？食べて欲しい物があるんだけど」

ティアナが再び視線を移すと、地面にシートを被せて弁当箱を出していたサンの姿があった。

「あんた、怒ってないの？」

「別に・・・、もう今日みたいなことがないようにする為に練習してんだろ？もっとも、ヴァイスの言う通り無茶はだめだ。しかし、強情なお前がそう簡単に練習を止める訳がない・・・と思ってこれ

を作って来た訳だ」

なにもかも見透かされた回答に思わず固まってしまうが、すぐに納得した表情になりサンの隣に座った。

「サンってほんと五歳らしくないわね」

『同感です』

『俺もだ』

「うっせーよ。それよりとっとと食え。まだ練習するつもりなんだろ？」

三人の言葉を簡単に返し、弁当のふたを取る。

弁当の中身は、おにぎりに卵焼き、唐揚げと野菜が入った普通の弁当だった。しかし、五歳が作るには十分いや十二分に良い弁当だ。

「食べていいのよね？」

「お前の為に作ったんだ、遠慮なく食え」

ティアナは箸を持ち、卵焼きをつかみ、そのまま口に入れた。

「おいしい」

「そうだろ。疲れてると思って砂糖少し多めに入れといたんだ」

ありがと、とサンに礼を言ったティアナは次々とおかずを口に入れていく。

数分後には全部なくなっていた。

「腹が収まるまで少し話しないか？」

一刻も早く練習をしたかったティアナだが、サンの真剣な表情に負けてしまい、頷く。

「ティアは自分のことを凡人って思ってるらしいが、俺はそうは思わないぞ」

「何を言うかと思えば・・・あんたがそれを言う？」

ティアナは怒るというよりもあきれた声を出し、サンに言い返す。

「確かに俺が魔力値や変換物質のことで言ったらそう聞こえるかもしれないが、俺が言いたいのは、数値やランク、レアスキルに関係ない才能もあるってこと」

「なにが言いたい訳？」

ティアナにはサンの言葉の意味がいまいち分からないようだ。おそらく彼女が冷静な時でもこの質問の答えは見つからないだろう。人は一度思ったことは他人に言われない限り、なかなか気づいたり理解したりは出来ないのだから。

「この答えは母さんに聞け。それが一番納得できるはずだ」

サンはそう言って寮の方へ帰って行った。

サンがティアナに弁当を作った日から既に数週間がたった。

その間にティアナとスバルは普段の練習以外にも自主練習をしてい

た。
ハードな毎日にきつそうな表情をしながらも二人は頑張って続けている。
サンは、あの日から自主練習には関わらず、遠くから見ていた。

『マスター、ティアナさんを止めないのですか？』
『ケケケ、相棒、止めるんじゃなくて参加するルートもあるんだぜ』

二人がそれぞれの意見をサンに伝える。

「ティアは母さんと話をしていないようだな・・・」

が、またまた二人の言葉を無視して自分の思考に入る。

・・・・・・

「まあなんとかなるだろう」

結局結論はここにきてしまうサンであった

「さーてじゃあ午前中のまとめ２ｏｎ１で模擬戦やるよ。まずはスターズって言いたいけど、それじゃあ２ｏｎ１にならないから、悪いけどサンはあとでってことで」

なのはが空に浮きながら模擬戦のメンバーを決めた。

「はい」

サンがなのはに聞こえるのうに返事をする。

「じゃあスバルとティアナ、バリアジャケット準備して」

見学をするのはサン、エリオ、キャロ、ヴィータだ。
四人は、模擬戦の邪魔にならないように、遠くのビルの上に居た。
四人がビルについて少したつと、フェイトがやってきた。息を切らせていることから走ってきたことが分かる。

「あ、もう模擬戦始まっちゃてる？」
「私も手伝おうと思ったんでだけど・・・」

フェイトが自分も見れるようにとビルの手すりの近くに移動する。

「今はスターズの番」

ヴィータがフェイトに伝える。

「ほんとはスターズの模擬戦も私が引き受けようと思ったんだけどね」
「ああ、なのはもここんとこ訓練密度濃いからな。少し休まねえと」

フェイトの話にヴィータは納得した表情になり、なのはを見ながら心配の言葉を言う。

「なのは、部屋に戻ってからもずっとモニターに向かいっぱなしなんだよ。訓練メニュー作ったり、ビデオでみんなの陣形をチェックしたり・・」

「なのはさん訓練中もつも僕達のこと見ててくれるんですよね」
「ほんと、ずっと」
フェイトのなのはの頑張りの行動を言うと、エリオとキャロはうれしそうに一緒に呟く。
ヴィータはその言葉を聞いて少し口元を上げながらも今の状況を言った。
「お、クロスシフトだな」
なのはの方を見ていた四人はティアナの方に視線を移動するが、摸擬戦を見ることに集中していたサンの視線は移動されなかった。
「クロスファイアー、シュート！」
地上に居るティアナが、自分の周りに大量のスフィアを展開させ、上空に居るなのはに向かわせる。
そのスフィアはいつもと違ってキレがなかった。もちろんそのことにヴィータとフェイトも気がついた。
なのははそれを飛びながら回避する。
その前にウイングロードが現れる。なのははスバルが来ると思い、自分もいくつかのスフィアを展開させる。
「え？フェイクじゃない、本物？」
なのははあくまで念の為にスフィアを展開していたのだ。実際航空魔導士と空中でぶつかりあうなんてかなり危険な行為だ。
スフィアをスバルに撃つ。
「うぉおおお！」

スバルはそれをバリアで防ぐ、加速を使う等をして無理やりなのはに接近する。

「うりゃあああ！」

そのまま右手でストレートをする。

当然なのははそれを防いで、逆にはじき返す。

「ほら駄目だよスバル、そんな危ない軌道」

注意をしながらも、後ろから来るティアナの弾丸を回避する。

スバルはなんとか自分の使っていたウイングロードに着地した。

「すいません、でもちゃんと防ぎますから！」

いつもと違うスバルの返事にのなのはは違和感を持ちながらもティアナを確認しようと、視線を動かす。

すると、ビルの屋上から光る物が見えた。そこには集束魔法を使って砲撃をしようとしていたティアナの姿があった。

「砲撃？ティアナが？」

皆も不思議に思ったのだろう。ティアナはあまり集束魔法があまり得意ではないからだ。

「いや、あれはフェイクだな」

サンはいつもとは違う、真面目な声をしながら呟く。

［特訓成果、クロスシフトC行くわよスバル！」

スバルにだけ念話が聞こえる。
スバルは元気な声を出して返事をする。

そして、カートリッジロードを行い、先程なのはに接近した時よりも更にスピードを上げる。
なのははスバルを迎撃しようと、再びスフィアを展開し撃つ。スバルはそれを面積少ないウイングロードを最大限に活かし再びなのはに接近、またストレートを放つ。
なのははシールドを使い防ぐが、先よりも威力や踏ん張りが強いためはじき返せない。ティアナの砲撃を注意する為になのははビルに居るティアナを見る。
その瞬間ティアナが消えた。サンの言う通りあれはフェイクだったのだ。

「じゃあ本物のティアさんは？」

ビルに居る皆はティアナを探す。
ティアナが居た。

彼女はスバルの使ったウイングロードを走り、なのはの上に着くと、ウイングロードを蹴りなのはに急接近する。その手には銃から魔力刃が出ていた。接近を狙っているのだろう。

【バリアを切り裂いてフィールドを突き抜ける。一撃必殺！】
「てぁあああ」

「レイジングハート、モードリリース」

なのはがいつもの可愛い声とは違う、とても悲しいような怒っているような、なんとも不気味な声で呟く。

『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ』

レイジングハートはそれに従い、待機モードの赤いビー玉に戻る。

なのはとティアナが・・・激突した・・・

もの凄い爆風と、土煙が舞う。

「なのは！」

フェイトが心配の声を上げる。

土煙が晴れると、その中に居たのは・・・スバルの攻撃を左手で、ティアナの魔力刃での攻撃を右手で・・どちらも素手で受け止めているなのはが居た。

「おかしいな、二人共どうしちゃったのかな？」

いつもの優しい雰囲気とは余りにも違う、怒っている雰囲気に二人共動じてしまう。

「頑張ってるのは分かるけど、摸擬戦は喧嘩じゃないんだよ？練習の時だけ言うこと聞いてるふりで、本番でこんな無茶するんなら練習の意味ないじゃない・・・」

手から血が流れているが、それを気にせずに淡々と言葉を続ける。

「あ、あの」

その不気味な様子に動揺せずにはいられない二人。

「ねえ、私の訓練、そんなに間違ってる？」

しかし、ティアナは最後まで反発した。
魔力刃を消し、間合いを取る。

「それでも！私は、誰も失いたくないから！無くしたくないから！
だから・・・強くなりたいんです」

感情の爆発のせいか、なのはを攻撃しようとするティアナ。スバルは慌ててティアナを止めようと叫ぶが無理だった。

「少し・・・頭冷やそうか」

なのはの指から砲撃魔法が集束される。

「クロスファイアー―・・・」
「ファントムブレイ「シュート」」

ティアナの魔法が発動する前になのはが攻撃をする。

ドガガガーン

「ティア！」

スバルがティアナの方に向かおうとするが、なのはのバインドによって動きを止められた。

「よく見てなさい」

なのははそれだけを言って再び集束を始める。

その様子を見ていたサンは一つの行動をしようとしていた。

「父さん！俺をあそこまで急いで連れてって！」

フェイトを見上げ強い意志のある目で見る。

「でも、今回のことはあの二人が・・・」

フェイトは少し戸惑いながらも断る。

「母さんは誰よりも話し合いが大切だと思っている人だろ！その母さんがあんな行動に出ているんだ！家族が間違ったことをしている時に、それを正すのが家族の使命だろ！！」

サンの叫びを聞いてハッとしたフェイトは、すぐにサンを抱え飛び出した。ヴィータは止めようとしていたが、すでに二人はなのはの近くに居た。

「父さんはここまででいいよ。父さんは絶対に母さんを傷つけられないしな」
「ありがと。なのはのこと・・・ううん、三人のことお願いね」
五歳の息子に見透かされて、思わず笑ってしまう。

サンは飛び降りティアナの前に出た。

「シュート」

なのはの怒りの声が聞こえた。

ドガガガーン

再び爆音がなる。

「サン、どういうつもり？」

なのはの視線は、ティアナの前に居た、サンに向けられていた。

ティアナの理由（後書き）

投稿しているの親に見つかったら嫌だな～と思いながらも投稿しましたｗ

まあ見つかってもなんとかなるでしょうｗ

スターライト・ブレイカーVSスターライト・ブレイカー（前書き）

今回は二つの話に矛盾がないかどうかを調べる為に貯めてました。

もし矛盾点がありましたら感想にお願いします。今までの話でもかまいません。

スターライト・ブレイカーVSスターライト・ブレイカー

「サン、どういうつもり？」

なのはは、サンを睨む。

そのサンの目の前には氷の壁があった。

「ロンズーデーライトの盾」

どうやらこの氷の壁の名前のようだ。しかし、いくらリミッター付きとはいえ、なのはの砲撃を止めたのだ。かなりの硬さだと言える。

『カカカカ、相棒これからどうするつもりだ？まさか、お母上に勝つつもりか？』

相変わらずいつものふざけた感じのしゃべり方で話かけてくる。

「勝つのは無理だと思うが、母さんの頭を冷やすことはできると思うしな」

オーバーに答えるのと同時になのはにも聞こえるように話す。

「私の頭を冷やす？ティアナじゃなくて？」

なのはは文字通り光の無い目でサンを睨む。神経の太いサンでも、かなりきついようだ。かすかに体が震えている。

「そうだ、いつもの母さんなら一発はともかく二発目はやらないだろ？かりにやるとしても、それはティアナの話を聞いた後だ」

「サンはティアナの味方をするの？それにフェイトちゃんも・・・」

なのはは、上空に居るフェイトを見る。その目はとても悲しそうな目だった。

「父さんは母さんの味方に決まってんだろ。俺が無茶言ってここまで送ってもらったんだよ」

サンはフェイトに矛先が向かわないようにした。

「そう。ということは、サンはティアナの味方なんだね・・・サンも少し頭冷やそうか」

再びレイジングハートを杖状にしてサンに向ける。

「ハァ、まさかここまで怒っているとはな・・・いいぜ、二年ぶりの親子喧嘩だ！」

サンもそれに答え、リリとオーバーを構える。

両者に緊張の空気が流れる。

最初に出たのはなのはだった。

ウイングロードから離れ、上空に上がりスフィアを展開しようとする。

しかし、サンもそう簡単にはやらせない。魔法陣の足場をいくつか作り、それに飛び移りながらなのはにマシンガンを連射する。

が、一発一発の威力が弱い弾丸は、装甲の厚いなのはには全くの無意味だった。手を使わずにシールドを張りそれだけで防いだ。

「ディバイン・・シュート」

先の戦いで使っていたスフィアより、かなり動きが早く魔力値も大きかった。それを足場の少ないサンに撃つ。
スフィアは確実に当てる為に四方八方から来た。
だがサンは逆にその攻撃方法を利用した。

「カートリッジロード。ダウンバースト」

サンは一気になのはに向かって飛ぶ。なのはの直線状から来るスフィアは数個しかなかったので、かわすのにはそれほど負担がかからなかった。

「悪いが一発は入れさせてもらう」

ダウンバーストを使ってないオーバーを剣にして水の魔力変換物質を流す。
しかし、サンの考えは甘かった。突然サンの体に桃色の輪が締め付けられる。

「設置型バインド!?」

設置型バインド・・・一定の座標に見えないバインドの種を設置。そこに誰かが来れば自動的にバインドが出せるという、一見便利そうに見えるがかなりの読みが必要となる魔法だ。
サンは正直なのはを見くびっていた。熱くなったなのはがここまで計算しているとは思わなかったのだ。

「サン・・・いつもならもっと冷静なのに・・・だから頭冷やそう、

ディバインバスター！」

なのはの砲撃がサンを飲み込んだ・・・・と思った瞬間にサンが消えた。

「あいにく空飛ぶ相手にそんな直球には行かないんでね！」

なのはの後ろから、サンの声が聞こえる。そうさっきのサンはシルエットだったのだ。

「雷神装。振動する純水」

サンが一気に二つの魔法を使う。そして落下の力も使ってなのはに斬りかかる。

「う、・・・まだ！」

ダメージを受けたが当然それで終わるなのはではない、先程のディバインシューターをサンに向かわせた。

「まだだ、ダウンバースト」

今度はなのはに向けて発射する。なのはが爆風にひるむと同時に、自分も移動できるという良い使い方だ。

「ック」

サンの戦い方に思わず声を出してしまう。サンの戦いの映像を見たことは何度もあったが、実際に戦うとここまでやりにくい相手と改めて思い知らされた。

そこでなのはは一つの作戦に出た。それは高速で移動しサンを惑わしながら戦う方法だ。今までも確かに空に居たが高速戦闘ではなかった。

『フラッシュムーブ』

レイジングハートが魔法名を言うと、なのはの靴に羽が生え、一気にスピードが上がった。
そして、移動しながら魔法陣の上に居るサンに向かって魔法弾を発射する。
当然サンは別の場所に魔法陣を出し回避する。しかし、読まれていたのか移った瞬間に魔法弾が来た。

「ガァァーー」

吹き飛ばされるが、何とか足場を作り受け身を取るが、次の瞬間にまた魔法弾が来た。

そこからは一方的だった。
高速で移動するなのはについていけないサンは次々とダメージを受けていく。
サンの姿は、体もバリアジャケットもボロボロになりなっている。
バリアジャケットがここまでボロボロになるのは、よほどダメージを受けない限り不可能だ。
だが、それでもサンは立ち上がった。そして、その顔は笑っている。

「どうして、サンは、そこまで、する、の？」

だんだん冷静になってきたのか、なのはは悲しそうな顔をする。その目には涙があった。

「私は悪くないのに！無茶して欲しくなかっただけなのに！サンは私の教導の意味を知ってるのに！どうしてそこまでしてティアナをかばうの！？」

なのはは思わず叫んでしまう。自分の息子が自分の理念の邪魔をして、それを自分が止めようとする。こんな辛い物はそうはないだろう。

「まず一つ目！母さんは確かに悪くないが、ティアナの話を聞こうとしなかった！　二つ目！ティアナにも悩みがあった、俺や母さんには分からない悩みがな！　三つ目！これは俺自身への罰でもある！」

なのはの心の叫びを一つずつ反論する。

「罰？」

冷静になってきたなのはにはなんとなく一つ目と二つ目のことは分かったが三つ目のことだけは分からなかったようだ。

「俺は、母さんの教導の意味もティアナの悩みも知っていた！だが下手に理論づけて二人に話し合いをさせなかった。この出来事が起こったのは俺の責任・・・これが罰だ！」

サンの言葉になのははついに泣き、そして怒る。

「サンはまだ五歳なんだよ！？どうしてそこまで自分に厳しくする

の！？」

今までの疑問が爆発した。そうだ、今までもずっと思っていた。どうしてサンがここまで頑張るのかを、魔法の訓練をする時も、リニアレールの時も、スバルをかばった時も、そして今も！

「どうして！？」

「守りたい奴を守る。それじゃあ理由になんねえのか？」

いつものふざけた口調で笑いながら言う。
そのことを聞いて思わず動揺してしまうなのは。

「俺は母さんの息子・・・不屈のエースオブエースの息子だ！あんたの子供って胸はってこの世界で生きたいんだよ！」

サンの頭に前世のことがよみがえる。

あんなくだらない親。
あんなくだらない仲間。
あんなくだらない世界。
あんなくだらない自分。

【それをこの世界で・・・】

万年バカップルだか自分のことを考えてくれる親。
一緒に笑ってくれる仲間。
頼りないが、優しい兄と姉。
ずっと求めていた非日常がある世界。
そして、天才として産まれた自分。

【この世界で・・・】

「頑張らねえで、いつ頑張んだ！」
「これが理由だ！」

サンが心から叫びを上げる。

「後悔しないの？自分が魔法を・・ううん。普通の生活までもができなくなっても！？」
「それは理由にもよるが、守りたい奴を守ってそうなったんなら、後悔はしない」

体はボロボロだが、母親譲りの強い心は折れないようだ。
サンは魔法陣を思い切って踏む。

「母さん、もし良かったら俺の全力全開受けて欲しいんだが」

サンはいつものように笑いながら、リリとオーバーを銃にして構える。

「いいよ。その代わり、私も全力全開で行くよ」

なのはも疑問や迷いが無くなりふっきれたのか、いつもの笑顔だ。

「いくよ」「いくぞ」
「「これが俺（私）の全力全開！」」

両者の前に大量の魔力が集まっていく。

「「スターライト・ブレイカー―！」」

二人が叫ぶと、今まで集めていた魔力が一気に放出された。

ドドドドドドド

白色と桃色の砲撃がお互いを飲み込もうとしている。

やはり不利なのはサンだった。魔力の量は五分五分だが、経験と今までくらったダメージが違いすぎたのだ。

桃色が白色を押し始めた。

「だったら・・・リリ、カートリッジロード！」

『マスター？一体何を？』

『カカカ、俺はしなくて良いのか？』

「リリ、早くしろ。オーバーはスターライト・ブレイカーの維持に集中しろ！」

『分かりました』

リリがカートリッジした瞬間、オーバーを後ろに持っていく。

「『な！？』」

この戦いを関係している全員が驚く。

『マスター、なにを考えて！？』

『さすがの俺もびっくりだぞ、カカ』

二人がそれぞれ意見を言うがサンはそんなことは気にせずに、カートリッジの魔力をリリに与え、オーバーの銃口に魔力を集束し始めた。
当然火力が弱まったのでどんどん押され始める。

「ぐぎぎぎぎ」

サンは声を上げ踏ん張る。

「サン！まだやるつもり？」

なのはが居る方から声がする。
サンは当然と答え、再び集中する

「威力ブースト強化陣・・展開！！」

更に魔法を使った。
身体能力強化、足場の魔法陣、集束魔法、強化陣、そしてスターライト・ブレイカー。
これらのことを一辺にしているのだ。いくらデバイスが二機いるからといってもやはり脳に負担がかかる。
しかし、サンは弱音を吐かずに、全ての魔法に神経を使って集中する。
強化陣を使ったので、押されるスピードが少し遅くなる。

5・・4・・3・・2・・1・・

「今だ！！」

「スターライト・ブレイカー―Ｖｅｒ我支砲（がしほう）」

サンの後ろにあったオーバーからスターライト・ブレイカー―が発射された。

「嘘！？」

余りの意外な使い方に思わず声を上げてしまう。

スターライト・ブレイカー―の支えを受けた白色のスターライト・ブレイカー―は桃色のスターライト・ブレイカー―をどんどん押し返す。

なのはも出力を上げようとするが、スターライト・ブレイカー―に支えられたスターライト・ブレイカー―を押し返すのは無理だったようだ。

ドガガガガーン

サンのスターライト・ブレイカー―がなのはに激突した。

なのはは気を失っているのか、体が動かないのかどちらか分からないが、落下していく。

「母さん！」

サンは、なのはを受け止めようと体を動かそうとするが、体が全く動かない。

しかし、サンの心配はすぐになくなっていた。
何故なら既に、そこにはフェイトが横たわっているなのはを両腕で抱えていたからだ。いわゆるお姫様抱っこというやつだ。
その様子を見てサンは・・・

【相変わらず父さんは天然のタラシだよな】

と、くだらないことを考えながら、思考を闇に落とした。

スターライト・ブレイカーVSスターライト・ブレイカー（後書き）

主人公がだんだんチートになってきましたw

一応練習（シグナムとの模擬戦）の成果です。
これでまだブラックボックスがあります。
それと、中二技考えてます。何かこれいいいな、と思う技がありましたら感想にお願いします。

なのはの理由（前書き）

今回は作者が好きな回でもあり、前の方の回を閉める大事な回なので、少し長いです。

原作の所の話は飛ばしてもらってもかまいません。

なのはの理由

「またこの天井かよ・・・」

サンの目が覚めてからの第一一声はこれだった。サンは、自分が何故ここに居るのか、何故眠っていたのか・・その記憶はあったし、すぐに状況を理解していた。

「もう目が覚めたの!?」

驚きの声が聞こえる。この天井でこのお姉さんボイスといえば、一人しかいない。

「あれから何時間たったんですか?シャマルさん」

ぼーとしている声と言ったら一番分かりやすいだろう。いつものサンには考えられないくらい覇気のない声だった。

「一応八時ちょっと前よ」

「はあ?八時って十分寝すぎ　イテッ」

サンは今の時間に驚き慌てて起き上がろうとするが、激しい頭痛と体の痛みに、頭と体の一部分を手で押さえる。

「あなたのくらったダメージや、使った魔法量、脳の負担とか計算したらほんとは早くても四明後日だったのよ」

シャマルがホテル・アグスタの時と同じような信じられない物を見る目で、サンに伝える。

「まあ早く起きて損することはないですし。そんなことよりティアはどこ　って　うお！」

なんとか首を動かして辺りを見たら、ティアナの姿があった。しかし問題があった。ティアナの格好が上の薄着一枚と下着一枚だけだった。

「あなた五歳児でしょ。そんな反応しなくても・・・」

「色々駄目なんですって！」

シャマルは、今度は不思議そうな目でサンを見た。サンはシャマルの言葉に慌てて反論する。

「ハァ、俺部屋に帰ります」

痛む体と頭を押さえながら立つ。

「だ～め。ほら、見えないようにするから今日は寝てなさい」

シャマルがサンを無理やりベッドに押さえつける。その後、ティアナのベッドとの間にカーテンを引いた。

「それと、暇つぶしの相手」

そう言って、待機状のリリとオーバーをサンの顔の横に置く。

そして、再び自分の持ち場に戻って行った。

『カカカ、良いお目覚めかな？相棒』

「最悪に決まってんだろ。あ、そういえば母さんはどうしてる？」

オーバーの言葉に雑に返して、なのはのことを聞く。

『お母様ならあの後すぐに目が覚めました。どうやら気絶していたのは一瞬のようです』

「そうか・・・」

そのことを聞きかすかに喜ぶサン。かすかな理由は、自分のスターライト・ブレイカーの威力がそんなになかったと思い知らされたからだ。

その様子に気づいたリリはこう言う。

『あの時のマスターのスターライト・ブレイカーは出力が優先でしたから、威力が多少落ちても無理はありません。むしろ、あのお母様を気絶させたんですから喜ぶべきです』

「サンキューな」

リリの励ましにサンは少し元気が出たようだ。さっきの顔よりも何処となく良い。

ウィイン

「失礼します」

女の子の声が聞こえる。この声は・・・

「サン大丈夫？」

キャロだ。

キャロは自分がサンに見えるように移動しながら、心配の声をかける。

「まあなんとかな・・・見舞いありがとな姉さん」

「うん。あんまりサンにお姉さんらしいことしてあげてなかったから、少しフェイトさんに我がまま言って来ちゃったんだ」

キャロが我がままを言うとは珍しいことだ。今までキャロが誰かに頼み事をした回数なんて、戦闘でのことを入れなかったら片手で数えられるくらいだ。そのキャロがフェイトに我がまま言ってまで見舞いに来てくれた・・・そのことにサンはうれしさを感じていた。

「なにか私にできることないかな？」

急にキャロが言ってきた。いきなり言われても困るので、ここは考えずに王道に言った。

「じゃあ、りんごの皮剥いてくんない？」

［マスターはいつもりんごの皮も一緒に食べるのが多くないですか？栄養があるとかと言って］

［うっせーな。姉さんに姉さんらしいことさせたいんだよ］

リリがキャロに気づかれないように念話で言ってきた。サンはそれに、キャロの今の気持ちを理解して、キャロの考えを実行させやりたいとリリに言い返す。

［姉さんに姉さんらしいことって、カカカ、相変わらず相棒は面白いな］

「痛っ」

キャロの声が聞こえた。慌ててそちらを見ると、キャロが果物ナイフで手を切った跡が見えた。

「えとえと、ど、どうすればいいんだろう？」

キャロは血を見たせいかパニックになり、切った右手をもの凄い勢いで振っていた。

「ヒーリング使えばいいだろ。第一ここ医務室だし」

・・・・・

微妙な沈黙が流れる。

「そ、そうだね」

そう言ってキャロは怪我した右手に左手を当てヒーリングを始めた。サンはキャロのヒーリングが終わるまで無言だった。別に話しても、いつものキャロならヒーリングに集中できるが、今は少し動揺しているから下手に話さない方が良いと判断したのだ。

「姉さん、なんか落ち着きがないみたいだが大丈夫か？」

キャロのヒーリングが終わったのを見計らってサンは声をかける。

「うん、大丈夫。ごめんね、かっこ悪い所見せちゃって」

「いやいいんだ。りんご食いたいからくれ」

キャロは少し戸惑いながらもサン渡す。サンが受け取った瞬間、サンの手からりんごが落ちた。手に力が入らないのだろう。

キャロは落ちたりんごを拾い、自分の持っているハンカチを出してりんごを拭いた。まだほとんど？いてなかったので、清潔面では大丈夫だろう。

「大丈夫。今度はやれるから」

そう言っては再び皮を切り始めた。途中何回も手を斬ることがあったがキャロはそれを気にせずに集中する。
しばらく時間がたった。

「できたー」

キャロのうれしそうな声が聞こえた。無事に皮を斬れたのだろう。
キャロはそのナイフを使ってりんごを一口サイズに斬る。そしてそれを皿にのせた。

「サンできたよ。わたし自分一人で！」
「サンキュー。じゃあ遠慮な　イッテ」

サンが手を伸ばそうとした瞬間に今度は手に痛みが走った。

「大丈夫サン？」

キャロが心配してきたのでサンは首をかすかに縦に動かして答える。

【このままじゃあサンがりんごを食べられなくなっちゃう。なんとかしないと・・・・そうだ！】

キャロは何か良い案が出たようだ。
キャロは、そこにあるフォークを持ちりんごに刺す。そしてそれを

サンの口の近くまで持っていく。

「サン。はいアーン」

キャロの行動に少し動揺したが、自分達は姉弟だから別に変なことじゃないことに気づく。

「アーン」

サンもキャロと同じことを言い、りんごを口に収める。そして噛み、飲み込んだ。

「どう？おいしい？」

キャロが不安そうな顔をしている。仮にまずくてもそれはキャロのせいでは無い。それなのに、未だに不安そうな顔をしているキャロ。サンはそのことが可笑しく思い、笑ってしまう。

「ククック」

「え？私なにか駄目だった？」

急に笑い出したサンを見てキャロは、自分が何か失敗したと思ってしまった。

「心配するなよ姉さん。美味かったよ」

落ち込んでいたキャロの顔がサンの言葉を聞いて急に元気になった。パァーという表現が一番合っている顔だ。

「サン、まだあるからね、遠慮しないでね」

「じゃあもう一口」

キャロの言葉に甘え、サンは再びりんごを食べさせてもらおうとする。

「アーン」

「アーン」

後はこれの繰り返しだった。

りんごがなくなると、二人はすることがなくなってしまった。

【えーと、なんとかサンにお姉ちゃんらいしい所見せたいんだけど・・・どうすればいいんだろう?】

キャロが悩んでる一方サンも悩んでいた。

【なんとか姉さんに姉さんらしいことさせたいんだがいったい何があるんだ?】

[相棒、膝枕なんか頼んだらどうだ?]

[あなたと同意見なのは癪ですが、たしかに良い意見だとおもいます]

二人から念話が来る。サンは確かに良いなと思い、すぐに実行した。

「姉さん、ちょっと膝枕してくれない?なんかこの枕寝心地が悪くてさ」

前世の記憶があるのに、九歳の少女に膝枕を頼むなんてなかなかできないことだろう。しかし、サンは全く気にしてないみたいだ。

「うん」

キャロは今日何度目か分からないうれしそうな声を出して、ベッドにちょこんと座った。
サンはキャロに膝枕をしてもらう為に体を少しずつキャロに接近させた。

「それじゃあ遠慮なく・・・」

そう言ってキャロの膝に頭をのせる。

・・・・・・・

しばらく沈黙が流れる。

そしてキャロが口を開く。

「サンが言ってた守りたい奴に、私やエリオ君は入っているの？」

少し緊張した表情をしている。違うと言われることを覚悟しているからだろう。
しかし、サンはあっさりとキャロの不安を解いた。

「そんなの当たり前に決まってんだろ。兄さんも姉さんも大事な兄弟だ。守りたい奴に入って当然だろ」

サンの言葉にキャロの返す言葉は決まっていた。

「ありがとう」

サンが今まで見た中で、最高の笑顔だった。

その隣のベッドでティアナが目を覚ました。

「あれ？」

とりあいず起き上がりここが何処なのかを確認しようとする。

ウィイン

ドアが開いた。入ってきたのはシャマルだった。

「あら、ティアナ起きた？」

シャマルはそのままティアナの近くまで歩く。

「シャマル先生。えっと、え？」

ティアナはいまいち状況が把握できてないようだ。それが分かったシャマルはティアナに説明する。

「ここは医務室ね。昼間の摸擬戦で撃墜されちゃったのは覚えてる？」

摸擬戦という言葉を聞き落ち込むティアナ。そして、もう一つ、自

分が気絶する前に見たサンの姿・・・結局あの後どうなったかをティアナは知らない。

「あの後どうなったんですか？サンは今どこに・・」
「あの後サンとなのはちゃんの摸擬戦・・なのかな？まあ二人は戦ったんだ。結果は相討ち。なのはちゃんのダメージは少なかったから今は働いているわ。サンは・・・ここ」

そう言ってカーテンをおもいっきり引く。
そこには、キャロに膝枕されているサンの姿があった。

「うお！？」
「きゃ？」

急にカーテンが開かれた為驚く二人。
そして、その様子を見ていたシャマルが言うことは決まっていた。

「二人ってもしかして付き合ってるの？」

何が嬉しいのか分からないが、何故か嬉しそうな声だ。まあおそらく、子供同士のカップルは微笑ましいからだろう。
そのことを言われた二人は、シャマルの期待に全く答えず、淡々と返した。

「別に私達は付き合ってませんよ。姉弟として触れ合ってたんです」
「そうそう。俺は姉さんに甘えていただけだからな」

すると、話の内容を全く無視してティアナが割り込んで来た。

「サン、あんた大丈夫なの！？」

ティアナは自分の格好を全く気にせず、というより気づいてなにのだろう。横になっているサンに近づこうとする。

「ティア、ストップ！ストップ！」

急な叫び声に思わずティアナは立ち止まる。

「とりあいず服来てくれ」

サンは視線をティアナからずらしながら言う。その顔は少し赤い。サンの言葉を聞いてティアナも自分の姿を確認する。

・・・・・・

「～～～／／／」

ティアナは声にならない叫びを上げて思いっきりカーテンを引いた。

訓練場のすぐ目の前になのはがいた。

彼女は、シュミレーターのチェックを終えた所だった。

コツコツ

後ろから足音が聞こえる。なのはが振り返るとそこにはフェイトが居た。

「フェイトちゃん」

二人は隊舎に歩きながら向かっていた。

「さっきティアナが目を覚ましてね、スバルと一緒にオフィスに謝りに来てたよ」

「そう」

「なのはは訓練場だから、明日朝一で話したらって伝えちゃったんだけど」

フェイトがなのはの方を見つめながら言う。

「うん。ありがとう」

「スバルとティアナどんな感じだった？」

やはり気になるようだ。同じ部隊の部下でもあり弟子でもあるんだ。これから先ずっと気まずい関係は嫌だろう。

「やっぱり、まだちょっとご機嫌斜めだったかな」

「でもごめんね、監督不行き届きで、フェイトちゃんやライトニングの二人まで巻き込んじゃって。それにサンも・・・」

「私はなのはが何をしても何があっても味方だから」

フェイトは、なのは殺しスマイルでほほ笑む。

「それにサンも凄く満足した表情だったし、ティアナとスバルに明日話せば全て解決するよ」

「うん／／ありがとうフェイトちゃん。大好きだよ／／」

そう言ってフェイトに抱きついた。

ウーウーウーウー

機動六課にアラートがなった。

そのすぐ後に、隊長陣は通信室に集まり、ロングアーチスタッフの報告を聞いていた。

「航空二型四機編隊が三隊、十二機編隊が一隊」

「発見時から変わらず、それぞれ別の定演軌道で旋回しています」

「場所は何にもない海上、レリックの反応もなければ、付近には海上施設も船もない」

はやてが今までの報告を頭でまとめていく。

「まるで撃ち落としに来いと言っているような」

隣に居るグリフィスが呟く。まあそう思わない方が逆に変であう。

はやてもそれに納得する。そして、少し離れた場所に居るフェイトに意見を聞く。

「犯人がスカリエッティならこちらの動きとか航空戦力を探りたいんだと思う」

フェイトが自分の意見を言う。なかなかの説得力だ。

「この状況ならこっちは超長距離攻撃を放り込めば済む訳やし」
「一撃でクリアですよ～」
超長距離攻撃・・・はやてが得意とする魔法だ。もしこの作戦で行くとしたら、間違いなく部隊長のはやてが出撃することになるだろう。
「うん。でもだからこそ、奥の手は見せない方がいいかなって」
再び自分の意見を言うフェイト。
「まー実際この程度のことで隊長達のリミッター解除って訳にもいかへんしな。高町教導官はどうやろう？」
はやてが、色々悩みながらもなのはに聞く。たくさんの意見を出し合うだけで、かなり作戦内容が変わったり、決まったりすることがある。なるべく多くの人に聞くのは良いことだ。
「こっちの戦力調査が目的なら、なるべく新しい情報を出さずに今までと同じやり方でかたずけちゃう、かな」
なのはの意見を聞き、はやてとグリフィスは互いを見て頷きあった。
「それで行こう」

スバル、ティアナ、エリオ、キャロは隊長達の見送りをしていた。
今回のガジェットは航空型で、陸戦魔導士の四人は出てもしかたないからだ。今のサンに関しては論外と言える。

「今回は空戦だから出撃は私とフェイト隊長ヴィータ副隊長の三人」
「みんなはロビーで出動待機ね」

なのはとフェイトが今回の戦いの内容とＦＷ陣への指示をだす。

「そっちの指揮はシグナムだ。留守を頼んだぞ」

ヴィータがいい顔で四人に言う。信頼している証拠だ。

「「はい」」
「はい」

スバル、エリオ、キャロの返事の少し後にティアナも返事をする。
しかし、その声は余りにも元気がない。未だに落ち込んでいるのだろう。
その様子になのはが気づかない訳がなかった。

「ああ、それからティアナ。ティアナは出動待機から外れとこうか」

その言葉に周りの空気が変わった。納得するもの、落ち込んでいるもの、心配するもの、納得いかないもの。

「そのほうがいいな、そうしとけ」

ヴィータもなのはの命令に上乗せする言葉を言う。

「今夜は体調も魔力もベストじゃないだろうし・・・」
「言うことを聞かない奴は使えないってことですか？」

下を向きながら、納得いかない声で呟く。
さすがのなのはも少し呆れたようだ。それは、今日の摸擬戦の時の自分に呆れた時と同じ感じだった。少し冷静になればすぐ分かること・・・しかし、それが分からない。まさに数時間前の自分と同じ姿だ。

「自分で言ってて気づかないかな？当たり前のことだよ、それ」
「現場での指示や命令は聞いています。教導だってちゃんとさぼらずやってます」

ヴィータがティアナを止めようと前に出るがなのはが腕を使い、ヴィータの道を遮る。

「それ以外の場所での努力まで教えられた通りじゃないと駄目なんですか？私は、なのはさん達みたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能も、キャロみたいなレアスキルもない。少しくらい無茶したって死ぬ気でやらなきゃ強くなんてなれないじゃないですか！」

その言葉を聞いて思わず隣に居たシグナムはティアナの襟をつかんだ。
そして、右のこぶしをティアナに・・・

「待って下さいシグナムさん！」

なのはが叫んでシグナムを止める。

「高町!?何故だ、こいつはお前の教導を・・・」

なのはの教導を批判したティアナを、なのはが助けたのだ。当然シグナムは驚く。

「ティアナ、私が帰ったらゆっくりお話しよう。ティアナの思いも、私の教導の意味も、お互い全部話し合おう」

なのははティアナの目をまっすぐ見ながらゆっくりとはっきりと答える。

「ヴァイス君、もう出られるね」
「乗り込んでくれればすぐにでも」

なのははそれ以外のことは何も言わずにヘリに乗り込んだ。フェイト、ヴィータも一緒にだ。

そして、ヘリは飛んで行った。

「まったく。何故高町はこんな馬鹿を許したのだ?」

シグナムが睨みつけながら言う。

「あのシグナム副隊長その辺で」
「お二人共一旦ロビーに・・・」

エリオはシグナムを止めようと。キャロはティアナと彼女を支えているスバルにそれぞれ言う。

「シグナム副隊長！」

スバルがシグナムの前にでて少し大きい声で話す。

「命令違反は絶対駄目だし、さっきのティアの物言いや、それを止められなかったあたしは確かに駄目だったと思います。だけど、自分なりに強くなろうとするのとか！きつい状況でも何とかしようと頑張るのって！そんなにいけないことなんでしょうか！？」

スバルは心の叫びを言う。何故なのはがあそこまで怒ったのか？何故ティアナは
頑張ったのにこんな仕打ちをされないといけないのか？そんな疑問が一気に爆発していく。

「自分なりの努力とかそういうこともやっちゃいけないんでしょうか！？」
「・・・・」

スバルの叫びにシグナムはなにも答えない。
その時声が聞こえた。

「自主練習はいいことだし、強くなる為の努力もすごく良いことだよ」

後ろを振り返るとシャーリーがいた。

「シャーリーさん」
「持ち場はどうした？」

シグナムが聞く。シャーリーはロングアーチスタッフだ。今は、な

のは達のオペレートをしなければならない。

「メインオペレートはリィン曹長が居てくれますから。なんかもう皆不器用で見てられなくて。皆ロビーに集まって、私が説明するから。なのはさんのことと、なのはさんの教導の意味・・・」

一方サンは未だにベッドで寝ていた。

「お前等任務の内容分からないのか？」

アラートが聞こえたのに全く任務の内容が分からなくて、そわそわしているのだ。

『はい。皆さん今のマスターに教えても、休養の妨げになるかもしれないと言って』

『カカカ、相棒思われているじゃねえか』

「リリはあんがと。オーバーお前うざいぞ」

リリにお礼を、オーバーにツッコミを入れて、これからどうしようか考える。

「シャマルさ～ん」

とりあいず、医務室から出たかったのでシャマルを呼ぶ。

『ケケケ、さっきのお姉さんならどっか行っちまったぜ』

「まじかよ。まあ自分で何とかするわ」

そう言って、ベッドから降りる。体が悲鳴を上げているが、外に出たいという気持ちが強い為、体の声を無視して歩きだした。

「お、いい物あるじゃねえか」

サンの視線の先には二つの松葉杖があった。大きさも、サンにぴったりだ。おそらくシャマルが用意してくれていたのだろう。
サンはそれを使い、先程よりも少し速く歩きだした。

ロビーに行くと、ＦＷメンバーとシグナム、シャマル、シャーリーがソファーに座って居た。
その間には、モニターが出ていて何かの映像が流れていた。
サンは何かと思い近づいてみると、モニターの映像を見る前に、話の内容でそれを理解した。
それは、なのはの過去だった。サンは呆れ、話を止める。

「はいそこまで～」

その声に惹かれ、視線が一気にサンに集まる。

「「サン！？」」
「何してるの！？今日は安静にって」

シャマルが怒った声で言う。しかしそれを無視して、自分の意見を言い始める。

「スバル、ティアナ、兄さん、姉さんは知らないから除外。シグナ

ムさんがこんなこと言い始める訳ないから除外。シャマルさんはどちらかと言うと、第三者として見守ることが多いから除外。と、いうことで話始めたのはシャーリーだな」

皆、サンの推理に驚いた。

「シャーリー、この話は母さんが帰って来たらだ。おそらく任務で居ないんだろ？」

「でも！皆余りにも不器用で・・・ほっとけなくて！」

サンの言葉に思わず叫んでしまうシャーリー。全てを知っているのにそれを伝えられない辛さはサンも良く知っていた。

「シグナムさん、母さんはティアに何か言ってましたか？」

シャーリーの言葉を一旦置いてサンはシグナムに聞く。

「ティアナと話をすると言っていた」

それを聞いたサンは、いつもの母さんだなと、思い安心する。

「じゃあ母さんが帰ってくるまで待とうじゃねぇか。本人から聞いた方が説得力あるし、ティアも自分の思いを伝えやすいだろ」

「でも・・・」

「シャーリーのしたことは間違ってないが、最後まで待てよ。いつもはもっと気長だろ？メカニックのシャーリーさん」

サンの少し馬鹿にした、しかし説得力のある言葉に反論できなくなるシャーリー。

「確かにサンの言う通りね」
「私も少し急ぎすぎたようだな」

シャマルとシグナムも納得したようだ。
二人の納得にシャーリーは余り納得いかないようだ。

「シャーリー。お前は仕事に戻って母さん達を早くここに戻してこい。それがお前の今すべきことだ！」

サンの言葉にシャーリーはハッとした表情になり、一礼して慌てて走って行った。
そしてサンはソファーにゆっくりと座る。そして、スバル、ティアナ、エリオ、キャロに向き合う。

「悪かったな、色々と」
「どうして謝るの？」
「母さんの教導の意味を知っていたのに、それを伝えようとしなかったこと・・・かな？」

何故か最後が疑問形だが、皆には伝わったようだ。

「ううん、僕は全然。サンのことだから何か考えがあったんでしょ？」
「私もそう思うから」

エリオとキャロはサンに返事をする。
しかし、スバルとティアナは無言だ。

・・・・・・・・・

しばらくの沈黙と時間が流れた。

「どうやら帰って来たようだぞ」

シグナムの凛とした声が聞こえる。
皆もシグナムの視線と同じ所を見ると、なのはとフェイトがこちらに歩いて来るのが見えた。

「ごめんね待たせちゃって」
「「いえ」」

スバル、エリオ、キャロが返事をする。

「まあ、前置きは後にして私の教導の意味を教えるね」

昔の私はね、本当に普通の女の子で魔法なんて知りもしなかったし、戦いなんてしたりもしなかった。、友達と一緒に学校に行って、家族と一緒に幸せに暮らして、そういう一生を送るはずだったんだ。
だけど、事件が起こったの。魔法学校に通っている訳でもなければ、特別なスキルがあった訳でもない。偶然の出会いで魔法を得て、たまたま魔力値が多かっただけだった。
その時はまだ九歳で、魔法と出会ってからわずか数カ月で、命がけの実践を繰り返した。

その時の映像が流れる。映像の内容は、小さい頃のなのはとフェイトが戦っていた。

「これ・・」
「フェイトさん?」

四人は二人が戦っているのを見て、思わず目を開く。

「私は当時、家族環境が複雑だったんだ。それであるロストロギアをめぐって、私となのはは敵同士だった」

「この事件の中心人物はテスタロッサの母、その名を取ってプレシア・テスタロッサ事件、あるいはジュエルシード事件と呼ばれている」

流れている映像には、なのはが集束魔法を使った砲撃をしていた。

「集束砲？こんな大きな」

「九歳の女の子が・・・」

エリオとスバルはそれぞれ驚きの声と、少し悲しい声を上げる。自ら選んだ戦いではないのに、これ程無茶をしている映像を見ているので、自然とそういう声が出てしまったのだろう。

「ただでさえ、大威力砲撃は体に負担がかかるのに・・・」

それを聞いて一斉に視線がサンに集まる。

「俺は体が丈夫だからな、今のけがは砲撃魔法には余り関係ない。当時の母さんは本当に普通の子だったんだ」

それを聞いて少し安心するのと、映像の中の女の子への心配が強まる。

「その後もな・・・さほど時も置かず、戦いが始まった」

今度の映像は、ヴィータがなのはを襲っている。

「私達が深くかかわった、闇の書事件」

そして、なのはが負けたこと、それに打ち勝つための当時まだ安全せいの危ういカートリッジシステムの使用、そして自身の限界を超えるエクシードモードの使用、それらを説明していく。

「誰かを救いたかったから。自分の思いを通すための無茶を、私はしてしまった。そんなことをしていたら当然、体に負担が生じない訳がなかった」

「事故が起こったのは、入局二年目の冬。異世界での捜査任務の帰り、ヴィータや部隊の仲間達と一緒に出かけた場所・・・不意に現れた未確認体。いつものなのはなら、なんの問題もなく味方を守って落とせるはずだった相手。だけど、溜まっていたいた疲労、続けてきた無茶がなのはの動きを・・・僅かにだけ鈍らせた」

「その結果が・・・これ」

シャマルがリモコンを押すと、モニターの映像が変わった。映っていたのは、全身包帯に巻かれたなのはだった。

「「あぁ！」」

その姿を見て思わず声を上げてしまう、四人。

「なのはは、無茶して迷惑かけてごめんなさいって、ずっと言って・・・私の前でも笑っていた」

フェイトは顔をうつ向かせる。

「私は、もう飛べなくなるかもとか、立って歩くことさえ出来なくなるかも、って聞かされて凄く絶望し、臨んだ。もう一度・・もう一度だけ皆と一緒に飛ぶチャンスを下さいって、天に祈った・・・」

なのはのリハビリの様子が流れる。話の通り、立って歩くことさえ難しいようだ。

「で」

サンのいつもの声がする。

「その祈りに答えたのがこれ」

またモニターが変わり、一つの画像が出る。

それは・・・

「雫？」

誰の声か分からないくらいの小さな声が聞こえる。

「そうだ。これが高町を救ったロストロギア」

「神の雫」

サンとシグナムが言葉をつなげて話す。ロストロギアという言葉を聞いて四人は驚く。

「神の雫・・・発動者の願い事を叶える代わりに、新たな命を産まなくてはならないロストロギア」

このことを聞いて四人は全てが分かったのだろう。一斉にサンを向く。

「そうだ。俺はロストロギア、神の雫によって母さんの腹に宿った命・・・母さんの願いは再び父さんと飛ぶこと。しかし、何故俺が父さんの血を受け継いでいるのかは分からないが、今思うと、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンを想い過ぎていたから、だからかもしれないな」

今までの話とサンの生まれのことを聞いて、顔を下げるティアナ。

「無茶をしても、命をかけても譲れぬ戦いの場は確かにある。だがお前がミスショットをしたあの場面は自分の仲間の安全や命をかけてでも、どうしても撃たなければならない状況だったか？」

その声を聞いて目を開くティアナ。

「訓練中のあの技はいったい誰の為の、なんの為の技だ？」

・・・・・・

沈黙が流れる。

「ティアナ、少し私とお散歩しよっか？」

なのはがいつもの口調でティアナに言った。

「はい」

いいえと答えれるはずがなかった。

なのはとティアナは訓練場の前まで来た。二人は海岸の所で座っていた。
スバル、エリオ、キャロ、サン、シャーリーも気になったのかその後ろの茂みに隠れていた。

「すいませんでした」

ティアナが謝る。

「じゃあ分かってくれた所で、少ししかっとこうかな。あのね、ティアナは自分のこと凡人で射撃と幻術しかできないって言うけど、それ間違ってるからね。ティアナも他の皆も今はまだ原石の状態。でこぼこだらけだし本当の価値も分かりずらいけど・・・だけど磨いていく内にどんどん輝く部分が見えてくる」

なのはとティアナは顔を見合わせる。

「エリオはスピード、キャロは優しい支援魔法、スバルはクロスレンジの爆発力、サンはどんなポディションでもできるオールラウンダー。四人を指揮するティアナは射撃と幻術で仲間を守って、知恵と勇気でどんな状況でも切り抜ける。そんなチームが理想形でゆっくりだけどその形に近づいて行ってる」

「摸擬戦でさ、自分で受けてみて気づかなかった?ちゃんと使えばティアナの射撃魔法ってあんなによけにくて当たると痛いんだよ?」

「あ」

なのはが、クロスファイアーシュートを使ったのには、理由があったようだ。

「一番魅力的な所をないがしろにして、慌てて他の所をやろうとするから、だから危なっかしくなっちゃうんだよ、て、教えたかったんだけど」

そのことを聞いて再び落ち込むティアナ。

「でもティアナが考えたこと間違いじゃないんだよ」

そう言ってなのはは隣に置いてある、クロスミラージュを持ちシステムのロックを一部解除した。

「命令してみてモード2って」

クロスミラージュをティアナに渡す。

「モード、2」

ティアナが呟くと、クロスミラージュの形が僅かに変わり、銃口から魔力刃が出た。

「これ・・」

「ティアナは執務官希望だもんね。ここを出て執務官を目指したら、どうしても個人戦が多くなるし、将来を考えて用意はしてたんだ」

なのはの優しい思いと言葉にティアナの目から涙がこぼれ、口からは泣き声がこぼれる。

なのははティアナを抱き寄せる。

「クロスもロングももう少ししたら教えようと思ってた。だけど、

出動は今にでもあるかもしれないでしょ。だから、今使いこなせている武器をもっともっと確実な物にしてあげたかった。だけど・・私の教導地味だからあんまり成果が出てないような気がして苦しかったんだよね。ごめんね」

その言葉を聞いてティアナはなのはを見上げる。そこには、いつもの優しいなのはの顔があった。
ティアナはなのはの胸に抱きつく。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

ティアナは何度も何度もなのはに謝った。

なのはの理由（後書き）

長かったｏｒｚ

次回は機動六課の休日ですね。ヴィヴィオもそろそろ出てくるし・・・

ヒロインはヴィヴィオで決まってるんですが、アインハルトもヒロインにするかどうか悩んでいます。入れる場合はアインハルトも高町家に入れたいと思います。

ちなみに、ｖｉｖｉｄのことは全く考えてませんｗｗ

婚約以外の結婚予約（前書き）

題名でわかるように今回はなのフェイです。

もっともダメ作者が書いたなのフェイですので期待しないでくださいw

婚約以外の結婚予約

あの事件から既に二週間がたった。
ティアナはあの後立ち直れたようで、今は元に戻っている。
サンの体調もすっかり良くなり、ＦＷ陣はなのはの教導を受けている。

サンは寮の前に居た。

「ごめーん待たせた？」

エリオが手を振りながら走って来た。そう、サンはエリオと約束があったのだ。

「いや、ほとんど待ってないし。それより早くやろう」

サンの手には既に、リリとオーバーの剣状態の長さと同じ二本の棒があった。サンとエリオの約束とは、強化魔法以外の魔法なしの戦闘練習だった。

「うん。だけど兄の立場としてそう簡単に弟に負けられないからね。本気でいくよ」

エリオの手にはストラーダと同じ長さの棒がある。
二人が構える。二人はお互いにどの手で来るかを予想して・・・打ち合おうとした瞬間！

「まってまって～」

ガクっという擬音を鳴らし二人はずっこける。自分達の出していた空気と余りにも違いすぎた声だったからだ。

「キャロ！？どうしてここに？」

「あ～俺が呼んだんだよ。もし怪我とかしたらすぐに治してもらえると思ってな」

サンはすっかり忘れていたようだ。

「うん。それに私も二人の練習、見たかったから」

「そっか。キャロも見ているんだし、ますます負けられなくなったね」

「こっちもそう簡単に負けないからな」

両者は先程と同じ構え、同じ空気を出す。

「はぁあああ」

最初に出たのはサンだった。

サンは右手の棒を横に振る。エリオはそれを長い棒の中心で受け止め、受け止めた状態で棒の角度を変えて棒の上部をサンに振りおろす。

右肩に来る攻撃を防ぐには、左手を使わなければならない。サンも当然そのことが分かっているので、防ぐ。

エリオは今の状態だと終わらないと思ったので、左足で右に跳び、右足で着地してそのままサンに向って跳ぶ。棒はサンに向って一直線なので突きを狙っているのが分かる。

サンは棒の来るぎりぎりの所まで動かず、あと少しで当たりそうな所で左に僅かに移動し回避する。更に棒を上に構える。そして、未だに跳んでいるエリオに向って振り下ろす。
しかし、エリオは予想外の行動でその攻撃をかわした。棒を地面に刺して跳んでいた威力を止めたのだ。
急に動きが止まったエリオにサンの待ち伏せの攻撃は外れた。

エリオは遠くにある方の棒先が地面に当たっているのを利用して、右側に居るサンに薙ぎ払いをした。
サンはそれを前方に跳んでかわし、上手く受け身を取った。そして、エリオに向って接近する。
エリオは一定の間合いに入れないように、棒先をサンに向けて構える。
サンは突きを注意し、急所が棒の直線状に来ないように注意しながら低姿勢で接近する。
エリオは近づいて来たサンに突きを出す。サンはそれを走りながら回避し、更にエリオに先の状態のまま接近する。
エリオは慌てて棒を引き戻し、接近戦の構えになる。サンはエリオに向って両方の剣で突く。それをエリオは僅かに後ろに跳びそれを回避、再び突きをする。サンはそれを顔を動かし回避、しかしエリオの突きはそれだけでは止まらなかった。

突き突き突き突き突き突き

エリオの突きを棒ではじいたり体を動かしながらなんとか回避する。

「ック」

サンの棒はエリオよりも短い為、前に出ないと攻撃が出来ないから引くわけにはいかなかった。

そこでサンは一つの賭けに出ようとしていた。それは、一気に飛び込んで自分の得意な間合いにすること。

「え？」

サンの後退する動きが無くなったのを見て、不思議なそうな声を出す。

サンは突きの連射をしてくるエリオの元へと走った。まずは、最低限の物をはじき後は体をそらしたりして回避する。今回の間合いは、エリオにとってギリギリの場所だったから、突きの連射の速度が余りなかったからだ。

そして、次はスライディングをして一気に間合いを詰める。スライディングをする前の間合いは、エリオにとって一番やりやすい所だったので一気に接近したのだ。更に急な位置の変化に、エリオがついていけなくなる。

そして、左片腕の力だけで勢い良く起き上がりエリオの振り下ろしの攻撃を空いている右手で受け止める。

「これで、終わりだ！」

左の棒をエリオの喉元に当てる。

「はは、みたいだね」

そう言ってエリオは自分の棒を地面に落とす。

二人の戦闘練習が終わった。

「エリオ君もサンもすごかったよ」

キャロは自分のことではないのに、まるで自分のことのように喜ぶ。

「ありがと姉さん。あ、ちょっとここ怪我したんだ治療お願いしてもいいか？」

キャロはうん、と頷きサンの怪我している部分に手を当てる。

「悔しいな～どこが駄目だったんだろ？」

エリオが悔しそうな声を出してサンに聞く。

「やっぱり細かな棒捌きが必要なんじゃないの？まあ魔法なしだったし、ストラーダみたいな槍じゃないからしょうがないんじゃねえの？」

キャロに治療をしてもらいながら、エリオに言う。

「でも、サンもデュアルウェポンじゃなかったし・・・やっぱり悔しいな」

「はいサン、治療終わったよ」

二人の会話に少し笑いながらサンに告げる。

「サンキューな姉さん」

ウィイン

寮のドアが開いて、スバルとティアナが出てきた。

「サンとエリオは自主練？無茶しちゃ駄目だよ～ティアみたいに怒られるよ」
「うっさいわねスバル。でも大丈夫なの？今日もいつもみたいにあるって・・」
二人はサンとエリオの心配をする。まあ、あんなことがあったんだ。心配する気持ちが出てきても無理はないだろう。
「大丈夫です。魔法は全く使ってませんし、一回きりだったので」
それを聞き二人は安心したようだ。
「それじゃー今日もやるぞー」
「「おー」」
ティアナ以外が全員やる気の声を出した。

午前の訓練が終わった時、ＦＷ全員は息を乱して、ぐったりと座っていた。
「今朝の訓練と摸擬戦は終了。でね実は何気に今日の摸擬戦が第二段階の見極めテストだったんだけど」
「ええ！？」
突然の告白に驚くＦＷ陣。何も聞かされずに、今日もいつも通りのことしかやってないのだ。心配や驚きは当然出る。

「どうでした？」

なのはＦＷ陣の驚きを無視して、後ろに居るフェイトとヴィータを見る。

「合格」

「「はや」」

余りの回答の早さに、サン、スバル、ティアナは口が動いてしまう。

「ま、こんだけみっちりやってて問題あるなら大変だってことだ」

「私も皆良い線行ってると思うし・・・じゃあこれにて二段階修了」

「「やったーー！」」

やけにあっさり終わったが、それでも嬉しいという気持ちには変わりない。ＦＷ陣は立って喜びを感じる。

「出力リミッターも一段解除するから、後でシャーリーの所に行ってきてね」

「明日からはセカンドモードを基本形にして訓練すっからな」

フェイトとヴィータが色々と説明する。

「え？明日？」

キャロは明日という言葉に引っかかったようだ。

今日はまだ午前中だ、つまり・・・

「訓練再開は明日からだ」

「今日私達も隊舎で待機する予定だかし」

「みんな入隊日からずーと訓練ずけだったしね」

つまり・・・

「今日は皆一日お休みです」

機動六課に来て初の休日にＦＷ陣は喜びの声を上げる。サンも例外ではない。

「街にでも出かけて、遊んでくるといいよ」

「「はーい！」」

普段の返事より何倍も元気な声が、訓練場に響いた。

「って言われてもな～何すりゃいいんだ？」

サンは休日を与えられたことには凄く喜んでいたが、急に渡されたので何をしようかと迷っていた。

「う～～ん」

しばらく部屋の中で考えながら歩いていると、ドアが開いた。

開けた人物はエリオとキャロだった。だが、洋服がいつもと違って年相応だ。

「サンは今日なにか予定ある？」

「もし良かったら一緒に行かない？」

二人がサンに聞く。

【しかし二人のこの服・・・どう考えてもデート服だよな。それに俺が入るのは・・・】

サンは二人とは一緒に行きたいがやはり、デートの邪魔はしたくないようだ。

「えっと嫌かな?」

キャロが悲しそうな顔をして言う。

「いや、え～～と。二人はいいのか?」

二人は顔を見合わせて笑う。こう答えるためだ。

「「もちろん」」

機動六課の出入り口の所まで来た三人とフェイトは、スバルとティアナの見送りをしていたなのはと会った。ちなみにフェイトは三人の見送りだ。

「サンとエリオとキャロもお出かけ?」

「「行ってきます」」

二人は返事をする。

「母さん、なんかお土産でも買ってこようか？」
サンがなのはを見上げながら言う。
「ううん大丈夫。それより楽しんでおいで」
なのはとサンが話している間にフェイトとエリオとキャロも話していた。
「遅くならないうちに帰るんだよ。夜の街は危ないからね」
「「はい」」
「じゃあ行こうか、兄さん、姉さん」
サンが言うとエリオとキャロは頷いた。
そして、街にへと走って行った。

二人が見えなくなると、なのはとフェイトは隊舎へと戻った。
「でもあの三人、仲良くなってほんとに良かったね」
なのはがフェイトを見ながら言う。
「うん。お互いのことを知ってたのに機動六課に来るまで会ったことなかったから心配だったんだよね」
と、言った途端に歩くのを止めた。
なのはは何かと思い自分も止まる。

「なのは、あの子達は私達の子供だよね」

フェイトが真剣な表情でなのはを見ながら言う。その表情になのははドキドキしながらも、うん、と答える。

「ねえなのは、私達結婚しない？」

「ふ、ふえぇえええ！？」

いきなりのプロポーズに思わず声を上げてしまう。いつものフェイトならもっとムードのある場所でそういう甘い言葉を・・・・以外にどこででも言っている気がする。

「この間なのは言ってたよね。私達の関係を無眼書庫の人達が知ってるって」

「う、うん／／」

そのことを思い出したなのはは赤面する。

「だから私達の関係は、もしかしたらそんなに風当たりが悪くないのかもしれないんだ」

フェイトの言葉を聞いてなのははハッとする。そうだ、今まで結婚しなかったのは、息子に風当たりの悪い生活をさせたくなかったからだ。でも、両親の風当たりが良いのなら、それなら息子に対する風も当然良くなる。

「で、でもでもフェイトちゃん。私達は今は大事な時期だし・・・」

そう、レリックがいくつあるかは分からないがなかなか集まってきている。この事件もだんだんと終わりに近づいているかもしれない。

しかし、なのはが悩むことを予想していたフェイトはこう言った。

「なにも今すぐって訳じゃないから。何年たっても私となのはのお互いを想いやる心は変わらないでしょ？」

フェイトにとっては当たり前のことを言っているつもりなんだろうが、今の言葉もかなりの口説き文句だ。

当然なのははそれを聞いて顔を先以上に赤面する。

「あ！ごめんさっきの撤回するね」

「え？」

フェイトの発言になのはの表情は暗くなり、マイナスの思考が加速する。もしかしたらフェイトの思いは数年後には無くなっているのか？フェイトは数年後には自分とは違う人を想い、その人の隣に居るのか？

自分を捨ててどこかに・・・・

「嫌だ！！」

なのははフェイトに抱きつく。今のなのははフェイトのことで頭がいっぱいで冷静な判断ができていない。先程の思い込もフェイトを愛しすぎているせいだ。

「なのは？」

なのはの急な行動についていけないフェイト。

「フェイトちゃん、なのはのこと捨てないで。なのはずっとフェイトちゃんのこと愛するから、毎日ご飯作るから、一生懸命フェイト

ちゃんを支えるから。だから・・・なのはの隣から居なくならないで！！」

フェイトはなのはの言動についていけなかったが、さっきの自分の発言を思い出して、なのはの行動を理解した。
そして、勘違いさせてしまったなのはへの謝り方は一つ。

「ごめんねなのは」

フェイトはなのはを強く抱きしめる。

「お願い、なのはを・・・なのはを捨てないで！」

同じことをずっと繰り返すなのは。

「違うんだなのは、さっきの撤回はもう少し付け加えたかっただけなんだ」
「え？」

腕の中で叫んでいたなのはの声が止んだ。

「何十年たっても私となのはのお互いを愛し合う心は変わらないでしょ。って言いたかったんだ」

フェイトの言葉を聞き、なのはの足の力が一気に弱まる。緊張が解けた証拠だ。
脱力するなのはをずっとこの状態で持つのはさすがにきついと判断したフェイトは、なのはを持ちあげお姫様抱っこをする。
お姫様抱っこされたなのははフェイトを見つめる。

「フェイトちゃん」
「なに？なのは」
「なんでもないよ」

なのはは嬉しそうな顔をしてそう言う。
フェイトもそれに笑い、自分も愛しい人の名前を呼ぶ。

「なのは」
「なに？フェイトちゃん」
「なんでもないよ」

さっきと逆の会話に思わず笑ってしまう二人。そしてお互いの目を見る。

「フェイトちゃん」
「なのは」
「フェイトちゃん」
「なのは」

二人はロボットのように、お互いの名前を呼び合う。
しかしロボットとは違う。何故なら・・・二人の言葉の中には愛と言う感情があったからだ。

婚約以外の結婚予約（後書き）

やっぱなのフェイいいなー　王子様フェイトさんいいなー

と、いうことで次回はサンとその兄と姉の回です。

ほのぼのした話が書けるように頑張ります。

兄姉との休日（前書き）

今回はエリオ、キャロ、サンが中心です。

感想に長めが良いと、くださったので長めに書きましたがどうですかね？

兄姉との休日

サンとエリオ、キャロは駅に居る。理由としては、エリオのプランに従って移動していたからだ。

「兄さん、悪いが今日のプラン見せてくれない？」

普通に気になったのでエリオに聞く。エリオは良いと答え、待機モードで時計になっているストラーダをサンに見えるようにした。

「え～～何々・・・まずはレールウェイでサードアビュームで出て市街地を二人で散歩、ウインドウショッピングや会話等を楽しむ。食事はなるべく雰囲気が良くて会話の弾みそうな場所で。映画はなるべく二人が楽しめるもの（恋愛物ならなおＯＫ）。夕方には海岸線の夕焼けを眺める？って・・・ふざけるなーーーー」

サンの叫び声が駅のホームに響く。当然人がこっちを見るが、やんちゃな子供の声としか聞こえないし見えないのだろう、すぐにサン達を見る目がなくなった。

「もうサン。こんな所で大声出したらいけないよ」

キャロがほほを膨らませて怒るが、あいにく今のサンの耳には全く届いてない。

『どうやら二人は誰かにこのプランを貰った後にマスターの所に来たようですね』

『カカカ、純粋で良い子じゃねぇか。相棒と違って』

「リリはともかくオーバー、お前は一言多い。二人共、この近くに

俺達が楽しめそうな場所はあるか？」

完全にエリオとキャロを置いて行き、話を進めるサンにエリオは純粋な疑問を言う。

「サン、このプランじゃ駄目なの？」

「難しいけど良いプランだと思うけど・・・」

二人の発言に思わず溜息が出てしまうサン。

「あのなあ、これは男女が二人っきりで行く時のプランなんだ。今回は俺も居るからこのプランは合わないんだよ」

サンの言葉に二人はふーんと返す。未だにそのプランがどういう物かが分からないようだ。

『マスターこの近くに遊園地が』

『俺は博物館を見つけたぞ』

「サンキュー。兄さんと姉さんはどっちに行きたい？」

リリとオーバーの話を聞いたサンは、早速その案を使って二人に質問する。

「僕はどっちでも」

「私もどっちでも大丈夫」

予想していた回答に再び溜息が出てしまうサン。

「じゃあ博物館でいいか？」

若干苦笑しながらも二人に聞く。そしてその返事は当然・・・

「うん」

決まっていた。

三人は電車に乗り博物館に向っていた。
平日の昼間なので人は少なく、三人は普通に座れたようだ。
そしてエリオがなにか思い出したような顔をして口を開いた。

「そういえば、キャロの竜ってフリード以外にもう一騎いるんだよね？」

「俺も聞いたことあったな。たしかヴォルテールだったっけ？」

「うん、黒くてすっごくおっきな竜。フリードは私が卵から育てたんだけどヴォルテールはアルザスの土地に憑いてる守護竜なの。だから私の竜っていうよりは、私がヴォルテールの横で力を貸してもらってると、いうか。そんな感じ」

「そっか、フリードみたいに紹介してくれたらうれしいんだけど、そんなに偉大な竜ならわざわざ来てきて貰って挨拶だけって訳にもいかないよね」

エリオは少し残念そうな顔をする。ちなみにサンは凄く落ち込んでいる顔をしている。やはり前世の記憶があっても、いや、前世の記憶があるからこそ気になったのだろう。

「あ、でもいつか紹介するから。そんなに落ち込まないで」

「まじで！サンキュー姉さん」

サンは顔をガバっと上げて、先と１８０。違う表情になった。

「うん。それにね、フリードもエリオ君のことほんっとに友達だと思っているみたいなんだよ」
「嬉しいなー」
「姉さん、俺はどうなの？俺は」
「サンのことはお兄さんって思ってるみたいだよ。ほら、リニアレールの時の印象が強いみたいだから・・」

キャロはサンより年上なエリオが友達で、年下のサンがお兄さん、と思われていることに苦笑しながら教える。
エリオも微妙に複雑のようだ。ほほを引きつっていた。

「あ～あの時か。慕われるのは嬉しいんだが、未だにあの能力のこと分からないんだよな」

そう言ってはやてから見せられた映像を思い出す。

「凄かったもんね。近くで見るとほんとにフェイトさんに似てたよ」
「うん。私は遠くからだったけどやっぱりフェイトさんに似てたと思うし。あれってサンの将来の姿なのかな？」

フェイトに似ているということに、息子としては嬉しいが男としては複雑な気分のサンだった。

「ケケケ、お父上に似ているだけであって、顔つきは男だったんだがな」
「まあ、マスターの悩む姿なんてなかなか見られませんし、ここは黙っていましょう」

なんてデバイス同士の会話があったなんて、サンが知るはずがなか

った。

『サードアビュー南口、サードアビュー南口。アンダーゲートへは九番から十二番にお乗り換え下さい』

三人は電車から降りようとしていた。

「しかし、博物館もサードアビューにあるとはな」

「確かにプランを変えたのに同じ場所に向うなんてちょっと不思議だね」

サンとエリオが話しながら降りていると、後ろからキャロの怯えた声が聞こえた。おそらく人ごみが苦手なのだろう。

それに気づいたエリオはキャロの手を握る。当然サンも気づいてはいたが、微笑ましい男女の中に入る程、無粋な子供ではない。

顔を赤くしながら手を握り合っている二人にどう入ろうかなと、思っていると。

「ほら、サンも」

「一緒に歩こう」

二人がお互いを握る手を離して、サンの方へ差し伸べる

その純粋な行動にサンは少し笑いながらも、その手を握る。

「ありがとな、兄さん姉さん」

「「うん」」

三人が手を繋ぎながら歩いていると、急にサンのお腹が鳴った。

「そういえば、六課では何も食べてこなかったからね」

エリオが立ち止まり、呟く。

「どこかで食べよっか。サン、あれ何てどうかな」

キャロが指を指した所にはアイス屋があった。サンはそれを見て顔を真っ青にして首を物すごい勢いで横に振る。

「無理無理無理無理無理」

その余りの豹変を見てエリオとキャロは驚く。

「もしかして甘い物苦手？」

エリオの問にサンは、首をすごい勢いで縦に振る。

「おいしいのに」

キャロは不思議そうな顔をして、サンを見る。まあ甘い物が苦手な子供なんて珍しいだろう。

「それよりあそこにしようぜ」

サンは視線を移す。二人もサンと同じ所を見た。

そこにはいかにも高級ですよ、と言わんばかりの作りをした９７番世界の日本料理店があった。

サンの選びに動揺し、苦笑いをするエリオとキャロ。

「あ、あそこがいいのかな？」
「おう。めっちゃ美味そうじゃねえか」
「確かにそうだけど・・・」

エリオとキャロはお互いの財布の中身を思い出す。
そして、ほっと息を吐く。どうやら大丈夫なようだ。

「それじゃあ行こうか」

エリオが二人をエスコートする。

中に入ると一段と凄かった。
壁は見る限りは全て木を使われ、白色の幹が上品さを出してある。
床は当然畳で、痛たみが全く見えない。
木で出来た靴箱。
そして、迎えてくれたのは、和服を着たきれいな女性だった。

「いらっしゃいませ」

女性は正座をして座礼をしながら言った。
座礼と土下座の違いが分からないエリオとキャロは慌ててそれを止めようとするが、サンは二人のように動揺しなかった。

「三人です。もしかして一見さんお断りですかね？」

サンの言葉を聞いて女性は一瞬驚いた表情をするが、すぐに接客の顔に変わった。

「いえ、うちはどなたでも歓迎しますので・・。それではお上がり下さい」

そう言って女性は少し横にずれる。
サンは普通に靴を脱いで上がるがエリオとキャロはどうすれば良いのかが良く分からないようだ。

「普通に靴脱いで上がれば良いんだよ」

二人はサンの言う通りにする。

「それではこちらへ」

女性はサン達の前に歩き、場所を導く。

「失礼ですがお客様は地球をご存じで？」
「まあそこで産まれたんで知ってますよ。ちなみに日本です」
「まあ。だからですか」

どうやら一見さんを使った理由が分かったようだ。

「えっとサン、一見さんって何？」

キャロが聞いてくる。エリオも同意見なのか首を縦に振っている。

「一見さんっていうのは一度もそのお店を訪れたことがなく、フラっと気ままに立ち寄る客のことだ。一部の高級な飲食店や、高級外車を扱う店では客との信頼関係を大切にするた為に、知らない客を断る場合がある。だから高級なイメージとサービスを維持ができる

ということがメリットとしてある。客にも金は当然だが、マナーや紳士な態度が要求される。こんな所だ」

サンの説明に二人はへー、と言い、女性はまた驚いた表情をする。まあ、小さい子供が一見さんの意味をここまで正確に説明するなんて信じられないだろう。

三人は部屋に案内されて、メニューを貰う。
まあ予想通り、普通の店とは桁が一つ違った。
エリオとキャロは一番安いのを頼み、サンもそれに気付いたのか、余り高くないのを注文した。

「でもほんとに凄いねーここ。こんなおっきな部屋に私達だけだなんて」

キャロはこの部屋を見渡しながら言う。

「サンは慣れてる雰囲気だったけど、昔こんな店になのはさんとフェイトさんに連れてきて貰ったの？」
「ま、まあそんな感じだな」

しかし実際は嘘だ。前世で来たことはあるが、現世では初めてだ。

「へ～」
「そういえば、兄さんのことはなんとなく知ってるけど姉さんは知らないな。姉さんって六課に来る前ってこんな休みあったのか？」
「実は、あんまり。でもフェイトさんとなのはさんに遊園地や水族館に連れて行って貰ったことはあるよ」
「あ、そうなの？僕もだ」

キャロの言葉に反応し、エリオが答える。

「初めて遊園地に連れて行って貰った時は、凄く楽しくて楽しすぎて、だけど日が暮れて楽しい時間が過ぎていっちゃうのが悲しくて、それでちょっと泣いちゃって・・・」

「うん、なんだか良く分かる」

「前日は楽しみで眠れなくて、遊び終わった日はずっとさびしくて・・・ってごめんねサン、なんか話ちゃって」

エリオは慌ててサンを会話に入れようとする。

「いや、いいんだ。二人の昔に興味あるしな・・・続けて」

「今思うと、フェイトさんもなのはさんも凄く忙しいのに、その合間に面倒見てくれてたんだなって」

「うん」

少ししんみりした空気になった。

「父さんも母さんも好きでやったんだ。そんな落ち込むことねえよ」

サンが二人をいつもの口調で励ます。それを聞いて二人の表情が明るくなる。

「そういえば私もサンの数年前のこと知らないな。なにしてたの？」

「僕も気になるな」

まだ五歳児のサンが機動六課に来るまでの話は、確かに興味が出る。

「俺はひたすら訓練だったかな。ハラオウン家、高町家、八神家、

それと無眼書庫に行って、新しい術式を考えたり・・・強化陣も無眼書庫で思いついたんだ」
「え？じゃあフェイトさんとなのはさんにどっかに連れて行って貰ったことは・・・」
「ミッドに来てからはないね」

エリオとキャロは驚く。保護児童の自分達が連れて行って貰っていたのに、血の繋がっている息子は何処にも行ってないのだ。驚くのも無理はない。

・・・・・・

凄く気まずい空気が流れる。

ピリリッ、ピリリッ

その沈黙を破るように、ストラーダに通信が入る。

「はい、こちらライトニング３」
『はーいこちらスターズ３、そっちの休日はどお？』
『ちゃんと楽しんでる？』

ストラーダからスバルの陽気な声と、ティアナのしっかりした声が聞こえる。

「はい、今は料理店に居ます」
『いや、なんか困っていることとかないかな～とか思っただけなんだけどね』
「ありがとうございます」

「おかげさまで、ありません」
『そっちはどんな感じ？』
「まずレールウェイでサードアビュームで出て市街地を二人で散歩、ウインドウショッピングや会話等を楽しむ。食事はなるべく雰囲気が良くて会話の弾みそうな場所で。映画はなるべく二人が楽しめるもの（恋愛物ならなおＯＫ）。夕方には海岸線の夕焼けを眺める。っていうプランを俺が変更して今は和食店にいる。食い終わったら博物館に行く予定だ」

サンの話を聞いて思わず、ハア？と声を上げた二人だが、今のプランを聞いて安心したのか少し息を吐いた。

『じゃあ何か困ったことがあったらいつでもこっちに連絡するんだよ』
『街中での遊びも私達の方が先輩だからね』
「はい」
「ありがとうございます」
「助かるよ、サンキューな」

三人はそれぞれ別の言葉で返事をする。スバル達の気遣いが嬉しいのか笑顔だ。

『じゃーねー』

ストラーダに映っていたスバルの映像が途切れる。

「スバルさんとティアさんも優しいね」
「うん」「そうだな」

三人は高級和食店での食事を済ませて、今博物館に向っている。食事の内容は・・・まあとにかく美味かったとだけ書いておこう。

「ここみたいだね」

三人の前には、石でできた大きな建物があった。中に入る人や出る人で入口は一杯だ。

「今日平日なのに、なんでこんなに人が多いんだろう?」

キャロの疑問にサンが答える。

「よく見ろよ。あれってザンクト・ヒルデ魔法学院の制服だろ?おそらく見学か何かで来てんだろ」

言われてみると確かに同じ制服の子供が多い。サンの言う通りのようだ。

「とりあいず行こっか」

三人は博物館の中に入って行った。

中に入るとそこには沢山の魔法生物の立体映像、中にはその魔法生物の体の一部が飾られていた。

「すごーい。こんなに沢山」
「魔法生物ってこんなに居たんだ」

エリオとキャロは博物館のパンフレットを見ながら驚く。

そして、サンは・・・・

「すっげーーーー！！」

と、叫びながらあっちこっちを走りまわる。

「インプ・ウェンティゴ・キマイラ・ガルーダ・鬼・麒麟・グリフィン・ケルベロス・ケンタウロス・サキュバス・サラマンダー・サンダーバード・スフィンクス・ズー・天狗・トロル・ドラゴン・ドワーフ・ナーガ・ハーピィ・バジリスク・ヒュドラ・ペガサス・鳳凰まで！マーメイド・マンドラゴラ・ミノタウロス・ユニコーン・リヴァイアタン・うおおおおおおぉおバハムートキタコレ！！」

今までにないテンションの高さに、エリオとキャロは口をあける。

「兄さん！姉さん！あっちに行こう・・早く～～」

いつもとは違う五歳児らしいサンの姿に少しエリオとキャロは喜ぶ。
そして、顔を見合わせ笑いながらサンの方に走って行った。
最初に向ったのは鳳凰の立体映像がある場所だった。
サンは３６０。全方位から鳳凰を見て、とても満足した表情になる。

「ははは、サンって魔法生物好きなの？」

エリオは自分の手の平にある、リリとオーバー聞く。邪魔という理

由でサンに渡されたのだ。

『カカカ、俺は知らねえぞ』

『確かにマスターは無眼書庫に行った時もよく魔法生物の本を読んでいましたが、まさかここまでとは・・・』

どうやらこの二人も知らなかったようだ。

「でも良いことなんじゃないかな?サンって大人っぽいし、ああいう風に子供っぽくはしゃぐこともした方がいいよ」

「そうだね。六課に来た時からずっと、僕達よりしっかりしていたからね」

二人はサンを暖かい目で見守りながら、話をする。

その時サンの近くに従業員らしき人が近づく。

二人はサンが怒られるのかと思い慌ててサンに近づいたがどうやら大丈夫なようだ。

「お客様は、魔法生物がお好きなのですか?」

サンが声のする方に顔を向けるとそこには紳士的な老人が居た。

「ああ。なんて言うかこう、ロマンがあるっていうか。最強をイメージできるから楽しいっていうか・・・」

その言葉を聞き老人は笑った。

「では、あちらの方に行きませんか?実は最近見つかった竜の立体映像があるのですが」

サンはそれを聞き、考える前にうん、と答えて老人について行く。
エリオとキャロも保護者のようにそれについて行った。

向った先にあったのは、青とエメラルドの鱗に、所何処ろに白の毛を生やした狼のような竜が居た。

「この魔法生物はジンオウガ。種類は雷狼竜」
「雷狼竜・・・雷？」

サンは雷と言う言葉に引っかかり、復唱する。

「そうです。ジンオウガは周りに居る雷光虫を使って自身の能力を飛躍的に高め、戦ったり、雷を放出します。なぜ自分とはまったく異なる種である生物の能力を利用することが出来るのか。それはジンオウガと雷光虫との間に相利共生の関係が築かれているためです。」

老人の説明を聞いてサンは考え始める。

「雷光虫・・・電気・・・相利共生・・・通さない・・・絶縁体・・・もしかして、雷光虫を食べれる動物が居るとか？」

サンの意見を聞いて老人はコクンと頷く。

「その通りです。雷光虫は発電する性質を持ち、外敵に対してその発電能力を使って攻撃を行いますが、彼らにも天敵がいます。ガーグァです。ガーグァはクチバシが絶縁体となっており、放電能力が無効化されてしまうため、一方的に捕食されてしまうのです」

サンは分かったようで首を縦に振る。一方エリオとキャロは分からないようで首をかしげていた。

「こいつらは天敵に襲われないために、逆にガーグァの天敵であるジンオウガと共生することで自分の身を守っている。ジンオウガ自身も雷光虫を身体に纏わせることで能力を強化出来るメリットがある。ジンオウガと共生している雷光虫は何らかの作用により活性化していて、通常の雷光虫とは色も異なる。雷光虫側の利益が大きすぎる気がしないでもないが、この2種の関係は現実の生物学的に見ても相利共生といえる・・・てことだよな？」

今まで驚かなかった老人もさすがに驚いたようだ。完璧だったのだ。五歳児がここまでの理解を出来たことに対する老人の喜びはとても大きかった。

「完璧でございます。失礼ですがお名前を聞いてもよろしいでしょうか？」

「高町・・高町サン。これが俺の名前だ」

高町、という苗字を聞いて老人は、ある人物を思い浮かべた。確かに髪の色や目がどことなく似ていた。

「ホッホッホ、長生きはするものですな」

急に笑い出した老人にエリオとキャロは困惑するが、サンには笑った理由が分かったようだ。

「じゃあもっと長生きしろよな。いつかあんたの心臓が止まるようなことをしてやる」

「ちょっとサン失礼だよ」

キャロが慌てて二人の会話を止めようとするが、エリオが腕をつかみ止めた。

「大丈夫だよキャロ。見て、あのおじいさんも怒ってないみたいだし、サンもわざと言ってるんだと思う」

エリオにそう言われ、キャロは二人を観察してみる。
確かに、老人は怒った様子を全く見せずにサンと会話している。
サンもさっきの発言を全く気にしてないようだ。

「そういうあんたの名前は？」
「アベル・クローベルでございます」

クローベル・・・伝説の三提督のミゼット本局統幕議長と同じ名字だった。

三人はあれから博物館を出てそこらを歩いていた。
話の内容は博物館でのことや、魔法のこと、趣味や好きなもの、話す内容はいくらでもあった。

「ん？」

突然サンが動きを止めて、立ち止まる。

「どうしたのサン？」
「兄さん姉さん、今なにか聞こえなかったか？ゴトっていうかゴリ

っていうか・・」

サンの言葉を聞き二人は耳をすませる。

ゴリ

確かに音がした。

三人はなにかと思い、音のする方へ向う。

しかし、そこには何もなかった。と、思った瞬間にマンホールのふたが上がった。

サンとエリオは何が来ても良いように構える。

そして、そこから・・・サンと同じくらいの背丈の小さな女の子が出てきた。

兄姉との休日（後書き）

キターーーーーー
ヴィヴィオやっと登場しました。
と、言ってもこの小説では恋愛までにはいきませんがｗｗ

そして・・・そろそろだ！！

ナンバーズ（前書き）

やったぞーーーーーついにここまできました。
現在時刻深夜三時四十三分ですｗｗ
高校生ですが、特殊な学校なのでこのくらいの時間まで起きてても大丈夫ですｗｗ

いかん、テンション高いから、ちゃっかりプライベートのこと書いてしまったｗｗ

「女・・の子？」

突如現れた女の子への反応を一番最初にしたのはサンだった。
サンはその子にすぐに近づき、命に別状がないか調べる。

『マスターこの子、息が途切れ途切れです！』
『精神的ものかもしれねえな』

サンはそのことを聞きすぐにキャロを呼ぶが、突然の出現と命を左右する精神的重みでパニックになっていた。

「くそ！」

サンは叫んで急いで人工呼吸の体制に移る。
そしてサンはその子の唇に自分の唇を合わせて人工呼吸をする。心臓マッサージは体が脆そうなので少し弱めにした。
それを数回しているとその子の呼吸が通常に戻った。

「だ・・誰？」

その子の目がかすかに開き、その子の真紅と翡翠の瞳がサンのルビーとサファイアのようにきれいな瞳を見る。その子の表情は助けを求めている顔だった。
その子の声を聞いてホッとしたサンは優しい口調でこう言った。その表情に答える為にもだ。

「安心しろ。俺はお前の味方だ」

その優しい言葉を聞いて安心したのか、先程より明るい表情になり、その子は再び眠りに落ちた。

「・・・兄さんと姉さんは皆に通信を頼む」

キャロはどうやらエリオによって落ち着いたようだ。うん、と頷き全体通信を始める。

キャロの通信の内容は、現在地、この子のこと、さっきまでの状態、そしてこの子の持っているレリックらしきケースのこと。

『救急の手配はこっちでする。三人はそのままケースを保護。その子の安全を守ってて』

「「了解」」

フェイトの指示に三人は返事をする。

少ししてスバルとティアナが来た。

ティアナはレリックを持っていた子を見て、率直な感想を言う。

「この子か、またずいぶんボロボロね」

「地下通路を通ってかなり長い距離を歩いたんだと思います」

そんなに辛いことをまだ小さな女の子がやったんだ、当然皆の表情は悪い。

「レリックの封印処理は？」

「キャロがしてくれました。ガジェットが見つける心配はないと思

います」

ティアナの質問にエリオが今の状況を説明する。

そして、サンはその女の子を見ていた。
痛んでいるがきれいな金色の長い髪。
小さく少し丸っこい顔。
そして、一番見ていたのは、閉じられた目だった。あの、真紅と翡翠の瞳。

【あの瞳・・・どっかで見た・・いや読んだことが・・】

サンの思考がどんどん深くなっていく。

「サン、サン！」
「うお！？な、なんだ？」

急に耳元で叫ばれたのでびっくりして跳びはねる。

「シャマル先生が来たから、そこどきなさい」

そう言われて今の状況を確認すると、サンはずっとその女の子の隣に居た。

「す、すいません」

サンは慌てて今いる場所をどく。
シャマルはそこに移動して金髪の子の診察をする。

「バイタルはもう安全のようね。サンありがとうね。この子結構危

ない状態だったんでしょ？」
「いえ、当然のことをしただけですし」
シャマルがこちらを見て微笑んできたので、サンは恐縮そうな顔をして返した。
「ごめんね皆お休みの最中だったのに」
シャマルと一緒にこちらに来たフェイトが皆に謝る。その隣にはなのはが居た。
「いえ」
「平気です」
そう答え、二人が金髪の子の近くに来たので少し離れた。サンを除いて。
「サンどうしたの？」
「この子の瞳が気になってね」
「瞳？」
なのはの質問にサンが返し、その返しに更にフェイトが返した。
「真紅と翡翠の色だった。まあ気にしないでくれ、悪かったな止めて」
そう言ってサンもＦＷメンバーの所に走った。
ガジェットが現れた、水路と空の両方からだ。

それを聞いた、はやての指示はシンプルだった。空をなのはとフェイトで、陸をＦＷ陣に任せる。
そして、その指示を受けたＦＷ陣は今、女の子が出てきたマンホールを囲む形で居る。

「みんな、短い休みは堪能したはね」
「お仕事モードに切り替えてしっかり気合い入れていこう」
「「はい」」「了解」

スバルとティアナの掛け声にエリオ、キャロ、サンは合わせる。
そして自分の待機状のデバイスを間に置く。

「「セートアップ」」

そしてバリアジャケット姿になりお互いの目を合わせ頷く。

「ッハ」

最初に降りたのはサンだった。
かりに何があっても対処できる能力を持っているからだ。さっきの頷きはそういう意味だった。
サンは着地してすぐに前後左右安全かどうかを確認する。

「大丈夫だ、ガジェットの姿はない」

そう言うと、皆どんどん地下水路に入って来る。
全員が降りて来るとティアナが口を開く。

「もう一回任務のおさらいね。今回の任務は地下水路に居るガジェットの破壊、そしてさっきの女の子が持っていたと思われるもう一

つのレリック」

ティアナの説明に皆頷く。大丈夫の合図だ。
それを見たティアナの言う言葉は一つだ。

「ＧＯ」

しばらく走っていると、ティアナが通信を始めた。

［ギンガさん、お久しぶりです］
［うん、ティアナ。現場リーダはあなたでしょ、従うから指示をくれるかな］
［ひとまず南西のＦ９４区画を目指して下さい。途中で合流しましょう］

そして、ギンガは確認しているのだろう。ティアナに言われた場所を復唱していた。

［了解］

そう言って通信が切れた。

「ギンガ・・さんってスバルの姉さんだよな？」

さっきの通信を聞いていたので少し疑問に思ったのだろう。

「そう、私のシューティングアーツの先生で、年も階級も二つ上」
「へ～」

キャロが納得した声を上げた。

更に走っていると通信入った。ギンガからだった。
通信の内容は、今日別の所で起きた交通事故。そして事故にあったトラックの後ろに五・六歳の子供が入る生体ポットがあったという。
更に事故現の近くに重い物を引きずった跡があったという。
そして、その生体ポットを前の事件で見たことがあるという。その事件は人造魔導士計画の素体バイオ機。

そのことを聞いてサンが思ったのが、さっきの子はその生体ポットの中に居た、だ。しかし、あくまで推測なのでなんとも言えない。

「人造魔導士って？」

聞いたことない言葉に思わずキャロはその言葉を口に出してしまった。

「優秀な遺伝子を使って人工的に生み出した子供に、投薬とか機械部品の埋め込みで後天的に強大な魔力や能力を持たせる。それが人造魔導士」

いつものスバルからは考えられない程、難しい言葉を使って皆に説明する。

「倫理的問題はもちろん、今の技術じゃどうしたっていろんな部分に無理が出る。正直コストが合わない。だから、よっぽどどうかしている連中じゃない限り手を出したりはしない技術のはずなんだけど」

ティアナの説明にキャロは色々納得したようだ。もっともサンは知っていたことなのでガジェットに注意しながら走っていた。

『マスターガジェット反応です』
『ケケケ、小型が9機だけだ』
「皆、ガジェットが来るぞ！」

サンが叫んだ瞬間に全員走るのを止め、それぞれの武器を構える。
ガジェットが来た。一気に射撃を使ってこちらを攻撃してくる。
スバルが防ぐ、サンが弾く等をして他の全員に当たらないようにする。

その間にティアナは魔力弾の作成。エリオはキャロからブーストを受けていた。
そして、攻撃の数が一瞬だけ少なくなった。おそらく連射のしすぎか何かで少しオーバーヒートしたのだろう。その一瞬を皆見逃さない。
ティアナは貯めていた魔力弾を一気に連射し、ガジェットを破壊する。
スバルとエリオはスピードを出してガジェットに接近。自分の武器でガジェットを破壊する。
サンは一歩後退して、マシンガンを撃ちスバルとエリオの援護をしている。
キャロは後ろから敵が来た時の為に見張っていた。
その作業をしていると、あっという間にガジェットを破壊していた。

「空はなんか大変みたいね」

先受けた通信の内容を思い出す。

空には幻影と本物を混ぜた航空型のガジェットが大量出現しているようだ。
サンは親の心配をしながらも任務に集中する。

「レリックの推定位置まであと少しです」

キャロが自分のデバイスを見ながら、皆に伝える。
次の瞬間、スバルの後ろで爆発が起こった。全員は急いで構える。
爆発の中から出てきたのは女性だった。
青い長い髪にスバルと同じ武器、サンはすぐにこの人がギンガだと判断した。

「あなたが高町サン君ね」

ギンガがサンを見ながら言う。

「はい。その通りであります！」

サンは初対面の目上の人には必ず敬語を使う。
しかし、スバルから聞いて既にサンの本当の話し方を知っているギンガは、余りの違いに思わず笑ってしまう。

「どうしたのギン姉？」
「ううん、なんでもない。サン君、私にもいつもの口調でいいわよ」

そう言われてサンは少し口元を上げた。

「サンキューな。それと敵さんのお見えだぜ」

その言葉に釣られ皆前を向くと、こちらに向って来るガジェットの群れがあった。

最初に行動したのはティアナとサンだった。
二人は多重弾膜射撃を撃ち、ガジェットを破壊する。ティアナが破壊したガジェットには大きな穴が一つあり、サンが破壊したガジェットには小さい穴が沢山あった。

次に動いたのは、スバル、ギンガ、エリオ。
スバルとギンガは後ろの方に居る三型に向う。その途中で攻撃範囲内のガジェットが居たら得意の拳で破壊していく。
エリオは高速で移動しながらガジェットをバッタバッタと斬り、破壊していく。

キャロは、今までの時間に貯めていた魔力をフリードに与る。そしてフリードが火を吐きだすと一気に数機のガジェットが破壊された。

そしてスバルとギンガは三型の近くまで来ていた。

「スバル一撃で決められる？」
「決める！」
「それじゃあついてきて」

スバルとギンガは狭い道を、ギンガが前の状態で走る。
三型が二人に気づき、エネルギー弾とアームを使い攻撃してくる。
前に居るギンガはエネルギー弾をシールドで弾き、アームを拳で受け止める。
ギンガとガジェットが打ち合っている間に、スバルはカートリッジをしてギンガの上を跳ぶ。

「ディバイン―」

スバルは跳んでいる状態でガジェットに近づく。その手にはディバインバスターの術式があった。
三型はこれ以上接近させない為にバリアを張るがスバルはそれを右手で破壊。そのままガジェットの内部に入れる。

「バスター」

ガジェットの内部でディバインバスターを放つ。当然ガジェットは爆発した。

五人はあれから更にレリックの推定位置に向った。
今は既にそこに居る。しかし、細かい場所までは分からないので手当たり次第に探している。

「ったく、どこにあるんだよ」
「それが君の話し方？」

サンの呟きに隣に居たギンガが返す。先程はすぐにガジェットが来たのでほとんど話せなかったので、ギンガがサンのいつもの話し方を聞いたのは、これが最初だと言ってもよい。

「まあな。気持ち悪いか？こんな口調の五歳児」
「ううん、良いと思うよ。それに個性って大事だと思うし」
「あのさ「見つけた～～」」

サンがギンガに話そうとした瞬間にキャロの声が聞こえた。
二人は話すのを後回しにして声のした方へ走る。
レリックのケースを持っているキャロが居た。皆これで終わったと安心していた。
すると突然ドン、ドン、ドン、と柱を蹴る音が聞こえる。
サンはすぐに正体が分かったので、キャロの前に立つ。

「なにこの音」

他の皆も気づいたようだ。それから水のはねる音がして、再び柱を蹴る音がした瞬間、空中に黒い魔力弾のような物が現れた。

「ロンズーデーライトの盾」

サンとキャロの前に氷の壁が現れる。
魔力弾が氷に激突し、土煙が舞う。
土煙が晴れると、そこには傷一つついていない氷の壁があった。
サンが安心していると突然後ろでキャロの悲鳴が聞こえた。
慌てて見ると、キャロが魔法で吹き飛ばされ、エリオにぶつかって、二人共壁に激突した。

「兄さん、姉さん！」

サンは慌てて近づく。エリオの意識はあったがキャロの意識はなかった。

キャロを吹き飛ばしたのはエリオとキャロくらいの女の子だった。
その女の子はホテル・アグスタの時の子で、名前はルーテシア。
そのルーテシアは自分が何をしたのか理解していないように、ただ

淡々とレリックのケースを持ち歩いていた。

「そこの女の子！それ危ない物なんだよ。触っちゃだめ、こっちに渡して」

スバルがルーテシアを注意する。まだ彼女の実力を把握していないのだろう。

ルーテシアはスバルの注意を無視して再び歩き始めようとした。その瞬間ルーテシアの右の方から魔力刃が向けられていた。ティアナだ。幻影魔法を使って気づかれないように女の子に近づいていたのだ。

「ごめんね、乱暴で。でもねこれ、ほんとに危ない物なんだよ」

ピンチな状況にルーテシアは、僅かに悔しの声で呟く。

［ルールー1，2，3で目つぶれ］

ルーテシアに念話がかかる。当然そのことに皆は気づかない。

［いいか？1，2、スターレンゲホイル］

ドドドドドドド

次の瞬間に辺りがもの凄い勢いで光、とてつもない爆音がする。先の念話を知ってる物以外は、突然の光に目を傷めた。

「ぅぅう」

ティアナが視力を取り戻したら、そこにはルーテシアが居なかった、

慌てて辺りを見渡すとすぐ近くに居た。
ティアナはルーテシアに向けて銃を向けた瞬間に、先の足音を出した存在に殴られ飛ばされる。

「はぁあああ」

サンはティアナの飛ばされる前の位置の所に、思いっきり剣を振る。
斬った感触があった。
すると、なにもない所から全体的に黒くて顔は昆虫のような生き物が現れた。

「皆の借りを返させて貰うぞ！」

そう言って、黒い生き物に向って右の剣を振る。生き物は当然防ぎ、空いている方の手でサンを攻撃しようとした。

「甘いね、凍る大地」

生き物の足が凍る。サンは下水道の水を凍らせ足枷にしたのだ。
サンは一旦生き物から間合いを取り、デバイスをマシンガンにして構える。

「スターライト」

リリとオーバーの銃口に次々と魔力が集束されていく。

「ブレイ『マスター後ろから魔力反応です』」

リリの言葉を聞いたサンは慌てて後ろを向き、見る前に行動した。

「ブレイカ―！」

サンのスターライト・ブレイカ―が放出される。と、言っても集束時間が短かったので、威力は良い砲撃魔法・・くらいだ。
そしてスターライト・ブレイカ―はなにかと激突したようだ。
このまま放出しても良かったが相手の確認をするために、放出を止めた。激突した物もサンの方には来なかった。
土煙が舞う。

「たくもー、私達に黙ってかってに出かけちゃったりするからだぞ。ルールーもガリュウも」

視界が悪い。しかし、響く声だったので、ＦＷとギンガも聞こえているようだ。
土煙がだいぶん晴れてきた。既に向こうの様子は見られる状態だ。

「全くもー、ほんとに心配したんだからな。ま、もう大丈夫だぞルールー。なにしろこのあたし烈火の剣精アギト様が来たからな」

ＦＷとギンガは一度同じ場所に集まった。新しい敵が出てきた以上まずは警戒が必要だからだ。
そして完全に土煙が無くなる。
そしてそこに居たのは・・・・

「おらおら、お前等まとめてかかってこいやーー」

リィンフォースツヴァイと同じくらいの大きさの、赤い髪をした活発そうな女の子が居た。

その子・・アギトは炎の魔力弾をこちらに飛ばしてきた。

「「ック」」

皆はそれぞれ後ろに跳び回避する。気絶しているキャロはエリオが抱えている。

着地した瞬間にガリューが手に刃を出してこちらに来た。すぐに反応したのはギンガで、右手のリボルバーナックルでガリューとぶつかり合う。

「にゃろーー」

とどめを刺せないことにイライラしているのか、怒った声を上げて一気に四発の魔力弾を放ってくる。皆はそれを柱の陰に隠れて凌ぐ。

「今度はこっちの番だ、ちびすけーーーー！」

サンは何にイライラしているのか分からないが、叫び声を出して、強化陣を通した魔法弾をひたすら連射する。

相手はその攻撃に回避したり防いだりした。

その間にスバルは隣に居るティアナに聞く。

「ティアこれからどうする？」

「任務はあくまでケースの確保よ。撤退しながら引きつける」

「こっちに向っている、ヴィータ副隊長とリィン曹長と上手く合流できれば、あの子達も止められるかも・・・だね」

二人が作戦を練っている間サンはひたすら連射していた。

「さっきからちまちまちまちまとうぜーんだよ！！」

アギトの標的がサンに変わった。

「かかったな。雷神装」

サンは身体能力強化の魔法を使い、柱の陰から柱の陰に素早く移動する。
その行動にアギトの攻撃は全く当たらない。

［サン、この上にヴィータ副隊長とリィン曹長が居るからあんたはおとなしくしてなさい］

ティアナからの指示がきた。サンは当然［了解］と返してその場に待機する。

「ルールーなんか近づいてくる。魔力反応は・・・でけえ」

相手もヴィータとリィンの接近に気づいたようだ。

ドドドドド

天井が崩れた。ヴィータの攻撃による崩壊だろう。
土煙が舞った。そして、次の瞬間に土煙の中からリィンが出てきて、アギトとルーテシアの方を向いて魔法陣を展開する。

「捕らえよ凍てつく足枷」

魔法名を言うと、ルーテシアとアギトを囲むように水が出てくる。

「フリーレンフェッセルン」

そして、術式を発動させると水が凍り、大人数人分の大きな氷が二人を閉じ込めた。

「ぶっ飛べ――！」

今度はヴィータがガリューに向い飛び、デバイスのハンマーで思いっきり叩く。

ガリューも受け止めはしたが、力の差がありすぎて飛ばされる。さらに勢いが強かったのか、壁を何枚も突き破りながら飛ばされている。

「おう、待たせたな」

「皆無事で良かったです」

自分達が苦労した相手をあっさりと倒した二人を見て、皆は苦笑いするしかなかった。

「副隊長達やっぱ強―い。でも局員が公共施設壊していいのかな？」

「まあこの辺は廃棄都市だから大丈夫じゃねえの」

なんてことを話していると、エリオの腕に居るキャロが起きたようだ。

「エリオ君？フリード。サン・・・」

キャロは弱弱しい声で、自分が見ている人物の名前を呼ぶ。

「姉さん大丈夫か？」

サンの質問にキャロは首を縦に振る。それを見て皆安心の息を吐く。

「兄さんに感謝するんだぞ。姉さんが気絶した後からずっと守ってたんだから」
「そうなの？エリオ君ありがとう」
キャロの笑顔に顔が赤くなってしまうエリオ。サンはそれを微笑ましそうに眺めていた。

「ッチ、逃げられたか」
ヴィータの声が地下に響く。
「こっちもです。逃げられた・・ですね」
リィンが先程の氷を消すと、そこには地面に穴が掘ってあった。
ゴゴゴゴ
急に地面が揺れた。
「なんだ？」
原因の分からない揺れに、ヴィータは呟く。
「大型召喚の気配があります。多分それが原因で」
要するに大型の召喚獣が召喚されて、その重みでこの揺れが起きているのだ。

「ひとまず脱出だ。スバル！」
「はい。ウイングロード！」

ヴィータが壊した天井の穴に、ウイングロードが螺旋状になって出る。

「スバル、ギンガとサンが先に行け。あたしは最後に飛んで行く」
「「はい」」

三人はすぐに登って行った。

地上ではキャロの言う通り、ルーテシアが大型の召喚獣を召喚していた。

「駄目だよルールーこれはまずいって。埋まった所からどうやってケースを探す？あいつらも局員とはいえ潰れて死んじゃうかもなんだぞ」

どうやらアギトはレリックを狙っていても悪人ではないようだ。先程まで戦っていた相手を心配する気持ちを持っているのが証拠だ。

「あのレベルならたぶんこれくらいのことで死なない。ケースはクアットロとセインに頼んで探して貰えばいい」

誰かの名前なのだろう。アギトはその言葉を聞いてさっきとは違った雰囲気を出して怒り始めた。

「よくねーよルールー。あの変態医師とかナンバーズ連中と関わっ

ちゃ駄目だって！ゼストの旦那の言ってたろ？あいつら口ばっか上手いけど、実際の所あたし達のことなんてせいぜい実験動物くらいしか」

アギトがそこまで言った途端に、何かが潰れる音がした。アギトはまさかと思いながら見てみると、巨大な虫に潰された地面があった。

「やっちまった」

アギトは空中で手と足をだらけさせて、落ち込んでいるような呆れているような格好になった。

しかし、そのルーテシアはアギトの言葉を無視して、ガリューの方を見る。

「ガリュー、怪我、大丈夫？」

ガリューは頷く。おそらく大丈夫と言いたいのだろう。

「戻ってて良いよ。アギトが居てくれるから」

そう言うと、ガリューは魔力陣を展開して、ルーテシアの魔力光・・暗い紫色に輝きそして消えた。

「地雷王も」

次の言葉を言おうとした瞬間、地雷王の下にピンクの魔法陣が現れ、魔法陣と同じ色の鎖が出てきた。鎖は地雷王を縛り、更に追加効果の電気の攻撃がした。

その様子を見て驚く二人。

音がするので後ろを向いてみると、二つのウイングロードにそれぞれ乗って走って来るスバルとギンガ。そして間にヴィータが飛んでいる。
そして急に魔力反応が出たので慌てて前を見ると、ティアナの姿があった。ティアナは魔法弾を撃つが、飛んでかわされる。
ルーテシアとアギトは空中で接近してくる敵にそれぞれ攻撃をするが、どれもかわされた。
ルーテシアはそのまま地面に降りて着地すると、既に槍が向けられていた。エリオだ。
アギトも、周りに氷の刃を展開させられ動けない状態になって居た。

「ここまでです」

リィンがそう言うと二人にバインドがされる。
そして二人の前にヴィータが着地しこう言う。

「子供いじめてるみてえで良い気分じゃねえが、市街地での危険魔法使用に公務執行妨害、その他もろもろで逮捕する」

同時刻、市街地の一つのビルの屋上に二人の女性が居た。
一人は眼鏡をかけて、髪を三つ編みにし、白いケープを羽織っている。
もう一人はマントをはおり、同じマントで被された大きな物を持っている。
二人共青いスーツを着ており、胸には?と?と刻まれたプレートがある。

「ディエチちゃーん、ちゃんと見えてる〜?」

眼鏡をかけている女性がもう一人の女性に聞く。

「ああ、遮蔽物もないし空気も澄んでる。よく見える」

ディエチの目に模様のような物が見える。そしてその先には、レリックを持っていた女の子を乗せたヘリコプターがあった。

そして、ディエチの視線からは、そこまでの距離や、風の流れのデータが映っていた。

「でもいいのか？クアットロ、撃っちゃって。ケースは残せるだろうけど、マテリアルの方は破壊しちゃうことになる」

野蛮というより残酷な内容の話を、いつも通りの話のように語るディエチ。

それを聞いたクアットロも、全く罪悪感がない・・・むしろ嬉しそうな声で答える。

「ふふ、ドクターとウーノ姉さま曰く。あのマテリアルが当たりなら・・・本当に聖王の器なら、砲撃くらいでは死んだりしないから大丈夫、だそうよ？」

「ふ～ん」

全く動揺も、驚きもせずにやる気のない声で返事をする。

そして、自分のマントと包んでいた物のマントを取る。その中身は巨大なライフルだった。

その様子をみていたクアットロの前にモニターが出現する。モニターに映っていた女性は、リニアレールの時にスカリエッティと会話をしていた女性だった。

「クアットロ、ルーテシアお嬢様が捕まったわ。もっともあなたが出る必要はないわ。彼を行かせたから」

クアットロは途中までは興味なさそうな顔をしていたが、彼という単語を聞いた途端、今までとは比べ物にならないくらいの不気味な笑顔になる。

「へ～～彼、ようやく手術から終わったんですか～。うるさかったんですよね～悲鳴とかが」

その彼とはいったい・・・・

ヴィータ達はルーテシアに召喚獣を戻させたり、説教をしていたりした。

逮捕したというのにサンの表情はかなり悪かった。

『けけけ、相棒どうしたんだ？喜ぶべきだろ今は』

『どこか体調でも悪いんですか？』

二人はサンのことが心配なようだ。オーバーの声もいつもより真面目な感じがする。

「なんか嫌な予感がしてな、とてもやばい奴が近くに居るような・・・」

サンの体が少し震えている。それほどまでに恐ろしいのだろう。

そして、その恐ろしい人物は・・・・・

「それって僕のことですかねぇ～？」

すぐ近くに居た。

ナンバーズ（後書き）

まず今回の人工呼吸ですがこれはご都合主義人工呼吸です。実際はもっといろいろ問題があります。
まあいきなりキスというのもいいなと思って書きました。
さて、ついに主人公のオリ敵が出てきました。
主人公も敵もチートにするので楽しみにしていてください。

それと、誤字脱字、表現ミス、アドバイス等ありましたら感想にお願いします。

悪魔との戦い、手に入れた力（前書き）

ついに・・・・・ついにキタ――――

ハァハァ、す、すいません。

はい、今回はチート敵無双の回です。

悪魔との戦い、手に入れた力

「それって僕のことですかねぇ～？」

全員の視線が一気にその声の方に向く。そこに居たのは二十代後半のヒョロっとした男性が居た。

「お前ここにどうやって来た？」

ヴィータが気迫のある声でその人物に聞く。その質問は当然だ。なにしろここら一帯には一応ロングアーチスタッフが監視している。一般人が来たら、間違いなくこちらに連絡が入るはずだ。

「別に～普通に跳んで来たんですよぉ。それよりルーテシアさん、アギトさんを返してもらえますかね～」

二人の名前を聞いてこの人物は敵だと判断した皆はデバイスを構える。サンも当然構えているが、その表情はかなりきつそうだ。

「ヴィータさん、こいつ・・・ただ物じゃない。絶対油断しないでください」

「お前誰に言ってるんだ？こいつの異常さは最初から分かっていたよ」

ヴィータも手に汗を流して緊張の声を出す。二人共デバイスを持つ手が微かに震えている。

その二人の様子を見て他の皆もただ物じゃないと判断して、同じ場所に集まる。

「あいにく僕は気が短いんですよ～」

気の抜けた声を出して、その男性はヴィータに急接近する。慌てて空に飛ぼうとするが既に遅く、拳の振り下ろしをくらって地面に叩きつけられる。

「ガハッ」

「ヴィータ副隊長！貴様―！」

ヴィータがやられた様子を見て、スバルは熱くなったのか男性に接近する。

「「スバル！」」

ティアナとギンガはそれを見て慌ててフォローをする。ギンガはスバルと一緒に男性への接近を、ティアナは魔力弾を撃ち援護をする。その間にサンはロングアーチに報告をする。

［こちらスターズ０５。先程逮捕した少女の仲間と思われる男性とエンカウント。ヴィータ副隊長が一撃でやられました！］

［こちらロングアーチ。少し時間を稼いで下さい。今高エネルギー反応があり、走行中のヘリが狙われています！］

「な、嘘だろ！？」

ロングアーチの通信を受けて思わず声を上げてしまうサン。そして次の瞬間にスバル、ギンガ、ティアナの悲鳴が聞こえる。

そちらを見ると、気絶している三人の姿があった。

「ほらほら～たった三人で来るからこうなるんですよ～」

「スバル、ギンガ、ティアナ！」

リィンフォースが心配の叫びを上げて、三人に近づく。ホッと息を吐いたので命に別状は無いようだ。

「兄さんと姉さんは、気絶している皆の安全を・・・リィンは俺とユニゾンしてくれ。魔力変換物質的にも相性は大丈夫だ」

サンがデバイスを構えながらも三人に指示を出す。ちなみにルーテシアとアギトはだいぶん前に既に逃げていた。

「まさかサン！」

「そうだ俺がこいつと戦う」

サンの指示に気づいたエリオとキャロはサンを止めようとするが、自分達では敵わないと分かっていたのでサンの指示通りに動き始めた。

「言ったでしょう？僕は気が短いんですよぉ！」

そう言ってサンに近づき、右足で回し蹴りをしてきた。サンはそれを、リリとオーバーで受け止める。

「さすがと言うべきですね～僕のスピードを確認して、攻撃を受け止めるなんて～」

余裕そうな声を聞いて、サンは皮肉に笑いながらも答える。

「地上戦プラス対人戦は得意なんでね！」

そう叫び、男性の足を押し返す。

「今だ！リィン」
「はい！」
「「ユニゾン・イン！」」

リィンがサンに近づき、二人が同時に同じ言葉を叫ぶと、リィンが消えて、サンの髪の色と瞳の色、バリアジャケットが変わった。
髪は栗色に少しだけ入っている金髪が亜麻色に変わり、瞳の色は空色になり、バリアジャケットは黒と白がメインだったのが、白と青がメインになった。

「ユニゾン成功・・・ですね」

サンの頭にリィンの声がする。リィンは今サンの中に居る状態なのだ。
その姿を見て男性は狂ったように笑う。

「アハハハハハハ、そうです、楽しませて下さいよぉぉ。高町サーーーン！」

再び接近してきた。
サンはリリとオーバーに氷の魔力強化をする。リィンがユニゾンしている状態なので、強化は何倍にもなった。
そして、混じり合う剣と拳。
氷と肉体のぶつかり合いなのに聞こえてくる音は、金属のぶつかり合いと同じ音だ。
押されているのはサンの方だった。体のリーチもあるが、一番の理由は剣しか戦える武器がないからだ。一方敵の男性は、手と足の合計四本の武器があり、それを使って攻撃する。

「まだまだぁ！」

もっともサンもそれで諦めるようなことはしない。
リィンが氷の刃の展開と発射を。サンがその刃を強化陣でブーストして、男性の行動を遅らせていた。

「ほんとにあなたはムカツクほど恵まれていますね～」

戦いの途中で男性が話かけてくる。当然打ち合った状態でだ。

「ッケ、羨ましいかこのクソ野郎！」

サンも打ち合いながら、言い返す。しかし、その声は疲れているのか途切れ途切れだった。

「じゃあ、その恵みを一つ殺してあげましょう。これを見てください」

一旦間合いを取った二人の間にモニターが出る。そこには大きなライフルを持ったディエチがヘリに向って、撃つ瞬間が映っていた。

「さっきのエネルギー反応の正体か！」

しかし正体に気づいてももう遅い。すでに発射されたのだから。

ドドドドドドド

もの凄い爆音がした。おそらく砲撃がヘリに激突した音だろう。

「シャマルさん！ヴァイス！」

「人の心配してて良いんですかぁ？」

その声を聞いてすぐに構えようとしたサンだったが、既に遅く、蹴り上げをくらった。

「ぐぁ」

蹴り上げられたサンに男性は右のストレートを打つ。

「ぐぅううう」

その攻撃にサンは突き飛ばされ地面を何回もリバウンドする。相手の攻撃は物理的な物なので当然血が出ている。

「サン！大丈夫ですか？」

リィンが心配の声を上げる。魔力的ダメージでは無いので、リィンへのダメージは無いようだ。
その時ロングアーチから通信が入った。

［スターズ０１、ライトニング０１、そして八神部隊長がそちらに向っています。ヘリはスターズ０１によって守られました！］

その通信を聞いてサンは笑うが、すぐに殺気立った顔になる。いくら両親やはやてでも未だに、限界が未知数なこの男に勝てるかどうか分からないからだ。

【だったらやることは一つだ・・・こいつに限界を出させる！】

「リィン」

「はいです」

「「ロンズーデーライトの剣！」」

二人が同時に叫んだ瞬間に、リリとオーバーの周りの温度が一段と下がった。

「氷神装！」

更に氷の魔力変換物質を使った身体能力強化をする。この二つの魔法はサンが今考えたのをリリとオーバーが術式にしたのだ。二機が無言だったのはそのせいだ。

『ケケケ、こいつはただ物・・・というより人間じゃねえな』

『確かに・・・私達ＡＩにも分かるくらいの殺気があります』

二機は男性の姿を見て、それぞれの感想を言う。もっともそんなことは皆分かっていた。

「はあぁぁぁあ！」

今度はサンから接近する。そして、剣の先は男性の方を向いている。殺傷能力の高い突きを狙っているのだ。

そして一気に突く！

しかし、男性は全く怯える様子を見せずにその突きと自分の拳を当たらせた。

「「な？（そんな！）」」

おそらくこの状況で自分達が出来る、最高の攻撃をこの男性は難なく止めたのだ。当然困惑の声は出る。

「こんなものです、かぁ！」

男性は左足でサンを蹴る。それを空いている方の剣で受け止めたが、右のストレートがとんできて飛ばされる。
更に男性は飛ばされているサンに高速のスピードで近づき、かかと落としをして地面に叩き付ける。

「があ！」

サンの悲鳴と、ボキっと何かが折れる音がした。
しかし、サンはまだ意識を失っておらず、リィンはサンの中に居た。

「眠りにつけば良い物を・・・おら！」

転んでいるサンに容赦なく蹴り続ける男性。

「サン！もう眠って下さい。これ以上ダメージをくらうとほんとに死んでしまいます！」

頭の中でリィンの泣き声が聞こえるが、サンはそれに従わずに意識を保ち続けた。

【でも、やべえ。そろそろ限界が・・・・】

と、サンが思っていると声が聞こえた。

「そこまでです！機動六課スターズ分隊の高町なのは一等空尉です！」
「同じくライトニング分隊のフェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官です！」

「「あなたを、公務執行妨害、暴行罪、殺人未遂、その他もろもろで逮捕します！」」

空からなのはとフェイトの声がした。二人はボロボロになったサンを見て頭に血が上ったが、今は冷静な判断が必要なので慌てて頭を冷やした。

「これはこれは、ご両親のご登場ですかぁ？」

管理局指折りの実力者の登場にも全く動揺せずに、先と変わらぬ口調で言う。

「投降するつもりはありませんか？」

なのはがレイジングハートを向けて質問する。
その質問に男性の答えは当然ＮＯだった。

［リィン、お前ははやてさんの所に行け。今俺と居ても宝の持ち腐れだ］

「でも、それじゃあサンは・・・」

［後ろに兄さんと姉さんが居るし、シグナムさんとシスターシャッハがこっちに向っていると情報があったし、大丈夫だ］

シスターシャッハ・・・聖王教会の騎士、カリム・グラシアの言わば秘書のような人物だ。
リィンも心残りがありながらも納得したようで、ユニゾンを解除して飛んで行った。

［エリオとキャロ。サンのことよろしくですよ］

［はい］

一方その頃なのはとフェイトは空中で男性と戦っていた。
どうやら魔法も使えるようだ。

「シュート」

なのはがスフィアを展開して、撃つ。それを男性はなんと受け流してそのまま投げ返した。
余りの行動になのはとフェイトは驚きながらも、スフィアをよける。
フェイトはバルディッシュをザンバーモード・・・大剣の状態にして男性に斬りかかったがそれを、指で摘まんで受け止めた。

「嘘!?」
［なのはちゃん、フェイトちゃん。こっちの準備はＯＫや］

二人に念話がかかってくる。はやてだ。はやては三人の更に上空に居て、広域魔法の準備をしていたのだ。

［［了解］］

それを聞いた、なのはとフェイトは一気に男性から離れて、はやての攻撃が自分達に当たらないようにする。

「広域魔法ですかぁ～」

ゆっくりと顔を上に上げて、呟く。その顔は未だに余裕そうだった。

「そんな顔をしていられるのも今のうちや！デアボリック・エミッション！」

はやてが叫んだ瞬間に、男性を中心に闇のようなものが出てきた。
当然それは攻撃魔法であり、かなりの威力を持っている。

ゴゴゴゴゴゴ

闇が大きくなっていき、一定の大きさになったらまた縮んでいった。

「ハァ、ハァどやこれで終いやろ」

空のガジェットの迎撃、ヘリを砲撃してきた不審人物への攻撃、そして今回の魔法使用。さすがのＳＳランク魔導士でも今回のことはかなりきついようだ。
そして、闇があった場所の中心に・・・・

「これで終わりですかぁあああああ!?」

悪魔が居た。

男性は超スピードではやての上に移動して、下に叩きつける。

「きゃあああー」

はやてが悲鳴を上げる。

「「はやて（ちゃん）！！」」
「遅すぎますね～～」

二人がはやての名を叫んだ瞬間に後ろから声がする。二人は振り向く間も無くはやての近くの地面に叩きつけられる。

「はあああ、紫電一閃！」

更にその後ろから声がシグナムの声が聞こえた。シグナムの魔法の中で一番の威力がある魔法だ。

しかし、それを見ずに腕を後ろにやり、あっさりと受け止める。そして、クルっと振り向き腹に溝打ちをする。

シグナムはその攻撃に耐えきれずに気絶する。そのシグナムを、支えずにゴミのように捨てた男性。

そして、サン、なのは、フェイト、はやてが居る所に降りる。

「弱すぎますね～～まあ良いでしょう。それじゃあ一人ずつ死んでください」

そう言ってフェイトの首を掴み持ちあげる。

「がぁぁ」

「フェイトちゃん！」

なんとか意識を持っていたなのははフェイトの名前を訴えるような声で叫ぶ。

「あははは。良いですよね～愛する人が目の前で死ぬのって。ですよね～お母様～息子さん～～あははは」

男性はなのはとサンを交互に見ながら、狂喜の声で笑う。

「そんな！！フェイトちゃん！フェイトちゃん！お願いフェイトちゃんを許して！！」

なのはの必死の訴えにも全く動じず、むしろ笑いながらフェイトの首を絞める力を強くする。

「「うぉおおお！！」」

男性の左右から、エリオとシャッハが接近する。当然フェイトを助ける為だ。

だが男性は「邪魔です」とだけ言い、スフィアと空いている方の手で二人を気絶させた。

「お願い！」

その時遠くからキャロの叫び声が聞こえた。

「ヴォル、っく」

召喚獣のことを知っていた男性は少し急いでキャロを気絶させた。

方法はバインドの強い

締め付けによるものだった。

「ハハハハハハ、どうです高町サン！皆あなたの前で一人ずつ殺して逝くんですよ！」

しかし、サンの耳にはその言葉は聞こえていなかった。サンの頭には一つの文字しかなかったからだ。

【潰す潰

す潰す潰す潰す】

サンはひたすら狂ったように同じ単語を続けている。

「潰れろ!!潰れるんだ!!!今あれを出さなくていつやんだよ!!!」

「アハハアハ、そんなに僕に潰れて欲しいんですかぁ～～～？無理ですよ～～」

しかし、サンは男性の言葉は聞こえてないようだ。ひたすら叫び心の中で願う。

【あの時のように何かを潰すんだ!!潰れろ!!!】

「潰す!!潰す潰す!!!!」

「そろそろ、お父さんの方も限界の様ですね～～～」

プツッ

その言葉を聞いてサンの中の何かが切れた。

「うあああああああああ～～～～～～～～～～!!!!!!」

「うるさいですね～～少しだま　　ゴフッ」

男性がサンの方を見ようとした瞬間に、何かに殴り飛ばされた。

男性が・・・いや、意識のあるものが皆その何かを見た。

「「「（高町）サン？」」」

そこには雷を纏った姿のフェイトに似たサンの姿があった。

「覚悟するんだな！！このクソ野郎！！！」

悪魔との戦い、手に入れた力（後書き）

ついに次回は中二前回バトルになりますｗｗ

て、いうか敵強すぎましたかね？

まあこれからもサンしか戦わない予定なんでｗ

術式兵装（前書き）

中ニ全開回の始まりです。

皆様が、何この中ニ技wと思っていただけると幸いです。

「ずいぶん好き勝手やってくれたなこのクソ野郎が」

フェイトに似た男性・・・いや、サンが、ありえない物を見るような目で見てくる

男性に向ってそう言う。

男性は殴られた自分のほほを押さえて、そして笑い始めた。

「そうですか、そうですかぁああ～～あの時の映像の能力なんですねぇ～？」

「黙っていろ、このクソが。貴様の声は虫唾が走る」

そう言ってサンは男性に向けて、手を向ける。次の瞬間サンが男性の前に立って居た。しかし、男性はそのスピードに付いていけたのか、サンの拳を受け止めている。

「クソ野郎は止めて欲しいですね～～。そうですね、デビルなんてどうでしょうかぁ？」

男性がどう考えても偽名の名前を言ってくる。サンはそれに耳を傾けずに単語を呟く。

「解放、・黎明の雷傳砲＞れいめいのらいでんほう＜」

その瞬間サンのデビルに掴まれている手の平から、突然雷の固まった砲撃が出てきた。さすがのデビルもそれには反応出来ずに、砲撃をくらう。

すると、サンの姿が大人の状態だが、雷を纏った姿ではなくなった。

サンはその様子を見て喜びもせずにただ次の魔法を使う。

「壱千重奏の悲命＞いっせんじゅうそうのひめい＜固定・・・・圧縮」

サンの手の平に、青い玉みたいな物が出てき、それを潰した瞬間にサンの姿が変わった。今度の姿は髪は氷になり、粉雪が所何処ろに落ち、体も水晶の様に見える。一見不気味な姿だが、よく見る内に誘われる美しさを持っていた。

「いたい、いたいぃぃ～じゃないですかぁ～？」

飛ばされた方からデビルが歩いて来る。傷は全くなかった。

「それにしても不思議な能力ですね～？？さっきまでのダメージが無いみたいな感じがするような～します！！」

叫んだ瞬間に両者が出た。デビルはサンに右のストレートをし、サンはそれを左手で防ぎ膝を使い溝打ちをする。
デビルはそれを左足を使い止め、人間業とは思えない曲がり方をして左足でサンを蹴る。
それを防ぎカウンターをするサン。それを防ぎカウンターをするデビル。
両者が目に見えないスピードで打ち合い始めた。

ドガガガガガ

サンはデビルと打ち合いながらも、皆に被害が出ないようにとデビルを誘導して行く。
だが、その僅かの隙をデビルは見逃さない。

「砲撃魔法～～」

ネーミングセンスの欠片もない、そのまんまの魔法をサンに撃ちこむ。

防ぎきれなかったサン。そして砲撃をくらったサンの体が・・・崩れていった。

「「サン！！」」

皆悲鳴を上げてサンの名前を叫ぶ。

その声を聞いて嬉しいのだろう、デビルがケラケラと笑い始める。

だが、次の瞬間周りの氷が一ケ所に集まり、先と同じ水晶が出来た。

そしてデビルの顔に手の平を当てながら口元を上げる。

「勝手に笑うなよな・・・解放・壱千重奏の悲命！」

サンが叫んだ瞬間にデビルの周りに何百いや一千の尖った氷が出現する。それは不規則な動きをして互いにぶつかり合い音を立て合う。

一秒に何百というぶつかり合いが聞こえそれはまるで悲鳴の様だった。

サンは大人の元の姿に戻り、間合いを取る。右手で先の砲撃を受けた場所を押さえて

いることから、ダメージをくらっていることが分かる。

「サン・・・その姿は？」

フェイトの近くに居るなのはが、サンを見上げながら問う。

質問を受けたサンは五歳児の時と同じ口調で話す。

「これが俺のブラックボックスの正体・・・術式兵装」
「術式兵装？」
聞いたことない単語になのはは復唱する。
「悪いが母さん、説明は後。皆を連れて巻き沿いの無い所に！」
サンは未だにぶつかり合っている氷の群れを睨みながら、真剣な声で叫んだ。
なのはも自分達が居てはサンの邪魔になると理解しているのだろう。
ダメージが少なそうな人から起こして行った。
『マスター私達は何をすればよろしいのですか？』
「悪いが待機状態で術式のサポートをしてくれ。オーバーもだ」
『カカカカ、相棒今俺は凄い現場を見ているのかもな、カカカ』
オーバーが緊張感の無い声で呼ぶ。確かに、エリート部隊の機動六課の前線メンバー全員でも敵わない相手をサンが一人で相手にしているのだ。
「ああ、そうしてやるよ。黎明の雷傳砲、固定・・・圧縮」
再びサンが術式兵装をすると、雷を纏まった姿になる。
そして、氷の悲鳴が収まったと同時に・・・
「おらぁああ！」
突進した。
デビルへの溝打ち、周り込んで首への手刀と蹴り上げ、浮かんでいるデビルをラッシュ、最後にはビルに激突させフィニッシュ。更に

スフィアを大量展開していくつもの巨大な強化陣に通して追撃する。

「ハァハァ、手応えは有ったが・・・」

超スピードでの移動に少し疲れながらも、その闘気は全く薄くなってなかった。

「アハハハ、痛いじゃないですか。ほら血が出て・・・・血？」

デビルが瓦礫の中からゆっくりと出てきたが、血を見た瞬間に様子が変わった。

「僕が何の為にあんなことをしたと思ってるんだ～～～～！！！」

デビルが叫ぶと、空中に居るサンの前に姿を現し、砲撃魔法を使ってくる。サンはそれに反応して、左に超スピードで移動し回避したが、デビルが更に超スピードで動きサンに接近して足を殴る。

「～～～～」

今までの攻撃とは比べ物にならない程の威力にサンは声にならない悲鳴を上げる。

しかし、ただでは負けないのがサンだ。腕をつかんで相手を逃がさないようにし、胸に手の平を当て、例の言葉を叫ぶ。

「解放・黎明の雷傳砲！」

ドガガガガガ

デビルが物凄い勢いで吹き飛ばされる。その勢いでビルをいくつも

貫通する。

「ぐ、ぐぁ」

サンは地面に膝をつけて、殴られた部分の足を手で押さえる。

「ロングアーチから、スターズ０５へ。無事前線メンバーの退避が終わりました。スターズ０５も一旦治療を・・・」

ロングアーチからの魅力的な提案がくるが、あいにくサンには無理のようだった。

「悪いがそんな暇ないみたいなんでね・・・」

サンは足をふらつかせながら立ち、こちらに向って歩いて来るデビルを睨みつける。その姿を見てロングアーチの信じられないような声が聞こえてくる。

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す」

狂ったように同じ言葉を呟くデビル。言葉も言葉なので不気味さが更に増す。

「天津ノ獰飆＜あまつのどうひょう＞固定・・・圧縮」

今度はエメラルド色の玉が出てき、サンはそれを握りつぶす。すると、サンの目と髪の色がエメラルドになり、周りには大量の風の刃が出てきた。

「まだまだ。雷神装、氷神装！」

サンが身体強化の魔法を使うと術式兵装がそれに連動したのか、風の刃に電気と氷の属性が追加された。

お互いは無言のまま飛びだし、殴り合いを始める。

まさに血で血を洗うようなひどい殴り合いだ。

ドガ　ドガ　ドガ　ドガ

二人は既に体の限界が近いようだ。サンは足のふらつきが激しくなっていて、デビルは体に何百もの切り傷があった。

「ハァ、ハァ」

「フヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ」

サンのきつそうな表情に対してデビルの表情は笑っていた。なにが可笑しいのか分からないが、心が狂っているのは確かだ。

「ック」

足がバランスを崩して、サンの重心が僅かにずれた。デビルはその隙を見逃さなかった。

サンの急所に的確なラッシュを繰り出し、更にそのラッシュのたびに体の内部に衝撃を与える魔法を繰り返し使用する。

「がああああ！」

【やべ、今かなりやばい・・・】

サンがそう思っている間も次々とラッシュが来る。サンはそれから

逃れる為にダウンバーストを使い、何とか間合いを取った。しかし、立っているだけでも精一杯でとても戦える状態じゃない。サンが微か勝つことに諦めた瞬間に、デビルがあることを言った。

「あなたを殺したらぁ～次は～～マテリアルを回収するんでしたぁっけ～」

オーバー以上にふざけた声で叫んでサンを挑発するデビル。その目にはサンを殺したくてたまらないのか、目に光が無かった。

「マ、テリ、アル？」

サンはなんとか動く口でその言葉を復唱する。

「ヘリに乗って居る女の子～～～ですよぉぉぉお。その子を捕まえたら僕～～その子を拷問して楽しみたいで～す」

残酷の内容を楽しそうに話すデビル。それを聞いたサンの頭には、あの子のことが思い出される。

「あんな・・・寂しい顔をした女の子に、貴様はそんなことを考えていたのか！」

サンが思い出したのは、あの時の助けを求める表情。そして安心した時の表情。

【それをこいつはぁ！、このクソ野郎は！】

サンの中からどんどん怒りがこみ上げてくる。

「貴様は俺が殺す！解放、天つの獰飆！」

サンが怪我していると思えないスピードでデビルに近づき、自分の手の平から爆風が出デビルは吹き飛ばされる。そして吹き飛ぶデビルへの攻撃はまだ止まってなかった。

「輪廻転生ノ稲妻＞りんねてんしょうのいなずま＜固定・・・圧縮！」

そして飛ばされているデビルに接近し強烈なアッパーをして浮かせる。次に浮いているデビルの上空に飛び地面に叩きつける。

「だか～ら痛いって～～言ってい・・・なんですかこれ？」

最初の方は余裕の声だったデビルが急に真剣な声に変わる。デビルの視線の先にあるのは、自分の手足首と胴に水の渦が巻かれていた。

「軟水縄硬水縛＞なんすいじょうこうすいばく＜」

空中に居るサンはボソっとデビルの動きを止めている魔法を呟く。デビルも自慢の力でこじ開けようとするが、渦の中からそう簡単に抜け出せないのと同じ仕組みの魔法なので、なかなか抜け出せないのだ。

「いくぞ！このクソ野郎！」

サンは叫ぶと風操作の魔法を使い、半径数キロの風を腕に集める。

「ギーガー！」

腕に一つの竜巻が巻かれた。

「サイクロン！」

腕に巻かれた竜巻がどんどん大きくなり、竜巻の先が鋭くなった。

「ブレイク！！」

既にビル一個分の大きさになった竜巻を、デビルに突き刺す。

「がああああぁぁぁぁっぁあああああ！！！」

デビルが物凄い叫び声を上げる。今までのサンの攻撃を痛いレベルで返していた人物がここまで声を上げるのだ。かなりの威力と言える。

「まだまだ、解放・輪廻転生の稲妻！」

右手にある竜巻の中から稲妻が放出され、竜巻を強化する。竜巻は稲妻を纏い、先程の回転より更に回転速度が上がった。

「ぐあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

ドドドドドドド

何かの大きな音がした。

『ケケケ、相棒どうやらこの立体道路が相棒の攻撃に耐えきれないみたいだな、ケケケ』

「あっそ、そんなの関係ねえよ。俺の目的はあいつをぶっ殺す！！」

サンが叫ぶと竜巻が一段と大きくなった。

「ぐおおおあああ、高町！！！サン！！！！貴様は絶対に殺す！！！！」

デビルが叫び終えた瞬間に、立体道路に穴があきデビルは地面に叩きつけられた。

「ハァ、ハァ、ハァ」

サンは体を動かし、デビルの近くまで歩いた。デビルには腹に大きな穴があり、他の所も傷跡が凄かった。

サンはもう大丈夫だろうと、座ろうとした瞬間にデビルの近くの地面の中から女性が出てきた。

その女性は青いスーツを着ていて、首の所にあるプレートには？と刻まれてあった。

敵だと判断したサンは、女性を睨みつけながら言う。

「俺と戦るつもりなのか？」

それを聞いた女性は笑い出した。

「無理無理、あんたこの化け物に勝ったんでしょ。あたしが勝てるはず無いじゃん」

敵の前だというのにやけになれなれしい口調だった。

「輪廻転生ノ稲妻、固定・・・圧縮。で、そのクソ野郎をどうするつもりだ？」

サンは手の平を二人に向ける。
さっきのは言葉は全てハッタリで、この雷を纏まった姿も幻影だ。
これがばれたらと思うと・・・サンは冷や汗をかく。
女性はかなり動揺していたが、すぐに先と同じ表情になった。

「こうするんですよ～」

次の瞬間、二人は地面の中に潜って行った。

「ハァ、なんとか助かったな。もう体が動かねえからな。ハッタリが通用して良・・かっ・・」

言葉を言い終える前にサンは意識を失い地面にぶつかった。
その時のサンの姿は五歳児の時の姿だった。

術式兵装（後書き）

つ、疲れた。
名前考えるのに時間がかかりました。

この描写おかしいと、いうのがありましたら感想にお願いします。

騎士、高町サン（前書き）

今回は独自解釈が多々あります。
苦手な方は飛ばして見て下さい。

騎士、高町サン

「知らない天井だな・・・」

目を覚ましたサンの第一発声はこれだった。普通目を覚ましたら、頭がボーとして状況が掴みにくいが、どうやらサンは違うようだ。

「確か・・・ああ、デビルを倒してその後に気絶したんだっけ」

サンは自分の一番最後にある記憶を思い出し、呟いて自分に確認する。

ウィイン

「目が覚めたようね」

その声のする方にサンは顔を向けると、聖王教会騎士カリム・グラシアが居た。サンより当然階級が高い人なので慌てて、上半身だけを起こし慌てて敬礼をする。

「ふふ、そんなに固くならなくてもいいのよ。今は個人的に来ているから」

その言葉を聞きサンは敬礼を止め、少しホッと息を吐いた。そして、ここに来た理由は分かっていた。

「俺のあの時の能力・・・術式兵装のことですね」

それを聞き、頷くカリム。

「でも、説明してもらう前にあなたの上司にもその話を聞いてもらうわ。はやて、入っていいわよ」

カリムがそう言うと、ドアが開きはやてが入って来た。

「調子はどうや？サン」

「絶好調ですよ。それより皆落ち込んだりして無いんですか？かなり一方的だったから」

サンの気になっていたことの一つだ。今まで管理局指折りと、言われていたなのは達があんなに一方的にやられて落ち込まない訳が無い・・・とサンは思っていたのだ。

しかし、はやてはサンの予想をあっさり裏切った。

「むしろ皆気合いが入っとるよ。次からはサンの足手まといにならないようにって」

それを聞いて、笑顔になるサン。そして真剣な表情になる。その表情を見て、はやてとカリムも真剣な顔になる。

「では説明しますね。術式兵装・・・俺のブラックボックスの正体です。そしてその能力は属性魔法の術式を体に取り込み、その術式を自分が最もイメージする能力に変換できるの能力です」

サンが一旦区切った所でカリムが手を上げて質問する。

「イメージ・・・例えばどんな感じ？」

確かに先の説明ではいまいち分かりにくいだろう。サンはすいませ

ん、と言い質問に答える。

「電気だったら速さ、氷だったら再生、風の場合は刃・・・こんな感じですね。そしてどの属性にも共通するのが、魔法威力と身体能力の強化」

カリムは納得したようで首を縦に振るが、今度ははやてが疑問に思ったのか手を上げ質問する。

「なんでサンは急にそんな知識を持ったんの？」

はやての疑問はもっともだろう。デビルとの戦いの時に開花した能力をサンがここまで説明しているのだ。疑問に思うのは当然だ。

「あの時・・・デビルと戦っていた時に聞こえたんです。なつかしい様な声が。その声が術式兵装の使い方を教えてくれて、そして最後にこの力は俺次第で強くなれる・・・と、言いました」

サンは複雑な表情をしている。サンは本気で言っているのだが、二人が信じてくれるかどうかが分からないからだ。

二人はそのサンの表情を読み取り、お互いの顔を見合わせ首を縦に振った。

「安心して。私達はあなたの言葉を信じます」

「そや、部下を信じんで何が上司や」

それを聞いてサンは心配が取れ、再び真剣な顔になる。

「ありがとうございます。そして、その使い方ですが、まず術式を具現化させる。それを固定し、そして圧縮して体に取り込む、その

術式を演唱無しで発動できるのが解放・・・何か質問はありませんか？」

サンは淡々と説明していくが、途中から二人共腕を組みながら首を傾げていたので、サンは二人から質問を聞くことにした。
まず、はやてから質問をした。

「術式を具現化って魔法陣とちゃうの？」

確かに魔法陣は術式を具現化させたものだ。しかし、サンはその質問に首を横に振った。

「違います。術式を根本的に具現化させるんです。魔法陣はどちらかと言うと術式を示しているだけであって、具現化させている訳ではないんです」

魔法陣とは、魔法で床や術者の下に描く紋様や文字で構成された図あるいは、それによって区切られる空間のこと。術者の魔力を増幅させたり封じたり、魔力の調節弁の働きをする。つまり文字で出来た術式。
一方、術式兵装の術式はその術式を魔法のように具現化して行う能力。
つまり立体的な術式・・・ということだ。

「「なるほど」」

二人はサンの説明だけで、そのことが分かったようだ。さすが魔導士だ。

「じゃあ、その具現化は他の人物でもやり方さえ分かればできるの

ですか？」

今度はカリムが質問する。
かりに出来たとすれば、それは管理世界を左右する出来事だ。そしてそれは悪い方に行く可能性がある。力を持ちすぎると、かならず争いや独裁が出る。
カリムはそれを心配しているのだ。当然はやてもそのことを気にしていた。

「無理ですね。これは先天的な物みたいですし、言わばレアスキルですね。それも超レアの」

それを聞いて二人はホッと息を深く吐く。
レアスキルを後天的に与える技術は今の所は無い。と、言うより今後とも不可能なはずだ。
しかし、二人にはある映像が浮かんだ。

「この前の戦闘機人・・・」

そう、あの女性達は戦闘機人と言い、科学によって作られた言わば改造人間。
その彼女達は独自に様々な能力を持っていたのだ。
もしかしたら不可能ではない・・・と思っていたのがサンに伝わったのだろう。
サンは二人にこう言う。

「これはあくまで予想論ですが、俺は神の雫によって宿られた命・・・つまり神の雫を解析しない限り、俺しか持っていない天性的な物は解析できないんじゃないでしょうか？」

その言葉に二人は「なるほど」と言い納得する。
だが、あくまで予想論であり、サンが非人道的行いを受け、無理やりその能力を解析される可能性は０では無く、むしろ高い。
そこでカリムの出した答えはこうだった。

「サン、あなた私の直属の騎士にならない？」
「へ？」

突然の誘いに思わずまぬけな声を出してしまったサン。
それを見たカリムは少し笑いながらも理由を言う。

「まず、上層部が問題なの。彼らの命令はほとんどの生き物にとっては絶対の命令。かりに彼らがあなたを検査する為に補確しろと命令したら、管理局は必ずあなたを捕まえに来る。まあ、極端な話なのですがね」

カリムは上層部の恐ろしさをサンに説明する。サンも上層部の権力を知っていたので、納得したようだ。

「そして聖王教会。あなたも知っていると思うけど聖王教会はかなりの人数や管理世界からの支持が強く、唯一管理局の権力に反抗できる権力を持っている所。そこの騎士の私の更に騎士になるから権力の暴力からは守れるわ」

カリムが次々に利点を言っていく。確かにかなり良い手段ではある。
カリムは信用出来る人物であり、上層部の権力からも身を守れる。
はやてもこの意見に賛成しているのか、頷いている。

「しかし、機動六課は・・・」

そう、かりにカリムの騎士となったからには、この人に全力で尽くさねばならない。そうなると機動六課には居られなくなる。サンはそれが嫌だったのだ。

「それは私の騎士として機動六課に派遣するわ。そうなれば今まで通りだし、管理局の部隊に居るからといって、上の命令に従う必要は無い」

「なるほど・・・」

確かに良い・・・いや完璧すぎる程の話だ。ここまでおいしい話は普通疑う物だが、サンは、はやてを信じている。そしてそのはやてが信じているカリムが悪い人物の筈が無い。今までの会話でもそう判断していた。そう思ったサンの答えは一つだった。

サンはベッドから降りて、カリムの前で片足でひざまずく。

「私で良ければあなたの騎士にさせてください。マスターカリム」

それを見た二人は思わず笑ってしまう。

「それは、正式な場でするんやよ」

「そう、それはまだ取っておきなさい」

「でも、これから忠誠を誓う人への感謝の気持ちなのです。だからしばらくこの状態で居させて下さい」

サンはきれいな声で呟き、そしてニコリとほほ笑む。

「「〜〜〜／／／」」

五歳児が出したとは思えない程の、魅力に二人は顔を真っ赤にする。

［はやて！この子いつもこんな感じなの！？］

カリムは念話ではやてに聞く。五歳児でこれなのだ。十年・・いや、五年後の姿でもこれをくらったらひとたまりも無い。

［あの父親の息子やからな～～。カリム、手出したらあかんよ？］

はやてはフェイトの顔を思い浮かべる。

そして、カリムの方を見ながらニヤニヤし、注意をした。

はやてが仕事があるという理由で機動六課に戻った後で、サンはカリムに一つの質問をした。

「所で、あの時のレリックを持った女の子は今どこに居るのですか？」

サンの頭の中にはこの前の女の子の姿が思い浮かぶ。

「あの子なら既に検査を終えて、い［騎士カリム失礼します］」」

カリムがサンに話そうとした時、モニターが現れる。そこに映って居たのはシャッハで、何やら血相を変えて話してきた。

「すいません。こちらの不手際がありまして、その合間にあの子が姿を消してしまいました」

あの子というのは、レリックを持っていた女の子のことだ。

その子のことが気になっていたサンはカリムに許可を貰う。

「カリムさん。俺も探しに行ってもよろしいでしょうか？」

サンの言葉にカリムは頷く。

サンは走って部屋を出て、そのまま外に出た。

「しっかし、リリとオーバーが居ないと色々と面倒だよな～。いくら俺の能力を一番近くで見ていたからって」

サンは庭に出ながら、独り言を呟き愚痴を言う。

ガサガサ

茂みが音を立て揺れ、その中から女の子が出てきた。

この前と同じ子だが髪や体が綺麗になったので、この前よりもかわいく見える。また、ウサギのぬいぐるみを持っているのが、なんとも年相応だ。

その子はサンを見ながら呟く。

「夢に出てきた・・子？」

小さい子らしい可愛い活絶で呟きながら、首を傾げる。

「それは夢じゃない。俺はこう言っただろ？安心しろ俺はお前の味方だって」

その言葉を聞き嬉しかったのか、安心したのか、急にその女の子は涙目になってサンに抱きついた。

「ウェェーン！」

サンは急な行動に少し驚きながらも、自分より少ししか違わない背丈の子を優しく抱きしめた。

「よし、よし。名前はなんて言うんだ？」

口調はいつもと同じだが、声色はとても優しかった。

「ウッ　ヴィヴィ、　オ」

「そうか、ヴィヴィオか。良い名前だ」

タッタッタッタ

誰かが走る音が聞こえた。

サンはそちらを振り向くと、なのはとシグナム、シャッハの姿があった。泣き声を聞いて駆けつけて来たのだろう。

シャッハはヴィヴィオがサンの近くに居ることに気づいて慌ててデバイスを構えた。ヴィヴィオが何らか危険を持っているかもしれないからだ。

なのははシャッハのデバイスをそっとおろして、サンとヴィヴィオに近づいた。

［サン久しぶりだね。もう体調は良いの？］

なのはが念話で話してきた。未だに泣いているヴィヴィオを驚かせない為だ。

［当然。そっちこそどうなんだよ？はやてさんからは頑張ってるって聞いたぞ］

［息子の足手まといにはなりたくないからね。まあ皆同じ気持ちだよ］

二人は顔を見合わせながら、念話をしていた。
それに気づいたヴィヴィオは後ろを向く。
なのはを見て怯えた表情になる。急に知らない人物がこっちに来たのだ、怖がるのも無理は無い。

「安心しろヴィヴィオ、この人は俺の母さん・・・つまりママだ」

母さんと言って首を傾げたヴィヴィオにサンは少し恥ずかしい顔をしながら、ヴィヴィオに分かる単語で説明する。

「ママ？」

ママと言う単語を聞いて急にヴィヴィオの警戒が無くなった。なのははヴィヴィオにゆっくり近づいた。

「はじめまして、高町なのはって言います。私にもお名前聞かせてくれるかな？」
「ヴィヴィオ」
「ヴィヴィオ、良いね、かわいい名前だ」

なのははゆっくりと話していく。その声はサンと同じく優しい声だった。

「ヴィヴィオはどこか行きたかった？」
「ママ、居ないの」

ヴィヴィオの呟きになのはは辛い表情をするが、すぐに先と同じ優しい顔になる。
その一瞬を見ていたサンはヴィヴィオに親が居ないことを理解した。

「ああ、それは大変。じゃあ一緒に探そうか、サンも一緒に・・・ね？」
ヴィヴィオは、後ろに居るサンと前に居るなのはを交互に見ながら
「うん」と、頷いた。

「その前にサン・・いえ、騎士サン。今既に聖王教会の神父や管理局の上の方、ＴＶ局の方々がお見えになってます。そちらに行って下さい」

と、シャッハが爆弾発言を次々と言いながら、淡々と答えていく。
さすがのサンもそれには驚き、シャッハを怒鳴る。

「早すぎるだろ！！なんでお偉ら方がそんなに早くに来るんだよ！？」

当然の意見である。そもそも、サンを管理局から脱退させるのにも色々と問題があるだろうし、管理局の上層部は権力の代償として、とにかく忙しいはずだ。
騎士になると決めたのは、数十分の前のことだ。

「騎士はやてが、あの事件の後にすぐあなたの辞表を上に出したのです。当然そのことは騎士カリムもご存じでした。そして、一日前に騎士カリムの騎士を発表すると宣言していたのです」
「「・・・・・」」

余りの行動力に思わず口が開く、サンとなのはとシグナム。シグナムの口は少ししか空いていないが・・・

「・・・ま、いっか」
「「いいの（か）！？」」

サンの緊張感のない声にツッコンでしまった、なのはとシグナム。
相変わらずサンの神経は太かった。
ちなみにその声に怯えたヴィヴィオが泣いてしまったのは・・・まあ余談としては良いだろう。

教会のホールに沢山の人数の人が居た。皆騎士カリムの騎士を見に来たのだ。

「騎士カリム、ご登場お願いします」

神父の落ち着いた、しかし響き渡る声がすると、壇上の横からカリムが出てくる。
カリムが壇上の中心に立つ。
しかし、正式な場なので挨拶等はせずに儀式を続けていく。

「我が騎士となる物よ、ここに」

すると、カリムの反対側からサンが出てきた。
小さな子供が出てきたことに会場はざわめく。大半の人は何故こんな小さな子供が、という意味でざわめいたが、管理局の一部の人物は何故高町サンが騎士に・・・という意味で驚いていたのだ。
そう、はやてが辞表を出したのは信用出来る上司だったので、あっさり通ったのだ。そして、その情報は先程まで隠されていた。

「静粛に！」

神父の響き渡る声が聞こえ、会場のざわめきがなくなる。
サンはカリムの前で、片足でひざまずく。

「高町サン、あなたは騎士として私の剣となり盾となることを誓いますか？」
「私はあなたの剣となり盾となり、あなたを守ることを誓います」

カリムはサンを見、サンは頭を下げ忠誠を誓う。

「それでは、高町サン。騎士カリムに忠誠の証を・・・」

神父の言葉にカリムはサンの目の前に手の甲を見せる。

サンはその手に・・・キスをした。

騎士、高町サン（後書き）

はい、再び反省はしている後悔はしていないを使います。

こうした方がサンの問題が一気に解決できると思ってこうしました。

矛盾点があるかもしれませんが、目をつぶってくれると嬉しいです。

番外編・コラボ回（前書き）

今回は私のわがままで、コラボ回です。

投稿始める前から、私の夢でした。

今回はサイバスターさんの転生少年と魔法少女から二人来ます。

番外編・コラボ回

サンが騎士になってしばらくたった。
既にカリムから派遣されていたので、今は機動六課のなのはとフェイトの部屋に居る。

「う～～」

隣には、うめき声を上げているヴィヴィオが居た。理由としては、目の前にあるゲームのｌｏｓｔという文字が原因だろう。

「もう一回！」

ヴィヴィオはサンに向って叫ぶ。その目は微かに涙があった。
サンは、次は負けようと思ってリトライのボタンを押そうとした時に・・・

ウーウーウー

アラートが鳴った。
サンはすぐに情報を得る為に部屋を出ようとするが、一旦走るのを止めヴィヴィオの方に振り向いて言った。

「帰ったらまた相手してやるからな、練習しとけよ」

その言葉にヴィヴィオも安心したのか、笑顔になる。
その笑顔を見たサンは、すぐに部屋を出て通信室に向う。

「リリ、オーバー何があったか分かるか？」

『先に、次元震がありました。その時に高魔力反応も現れました』
『カカカ、その魔力がなんとＥＸランク。どうしますか騎士サン、カカカ』

二人の言葉に一旦走るのを止めたサン。ＥＸランクなんて聞いたことが無いからだ。かりにその人物がデビルのように狂っていたらと思うと背筋がゾッとする。
しかし、考えてもらちがあかないので、再び走りだした。

ウィイン

「ロングアーチスタッフ、今どういう状況だ！？」

サンが通信室に入っての最初の言葉はこれだった。

「ロングアーチ、バルディッシュが次元震の反応があったって言ったけど本当！？」

フェイトもサンのすぐ後に走り込んで叫んできた。やはり似たもの父子だ。

「フェイトちゃん、サン、どうやらほんとのようや。そしてその近くにＥＸランクの魔導士が居るみたいや」

怒鳴って来た二人に、あくまで冷静な言葉で返すはやて。

「どうするんですか？はやてさん」
「私とサンが出て、その魔導士がこちらに敵意が有るか無い次第でその場で・・・これが良い気がするんだけど」

サンの質問にはやてが悩んだ瞬間にフェイトが自分の意見を言う。
確かに対人戦が得意な二人が行くのだ。良い手段だろう。

「よし、ほんならそれでいこう。ライトニング０１セイント０１出動！」
「「了解」」

そして二人は飛行魔法を使い、現場まで飛んで行った。

現場の近くまで飛んだ二人は、近くの所で降りた。
相手に目立つのもあるが、かりに相手が物分かりの良い人物の場合は見下して話すよりもはるかに印象が良いからだ。

「確かここら辺のはずなんだが・・・」
「バルディッシュ、リリ、オーバー、どこ？」

二人は辺りを見渡すが、樹木しか見えない。

『『北です（だ）』』

デバイス達の発言の通りに進んで行く二人は、途中で何かを見つけた。

「「車？」」

そう、そこにはこの辺りの雰囲気に全く似合わない車が合ったのだ。
二人はそこに近づくと・・・

さわやかそうな青年となのはの姿が有った。

「なのは!?」「母さん!?」

今機動六課に居るはずのなのはがここに居るのだ。二人は当然驚く。

「「母さん!?」」

女性はなのはしか居ないのでなのはに言ったのだろうが、二人はこの子のことなんて全く知らない。こちらの二人も当然驚く。

「「なのは（母さん）何でここに、居・・・・・・」」

二人はなのはに近づくと一つの、見てはいけない物を見た。なのはと青年が手を繋いでいたのだ。
なのは依存症とマザコン（隠れ）がこの現場を見て行うことは一つ。

「「殺す!!!」」

二人はデバイスを構える。デバイス達は持ち主の殺気にガタガタと震えながらも、指示された術式の展開をする。

「ちょ、ちょっと待って下さい。フェイトさんとえ～と」

デバイスを向けられた青年は慌てて二人を止めようとするが、既に二人の頭の中には殺意しか有らず無駄だった。
一方なのははというと。

「光君との息子?光君との息子!／／」

と、同じことを呟いていた。どうやらこの青年の名前のようだ。

「プラズマランサー！！」

フェイトがなのはに当たらないようにスフィアを展開させて、光に攻撃する。

「うわっと」

光は慌てて上空に飛び回避したが、そこには術式兵装をしたサンの姿が有った。

「え～～と、話を聞くつもりは「無い」ですよね～」

光はサンの答えに、顔を引きつらせながらもサンの拳を回避した。

「害虫は！」
「殺すべき！」
「なのはは！」
「父さんの嫁！」

二人はまさに息をぴったり合わせて、光に接近する。もはや話し合いや、相手がＥＸランクというのは忘れているようだ。

「しょうがないな、少し頭を冷やしてもらうか。アーカシックハートエクセリオン・セットアップ」

光がデバイスを起動させてバリアジャケット姿になる。
そして杖のデバイスを砲撃用の杖にして二人に向ける。

「アーカシックバスター！」

EXランクという出鱈目な魔力を使った砲撃を二人にしてくる。その太さはかなりの物で、魔法なんて知らない人でも凄いと言える迫力を持っている。

が、高速戦が得意な二人はそれを回避できた。

「プラズマスマッシャー！」

「解放・黎明の雷傳砲！」

二人は同属性の魔法を使い、光を挟んだ状態で攻撃する。

「甘い」

光はその攻撃をなんとシールド一枚ずつで防いだ。

殺意丸出しの二人でも、さすがにその様子には驚いたようだが、先程の手を繋いでいるシーンを思い出して再び、攻撃を再開した。

「壱千重奏の悲命、固定・・・圧縮！」

サンが術式兵装をしている間に、フェイトはデバイスを使い光と接近戦をする。

「なのはは私の嫁、なのはは私の嫁・・・・・」

と、同じことをひたすら繰り返すフェイトに、光は苦笑いしながらもフェイトと打ち合う。

【成程この世界では、なのはとフェイトさんは付き合っているみたいだね。でも・・】

「なのはは私の嫁、なのはは私の嫁。害虫は殺す殺す！」

光はこの世界の人物関係を納得したが、目の前に居る「なのは」と繰り返すフェイトを見て呆れた顔をしてしまう。

二人は次々とぶつかり合う。

接近戦用のデバイスでは無いのに、接近戦用のデバイスと打ち合っていることからも、かなりの使い手というのが分かる。

フェイトの攻撃を光が受け止めた瞬間に、後ろから拳が跳んで来た。

光はそれを長年の感でかわしたが、サンの膝蹴りを腰にくらってしまい少し怯む。

その隙をフェイトが見逃す訳が無く、ザンバーフォルムのバルディッシュで海の方に叩き飛ばす。

「ック」

さすがのＥＸ魔導士も今の衝撃には逆らえずに、海の中に飛ばされる。

ドドーーン

もの凄い水しぶきが立つ。

「永劫の氷河＞えいごうのひょうが＜」

サンが手を海の方へ向け、魔法名を呟くと一瞬にして海が凍った。

「有存無存の時間＞ゆうぞんむそんのとき＜」

そして、氷が再び一瞬にして砕けた。

「光君――！」

砕けた氷を見て悲鳴を上げるなのは。それを見たサンは微妙な顔をして言う。

「やべぇ、やりすぎちまった・・・かな？」

疑問形の所が未だに反省してないようにしか見えない。顔も所何処ろ笑っている。

一方フェイトも満足した表情をしている。なのはに近づいた害虫を削除した・・・と、思っているのだろう。

［フェイトちゃん、サン！］

二人の間にモニターが現れる。

［どうしたのはやて？無事に害・・・んっん。次元震を起こした犯人を倒したよ］

誰が聞いても途中で害虫と言いかけたとしか聞こえない言葉を言ったフェイトに、はやてはあえてツッコまずに部隊長として冷静に話す。

［なあ二人共、この人を見てみ］

モニターが移動されてそこに映っていたのは・・・なのはだった。

［［え？］］

二人は声を揃えて間抜けな声を出して、慌てて先程なのはが居た場

所を見ると・・・なのはが居た。
二人の時間が止まった・・・まあ体感時間だけなのだが。

［二人共・・・たぶんだと思うけど、そこに居る私は私じゃ無くて並行世界の私だと思うの］

「えぇえええ!?じゃ、じゃあさっきの人は並行世界の母さんの恋人であって、この世界の母さんの恋人じゃないってこと!」

サンはギギギと擬音を出しながら、さっきまで凍っていた海を見る。
そこには綺麗な氷の欠片が沢山あった。

「なんてことだ!母さんの浮気相手を殺したのなら、いくらでも弁解の余地はあったが、まさか並行世界の母さんの恋人だったなんて・・・」

サンは空中で、手と膝を落としながら空中で落ち込んでいる状態になる。なんとも器用な行動だ。
そして、さすがのはやてもサンの発言にはツッコミを入れた。

［浮気相手であろうとなかろうと、人を殺したら弁解もヘッタくれもあるわけないやろ!］

そのことを聞きサンは更に落ち込む。しかし前世の記憶が有るのにこの反応・・・やはりサンは天然のマザコンの様だ。
その様子を見たフェイトはサンに近づき、肩に手を置く。

「でも害虫は害虫だから駆除しても大丈夫だよ。私のなのはに手を出したんだし」

フェイトの表情はいつもの笑顔だ。しかし、現場が現場なので、その笑顔はホラーにしか見えない。
そして再びツッコむはやて。

「いくらなんでも並行世界のなのはちゃん全員が自分の嫁なんて都合よすぎるやろ!?」
「でも、でも」
「でもやあらへん!それより、そこで泣いているなのはちゃんはどうするん!?」

はやての言葉に気づき慌ててなのはの方を見ると、案の定泣いていた。

「うっう、ひ、光君　うっうぅ」

・・・・・

「ど、どうしようサン？」

さすがのフェイトも悪いと思ったようだ。いや、なのはが泣いている姿を見るのが嫌なだけかもしれない。
まあ、フェイトの心境はどちらでも良いが、とにかく慌てた様子でサンに聞く。

「はあ？こんな重い内容を普通五歳児に話すか？」

サンは何とか自分に矛先が向かわないようにした。

「そもそもサンが・・！」
「ちょ！？父さんこそあの時・・！」

ついに喧嘩になってしまった二人。
まさに最悪な状態だった。そして、その状態を壊したのが一人の声だった。

「ふ～～危なかった。ちょっと反応が遅れていたら死んでいたかもしれません」

この場に居た全員が声のする方を見ると、そこには光の姿があった。

「光君！」

なのはは光の所まで飛んで行き、抱きつく。

「ごめんねなのは、心配かけて」

なのはを優しく包み込みながら、耳元で囁く。

「ううん。いいの、光君が無事だったんだもん」

そう言ってなのはは一旦抱きつくのを止め、ほんの少しだけ離れる。
そして、光の唇に自分の唇を合わせようと・・・

「あの～～」

なのはの動きが止まり辺りを見渡すと、苦笑いしているサンと、沢山のモニターからこちらを見ている人達と、口から魂が出ている、という描写が合った姿のフェイトが居た。

「えい」

人の視線の中でも気にせずに、なのははキスをした。

「あぁぁぁぁあああ！」

なのはと光のキスを見たフェイトは、叫び気絶した。

ここは機動六課部隊長室、そこにはサン、光、この世界のなのは、なのは、はやてが居た。フェイトはあの気絶した状態から、未だに目を覚ましていない状態だ。

「先程はうちの部下が大変なご迷惑をおかけして、本当に申し訳ありません」

はやてが綺麗な９０。を作り、なのはと光に謝る。

「いえ、構いません。それより僕達は帰れるのでしょうか？」

光は当然の質問をする。

「ロングアーチに解析は任せては居るんですけど、やはりロストロギアの解析は難しくて」

はやてが現状を説明する。その声は謝罪するような声だった。

「あの、光・・・さん」

サンが敬語を使って話しかける。それを見た光はこう答える。

「さっきの口調で構いませんよ。それと、僕はさっきのこと全然怒っていませんから、安心して下さい」

それを聞きサンはホッと息を吐く。そして口元を僅かに上げて口を開く。

「光お前すげえな。どうやってあの氷から脱出したんだ？」

サンの失礼な口調と質問に、はやては止めようとするが、光が良いと答えたのではやてはしぶしぶ後ろに下がった。

「あの時実は氷の中に居たんだよ。そしてフィールド系の魔法を使って、氷の砕けが自分に来ないようにしたんだ」

「つまり、フィールド系魔法のゴリ押しってことか？」

「まあ、そういうことになるかな？」

普通のフィールド系は温度の変化から身を守ったり、風圧が来ないようにする魔法で、それぐらいしか使い道が無いのだ。

理由は常時魔法を使っている状態なので、魔力の消費量が激しいから。

そして、そのフィール系魔法を使って物理的な攻撃を防いだのだ。

まさにＥＸランク魔導士の特権の技だ。

「すげーな、光って」

「そうでも無いですよ。それよりサン君の能力って何なんですか？」

二人は話をどんどん盛り上げていった。

一方二人のなのははというと。

「ねえ、なのはさん？」

「何？なのはちゃん」

取りあいず混乱はしていないようだ。並行世界から来たなのはをなのはちゃんと呼び、この世界のなのはをなのはさんと呼んで、混乱を避けているようだ。

「なのはさんは、フェイトちゃんと付き合っているんですよね？」

並行世界の自分が、女の親友と付き合っているのだ。来た方のなのはの顔は複雑そうな表情だ。

「うん。多分さっきのイメージが強いから引いちゃったんだね」

先程のフェイトは確かに異常だったし、なのはもあんなフェイトを見たのは初めてだった。しかし、自分がそれだけ愛されていると思うと自然に顔が赤くなる。

「どうしたんですか？」

なのはは、急に顔が赤くなったなのはの心配をする。

「う、うん大丈夫だよ。でね、いつものフェイトちゃんはすっごくカッコ良くて、男の人よりもてて、私のこと愛してくれて、私のことなら何でも分かってくれて、偶にタラシモードっていう状態になってときめかせてくれたり、他にもいっぱいあるんだ」

なのはの惚気に苦笑いするしかないなのは。自分も光とはラブラブ

だと思っていたが、まさかそれを超えるカップルが居ること、更にそれが同性なので余計に驚く。

「なのはちゃんは光君とはどういう仲なの？」

「え～と私と光君は、元々幼馴染なんですけど理由があって光君が高町を名乗ることになったんです。そして、同じ家に住んでいたら段々惹かれあって・・・今は婚約中です。ほら」

来た方のなのはは、ポケットから指輪を出して自分の薬指にはめた。

自分同士で恋バナをしている二人。

なんともシュールな絵だった。

一旦それぞれの雑談が終わった所で、皆は光から何故この世界に来たのかを聞いた。

なんでもあの車は神の車と言い、純粋な気持ちで願えば、どんな場所にでも行けるようだ。

そして二人はそのロストロギアの輸送中で、誤って発動してこちらに来たらしい。

「じゃあ、二人が元の世界に帰りたいって思えば、すぐに帰れるんじゃねえか？」

サンがもっともな意見を言う。しかし、それには大きな問題があった。

「純粋な気持ちというのに困っているんです。僕もなのはもどこかに行って満足したい、という願いを込めて発動してしまいましたから」

光は申し訳ないのだろう。笑顔で話しているがその顔は自虐的だった。

「う～～んこっちで満足かあ。同じ並行世界やから、ここら辺で遊んだりデートしたりしても向こうと変らへんからな～」

はやてが手を顎に当てながら、案を出してそれを自分で却下したりする。

「「う～～ん」」

皆腕を組んで考えるが、やはり何も思い浮かばない。

しばらくの時間が経った。

「取りあいず光君となのはちゃんの部屋は用意させといたから、一旦そっちで休憩したらどや？」

はやてが二人に言う。確かに良い手段だ。

並行世界に来た二人は疲れが溜まっているだろうし、リラックスすることで新しい発想が出たりもする。

はやてはこの二つを考えて、休ませようとしたのだ。

「あ、やべ。俺もヴィヴィオ待たせたままだった。じゃあ光、かあさ・・・じゃなくてなのはさん、先に失礼するな。後はやてさんも少し休んだ方が良いと思いますよ」

「あ、待って。私もヴィヴィオにキャラメルミルク作ってあげる約束してたんだった。じゃあ光君、なのはちゃん、私も失礼するね。サンの言う通り、はやてちゃんもたまには休憩した方が良いよ」

サンとなのははそう言って部隊長室から出て行った。

「二人共ありがとな～」

はやては既に居ないなのはとサンに聞こえるように少し大きな声で返事をした。

「僕達も行こうか」

「うん」

二人は手を恋人繋ぎにする。

「はやてさん、僕達も失礼します」

「はやてちゃん、体に気を付けてね」

「二人共お疲れさん」

光となのはも与えられた自分の部屋に行った。

急に静かになった部隊長室。

危うく保護対象を殺しかけた部下と派遣された騎士。不屈のエースオブエースが二人。あの中である意味の常識人の光もＥＸオーバー魔導士。

こんな面倒事が一気に起きたのだ、言う言葉はもちろん・・・

「疲れた」

これだった。

翌日の早朝、サン、光、なのは、なのは、フェイト、はやてが神の車の前に来ていた。理由はサンが帰る方法を見つけたからだそうだ。

「さっそくだけどサン君。帰る方法って何かな？」

「簡単なことだ。満足して帰るんじゃなくて、向こうに帰りたいと思い帰れば良いんだ」

サンの言葉に皆首を傾げる。

帰りたいと思えないから困っていたのだ、それなのにどうやって向こうに帰りたいと思わすのかを皆考える。

「なのはさん」

サンは皆の傾げている表情を無視して、来た方のなのはを呼ぶ。

「はい」

「実はな、なのはさんがこのままこの世界に居ると、父さんに襲われる可能性があるんだ」

サンが言葉という爆弾を投下した。

「「えええええ！？」」

いきなりのカミングアウトに驚きの声しか出せない皆。

光は来た方のなのはの手を握り、フェイトから遠ざける。

フェイトは、自分はこっちのなのは一筋だよと、こちらのなのはに言ってる。

はやてはこのカオスな状況に爆笑していた。

「確かに最初は光が居るから大丈夫だが、必ず隙が出るはずだ。父さんはその隙を狙ってなのはさんを襲ってくると思う。母さんも一緒に」

「それってなのはを二人同時に食べれるってこと？」

サンの発言に普通は怒る所だが、逆にサンの意見に便乗してしまったフェイト。

そしてそのフェイトの発言に、来た方のなのはは引きつった顔しか出来なかった。

「あ～～試しに願ってみますね」

そう言って神の車に光と近付く。

「フェイトちゃんがまともな世界に帰りたい」

すると、二人と神の車がスッと消えた。

・・・・・・

沈黙が流れる。

「なのは、私はなのはを愛しすぎていたのかな？」

突然言い出した言葉がこれだった。

「ど、どうしてそんな言葉が出るの？」

長年の付き合いで、婚約者のなのはにも今の言葉はよく分からないようだ。

「私はなのはを愛して、愛しすぎて、それで並行世界のなのはが誰かと居ると胸が苦しくなって、そして欲しいという欲望まで出てしまう・・・」

フェイトの言葉を聞いたなのはは笑顔になってフェイトに抱きつく。

「正直私は嬉しかったよ。勘違いだけど浮気相手と戦ってくれたし、あんなに怒ってもくれた。私が他の人と居るとあんなに怒るんだなーって改めて知れた。まあ並行世界の私は私とは違うから何とも言えないけどね。でも、これってすっごく嬉しいことなんだよ」

なのはは抱きついた状態で言う。そして、一旦抱きつくのを止め僅かに離れる。

フェイトはその行動を見てキスをしようとなのはに顔を近づけるが、なのはに止められた。

「たまには私からだよ。フェイトちゃん」

そう言ってなのはは、自分の唇とフェイトの唇を合わせた。

［あとね、フェイトちゃん］

なのははキスをした状態で念話をする。おそらく他の皆に聞かれたくない内容なのだろう。

［何かな？なのは］

フェイトもいつもの口調で返す。

「私が頑張って二人分をフェイトちゃんに食べさせてあげるよ／／／」

一方、元の世界に帰って来た光となのはは、ロストロギアを発動させたことにより上司に怒られて、始末書を何枚も書かされたという。

「結局どこにも行けなくて残念だったね」

なのはは顔をうつむかせながら言う。

「でも、あの子と出会えたじゃない。あの子との出会いはとても大きい物だと思うよ」

「確かに面白い子だったよね」

「それもあるけど一番は、サン君ならきっと全次元最強の魔導士になれるはず・・・と思えたことかな」

光は太陽を見つめながらそう呟く。

「確かに、あの子には限界が無い感じだった」

なのはも光の横に座り、太陽を見る。

そして二人は顔を見合わせて再び太陽を見る。

「「あの子は太陽の様に輝ける」」

番外編・コラボ回（後書き）

キャラが色々と崩壊したかもしれませんが、まあなのはの浮気と思ってしまったからですｗｗ（ちなみに二人はなのはが悪いとは一切思っていない）

今回コラボさせていただいた、サイバスターさん、許可や案を出していただき本当にありがとうございました。

サンの予言（前書き）

今回はなんというか～～～まあ頑張ったので見てください。

サンの予言

サンの儀式の時の映像を当然機動六課メンバーも見ていた。
オフィスから見ていたのはスバルとティアナ。彼女達は、機動六課に来たヴィヴィオの相手をしているライトニングの仕事も引き受けていたのだ。

「はいお終い」

なんとティアナは自分とライトニングの分の仕事をスバルより早く終わらせたのだ。

「早！」

当然スバルのコメントはこれだろう。信じられないような、羨ましい様な顔をしている。

「もたもたしない。少し別けなさい、手伝ってあげるから」
「あ～ありがとう。書類仕事苦手～」

猪突猛進のスバルらしい言葉だ。

「今日はライトニングの分も引き受けちゃったからねー。それでも、保育士もどきよりかわ気楽だわ」

気の強いティアナらしい言葉だ。

「え～、私は結構楽しかったけどな～。でも驚いたよね、まさかサンが騎士になるだなんて」

スバルは先のサンの騎士になった時の儀式の映像を思い出す。

「確かにねー。でも、案外向いているかもよ。フェイトさんの息子だしね」

ティアナは指を動かしながら、なのはとの摸擬戦の時に助けてくれたサンの姿を思い出す。

「あ～ティアってもしかしてサンに気が有ったりする？」

いつもと違うティアナの表情を見て、ニヤニヤしながら言う。しかし、ティアナは全く動揺せずに答えた。

「別に、ガキに恋愛感情持つ程私は飢えて無いし、そんなに焦る年でも無いでしょ」

「え～つまんな～っと」

途中まではいつもの笑顔だったが、先日の戦闘機人とデビルの映像を見て急に顔をしかめた。

「ああそれ、先日の」

「アルトが記録した各種の詳細データ付き。あれだけのことをしでかして、使ってたのは魔力じゃなくて別系統のエネルギー。デビルっていう人は魔法を使ってたけど、身体が異常。そんなのを体の中に内蔵してるってことは、やっぱりこいつら・・・」

スバルが色々考えていたので、それを止めようとしてスバルにでこピンをする。

身体能力強化の魔法を使ったのか、スバルはでこピンの威力によっ

て、椅子から落ちる。

「ティ、ティア？」

急な攻撃に涙目になりながら、ティアナを見る。

「馬鹿ね、こいつらが何なのか考えるのなんて、あたし等の仕事じゃないでしょ。判断するのはロングアーチスタッフと隊長達。あたし等が作ってんのはその判断材料としての報告書。分かったならさっさと作業する」

「はい」

ティアナの理論的言葉にしぶしぶ従って、再び仕事を始めるスバル。その様子を見たティアナはこう言った。

「それに確定が出たとしてもあんたが悩むことじゃないでしょ。ちゃんとしてなさい」

言葉はきついがティアナなりの励ましだった。そして、長年の付き合いのスバルにはそれが分かった。

「ティア・・・ありがと」

「うっさい」

スバルは嬉しくて、ティアナは照れて顔が赤かった。

無事にカリムの騎士となったサンは、沢山の人物からの質問等を上手くごまかしたりして、今はカリムの仕事部屋に向っていた。

「さっそく何か仕事ですかね？マスターカリム」

サンは横に居るカリムに話かける。騎士となったからにはこの人物に全力で尽くすと決めたのだ。当然口調も変わってくる。

「仕事というより大事なお話ですね、個人的なのですが。あなたのご両親とはやて、クロノ提督も一緒にね」

「成程・・・今聞くのは得策では無いようですね」

フェイトの兄・・・つまりサンの伯父のクロノが来ると分かって、サンはかなり重要な話だと理解した。

「ふふ、さすがね」

それを聞いたカリムはそう答えた。

ウィイン

「失礼します」

サンとカリムが部屋に入ってすぐに、クロノが来た。

「お久ぶりです。クロノ提督」

サンはクロノに敬礼をする。

その真面目な様子に思わず口をあけてしまうクロノ。サンが個人的な時に今の様に真面目にすることは無かったからだ。

「ど、どうしたんだサン?どこか具合でも悪いのか?」

少しひどい様な気がしないでも無いが、いつものサンを見慣れたクロノにとっては当然の反応だった。

「いえ。ただ私はマスターカリムの騎士になりました。マスターに迷惑をかけまいと行動しているだけです」

「そ、そうか」

クロノはサンの余りの豹変に苦笑いするしかなかった。カリムも同じ表情だ。まさかサンがここまで真面目にしてくれるとは思ってなかったようだ。

「まあまあ、サン。今日はほんとに個人的な会談ですので、そんなに固くならなくても」

カリムに言われてサンは腕を組みしばらくウ～ンとうなる。そして納得したのかいつもの表情に戻った。

「ではそうさせて貰いますね。マスターカリム、クロノ伯父さん」

カリムには敬意のある呼び方だったが、クロノにはおちょくっている声だった。そして、クロノもその呼び方に不満を持ったようだ。

「伯父さんは止めろ、伯父さんは」

「いいじゃないすか、伯父さん」

五歳児におちょくられている提督を見て思わず笑ってしまう、カリムだった。

ウィイン

再びドアが開く音がして、三人がそちらを向くと、なのはとフェイト、はやての姿があった。
なのはとフェイトは足を揃えて、敬礼をする。

「高町なのは一等空尉であります」
「フェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官です」

二人は初めてなので挨拶をする。はやては前からの知り合いなので、挨拶はしなかった。
カリムは二人に近づき自己紹介をする。

「初めまして、聖王教会教会騎士団騎士カリム・グラシアと申します」

カリムが挨拶をした後に、サンが三人を椅子まで案内する。
なのはは失礼します、と頭を下げながら着席。
フェイトは兄であるクロノに敬礼をする。

「少しお久しぶりです、クロノ提督」
「ああ、フェイト執務官」

その様子を見てカリムとはやては笑ってしまう。

「ふふ、お二人共そう固くならないで。私達は個人的にも友人だから、いつも通りで平気ですよ」
「と、マスターカリムが仰せですよ。父さん、母さん」
「普段と同じで」

「平気や」

サン、クロノ、はやてと言葉を繋げていき、なのは達の固さを取る。

「じゃあ、クロノ君久しぶり。サン、かっこよかったよ、騎士になるときの儀式」

なのはは先の固い顔を崩して、いつもの笑顔になる。

「サンキュー母さん」

当然、そう言われ喜ぶサン。

「兄さん、元気だった？」

フェイトもいつもの顔で言う。しかし、久しぶりに兄に会えてうれしいのか、笑顔が魅力的だ。

「まあな。仕事が忙しくて帰れないから、よくエイミーに怒られているけどな」

それを聞いて笑うフェイト。

エイミーとはクロノの妻で、フェイトも昔からお世話になっているお姉さんだ。元気が良く活発的なエイミーなら確かに言うな、と思ったのだ。

「んっん！」

和気あいあいの空気になっていたのをはやてが咳払いして、緊張の空気にした。

「さて、先日の動きについてのまとめと、改めて機動六課設立の裏表について、それから今後の話しや」

カーテンが閉まり、外から見えないようになった。
そしてそれを見計らって、クロノが口を開く。

「機動六課設立の理由はロストロギア、レリックの対策と独立性の高い少数部隊の実験で、知っての通り六課の後継人は僕と騎士カリム、それから僕とフェイトの母親の親で上官、リンディ・ハラオウンだ」

クロノがモニターを展開させて、人物画像を流していく。

「それに加えて非公式ではあるが、かの三提督も設立を認め協力の約束をしてくれている」

三提督という言葉を聞き、なのはとフェイト、サンは驚きの表情をする。

「その理由は私の能力と関係があります。私の能力プロフェーティン・シュリフテン」

カリムは一旦立ち上がり紙の束の紐を取り、紙を自分の周りに浮かせる。サンはカリムにこのような能力が有ったことにかなり驚いているようだ。

「これは最短で半年最長で数年先の未来を、それを詩文形式で書きだした、預言書の作成を行うことが出来ます。二つの月の魔力が上手く揃わないと発動できませんから、ページの作成は年に一度しか

出来ません」

そう言って三枚の預言書を、なのはとフェイト、サンにそれぞれ一枚ずつ渡す。

三人はそれを見るが全く分からず、顔を見合わせても首を横に振る。

「預言の中身も古代ベルカ語なので、解釈によって意味が変わることがある難解な文章。世界に起こる出来事をランダムに書き出すだけで、解釈ミスを含めれば的中率や実用性は、割と良く当たる占い程度・・・つまりは余り便利な能力ではないんですが」

カリムの説明に口を挟まずに、黙って話を聞く三人。

「聖王教会はもちろん、次元航行部隊もこの予言には目を通す。信用するかはどうかは別にして有指揮者の予想情報の一つとしてな」

「ちなみに、地上部隊はこの予言がお嫌いや。地質のトップがこの手のレアスキルとかお嫌いやからな」

三人ははやての言葉を聞き、一人の人物が頭に浮かんだ。

「レジアス・ゲイズ中将・・・だね」

レジアス・ゲイズ中将・・・地上での犯罪率が高まっている為、質量兵器の導入を考えている。優秀な魔導士は海や空に行くことからその二つを憎んでおり、自分も魔導士では無い為か、レアスキル持ちが嫌いな人物だ。

「そんな騎士カリムの予言能力に、数年前から少しずつある事件が書き出されている」

クロノはそう言って視線をカリムに向ける。それを合図にカリムは事件の内容を語る。

「古い結晶と無限の欲望が集い交わる地
死せる王の下、聖地よりかの翼が蘇る
　死者達が踊り、なかつ大地の法の塔はむなしく焼け落ち
それを先駆けに数多の海を守る法の船もくだけ落ちる」
「それって」
「まさか」

三人はそれを聞いて分かったようだ。

「ロストロギアをきっかけに始まる、管理局地上本部の壊滅と、そして管理局システムの崩壊」

・・・・・

「マスターカリム、それで終わりでしょうか？私はあのデビルのことが載って無いのが気になります」

それを聞いた、カリムとはやて、クロノは気まずそうな顔をする。どうやら何かを隠しているようだ。当然その表情を見抜いたサンは改めて聞く。

「お願いします。それはあくまで予言であって運命ではないのでしょう？だったらどんな内容でも覚悟して聞きます」

それを聞いた三人は顔を見合わせる。しばらく悩んでいるようだったが、最初にはやてが頷き、それに続いてクロノも頷いた。

「分かりました」

そう言ってカリムは先と別の預言書を自分の目の前に浮かばせる。

「無限の欲望が改しき物、神の雫を殺さんとし
雫は抗うが、改しき物は全を飲み込む力持ち雫を虐する
雫の生か死は、彼の潰す物次第・・・」

「・・・俺の生と死、潰す物次第・・・か。すいませんマスターカリム、嫌なことを言わせてしまいました」

サンは立ちあがり、頭を下げる。
それを見たカリム・・・いや、この場に居た全員が驚いた。

「あなたは・・・怖くないのですか?」

カリムがサンに聞く。当然の質問だ。自分の生死が関わっている予言を聞いてもサンは笑っているのだ。聞かない方が変だ。

「絶対死ぬ訳では無いですし、全てを飲み込む物を、打ち勝つ力を手に入れるかもしれない。確かに死ぬのは怖いですが、それより楽しみがありますね」

余りにも意外なサンの発言にカリムは驚くが、すぐに騎士カリムとしての顔になった。

「・・・我が騎士サン」
「っは!」
「あなたは機動六課に行き、その潰すべき物を探しなさい。これは私からの命令です」

「必ず、その物を探します。絶対に・・・」

その時のサンの表情は、全ての物を恐怖させ魅了する顔だった。

カリムに命令された通りにサンは機動六課に来ていた。今はヴィヴィオの居るなのはとフェイトの部屋に、一人で向っているところだ。

一人の理由は、なのはとフェイトにはやてが話があるそうなので、サンが先に向ったのだ。

「ヴィヴィオ、待たせて悪かったな」

入ってからヴィヴィオの顔を見る前に、部屋全体に聞こえる声でサンが言う。

「お兄ちゃん!?」

同じく部屋全体にヴィヴィオの声が聞こえてき、サンに向って走って来た。

サンはヴィヴィオを優しく抱きしめる。

「ごめんなヴィヴィオ。良い子にしてたか?」

ヴィヴィオは首を何回も縦振る。

「サン」

「久しぶり、サン」

ヴィヴィオが走って来た方から、エリオとキャロが来た。どうやら二人がヴィヴィオの相手をしていたようだ。

「兄さんも姉さんも久しぶり。二人がヴィヴィオの相手をしてくれてたのか？」

「うん。ヴィヴィオとっても良い子にしてたよ」

サンの言葉にキャロが返す。

そして、今度はエリオがサンに聞く。

「サンはどうして六課に居るの？うれしいことだけど、今カリムさんの騎士になったんじゃあ」

「ああ、マスターカリムからの命令でここに派遣されたんだ。もっともマスターカリムが俺の為に命令してくれたんだけどな」

エリオとキャロはサンが六課に来たことに喜んだが、それより驚きの方が大きかった。サンのカリムへの呼び方が、マスターが付いていることだ。それを聞いて二人はサンがカリムの騎士になったことを改めて実感した。

「マスタぁーカリム？」

ヴィヴィオにはよく分からないようだ。お互いの目を合わせる為に一旦離れてながら、首を傾げる。

「俺が忠誠を誓っている・・・じゃあ分からないか。えっとな、俺が守る人って言えば分かるか？」

ヴィヴィオはコクンと頷くが、その目には涙があった。

「え？ヴィヴィオどっか痛いのか？」

慌ててサンが聞くが首を横に振り、答えてくる。

「ヴィヴィオは違うの？」

それを聞いてサンの疑問が晴れた。つまりヴィヴィオは、サンは自分を守ってくれないと勘違いしているのだ。それが分かったサンのやるべき行動は一つだった。

「安心しろヴィヴィオ。人っていうのは守りたい物が一つじゃなくて良いんだ。だから俺も守りたい物は沢山ある。父さん、母さん、マスターカリム、兄さん、姉さん、師匠や仲間、同僚とか・・・そしてヴィヴィオお前もだ」

それを聞いて嬉しかったのか、再びサンの胸に飛び込む。

「サンすっごくなつかれてるね」

サンの胸の中に居るヴィヴィオを見てキャロは呟く。

「でも、サンとヴィヴィオって同じ年なんだよね？なんか不思議だな」

確かに五歳児を宥めている五歳児というのは、結構シュールな絵だ。もっとも二人はサンの大人っぽさを知っているので、そこまで変には思ってないようだ。

ウィイン

「「ただいま」」

後ろからなのはとフェイトの声が聞こえた。ヴィヴィオはサンよりも早く動いてなのはの足に抱きつく。ちょっと遅れてサンが二人の顔を確認する。

「ヴィヴィオただいま、良い子にしてた？」

なのははヴィヴィオを持ち上げ、サンと同じ質問をした。それを聞いたエリオとキャロは思わず笑ってしまう。

「どうしたの二人共？」

「いえ、ただなのはさんと同じことをサンが言っていたので」

「やっぱり、保護者って子供にそういうことを聞くのかな～って」

フェイトの質問にエリオとキャロが答える。そして、そのことを聞いたフェイトも笑ってしまう。

「さて、じゃあ俺ちょっと練習してくるな」

なのはとフェイトが帰ってヴィヴィオが安心するまでサンは待っていたのだ。

ヴィヴィオは悲しそうな顔をするが、すぐに戻ってくる、とサンが言うと明るい表情になって再びなのはに抱きついた。

「私も手伝おうか？」

「サンキュー父さん。でも一人で大丈夫だから」

そう言って訓練場に向って行った。

海の上にサンは一人で居た。
正直訓練すべきことは沢山あるが、一番やらなくてはいけないのが、魔力変換物質の数を増やすことと、術式兵装の更なる進化だ。

一つ目は、数が有った方が様々な戦闘状況でも戦えるからだし、魔法の数も自然と増えてくる。魔力変換物質を、後天的に増やすのは難しいが不可能では無い。そしてサンには、なのはとフェイトの息子という自身の源があった。

二つ目は、あのなつかしい声に従おうとしているのだ。自分次第で強くなれるという言葉を信じてやるのだ。もっとも術式兵装は自分のレアスキルなので自分自身も信じている。そして、練習方法はとにかく色々試してみることに限る。

「ふう。水随元帥器＞みずはげんすいのうつわ＜固定・・・圧縮」

水の魔力変換物質を使った術式を兵装すると、サンの姿が透き通った水の様になる。サンは姿に若干不満を持ちながらも、水の自分のイメージを確認する。

「水のイメージは・・・これかな？」

サンは左手で自分の右腕を斬るような勢いで手刀をする。すると痛みが来なく、斬った場所が切れた。

「おお！これって無敵のような・・・」

そして今度はスフィアを自分に向かわせると、また痛みが来なく穴

が開いただけだった。

「やっぱり水のイメージは分裂か」

サンのイメージした通りだった。そうなると自然にこの状態の弱点はサンのイメージと同じになるはずだ。

「振動・・・か」

試しに自分の中に手を入れて少しだけ手を振ると、僅かに痛みがあった。

どうやらこの状態は内側からの攻撃にめっぽう弱いようだ。これでも十分だが、相手はあのデビルだ。この状態が通じるのは最初だけだろう。

「振動する純水」

サンが気になっていた魔法を使う。デビルとの戦いの時に、術式兵装が普通の魔法に連動した時が有った。もしかしたらこれを使ったらダメージが来ないのではないかと思い使ったのだ。

すると、表面の水だけが超振動を起こした。

サンは「なるほど」と、納得した。どうやら連動はするものの、弱点までは無くなってないようだ。

「解放・水随元帥器」

海に向けて手を出し、圧縮した術式を解放させる。すると、物凄い量の水がサンから出された。

「う〜ん、どうしたものかな・・・」

正直サンはこれ以上何も思い浮かばないのだ。しばらく空中で悩んでいると、凛とした声が聞こえた。

「お前は考えるよりも行動する方が性に合っているのではないか？」

サンが振り向くとシグナムが居た。先の言葉から考えると、サンの練習を見ていたようだ。

「シグナムさん。確かにそうなんですが・・・やっぱ色々考えてしまいますね」

「お前の生死に関わるあのことか」

何故それを知っているのかとサンは疑問に思ったが、すぐにシグナムの主の顔を思い出して、納得した。

「そうですね。皆やマスターカリムには強がりましたが、やはり怖いんですよね・・・」

サンは雲の一つも無い夜空を見上げながら、自虐気味に笑う。

「ッフ、お前は私に慰めて貰いたいのか？」

その様子を見たシグナムが言ったのは慰めじゃなく、挑発のような言葉だった。

「いえ、ただ戦って欲しいですね、俺と」

今度はサンが挑発染みた声で、シグナムを横眼で見る。それを見たシグナムは再び笑う。

「我がレヴァンティンに武器なしで戦うつもりか？」

シグナムは一瞬のうちにバリアジャケット姿になり、手にはレヴァンティンが持たれていた。何も言わずに、冗談かと再確認もせずにだ。

「違いますよ、ちゃんと武器は出します。魔力刃ですがね」

サンもそれ以外は何も言わずに、腕から剣の魔力刃を出す。

そして・・・二人は何も言わずに戦い始めた。

キィン　ジュー　キィン　ジュー

六課の近くの海に金属とのぶつかり合う音と、蒸発する音が聞こえる。

一人はシグナムで、手には炎を纏ったレヴァンティンが。

もう一人は大人状態のサンで、体の周りに風の刃と、腕に水の魔力刃があった。

押しているのは当然サンで、押されているのは当然シグナムだ。

しかし、二人は楽しそうな顔をしている。シグナムが怪我をしても傷つけても斬られても、お互いの顔は変わらない。

そして、ギィインと一段と大きい音がした。

「終わりですね」

シグナムの首元にサンの魔力刃があった。

「そのようだな」

負けたというのに、シグナムの顔は笑っていた。

二人は休む為に一旦降りて、海辺で座って居た。曇り無き空から来る月の光が映し出す海はとても綺麗で、二人は柄にもなく見とれていた。

「しかし、こうも早くお前に抜かれるとはな」

海を見ていた二人の最初の言葉がこれだった。

「まあ、状況が状況でしたからね。あの時この力を解放しなかったら皆危険でしたからね」

サンはデビルに殺されかけた皆と、その時の怒りを思いだす。そしてこの能力の異常さ、強さを改めて実感した。

「物理的な意味でもだが、心の強さだ」

「冗談でしょ？シグナムさんが来なかったら、ずっとあの状態だったかもしれないんですよ」

先程の海に映っている自分の顔を思い浮かべ、思わず笑ってしまう。

「いや、正直私はあのデビルとかいう男を思い出して、ずっと鍛錬に力入らずの状態だったんだ」

それを聞き驚くサン。烈火の将のシグナムがこんな弱音を言ったのだ、当然驚いた。しかし、口を挟まずに聞く。

「あの時の、振り向いた時の狂喜に溢れた顔。私は今まで様々な相手と死あってきたが、あれ程異常な相手は他に居なかった。そして剣を握るとあの時の痛みでは無く恐怖がこみ上げて来るのだ」

シグナムは一旦話を区切る。サンもその合間に先に買ったお茶を飲み、そのままシグナムに渡す。シグナムもそれを飲んで再び話を再開した。

「実はな、主はやてもお前の練習を見ていられたのだ、それも私の隣でな。そしてその時に今日の預言の話を聞いたのだ。その時だ。私が、怯えていた私を救ったのは」

「救う？殺したり、克服、消すのではなくて？」

「そうだ。サンすまないが大人の状態になってくれぬか？」

シグナムの言葉に首を傾げながら、立って術式兵装をして雷の状態になった。そして普通の大人の状態になろうとした。

「解放・「待て。その状態で良い」はあ」

シグナムが何を考えているのかが全く分からないので、気の抜けた返事しか出来なかった。

「それで、先程の意味はなんですか？」

「それはな」

シグナムはゆっくりとサンに近づいて行く。

「私自身に恋を許したからだ」

「へ？ん！？」

サンの唇にやわらかい何かが当たった。
サンはその正体にすぐに気がついた。それはシグナムの唇。
サンはシグナムから引こうとも逃げようともせずに、そのキスを受け止める。

「～～ハァ」

長い様な短い様なキスが終わった。
そしてサンはシグナムを非難せずに、申し訳ない声で言う。

「すいませんが俺は貴女を異性としては好きにはなれません。俺にとってのシグナムさんは師匠ですから。たとえ俺が強くなって貴女を追い越してもそれは変わりません」

それを聞いたシグナムはいつもの凛とした顔に戻った。

「安心しろ、私はこれ以上お前に迫るつもりは無いし、これからも無い。お前が恋をしたら当然邪魔をしない。ただ・・・私に、お前を思わせて欲しい。だめか？」

シグナムは、デビルを倒したサンを思うことによって、戦いに力を入れたいのだ。
人を思うことは、自然にその人を信じられたり、その人が難しいことをしても意味の無い自身がついたりする。
だからシグナムは自分がサンを思って良いかを聞いたのだ。

「俺を思うことこそが、貴女の戦いの手助けを出来るのならば、構いません」
「ッフ、すまないな」

・・・・・・

少し沈黙が流れた。
サンは急に上を向く。シグナムもそれに釣られて上を向いた。

「夜空が綺麗ですね、シグナムさん」
「そうだな。騎士でも美しい物を見ると、心が洗われるようだ」

二人はその後話すこと無く、ずっと夜空を見ていた。

サンの予言（後書き）

シグナムはヒロインに入りませんし、今回のようなこともありません。

今回は表現がかなり心配です。
何かありましたら感想にお願いします。

紹介2（前書き）

今回は術式兵装とその状態のサンの紹介です。

進むにつれて書きたしたり、また紹介をする時があります。

紹介2

高町サン（術式兵装状態）

容姿　髪は五歳の時と同じだが、術式兵装する物質によって、それに合った髪の色になる。また、目の色も同じ。
顔つきは男らしくなったがやはりフェイトに似ており、中性的な所もある。
優しい栗色の髪と、綺麗な整った顔で、角度次第で幻想的にも見える。
術式兵装をしないと大人モードにはなれない。一旦術式兵装をしたら、ほんの少しだけ魔力消費があるが、維持することは可能。
身長は、１７８ｃｍ

性格　仲間を助ける為に開花したこの状態では、とにかく自分よりも仲間を優先したくなるようだ。それ以外はいつものサンと同じ。

能力　術式を固定↓圧縮↓解放
　　←
　　↓装填

装填・・・術式兵装している魔法をリンカ―コアと融合させ、出力、火力、身体能力、魔法威力、変換物質への比率アップ、リンカ―コアに関する数値、資質の向上。ただし、装填する時にリンカ―コアに違和感が生じる。また、失敗すると術式兵装は解除され、リンカ

―コアへの大ダメージがくる。

解放は声に出さなくても良い。同じく固定・圧縮・装填も同じ。しかし、術式兵装もイメージが大事なのでサンは言う。

魔力変換物質
電気、水、氷、風

電気→速さ超上昇
水→内側からの攻撃以外はほぼ無敵
氷→体が壊れても再生可能、ダメージは有り
風→身の回りに風の刃を展開させる、連動させる魔法によってはデビルに傷をつけれることも

圧縮する術式のレベルが高いほど、能力があがる（電気なら速さ、水なら、細かな分裂が出来る）

魔力値は、Ｓランクに上昇。理由はリンカ―コアで１０出した魔法が、術式兵装によって１５出されている為、その差の４の一部がリンカ―コアに貯蔵される。限界はサンのリンカ―コア次第。
（他の一部は魔力散布される）

魔法　ほぼ属性魔法しか使わなくなった。飛行魔法のコツがデビルとの戦いで分かった為、いつもの状態でも飛ぶこと可能。

紹介2（後書き）

いかがでしたか？
サンはまだまだ成長しますし、魔力変換物質も増えるでしょう。
もし、サンオリジナル魔法の説明も欲しいという感想をいただいたら、それも書こうと思います。

新しい家族（前書き）

今回はほのぼの回だと思っています。

原作の十四話では無かったシーンを書いてみました。

新しい家族

「うっうう？」

目を覚ましたサンは、いつもと違う天井なのに気づいて慌てて上半身を起こした。

「あ、サンもお目覚め？」

なのはの声が聞こえた。そう、サンはあの後なのはとフェイトの部屋に戻り、ヴィヴィオにせがまれて一緒に寝たのだった。
そして、なのはの方を見ると着替え中だった。
十九の母親の着替えを、精神年齢を少なくても十五を過ぎた子供が見たのだ。当然目をそらす。

「もう。私達家族でしょう、そんな反応しなくても」

なのはは呆れた表情をしながら着替えを続ける。昔からサンは無駄にこういうのに敏感だった。なのはとフェイトも最初は色々言ったが言うことを聞かず、最近は言うのを諦めたのだが、やはり目の前でされるとつい言ってしまう。

「母さんこそ地球では花を恥じらう大学生なんだろ？いくら息子だからって他人の前で着替えるのは・・・」
「いつそんな言葉を覚えたかはもう聞かないけど、私もうすぐ出るから。フェイトちゃんとヴィヴィオのことお願いね」

なのははサンの言葉を聞いて呆れるが、もう慣れたようだ。
それより、フェイトとヴィヴィオのことが気になったのでサンにお

願いした。

「俺も訓練したいんだが・・・」

「無茶したら本末転倒って言うでしょ。じゃあ二人のこと任せたからね」

そう言って部屋を出て行った。

「ったく」

そう呟いたサンは、横に寝ているフェイトとヴィヴィオを見た。雰囲気は似てないが、髪の色が同じなので、親子に見えなくもなかった。

そんなことを思っていると、顔が綻ぶ。

「さて」

ベッドから降りて普段着に着替えたサンは、二人から少し離れた床にあぐらをかいて座る。

「魔力変換物質火・・・イメージが大事。自分の魔力が火になるというイメージが」

独り言を呟いて、それからは無言で座る。

目を閉じる。

音を遮る。

自分の魔力だけを感じる。

火のことだけを考える。

・・・・・・・

数秒、数分、数時間、座り始めてからの時間の感覚が全く分からなくなった。

「サン、サン、サン！」

サンの耳元で物凄い量の叫び声が聞こえた。
無音の世界に居たサンが急に大きい音を聞いたのだ、当然驚く。

「な、なな、何すんだよ父さん！？」

急に怒鳴られたので、サンは怒鳴り返す。

「ふ、ふぇええ」

泣き声が聞こえた。慌てて二人はそちらを見ると、泣きかけていたヴィヴィオの姿があった。
おそらく大好きな二人が喧嘩しているのが、怖くて、嫌だったのだろう。

「ヴィ、ヴィヴィオ泣くな。俺は父さんとは仲良いからな。な？父さん」

「う、うん。そうだよヴィヴィオ。今のはちょっとした意見の食い違いで・・・」

二人はヴィヴィオを泣き止ませる為に、わざとらしく手をつないだりした。
そして裏では。

【サンが怒鳴るからヴィヴィオ泣いちゃったでしょ！】

【元々は先に怒鳴った父さんのせいじゃないか。意見の食い違いも何も、全部そっちが悪いじゃないか！】

と、結構な言い合いをしていた。

しかしヴィヴィオにはその話は聞こえてなかったので、二人が仲が良いと見えたのか、泣き止んで二人の所まで走って抱きついた。

「えへへ」

「よし、よし。ごめんね驚かせちゃって」

フェイトがヴィヴィオの頭をゆっくり撫でながら、先程のことを謝る。

そして、サンはヴィヴィオに抱きつかれた状態のまま、時計を見た。

既に朝の訓練の終わる時間だった。

「父さんもヴィヴィオも外に行かないか？母さんもフリーになると思うし」

「そうだね。ヴィヴィオも行く？」

「行く～～」

三人は部屋を出て、訓練場まで向った。

訓練場から帰っているなのはを見かけたフェイトはなのはを呼ぶ。

「なのは～！」

その声に気づいたなのはがこっちに来る。

なのはにヴィヴィオが抱きつく。

「おはようヴィヴィオ。ちゃんと起きられた？」
なのはは抱きついて来たヴィヴィオの頭を撫でながら聞く。
「うん」
かわいらしい声で返す。その間にフェイトはなのはにゆっくり近づく。
「ヴィヴィオ。なのはさんにおはよう、って」
「おはよぉー」
フェイトに言われたので、その通りにする。
「ヴィヴィオおはよう」
それに返すなのは。そして、フェイトの方を見て何やら言いたそうな顔をする。
「ヴィヴィオ、ちょっと目を瞑っていろ」
「どうして？」
「ん～～。目を瞑ったらご褒美上げるぞ」
それを聞いたヴィヴィオは嬉しそうな声を上げて、力一杯目を瞑る。
【ありがとね、サン】
フェイトからの念話がくる。サンはそれに何も返さずに、ヴィヴィオの耳を塞ぐ。

「おはようフェイトちゃん。今日もすてきだしとってもかっこいいよ」
「おはようなのは。今日も綺麗でかわいいよ」
そう、このバカップルは毎朝必ずこの会話をするのだ。サンはさすがに慣れたのだが、正直ヴィヴィオには教育的に悪いと思い、先のような行動をしたのだ。ちなみにサンも目を閉じ、風を使って二人の会話が耳に入らないようにしている。
まあこれだけだったら良いのだが、当然この二人がこれくらいで終わる訳が無い。
「あ、あのフェイトちゃん。今日もおまじないしてくれる？」
先程までのなのはとは全く違う、小動物の様な行動をしてフェイトに聞く。フェイトは何も言わず、なのはの顎を掴みキスをする。
「これは私のおまじないでもあるからね。一緒に頑張ろう、なのは」
そう言って、なのは殺しスマイルをする。その笑顔を見たなのはの目はトロンとして、恍惚な表情をしていた。
「あ～二人共そろそろ良いか？ヴィヴィオも気になってるみたいだし」
それを聞いた二人は慌てて先の顔に戻る。
「ヴィヴィオもう良いぞ」
「ご褒美って何？」

どうやらヴィヴィオはそちらの方が気になるようだ。と、いうより何かあったと思わないのだ。まあ純粋な子供はこんなものだろう。

「朝飯食い終わったらあげるからな」
「朝飯？」

少し乱暴な単語を使ったヴィヴィオになのはは慌てて言い直した。

「朝ごはんのこと。さっきの言葉は余り言っちゃいけないことだから、ヴィヴィオはもう言っちゃあいけないよ」

そう言ってサンを睨む。サンも今回は自分が悪いと感じたのか、両手を合わせて誤る姿だけをした。

「そろそろ行こうか」
「そうだね。今日のメニューは何かな？」
「肉が食い・・・食べたいな」

食いたいと言おうとしたサンになのはは、物凄い顔をして睨んだ。言い直したのはそのせいだ。

食堂に来た四人はメニュー一覧の前で、なにを食べようかと悩んでいた。

「俺はステーキで」

サンは当たり前のような口調でそう言う。朝からステーキなんて重い物を選んだのだ、当然ツッコミをする人物が出る。

「朝からは止めなさい。って、言っても言うこと聞かないから、せめて少しだけでも野菜を食べなさい」

なのははサンの言葉に上手く返す。さすが母親である。サンの性格を知っていながらも、上手く栄養を取らせようとする。
主婦の鏡の姿・・・かもしれない。

「分かってるよ。それより父さんとヴィヴィオは何にするんだ?」

サンは隣に居る二人に聞いた。先からヴィヴィオはどれか悩んでおり、それをフェイトが見守っている状態だ。

「う〜〜ん」

なかなか決まらないようだ。おそらくヴィヴィオにとってこれが生まれて初めての朝ごはんなのだろう。色々選んでしまうのも無理は無い。

「じゃあ、父さん、母さん、ヴィヴィオがそれぞれ別のを頼んで、三人で一緒に食べれば良いんじゃないか?ヴィヴィオも俺のが欲しかったら少しあげるぞ」

サンの意見を聞いたヴィヴィオは目を輝やせて頷く。それが良いようだ。
それを見たなのはとフェイトは早速食堂係の人物にメニューを頼んだ。
その間にサンとヴィヴィオは席に座った。座ってからもヴィヴィオはそわそわしていて落ち着かないようだ。その様子を見ているサンは、顔が綻んでしまう。

「ヴィヴィオは食べるの楽しみか？」
「うん」
「そっか、特に何が一番食べたい？」
「全部」

率直な返しにサンは苦笑いをする。まあ純粋で良いことだが以外に話が成り立たないのだな、と思っているとなのはとフェイトが同じ席に食べ物を置いて座った。

「うわぁ～」

ヴィヴィオにとっては初めての物ばかりなのだろう。オムライスにコーンスープ、ごはんやみそ汁、ステーキにサラダ、パンにベーコン。これらを見たヴィヴィオの目は、目が鏡の仕事を出来るくらい輝いていた。なのは達はその様子を見て微笑みながら、いつもの挨拶をする。

「「いただきます」」
「いただきます？」

やはり、ヴィヴィオには分からないようだ。首を傾げ、不思議そうな顔をしている。

「いただきますはね、これらの食材に感謝して残さず食べますっていう意味なんだよ」

なのはが分かりやすい説明をする。ヴィヴィオもなんとなく分かったようだ。

「いただきます」

ヴィヴィオはそう言って、スプーンを持ちオムライスを食べる。

「おいしい」

ヴィヴィオが予想していた以上に美味しかったのだろう。少しびっくりした表情だった。が、すぐに笑顔になって次々とオムライスを口に入れていく。

「ふふ、これじゃあサンのアイデアは無理みたいだね」

「そうだな。まあ好物が出来るのは良いことだからな。別にいいさ」

フェイトとサンは話ながら、自分のおかずを食べていく。なのははヴィヴィオを優しい目で見守っていた。

あっという間に食事が終わり、なのはとフェイトはそれぞれの仕事場に戻って行った。サンとヴィヴィオは一旦なのは達の部屋に戻っていた。そしてサンはヴィヴィオにご褒美をあげなければならなかった。

【やっべー、完璧忘れてた。何か褒美になるような物もってないか？】

サンは自分の服のポケットの中を手当たり次第に探す。そう、サンはあの時は熱くは無かったが、無我夢中だったのだ。だから後のことは全く考えてなかったのだ。

「まだ？」

ヴィヴィオは待ちきれないようだ。ほほが膨らんでいるので怒って

いるようだ。もっともサンからしたら、かわいいとしか思えない表情だ。

「じゃあ・・・キスで良いか？」

何故キスになるのかは全く分からないが、サンのことなので何か策があるのかもしれない。

「キスって？」

当然ヴィヴィオはキス何て言葉を聞いたことは無い。

「大好きな人にする行為だ。俺はヴィヴィオを好きだからなだからこれで良いか？」

それを聞いてヴィヴィオは嬉しかったのか、首を縦に振る。

「じゃあ」

サンはそう言うとヴィヴィオの前髪をどかして、背伸びをしでこにキスをする。

「今のが、キス？」

「そうだ。じゃあヴィヴィオ、俺もそろそろ訓練しないといけないからな。良い子にしてるんだぞ」

「うん」

ヴィヴィオの元気な声を聞いて、サンは勢い良く部屋を飛び出した。

今は術式兵装の訓練の為に、訓練場に居る所だ。

「黎明の雷傳砲、固定・・・圧縮」

雷を纏った姿になる。サンは取りあいず、がむしゃらに動き回ったり魔法を使ったり、シュミレーションガジェットを破壊したりしていた。

「・・・リンカ―コア」

サンは何かを思いついたようだ。

「魔導士の魂とも言えるリンカ―コア。それに術式を混ぜることは可能なのか？」

リンカ―コアと術式は全くの別物だ。それを合成したらどうなるのかが気になったサンはさっそく試してみた。

「リンカ―コアで術式を潰す感じ？　いや、術式をリンカ―コアに送る感じでやってみるか」

・・・・・

サンはしばらく、イメージを作って失敗しないようにする。

かりにこれでリンカ―コアに何か異常が出たら、二度と魔法を使えなくなるかもしれないが、強くならなければならないサンには余り構う問題では無かった。

イメージが出来たようだ。

「よし。術式装填！」

ドクン！

サンの体が一回だけ揺れる。

そしてサンはそれ以外の異変にもすぐに気がついた。それを確認する為にスフィアを展開した。すると、そこにあったのは、白色のスフィアではなく黄色のスフィアだった。

「リンカ―コアと術式が混ざった？今兵装しているのは電気の魔法。つまり装填したら、兵装している属性の魔法がリンカ―コアと混ざるってことか」

サンは他にも色々実験した。魔法の威力や身体能力、同属性の魔法の使用、リンカ―コアの資質等を研究していると、既に昼時だった。

「じゃあ最後に、解放・黎明の雷傳砲」

兵装している術式を解放させて、発動する。その後スフィアを出してみると、いつもの白色だった。

「まあ～、実験成功か？」

サンはそう呟いて訓練場を後にした。

ヴィヴィオと一緒に昼ごはんを食べる約束をしていたサンは、寮に戻る途中なのはとスバルを見かけた。

「母さん、スバル。二人共ヴィヴィオと一緒にか？」

二人は声に気づいて振り向き、サンが横に来てからまた歩きだした。

「そうだよ」

「あたしはなのはさんに誘われたっていうか、お願いしたっていうか。まあそんな感じ」

「そうか」

三人はしばらくもくもくと歩いていた。

その時、スバルが口を開いた。

「あの、ヴィヴィオってこの先どうなるんでしょうか？」

「ちゃんと受け入れてくれる家庭が見つかれば、それが一番なんだけど」

それを聞いたサンは、理由は分からないがとても嫌な気分になった。

【ん？どうしたんだ俺？】

何故こんな気持ちになったのかを考え始めた。

「難しいですよね。やっぱり普通と違うから」

スバルは頭を下げて言う。この間のティアナとの会話といい今回といい、スバルには何かがあるようだ。

「そうだね・・・見つかるまで、時間がかかると思うんだ。まあだから当面は私とフェイトちゃんが面倒見れば良いのかなって」

「ほんとか！？」

急に大声を出したサンに二人は思わず驚いてしまう。

「う、うん。サンもエリオもキャロも、皆もう自立してるし、私もフェイトちゃんも余裕あるから。だから保護責任者って形にしとこうと思って」

「いいですね、ヴィヴィオ喜びますよ」

スバルは他人のことなのに、自分のように喜んでいた。

今はなのは達の部屋に居、先程の会話をヴィヴィオに説明していた所だ。

しかし、保護責任者なんて難しい言葉を、サンみたいな前世を持っている子供以外が聞いても分かる訳が無かった。

首を傾げているヴィヴィオを見て、なのははこう言う。

「ほら、やっぱり良く分からない」

「う～ん何て言えば良いのかな？」

スバルが悩んでいると、横からサンがヴィヴィオの近くに行く。

「つまり、なのは母さんがヴィヴィオのママってことだ」

サンの言葉を聞いたスバルは同じ考えだったようで、首を縦に振り頷くそぶりを見せた。

そして、なのはの足に抱きついているヴィヴィオは、復唱する。

「ママ？」

「いいよ、ママでも」

そう言ってヴィヴィオと同じ目線に立つ。大事な話をする時には大切なことだ。

「ヴィヴィオの本当のママが見つかるまで、なのはさんがママの代わり。ヴィヴィオはそれでも良い？」

ヴィヴィオは付いていけないのか、信じられないのか、余り感情を出さなかった。

しかし、この言葉を言ってそれを返した途端にヴィヴィオの感情が爆発した。

その言葉は。

「ママ」

「はい、ヴィヴィオ」

これだけだった。

「う、うぇ～～ん」

ヴィヴィオは本当になのはが自分のママになってくれたことを実感して、そして嬉しさの余りに泣いてしまった。

その日の夜、サンは今日徹夜で頑張りたいと言い、訓練場に居る。

そのためなのはとヴィヴィオは、サンの帰りを待たずにフェイトの帰りを待っていた。

「ただいまなのは、ヴィヴィオ」

フェイトの声が聞こえた。二人はすぐにドアの方へ行き、同時にフェイトに抱きつく。

急な抱きつきにフェイトは驚いたがすぐに微笑み、二人を抱きしめる。

そして、ヴィヴィオに見えないように、なのはと自分の唇を交えた。

「おかえりフェイトちゃん」

「おかえりなさい」

ヴィヴィオは子供らしい活絶で、そう言った。

そしてフェイトは二人から今日の出来度を聞いた。それを聞いたフェイトはヴィヴィオにあることを教える。

「実はねヴィヴィオ、私はヴィヴィオのパパなんだよ」

「パパ？」

ヴィヴィオはいまいち、実感が湧かないようだ。

「うん。私はなのはの旦那さんだから、ヴィヴィオのパパってことなんだよ」

ヴィヴィオが嬉しそうな顔をする一方で、なのはは旦那という言葉を聞いて顔が真っ赤になっている。しかし、不満な様子は一切ない。

そしてヴィヴィオは、二人の名前を呼んで確認する。

「なのはママと、フェイトパパ？」

「うん」

「そうだよ」

二人はヴィヴィオの手をそれぞれ握る。

「ママ、パパ」

「「は～い」」

それに喜んだのか、ヴィヴィオは笑顔になる。そしてなのはとフェイトに抱きついた。

ドーーン

急に花火の様な音が聞こえた。

三人は何かと思い、窓の外を見てみると・・・そこには火で出来た、なのはとフェイト、ヴィヴィオの姿があった。フェイトはヴィヴィオを肩車していて、なのははフェイトの腕を組んで歩いている状態のようだ。

「これって」

「サンだね」

「サンお兄ちゃんがしたの？」

「「うん」」

ヴィヴィオの問に二人は笑顔で答えたが、一つの疑問があった。

どうして先の絵にサンが映ってなかったのか、だ。

「ふぅ～。何とか火の魔力変換物質を出来るようになったな」

サンはそう呟いて、額に流れている汗を腕で拭く。集中したり、魔力を使ったりしたので少し疲れたようだ。

「やはり先のはお前だったか、サン」

凛とした声が聞こえる。サンはそちらを見ずに答える。

「まあ、ヴィヴィオが家族になった日ですからね。少しは派手にしたかったんですよ」

「なるほどな、しかし何故お前が映って無かったのだ?」

「ただ、自分で自分を映すのが恥ずかしかったんですよ。ただ、それだけです」

シグナムはそれ以外に何も聞かずに、訓練場を去って行った。

新しい家族（後書き）

あっさり変換物質をやってしまいました。

特に書くことはないですのでこれを書かせていただきます。

誤字脱字、アドバイス、感想、なんでも良いので感想に書いてくれると嬉しいです。

毎回感想が増えていくのが私の楽しみです。

１０万ＰＶ突破記念（前書き）

やりました。これがどのくらいの物かは本当に良く分かりませんが、うれしく感じるのは確かです。
これからもがんばって書きます。

１０万ＰＶ突破記念

バナナ「１０万ＰＶ突破記念いぇーーい」

全「・・・・・」

バナナ「ちょ、ちょっと。どうしてそんなテンション低いの！？」

サン「だってさ・・・どのくらい凄いのかが分からないんだよ」

フェイ「うん。数は凄い感じはするけど、実際どれくらいなのかがパッとしなくて」

なのは「バナナさんは知ってるんですか？」

ジ――――

バナナ「ま、まあそれは置いといて、今回の話題に入りたいと思いま～～す」

全「逃げたな！」

バナナ「今回は、私が考えている続編についてです」

サン「おい。これから矛盾点が出たりして一回全部消すことになったらどうすんだよ？とくに今は術式兵装のチート能力が出てきたんだぞ」

なのは「確かに。サンの相手のデビルはどうするの？サンも訓練し

ているみたいだし、前の強さだったらつまんないんじゃ・・・」

バナナ「ふふふ。改造って言葉便利だよね～～」

全「うわ～～」

バナナ「それに、全話しっかりと保存もしてある。大丈夫だ問題ない」

フェイト「バナナがやるから、その言葉が台無しになったね」

バナナ「ｏｒｚ」

なのは「それより早く続編のこと教えて下さい。さっきから気になっているんです」

バナナ「はい。では続編の題名は“高町家の日常”です。内容としては、サンとヴィヴィオの学校生活と高町家をメインとしたほのぼの恋愛物です」

サン「ちょ、ちょっと待て！それじゃあ俺とヴィヴィオが・・・・付き合うってことか！？」

バナナ「まあそういうことになるね」

フェイト「サン。ヴィヴィオも幸せにするんだよ」

なのは「ヴィヴィオを泣かせたら容赦しないからね」

サン「おい！両親が子供の禁断の恋を応援するな！」

バナナ「でも、この二人は十分禁断の愛ですからね～。自分達が言っても説得力が無いんじゃないですか？」

サン「ｏｒｚ」

バナナ「そしてもう一つ・・・高町家にもう一人入ります～～！」

全「えぇぇ～～！」

フェイト「私が高町フェイトになるっていうオチじゃないの？」

バナナ「何普通に結婚宣言してるんだ！なのはさんもトリップしない！　実はサンにもう一人のヒロインが登場します」

サン「はあ？　俺に二股させんのかよ！？」

バナナ「二股では無く、両方とも愛するのだ！　これは命令である」

なのは「つまりもう一人娘が出来るってこと？」

バナナ「そうです。その子の名前は・・・アインハルト・ストラスで～す」

全「はあ！？ｖｉｖｉｄはどうするんだ！？」

バナナ「ｖｉｖｉｄは、無視の方向で行きま～す。そしてサンの義理姉になる。つまりサンは義理妹と義理姉の姉妹丼ってことですｗｗ」

プル、プル、プル、プル

フェイト「な、なのは、私達は非難しとこうか」

なのは「そ、そうだね。フェイトちゃん」

バナナ「あれサンどうしたの？やけに震えてるけど風邪？」

サン「輪廻転生ノ稲妻、固定・・・圧縮。　装填」

バナナ「あ、あれ？もしかして怒ってる？」

サン「全然。ただお前を魔法の練習台にしたいと思っているだけだ」

バナナ「そ、そういうのを怒「雷の投擲＞かみなりのとうてき＜！」ギャーーー」

フェイト「じゃあなのは、最後の締めをお願い」

なのは「うん。皆様、今後ともこの小説をお願いします」

バナナ「ちょ！？それ私の「永劫の氷河」カチン、コチン「有存無存の時間」し、ご」

バタン

１０万ＰＶ突破記念（後書き）

書いちゃいましたｗｗ

しかし、続編はこの話に矛盾が出て消されない限り絶対書きたいと思います。

ヒロインはヴィヴィオとアインハルトに決定しました。

リリースとオーバー（前書き）

今回も結構ほのぼのです。原作の十五話では少ないシーンだったのですが、自分で考えてやりました。

リリースとオーバー

サンが魔力変換物質火を習得してから二日目、いつものようにサンは空に居た。今日も訓練で、内容は当然術式兵装を使った物だった。

「天上の轟火＞てんじょうのごうか＜固定・・・圧縮。装填」

火の術式を兵装した途端に、サンの髪が炎の様に燃え目が灼眼になった。そしてこの状態の能力は破壊。とにかく攻撃力が上がり、サンの全ての属性で一番攻撃に特化した状態だ。

「さて・・・」

サンはそう呟くと手足を使い、素振りをしていく。

ゴー　ゴー　ゴー

身体を動かすたびに、そのスピードとパワーにより、物凄い音がする。

しばらくそれを続けていると、訓練場にウイングロードが出た。一つはスバルので、もう一つがギンガの物だった。

二人は陸戦魔導士なのだが、ウイングロードを使ってかなりのスピードを出して空で戦っている。

しばらくは打ち合っていた二人だが、ギンガが動いた。

スピードを上げるのと同時に、魔力を使ってスバルから自分の姿が見えないようにした。

スバルも反応こそしたが、追いつけずにギンガに負けた。

「皆も頑張ってんな。俺も頑張ねえと」

先の戦いを見たサンは口元を上げ、訓練を再開する。

ＦＷ陣の訓練が終わるのを見計らって、サンは一旦訓練場に行った。
訓練場の上空に居たなのはは、すぐにサンの姿が見えたようだ。

「サンもおつかれ。訓練はどうだった？」
「まだまだかな？　もっとこの能力を自分の物にしたいんだがな」

なのはの問にサンは自分の手の平を見ながら答える。その顔は確かに不満足のようだった。なのはは「そっか・・・」と答えて、サンと一緒に地上に降りる。正直な所なのはは無茶をして欲しくはないのだ。しかし、もしカリムの預言通りだったらサンの生死はサン自身によって決まる。つまりサンを止めることは、サンを殺すことになるかもしれない。
だからなのはの表情は余り良いものではなかった。
それを見たサンはこう言った。

「大丈夫だって。俺は自分が壊れる程無茶はしない。母さんの教導を無駄には絶対しないからな」

それを聞いたなのはは、サンを見て嬉しそうな顔をして笑った。
二人が降りると悔しそうな声を上げているＦＷ陣の声が聞こえた。

「最後のシフトが上手くいけば、逆転できたのにー」
「あ～～悔しい～」

ティアナのスバルがそれぞれの意見・・・スバルは感想だが、二人は座りながら言う。

「フォロー足りなかったかな。ごめんね」

そのすぐ近くて同じ座っているギンガが、隣に居るエリオとキャロに言う。

「いえ」

「ギンガさんは全然」

「悔しい状態のまま、反省レポートまとめとけよ」

それを見ていたヴィータが教導官としての命令をする。

一方サンはフェイト、シグナムと会話をしていた。

「サンは今日何してたの？」

「私も気になるな、あの凄い音は何だったのだ？」

凄い音というのはおそらくサンの素振りの音だろう。サンはそのことを二人に伝えると、案の定二人は驚いた。

「それでもサンはまだ強くなるつもりなんだよね？」

フェイトは親としての顔で、サンに聞く。なのはと同じで心配なのだろう。

「まあね。母さんにも言ったんだが自分の体が壊れる程無茶はしないから。安心は出来ないと思うが、俺を信じてくれ」

「・・・分かった」

フェイトもなのはと同じで納得したようだ。三人が話していると、

なのはが指示を出した。
「ちょっと休んだらクールダウンして上がろう。お疲れ様」
「「ありがとうございました」」

FW陣とギンガ、サンはクールダウンの為に、軽い準備運動をしていた。
それを遠くから見ている人物が居た。
一人はシャーリーで、もう一人が昔から隊長陣のデバイスを見てきたマリエル・アテンザだ。

「うん。皆良い感じの子達ね」
「エリオ達ですか？　それともデバイスの方？」

シャーリーが聞く。普通の人だったら人間の方を指すが、マリエルはデバイスの研究員だ。

「両方」

マリエルの答えにシャーリーは笑顔で返す。すると、後ろから子供の声が聞こえた。二人が振り返ると、ヴィヴィオが居た。

「おはようございます」

ヴィヴィオは二人に頭を下げて、挨拶をする。五歳児にしてはかなり礼儀正しい。

「あ、えっと、おはようございます」

ヴィヴィオのことを知らないマリエルは少し混乱しながらも、返し

た。

「おはようヴィヴィオ」
「うん。失礼します」

ヴィヴィオは明るい顔で二人に頭を下げて、なのはとフェイト、サンの方に走って行った。
そして、マリエルはシャーリーに聞いた。知らない子供が機動六課に居るのだ、気になるのも無理は無い。

「シャーリー、あの子は？」
「えっとですね」

二人は視線をヴィヴィオの方に向けた。

「ママ―、パパ―、サンお兄ちゃーん」

ヴィヴィオは走りながら家族の名前を呼ぶ。それに気づいた三人はそちらを向く。

「ヴィヴィオ―」
「気をつけろよヴィヴィオ」
「危ないよー転ばないでね」
「うん」

フェイトとサンの心配の声に、ヴィヴィオは元気な声で返したが、次の瞬間に転んでしまった。

「大変！」「おい、大丈夫か！？」

フェイトとサンは慌ててヴィヴィオの方に向おうとしたが、なのはに止められた。

「大丈夫。地面はやわらかいし綺麗に転んだ、怪我はしてないよ」

「それは、そうだが・・・」

そうは言われたものの、やはりサンは心配のようだ。フェイトも同じ心境のようで、今にもヴィヴィオに向いそうな雰囲気だ。

「ヴィヴィオ、大丈夫？」

ヴィヴィオは顔を上げて涙目になっていた。

「怪我してないよね。頑張って自分で立ってみようか」

なのはは、両手をヴィヴィオの方に向け優しく言うが、涙が溜まる一方だ。

「ママ」

「なのはママはここに居るから。おいで」

なのはは自分で立たせようとするが、ヴィヴィオは泣きだしてしまった。

それを見ていられなかった、フェイトとサンはヴィヴィオに近づいて立たせてあげた。

「フェイトパパ、サンお兄ちゃん・・・」

「ほら、飴あげるから泣き止め」

乱暴な言い方をするが、ヴィヴィオのことを思っている。その証拠

は、サンは甘い物がだめなのに飴玉を持っている。
ヴィヴィオはそれを口の中に入れて泣き止んだ。そしてフェイトはヴィヴィオを抱えて優しく叱った。

「今度から気を付けてね。ヴィヴィオが怪我なんかしたら、なのはママとフェイトパパ、サンもきっと泣いちゃうよ」
「ごめんなさい」

フェイトがヴィヴィオを優しく抱いていると、なのはが来た。

「もう、フェイトパパもサンもちょっと甘いよ」
「なのはママ（母さん）の厳しすぎです」

二人は機嫌悪そうな顔をしてなのはを指摘する。
なのははその顔が本気で怒って無いのが分かっている為、抱っこされたヴィヴィオを向いて言う。

「ヴィヴィオ、次からは頑張ろうね」

それを遠くから見ていたシャーリーは隣に居るマリエルに言う。

「まあ、あんな感じです」
「そうか、二人の子供かぁ～～あ～あ？　ええ！？」

確かに二人にはサンが居るが、それはロストロギアのおかげであって、再びなのはがロストロギアによって子供を産んだという話は聞いていない。更にサンとヴィヴィオを見る限り、身長はほぼ同じだ。
サンに双子が居る訳も無い。そうなると当然混乱する。

しかし、シャーリー以外の皆はそれを無視して食堂に向って行った。
食堂に来た前線メンバー、シャーリーとマリエル。
マリエルはシャーリーとエリオから、ヴィヴィオの環境についての説明を受けていた。
そしてサンは先程から気になっていたピコピコ揺れるヴィヴィオの髪のことを聞いた。

「なあヴィヴィオ、それって母さんのリボンだよな？」

そう、ヴィヴィオは今髪を括っている状態だ。と言ってもほんのわずかの量なのだが。

「うん」
「アイナさんがしてくれたんだよね」

なのはは聞く前に分かったようだ。アイナとは、女子寮の寮母でヴィヴィオの世話をしてくれている人物だ。当然ヴィヴィオは優しくしてくれるアイナになついている。

「なるほどな。良く似合ってるぞヴィヴィオ」
「えへへ」

サンからの褒め言葉を聞いたヴィヴィオは嬉しそうな顔をした。
それぞれの席に着いた皆は食事を開始する。ヴィヴィオは今回もオムライスだ。どうやら気にいったようだ。幸せそうに食べるヴィヴィオを見て、保護者達は微笑ましそうな顔をしている。その中に、当然サンも入っている。

「ちゃんと噛んで食べるんだよ」

「うん」
「しっかしまあ、子供って泣いたり笑ったりの切り替えが早いわよね」
先程泣いていた時と、今の幸せそうな顔をしているのを見比べたティアナがそう言う。
「スバルのちっちゃい時もあんな感じだったわよね」
ギンガが隣に居るスバルにそう言う。
それを聞いたスバルは恥ずかしそうに顔を赤くする。
「リィンちゃんも」
その会話を聞いていたシャマルがテーブルに立ちながら食べているリィンを見る。
「ええ～。リィンは初めから割と大人でした」
「嘘をつけ」
「体はともかく中身は赤ん坊だったじゃねえか」
リィンの発言にシグナムとヴィータが反論する。それを聞いて違うと言いたかったのか、マスターであるはやてに聞いた。
「はやてちゃん。リィンは大人でしたよね？」
「ふふ、どうやったかな～。ただ、サンが大人っちゅうのは確かやな」
はやての呟きが聞こえたメンバーは一斉にサンに視線を集める。

「なあサン」
「なんですか?ヴィータさん」

サンは後ろからヴィータの声が聞こえたので、振り向いて返す。

「お前って好きなテレビ番組ってあんのか?」
「政治関連が面白いですよね。レジアス中将の演説を見たりするとカリスマって感じがして面白いですし、新しい発想の持ち主が居たら一段とまた楽しめます。あと魔法生物関連が好きですが、最近は同じ生物ばかりなので余り見なくなりました」
「じゃあ、好きな食べ物って何?」

今度はティアナが質問する。サンは何故一気に質問されるのかが気になったが答えた。

「何でも好きだが、やっぱ心を和ませてくれる和食かな?」
「将来の夢とかはないのか?」
「俺はマスターカリムに仕えている身ですから、将来の夢っていうのはあんまり・・」
「サンの魔法名はどっから取っているんですか?」
「普通に本読んで、イメージに合った言葉を組み合わせているだけだ」
「それじゃあ好きな子とかおらへんの?」
「はは、はやてさんは五歳児のガキに何期待しているんですか」

・・・・・・

一部にだけ沈黙が流れる。今までの言動を見ていて確かにサンは大人っぽかったが、まさかここまでとは思っていなかったようだ。サンの隣に居るヴィヴィオと、本当に同じ年齢なのかと、心の底から

ツッコミたくなるのを防いで、皆一言で返した。

「「そう・・・」」

未だに質問の意味が分からなかったサンだが、もう良いかと思い再び食事を始めた。すると、ヴィヴィオの皿が目に入った。そこには綺麗にピーマンが横にどかれていた。当然母親であるなのはがそれに気づかないということは無かった。

「ヴィヴィオ、駄目だよピーマン残しちゃ」

それを聞いたヴィヴィオはなのはの方を向き言う。

「にがいのきらーい」

「大丈夫、おいしいよ」

「んなもん、パッと食ってさっさと口直しのオムライス口に入れりゃあ良いんじゃねえか？」

「サン、そういう教育に悪いこと言わない。ヴィヴィオ、しっかり食べないと大きくなれないんだから」

サンの余り良いとは言えない案を叱り、ヴィヴィオに優しく話す。サンは良い方法だと思ったのに・・・と、ぶつぶつ呟いている。結構真面目な案だったようだ。

「まあそやな～、好き嫌い多いとママとパパみたいに美人になれへんよ」

その言葉を聞いて反応したのはヴィヴィオだけでは無かったようだ。別のテーブルではキャロがエリオに人参を渡している最中だった。二人は何とも気まずい状況になった。

「どうする？」

苦笑いをしながら聞く。女という生き物にとって美しさというのは皆共通で欲しい物だ。キャロはフォークを微かに震わせながら考えている。そして、決まったようで、自分で食べた。

「ほら、姉さんも食べたんだしヴィヴィオも食え。え～～と、ほら、食ったらチョコ上げるぞ」

キャロの姿を見ていたサンはそう言い、ポケットを探った。そして、中にあったチョコをヴィヴィオに見せる。甘い物の王様と言っても過言ではないチョコを持っていることからも、本当にヴィヴィオのことを大切に思っているようだ。

「う～～」

サンが持っているチョコを見て、更にピーマンを見ての繰り返しをしている。なかなか難しい選択のようだ。

「えい」

ヴィヴィオは一気にピーマンを口に入れた。

「「偉い！」」

それを見ていたなのはとフェイトは思わず大声を出して褒めてしまった。しかし、ヴィヴィオにはそれ何処ろではなかった。まだ口にあるピーマンを必死で噛んで飲み込む。

「良い子だ。ほらご褒美だ」

ピーマンを食べたのを見計らってサンはチョコを渡す。それを少し慌てて食べる。どうやら未だに口の中にピーマンの味がしているようだ。しかし、チョコを口に入れた途端に、幸せそうな顔になる。

「えへへ」

ヴィヴィオの幸せそうな顔を見ると、なのは自身まで幸せな顔になるようだ。しかし、先程の食べ方をずっとさせるのはいけないと思い、親としての表情に戻る。

「次からはチョコ無で食べられるようになろうね」

「うん」

食べ終わった後、サンは再び訓練場に行こうとするが、マリエルに止められた。

「サン。リリースとオーバーの点検・・・まあ情報収集が終わったから、あなたに返すことになったわ」

リリースとオーバー、その懐かしい名前を聞いてサンは一気に会いたくなった。マリエルによれば、あの二機からも能力の正体は何も分からず、上の方も諦めたようだ。

「それでスバル達の健康診断と一緒に、近くにあるデバイス研究所まで連れて行きたいんだけど良いかな?」

「ああ。お願いするよ」

それを聞いてマリエルはなのはにも確認を取る。

「それじゃあ、スバルとギンガとサンをお借りしていくわね」

「はい。よろしくお願いします」

マリエルの運転する車に乗って首都クラナガンに向っているサンは、スバルとギンガが何故身体検査に行くのかが気になって聞いた。

「なあ、何で二人は身体検査なんてするんだ？　お前等は元気が取り柄みたいなもんじゃないか」

どう考えても年上の人に使う言葉では無いが、二人はそれに嫌な顔一つしなかった。

「まあちょっとね、産まれながらのって奴かな？」

ギンガはちょっと意地悪な顔をしてサンに返した。案の定サンはすまなさそうな顔をしている。産まれながらの問題と言えばサンにもあるが、最近は身体検査をすることは無くなったので、余計に気まずいのだ。

「はは、サンもそんなに気にしないで。あたしもギン姉も受け入れている問題だから。サンだって同じでしょう？」

サンの顔を見たスバルが笑いながらそう言う。サンもそれに納得したのか少し息を吐いた。

「サン、着いたわよ。連絡くれれば迎えに行くからね」

運転席に居たマリエルがサンの方へ振り向いて言う。サンは「了解」と返事をして車から降りる。その足は少し速かった。やはり魔導士の友達、相棒、パートナー、戦友、等言えるデバイスと再開できるのは嬉しいのだろう。

サンは降りた車を確認せずに、デバイス研究所に入る。

「高町サン様ですね。デバイスはこちらに居ります」

入った瞬間に一人の男性がサンの名を呼び、二機の居場所へと案内した。入ってすぐの対応に、少し驚きながらもその男性に付いて行った。

男性はサンが早く会いたいという感情に気づいて少し歩く速度を上げる。再び驚きながらも頭には二機のことしか無いサンは、男性に何も聞かずに付いて行った。

「こちらでございます」

サンは案内された部屋にすぐに入り、二人が居るかどうかを確認する。辺りを見渡すと、ビー玉の様な黄色い宝石と、三角形の赤い宝石があった。

『ケケケ、久しぶりだな相棒』

『マスター、お久しぶりです』

サンが見ていた二つの宝石から、二人の声が聞こえた。その声を聞いたサンは宝石に近づいて言う。

「点検はどうだったか？　お二人さん」

点検が情報収集する為の言い訳と知っていながらも、あえてそう言う。二人はそれがちょっとしたジョークだと分かったので笑って返した。

『カカカ、なかなか良い生活だったぜ。毎日フルメンテってのは俺らデバイスにとっちゃあ～良いことだからな、カカカ』

オーバーが前と変わらぬ口調で言ってきた。それを聞いた・・・というより口調を聞いたサンは、口元を上げる。

「まあ、酷いようにされなかったなら良かったよ」

『貴方！それよりマスターに伝えることがあるでしょう』

リリがオーバーに向って叫ぶ。もっともデバイスなので、声を出す方向を自分では変えられない為、その叫び声はサンの耳に勢い良く入った。

「で、伝えることって何だ？」

耳の穴に指を入れて、音が聞こえるかどうかを確認した。そのくらいで鼓膜が破れる訳が無いが、一応の確認ということなのだろう。

『はい、実は私達に新たなモードが追加されました。ガントレットフォームです』

ガントレット・・・腕に装着して、戦う武器だ。確かに術式兵装の状態のサンとの相性はかなりの物だと言える。

「まさかお前等が頼んだのか？」
『ケケケ、ずっと待機状態ってのも嫌だからな』
『私はマスターの力になりたいのです。もうこの前のように、補助するだけでは嫌なのです』

リリにもオーバーにもデバイスなのに、言葉に魂があった。それを感じたサンは改めてこの二機をデバイスとして貰って良かったと、心だけで感じる。もし表情で感じたら、必ずこの二人に色々言われるので、心だけだ。
その後サンは二機に色々と術式兵装の進展等を話していると、既にスバル達の健康診断の終わりの時間だった。
サンは早速戻って来た二機を使ってマリエルに通信をする。

［今から外に出ますが、今どこですか？］
［今はスバルが近くの店でチョコポットって食べ物買っている所。店の名前はスペシャルｗｅｅ、迎えに行こうか？］

リリに通信の維持をさせながら、オーバーにその店が何処に有るかを調べさせる。次の瞬間オーバーからモニターが出る。さすがデバイスだ、魔導士に一機では無く、一人一機で持っていても十分便利だ。
モニターを見ると、すぐ近くだったのでマリエルには、走って行く、と伝えた。
研究所から出たサンは、変換物質無しの身体能力強化を使って、走っていた。

「しっかしお前等が居るとほんと便利だよな。一般の生活から魔法戦まで」

リリとオーバーが居なかった時の練習を思い出す。魔法の処理、術

式の展開、敵の位置情報、新しい発想、等他にもあるが、とにかくデバイスが無いと練習がしにくいのだ。

『マスターに大切に思われるなんて恐縮です』

『カカカ、それより相棒、マスターマスターカリムのことは良いのか？　相棒は騎士になったんだろ？』

リリは嬉しそうな声を出して返すが、オーバーは全く話に関係無いことを言ってくる。サンは少し疑問に思いながらも、深い意味は無いと判断して答える。

「マスターカリムに命令されて、機動六課に居るんだ。俺がここに居るのに問題は無い」

『カカカ、なに、ちょっとした相棒の現状整理だよ』

そんな会話をしていると、マリエルの車が見えた。

「お～～い、サ～～ン」

スバルが窓から顔を出して、こちらに手を振ってくる。何があったのかは知らないが、相変わらずテンションの高い娘だ。

「て、何で出発して無いのに車の中に居るんだよ！？」

そう、走行中の車を見つけたのではなく、止まっている車を見つけたのだ。それなのにスバルは窓から顔を出してきた。まさに意味の分からない行動だ。

「あはは、昔からスバル車の中好きだったのよ」

車の外でサンを待って居たギンガが、言う。ギンガの視線はスバルを見ており、微笑ましそうな、満足したような顔だ。

『カカカ、こいつシスコンみたいだな』

『こら！　あまりそういうことを声に出さないで下さい。マスターのイメージが悪くなったらあなたの責任ですからね』

今はすぐにでも二機を使って訓練がしたいサンは、取りあいず色々と無視してマリエルに早く帰らせてとせがんだ。

「分かった。じゃあ機動六課へ帰ろうか！」

「「おーう！」」

リリースとオーバー（後書き）

実は前から携帯で投稿していた時の話が気になっています。描写がとにかく薄いんです。
なので一旦１６話くらいまでちょくちょく描写を増やしていきたいとおもうので、新しい投稿が少し遅れるかもしれませんが、御了承お願いします。

キス（前書き）

むむむ・・・今回は構成が難しかったです。

キスシーンアイデアをくれたアプロディーテさんありがとうございました。

キス

サンとデビルは戦っていた。デビルは自分の体のことを考えずにただひたすらとサンに向って来る。向い打つサンだが、デビルのそのタフさと異常さに体が段々きつくなる。攻撃回数は明らかにサンの方が上なのにデビルは全く怯む様子が無い。その様子にサンの体に鳥肌が立つ。

サンは電気の術式兵装をしていた。その自慢のスピードでただただ回避と攻撃を続ける。が、サンの体力の限界がデビルのタフさに負けた。一瞬の隙が出来た。そこに拳を打ちこむデビル。

「があ」

余りの激痛に武器である自分の腕を、殴られた部分に抑えてしまう。それをデビルが見逃す訳がなく次々と殴ってくる。

「解放・輪廻転生の稲妻」

圧縮している術式をデビルに撃つ。次の瞬間にデビルに何百の稲妻が落ちた。

青青青青青青青

とにかく青の稲妻が落ち、雷が出す轟音を出す。が、それだけだった。デビルの悲鳴、人間の焦げた匂い、そんなものは全くしない。サンの五感が狂っている訳でも無い、つまりデビルは未だに死んでいない。

「天上の轟火、固定・圧縮。装填」

時間が有る内に可能な限りの術式兵装をする。
青い稲妻の群が収まった瞬間に、デビルが向って来る。サンはそれに反応して同じく、人間が出したとは思えないスピードでデビルに接近する。
破壊を象徴とした火。サンの最大の攻撃力を秘めた状態だ。その状態で再び打ち合う。しかし今度はスピードが足りない。デビルは先の一瞬を見られる存在だ、スピードが落ちたサンはデビルにとっての的になってしまった。

「遅いですねぇ～～」

そう言って回し蹴りをする。当然その範囲内にサンが居る。そして、当たった・・・と思った瞬間にサンの姿が消えた。先の姿はシルエットだ。

「ダウンバースト！」

サンはデビルの後ろで風圧魔法を使った。しかし自分が移動する為では無く、デビルを押さえつける為だ。サンが殴る、それも超打撃だ。それをくらったデビルが飛んで行くことは風に許されない。蹴る、殴る、拳を打つ、繰り返す、ラッシュする、繰り返す。これを自分の限界まで続ける。

「ハァ、ハァ」

そろそろ限界を感じたサンはあの言葉を言う。そう、これが無ければ死んでいたと言っても良いくらい大事な言葉だ。

「解放・天上の轟火」

その言葉を発した瞬間にサンの腕から火で出来た物凄く大きい腕が出てきた。その大きさは太さだけで十メートル、長さ二十五メートルはある。
それが勢い良く出てきたのだ、デビルは未だに吹いている風に逆らって吹き飛ばされる。いくつもの壁を貫通して飛ぶデビル。サンもさすがに倒したと思ったのか、息をゆっくりと吐いた。

「そんな余裕でぇ～良いんですかぁ～～」

ふざけた口調が聞こえる、しかしサンには死神の声に聞こえた。いや、本当に死神なのかもしれない。
サンがデビルの方を見ると・・・竜の鱗のような物が皮膚にあり、腕が竜の様になっていおり、口からは牙が生えていた。

「うわあああ！」

余りの恐怖にサンは大声を出す。
すると視界に映っているのが変わった。戦っていた時の場所ではなく、最近よく見る天井だった。

「サン、大丈夫！？」

サンには聞きなれた可愛い声が耳に入った、この声はなのはだ。
サンはそちらを見ることより、今までの戦いが夢だったことに安心をするが同時に怒りが出てきた。

「くっそ、何だよあの夢は！」

サンの怒りの理由は、自分が何故あの様な夢を見たかではなく、自

分がデビルに勝てなかったことだ。そして自分があの様に無様に声を上げたこと。

「サン、何を、何の夢を見たの！？」

なのはが心配の余りか肩を掴んで前後に動かす。揺らされているサンは取り合図なのはを落ち着かせる為に言う。

「大丈夫だ。ちょっと嫌な夢を見ただけだから」

「でも、ずっと唸っていたんだよ。私達すっごく心配したんだよ」

私達という単語に引っかかったサンは慌てて横を見ると、心配そうな顔をしているフェイトとヴィヴィオの姿があった。

「サンお兄ちゃん大丈夫？」

ヴィヴィオはサンが起きた今でも心配なのだろう。その瞳は潤っていた。フェイトも同じ心境のようだ。潤ってまではいかなくても、誰が見ても心配事があると感じる表情だった。

「ああ、三人共悪いな。もう大丈夫だから」

自分に心配してくれる三人に向って笑顔を作る。が、目が笑っていなかったので三人は安心出来なかった。

「お兄ちゃ」

ヴィヴィオが何かを言いかけようとしたが、隣に居るフェイトの腕によって遮られた。

「悪い、ちょっと一人にさせてくれ」

サンがそう言うと、皆気を使って出て行った。しばらく沈黙が流れたが、今度は別の声が聞こえた。

『ケケケ、相棒大丈夫か？　結構な時間うなされていたんだぜ』

『あの、マスター。何を見たのかは分かりませんが所詮夢ですので・・・』

二機が心配してくる。しかし今のサンには余り嬉しく無いようで、ゆっくりと呟く。

「悪いが二人共、俺が落ち着くまでスリープモードに入ってくれ」

最初は反論しようとした二機だが、サンの殺意しかない目を見てしまい、ＡＩというのに恐怖を感じて思わず従ってしまった。

今度こそ静かになった。

「ハァ」

溜息をつきながら自分の手の平を見る。あの痛みや感じ、感触とても夢とは思えなかった。しかし現実では夢だ。その相反した事実に混乱するが、頭を思いっきり振って色々邪念等を吹き飛ばした。しかし実際はそう簡単には頭から離れなかった。

しばらくそうしていると、部屋のドアが開く音がした。

「サンお兄ちゃん」

ヴィヴィオが来たのだ。サンも大切な家族の声が聞こえたので慌てて、自分に出来る限りに目をまともにした。サンに近づく足音が聞

こえる。

「あのねお兄ちゃん。これ」

ヴィヴィオは手に持っていた物をサンに渡した。サンはそれを受け取って見ると、そこには真ん中に有る太陽のアクセサリーとビーズで出来たネックレスが有った。

「これは？」

サンは不思議そうにネックレスを見ながらヴィヴィオに聞く。

「エリオとキャロに教えて貰いながら作ったの」

純粋な笑顔を作ってサンを見る。

ドクン

サンの心臓が跳ね上がった。

自分の異変が何かと思い考えていて一つの答えが見えたが、慌てて首を横に振ってその考えを吹き飛ばした。どうやら今回はあっさりと飛んだようだ。そしてヴィヴィオに向って負けないくらいの笑顔で答えた。

「ありがとなヴィヴィオ。色々と悩みも取れたみたいだ」

そう言ってアクセサリーを首にかける。不思議とこれを見たら悩みやマイナスの思考が跳んだのだ。そして首にかけると、先とは正反対の勇気や気合いが入った。

「えへへ。お兄ちゃん、キスして」
「はい！？」

突然の願いに思わず大声を出してしまうサン。そして先の考えを思い出すが、すぐに振り払う。

「わーったよ。ほらこっちに来い」

そう言ってベッドに上半身だけ起こしている状態で手招きをする。
それにヴィヴィオは嬉しそうな顔をしてサンに顔を近づける。

「ほら」

そう言って額にキスをする。

「サン、そろそろご飯食べない・・・と・・・」

なのはがお盆を持ちながら入って来て、サンの方を向くとキスをされているヴィヴィオとしているサンが目に入った。それを見てしまい声が途切れ途切れになってしまう。

「なのは、どうした・・・の・・・」

同じくフェイトも来た訳だが、なのはと同じものを見てしまい、途切れ途切れになる。
当然声が聞こえたサンとヴィヴィオも気づいてなのは達の方を見る。

「えへへ」

部屋にヴィヴィオの嬉しそうな声だけが聞こえた。しかし、次の瞬

間に別の声が部屋に響いた。

「「ヴィヴィオ、ずるーい！」」

「はあ！？」

両親が発した声にまた思わず大声を上げてしまうサン。普通親が、娘にキスをしている男を見たら怒るのが当然だ。しかしこの二人はそんなことを言わずに、逆に羨ましいと言ったのだ。

「ちょ、ちょっと待て。色々と疑問がある！」

二人を見ながらサンが叫ぶ。二人は顔を見合わせながら、首を傾げるが何かを閃いた表情をする。

「ドアの音がしなかったのはサンを驚かせたく無くて、バルディッシュに消してもらったんだよ」

「何その無駄な気遣い！？」

確かに無駄だ。今の家で、家族の中でのノックがドアの音みたいな物だ。それを消して中に入って来るなど、逆効果の気遣いだ。現に今ヴィヴィオとのキスの現場を見てしまったのだ。

「それよりサン。ヴィヴィオにはキスして私達にはしないの！？今まで一回もしてくれたこと無かったじゃない」

「はい？」

サンはもう何が何だか分からないようだ。先程までの悩みを完璧に忘れてしまい、暗い表情の欠片も無かった。

「だから、私達にもキスして欲しいの！」

なのはにとっては家族のコミュニケーションがしたいと言っているのだが、サンにとっては物凄い爆弾発言にしか聞こえなかった。

「いやいやいや、母さんも父さんも恋人っつうか婚約者居るじゃん。第一俺は好きな人としかキスを・・・・」

発言をしている途中でサンは自分が言ってはいけないことを言ったのに気づいた。今の発言を聞く限りではヴィヴィオが好きで、なのはとフェイトが嫌いと言っているようなものだ。それを聞いた二人の顔は凄く落ち込んでいた。

サンは一瞬かわいそうかな、と思ったのだが、これで好きと言ったらキスすることになってしまうので、その気持ちを胸に閉まった。

・・・・・・

「「グス」」

少し沈黙が流れていると、急に二つの泣き声が聞こえた。この場合の二人と言ったら当然なのはとフェイトだ。

サンはその声を聞いて、それでもキスをしない程残酷な人間では無かった。

「分かった、額にだけだ・・・」

顔を真っ赤にしながら、二人に今の顔を見せないようにそっぽを向いて言う。それを聞いた二人はベッドに手と膝で上がり、サンに顔を近づける。

サンは振り向くと思わず唾を飲んでしまった。なのはもフェイトも親としての顔は崩して無いが、それでも母親としての顔だった。美

人でかわいい二人が女性としての顔でサンの目の前に居るのだ。更にサンには前世の記憶がある。前世での世界の美人女優と言われる人をなのはとフェイトはあっさりと超える容姿なのだ。また二人の今の姿が、男を魅了する顔と胸を強調するポーズだった。サンは相手が親ということを一瞬忘れてしまったが、慌てて邪念を取り除き、なのはの方へ顔を近づける。

「ほ・・、ら」

なのはの守りたくなるような、可愛い笑顔に唾を飲み込みながらも、それを悟られないように気を付け、額にキスをする。そして次にフェイトの方に顔を近づける。

「は・・、い、・・よ」

フェイトの見惚れるような綺麗な顔と、いつもと違う母親としての雰囲気に心臓が高まりながらも、それを気づかれないように配慮して、額にキスをする。

キスをして貰った二人は幸せそうな顔をする。するとヴィヴィオの唸り声が聞こえた。そっちを見ると頬を膨らましているヴィヴィオの姿が有った。

「どうしたのヴィヴィオ？」

「なのはママとフェイトパパだけずるーい。ヴィヴィオにもー」

どうやらヴィヴィオは先程の雰囲気を見て、自分だけ仲間はずれと思ったようだ。サンもやけくそになったのか、頷いて許した。

「これで最後だぞ」

サンはそう呟いてヴィヴィオの額にキスをした。それを受け取ったヴィヴィオはまた純粋な笑顔になって一回サンから離れた。

「えへへ、じゃあヴィイオの番」

そう言うとヴィヴィオはサンの額にキスをした。サンの思考が止まった。おそらく寝ている時間を除くと、現世初の思考停止だろう。少しすると段々思考が戻って来たようで、状況判断をした。

【え～～と、今俺キスされたんだよな？　ヴィヴィオにね～～。ってえぇえええ！？】

それを実感した時瞬間に、顔にも恥ずかしい気持が映る。

「～～～／／／」

サンは柄にも無く、顔を赤くしてしまった。仕方ないことだろう。前世も入れてもキスされたこと何て一度も無かったのだ。やはり自分からするのと人からされるのでは全然違うようだ。
そしてサンの可愛い反応を産まれて初めて見た、なのはとフェイトは考えるより先に体が動いて、サンを両側から抱きしめてしまう。

「「サン、可愛い～～！」」

サンの両耳に大声が聞こえるが、今のサンには聞こえない状況だった。二人の胸の中に綺麗にサンの顔が挟まっている状態だったからだ。
次々と起こる異性絡みの産まれて始めて事にサンの顔は真っ赤を通り越して真紅になっていた。

「なのはママ、フェイトパパ、ヴィヴィオは？」

その様子を見ていたヴィヴィオが二人に聞く。二人はヴィヴィオの質問の意図がすぐに分かったので、サンの近くに抱き寄せる。

「ヴィヴィオもとっても可愛いよ」

「うん、なのはの娘なんだもん。当然だよ」

そう言って二人はサンとヴィヴィオにそれぞれの頬にキスをする。

「ママとパパのキスーー」

ヴィヴィオは喜んでいる一方でサンの顔がますます赤色方面に濃くなった。正直贅沢すぎる反応だが、今のサンにはそんなことを考えている余裕は無かった。しかし時はサンを待ってくれずにどんどん進んで行く。

「じゃあヴィヴィオもママとパパにー」

そう言ってなのはとヴィヴィオの頬にキスをするヴィヴィオ。三人はそれぞれ顔を見合わせて、笑い合う。

「じゃあ最後に」

「お兄ちゃんが」

「頬にキスして終わり」

フェイト、ヴィヴィオ、なのはの順に言葉を繋げて一斉にサンを見る。

真紅、サファイア、翡翠の前世では考えられないくらいの幻想的な目で見つめられたサンは、断ることが出来なかった。ゆっくりと一

人ずつに顔を近づけて、それぞれの両頬に無言でキスをする。

「へへへ」
「あは」
「ふふ」

三者三様の喜びの声を出して、それぞれほほ笑む。
綺麗・可愛い・魅力的・美しい、そんな頬笑みだった。そして、それを肉眼で見たサンの頭の中は一杯一杯になってしまい、意識が闇に飲み込まれてしまった。

「あれ・・・ここは、夢？　ってかあんなんで気絶するとは我ながら情けない」

辺りを見ると、白しか無い空間だったので夢と分かったのだ、そして自虐気味に笑う。しかし、夢と自覚する夢というのは珍しい。

「少し違いますね」

この空間に女性の綺麗な声が響いた。そしてその声はサンにとって懐かしい声だった。

「誰だ！？　って言った方が良いのか？　いや、しかし俺はあんたの正体を知らないからやっぱり言った方が・・・なんてな」

口元を上げながら、響いた声に独り言のように返す。

「驚かないのですか、本当に面白い方ですね。貴方を選んで良かった」

その言葉を聞いた瞬間にサンに衝撃が走る。選んだ・・・この言葉が引っかかったのだ。その言い方がまるで、サンの前世を知っているかの様だった。

「あんたは・・・神の雫か？」

少し間を置いて自分の中で整理をしてから声に質問する。すると周りの空間が一瞬だが揺れた。

「どうやら当たったようだな」

サンは自分の状況判断能力の良さに思わず口元を上げてしまう。しかし、声はサンの言葉に少し反論してきた。

「半分当たりで半分不正解です。すいませんが謎解きをしている時間は無いようですね」

「夢だったらまた会えるのにな」

それを聞いた声は綺麗な声のままで、笑う。

「貴方は本当に面白いですね。しかし、そろそろ時間なので素早く説明します。貴方はこの世界を守ってください。その能力は貴方自身の力で、運命を左右する力です」

世界を守る、その大きな課題を出されて思わず大声で笑ってしまう。しかし、馬鹿にしているのでは無い、ただ純粋に面白いだけだ。

「あんたがくれたこの体だ。俺はあんたの言う通りにするよ。って言ってもあのクソ野郎をぶっ殺せば良いんだろ？」

その存在は当然デビルだ。あの狂気や殺気、復讐心、破壊心、残虐心、デビルのありとあらゆる物が危険なのだ。おそらくあそこまで狂っているのは次元世界でもデビルだけだろう。そう理解していたので、この声の願いの内容が分かったのだ。

「さすがですね」

そう言うと周りの空間が少しずつ消滅していく。どうやら終わりの時間のようだ。そしてサンは慌てずに落ち着いた声で聞いた。

「何故急にあんたと接触が取れた？　ついでに俺の潰すべき物って何だ？」

「一つ目は貴方の心が光ったこと、色々な意味で、です。もう一つは貴方自身が見つけないと意味がありません」

そう言い終わった瞬間に空間が消えた。

「サン、サン！」

「なんだよ、うっせーな」

自分の名前を呼ぶ声が何回も聞こえたので乱暴に返して、上半身を起こした。

「私もなのはもヴィヴィオも心配していたんだよ！　それは無いんじゃない！？」

フェイトの声が聞こえた。サンは心配してくれたことに喜びを感じたが、同時に自分を気絶させたのは三人のせいだとツッコミたくなった。しかし、自分が原因でもあること理解していたのであえてそこには何も言わなかった。

「悪かったよ。心配サンキューな、父さん、母さん、ヴィヴィオ」
「もーう。心配したんだよ」

ヴィヴィオが頬を膨らませながら言う。サンはその様子を見て笑ってしまう。今日のサンは笑ったり落ち込んだりが大変だ。

「悪かったって。ほら、これで許してくれ」

そう言ってヴィヴィオの額にキスをする。

「母さんと父さんもこれで勘弁な」

なのはとフェイトにも同じくキスをする。三人はさっきまでとは違う言動に少し驚きはしたものの嬉しさの方が大きかったようで微笑む。

「これからは悪夢を見ないようにね。これを約束したら許してあげる」
「何無茶なこと言ってんだよ母さん。でも、次は見ないと思うな」

冗談混じりの言葉にサンは笑いながら返すが、途中からは真面目な表情になって言った。

「何が良い夢でも見たの？　顔つきが変わった気がするけど・・・」

首を傾げながらフェイトが聞く。確かに今のサンは何処となく顔つきまで大人になっていた。

「いや、ただちょっと面白い夢をね・・・」

そう言いながら先の夢で聞いたことを考える。

【そう、今俺が此処に居るのはあの声のおかげだ。しかし、あいつに感謝する以外にも・・・】

そして、三人の顔を見る。皆急にサンにみられたので首を傾げている。全く同じ動作にまた笑ってしまう。

【母さんと父さん、いや、勇気をくれたヴィヴィオにも優しくして甘えないと損だよな】

サンが急に羞恥心無にキスをしたのはこういう理由があったからだ。

「さて、ちょっと訓練してくるな」

ベッドから降りて、立つ。そして二機のデバイスを手に持つ。二機を持つ時の顔は少し戸惑っていたが、すぐに先の表情になった。

「気をつけてね」
「無茶しちゃ駄目だからね」
「早く帰ってきてー」
「おう行ってくるな。さてお前等とっとと起きろ、訓練だぞ」

声をかけてくれたなのは、フェイト、ヴィヴィオに返事をして、自分の手の中にある二つの宝石を見る。

『色々と良くなられたようですね、マスター』
『カカカ、相棒の能力はいつ見ても面白いからな。早く見せてくれよ』

二機共先のことには何も聞かなかったし、何が有ったとも聞かなかった。

「打倒(だとう)デビルに向けて訓練始めっぞ！」

キス（後書き）

なんか一気に進んだような・・・まあ後半に入りましたから良いのでしょうか？

やっぱご都合主義ですね。まあ今までもそうでしたから・・・良いのでしょうか？

主人公はロリコン・・・なのでしょうか？

公開意見陳述会前日（前書き）

なんか恋愛増えてきたな・・・いっそタグに恋愛入れるか？
アインハルトもヒロインです。
ヒロインはヴィヴィオとアインハルトです。
ヒロインはヴィヴィオとアインハルトです。大事なことなので二回言いました。

公開意見陳述会前日

ついに明日が公開意見陳述会だ。サンは聖王教会に居る。理由はサンのマスターであるカリムが時空管理局理事官として出席する為、サンは騎士として護衛するのだ。現在はカリムの秘書のシャッハと色々と打ち合わせをしていた。

「やはりサンさんは外で警備していた方が良くないでしょうか？騎士カリムの預言通りだと明日が狙われやすいみたいですし、またデビルという男が出て来る可能性が高いと思います」

「確かにな、あいつが出てきたら俺が向かわねえとやばいからな。しかし戦闘になったらどうする？　正直俺とあの野郎の戦いの巻き添えは半端無いぞ」

そう、二人はサンの警備位置のことで悩んでいた。二人共サンが外で見張るという案には賛成なのだが、問題はサンが発言した部分だ。前戦った時は廃棄が決まっていた市街地だったので良かったのだが、今回は公開意見陳述会のある首都クラナガンでの戦いの可能性が極めて高いので、前の様な派手な戦闘は出来ない。しかし、デビル相手に手加減して戦うなど今のサンには到底不可能だ。

「どうしましょうか・・・」

「そうだな・・・」

二人は腕を組みながら椅子の背面に重心を寄せる。かれこれもう三時間はこの案に悩んでいたのだ。一向に案が思い浮かばないサンはつい別のことを考えてしまっていた。

「サンお兄ちゃん行っちゃうの？」

涙目になりながらヴィヴィオが呟いてくる。サンの苦手というか、逆らえない表情だ。それに、今回がサンと兄妹になって初めての別れで、更に今晩になのはも警備の為に夜勤に出る、なので余計悲しいようだ。

「大丈夫だって、明後日には帰って来るから良い子で待ってるんだぞ」

そう言って手を上げてヴィヴィオの頭を撫でる。それに気持ち良さそうに目を細めて、少しだけ笑った。

サンはゆっくりと頭を撫でるのを止めてヘリに乗ろうとするが、まだ心配なのかヴィヴィオがサンの名を呼ぶ。

「サンお兄ちゃん。キスして」

サンはまたか、と少し溜息を吐くが嫌そうな表情をしていなかった。むしろ嬉しいのか、いつもの歩幅より少し大きかった。

そして額にかかっている髪をどかしてキスをする。

「ヴィヴィオが作ってくれたこのアクセサリーもあるし、問題無いって」

アクセサリーを見せながらそう言うと、ヴィヴィオは自分のアクセサリーを大事にしてくれていることが嬉しい様で、笑顔になった。

そしてヴィヴィオに見送られながら、聖王教会行きのヘリに乗った。

ヘリに居る途中に運転しているヴァイスが先の映像についての話を

ニヤニヤしながら言う。

「お前等ほんとに兄妹か？　正直ませた子供のカップルにしか見えねえぞ」

「生憎兄妹としてコミュニケーションを取っているからな。それにある程度年頃になったら自然に無くなるだろ」

「ほんっとにお前はガキらしくねえな。俺の五歳の時なんて、今じゃ考えられねえくらい純粋の洟垂れ坊主だったぞ」

サンの発言を聞いて返すヴァイス。サンが大人っぽいことは前から知っていたが、やはり小さい子供が年頃何て言葉を使ったので、言いたくなったのだろう。サンが鏡をチラッと見ると呆れている表情をしていた。

「別に良いだろ俺がどうだって。それより安全運転よろしくな」

「へい、へい」

「サン、サン、騎士サン！」

「うお！？・・・・ってすまん」

シャッハの怒鳴り声を聞いて、サンは自分が機動六課を出てきてからのことを思い出していたことに気づき、シャッハにさぼっていたことを謝る。それを見たシャッハは微かに溜息を吐いて言う。

「確かに結構な時間話合いをしていましたからね。ちょうど良い時ですし、一旦休憩しましょう」

そう言ってサンの前に紅茶を置く。それの香ばしい香りがサンの鼻に入り、落ち着いた息を吐く、そしてゆっくりと紅茶を飲む。

「上手いな。さすがマスターカリムの秘書ってだけはあるな」
『私達には良く分かりませんが、色だけ見ても、データにある良い紅茶と似ていますしね』
サンは少しずつ紅茶を飲みながら言う。そう言われて嬉しいのかシャッハが微笑んでいる。
「それと甘いも・・・の？」
サンの前に洋菓子を置いた瞬間に表情が真っ青になった。それを見てシャッハが思ったことは一つ。
「もしかして甘い物苦手なんですか？」
その質問にサンは首を必死に上下に振る。余りの豹変ぶりにシャッハは思わず笑ってしまう。さっきまで仕事人の顔をしていたサンが甘い物を出された途端に、怯えた子供の様な顔になったのだ。笑うのも無理は無い。
「じゃ、じゃあ、こちらで」
シャッハは笑いながら別の菓子を出す。今度は和菓子のまんじゅうだった。サンは当然反論しようとしたが、先にシャッハが口を開いた。
「あんこが入っていますが甘さはほとんどありませんし、外側の皮はお茶っ葉で味付けされております。甘いのが苦手でもこれは大丈夫かと」

そう聞いてもサンは食べようとはしなかったが、シャッハが甘い物は頭に良い、と言ったので手を震わせながらまんじゅうを掴み皮の部分だけを食べる。どうやらそこは甘く無く大丈夫のようだったようで、一気にあんこの部分まで食べた。

「ん！？　お茶！　お茶よこせ！」

サンに異変が起こった。どうやら甘さ控えめでも駄目だったようだ。現にサンの口の中は本人からは、五感を悪い方へ刺激する味が広まっていた。シャッハに必死に手招きしている。それ程苦い物が欲しいのだろう。シャッハは慌ててお茶っ葉を急須に入れ速攻でお湯を入れて、そしてどう考えてもこぼれるとしか見えない程に急須を上下左右に振って、サンの前に湯飲みを置いてお茶を入れる。ここまで僅か三秒だった。サンはさすがと思いながらも自分も負けない程のスピードでお茶を口に入れる。その瞬間サンの口の中に、香ばしく、苦味が口に広まり、先程の甘い感覚が無くなった。

「ハァ、ハァ」

『カカカカ、相棒は本当に面白いな、ケケケ』

激しい運動をした後のように息を吐くサン。それを見てシャッハは呆れ、オーバーは笑う。先程のまんじゅうは甘い物が苦手な人の為に作られた物だ。それで、あれ程の反応をしたのだ。

「これは重傷と言うより病気ですね。昔からですか？」

二杯目のお茶を注ぎながらシャッハが聞く。

『確かに私と会った時からそうでしたよね』

「ああ。昔からっていうかなんというかな～」

そう。サンは前世からの甘い物嫌いだ。と、いうより苦手なのだ。勉強が捗らなくなると、半強制的に親に甘い物を食べさせられたのだ。口に入れた瞬間それを思い出すのだ。もはや苦手というよりトラウマである。

「そうですか。それで少しは頭がさえましたか？」

呆れながら返して、サンに甘い物を食べた感想を聞く。

「微妙～～だな。まあうだうだ考えるのは性に合わないとは思うんだが、市街地で暴れるとマスターカリムの名が傷つくからな。ぶっちゃけそれだけが嫌なんだよ。高速移動は得意だから人は殺させないって自信は有るんだがな・・・」

「って、それを早く言って下さいよ！」

サンが呟きを聞いたシャッハが教会全てに届くと言っても過言では無いくらいの大声で怒鳴る。当然同じ部屋に居たサンの耳にはキーンという音が聞こえる。

「どういうことだ？」

耳に手を入れて異常が無いかどうかを確認しながら聞く。

「私は武道家ですから余りこのようなことは考えたく無いのですが、余は貴方が悪いのでは無くデビルが悪いことにすれば良いのでしょう？」

「ああ。勿体ぶらずにとっとと言え」

「明日は様々なテレビ局の方々が生放送の為に管理局地上本部に来られます。そして何かあったら必ず放送するでしょう。それが彼等

の仕事ですから。なので、明日市街地での戦闘になったら放送する。そこで貴方が人を守られたり、自分は市街地を守っているという発言をすれば良いのでは無いのでしょうか？」

つまりシャッハはサンが悪い事をしていないと、テレビの生放送を利用して放送しようと考えているのだ。しかし、問題があったのでサンがそれを聞く。

「問題の音声はどうする？　かなり激しい戦闘になったら音なんて普通のカメラじゃ取れないぞ」

なかなかずるいが、良い内容だと判断したサンだが言った通り確かに問題があった。しかし、シャッハはそれをあっさりと返した。

「最近のテレビカメラは僅か一瞬の出来度を撮る為にもかなり性能が良くなっております。大手の放送会社のカメラは最新型のデバイスと性能が同レベルと言っても良いでしょう。もっとも戦闘は出来ませんが」

さすが有名人の秘書だ。カメラの性能までも把握していた。

「なるほどな」

シャッハの意見を聞いて納得はするが、もう一つ疑問があった。

「しかし、俺等の戦闘を撮ろうとするカメラマンが居るのか？　これはかなり重要だぞ」

確かに死闘となる戦いを音声と画像を綺麗に撮れる範囲で無いと、サンが守っているということが分かりにくいだろう。そこに穴や誤

解が生まれたりすると、カリムの名が傷つけられるかもしれない。
サンはそれが嫌だったのだ。

「実は私の昔からの親友が明日公開意見陳述会に来るのです。その子はスクープの為なら何でもするという変わった子でして、公開意見陳述会の内容を撮るのでは無く、別の内容でスクープになる物を撮りたいようです。そこまでに至った理由はパパラッチの感じって言っていました」

シャッハは嬉しそうにサンに説明する。どうやら本当にその子と親友なのだろう。

「なるほどな・・・よし、それでいくとするか。色々事後処理大変そうだが、元々地上を守るのは管理局地上本部のすることだから聖王教会が何か言われることは無いだろうしな」

サンはシャッハの意見を聞いて納得したようだ。そして右腕を思いっきり振り回す。どうやら迷い無くデビルと戦えるようだ。それを見たシャッハは少し慌てた感じの声で言う。

「あくまで予備ですからね。貴方が市街地をどんどん壊していたら、悪い方へのイメージしか伝わりませんからね。出来る範囲で破壊をしないで下さい」

サンは当然分かっていたので、軽い返事をして返した。

「それよりマスターカリムに報告に行くか。色々問題ある案だが、何とか許可して貰うか」

そう言って椅子からゆっくりと立ち、部屋から出て行った。

シャッハしか居なくなったこの部屋に沈黙が流れた。その中でシャッハは微笑みながら独り言を呟く。

「騎士カリムは本当に良い騎士を持たれましたな。もっとも私も秘書として負けられませんが」

カリムの執務室の前に来たサンはノックをする。

「はい。どなたでしょうか?」

ノックが聞こえたのか、中からカリムの声が聞こえた。

「サンです。警備の打ち合わせが終わったので一応の確認をして貰いたいので・・・。入っても?」

「ええ。良いわよ」

カリムの許可を貰ったのでサンはゆっくりとドアを開けて入る。そして一礼して、部屋に入る。

「もう、そんなに畏まらなくても。それで、どんな内容ですか?」

カリムがサンの様子に少し怒った声を出すが、サンがそれだけで止めるとは思わないのですぐに要件についてを聞いた。カリムの仕事机まで歩いて前に立つと、背筋が綺麗な垂直の格好で説明した。

「・・・正直余り賛成できませんね」

確かにこの案は市街地がある程度は破壊されることになっている。

人を導く教会の騎士としてはやりたくない案である。しかし、そう贅沢は言っていられない状態だ。デビルの危険さは、映像を見ただけでもカリムも知っていたし、サンが居ないとデビルが好き勝手暴れるかもしれないからだ。

「少しはやてと、クロノ提督、ヴェロッサと考えさせてくれる？」

カリムは一人で考えるには重い案なのか、友人の二人と弟の名前を出した。サンは納得したのか後ろを振り向こうとしたが、何かまだあるのか、再びカリムを見る。

「マスターカリム。分かってはいるでしょうが、デビルは人を殺すことを躊躇しません。そして私はそのデビルを楽に倒せる程力を持っていない・・・。すいません、失礼なことを言って。失礼します」

サンは自分の意見を言って、一礼して部屋から出て行った。カリムは何も言わずにそれを見ているだけだった。

「・・・難しいわね。強さって・・・」

誰も居ない執務室にカリムの声が聞こえた。

・・・・・

少し沈黙が流れたが、カリムはこんなことをしている場合では無いと思い、はやて、クロノ、ヴェロッサに通信する。

少しの間コールの音がなり、それが切れると同時に三人の映像が流れた。

「どうしたんカリム？」

はやては色々と書類仕事をしているようだ。横に書類が沢山ある。

「騎士カリム。余り顔色が良く無いようですが・・・」

クロノはカリムの顔色が余り優れないことに気づいたのか、心配の声を出した。

「三人一緒にっていうのは珍しいね。何か重大な問題？」

一方ヴェロッサは少し陽気な声だった。

「実はサンとデビルの戦闘のことで相談があってね・・・」

三人はそう聞くと一斉に真剣な表情になる。そしてカリムは内容を話した。

「「なるほど」」

カリムの話を聞いて皆分かったようだ。そして色々と複雑な部分があり、カリムと同じ顔色になった。

「サンが悪いん訳じゃ無いけど・・・」

「確かになかなか難しい問題だね。管理局地上本部のお偉方が聞いたら何と言うやら」

「ある程度覚悟はしていましたが、やはり激しい戦闘になる可能性が高いのですか・・・」

それぞれの意見を言う三人。やはり皆、やりたくは無いがそれ以外

に思いつかないようだ。はやては腕を組み、クロノは色々過去のデータを見、ヴェロッサは手を顎に当てて考えている。

「内部で戦わせるってのはどうなん？」

「管理局地上本部で戦わせたらサンが負けるそうなの。自分のスピードを最大限に活かさないと勝てない相手みたいだから」

サンはこの前見たあの夢を未だに信じていたのだ。それでカリムに夢の事は隠して、そう言った。

「全部隊を投入させて撃墜する案はどうでしょうか？」

クロノが案を言うが、それに反論するはやて。

「機動六課前線メンバー全員があんなにあっさりやられたんよ。自慢じゃあらへんが機動六課は新暦始まって一番の強さを持った部隊と思っとう」

そう、はやての人脈や努力が作った部隊だ。リミッター―を掛けてまで入隊してくれた幼馴染、家族。才能を見抜く能力、長い時間、上司との関係、そんな様々な物があってこその部隊を、デビルは一人で倒した。同時にサンはそのデビルを一人で倒した。そもそも次元の違う戦闘なのだ。クロノがそう考えていると更に、はやてが追い打ちをかける。

「それに今回警備するのは地上の魔導士が七割を超しとる。この意味みんなは分かるよな？」

優秀の魔導士は海の本局や、空にほとんど取られてしまうのが現状だ。それで戦力増加の為にレジアスは質量兵器の導入に力を入れて

いる。そして、残りの四割の魔導士も議論する代表達を守れる程度の人数であり、防衛戦を得意とする魔導士がほとんどだ。つまりいくら戦力を投入させてもデビルを倒せるとは思えない、というのがはやての意見の意味だった。

「それじゃあいっそのこと二人を転移させたらどうかな？　そのデビルとかいう男はサン君に異常に拘っているんでしょ。サン君がある位置に居て、デビルが来たら魔法を使う・・・良い考えとは思うけどな」

「サンもシャッハもそのことも考えて、実行するつもりみたい。でも、デビルが気づくかもしれないし、例え成功したとしてもすぐ転移して戻ってくると思う。これが二人の考え。相手は犯罪者ですから、転移魔法法も守らないでしょうしね」

ヴェロッサの意見もあっさりと斬られた。そして四人は再び悩み始める。しばらく考えるが全く良いアイデアが浮かばないみたいなので、とうとう諦めた。

「サンとシャッハの意見が良いみたいやね。まあ管理局の地上部隊としては何とも言いにくい案やけどな」

「何かあった時の為に緊急避難のアラートはこちらでしておきます。しかし、事前に注意をしておくと、帰ってパニックが起きたり、公開意見陳述会の停止になるかもしれませんので、しない方向で行かせてもらいます」

「僕も、事後処理の準備をしておくから。仕事が少なくなることは、サン君次第・・・ってのが、心配な感じなんだけどね」

三人共納得はしたようだが、余り乗る気の無い声だった。だが、決めたからには頑張らなければいけないので、すぐに色々と仕事を始めた。

「皆さんありがとうございます。私もこれで失礼します」

三人が仕事を始めたので邪魔にならないように、通信を切る宣言をする。三人共あくまでモニターを見ながら、仕事をしていたのだが、やはり邪魔になると思い早々に切ろうと思ったのだろう。

「待ってカリム」

切ろうとした時はやてがそれを止める為に声を出す。

「何？　はやて」

クウロノとヴェロッサは雰囲気を読んで、自分達の通信を切った。

「あのな。仮に怪我人が出たとしてもそれはカリムの所為やあらへん。サンもや。二人共頑張って考えて、苦しみながら、決断してこの案を決めたんや。確かに被害が出てしまう案やけれど、決して駄目な案や無い！　やから・・・」

はやての必死な訴えに、カリムは嬉しくなり笑う。その姿は先程の顔色の悪い顔では無く、年相応の可愛らしい顔だった。

「ありがとうはやて。おかげで元気がでたわ」

笑って返されたのではやても元気になったと思い、一言言って通信を切った。

・・・・・

コン　コン

沈黙が流れた瞬間にノックが鳴る。それはサンが来た時と同じ音、同じ間だった。そしてそれが分かったカリムは誰とは聞かなかった。

「入って良いですよ」

その声を聞いて入って来たのはやはりサンだった。
そして先程来た時とは少し雰囲気が違っていた。それに疑問に思ったカリムだが、サンはそれを気にせずにカリムに近づく。

「マスターカリム。私・・・いや俺は、貴女の心(みち)に違反する行動をしてしまうかもしれません。それでも俺を騎士として持って置くのですか？」

サンはカリムの前に立ってゆっくりと言葉を呟く。サンの言っているカリムの心(みち)とは、人を助けて導くこと。確かにサンは人を助ける事をするが、それでも導くという事では無い。それが心配だったサンだが、カリムは微笑んで返す。

「私は貴方のマスターです。騎士が忠誠を誓うのと同時に、マスターも騎士を導くというやるべきことがあります。それに私と貴方の誓いはそう簡単に無くせる物ではありません。貴方と私はそういう関係でしょ？」

ドクン

サンの心臓が激しい音を出した。
ヴィヴィオの時と似ていた。そして正体は分かっていた。しかしサンは表情にも、心にもそれを出さずに、カリムに同じ様に微笑む。

「そうですね。俺・・・この呼び方で良いでしょうか?」

サンはそう質問する。カリムもそれを待っていたようですぐに返した。

「ええ。むしろそちらの方が、私は好きですよ」

「ありがとうございます。それで先程の続きですが・・・、私と貴女は騎士と主。俺は騎士として貴女の心に近づきたい。明日の公開意見陳述会、俺は貴女に近づきます。絶対に」

これはサンのカリムの騎士としての初めての仕事と言ってもよい。サンはその仕事で聖王教会騎士カリムの騎士として、忠誠の意思を見せたいのだ。これがサンの発言の理由だ。

「ふふ、明日絶対に何かあるとは限らないのよ。あくまで予言なんだから」

カリムはそう言うが実際のも自分も心配なのだ。明日何かあるのなら、預言の通り・・・なかつ大地の法の塔はむなしく焼け落ち・・・この通りになるかもしれない。心配になるのは当然だ。

「確かに所詮予言です。しかし、我がマスターの能力からの預言です。どんな内容でも俺は貴女を信じます」

サンは意志のある目でカリムの瞳を見る。赤と青、二つの対する色の瞳は、カリムを魅了させた。カリムは思わず息を飲んでしまったが、慌てて先程の優しい顔に戻す。

「ありがとう。でも、今日はもう寝なさい。どんなに強くてもサン

はまだ子供なのよ」

サンは心臓の高まる音を無視して、片膝をつけカリムの前にひざまずく。

「気遣いありがとうございます。お休みなさいませ、マスターカリム」

そう言って、カリムの手の甲にキスをする。そしてそのまま部屋を出て行った。

・・・・・・

沈黙の中で、カリムは自分の手の甲をじっと見つめていた。その時の瞳は・・・悲しい目だった。

叶わない恋というのは何処にでも有る物だった。

主と騎士・・・決して愛し合ってはいけない関係。

聖王教会騎士・・・人を助け、導く者が、人を騙してまで、隠してまで、恋をしてはいけない。

それを叶えるには・・・・失う覚悟が必要だ。

その後サンは早歩きで自分の部屋に向った。

『どうしたのですかマスター。先程から雰囲気が変わりましたが・・・』

『どうした相棒。急に怖じけずいたのか？　あのデビルに。カカカ』

二機はサンの雰囲気に心配はしたが、サンはそれに何も返さない。

そして部屋のドアを勢いよく開けて勢いよく閉めた。
そして枕の下に二機のデバイスを置く。

『マスター！？』
『どうしたんだ相棒、俺等に聞かれたくないのか？　カカカ』

枕の下から二機の音が聞こえる。サンはそれに更に布団を被せて、
完全に聞こえないようにする。

・・・・・・

部屋に沈黙が流れた。その中でサンは未だに暴れている自分の胸に
手を当てて呟く。

「ははは、初恋が叶わないってのはお約束だよな。全管理世界にマ
スター・・・・。カリムに忠誠を誓ったんだ。そんな中で恋するの
は許されない。人を騙しての恋は許されない。恋は許される。そし
て・・・、ヴィヴィオは・・・ヴィヴィオが・・・」

公開意見陳述会前日（後書き）

最近ＦＷ陣が出ないｏｒｚ
出したいが案が出ないｏｒｚ

感想なんでも良いのであれば気軽にお願いします。

リボン（前書き）

ん～～恋愛って難しいですね～～

まだ戦闘はありません。

リボン

パシャパシャ

管理局本局の正面玄関前に各世界の代表が居た。そしてその周りには数えきれない程のパパラッチが居る。目的は当然有名人の撮影だ。

パシャパシャパシャパシャ

一段とカメラのフラッシュ音が増えて、一斉にパパラッチのカメラの向きが変わった。その向きに居たのはカリムとサンだ。

カリムは管理局の青い制服を着ている。細身の体に、長い金色の髪、優しい顔等によって、管理局の制服がモデルの服の様に豹変している。

一方サンは、黒のタキシードだった。聖王教会の制服の方が正式な場では良いが、管理局の上層部が聖王教会を嫌っているので、あえてこの格好にしたのだ。ラインが入っており、さすがのサンでもまだ大人っぽく違和感のある格好だった。そして首にはヴィヴィオの作ったアクセサリーがある。

二人は少しよそよそしく、お互いの目が会ったらすぐに目を逸らす。最もパパラッチにさえ分からない、ほんの小さな動作だった。

二人が何千枚かを撮られた時は、既に正面玄関を通り抜けていた。

少し気の緩んだサンだが、周りには偉い人物が居ることを思い出して、先程の真剣な表情に戻る。

「さっきよりかは気を抜いて大丈夫よ。まだ公開意見陳述会までは時間がありますし」

サンの様子を見て微笑しながら言う。その姿が可愛かったのでサン

は赤面するが、理性を強くし顔の色を元に戻した。

「気遣いありがとうございます。しかしニュースで良く見る人物ばかり居ますね」

「サンはニュースを見るんですか。気が会いますね私もですよ」

カリムは嬉しそうな顔をして再びサンを見る。美しい顔に見とれてしまったサン。

「サン？　どうしたの？」

その異変に気付いたカリムは慌ててサンの名を呼ぶ。それに気付いたサンは慌てて元の顔に戻して「大丈夫です」と返事をした。叶わない恋と分かっていても、やはり好きな人の魅力的な顔には勝てないようだ。仕事に影響が出てしまう、と考えながらも相反した思いを持つ。

【確かに叶わなくても、こうしてこの人を見ていくのも良いかもな】

その同時思考にサンは心の中で笑った。あの王子様の息子だというのに余りに弱きで、乙女の悩みみたいだからだ。

そして気になるのがヴィヴィオのこと。あの心臓の高まりは確かにカリムの時と似ていた。しかし何か違った。気がするのでは無く、違ったのだ。何かが違う、決定的に違う、しかし似ているあの感覚を考えてしまう。

「っていけね。今はマスターカリムの護衛中。そんなこと考えてる場合じゃない」

誰も気づかない程小さな声で呟いて、再び周りの状況を見る。偉い

人物に媚びをする人物、既に会議の場所へと向かう人物、警備をしている人物、先程と全く変わってなかった。そしてカリムの方を向くと優しい顔でサンを見ていた。その魅力的な顔にサンは動揺しながらも聞く。

「あ、あ・・・の。マスター、カ、リム。ど、どうされ・・・・たので、・・すか？」

動揺するにも限度がある。しかし、サンはその限度をあっさりと超えてしまった。どうやら好きな人の顔は一段と綺麗に見えるみたいだ。昨日のカリムと今日のカリムは同じだが、サンにとっては全く違うのだ。

「クスッ。どうしたの、そんなに緊張して。私何かした？」

首を傾げながらそう聞くカリム。そしてサンは、いつもの騎士としてのカリムと違う、お姉さんの様な雰囲気に心臓がどんどん高まってしまう。今のサンの脈拍を調べたら百二十回を超えるだろう。

「い、い・・・え。マ。ス・・ターはいつも、通りで、美・・し、いです」

サンの動揺丸分かりの声を一文字溢さず聞いたカリムは顔を真っ赤にした。そう、彼女もまたサンを好きになってしまったのだ。そして好きな人物に美しいと言われた。更に動揺しながら言われたので、自分の格好で動揺させてしまっていると、自意識過剰の人で無くてもそう思ってしまう。

「あ、ありがとう。ちょ、ちょっと場所離れましょうか」

「そ、そうですね。少し風当たりの良い場所へ・・・リリ、オーバ

ーってあいつら居ないのか」

二機の声がしないので胸ポケットを探ったがやはり何も無い。そして、あることを思い出した。内部に入る時にデバイスは持ち込み禁止なのだ。なので、サンはどこかないかと考えていると、ある所を思い出した。

「マスターカリム。す・・・こ、し・・心・・当たり。が」

またカリムに目を向けると、髪にあるリボンを完璧に解いていた。僅かにだが、髪が舞う瞬間を見てしまったサンは再び動揺してしまった。綺麗だった、幻想的だった、もう一度見たい、という感情が一気に出てしまった。

「あ、ごめんね。ちょっと外したかったから。それで？　心当たりって何処？」

「い・・え。確か・・・向こう、・に」

サンは自分の欲望を抑えつけながら、なんとかエスコートしたい方向へ手の平を向ける。

「良い所でもあるの？」

「は、はい、中庭があるんです。中庭に行く代表は余り多く無いと思うので、ちょうど良いかと」

カリムはそう聞くと、サンの誘導に従って歩いた。

しばらくの間無言が流れた。お互い目を見ては逸らしての繰り返しだったので、そうなってしまったのだ。

「サン」

サンは後ろからカリムの声が聞こえたので振り返ると、手にリボンを持ってこちらに向けていた。

「あの、これは？」

自分に向けての物と判断したのでサンは受け取るが、今一意味が分からないようだ。リボンを見た状態のサンにカリムが答える。

「その・・・お守りです。長年持っていた物をお守りとしてあげると効果が上がると言われているから。・・・もしかして嫌だった？」

カリムの説明を聞いても一向に動かないサンに、思わず聞いてしまった。サンはそれを聞いて慌てて首を横に振った。

「違います、むしろ嬉しいです。俺は髪が長くないのでここに巻かせて頂きますね」

サンはそう言って、自分の手首にグルグルと巻く。だが適当なのでは無くしっかりと考えて巻いていたようで、皺一つ無く綺麗に巻かれていた。

「どうですかね？」

サンは自分の手首をカリムに見せる。余り予想して無い行動だったのか少し驚いた表情をしていたが、自分のお守りを身につけてくれたことが嬉しいのか笑顔で笑った。

「ありがとう」

再び魅力的な笑顔を見せられたサンは顔を真っ赤にして、急いで中庭の進行方向の方へ顔を向けて、歩き出した。

「あ、待ってください」

それをカリムは少し早歩きで追って行った。

中庭に着いた二人は辺りを見渡して誰か居るかを確認したが誰も居なかった。なので二人はプライベートの時の顔に戻し、芝生にゆっくりと座った。サンは慌てて自分の持っているハンカチをカリムの座る場所に置く。

「ありがとう」

サンの行動にカリムは礼を言うが、サンは「当たり前です」と、いつもの様に返した。そして芝生の上に座ったサンはゆっくりと辺りを見渡して呟く。

「でも、此処も懐かしいですね。たった五カ月前のことなんですがね」

五か月前という言葉でカリムは何となくサンが思い出していることを理解した。

「Bランク昇格試験ですか？」

「はい。はやてさんから俺の試験結果聞きましたか？」

カリムはサンを見、サンはカリムを見る。お互いの目が合ったが今回は逸らさなかった。自然とそうなったのだ。そしてカリムはサンの言葉に首を横に振る。

「今思うと笑える話です。俺の試験はBランク試験修了時間が過去最高記録だったんですよ。理由は色々あるんですが、やはり先のことを考えずに行動したことですね。例えば、敵に自分の位置を知らせるような派手な行動、集中砲火が来ると分かっていながらそこに突っ込む、試験中にデバイスの知らない魔法を使う・・・ってそんなに面白いですか？」

途中まで前になのはが言ったことを話していると、カリムが声を殺して笑っていた。その姿が年相応の可愛さだったので見とれていたが、すぐに理性で振り払った。そして未だに笑っているカリムが口を開いた。

「だ、だって・・・サンは、機動六課に入ってからも、成長が無いって、思うと、可笑しくて・・・」

「えー。俺って未だに非常識ですかね？」

サンの質問にカリムは笑いながら首を縦に振る。それに少しがっかりしながらもサンも笑う。

「まあそのおかげで貴女と出会えたのなら俺の本能ですがね」

そう言ってニコリと微笑む。カリムはそれを聞いて笑いが収まり一気に顔が真っ赤になる。しかし、サンは天然で言ったので気づいていないようだ。

「そ、それ、は騎士として、ですか？」

サンの言葉に動揺しながらも一番気になる所を聞く。サンは驚いた表情をするが、すぐに顔を意地悪そうにした。

「それは・・・・秘密です」

サンは人差し指を唇に当てながら言う。かなりの間を開けて焦らした結果がそれだったので、カリムは怒った。

「もう！　何ですかそれ！？」

叫びながらお尻に引かれてあるハンカチを丸めてサンに投げる。サンはそれを楽にキャッチする。その様子が嫌だったのかカリムは余計に怒った。

「もういいです。私はそろそろ議会室に向います！」

「かしこまりました。行ってらっしゃいませ、騎士カリム」

サンは少し馬鹿にした声でそう言う。カリムは完全に拗ねたようで、サンに何も話しかけずに中庭から出て行った。サンはそれを優しい目で見て、カリムが視界から居なくなった時に背伸びをして呟く。

「さ～て、俺も外で警備するとするか。久しぶりに皆と同じ仕事になったな」

サンの言う皆とはＦＷ陣だ。騎士となってからは一度も同じ仕事をしなかったので、警備は少し楽しみにしていたのだ。

そして、本部内から出て行った。

一方スバル、ティアナ、エリオ、キャロとギンガは陸戦魔導士として警備をしていた。現在は昼の十二時、そしてなのはとヴィータを入れた七人は前の晩の九時から警備をしていた。だがさすが魔導士と言うべきか、疲れが全く無かった。警備の順番を上手くローテーションしたおかげもあるだろうが、やはり体が丈夫なおかげだろう。

「ふう～。いよいよ始まったわね、ここからが本番って所ね」

ティアナが周りに居るスバル、エリオ、キャロ、ギンガに改めさせる為に言う。皆も分かっているようでガッツポーズをしながら返事をする。

「「おう！」」

皆が声を合わせるが、キャロだけは声を出さなかった。そして、どうしたのかと思い見ると、顔を下に下げていた。

「でも、もしかしたら今回は市街地が・・・」

そう、もしかしたら今回のサンとデビルの戦闘で市街地が破壊されるかもしれないのだ。報告では死人が出る可能性は極めて低いと言われたが、それでも絶対では無い。また、自分の家や店を破壊されて喜ぶ人物なんていないだろう。そう思うと自然にモチベーションは下がる。

「キャロ・・・」

ギンガは同情したようだが、スバルとエリオは違ったようだ。ティアナも顔には表わさないが気持ちは同じだ。

「大丈夫！　サンなら絶対なんとかできるよ」
「そう。僕達の弟なんだから信じてあげないと」

二人の声にキャロはハッとした表情になって、二人を見た。二人は励ますような目では無く、本当に訴えるような目だった。それを見たキャロは自分も同じ目になった。

「そうですね！　私はサンのお姉さんですから、しっかり応援しないと駄目ですよね」

キャロの言葉を聞いた三人は頷く。そしてギンガはそれを羨ましい様な暖かい様な目で見ていた。

「誰を応援するんだ？」

急に五人の後ろから声がした。普通なら驚かない所だが、知っている人物の声だったのでびっくりしたのだ。そしてその人物とは先程会話に出てきたサンだった。

「サン！　どうして此処に？」
「ん～。久しぶりに皆と一緒の仕事がしたかったからな。迷惑だったか？」
「ううん。むしろこっちこそお願いだよ」
「そうね。私なんてまだ一回しか同じ仕事をしてないし、うれしいわ」

最初は驚いた皆だが、すぐにサンとの会話を続けていった。
そして、色々なことを話した。術式兵装の言えるレベルの部分。騎士になってからのこと。ＦＷ陣は、訓練の進み。最近の副隊長達の

様子。今回の警備のこと等だった。そしてある時スバルがある物に気づいた。

「ねえ。サンってそんなアクセサリー着けてたっけ？　それに腕に巻いてあるリボンって・・・」

スバルがそう言うと一斉にサンの二つの物に視線がいく。最後にお互いが会って時にはそんな物は着けていなかった。エリオとキャロはアクセサリーについては分かっていたのだが、リボンは分からなかった。

サンはスバルから聞かれたので、それぞれを見て説明する。

「ああ、アクセサリーはヴィヴィオが作ってくれたんだ。何故かこれを着けてると気分が落ち込まなくなるな。そしてリボンがマスターカリムが着けていた物だ。お守りとして頂いたんだ。これを持ってると見守られている気がしてな」

そう聞いた五人はサンから一定の距離を置いて一斉に輪になって、話合いをする。サンは何をしているのかと不思議に思ったが、余り興味が無いのかじっとしていた。

「ねえ。主と騎士は恋愛禁止だったわよね」

「はい、そのように聞いていますが・・・」

「それにヴィヴィオもなのはさんとフェイトさんの保護児童・・・つまりサンの妹」

「でもまだどちらも恋愛とは決まっていないんじゃない？」

「でもでも先程の映像でカリムさんとサンが目を合わせて慌てて逸らしたのを見ましたよ。かなり小さな行動だったのでＴＶ局の人や管理局の人達も気づいていなかったみたいですが」

「それってカリムさんとサンが付き合っているってこと？　でもサ

ンは騎士として頑張っているみたいだから、想いがあっても告白はしないんじゃない？」
「それじゃあ両想いってこと？　でもヴィヴィオは？　アクセサリー見ていた時のサンもいつもと違っていたわよ」
「じゃあヴィヴィオも好きってこと？　って・・・二股？」
「いや、二股は二人の女性と付き合っていることだから違うと思うわ。二人に引かれているって言った方がいいかと思うわ」
「皆さん・・・まだサンが二人を異性として好きと決まった訳じゃあ・・・」
「「決まっているよ（わ）」」
「え～」

四人のサンの恋愛の話合いを止めようとしたエリオだがあっさりと返された。そしてサンが近づいて来たので、慌ててサンと話を出して上手く止めた。そしてそれに気付かず、四人の女達はひたすらと話を続けていた。

「でも・・・どちらにしても禁断すぎませんかね？　妹と主。確かにヴィヴィオとは血は繋がってませんが、お兄ちゃんと呼んでいてまさに兄妹みたいです」
「そうね。確かに極端な気がしないでも無いわね」
「でもサンの両親はなのはさんとフェイトさんだよ。子供は親に似るっていうし」
「「なるほど」」
「つまりサンは主と妹が好みってこと？」
「甘いわねスバル。ああいう子は本能で人を好きになるのよ。多分どっちもサンの頭では無く心から好きになったのよ」
「さすがギンガさん。でも冷静なサンが好きになったってことは余程衝撃的な事だったんでしょうか？」
「多分あたしの推理からすると、ヴィヴィオはアクセサリーを貰っ

た時ね。そしてカリムさんは昨日何かあった・・・リボンを貰ったのは今日みたいだし、そう考えたら結構納得いかない？」

「「確かに」」

「じゃあサンはどっちの方が好きなんだろう？　やっぱり大人のカリムさんの方かな？」

「いや、逆に純粋なヴィヴィオかもしれないわ。いや・・・でもカリムさんもなかなかの天然っぽいような・・」

「「ん～」」

再び考え込む四人。皆恋愛のことなのか、いつもより目が輝いているような、獲物を見つけたような目をしている。そしてその後ろからサンが来た。どうやらエリオの話術は余り無いようだった。

「お前等何してんだ？」

若干呆れた様な声を出して四人に言う。四人は驚いて慌てて声の方を向くとサンが居た。声もそうだったが、顔も呆れていた。

「あ・・いや」

「え～～と」

ティアナ、キャロ、ギンガは笑って誤魔化そうとしたがスバルは違った。勢いく腕を振ってサンに近づいて、両腕でサンの方をしっかりと掴んだ。訳の分からない、と言いたい表情をしていた本人にスバルは聞いた。

「ヴィヴィオとカリムさん、どっちが好きなの？」

サンとスバル以外は手を顔に当てて呆れているが、女性陣は指を微かに開けてサンを見ていた。気になるのはスバルだけでは無いとい

うことだ。

「え～～と、どういうこと？」

「だから、ヴィヴィオとカリムさんのどっちが好きって聞いてるの！」

この質問の意味はどちらを好きかということだったのでサンは迷わず答えた。

「そんなの両方に決まってんだろ」

当然の様に言うサンにスバルは溜息を吐いて別の言い方で質問した。

「ヴィヴィオとカリムさん、どっちが異性として好きなの？」

それを聞いた瞬間にサンの顔は真っ赤になった。いつもの五歳児らしからぬ顔をしていたサンが急に子供らしい顔になったので、皆恍惚そうな表情をして抱きつきたくなったが、質問の答えの方が気になったようで、抱きつくのを止めた。

「え～～と／／　そろそろ別の警備に・・・」

「行かせると思う？」

未だにサンの方を掴んであるスバルの力が更に強くなる。そしてこの場を逃れようと胸ポケットにある二機のデバイスを見た途端に、それに答えて声が聞こえた。

『カカカ、正直に言ったらどうだ？　まあ俺が気になっているだけなんだがな、カカカ』

『あの、マスター。私も気になりますので、出来れば教えて欲しい

のですが・・・』

どうやらサンの味方は居ないようだ。最近言うことを聞かないデバイスに怒りを感じながらも溜息をつく。どうやら言うことにするようだ。

「確かにマスタ・・・カリムのことは好きだ。初恋だと自覚している。だがヴィヴィオに関しては分からない。カリムと似ていて似ていない感覚だ。正直俺も悩んでいた」

サンの告白に女性陣はテンションを上げた。確かに子供の恋というのは初々しく、微笑ましい物だ。禁断と分かっていてもつい応援したくなる物だ。

「ねえサン。ひょっとしたらカリムさんもサンに気があるかもしれないわよ？」

ティアナがニヤニヤしながら言う。それを聞いたサンは嬉しそうな表情をせずに、逆に落ち込んだ。それを見たキャロは質問した。

「嬉しく無いの？」

「・・・・ああ。嬉しいさ。だが、俺とカリムは恋をしてはいけない関係だ。お互いの思いが同じだからこそ辛い・・・って感じだな」

それを聞いた途端に皆顔を悪くする。今思うとサンは本当に大人の子だ、他人を助ける為に自分を傷つけるというような子・・・つまりカリムの立場を悪くしてまでも、告白するような子じゃないのだ。皆そう気づいたのだ。

「ご、ごめん」
「いや良いんだ。別に誰かに言われたからって変わる気持ちじゃないからな。この諦めの気持ちは・・・例えカリムに告白されてもな」
誤ってきたスバルにそう答えた。そしてその答えにエリオは質問をする。
「カリムさんに告白されたら、付き合うんじゃないの？」
「導く物が人に隠してまで・・・騙してまで告白すると思うか？仮にして来たらそれは自分の全てを失うと言ってるような物だ。地位も名位も全て逆さまになるかもしれない。そしてカリムを慕う人達全てを自分から捨てる・・・カリムにそんなことは出来ない」
そう聞いて皆は納得したが空しい顔になる。
これ以上この話をするおと仕事に影響が出るかもしれないと判断したサンは五人にこう言った。
「気にすんなって。初恋は枯れる為にあるような物って聞いたことあるしさ、俺も今のカリムとの関係って結構気にいってるしさ。自然と新しく好きな人がお互いに出来たら言おうと思っているし」
笑顔で言われたので皆もこれ以上気を使わせまいと笑顔になる。
「それにさ・・・俺はまだガキなんだぞ。色恋何て早すぎんだよ」
それを聞いた途端に皆笑った。自分で自分の恋をませていると言ったのだ。いつものサンの様に冷静で自分の年齢を的確に言った。本当に前と変わらぬサンだった。
「じゃあたし達は少し分かれて警備するわ。サン、あんたはどう

するの？」
「ん～。兄さんと少し警備しようかな。やっぱ男同士で話したい事もあるしな」

ティアナの質問にサンは答え、エリオを見た。キャロは少し悲しそうな表情になったが、サンが「今度何処かに行こう」と言ったので笑顔になり、ティアナと警備に行った。

「じゃああたしとギン姉は此処周辺を警備してくるね」
「サン、いつか組み手してね。魔法戦では負けるかもしれないけど、これではそう簡単に負けないわよ」

二人はそう言ってこの場から離れた。サンとエリオはギンガの言葉に苦笑しながら、二人に手を振った。

「さて・・・散々俺に恋愛話してきたんだ。兄さんも勿論答えてくれるよな、姉さんとの関係」

どうやらサンがエリオと警備する理由はこれだったようだ。獲物を見つけた時の瞳をしたサンを見て、すぐに逃げようとするエリオだったが、あっさり捕まってしまった。

「僕とキャロはほんとに何も無いよ？　いつも友達として接してくれるし」

その時のエリオの顔は嬉しそうだが、悲しそうでもあった。どうやらキャロに対する好意はあるようだ。

「・・・まあ時間はまだまだあるんだ。頑張って付き合っていけよ。絶対お似合いだからな兄さんと姉さんは」

「そ、そうかな」

サンの励ましを聞いてエリオの顔が赤くなる。そして照れくさいのか、頭をかいていた。

「そうだって。まあ姉さんってかなり天然だからな。いっそ父さんと母さんに教えたらどうだ？　あの二人だったら絶対に応援してくれるぞ」

その言葉にエリオは恥ずかしそうにする。まあ、育て親に好きな人を教えるのは恥ずかしいだろう。

その一方でエリオは別のことを考えていた。サンとカリムがお互いの気持ちを伝え会ったら、なのはとフェイトはそれを応援するのかだ。保護児童の子は応援されて、血の繋がっている子は応援されない。そう思うとサンへの申し訳なさが出て来る。

しかし、サンにそう言うと逆に悲しませてしまうと判断したので、それを言わずにサンに向って言った。

「分かった。いつか時間が出来たらい言うよ。色々ありがとうサン。そろそろ集合の時間だから僕行くね」

エリオは自分の考えをサンに伝えて、そのまま集合場所に向った。

「おう。頑張れよー」

それを見送るサン。エリオが見え無くなると息を吐く、そして深呼吸をする。

『どうしたのですかマスター？　やはり緊張されているのですか？』

いつも深呼吸を全くしないサンがしたので心配になったようだ。リリの気遣いにサンは喜びを感じたので、それをそのまま言った。

「ありがとなリリ。確かにちょっと緊張するがそれだけだ。戦闘には問題ない」

サンはそう言うと飛行魔法を使い、ゆっくりと上昇し低速飛行をする。そして本局の隅にある建物の上に降りて、辺りを茜色にする夕焼けを眺めた。

「太陽・・・サンか。父さんもほんとに良い名前をつけてくれたよな」

サンの視線には物凄いオレンジ色の光を放つ太陽があった。その巨大さと美しさは、自分の名前の由来にしては大きすぎる物だった。しかしサンはそのことは余り気にならないようだ。もっと別のことがあったからである。

「でも・・・太陽は必ず沈む物だ」

ゆっくりと沈んでいく太陽を見ながらゆっくりとサンは呟いた。

リボン（後書き）

次回いよいよデビルが来ます。
さて、デビルとの戦いでサンはどれだけの人を巻き込まずに戦えるでしょうか？
ってなんでこんなまじめな感じのあとがきなんだろう？

アインハルト可愛いよアインハルト
ヴィヴィオ可愛いよヴィヴィオ
でしたが最近カリムも可愛く感じます。特に管理局の制服を着たのを見てそう感じましたｗｗ

デビルの絶対的力（前書き）

なんかかなりご都合主義回です。
でも頑張って書いたので見てください。

デビルの絶対的力

「太陽は必ず沈む物だ」

サンが太陽を見ながらそう呟いた瞬間に魔力反応があった。前に感じたのと同じだ。そう、ルーテシアと言われていた少女と同じだ。本当に襲撃を開始してきたのだ。

『超スピードで、本局に接近してくる物体があります』

『おそらくデビルだな。どうする相棒？』

二機の言葉に返す様にサンは口元を上げる。それを見たリリとオーバーはバリアジャケットを展開し、サンの腕にガントレットが装着された。

「輪廻転生の稲妻、固定・・・圧縮。装填」

次の瞬間にサンが大人の状態になり雷を纏う、そして超スピードで接近している物体に飛んで行く。

ウーウーウー

『避難警報、避難警報、住民の皆さんはただちに避難して下さい。これは訓練ではありません。繰り返します』

サンの耳に緊急避難の指示が聞こえた。クロノが前もってやっていたのだ。その為、まだ戦闘が始まって無いのに、避難している人物も居る。その中には泣いたり、悲しんだりしている人が居たので、サンはなるべく被害が出ないようにしないといけない、と改めて決

意を強くした。
本局には既に物凄い数のガジェットが居た。そしてＡＭＦを大量に使って、中で魔法を発動出来ないようにしているようだ。そしてガジェットの中に一人の人物が居た。見た目はひょろっとした二十代後半の男性、そしてその実態は機動六課前線メンバーを一人で撃墜させたデビル。
当然サンに気づいたデビルはそちらを向く。

「いや～～ぁ。お久～ぶりでぇす」

前と変わらないふざけた口調にサンは物凄い殺意を感じる。

「そこのガジェット共をどかせろ。さもないと貴様をぶっ殺す！」

そう言って手の平をデビルに向ける。と、言ってもサンもこの脅しは全く期待していないのだ。デビルがこれくらいで止める訳が無いし、デビル以外にもこの襲撃に別の人物も関わっている。一応の確認と言う訳だ。

「そんなぁ～ことより早く殺し合いましょう～～！！」

そう怒鳴った瞬間にデビルは超スピードでサンに接近する。サンは身体能力強化の魔法を使って接近して来るデビルに打ち合う。
まずデビルへの顔面ストレート、それを首を動かしてかわして右拳での溝打ちするデビル。拳を左膝で防いで関節を動かしそのままキック。かわさずにそれをくらうデビルだったが、全くダメージが無い。更に今サンは行動したばかりであり、左足が動かない状態だ。

「ッチ。ダウンバースト」

一旦間合いを取る為に風圧をデビルに放射する。一定以上の間合いは取れたがサンの行動の隙が多く、左足にダメージがあった。

「そんなチンケぇなあ魔法で～僕から逃げれらるとでもぉ？」

声の元はサンのすぐ目の前にあった。しかしサンもただ逃げていただけでは無い。

デビルの腕足に渦の錠が現れた。

「設置型、軟水錠硬水縛。・・・死ね！　雷の投擲！」

魔法名を言った後にサンは一旦デビルから距離を置いて、別の魔法名を言う。それを言った途端にサンの手に五メートルはある槍が出現した。そしてそれをデビルの心臓に向って投げる。

「まだ、強化陣フル・アライブ！」

雷で出来た槍の直線状に三十枚の強化陣が出現した。半分が威力強化で半分が速度強化だ。なんとも単純な組み合わせだが、一番殺傷能力が高いとサンは知っているのでこうしたのだ。

強化陣を通り抜けて行く度にスピードが上がっていく。そして微かにでも槍に当たったガジェットは破壊されていく。

一方デビルは何も言わずに何時もの如く笑っていた。

デビルの心臓に槍が突き刺さった。しかし未だにデビルは笑っていたので、サンはすぐに次の行動に出た。

「第二効果発動！　爆音疾呼！＞ばくおんしっこ＜雷騰万里！＞らいとうばんり＜」

サンが叫んだ瞬間に上空の雲が一気に雷雲に変化して、そこから雷

が槍に落ちた。普通の攻撃術式に儀式術式を組み合わせた魔法だ。更にそれだけでは終わらない。

「レベル1スフィア大量展開！」

次々とスフィアが展開された。その数は二百を超えている。最も操作は全くしていない、ただ展開しているだけだ。

「スターライト」

サンの右手前に集束魔法の魔法陣が展開されて、周りの魔力が一気に集まる。そう、サンは術式兵装の魔力威力強化の特性を活かしたのだ。1の魔法を5まで上げる術式兵装。そしてその間の4の一部はサンのリンカーコアに貯蔵され、残りは魔力分散される。そしてその魔力値を集束魔法で貯める。永久機関と言っても良い。

「ブレイカー！？　いや！　魔力圧縮！」

サンは砲撃をしようとした瞬間に何かに気づいたようだ。なんとスターライト・ブレイカーの魔力だけを圧縮して自分の物にした。

『マスター、どうしてそんなことを！？』

最強の砲撃とも言えるスターライト・ブレイカーを発動せずに、ただ魔力を圧縮したのだ。リリは非難の声を上げる。

『カカカ、いや、相棒の判断は間違っていないみたいだぜ。ほら、敵さんを見ろ』

そう言われてモニターをデビルの方へ移すと、笑っているデビルの

姿があった。

『長期戦になると判断したのですか？　しかし、長期戦が不利ということはマスターにも分かっている筈です。あいつのタフさもありますが、此処は首都クラナガンなのですよ』

「分かっている。しかしさっきスターライト・ブレイカ―を撃っても変わり無いだろう。多分こいつは更にパワーアップしてるからな。ったく不気味な奴だ」

そう言って皮肉そうに笑う。笑ったのはデビルにではなく自分にだ。正直さっきの魔法は前にデビルを倒したギガ・サイクロン・ブレイクとかなり威力の近い魔法だった。電気の魔力変換物質を使った魔法では一番の威力と言っても良い。そう、サンは自分の弱さに笑ったのだ。

「ほんとぉ～にあなたは羨ましい～才能を持っていますねぇ～。それ見てると殺したくなるんですよ！」

そう叫んで自分に突き刺さっている槍を抜き取り捨て、そのままサンに接近する。サンも同じく接近した。

今度の戦闘は空中での高速戦だった。一撃一撃を一回一回離れて戦っていた。

ドオン！　ドオン！　ドオン！

スピードの乗った二人の拳がぶつかり合う度に、上空に物凄い音が響いた。

デビルがサンに向けてスフィアを発射した。その数、百数十個だ。

サンは同じ数のスフィアを展開して、操作するのは不可能と判断したか砲撃魔法を使って撃破した。その砲撃の隙を見てデビルは後ろ

に回り込み、サンに拳を振り下ろす。

「しまっ・・」

サンも気づいたようだが既に遅く地面へと突き落とされ、叩きつけられた。周りにはクレーターが出来ていた。

「っち。こんなんでへばるかよ！　カートリッジロード、ダウンバースト・黄炎覇渦＞おうえんはうず＜」

すぐに立ったサンはデビルに向って三個のカートリッジを使って超高圧風を出し、更にそれに黄金の炎の渦を乗せる。それは炎の竜巻になってデビルを襲った。

ドォオン！

爆音がクラナガンに響く。

ガサッ

そして同時に小さな音がしたので何かと思いそちらを見ると、緑の髪を二つに結び、オッドアイの少女が居た。背丈はヴィヴィオとほとんど変わらないくらいだ。

「あ、あの・・・」

少女は恐る恐るサンに手を近づけようとする。どうやらサンのことを心配してくれているのだろう。その様子に嬉しくなって微笑む。

「お前、名前何て言うんだ？」

上空にデビルが居るというのに何時もの口調でその子に聞いた。急な質問に少女は動揺したが、すぐに答えた。

「ア、アインハルト・ストラスです。えっと、年は今年六になりました」

それを聞いたサンは笑う。

「そうか、じゃあ俺とヴィヴィオと同じ年ってことか。ずいぶん大人びてるな」

「えぇ!?　あなたも六歳なんですか!?」

サンの言葉を聞いて驚くアインハルト。目の前に居る人物はどう考えても十六は過ぎている。悪い冗談かと思ったアインハルトだが嘘をついている表情ではなかったので、余計に驚いたのだ。

「ああ、もうすぐ六歳だ。そしてこれは変身制御。それよりアインハルトは何故此処に居る？　避難警報がって・・・おわ!?」

サンが質問した瞬間にデビルの砲撃魔法が二人の方に来たのだ。サンは慌ててアインハルトを左手で抱えて回避した。そしてクラナガンを低空飛行で動き回りスフィアを撃って、逃げ回る。

「悪いが説明は後だ。あいつがやばい奴で俺が戦っているってのは分かるだろ？　どっか安全な場所まで運んでやるからそっからは逃げろ」

サンの指示に頷くアインハルト。子供から見てもデビルの恐怖さが分かるのだろう。少し手が震えていたのでサンはアインハルトを少

しきつく抱く。

「あっ／／／」

急に強く抱かれたので思わず赤面してしまう。が、サンはそれに気づく程暇では無かった。

「アハハハハハ」

デビルは低空飛行を続けているサンに向って次々とスフィアや砲撃魔法を撃つ。サンは出来る範囲での迎撃はしたが、全ては無理のようで市街地がどんどん破壊される。このまま低空飛行は街に損害が出ると判断したので上空に上がる。

「悪い、もうちょい降りるのは後だな」

そう言って前に居るデビルを睨みつける。そしてデビルは相変わらず笑っていた。その笑いが不気味だったのか、アインハルトは一段と震えが酷くなった。

「アハハハハ。まさかぁ～僕とハンデを付けて～戦うつもりですかぁ～？」

デビルの言う通りである。サンの武器である腕が片方使えない状態なのだ。両腕でも勝てないような相手にどうやって戦かえばよいのだ。それにサンの電気の魔力変換物質での術式兵装の状態での最高スピードを出したらアインハルトは衝撃によって潰されてしまうかもしれない。しかしデビルの的確な言葉にもサンは笑って返した。

「俺の術式兵装が一つじゃないのはお前が身を持ってしってるだろ

？　圧縮術式変更！　ロンズーデーライトの檻！」

その次の瞬間にサンの体が雷を纏った姿から、氷の彫刻の様になった。一瞬恐れたアインハルトだが、よく見る内にその綺麗さに気がついたようだ。震えていた体が止まり、デビルを見ていた顔が完全にサンに向いている。

「まためんどくさい～能力ぅですね～。まあ殺すだけですけど！」
「っけ、お前の突っ込んでくる前の叫ぶ癖は直した方が良いぞ。アホにしか見えんからな」

そう言ってアインハルトを抱えたまま構える。
デビルは氷の状態のサンは相手にしたくは無いのか、アインハルトを狙って拳を打つ。それをアインハルトを抱えている左腕を使ってかばう。そして一旦離れてスフィアを大量展開する。その魔力光は黄色だった。

「アイン、目を閉じろ」

デビルに気づかれないように小さく指示を出す。アインハルトは急に愛称で呼ばれたので顔を赤くするが、真面目な声だったので言うことを聞いて目を閉じた。サン個人は、こちらの方が呼び易いからそう言っただけなのだが。

「フラッシュボム！」

次の瞬間にスフィアが物凄い光を出した。攻撃かと思っていたデビルは当然目を開いて構えていたので、その光は勢い良く目に入った。

「まだだ、解放・ロンズーデーライトの檻」

解放した魔法は氷で出来た檻だ。それがデビルを中に閉じ込めて、行動不可能の状態にした。しかし、サンはすぐに脱出されると判断していたので、急いで地上に降りた。

「アイン、色々と聞きたいこともあるかもしれないが今は逃げてくれ」

アインハルトは頷いたが、少し恥ずかしそうな顔をしながら口を開く。

「あの・・・元の姿に戻れるでしょうか？」

サンは一瞬悩んだが、オーバーから「まだ余裕がある」と聞いたので元の姿に戻った。その姿を見たアインハルトは驚く。自分の目の前に居る人物が有名人だったからだ。

「高町サンさんだったのですね」

「ああ。それで何かあるんだろ？　出来れば早くして欲しいんだが」

ソワソワしたように言うサン。確かに最大の攻撃チャンスを進行形で逃しているのだ。少しでもダメージを与えることと、早くアインハルトを逃したいという気持ちの両方でそうなってしまう。

「すいません。では」

そう言ってサンの頬に自分の唇を当てた。

『ヒュー。相棒ってモテモテだね～』

『既に三人目ですか・・・どうなるのでしょうか？　日常に戻った

ら大変そうですね』

二機のデバイスが冷やかしの言葉を言うがサンには聞こえなかった。未だにキスの耐性が無いようで、顔を真っ赤にする。

「あ、え・・・と。どして？」

真っ赤にしながら聞いてくるサンにアインハルトは笑顔でこう答えた。

「戦う人物にはそれ相応の褒美が与えられると聞いたことがあるのですが、今私がサンさんにあげられる様な物はこれしか無かったのですが・・・いやでしたか？」

途中までは六歳児らしからぬ言葉を使っていたアインハルトだが、未だに同じ表情のサンに悲しい表情で聞いた。

「い、いや。恥ずかしかっただけだ。サンキューなアイン」

サンはそう言ってアインハルトの額にキスをする。アインハルトは真っ赤にして、何故したのかと聞こうとしたが、どうやらその時間は無かったようだ。

「ヒヒヒヒ、相変わらず面白いですね～～！」

そう不気味に響き渡る声がした次の瞬間にバリンと氷の割れた音がした。檻が壊されたのだ。アインハルトはすぐに逃げようとするが、誰かとぶつかって転んでしまう。

「アイン！？　誰だ！」

慌てて振り向くと、そこには一人の男性カメラマンと女性の記者らしき人物が居た。

「あなた騎士高町サンさんですよね！　何故この様なことになっているのか取材をしたいのですが！　それと市街地での危険魔法使用をした感想を一言！」

余りに空気の読めない行動にサンは殺気を感じたが、今はそれ何処では無いのと、この人物がシャッハの言っていた人物だと判断したサンは、発言と態度に注意しながら言った。

「一つ目はテロリストだな。これについては俺も良く知らない。二つ目についてはあの危険人物の無力化、または殺害の為だ」

あの人物と言われてカメラマンと女性は一斉にサンの指さす方へ顔を向けると、超巨大な集束魔法を構えていたデビルの姿があった。

「あ、あれは誰なのでしょうか！？」

「さすが記者だな。まあ簡単に説明するとあれが市街地を壊した犯人で、俺がそれを止めているって感じだな。そろそろだな、皆伏せろ！」

慌てながらも質問してくる女性記者に褒め言葉を与えたサンは、そろそろ集束砲撃を撃ってくると判断したのでこの場に居た全員に伏せる様に叫んだ。アインハルトとカメラマンは伏せたのだが、未だに女性は伏せなかった。

「あれを止められる方法があるのですか！？」

マイクをサンに向けながら言う。その反対の手には小型のビデオカメラがあった。サンは余りの空気の読めなさに、爆笑しながらも答えた。

「当然、俺は聖王教会騎士カリムの騎士だ！　これ以上市街地を好き勝手やらせるかよ！」

そう叫んで両手を上空にいるデビルに向ける。

「皆さん！　まとめて死んで下さい。ダークエンド・ブレイカー！」

デビルから黒の砲撃が放たれ、大きさは横で五十メートルある。その砲撃は爆音を立てながらサンを中心として向って来た。

『ケケケ、全次元の生き物を驚かせてやれ』

『常識の無いマスターなら必ず何とか出来ると信じています』

「わーたよ！　敵弾魔法固定！」

サンが叫んだ瞬間にデビルの砲撃ダークエンド・ブレイカーの動きが止まった。

「「な！？」」

この場に居た全員が驚きの声を上げる。おそらく生放送でこの映像が流れていると思うので管理世界の全員が驚いただろう。しかしサンはそんなことを考えずに自分の能力のイメージを固める。術式兵装で大事なのはイメージだ。イメージ次第ではかなりのことが出来るが、そのイメージを失敗したら自分の体に大量の魔力が流れたり、術式が体の中で発動してしまうこともあるのだ。そして今回のイメージは相手の魔法を止めて、自分の魔力に変換すること。

サンの目が一段と開いた。

「魔力圧縮！」

サンが両腕を握った瞬間にデビルの砲撃が消える。

「魔力圧縮成功。リンカ―コアへの貯蔵成功。暴発の恐れ無し。・・・初めてやったが以外に上手くいけたな」

そう口元を上げて呟く。さすがの女性も信じられないようで口を開けて固まっていた。

そしてこの沈黙を破ったのがデビルだ。

「ハハッハハハ！　面白いです面白いです、本当にあなたは殺しがいのある人ですね～～。いいでしょう！　私の新たなる力を見せて上げましょう！」

そう叫ぶとデビルの体に異変が起きた。人間の皮膚が次々と無くなり、竜の鱗が生えてくる。更に牙が生え、腕が竜の様に、髪は長くなり不気味な黒色になった。

その余りの異変にこの映像を見ていたサンを除いた全員が体を震わせる。

「ったく夢で見て無かったら、完全に怯んでたな。おい記者さん、あんた名前なんて言うんだ？」

サンの質問でハッとした表情になった女性はマイクを向けながら答

えた。

「セリオ・シモーナです。あの人物をどうやって倒すつもりなのですか！？」

あくまで質問が優先のその行動に再び笑いながら答え、その間にアインハルトの近くまで行き、ゆっくりと立たせた。

「セリオか。倒すのはぶん殴るか魔法を決めるかだな、それ以外には無い。・・・悪いが戦闘に集中したいから今回は退いてくれ。これから俺への取材はお前しか出来ない様にするからさ」

「ほんとですか！？　分かりました、全力で退かせて頂きます！」

そう言って後ろを向いたがサンが手を掴んでそれを止める。

「待て、その子も一緒にだ。家まで案内してやってくれ。もしこの近くならしばらく預かるんだ。そしてアインが俺の所まで来たいと言ったら取材ついでに連れて来てくれ」

「良いのでしょうか？　サンさんは有名人なので余りそう言う発言はよろしく無いかと・・・」

アインハルトがサンの心配をする。確かに今は生で流れている可能性が高い。それなのにこのような発言は余り良く無い。しかしサンは笑って返した。

「大丈夫だって、俺にファンが居る訳じゃあないしさ。それよりとっとと行け、そろそろあいつの変身も終わるっぽいぞ」

そう言われて見ると、確かに体の全部分に竜の鱗が出てきている。そろそろ終わると考えるのが普通だろう。

皆は急いでこの場から離れて行った。

「しっかしどうする？　いよいよ手札も無くなってきたな～」

サンは自虐気味に笑いながら言う。その視線の先には化け物という言葉が一番合う姿があった。

『確かに不味いですね。正直マスターの術式兵装はこれ以上新たな力は無いですし・・・』

リリもサンと同意見でかなり危険な状況だと考えているようだ。しかしその空気に合わない声が聞こえた。

『カカカ、相棒通信が入ってるぜ。なんとその相手はアベル・クローベルだ、カカカ、モニターに出すぞ』

オーバーがそう言うとサンの横にモニターが現れた。そこに映っていたのは、博物館の時の紳士的な老人、オーバーの言う通りアベル・クローベルの姿があった。

「何？　生憎俺はちょっと忙しいんだけど」

博物館の時と同じ口調で話されたのでアベルは笑ってしまう。

「あなたの力になりたくて通信しました。今私が居る場所はクラナガンの研究所。そしてそこにはジンオウガと電光虫、ガーグアが居ます。この意味あなたなら分かると思いますが？」

「・・・成程な、すぐそっちに行くよ。雷の投擲、固定・圧縮。装填」

アベルの言っている理由が分かったサンは、術式兵装を行いデビルを無視して、研究所の方へ飛んだ。場所についてはリリの誘導に従っている。そしてサンのスピードで僅か四秒だった。

『巨大な生体反応あります。おそらくジンオウガと思われます』

リリがモニターを出しながら説明をする。確かに建物の中に、博物館で見た立体映像と同じ反応形だった。

急いでいるので玄関から入るようなことはせずに、魔法を使い壁を壊して侵入した。

「グオオオオ！」

入った瞬間に物凄い叫び声が聞こえた。そちらを見るとジンオウガの姿があった。力強いその姿にサンは見惚れたが、時間が無いので行動した。ジンオウガに接近して、おそらく頭であろう部分を掴んだ。

「解放・雷の投擲！」

雷の槍がジンオウガに突き刺さった。ジンオウガは悲鳴を上げる。しかしサンはその声を聞いても動じずに、行動を続けた。

「第二効果発動！　爆音疾呼！　雷騰万里！」

破壊された壁から雷がジンオウガを襲った。雷を使うジンオウガには効かない筈の攻撃なのだが、頭の内部に突き刺さっている槍から雷が来たので対処できなかったようだ。例え電気を纏える物でも場所によって、電気は敵にもなるのだ。

「グオォォ」

ジンオウガの悲鳴が消えた。どうやら死んだようだ。サンは殺したことに悲しみながらも、すぐに次の行動に移った。

「アベル！」

そう叫んだ瞬間に大量のガーグアが部屋に放たれた。そして腹を空かせたガーグア達は死んでいるジンオウガに付いている電光虫を食べ始める。

「おら！」

そのガーグアをサンは一匹ずつ殺していく。そう、サンとアベルは雷光虫をサンに纏わせようと考えているのだ。
ガーグアを殺していく内に段々雷光虫がサンに近づいてきた。何とか間に合うと思ったがそれが甘かったようだ。

『マスター。デビルの反応があります、あと五秒です』

リリの叫び声が聞こえる。サンがデビルの元を離れてからわずか十五秒しか経っていなかったが、やはりそれでもデビルの変身には十分な時間だったようだ。

「くっそ！　雷の投擲、固定・圧縮。装填」

急いで術式兵装をしたサンは回りの電光虫を見て叫んだ。

「お前等はとっとと俺に力を寄こせ！　でないとお前等も死んじまうぞ！」

その叫びを聞いても動かない雷光虫に、怒りの余りに電気を放出する。しかしそれでも一向に動かなかった。

「鬼ごっこは終わりぃ～ですかぁ～？」

声のした方を見ると、完全に竜人と化したデビルの姿があった。不気味という感想しか思い浮かばない姿だ。

「くそ！　雷神装」

身体能力強化を使ったそのスピードにデビルは付いていけなかったのか、サンの拳が当たった。

「で、これだけですかぁ？」

「ですよね～」

デビルへのダメージは全く無いようだった。そしてサンに溝打ちとストレートを同時にする。サンはそれを腕を使い防ぐが、両腕が曲がってはいけない方向に曲がってしまう。それを見た二機は慌てて移動魔法を発動して、一旦距離を置いた。

「がああああ！」

余りの痛さにサンは叫び声を上げる。それを見ているデビルはケラケラ笑っている。

「諦めて下さい～。私は守護竜レベルの竜のＤＮＡをぉ～改造した物を入れているんですよぉ～。死ぬかと思いましたが、あなたの無様な姿を見れたので良かったでぇ～す」

サンは激痛に耐えながらも口を開く。

「圧縮術式変更、永劫の氷河。圧縮術式変更、水随元帥器」

氷の術式兵装にして、一旦骨の折れた部分を再生して、その後に水の術式兵装の状態になった。しかし当然ダメージはあり、息が荒い。

「ほんっっとに～面倒な能力ですね～ぇ。まあ殺しがいがあるから良いですか～？」

そのふざけた口調にサンは何も言わずに構える。先程のデビルと強さが桁外れに違うのだ。まともに戦える状態なんてこの水の状態だけだ。

「アハハハハ」

デビルが笑いながらサンに突っ込んで来る。

「黎明の雷傳砲」

砲撃を使い迎撃しようとするが、全く意味の無い行動だった。デビルはそれを手で弾いたからだ。まるで虫を振り払うような感じの行動に、サンはやけになったのか笑ってしまう。

「ほら～」

デビルが蹴る。しかしサンの体が分裂されて、その攻撃が空を切る。そして分裂した水がデビルの後ろに集まった。

「振動する純水」

その瞬間にサンの体の表面が振動する。デビルの首元を手で斬った。しかしデビルの表面には傷一つ無かい。そしてサンの方を振り向きながら言う。

「こういうのって、弱点が有ったりしません？　例えばこんな感じでぇ」

サンの体に自らの拳を入れた。サンはすぐに分裂しようとしたが、予想以上のスピードについていけなかった。そしてデビルは拳を震わせる。

「があああああ！」

弱点である内部からの攻撃にサンの体に激痛が走る。当然デビルは止めようとせずに、更に振動を強めていく。サンは分裂して何とか拳から逃れたが、既に体は限界のようで体がガタガタと震えていた。再びデビルは笑う。純粋な笑い声だが、笑う理由が人を傷つけることなので、やはり狂っているようにしか見えない。

「あなたが死んだらこの人達を助けられませんよ～」

ふざけた口調でそう言い、サンの前にモニターを出した。そこに映っている映像を見てサンは目を開いた。

空中で戦っているフェイト。
ボロボロになった状態のスバルに、青いスーツを着た女性達に連れ去られ腕の中身が見えているギンガ。
崩壊している機動六課隊舎。

必死に壊れた機動六課を守っている、シャマルとザフィーラ。
気絶しているリィンと壊れているグラーフアイゼンの名を叫びながら泣いているヴィータ。
そしてルーテシアに連れ去られているヴィヴィオ。

「アハハハ、どうですかぁ？　面白いでしょ～」

その言葉を聞いて、サンはあることに気付いた。

「アハハハハ」
「どうしたんですぁ？　余りの絶望に心が死んでしまいましたかぁ～？」

急に笑い出したサンにデビルはそう言う。どうやら此処で笑うのは予想外みたいで、本当に不思議そうな顔をして首を傾げている。

「違うな。お前をぶっ殺す方法を思いついたんだよ」
「へぇ～聞きたいですね～」

笑いながら言うサンに笑いながら返すデビル。しかし、両者の瞳には殺気しか無かった。

「結構簡単なことだったんだよ。単純なことだ」

そう呟きながら水の術式兵装を解除する。そして両腕を目の前に出して叫んだ。

「雷の投擲！両腕固定」

両方の手の平から、電気の魔力変換物質の実体化した術式が出てき

た。

「圧縮！」

その両方を圧縮した瞬間にサンが雷を纏った姿になる。それだけでは無かった。サンの髪が腰にまでくる長さになった。

「二重装填」

サンの体が二回連続で揺れた。その様子を未だに焦る様子無く見るデビル。

「疾風迅雷（しっぷうじんらい）・・・相変わらず貴様は俺を怒らせるな、このクソ野郎が！」

デビルの絶対的力（後書き）

やっとここまで書けました。
いよいよ第二チートです。既にかなりのチートですがｗｗ
ジンオウガファンの皆さますいません。しかし、せっかく前の回で出したので、書かないと勿体ないと思ったので書きました。

新たな能力・両腕兵装（前書き）

すいません。更新遅れました。
頭の中で考えていた物を書いていたのですが、矛盾点が多く出てきて書き直し、新たな話を考えるのに時間がかかりました。

新たな能力・両腕兵装

「またぁあ、ずいぶんと変わった姿になりましたね～」

デビルが雷を纏った長髪の姿のサンを見ながら言う。一方で、サンの周りに次々と雷光虫が集まって来た。

「遅いっつーの」

ようやく自分の周りに集まった雷光虫にそう呟く。おそらく今のサンの強さとデビルの危険さを実感したので、協力すると決めたのだろう。そして雷光虫は、顔面以外のサンの至る所に纏わり、一匹一匹がサンに電気を流す。するとサンが纏っていた黄色い雷が青になった。

「そろそろい～ですかぁ？　僕は気が短いんですよ！」

既に二人の距離は僅か三メートル程しか無かったので、デビルはすぐにサンに接近した。そして胸、首、急所、胃、等に超スピードのラッシュをする。それをサンは上半身を逸らす、重心をずらす等を行って回避する。そして未だにラッシュしているデビルに向って言う。

「確かにお前は強いが・・・少々遅いんだよな」

デビルの拳がサンに当たると思った瞬間にサンの姿が無くなる。そして後ろから声がし、頭を掴まれた感触をデビルは感じた。

「雷の投擲」

デビルの頭に槍が突き刺さる。そこまでのダメージは無いが、デビルは驚いていた。この状態は絶対と言っても良い程の固さを持っている、守護竜の鱗をサンは突き破ったのだ。デビルがそんなことを考えている間もサンは攻撃を続けている。

「第二効果発動。爆音疾呼・雷騰万里」

上空から槍へと雷が落ちてくる。頭に突き刺さった槍を通って雷は来るので、当然デビルの内部にも雷が回った。しかしデビルは全く痛そうな表情をせずに何時も通り笑っていた。

「ちょっと痛いじゃぁあ～ないですか？」

余裕の声を出しながら、後ろに高速の裏拳を繰り出す。その拳は空を切り、デビルの腹に違和感があった。何かと思い見てみると、拳を腹に当てているサンが居た。

「お前ってどうやったらダメージくらうの？」

余裕そうな表情でサンはデビルに聞いた。そしてサンと同じ表情で答える。

「あなたってどうしたらぁ～攻撃を当てられるん～ですかぁ？」

サンの攻撃はデビルには全く通用しない。魔法も同じだ。
一方デビルはサンに攻撃を当てられない。先程は付いていけたスピードだったが、今は全く付いていけず、目で見る事さえ不可能な状態だ。

「取り敢えず」
「両者が死ぬまでですかぁ」

二人はお互いを殺気立った目で見つめ合いながら言った。
そして次の瞬間にデビルの左横にサンの姿があった。そして一発拳を入れると再び移動する。殴られた感覚だけあるデビルだが、ダメージは全く無かった。そして感覚が神経に来たのでそちらを見ると既に誰も居ない。

「うす鈍が」

今度は後ろから声が聞こえた。またデビルに殴られた感覚があり、振り返ると誰も居ない。
それがひたすら繰り返された。
デビルがただ立って居る場所の前後左右から雷速で攻撃を繰り返すサン。狙っている場所は急所なのだが、デビルには全く効いて無い様だ。

「イライラするんですよ！」

一秒に何十との殴られた感覚があるデビルはとうとう沸点に達する。スフィアを自分の周りに大量展開させるが、サンの攻撃は全く衰えない。後ろ・前・右・左・斜め・上からの攻撃の繰り返しが未だにある。どうやらサンはスフィアの穴を見つけて攻撃しているようだ。そうなると攻撃してくる場所は推理出来るのだが、サンの素早さには意味が無かった。
激しいラッシュをしていたサンは両方の手の平をデビルの心臓に当てる。

「両腕解放・雷の投擲！」

心臓に二本の槍が突き刺さる。絶対に生きていると判断したサンは、すぐに第二効果を発動した。

「爆音疾呼・雷騰万里」

そう言った瞬間に二本の槍に雷が落ちた。しかしデビルには効いて無い。現にデビルは笑っている。最もサンもこれは情報を入手する為の行動だったのでそれ程悔しがらなかった。そしてすぐに間合いを取り、手をクロスする。

「黄炎覇渦、両腕固定・・圧縮、二重装填。黄金焔を呼獅子（おうごんのほむらよぶしし）」

火の術式兵装をすると炎髪灼眼では無く金炎髪黄眼になる。髪は先程と同じ長さだ。余りの高熱に雷光虫は逃げてしまうが、今のサンには、もうどうでも良いことだった。そしてデビルの方を見ると、刺さっている槍を引っこ抜いていた所だ。

すぐにサンはデビルに接近して回し蹴りをする。デビルは余り威力が無いと判断したのか防御の姿勢をせずに、攻撃の構えに入ったが、デビルの考えは甘かった。サンの蹴りが当たった瞬間にデビルは勢い良く吹き飛ばされる。研究所の壁が何枚も壊され、デビルは外まで飛ばされる。飛んでいるデビルを見逃すほどサンは間抜けでは無い。

「圧縮術式二重変更。黎明の雷傳砲・・・雷衣無鈍（でんいむどん）」

圧縮術式変更には魔力は使われない。体にある術式を解析して、それを変更するという操作だけだからだ。

電気を兵装したサンは未だに飛んでいるデビルに接近して、踵落としをする。デビルはそれをくらい地面に叩きつけられた。半径二十

メートル程のクレーターが出来たが、サンにとっては当然のことのようで、驚かずに行動をする。

「圧縮術式二重変更。天上の轟火・・・開闢実行者（かいびゃくじっこうしゃ）」

再び火を兵装したサンは下に居るデビルに向って右拳を下ろす。さすがのデビルも余裕ではいられなかったのか、真面目な表情でそれを受け止める。そしてスフィアを展開させてサンに向かわせる。

「甘いな。黄炎覇渦！」

スフィアを見てサンは馬鹿にする様に笑い、デビルに拳を受け止められた状態で魔法を発動した。その魔法はサンとデビルを中心に黄金の渦を巻いて、サンに向って来るスフィアを破壊する。

しかし隙があった様だ。仰向けのデビルは足を上げてサンへの攻撃をする。当然サンも読んでいたようでそれを、シールドを展開して防いだ。そして空いている左拳をデビルに振り下ろす。それをデビルは受け止める。

両者共に腕をぶつけ合い、サンは足で全体の重心を支えている状態なので動けない。同じくデビルも足はシールドで防がれている為攻撃出来ない。

このままこの状態が続くと思ったが、それをデビルが破った。デビルはサンに向って口を開く。まさかと思ったサンだが既に時は遅く、デビルの口から爆音が出された。とっさに手で耳を防いでしまったサンは、ミスをしたと実感する。デビルがサンに向けて拳を繰り出そうとしているからだ。すぐに耳から手を放そうと動いたが、未だにデビルの爆音が出されているので不可能だった。

デビルの拳がサンの右頬にぶつかり、バキっという音を立ててサンは吹き飛ばされた。

そして痛みに堪えながら辺りを見渡すと、市街地のど真ん中だった。

どうやらデビルを飛ばした場所から更に飛ばされて此処に来たようだ。

「此処で・・・せ、と」

『マスター今は口を動かさないで下さい！　頬骨が粉々になっているのですから！』

リリの叫び声が聞こえる。かなり心配なのだろう。確かにデビルとの戦闘が始まってから既に数十分は経過している。あの様な無茶な行動を五歳児が数十分だ。心配するのも無理は無い。

しかしサンはリリの言葉を聞いていなかった。

【圧縮術式二重変更・・・俺の体の中にある術式を変える・・イメージ・・計算・・】

そう、サンは言葉無しでの圧縮術式変更をしようとしているのだ。

その表情は真剣その物だ。そして次の瞬間にサンの姿が氷の彫刻になる。

「絶対堅氷鎧（ロンズデーライゆよろい）」

ゆっくりと今の兵装状態を言う。その顔はとても笑っていた。そう、これさえあれば後は自分の体力次第だったからだ。体が壊れても意識がある限り何回でもこの状態になれる。もしかしたらデビルに勝てる、とサンが思った瞬間に黒色の砲撃魔法が飛んで来る。死角からの砲撃だったが、オーバーが教えてくれたので、すぐにそちらを向く。

「敵弾魔法固定」

片手で砲撃を固定する。そして再びイメージに入り、大きく目を開く。

「魔力圧縮」

「隙が多すぎますねぇ～」

魔力を圧縮した瞬間にサンの横から声が聞こえ、そちらから蹴りが放たれる。

ガギン

金属のぶつかり合う音が聞こえた。

「攻撃が俺を貫通するかどうかヒヤヒヤしていたんだが、どうやら大丈夫みたいだな」

不思議な物を見る様な顔をしているデビルにサンは口元を上げながらそう言った。

「どうしてぇ～僕の攻撃が？」

「術式兵装・・・圧縮する物質のイメージによって能力が変わる能力。そして俺は術式を二重に取り込んだ。電気の場合は速さしか思いつかなかったから更に速さの上昇。同じく火も威力の上昇だ。しかし氷は再生の他に固さのイメージを持っている・・・この意味分かるよな」

デビルが近くに居るというのに余裕な表情で説明する。実際の所これはハッタリの所が多い。意識を集中させないと固くは出来ないし、そもそもこの状態ではサンの攻撃はデビルに通用しないのだ。

「だったら何ですか～？　あなたの攻撃も僕には効かな～い。そしてぇ僕にはまだ魔法がありますよぉ～」

どうやらハッタリは効かなかったようだ。デビルは余裕そうな顔をしてサンに言い返す。最もサンも特別ハッタリを期待している訳では無かったので悔しそうな顔をしない。

「だったらこの状態で殺り合うか！」

サンが叫んだ瞬間に両者が動いた。何回も何十回も金属のぶつかり合う音が聞こえる。その衝撃で周りの住宅や建物は大打撃を受けている。そしてこの状態から動き始めたのはサンだった。

「圧縮術式二重変更。天上の轟火・・・・開闢実行者」

サンの姿が氷から炎へと移り変わる。デビルもこの状態のサンの攻撃力は身を持って知っていたので、少し間合いを取ろうとした瞬間にサンが魔法を使う。

「天災地変炎魔の怒(てんさいちへんえんまのいかり)！」

次の瞬間に辺り一面に地面から大量の炎柱が噴き出した。それは地面を破壊せずに物を燃やさずに、デビルへと向かっていく。柱の数は十五本、一本一本が二十メートルの大きさがある。

デビルはそれを回避せずに薙ぎ払う。しかし炎は再び形を取り戻してデビルに向って行く。デビルは面倒だと判断したので、炎その物を消すために砲撃魔法を連射する。

「俺を忘れるとは良い度胸じゃねえか」

後ろでサンの声が聞こえたので慌てて振り向こうとするが、既に遅く強烈な拳のアッパーをくらう。威力の余りに空中へと飛ばされてしまうデビル。それをサンは追尾して空中でラッシュをする。デビルが自分の間合いから飛ばない様にと、直接前には殴らなかったが、それでもかなりの激しいラッシュだった。

「両腕解放・天上の轟火！」

サンが叫ぶと両腕から三十メートルはある腕が出現した。それはデビルを上下から同時に殴り、デビルを握りしめた。バキバキバキと不気味な音が響く。

「第二効果・粉剛砕身（ふんごうさいしん）」

これも二つの効果を持った魔法のようだ。最初はただ出現させる効果だったが、それを改良して殴る効果、潰す効果にしたのだ。そしてその握力にデビルの体をも悲鳴を上げる。

「アハハハハハ！」

未だに握られているデビルが笑い出した。既に殺そうと新たな術式兵装をしている途中だったサンは、それを止めてデビルを見る。デビルを見ると目から涙が落ちていた。あの人を殺すことを躊躇しないデビルが泣いたのでサンは驚愕する。

「アハハハハハ、どうして・・・どうして僕は何時も弱いんだ！あの時も、どうして貴様を殺せなかった！」

怯えた声から急に怒鳴り声に変わった。サンは何時もと違う殺戮的では無いデビルの様子を見て、チャンスだと思い質問する。

「何故お前は俺に拘(こだわ)る？　俺がお前を知ったのは前回が初めてだぞ」

デビルの自分への異常な拘りがサンは不思議でしかたなかったのだ。サンは自分が産まれてから、人に恨まれるようなことはしたことが無かった。間接的には何かあるかもしれないが、それもカリムの騎士になったくらいしか思い浮かばない。しかしカリムの騎士になる前からデビルはサンに執着心があった。

その理由をデビルが言う。

「新暦六十九年九月十九日！　四時十一分！　この日と時間の意味が分かるか！？」

サンは未だにデビルへの攻撃を止めていないというのにも関わらず、悲鳴の一つも上げずにそう叫んだ。その目には涙と怒りがあった。殺気や狂喜の無いデビルの目を見て再び驚きながらも答える。サンにとってこの答えは簡単だった。

「俺の産まれた日と時間だ」

サンがそう言うとデビルは再び大声を出して笑った。

「違う！　違う！　その日その時刻は私の妻と腹に居た息子が死んだ時だ！」

デビルの言葉を聞いてサンは目を大きく開く。そして悲しむ訳でも無く、同情するのでも無く笑った。

「っは、まさか神の雫によって俺が産まれたから世界には何人までしか生きられませんよ～的なことでお前の妻が死んだとでも言いた

いのか？　下らねえにも程があるぞ！」

同じくサンの目にも怒りがあった。そんな宗教的な事を信じてデビルは自分の大切な人達を殺そうとした、そんな事でヴィヴィオを連れ去ることを許してしまった、そう思うと自然に目に怒りが宿る。

「当たり前じゃないか！　貴様が神の雫でなのはに宿ったから私の妻が死んだんだ！　息子も同じだ！　悪魔が！」

怒りの余りに炎の腕の中で必死にもがくが、意味の無い行動だった。デビルでもこの握力からは脱出出来ないようだ。悪魔という言葉にサンは更に怒りを感じて、炎の腕に魔力を送る。

「があああああ」

デビルの悲鳴が聞こえるがそんなことはサンには関係無かった。

「貴様の宗教ごっこも此処までだ！　お前の妻がどんな人物かは知らないが、貴様は壊れすぎている。死んでも家族には会えないだろう」

そう言って再び炎の術式兵装をする。心臓や脳の様な急所が駄目なら、体全てを潰してしまえば良い、そう考えたサンは一段と炎の腕に力を入れさせる。

「ごあ！　此処・・・で、死ぬ。・・訳・・は、あああああああああああ！」

デビルが叫び始めた。すると炎の腕に僅かにだが押される反応がでる。

「な！？　っち、何するつもりなのかは知らないが、その前にぶっ殺す！」

そう言ってサンは一段と握力を強くするが、デビルの力はどんどん大きくなり段々炎の手が開いてくる。そして大きくなったのは力だけでは無く、デビル自身も大きくなる。そしてついには手に収まりきれない程の大きさになったデビルは、更に成長する。

「グオオオオ！」

そして成長が止まると、そこには百四十メートルもの竜が居た。その竜は翼を使い滞空しており、竜の口が開いた。

「アハハハハハ、どうです！　あなたを殺す望みが叶ったようだ。竜のＤＮＡが此処まで訳に立つとはね！　僕の真の力を見せてあげます」

そう言ったデビルはサンに向って炎の塊を吐きだした。その大きさは余り大きくは無いが、超高熱の炎だった。

「ッチ、圧縮術式二重変更、雷の投擲。二重装填・・・疾風迅雷」

電気の術式兵装をしたサンは吐き出された炎を回避して、デビルに接近する。拳を思いっきりぶつけてはみたが、やはり攻撃は通用しなかった。

そしてデビルの周りに大量のスフィアが展開された。それはかなりのスピードでサンに接近する。最も雷速で動けるサンにとっては、止まって見えるスピードだ。それをかわしたサンはデビルの頭に移動して、魔法を発動する。

「両腕解放・雷の投擲」

槍がデビル脳に刺さったがやはり死ぬ気配が無い。第二効果は無意味と判断したサンは、すぐに間合いを取り、再び術式兵装をする。

「天上の轟火、両腕固定・・圧縮。二重装填。開闢実行者」

火の術式兵装をしたサンはすぐにデビルに接近した。それをデビルは薙ぎ払おうと尻尾を振る。結構なスピードだったのでサンは回避をせずに防ごうと判断したが、それが甘かった。左腕で受け止めはしたものの、威力が強すぎて右方へと飛ばされてしまう。そしてそのスピードは一向に衰えず、次々と建物を破壊して、ようやくサンは自分で動ける様になった。サンが地面に立った瞬間に、デビルが口から砲撃魔法を撃とうとしているのが見えた。

「っち、撃ち返すぞ！」

『マスターが圧縮することは出来ないのですか？』

「ああ、あんな質量のでかい魔力を圧縮したらリンカ―コアがぶっ壊れちまう。第一此処は市街地だから被害を抑えたい。万が一の為に、圧縮術式二重変更、雷の投擲・・・疾風迅雷」

サンは術式兵装をしながら苦笑して言った。現在の状況が余りにも危険なのでそんな表情になってしまうのだ。現状の理解を出来る人間程、現実の厳しさを知らなければならない。

「レベル１スフィア大量展開・・・ん？」

展開した時にサンは何か異変を感じたようだ。それは思考速度だ。戦うにあたって重要なのは、すぐに現状を把握して次の行動に移る

までの行動時間。それを早くするのが思考と言っても良い。魔法の演算や、魔法陣（じゅつしき）の発動速度等にも関する重要な力だ。
思考速度がいつもと違うということに不思議そうな表情をしていたサンに、気付いたリリは説明する。

『マスター、私の推理からすると単圧縮より二重圧縮の時の方が明らかに演算速度も速くなっています。常時雷速で動いているのですから、思考の速さはそれに付いて行ける程のスピードということです」

リリの言葉に納得した。魔導士はリンカーコアと技術、思考速度が命と言っても良いくらい思考は大事なスキルなのだ。サンは微かに嬉しそうな表情をしながらも、スフィアを更に大量展開させ、集束魔法で魔力を一部分に貯める。

「スターライト！」

集束魔法の横の大きさは二十メートル程しかない分質量が大きい。そして更に質量が高くなっていく。
一方デビルの砲撃も整った様だ。サンに向って同じく質量の高い砲撃を放つ。

「ブレイカー！」

デビルの砲撃が発射された瞬間にサンもスターライト・ブレイカーを発射させる。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

もはや地震といっても良いレベルの揺れが、二人の砲撃のぶつかり

合いで生じる。
押しているのはサンの白い砲撃だった。魔力の永久機関で出来た砲撃の方は、魔力切れが無いので当然砲撃同士の打ち合いには有利だった。
そしてデビルは必死に砲撃を続けている。自分で行っているから分かるが、自分の撃った砲撃はかなりの威力を持っている。自分の装甲を破壊できるレベルだと自覚している。そしてそれを超える砲撃が自分に向って来ているので、デビルはかなり焦っていた。
しばらく砲撃のぶつかり合いが続いたが、段々白の砲撃が黒の砲撃を押してくる。不味いと思ったデビルだったが、これ以上の魔力の放出は不可能だ。
デビルが諦めかけた瞬間に、頭の中から声がした。

【あいつはお前の家族を殺した悪魔だ。お前が殺さなくて誰が殺す。何限界なんか考えているんだ。あいつはお前の人生を壊した奴なんだぞ！】

叫び声が頭に響いた瞬間にデビルの砲撃の出力が一段と上がった。
自分のリンカーコアが限界を超えても構わない、サンを殺す、という思いがデビルの中から更に込み上げて来たのだ。

「っな！？」

突然出力が上がってきたのでサンは驚いたが、すぐにスフィアをデビルに向わせた。五百ものスフィアがデビルに直撃したが、全く怯む様子が無い。逆にどんどんサンが押されてしまう。

ゴゴゴゴゴ

黒が完全に白を飲み込み、サンに激突した。

「〜〜〜！！」

異常な程の痛さにサンは声にならない悲鳴を上げる。そしてデビルがその隙を逃す訳が無かった。

火のブレスを連射する。何とか回避したサンだが、リリの報告によるとそのブレスの進行方向に避難所があるようで、全身に激痛が走りながらもブレスの前まで飛んだ。チラッと見ると先程での砲撃の爆心地付近の建物は全壊になっていた。サンは守り切れなかったことを悔しく思いながらも、飛行を続ける。

「ロンズーデーライトの盾！　天つノ獰飆（あまつのどうひょう）ｖｅｒ壁！」

ブレスの前に来たサンは、氷の巨大な盾と、竜巻の壁を作りだしてブレスを防ぐ。後ろから喜びの声が聞こえる。避難住民だろうが、今は戦いに集中する為に構う余裕は無い。サンはデビルが何処に居るかを確認するが、何処にも見当らない。

「何もぉ〜ずっとあの状態ぃ〜じゃあ無いんですよ」

嘘ろから声が聞こえ、そしてその瞬間にサンの左腰に痛みが来る。蹴りをくらった様だ。サンは右方へと飛ばされながらも、左腰を押さえる。骨折までは行かなくとも、酷い打撲の様だ。

「っち、二つの状態を制御出来てんのか」

竜人姿のデビルを見ながらサンはぶっきらぼうな物言いで呟く。どちらの状態もスピードは負けないが、やはり大きさが変わる相手はやり難いのだ。そしてサンは空中で立て直して、雷速でデビルに突っ込む。

「千躰雷囮結界＞せんたいらいがけっかい＜！」

デビルに接近するサンが魔法名を叫ぶと、雷で出来たサンが大量に出現した。それ、一つ一つが不規則に動いてデビルに接近する。雷速とまでは行かなくとも、秒速七十キロはある。

それ等が一斉にデビルを袋叩きにする。デビルはダメージこそ無いが鬱陶しいようで、周りに出鱈目に拳や足、スフィアを振り回す。しかしサン達には一向に当たらない。そしてその直後に雷を纏ったサン達が消え、デビルの背中の温度が上がった。

「死ね！　両腕解放・天上の轟火」

炎の腕が現れてデビルを握り潰し始める。今回は先の様に加減せずに最初から最大の力で握り潰す。

「がああああ！」

デビルは悲鳴を上げたが、それは握られて数秒しかなかった。再び巨大な竜になり始める。

「遅い！　レベル１スフィア大量展開！」

デビルから百メートル程離れたサンは再びスフィアを大量展開させる。既にその姿は雷を纏っていた。

「スターライト・ブレイカー！」

素早く集束を終えたサンは巨竜状態の半分程の大きさになっていたデビルへ撃つ。先程撃ち合った時と、ほぼ同じ質量のその砲撃がデ

ビルに激突し、。今日何度目か分からない爆音がクラナガンに響いた。

「ハァ、ハァ」

爆音を聞きながらサンは息を乱す。連続の集束砲撃魔法、敵を翻弄する為の常時超スピード、数度の骨折、サンのスタミナが切れて来たのだ。戦闘開始した時はあったオレンジ色の太陽は無く、綺麗に暗闇を輝かせる月が見えている。

その時モニターが現れた。そこに映っていたのは、長い金色の髪に宝石に似た青い綺麗な瞳、雪の様に白い肌、気品のある鼻、口の大きさはその人物に合う綺麗な形で、唇は桃を連想させる可愛さを持っている。そして表情はサンの胸が張り裂けそうに悲しい表情をしていた。

やはり好きな人物の悲しい表情は、自分も辛くなる。だからサンはその人物に言う。

「大丈夫ですよ、マスターカリム。俺は貴女の心(みち)に近づくと宣言しました、そう簡単に死にませんよ。・・・・でも、これで近づけたのでしょうか？」

そう言って辺りを見渡すと、所所に建物の残骸が見えた。悲しそうな表情をしてそう言ったサンにカリムは涙を流しながら叫ぶ。

「貴方はあんなに一生懸命に戦った。既に自分の新たな力を見つけた。避難所に居た方々を助けた。それの何処に責められる事実があるというの！」

自分に向って必死に叫びながら褒めてくれるカリムにサンは再び胸を苦しくする。

【俺とカリムが両想い・・・・っち、止めろ高町サン！　カリムは俺の主で忠誠を誓った人物だ。例え、仮に、想いが叶っていても、この恋は絶対に叶えてはいけない！　此処で俺が何かを言って、カリムの全てを失わせる事などしてはいけない！】

微かに理性が軟くなるだけで出そうな、好き、という言葉を抑えるサン。そして頭を必死に横に振って、騎士としての高町サンになる。

「ありがとうございます、マスターカリム。貴女の言葉で俺の心の重みが軽くなりました。そして、あいつを殺す意志が強まった」

そう言って爆音が鳴った中心地を睨みつける。そこには巨竜の姿のデビルが居た。かなりの部分の鱗が削れ、肉が崩れて今にも死にそうな姿だったが、その瞳に宿る闘気と殺気は一段と高まっていた。

「やはり・・・・」

「ええ。あいつがあれ位で死ぬ訳が無い。」

二人共あれで死んでいるとは思って無かったのだろう。余り驚いた様子が無い。そしてサンの瞳がデビルと同じオーラを出した。いつもの綺麗な瞳では無くなったサンを見てカリムは恐怖を感じる。

「すいませんマスターカリム。俺はそろそろ行ってきます」

恐怖するカリムに気付いたサンはゆっくりと呟く。そしてカリムの返事が来る前に、雷速で移動しデビルに攻撃を始める。

サンの行っていることは兎に角弱点を探すことだ。倒せなくとも、集束砲撃をする時間を作れればそれで良いのだ。しかしデビルは一向に怯まずに、サンへの攻撃を続ける。一通り攻撃し終えたサンは

次の行動に出る。

「激流ノ雨」

突如デビルの上空から大量の雨が降る。それは瞬く間に増え、デビルを水中に閉じ込める様に溜まった。しかしデビルにサンの意図が読まれたのか、炎を吐いて水を蒸発させた。

「クソ！　だが水蒸気がある。永劫の氷河！」

無念の言葉を言ったサンだが、すぐに状況を確認して、デビルの周りにある水蒸気を凍らせ、デビル自身も同時に凍らせた。

「有存無存の時間」

そしてその氷を一瞬で粉々にさせる魔法名を言う。氷が粉になって地面に落ちていったが、空には一つの巨体な物体があった。

「やっぱこれでも死なねぇか。まあ対処しやすい魔法だからな～」

頬を引きつらせながら呟く。これに期待と同時に、効かないと予想していた様でそこまでショックでは無いみたいだ。

「グオオオオオ」

急にデビルが吠え、市街地に向って炎を吐いた。

「何！？」

市街地へ攻撃をしてきたデビルに驚きながらも、その攻撃を何とか

弾いて破壊を防ぐ。そしてデビルを見ると次々に市街地を攻撃し始める。

「あの野郎！」

卑劣な行動に激怒しながらも雷速で移動し一つ一つ撃破していくが、攻撃の威力が高い為段々ペースが鈍ってくる。

「が！　がああああ！」

余りに体とリンカーコアを使いすぎた所為か体全体に、特に胸に痛みが現れる。それでも市街地を守ったサンだが体に激痛が走る。デビルの砲撃の比べ物にならない、内部からの激痛だった。その余りの痛さにサンの行動が止まってしまう。

「グオオオ！」

その隙を見逃さなかったデビルはサンに口からの砲撃をする。

【畜生！　何故動かない！？　体もリンカーコア（たましい）も！俺は此処で死ぬ訳には・・・・】

サンの必死の思いにも体は答えてくれずに、炎はサンに接近する。

『ソニックムーブ』

突如機械的な声が聞こえ、その次の瞬間にサンの姿が炎の進行方向から消えた。

「なのは！」

この声はフェイトだ。サンを抱えたフェイトが上空を見ると、集束魔法で魔力を集めているなのはが居た。

『愛息のおかげで魔力分散されています。これならダメージを与えられるかと』

「うん。いくよ、全力全開！　スターライト・ブレイカー！」

レイジングハートの言葉に頷いたなのはは、下に居るデビルに砲撃をする。何時もより大きいその砲撃がデビルに激突する。

「と、父さん？」

一方、サンは自分を抱えてくれている人物を見て驚く。フェイトは先程の映像で見た時は空中で戦っていた筈だ。

「うん。良く頑張ったねサン。弱っているデビルを倒すのは私達に任せて。地上本部がデビルの危険レベルを確認して、魔導士を投入したんだ。私となのはも戦える戦闘員としてこっちに来たんだよ」

「な！？　あいつの異常さが、があ！」

フェイトの言葉に反論しようとし起き上がったサンだが、激痛が走り言葉が発せなくなる。

「大丈夫サン！？」

「ああ、何とかな。それで策はあるのか？　無いならかなりやばいぞ。死人が数人のレベルじゃ・・・」

念話をしながらフェイトに質問をする。そう、航空魔導士だろうと陸戦魔導士だろうと関係無い。デビルの攻撃は一つ一つが爆弾レベ

ルだ。それを必死に訴えようとしたサンにフェイトが返す。

「兎に角ひたすら踏ん張ることが優先。最悪ロストロギアを使ってでもデビルを捕獲することになってる・・」

フェイトはデビルからの攻撃を持ち前のスピードで回避しながらサンに話す。

［捕獲！？　そんな馬鹿な指示があるか！　あいつを倒す方法は殺すしか意味無いんだぞ！］

フェイトの捕獲という単語を聞いたサンは一気にフェイトを攻めた。言われたフェイトは悔いた表情をし、唇を噛む。それを見たサンはフェイトも好きで言っている訳ではないと気付いたので慌てて謝る。

［悪い・・・だが事実でもあるんだ。やっぱ上層部が原因か？］

［うん。はやて、カリムさん、その場に居た本局の方々は反対したんだけど、クラナガンは地上の本拠地でもあるから発言力があんまり無くてね］

大きな声で話せない事なので念話で会話をする。

［クソ！　上層部の狙いは十中八九デビルの力の解析！　あの化け物の作成がジェイル・スカリエッティ以外の一人にでも広まったら終わりに等しいぞ］

［だから私も悩んでたんだけど、正直倒し方が・・］

［私も会話に入るよ。でね、私達が唯一思いついた妄想的な内容は、相手のリンカーコアへの直接攻撃。デビルはそれこそアルカンシェルレベルじゃないと殺害不可能な程の固さとタフさを持っているから内部からと思って。現にスターライト・ブレイカーも効いたみた

いだけど、一向に攻撃を止めないよ」

なのはからの念話が入った。一定の防衛ラインを作り、デビルからの攻撃を数十人と一緒に防いでいる最中だ。

「リンカ―コアへの直接攻撃？　外部を破壊しない限り不可能だろ。それは闇の書の防衛プログラムを破壊した二人がい・・・・待て！　もしかしたら出来るかもしれない！」

「嘘！？」

二人の声が頭に同時に響いた。

「リリ、オーバー、ハート、バル、今から俺の言う案が実行可能か判断してくれ！　俺の案は・・・・」

四機のデバイスの名を呼んで、自分の案を説明する。その表情には希望が見えた。

一方管理局地上本部内では、動揺する物、期待する物の二つで分かれていた。動揺する物は市民や市街地の心配、管理局の信頼、聖王教会の騎士に出し抜かれたこと、デビルの強さ、自分の安全、等沢山ある一方で期待する物の考えは一つだった。

デビルという実験材料の捕獲。そのデビルより遥かに良い実験体であるサンは、聖王教会の騎士カリムの騎士という立場がある所為で手が出しにくい状態、更に生放送が流れてからは管理局の支持率が下がり、聖王教会への指示が上がっている現状で、益々手が出しにくい。

なので、力を手に入れる為にデビルの捕獲は重要なことだった。

その一方で唯一どちらからも外れている人物が一人。困惑している

レジアス・ゲイズ中将だった。彼の問題はジェイル・スカリエッティの改造した人物の首都クラナガンの破壊や、今回の襲撃を全く知らなかったこと等だ。当然と言ったら当然のことなのだが、彼にはある人物との繋がりがあったので、困惑したのだ。その人物とは、ジェイル・スカリエッティだ。彼は地上の能力を上げる為に、人間の体に機械を混ぜた戦闘機人の制作をジェイル・スカリエッティに頼んでいた。そして今までは連絡を取り合っていたのにも関わらず、急に地上本部へと攻撃をしかけてきたのだ。困惑する筈である。

「ミッドチルダ地上の管理局員の諸君」

突然画面から、スカリエッティが映る。そしてその表情は実に楽しそうだった。

「気に入ってくれたかい。ささやかながら、これが私からのプレゼントだ。治安維持だの、ロストロギア規制だのと言った名目の下に圧迫される、正しい技術の進化を促進したにもかかわらず、罪に問われた稀代の技術者達・・今日のプレゼントはその恨みの一撃とでも思ってくれたまえ。しかし私もまた、人間を、命を愛する者だ。無駄な血は流さぬ様努力はしたよ。可能な限り無血に人道的に、忌むべき敵を一方的に制圧できる技術、それは十分に証明出来たと思う・・今日は此処までにしておくとしよう。この素晴らしき力と技術が必要ならば、何時でも私宛てに依頼をくれたまえ。確実の条件でお譲りする。フフフ、アッハッハハ「じゃあさっそく依頼をお願いするかな」ん?」

ミッドチルダ全てにジェイル・スカリエッティの宣戦布告としか聞こえない演説が流れ、その最後にサンが割り込みをした。

「これは、これは、神の雫の子がどうかしたのかい?」

スカリエッティはモニターに映っているフェイトに抱えられているサンを見て、笑いながら質問をした。その余裕の発言を覆す為にサンは嫌味な言い方で言う。

「さっきも言ったが依頼をしたい。依頼内容は巨竜もどきの死体の回収、どうだ？」

「フフッ、アハハハハハハ。面白い！　その依頼引き受けましょう。しかし条件がある。私もあの状態の実験生物は止められないので、君が倒して下さい。そうすれば依頼を達成して上げます」

サンの発言に腹を抱えて笑ったスカリエッティは依頼条件を言う。そしてそれは今までサンが出来なかったことだ。

「それじゃあ依頼をして貰う為にやるとするか」

モニターに映っているサンはフェイトから降り、自分で浮く。どうやら多少の回復は出来た様だ。ゆっくりと両腕をクロスさせる。

「雷の投擲、両腕固定・・圧縮」

手の平から黄色の球体が現れそれを潰した瞬間にサンの姿が変わった。

「それでどうするんだい？　あれのタフさや固さは君が一番知っているだろう」

「だったら内側から攻撃すれば良いだろうが」

嫌味な言い方をしてくるスカリエッティにサンは自信満々に返した。それを聞いたスカリエッティは笑いながら様子を見る事にする。

そしてサンはデビルを見る。未だに暴れており、サンを集中的に狙ってこないので、完全に理性が崩壊して本能のままに破壊しているようだ。
サンは雷速で移動し、デビルの額と思われる場所に右手の平を当てた。

「壱千重奏の悲命、魂送装填」

サンが呟いた瞬間にデビルの体が揺れた。そして次の瞬間にデビルの中から氷の刃が大量に出現した。

「ギャアアア！？」

デビルが総毛立つ様な悲鳴を上げる。あの刃はデビルが自ら出したのでは無く、サンが強制的に出したのだ。それが体全体から出て来たので、異様な叫び声を上げても無理は無い。まだサンの攻撃は終わって無かった。一旦右手を離し、今度は左手の平を当て、呟く。

「天津ノ獰飆、魂送装填」

その瞬間にデビルの内部から大量の竜巻が出現した。その一つ一つは小さいがとにかく数が多かった。

ブシャ～～

デビルの血が吹き散る。その中には鱗や爪の欠片もあった。余りに残酷な映像に吐いている人物も居たが、サンには関係無かった。隣にあるモニターに映っているスカリエッティを馬鹿にしてよう見ながら言う。

「これで回収してくれるか？」
「ハハハハハ、本当に君は面白い。是非ともデータが欲しいが、今は依頼を達成させるとしよう」

スカリエッティは怒るのでは無く笑い、依頼の達成宣言をする。
嫌な予感がしたサンは慌ててデビルの残骸を見ると、一部だけ固まっている所があった。それを破壊しようと雷速で移動するが、体が再び限界を達したので不可能だった。

［父さん、母さん。デビルの残骸の群の中心に大きい塊がある。急いで破壊してくれ！］

サンの念話を聞いた二人は急いで言われた場所を見ると、確かに有った。なのははは砲撃の準備を、フェイトはバルディッシュを構えて接近する。しかし時は既に遅く、青いスーツを着、首元に？と刻まれたプレートを着けている女性が地面から現れて、嫌そうな顔をしながらもデビルの塊を持ち、再び地面の中に潜っていった。

「そんな・・」
「ごめんねサン」

二人が申し訳なさそうな表情でサンに言う。しかし返事が無かった。二人がサンの方を見ると、魔法陣を足場にしてスヤスヤと眠っている小さいサンが居た。

その後スカリエッティのアジトでは、青いスーツを着た女性達が集まっていた。

「し、かし助かったぞ、セイ・ン」

銀色の髪をし、右目に眼帯をした女の子が、緑色の髪をした女性に向って言った。銀髪の女の子は足取りが悪く、瞳が掠れている。

「そんなことよりチンク姉。早くドクターの所に！」

その隣に居た赤い髪のショートで気の強そうな少女がチンクに叫ぶ。チンクは心配されたのが嬉しかったのか、頬を緩めながら歩いて行くが、途中でこけてしまった。

「チンク姉！」

赤い髪のショートの子と、濃いピンク色の髪を後ろにまとめた陽気そうな少女がチンクに向って走る。

「もお～チンク姉。無茶しちゃ駄目ッスよ。ほらライディングボードに乗って、ＩＳで送っていきますッスよ」

「すまないなウェンディ、恩に着る」

チンクはウェンディが持っているボードにゆっくりと乗り、それをウェンディは魔法陣では無い陣が展開され、ボードがゆっくりと動き始めた。そして回りに居る皆はそれに付いて行きながらも会話を始める。

「しっかしこれ何時まで持っておけば良いんだ？」

セインは自分の右手にあるデビルの残骸を見て言う。その顔は当然嫌そうだった。

「確か高町サンでしたッスよね」
「この化け物をこんなにするなんて化け物以上の化け物だな、そいつは」
「確かに力は強いが意志のある目をしていた。悪い人間では無いと姉は思うぞ」

チンクは隣で話している皆にそう言う。それを聞いたウェンディはニヤニヤしながら言った。

「もしかしてチンク姉高町サンに惚れたんッスか？　確かに良い男だけど諦め無いといけないッスよ」
「違うぞ。姉はただ強い男だと言っただけだ」

ウェンディの質問にあっさりと答えるチンク。それが面白くなかったのか、セインとウェンディは舌打ちをする。

「二人共何してんだよ。あいつはあたし達の敵なんだ。それもこの化け物が居ないと、一瞬でこっちが負ける程の強さを持った化け物」
「分かってるよノーヴェ。あたしなんか二回も生で見たんだから良く分かるけど、何て言うか物凄いオーラを持ってたし。なんか底が見えないしね～」
「あの魂送装填って奴か。っていうかあいつの手の平に触れるだけで、こいつみたいになんのかよ。どんなインチキ能力だ・・」

ノーヴェは呟きながらデビルの残骸を見る。今では片手で持てる大きさの物が元々は、百四十メートルはある竜だったのだ。それをサンは手の平一つでこうしたと思うと、恐ろしいを通り越して笑ってしまう。

「ノーヴェ、先も言ったが高町サンが我々に会っても無力化させる

だけだろう。そう恐れる心配は無い」
「やっぱりチンク姉・・」
「しつこいぞウェンディ」

そんな会話をしながらも、スカリエッティの所まで行った。

一方その頃スカリエッティはあることを考えていた。その様子を見ていたクアットロが少し不気味にニヤニヤしながら聞く。

「どうしたんですドクター。難しい顔になさってますよ?」
「いや、高町サンをどうするか考えているんだ。流石の私もあそこまで異常な能力とは思っていなくてね」

二人共重大な話だと言うのに、笑顔で話していた。

「考え中の時にすみませんドクター。あの魂送装填とはいったい・・」

二人の近くでモニターを打っていたウーノが、一旦仕事を止めてスカリエッティに聞いた。

「名前から考えると相手のリンカ―コアへ術式を送り込み、送った術式を発動させる。そしてリンカ―コアから内蔵、肉、骨、皮膚へと攻撃出来るようだ。理論的には可能だが、それには高町サンの様な術式を立体化させる・・というより、術式事態を操れる能力が無いと不可能」
「なるほど、とんだインチキ能力ですね～。ドクターはどうやって勝つもりなんです?」

自分達の状況を理解している筈なのに、この二人は今も笑っている。

「願いを叶えるジュエルシード！　これをあの実験生物に使い、私達の夢の壁である高町サンを抹殺する！　フフフ、ハハハハハハハ！」

アジトにスカリエッティの不気味な声が響き渡った。

新たな能力・両腕兵装（後書き）

おお、かなり話が進んだ感じがします。アニメの十七話くらいですね。
サンが一気に新たな術式兵装を習得しましたが、これってどれくらいの強さなのでしょうか？
それと改めて術式兵装の元ネタであるネギまの凄さが分かりました。
まあ、魂送装填はオリジナルですがｗｗ

貴公子と王子　（前書き）

最近連続投稿ができません、申し訳ありません。
今回は無駄に長いです。やはりイチャイチャいれたら長くなります・・・
あれ・・何て話すことが無いな。では、本編をどうぞ。

「最近良く見るよなこの天井・・ってか俺って気絶しすぎじゃね？」

目が覚めたサンの最初の言葉はこれで、自分自身にツッコミをしたことだった。そして、この天井は聖王医療院だ。

「サンって目が覚めたらそんこと言うの？　変わってるね」

「兄さんか・・まあ色々聞きたいが取り遇えずあれから何日経った？」

サンは、声が誰かとすぐに分かったのでそちらを見ずに淡々とした声で聞いた。エリオは相変わらずの大人びた反応に苦笑いしながらも答える。

「あれからまだ一日も経って無いよ」

「そうか、で・・どうしたスバル。御通夜見たいな顔をして」

サンは上半身を起こして、視界に落ち込んでいる姿のスバルが居たのでそう言った。エリオとキャロは慌ててサンの口を止めようとするが既に遅く、その言葉はスバルの耳に伝わった。

「ギン姉が、攫われちゃったんだ・・」

顔を俯かせながら涙声で呟くスバル。それを聞いたサンは驚く。

「はあ！？　どうしてギンガが？　あいつは普通の魔導士だろう、何故あいつ等が・・・・って、ああ、言わなくて良い。悪かったな嫌なこと聞いて」

「ううん。ありがと」

途中で気を使い質問を止めたサンに礼をして、再び窓から見える青い空を見始める。サンは少し悪いと思いながらも、隣にあるリモコンを操作してテレビを点けた。

『こちらは昨日テロ事件の被害を受けた、時空管理局ミッドチルダ地上本部の上空です。施設の被害や負傷者の数、事件の詳細については、未だ、管理局側からの発表はありません。事件直後に、犯人らしき人物から犯行声明があった模様ですが、その内容については、慎重な検討の後に公表すると、広報部からの報告がありました。また、昨日我がテレビ局のアナウンサー、セリオ・シモーナの生中継で映っていた、聖王教会騎士カリム・グラシア、騎士高町サンと、謎の不審人物との戦いの一部により、市街地が凄い被害になっています。ただ、破壊したのは不審者の一方的行為と考えられ、騎士サンはその破壊から守っていたという考えが一番正しいというのが、我がテレビ局の総意であります』

テレビの画面が現在の地上本部前、市街地、セリオの顔写真、カリム、サンの忠誠のシーン、サンとデビル、市街地の破壊状況等が流れた。ニュースの内容を聞いたサンはホッとした表情になる。

「もしかして、カリムさんに迷惑かけて無いか不安だったの？」

その様子を見ていたキャロが首を傾げながらサンに聞いた。此処に居る皆はサンがカリムに好意を持っていると知っているのだ。サンは昨日の事とは思えない、時間の感覚の不思議さを実感しながらも答える。

「まあね。マスターカリムにっつうのもあるけど、聖王教会全体に

も迷惑かけたく無かったからな。まだ新米の騎士の癖に迷惑かける一方じゃマスターカリムの立場が悪くなると思ってな」

「それって結局カリムさんに迷惑かけたく無いってことでしょ？」

キャロの隣に居るエリオが聞く。サンは先程の発言を腕を組みながら思い出してみる。その様子を見ていたエリオとキャロは苦笑していた。

「・・・確かにそうだな。まあ迷惑かけて無いなら良かった」

そんな会話をしていると、ドアが開く音がする。皆が一斉にそこを見るとティアナが居た。

「ティア・・」

スバルの落ち込んでいる表情を見たティアナは少し溜息を吐いて、右手にある袋を上げる。

「差し入れ。色々買って来たわよ。どうせ四人共碌にご飯食べて無いんでしょ」

そう言いながら、机に袋を置いて四人にそれぞれ食べ物を渡す。

「ティア、俺和食が良いんだけど！」

「はい、はい。慌てなくてもちゃんとあるわよ」

必死で袋の中を覗き込もうとするサンに、笑いながらおにぎりとお茶を渡した。

「ありがとうございます」

「ありがと、ティア」

キャロとエリオ、スバルにも缶ジュースを渡す。スバルはそれを左手で栓を開けるが、何故か機械の音がした。サンがエリオとキャロに顔を向けたら、二人は首を横に振る。今聞いてはいけないと判断したサンは何も聞かずに、おにぎりを食べる。

「腕、もう動かせるんだ」

「神経ケーブルが逝っちゃてたから、まだ上手くは動かせ無いんだけど、何日かで元通りだって」

ティアナの言葉にスバルは腕を動かしながら答えた。その会話を聞いたサンは何となくスバルとギンガの産まれに気付く。

「ちびっ子達には何処まで?」

「エリオとキャロにはあたしとギン姉の産まれとか、その辺は。説明しようか、サン・・」

「いや、何となく分かったからそれで良いや」

スバルが説明しようとしたのでサンは遠慮した。だいたいの予想は付いているし、そこまでスバルやギンガの産まれに興味は無かったのだ。

「悪かったわね、あたしが止めてたの。スバルの体のこと暫く秘密にしてなさいって」

「あ、いえ」

「大丈夫です」

「右に同じく」

ティアナが謝ってきたので三人はそれぞれ返事をした。そしてキャ

ロは二人っきりで話をさせたいのか、エリオとサンの袖を軽く引っ張る。

「スバルさん、温かいスープとか欲しくないですか？」

「食堂に売ってたから買ってきます」

二人はスバルの返事を待たずに部屋から出て行く。サンもそれに付いて行き、ゆっくりと外に出る。

「あ、サン！」

自分を呼ぶ声が聞こえたのでサンはあくびをしながら振り向く。

「あ、えと。ありがと」

「俺はギンガを救って無いし、これから瞬間移動して助けに行く訳じゃあ無いぞ」

スバルが礼の言葉を言ったのでサンは不思議そうに返した。

「でも、市街地を「止めなさいスバル。どうせサンのことなんだから、当たり前の事をしただけだって言うに決まってるわ」えと」

スバルの言葉を遮ったティアナは呆れながら言った。それを聞いたサンは、笑って返す。

「良く分かってんじゃねえかティア。まあそう言うことだ」

そして手をだるそうに上げながら部屋から出て行く。

その後あっちこっちにブラブラと歩いていたサンは色々と考え始めた。これからの機動六課、自分のこと、デビルの蘇生可能性、術式

兵装、そしてヴィヴィオとカリムのこと、更にはアインハルトのことまでが気になり始め、頭の中がどんどん混乱してくる。

「あ～止め止め、取り敢えずカリムに報告に行くか。昨日も殺り合い最中にも助けて「カリム？」そう、カリムだ・・って、カリム？」

ギギギと音を鳴らしながら後ろを見ると、サンの思い人のカリムが居た。その表情は、何故かは分からないが嬉しそうだ。

「はい、カリムですよ」

サンは一気に冷や汗を流す。自分の主の名を呼び捨てにしてしまったのだ。いや、前から呼び捨てにはしていたが、それはカリム本人の前では無いし、恋愛の時のみだった。しかし、つい呼びたくなってしまうその名前に、周りを気にせずに言ってしまったのが仇になった様だ。

「いや、その、違うんです。決してマスターカリムとの忠誠に不満が有るとかそんなんじゃ無いんですけど・・えと、すいません」

必死に手を振り色々言い訳を呟いたサンだが、結局の所は謝ることになった。それを見たカリムは目を細めクスッと笑った。その顔が余りにも綺麗で可愛かったので、サンの中に一気に邪心が溜まり、それを振り払おうと壁に自分の頭を激突させる。

「ちょ、ちょっとサン！？　何してるのです！」

慌ててカリムは自分の頭を壁にぶつけるサンを止めた。そしてどうやらサンは正気に戻ったのか、再びカリムに謝る。

「す、すいません」
「いえ・・、でも昨日の今日というのにほんとに元気ね。体の方は大丈夫なの？」
膝を曲げてサンの顔の前に自分の顔を持ってきたカリムは、サンの体を見てゆっくりと呟く。
【何何何何何！？　何かカリムが一段と可愛く・・いやいやいや煩悩退散、そうだ冷静になれ高町サンよ。昨日も決めたじゃないか。仮に両想いでも伝えないって・・・・カリムの息って何か甘くて良い・・・・違～う！　そうじゃなくて、皆悲しんでいるのに俺がこんなに負抜けてどうすんだ！　取り敢えずここは冷静に・・】
必死に頭の中で理性と本能が戦っていたサンは何とか理性を勝たせることに成功したようだ。そして心配してくれるカリムにゆっくりと答える。
「大丈夫です、心配かけて申し訳ありません。それよりあの・・聖王教会の支持率というか、その・・迷惑かけましたか？」
話している途中で聖王教会のことが気になったので、サンは謝りと同時に質問をした。
「先にその事について言うわね。聖王教会は非難されなかった、むしろサンの戦いの映像を見て聖王教会の信頼や信仰が増したのよ。貴方はそんなつもりでやったんじゃ無いと思うけど、ありがとう」
「い、いえ。俺は聖王教会騎士カリムの騎士として当然のことをしただけです。しかしマスターカリムは何故此処に？　貴女は非常に忙しいのでは・・」

何時もの眩しい笑顔に魅了されながらも話を続けていくサン。一方カリムはサンの悩みを全く気付かずに顔が近い状態で話を続ける。

「実は貴方に取材をしたいっていう記者の方々が沢山聖王教会に来てね・・お見舞いもついでに此処に来たの。確かに忙しかったけど、シャッハや他のシスター達が代わりにしてくれてる、そんな感じよ」

多少無茶感を感じたサンだったが、そこまでしてお見舞いに来てくれたのが嬉しい様で、笑顔を作りながら答える。

「なるほど。しかし今俺は他にもやらないといけないことが。事情聴取とか、検査とか、他にも色々・・」

「分かってるわ。だから貴方本人から忙しいという言葉を聞きたかったの。それで記者の方々も納得して頂けると思いますし」

それを聞いたサンは、改めてカリムが嘘を吐いてはいけない人物だと理解した。同時にカリムは人を偽る事が嫌いな人物だとも感得する。何度目の、自分の気持ちを伝えてはいけないという実感に、胸を苦しめながらも言う。

「貴女は本当に聖女の様な女性ですね。貴方の夫となる人物が本当に羨ましい。・・・殺したいくらいに・・」

最後の部分は誰にも聞こえない様に呟く。当然カリムも聞こえなかったが、前半の言葉だけでも十分の告白だった。現にカリムの顔は真っ赤になり、俯いている。

そんな女性的な様子を見てサンは改めてカリムの将来の夫を憎み、殺意を感じる。しかしこの憎悪は叶えてはいけない物で、カリムを悲しませる物だ。

「あ、あの、サン？」

途切れ途切れにサンの名を呼ぶ。その顔は未だに真っ赤だ。

「さっき、その・・私のこと、カリムって言ってた・・こと」

それを聞いたサンは慌てて頭を下げる。てっきり許してくれたかと思っていたサンだが、甘かった様だと自分の判断能力の低さを実感した。

「すいません。もう二度とあの様な言動は取りませんからご勘弁を」

「ち、違います」へ？」

どうやらカリムは怒っておらず、むしろその表情は何かを求めている感じだ。サンはカリムの言葉に疑問に思いながらも、次の言葉を待つ。

「その、もしサンが良ければですが、二人っきりの時は私のことをカリムと呼んで欲しいの・・勿論口調も何時も通りで」

普通なら此処は断る所だがサンは違う。少しでも好きな人と素の口調で話せるというのは凄く魅力的で、幸せな時間になると理解していたからだ。そんな女々しい自分に心で笑いながらも、辺りを見渡してカリムに返事をする。

「じゃあ・・これで良いか？　カリム」

辺りには数人が居たので、サンはカリムの耳元で呟いた。五歳児が出したとは思えないフェロモンのある美声に、カリムの顔は益々真っ赤になる。

「え、え・・と」

必死でサンを見ようとするが、恥ずかしくて中々顔を上げられないカリム。その仕草が愛くるしいのでサンはついつい苛めてしまう。

「どうした、カリム？　顔が赤いぞ、熱でもあんのか？」

本人だけに聞こえる様に呟きながら指で顎を掴んで優しく上げる。そしてその真っ赤な顔を愛おしく見ながらも、自分の額とカリムの額をくっ付けた。ますます紅潮する顔を見て、ニヤリと笑いながらも更に続ける。サン本人は先程の赤面の仕返しの様だが、カリムは天然で行っていたので、ある意味良い迷惑だ。

「ほんとに大丈夫か？　益々顔が赤くなってるぞ、ちょっと冷たいかもだが我慢しろよ」

サンはそう言って額から優しく掴んでいる顎をゆっくりと離す。そして魔力変換物質氷を少しだけ使う。今のサンはかなりリンカーコアに傷があるが、カリムの可愛い姿を見る為なら多少の我慢出来る様だ。

「え？　な、何を・・ひゃ！？」

突如カリムの頬に冷涼な物が当たり、それに驚いたのか女性的な小さな悲鳴を上げた。その冷涼な物とはサンの手の平だった。魔力変換物質を使って、手を冷やしていたのだ。その悲鳴を出させた本人はニヤニヤしており、それを見たカリムは一気に感情を爆発させる。

「サン！　さっきまでの事は全部態とだったのね！」

「何のことですかマスターカリム。それより周りの方が見ておりますが」

サンが片膝を付きながら言ってきたのに頬を膨らませるが、周りの人物が自分を見ていると聞いた瞬間に、騎士カリムとしての顔に戻す。

「ごめんなさい、何でもないわ。お仕事頑張ってね」

手を振りながらそう言うと、周りの人は誰もツッコミを入れれない無い様で、心残りがある顔をしながら仕事に戻って行った。
そして誰も居なくなった瞬間に再びサンを見降ろす。

「サン、貴方・・覚悟は出来てるんでしょうね？」
「あれ？　カリムさんどうかしたのですか？」

二人が声のする方を向くとフェイトの姿があった。カリムの怒っている姿を見たフェイトは少し驚いている様だ。

「あ、え・・と、お父・・じゃなくてフェイトさん。えっと違うのです、これはサンが態と私に・・」

おどおどしながら言うカリムに不思議に思いながらも、サンの方を見る。

「サン、カリムさんに何かしたの？　サンは失礼なことはしないと思うんだけど・・」
「別に何もしてない。ただ顔を赤くされていたのでこっちを向かせて熱が無いかどうかを額を当てて確認しただけだ。その後にちょっと頬冷やしただけ・・別に何でも無いだろ？」

いけしゃあしゃあと言うサンにカリムは反論する。

「でも無駄に！　魅・・・的、に・・」

途中までは声に出していたカリムだが、言ったら社会的にアウトと判断したので慌てて声を殺すが、フェイトは聞こえないのに疑問に思って聞き返す。

「すいませんカリムさん。聞こえなかったのでもう一度お願いしてもよろしいですか？」

「俺も自分の何が悪かったのか知りたいのでお願いします」

フェイトは自分の息子が迷惑をかけたのかと不安な声で言ったが、サンは答えが分かっていたのでニヤニヤと笑いながら言った。当然フェイトには気付かれない様にだ。

「だから・・その、えと、・・あの・・・・し、失礼します！」

必死で手を振って言い訳を考えようとしていたカリムだが思い浮かばなかったのか、その場から立ち去った。

「どうしたんだろ？　カリムさん。ひょっとしてサン、何か迷惑かけた？」

ちょっときつめの声で質問したフェイトだが、それに怖がらずに笑いながら返す。

「大丈夫だ、迷惑はかけて無い。それより父さんの気持ちがかなり分かった気がするよ」

なのはに甘い言葉を言い赤面させるフェイトの姿を思い出しながら言った。それを聞いたフェイトは益々不思議に思ったのか首を傾げる。サンはその様子を見て再び笑いながら口を開く。

「取り敢えず俺は聖王教会の方に行く予定だから、皆によろしく伝えといてくれ。特に母さんには優しくしてやれよ。父さんもヴィヴィオのことできついと思うが、これも夫の仕事だからな」

「当然、私はなのはの剣となり盾となるって自分で誓ったから。それが例え心でもね。サンこそ大丈夫なの？　ヴィヴィオのこと」

凛として返したフェイトにサンは手を向ける。フェイトは一瞬分からない様だったがすぐに笑ってサンの手に自分の手を当てる。

パン

「落ち込まない訳無いだろ、家族が攫われたんだ。だが此処で後悔して、次の戦いに支障が出たら元も子も無いからな・・。じゃあ今度行くからそれまでは六課の皆のこと任せたからな。管理局の貴公子さん」

「そうだね、私もなのはだけの騎士（ナイト）って訳にはいけないな・・。それじゃあっちも頑張ってね。色々とやることあるんでしょ？　聖王教会の王子さん」

「まあね」

「それじゃあ」

二人はそう言い合うと、それぞれ別の方角に歩いて行った。

スバルとティアナが居る病室にエリオとキャロが入って来た。
二人はスバルの先程とは違う強き目を見て、お互いに顔を見合わせて微笑んだ。スバルは何故笑ったのかが理解出来なかった様だが、ティアナはそれが分かった様で一緒に笑う。

「え？　何、もしかして分かって無いのってあたしだけ！？」

急に笑い出した三人に付いて行けなくなったスバルは皆の顔を交互に見る。

「あんたはほんとに鈍感ね。まあそれがスバルなんだけどね」
「確かに、スバルさんらしいですね」
「ほんとに、スバルさんはこうでなくちゃいけません」

三人の言葉にスバルはますます混乱したようだが、一人の入室によって無くなった。フェイトだ。

「あれ？　スバル元気でたの？」

フェイトはスバルの様子を見て、その事に気付いた様だ。

「はい、ティアのお陰で・・。フェイトさんはどうして此処に？」
「ん～みんなの顔が見たくてね。さっきエリオとキャロには会ったんだけど、二人には会って無かったでしょ」

フェイトはそう言いながら、袋にあるリンゴを皿の上に置く。そして右手でナイフを持って一瞬で八等分にした。そしてどんなトリックを使ったのか分からないが、しっかりとクシ切りにしてある。

「凄い・・」

キャロが憧れの声を出す。自分がサンの為に切った時、あんなに苦労した事をフェイトは一瞬でやったからである。そんなキャロの様子にエリオは不思議そうに見ている。フェイトはそれを白い綺麗な指で掴んで、スバルの口の前に持ってきた。

「はい、スバル。アーン」

「ええ!?」

いきなりの「アーン」にスバルは顔を赤くさせて困惑する。ティアナは、スバルを赤くさせた人物を迫真の目で見ていた。

「ひょっとしてまだ口が動かしにくいのかな？　「いや、そんなん」ちょっと待ってね」

スバルの割り込みもあっさり無視したフェイトは、自分の口にリンゴを入れて噛み始める。スバルは一瞬何をしているのかが分からなかった様で、少しして気がついたが時は遅い。フェイトの唇が自らの唇に当たった。

「ん～!?」

スバルは必死にもがくが力が入らない為、抜け出せない。そして、フェイトの口の中にあるリンゴの欠片が舌によってスバルの口の中に入って来る。

「～～」

最初は抵抗していたスバルだが、今は完全にフェイトのテクニック

により、虜になってしまった様だ。頬が赤く、目がボンヤリしている。ちなみにティアナはエリオとキャロの目を塞いでいる状態だ。二人も手間の掛からない子で、抵抗したり暴れたりせずに、自分から目を閉じていた。

「スバル・・もう一個欲しい？」

真紅の瞳を視界から離せなくなったスバルはコクンと可愛く頷いた。

一方、フェイトから逃げた後カリムは中庭に行き、先程の事を考えていた。

「やっぱり私ってサンのことが好きなの？　五歳なのに？　でも大人っぽいし大人の姿にもなれる・・。意地悪なのに？　でもからかっている時のサンはとっても優しい瞳だった。きっと本気で意地悪はしない・・。騎士なのに？　・・・・・・」

急に独り言が無くなった。そう、サンは騎士なのだ。年齢より大きい壁。

告白しようとは思わない。

それは自分を信じてくれている人を裏切ることになるから。

自分の心（みち）を捨てる事になるから。

サンの死ぬ気で手に入れた名声が無くなるから。

サンの無限の未来を自分の所為で一つにしたくないから。

「だから・・今のままが一番よね」

カリムは芝生に横になり、青い空を見てそう言った。

「そう。この事件が終わればゆっくりと出来る。サンも、誰も、もう傷つか無い。そしてサンさえ良ければ、日常に戻れば・・・・なんてね。あの子が行く訳ないか」

曇り無い空を見てカリムは呟く。そして、一つの巨大な物が目に入った。

「太陽(サン)・・か。ほんとに大きくて、綺麗で、暖か・・い」

太陽の温かい日差しを浴びた所為か急に眠気が来て、そのまま寝てしまった。

一方サンはカリムを追って走っていた。カリムの走って行った方向に走っているサンだが、一向に見つからない。

「ったく、仕方ない女だな。まあ俺の所為何だが。でも、もう一回くらい見たいよな・・」

先程の可愛く愛おしい姿のカリムを思い出すサン。自分でもかなり危ない、と自覚はしているがこの気持ちは止まらないのだ。

「ってやばいな。俺が思春期入ってもこのままだったらカリムを襲ってしまうかもしれんぞ。・・・・前言撤回、今でも襲いたい」

軽い犯罪者思考にまで至ってしまったサン。ため口を少しでもしただけでこれだ。もし数時間でも今の口調でカリムと話すと本当に襲ってしまう可能性は高い。

「何を襲うのだ?」

「何ってそりゃあカリムを・・ってあれ？」

凛とした声が聞こえたが、それが誰かを全く考えずに普通に答えたサンは色々とやばいと実感した。一つは、人前で主を襲いたいという事を言ってしまったこと。二つは、言ってしまった人物が自分に告白した事のある人物ということ。

「ほう、お前も恋をしたのか。それでどうだ、良い物か？　それとも悪い物か？」

想い人が別の人物を好きになったというのに、シグナムの声も表情も何時もと同じだった。

「え～とシグナムさん。できれば先の発言は誰にもばらして欲しくは無いんですが・・」

それが逆に不気味に見えたサンは、なるべく自分が社会的に死なない様に頼む。それを聞いたシグナムは妖美に口元を上げて言う。

「ならば先程の質問に答えたらどうだ？　それ次第だな」

言い訳を考えたサンだが、すぐに無駄だということに気付いたので、溜息を吐いて言う。

「正直微妙ですね。カリムと居ても胸が苦しくなる時と、幸せな時の二つしか無いですから」

「なるほどな、私の恋とは少し違う様だな」

少し違う。サンはその言葉に疑問を持った。自分は苦しいと幸せの二つを言った。シグナムがどちらか気になったので質問する。

「シグナムさんは俺と居て幸せなんですか？　それとも苦しくなるんですか？」

その言葉を聞いてシグナムは一瞬動きを止めるが、すぐ動きを再開した。

「そうだな。私はそのどちらでも無く、追いつきたいと思うな・・」

「それって恋なんですか？」

シグナムの答えに若干呆れながら言った。確かにそれじゃあライバルでも、師匠でも良い。しかしシグナムはサンの言葉を淡々と返事をする。

「これは恋だ。主はやてもそう言われた。そして恋には沢山の種類があることもだ」

「恋には沢山ある・・ですか。そんなにあるんですかね？」

はやてもシグナムの恋を知っていると分かったサンは頭を抱えるが、そこまで問題は無いと思い、もう一つのシグナムの言葉の返事をした。

「私にはよく分からないが、主が覚えておけと仰せなのだ」

「はやてさんが・・って、そういえばカリムのこと知りませんか？」

サンもその言葉について考えていたが最初の目的を思い出し、慌てて聞いた。

「中庭にそれらしい人物が居たが「行ってきます！」おい！」

ボソッと呟いた瞬間にサンは中庭へ走って行った。その様子を見て若干呆れたシグナムだが、すぐに凛とした表情に戻る。

「あいつに想い人が出来たか・・・・まあ私には関係の無い話しだがな」

そう言って、隊長陣の集合場所へ向う。その後ろ姿に寂しさや、悔しさの欠片も無く、師としての雰囲気を漂わせていた。

中庭に来たサンはあちこちを探し回る。此処の中庭は結構な広さなので、走っての行動だ。

「マスターカリム、いらっしゃいませんか?」

しかし誰の声もしない。サンは頭を掻きながら、辺りをキョロキョロ見渡す。

スースー

ほんの微かにだが、息を吐く音が聞こえた。サンは誰か居ると思ってそこに向うと、芝生のベッドで寝ているカリムが居た。

「ったく」

サンは微笑みながら寝ているカリムの横に座る。そして金色の長い髪をゆっくりと優しく撫でる。

「っん、ん~~」

気持ち良さそうな声を上げるカリムを見て、サンは和む。そしてしばらくカリムの寝顔を見ていた。
そして、空を見てゆっくりと呟く。

「ヴィヴィオ・・・絶対助けてやるからな。もう少し待っててくれ。俺の力と皆の準備が出来るまで・・」

横で少し大きな音がした。サンが見ると、体を縮め、手で体を抱いているカリムが居た。いくら天気が良くてもやはり屋外で寝るのは寒い。顔をほころばせてサンは、自分の上着をカリムに被せ、風が直接当たらない様に移動する。カリムはサンの上着をギュッと掴んで幸せそうな顔をする。

ドクン

サンの心臓が激しく音を立てる。そしてサンはカリムの顔に自分の顔を近づけて、唇を当てようとするが、途中で止めた。

「ハァ〜、やべえな。カリムが結婚するならマジでその旦那ぶっ殺すかもしれねえ。聖王教会が結婚ありってのは、嬉しい様な悲しい様な感じだよな」

空を見ながら手を顔に当て、苦笑いする。どうやら本気でそのことを考えている自分が居て、その自分に笑っているようだ。そしてカリムの寝顔を再び見ると、口が勝手に動いてしまう。

「こいつは・・こいつを・・俺の・・・・。ヴィヴィオは？　アインは？」

カリムを見ながら欲望を呟くが、急にヴィヴィオとアインハルトの顔が頭で見えた。二人はとても悲しい表情をしている。サンの隣には幸せの表情をしているカリムが居る。カリムがサンに微笑んだ瞬間に二人の姿がどんどん遠くなっていき、サンは・・・・

「止め止め止め！」

頭を横に振って自分の頭の中から意識を脱出させた。

「う、う～ん・・」

サンの大声でカリムが微かにだが目を覚ました様だ。もう少し寝顔を見ていたかったサンだが、カリムが忙しいことを知っていたので二度寝はさせなかった。

「カリム、そろそろ起きろ。聖王教会に帰った方が良いんじゃねえか？」

「サ、サ・・ン？」

未だにカリムは眠たい様だ。目を擦って、目の前に居る人物を見ようとしている。その姿がまた愛くるしい。

「そうだ、サンだ。ほら起きた」

「ひゃう！？」

サンが言った瞬間にカリムの顔に冷たい水がかけられた。サンの変換物質で出した水の様だ。急に水をかけられたのでカリムは驚きの声を上げ、目が完全に覚めた所で目の前の人物を見ると、意地悪そうに笑っているサンが居た。

「サン！　貴方はまたそうやって！」
「それよりカリム、そろそろ聖王教会に戻らなくて良いのか？　シャッハや記者達が待ってんじゃねえのか？」
サンの言葉を聞いてハッとした表情になったカリムは慌てて駐車場の方まで走る。そして一定以上サンとの距離が空いたら、サンの方を向いて言う。
「早く帰ってきなさい。先程の事で色々と話がありますから！」
声は怒っていたが、表情は笑顔その物だった。再び走りだしたカリムを見ながらサンは呟く。
「さてと、じゃあ管理局行きの車に乗せて貰うか」
声は楽観的だったが、顔は嫌で面倒そうだ。まあ自分の能力を調べられるのなんて余り良い気分では無いだろう。
サンは嫌嫌ながらも、目の前に来た管理局の人物に付いて行った。
聖王教会からの話から少し経った今、はやてを除いた隊長陣はスバルとギンガの父親のゲンヤ・ナカジマの居る陸士１０８部隊に居る。ゲンヤが知っていること、スバルやギンガの体のことを聞きに来たのだ。
「まずは、どっから話したもんかな・・」
「三佐が追っていらした、戦闘機人事件からでしょうか」
モニター越しに居るクロノが立案する。隣にはカリムの姿もあり、

肩にはサンの上着があった。二人は聖王教会に居る様だ。
ゲンヤの居るソファーのテーブルを挟んだ反対側には、なのは、フェイト、シグナム、ヴィータの四人が座っており、顔は真剣その物だ。

「出来れば、ギンガとスバルの事。奥様の事についても・・」
「ああ・・戦闘機人の大元は人型戦闘機械。これはずいぶん古くからある研究でな。古くは旧暦の時代からだ。人間を模した機械兵器、幾つもの世界でいろんな形式で開発されたが、物になった例はあんまり多くねえ。それが、あるとき劇的な進化を遂げた・・二十五年前ばかりのことだ・・」

ゲンヤは顔を下げながら説明していくが、二十五年前という言葉の時に顔を上げた。

「機械と生体技術の融合自体は、特別な技術じゃない。人工骨格や人工臓器は、古くから使われている。ただ・・」
「足りない機能を補うことが目的ですから、強化とはほど遠く拒絶反応や長期使用におけるメンテナンスの問題もあります」

クロノとカリムが戦闘機人の開発不可能な部分を説明する。そしてその不可能な部分を可能にする方法をゲンヤは呟く。

「だが、戦闘機人はな、素体になる人間の身体の方を弄る事で、それを解決しやがった」

隊長陣に一気に驚きの空気が走る。

「誕生の段階で戦闘機人のベースとなるよう、機械の身体を受け入れられるよう、調整されて産まれてくる子供達。それを生み出せる

技術を、あの男は作り出した・・」

フェイトがゆっくりと呟いて説明する。そしてあの男とは当然ジェイル・スカリエッティのことだ。

「十一年前、まだスカリエッティなんて男が絡んでるとは知らなかったが・・うちの女房は陸戦魔導師として、捜査官として戦闘機人事件を追ってた。違法研究施設の制圧、暴走する試作機の捕獲。スバルとギンガは、事件の追跡中に女房が助けた戦闘機人の実験体なんだ。うちは子供が出来なくてな、二人とも髪の色や顔立ちも、なんだか自分に似てるしってよ・・・まあともかく、俺達の娘として、人間として育てるって言い出した。技術局でのメンテだの、検査や研究協力だのも多少はあったが、二人共、実に普通に育ったよ」

ゲンヤは一旦間を置いて、再び話し始める。

「女房が死んだのはあいつらに、それなりに物心がついた頃だった。特秘任務中の事故だとかで、死亡原因も真相も未だに闇の中だ。女房はどっかで、見ちゃいけねぇものを、踏み込んじゃいけねぇ場所に踏み込んじまっただろうと思っている。命を捨てる覚悟で、事件を追っかけりゃ良かったんだが、女房との約束でな。ギンガとスバルをちゃんと育ててやるってな。まあずっと、地道に調べてはいたんだ。そのうち告発の機会もあるかもしれねぇってな・・」

すっかりと冷めてしまったお茶を、一気に飲んで、今度は歯ぎしりをしながら言う。

「八神は自分の所の事件に戦闘機人が絡むって予想して、俺に捜査の依頼をしてきたって訳だ。あのちび狸はよ！」

はやてらしい行動に、深刻な話の中でも思わず頬を緩めてしまう四人。

「まぁ、家の女房と娘達についてはこんなとこだ。後は合同捜査の方だが、坊主・・」

ゲンヤはフェイトの方を見て言う。フェイトとしては確かにお嬢やお嬢さん等と言われるのは好きではない。なのはの旦那として生きると決めたこの女性に、女扱いは余り良く無い。しかし、坊主と言われるのも正直好きでは無い。全く女を捨てた訳では無いので、そこら辺のプライドは持っているのだ。フェイトは内心複雑な様で苦笑いしながらも頷く。

「はい、じゃあこちらのモニターにある・・・・」

そして、現在進められているジェイル・スカリエッティ対策の内容を、フェイトは説明していった。

一方サンは管理局本局に居り、様々な検査を受けている最中だった。

「ねえ、後いくつあるんだ？　いい加減嫌になってきたんだけど・・」

両腕を頭の後ろに回してサンは目の前に居る女性に聞く。女性はその言葉にビクッとして、慌てた声を出して言う。

「す、すいません。で、でも、私は助手というか、下っ端というか、そ、そんな感じなんで知らないんです」

声以外にも表情や態度まで慌てていた。どうやら目の前にいる子供が恐ろしいのだろう。その様子を見たサンは溜息を吐く。

「ハァ～、そんなに怯えんなよ。まああの異常さは事実だけどな。この手の平一つで守護竜以上の竜をぶっ殺したんだもんな～」

プラプラと腕を振って、ダラダラと動く手の平を見ながらそう呟く。女性は早くこの仕事を終わらせたいのか、少し早歩きで移動し始める。

「で、後いくつ？」

「も、もう少しだと、思います。多分・・」

そのはっきりしない答えにサンは再び溜息を吐きながら、女性に付いて行った

そして様々な検査を受けて、ようやく帰れる事になった様だ。

「あ～やっと終わったぞ、この野郎が～」

腕を伸ばして思いっきり背筋を伸ばす。無事に終わったが、既に外には月が見えていた。

『カカカ、一日で終わるなんて信じられねえな。相棒は誰かに守られているんじゃねえのか？』

『確かに最高の実験体とも言えるマスターをこんなに早く返すなんて信じられません。さすがに今回は聖王教会の騎士としての立場も余り意味が無さそうですし。それに私達もたったの一日で返されま

した』

胸ポケットから、リリとオーバーの声が聞こえた。そう、二機も先程返されて、また検査をすることは無いと言っていたのだ。サンは俄かに信じられなかったが、取り敢えず今日中に帰れるならと思い、深くは追求しなかったのだが。

「どっちでも良いだろんなこと。それよりカリムと会う約束してんだ。とっとと聖王教会に帰るぞ」

どうやらサンにとっては自分が検査という研究に呼び出されるよりも、カリムに会う方が重要な様だ。確かに好きな人には会いたいという気持ちは無いと可笑しいが、それでも少し異常な気がしないでも無い。二機のデバイスはそんな人間らしい事を考えながらも、口出しはしなかった。

聖王教会に着いたサンはカリムの部屋に向っている最中だ。待ち伏せしていたパパラッチや、聖王教会の支持者等を回避しながら向っていたので、あれから更に時間が経ってしまい、既に十一時になっている。

「ったく、色々と面倒だよな。ネットやマスコミの間じゃ俺の高町って名字が気になって、母さんの回りが調べられているって噂が流れているんだよな？」

面倒臭そうな顔をしながら、二機に呟く。確かになのはの血を引いた息子だと世間にばれたら色々と面倒だろうし、父親は誰かと自然に矛先がそちらに行く。そしてフェイトとの息子と知られたら、フェイトが実は男説かサンが人工授精した子供のどちらかが世間に流

れるだろう。

『確かに流れています。管理局の一部の人はご存じですが、一応秘密事項ということで、世間には公表されていませんから』

『ケケケ、相棒は産まれた時から問題を抱えてるみたいだな。デビルの家族も相棒の所為にされてんだろ？』

二機の言葉に一段と面倒臭そうな顔をする。世間にばれるのも、デビルの逆恨みにしても、どちらも余はサンにとっては面倒事でしかないのだ。

「この事件が終わったら公表した方が良いのか？　人の噂も七十五日って言うしな、そのうち騒ぎも無くなるだろうし」

『確かに流言飛語、根も葉も無い噂は無くなるかもしれませんが・・・』

『口から出れば世間、一旦口に出して言ったことは、世間の広く知るところとなる。覚悟して発言しないとこうなるぞ、カカカ』

それぞれがそれぞれの四字熟語やことわざを言って話し合っている。結局の所それ等には沢山の立場から言っている言葉なので、どれが正しいというのは無いのだ。サンは二機のデバイスが何故日本の言葉をそこまで知っているのか謎に思いながら返す。

「ハァ、何で俺がこんなに悩まなくちゃいけねえんだよ。こういうのははやてさんの仕事なのに・・」

『はやて様に対して失礼だと思いますが確かにその通りかもしれませんね。闇の書、それの逆恨み、昔のお母様とお父様の恋愛、後あの家族の所為で恋愛がしにくいのも最近の悩みの様ですよ』

リリの言葉を聞く度に、はやてへの同情の気持ちがどんどん増えて

いく。特に最後の恋愛の悩みに対して物凄く不憫に思ったのだ。恋愛をしている者にしか分からない恋愛の悩み。そして歩くのを一旦止めて、ゆっくりと口を開く。

「今度はやてさんに何か美味い物でもあげるか。可哀そうとしか言えない・・」

はやての十年後の姿を想像してしまったサンは、出会いも頑張ってあげてあげたいな、とデバイス達に聞こえない様に心の中で呟いた。そして再び歩き始めたサンの後ろに足音が聞こえる。そちらを見なくてもサンには誰かというのが分かる。

「部屋に居るんじゃなかったのか？　カリム」

そして自分の顔の両側にあった綺麗な手を握る。どうやら目隠しをする予定だったのだろう。それを止められたカリムは頬を膨らませており、今日何度目か分からないカリムの魅力的な姿に、また赤面してしまうサン。しかし攻められるのは自分の立場では無いと、良く分からないプライドで、すぐに行動に出る。

「何だ、カリム？　もしかして、だ～れだ、ってのをやってみたかったのか？」

「ち、違います。べ、別に仲の良いカップルがやってるから私もやりたくなったとか、そういうのじゃ無いんですから！」

何時もの表情のサンに言われたカリムは、顔を赤くしてそっぽを向きながらそう叫ぶ。だが、誰が聞いても自分やってみたかった、としか言ってないその言葉にサンは益々苛めたくなる。

「そうか、まあ俺達はカップルじゃ無いから別にやらなくても良い

だろ。そんな事より仕事は良いのか？」

その言葉を聞いたカリムは少しだけ落ち込んだ表情をする。そしてカリムをずっと観察していたサンがそれを逃す訳が無かった。

「カリム、あそこに何か落ちていないか？」

サンは電気の点いていない暗い場所に指を指す。落ち込んでいたカリムは何かと思い、そちらに向う。サンも怪しまれないようにカリムの少し後ろに付いて歩く。

「何処にあるの？」

「無いか？　こっちにも無いな。そうだカリム、屈んで見た方が見やすいぞ」

サンの言葉を聞いたカリムは、着ているロングスカートの膝の部分を折って屈みながら探し始めた。

「本当にあるの？　此処にも無いんだけど・・」

「何か見たとは思うんだがな・・・・。だがカリム、見間違いかもしれないのに何故手伝うんだ？」

サンの作戦はカリムが此処までしてくれると思っていたから実行したのだ。しかし、理由までは分からなかった。

「う～ん、そう言われると困るわね。でも、サンが言ったことだから信じないといけないなって。主として騎士の言葉は信じないといけないでしょ？」

ドクン

サンの心臓が激しい音を経てる。
そして、サンの心は二つに分かれた。一つは嬉しさ。カリムは自分のことを信じてくれて、騎士として認めてくれるということ。二つ目は悲しさ。自分とカリムはやはり騎士と主の関係で無くてはいけない。そう思うと胸が引きちぎれそうなのだ。

「あ、りがとな。俺を騎士として認めてくれて」
「ううん、当然のことよ。市街地を守り、避難民を守り、邪悪なる守護竜を倒した。こんな功績があるのに認めない方が可笑しいでしょう」

地面に向けていた顔をサンに向けて、微笑みかける。その頬笑みを見たサンは、改めてこの人物がずるいと思う。自分があんなに意識して動揺させたのに、カリムは天然で自分の心を震わせるのだ。

「確かにそうかもな、じゃあもう少しだけ探そうか」

サンの言葉を合図に二人は再び地面を見始める。少しして、カリムが自分に背を向ける様になったので、サンは気付かれない様にゆっくりと近づく。
そしてカリムのすぐ後ろまで移動したサンはゆっくりと手をカリムの目の前に被せた。

「だ～れだ？」

そっと耳元で囁き、その声を聞いたカリムは頬を赤らめる。更に先程の自分の言葉を思い出したのか、顔全体の色が一気に真紅にまでなる。

「サ・・サン？　えと、これは・・どう・・い、う意味？」

サンを見ようと顔を振り向かせるが、それはサンの力によって不可能になった。

「仲の良いカップルがこんなことするんだよな？　俺とカリムは付き合って無いが、主と騎士という特別な関係じゃないか。騎士からするのは少し無礼だが、嫌じゃないだろ？」

サンはそう言ってカリムの体を振り向かせる。手の平を掴み、自分の口の前まで持ってくる。そして優しくキスをした。

「え？」

別に何も命令やお願いをしていないのに、騎士としてのキスをしたサンにカリムは思わず疑問の声を上げる。

「これからも、カリムを騎士として支えたいんだが良いか？」

「改めてどうしたの？　良いに決まってるじゃない」

サンの突拍子な行動に微笑しながらも、返事をした。

「俺がさっきの言葉を言ったのには理由がある。・・・お前とどんな関係でも良いから特別という言葉を付けたかったんだ。そして、お前とずっと特別な関係で居たい」

サンの発言でカリムの顔が再び紅潮し、恥ずかしいのか、サンに背中を向ける様に立って何も言わずに歩いて行った。

サンは微笑みながら後ろ姿のカリムを見ており、視界から見えなくなったのを見計らって、ゆっくりと闇を照らす月を見る。

「月・・そういやカリムのレアスキルも月が関係してたんだっけ。ヴィヴィオはこの月を見れてるのか？　アインは今頃家族と会えたのか？　三人は俺の・・何なんだよ・・」

教えてくれる筈が無い月に向って、サンは想い人と二人の少女のことを、ただただ呟いていた。

時空管理局本局のドッグにヴェロッサは居る。ガラス越しには、巨大な次元空間航行艦船アースラがある。後ろから足音が聞こえたのでそちらを見ると、はやてが走って来ていた。

「はやて」

「ロッサ、ごめんな。おまたせや」

ヴェロッサは何時もと違うはやての雰囲気を読み取った様だ。

「さすがのはやても、ちょっと元気が無いかい？」

その質問に少し考えたはやてだが、すぐに肯定して歩き始める。ヴェロッサもそれに付いて行く。

「ギンガやヴィヴィオを攫われたのは大失態や。部隊員達にも怪我させてもうたしな。そやけど、持ってかれたもんは取り戻すし、今度は絶対ちゃんと守る」

覇気ある言葉を聞いたヴェロッサははやての頭に手を乗せ、撫でる。

「落ち込んでもやる気は減って無い、なかなか立派だ」

「夜天の主として、六課の部隊長として、当然や」

それを聞いたヴェロッサは頬笑んで、アースラの方を見た。

「しかし、本気なのかい？　はやてとクロノ君の頼みだから、許可は何とか取ったけどさ」

「隊員達の住居や生活空間も含めて、本部は絶対必要やし、今後を考えれば移動出来る本部の方がええ。アースラ、お休み前にもうちょっとだけ、私達一緒に頑張ってな・・」

はやては優しい声と表情で、修理されているアースラを見る。そしてその表情とは裏腹に、はやての中には覚悟と決意があった。

「ハァ、ハァ」

フェイトは機動六課の瓦礫や住居可能な空間等を走りながらある人物を探し回っていた。

『何故私を使わないのですか？』

右腰に掛けてある、バルディッシュがフェイトに聞く。そう、フェイトはバルディッシュには何もさせず、念話もせずに自分で探していたのだ。その言葉を聞いたフェイトは口元を上げる。

「こういうのは自分で探してあげるのが一番なんだ。バルディッシュも紳士だからすぐ理由は分かるよ」

『ありがとうございます』

バルディッシュは何時もの声で返すが、長年の付き合いであるフェイトには、良く理解していないのが分かり、思わず笑ってしまう。そしてすぐに、走りだした。

「ハァ、ハァ、なのは何処に居るんだろ?」

辺りを見渡して愛する人の姿を探すが見つからなかった。フェイトは一瞬残念がるが、すぐに凛とした表情に戻り、探索を再開する。外を探し始めて十数分後にフェイトは栗色の長い髪を見つけた。やっと見つけられた事に嬉しさと、なかなか見つけられなかった事の悔しさを、取り敢えず押さえてなのはの近くに歩く。

「フェイトちゃん?」

なのはは足音がしたので後ろを振り返り、そこに居た人物の名前を呼ぶ。なのはの表情はフェイトの身を切られる程悲しい表情をしている。ゆっくりと近づいたフェイトはなのはの隣に立ち、先程までなのはが見ていた光景を視界に映す。

「なのは、やっぱりヴィヴィオの事考えてた?」

ゆっくりと後ろを振り返り、そう呟く。

「うん。約束破っちゃたな、って・・」

なのはの言う約束をフェイトは知っていた。昨日の夜までには帰っ

て来る、良い子で待っていたらヴィヴィオの好きなキャラメルミルクを作ってあげることだ。なのはは約束を破るのが嫌いで、指切りしたことは絶対守る人物だと知っているフェイトは、自分が妻と娘の約束を果たす事に、何も出来なかった悔しさでいっぱいだった。

「私がママの代わりだよって、守っていくよって約束したのに、傍に居てあげられなかった、守ってあげられなかった」

なのはの目から雫が次々と落ちる。

「あの子、きっと、泣いてる・・」

悲しさの余りに手を顔に持ってきて泣き始めたなのはを、フェイトは強く抱きしめる。

「なのは・・」

「ヴィヴィオが一人で泣いてるって、悲しい思いとか痛い思いをしてるかもって思うと、体が震えて、どうにかなりそうなの！」

なのはの言う通りだった。フェイトの腕の中に居るなのはは、子犬の様に震えて、声も必死だ。

「助けに行きたい！　だけど、私は・・」

顔を上げてフェイトに助けを求めるなのはを必死に抱きしめる。

「大丈夫、ヴィヴィオは絶対大丈夫だから。助けよう、私達家族で、ヴィヴィオを絶対に・・」

胸で泣いているなのはと、夜空に輝く月を眺めながら、フェイトは

そう呟いた。

貴公子と王子　（後書き）

ふぅ。やっと投稿出来ました。
しかし、リアルが忙しくなるとこんなにも投稿できなくなるとは・・・・
最近ヒロインカリムじゃね？　としか思えないのですが、ヒロインはヴィヴィオとアインハルトです。
しかし、原作のカリムを見ると、ついそちらに目が行ってしまいますｗｗ

幻銃士ティアナ（前書き）

最近悩みがあります。
中々評価が貰えないということです。オイ！
もしよろしければ、貰えるコツや、この様な所が駄目だから評価があげられない、等のアドバイスをお願いします。
やはり、指摘して貰わないと分からない部分が多々あると思います。
まあ、愚痴はここまでにしておいて、それでは３９話目をどうぞ。

「ハァ」

訓練の休憩途中にティアナは溜息を吐いた。疑問に思ったスバル、エリオ、キャロはそちらを向き、何故溜息を吐いたか質問する。

「どうしたのティア？」

「今日も結構良い動き出来たと思うんですが・・」

二人の言葉にティアナは慌てて手を振って返す。

「違うの、あんた達が悪いんじゃ無くてあたしがね。もし一人対複数の時はどうしようか悩んでて」

そう返された三人は不思議そうな顔をする。そう、おそらく機動六課に居る間は四人がバラバラで戦闘を行うことはまず無いだろう。なので、一人対複数の戦いを想定しているティアナに疑問を思ったのだ。その表情を見たティアナは自分の考えを説明する。

「あたし達・・ううん、あたしは分離されて戦われると非常に厳しい。スバルみたいな突破力も無いし、エリオの様なスピードも無い、キャロみたいに召喚して自分の手札を増やすことも出来ない。ああ、別に嫉妬したりそういうのじゃ無いから。ただ、一人の時の手札がダガーモード以外に後一つだけ決定的に何か足りないの」

説明を聞いて不安そうな顔をした三人に言葉を付け足したティアナ。そして、三人はそれに納得したのか一緒に考え始めた。

「やっぱり、ティアさんと言えば幻影じゃないでしょうか？」
「そうですね。幻影は近距離戦にも使えますし、サンも言ってました。ティアの幻影を真似して母さんと戦ったらかなり使えた、って」
キャロの言葉に足して、近距離戦の得意なエリオがそういう。更にサンの実体験も出してその案を押す。
「でもサンの幻術はなのはさんのバインドを受けても実体は持ってたでしょ？　あたしの幻影は衝撃に弱いの」
自分の魔法を真似して行った魔法が自分より優れていたので、若干落ち込んでしまうティアナ。スバルとキャロがエリオにだけ分かる様に睨み、その視線に耐えながらもエリオは口を開く。
「えと、じゃあサン本人に聞くのはどうでしょうか？　強化陣や第二効果等の面白い発想も出来るし、術式兵装なんて術式を極めた者にしか出来ない様な事までしてますし」
その言葉に皆納得したのか早速サンへの通信を開始する。少しコール音が流れてサンの姿が見え、その隣にはカリムが居た。
「どうしたんだ皆揃って？　言っておくが暫くそっちには行けないからな。マスターカリムへの会談が一気に増えて、俺も同席することになってんだ」
サンは目の前にある紅茶をゆっくりと飲み、落ち着きのある息を吐く。その様子を見たカリムは嬉しそうに笑い、口を開く。
「サンったら前の人の会談の時にお土産の甘いお菓子を、私の印象が悪くなら無い為に食べてくれたの。それで今は苦い物が欲しいみ

たい」

その言葉にサンは顔を赤に染めながらそっぽを向く。モニター越しでも分かる無言の甘い空間が漂い、四人は微笑ましい様な面倒くさい様な、反する顔を器用にしながらも要件を言う。

「実はティアの接近戦について考えていたの」

「ああ？　お前はセンターガードだろ？　もしかしてポディション変えんのか？」

スバルの率直な言葉に、相変わらず五歳児の出すとは思えない単語や言葉使いで返したサン。

「違うの、ティアさんは自分が一人になった時の事を考えて・・」

「ダガーモードでも厳しい状況があるから後一つ手札が欲しい、ってことなんだけど」

兄と姉の必死の表情にサンは納得したのか、腕を組んで考え始める。

「やっぱ幻術だな。正直接近戦には力と速度が大事だが、ティアには向いていない。と、なると自然に矛先がそこに行く。ま、皆も此処までは分かって幻術を強くする練習をした方が良い、って所までは大丈夫だよな？」

サンの鋭い読みに驚愕しながらも頷く。

その四人の姿とサンの姿を見て目を細めるカリム。横眼でそれを見たサンは咳払いをして邪念を追い払い、話を続ける。

「でも幻術の強化を優先すると魔力が持たなくてね・・・。あた

しの魔力値じゃあ長期戦は厳しいし」
「んなもんカートリッジで補え。今から言う俺の魔法は、弾丸を使ってでも発動する価値がある物だからな」

多少ゴリ押し感があったサンの返事に反論しようとしたティアナだが、その次の言葉に唾を飲み込んで静かになる。口元を上げながらゆっくりと口を開く。

「俺の考えた魔法・・・・。それは幻影を完全に実体化させ、攻撃させることだ」

サンの言葉に一気に皆に衝撃が走った。幻影を衝撃から強くする、幻影にスフィアの幻影を出させる、等は可能な事だが、幻影を完全に実体化させ攻撃をする魔法は聞いたことが無い。

次の瞬間には質問を開始していた。

「そんなことが可能なの!?」
「ぶっちゃけた話し不可能じゃ無い。俺でも完全な実体化は無理だが、幻術をメインに攻撃している魔道士ってのは過去に実際居る。まあかなりの魔力配分技術と演算能力が必要になるみたいだが、そこら辺はそっちで何とかしてくれ」

やけに大雑把な説明に思わず呆けてしまう四人だが、カリムは笑って答える。

「サンはティアナさんや皆に、自分でその魔法を習得して欲しいのよ。簡単に力を手に入れるよりも、必死に努力して手に入れた力の方がずっと活かせる、ってなのはさんも言ってた。そうでしょ、サン?」

「な!?　そ、そんなんじゃねえよ!　兎に角自分達で努力して習得するんだ!　基本的な事は普通の幻術と余り大差無い筈だからな。じゃあ」

サンが顔を真っ赤にしながら言って通信が切れた。お互いを分かり合っているとしか思えないサンとカリムの言動に笑い合いながらも幻術のことを話し合う。

「それでどうするのティア?　幻術と余り大差無いって言ってたけど実感ある?」

スバルの言葉に首を横振り、腕を組むティアナ。それと同じ行動をするエリオとキャロ。どうやら皆全く分からない様だ。

「取り敢えず隊長達に聞いてみるのはどうでしょう?」
「ん~、それが一番みたいね。じゃあ行こっか」

四人は少し早歩きで、隊長陣が居る緊急本部に向った。

そして四人が一番初めに向ったのは、はやての部屋だった。厚かましいのを承知で向っている。何故はやてかというと、魔導書型のデバイスの中に様々な魔法が入っていると、本人やなのは達に聞いた事があったからだ。

コンコン

「FWです。失礼してもよろしいでしょうか?」

代表としてティアナがノックをした。その直後にはやての良い、という返事が来たので四人は順番に入る。

「皆どうしたん？　何か悩み事？」

皆一斉に部隊長室に来るのは初めてのことだったので、はやてはただの個人的なことでは無いと判断したのだ。四人ははやての机の上にある大量の書類を見て、一瞬退室しようと考えたが、今は幻術の事を聞きたかったので質問する。

「実はあたしの幻術のことで相談があるんです」

そして四人ははやてに、悩みの事とサンの言った幻術の事について話した。その話にはやてと隣に居るリィンは考える姿をする。

「はやてちゃん。ヴィータちゃんやシグナムから聞いた事ありませんでしたっけ。昔ベルカに幻術使いの物凄く強い魔術師が居たって・・」

「そういえばそんな事聞いた事あったな。確か幻騎士やったっけ？」

二人の呟きに一番反応したのは、やはりティアナだった。

「幻騎士・・ですか？」

その不気味で惹かれる呼び名に思わず復唱してしまう。当然スバル、エリオ、キャロもその名を心の中で復唱していた。

「そや、実体ある幻術、実体無き幻術とその剣術で幾つもの超人を倒したと言われる人物、みたいや」

「多分サンもその人物の事を言っていたんでしょう」

二人の言葉に実際に幻術を操る事の出来る人物が居たということ、サンの言っていたことが本当だったことを、四人は実感した。

「それで八神部隊長。その人物がどんな風にその幻術を手に入れたのかご存じですか？」

スバルの質問にはやては首を振り、皆がリィンの方を向くがはやてと同じ反応だった。

「ごめんな、でも私は知らんけどシグナムやヴィータが知っとるかもしれん。もし良かったらそっちにお願いや」

はやてが謝ってきたので四人は慌てて敬礼をして返す。

「いえ」

「十分教えてくれたので、そんな・・」

「そうか、ありがとな。所でなのはちゃんの許可は貰っとるん？前にあんな事があったけん、言っといた方が良いと思うよ」

それを聞いた四人は一気にハッとした表情になる。確かに練習するとしたら教導官であるなのはの許可が必要だ。しかし、そのなのはが駄目と言う可能性は零では無いのだ。

そんな四人の表情を読み取ったリィンは笑いながら言う。

「大丈夫ですよ。なのはさんなら絶対許可を出します。皆はなのはさんの教導の意味を知ってるんですから、無茶なことしないと本人が一番ご存じですよ」

そう言われた四人はホッとし、そして頬を緩ませてリィンに礼を言った。

「お忙しい時に申し訳ありませんでした。失礼します」

皆敬礼をしてはやての頷きを合図に部隊長室から退室した。

扉から少し離れて会話を始める。

「幻騎士か～。でもティアがなるなら幻銃士だね」

「ティアさんなら絶対にその幻術を使える様になりますよ」

曇り無き笑顔で言われたティアナは少し気が重い。正直そんな凄い人物の能力を自分が手に入れられるとは思えないのだ。その事に溜息を吐きながらも口を開く。

「取り敢えずあたしはなのはさんの所に行って許可を貰ってくるけど、皆はどうする？」

「僕はシグナムさんの所に行って話を聞いてきます」

「私もエリオ君と一緒に行きたいと」

「じゃあ、あたしはヴィータ副隊長から」

三人の答えにティアナはお人よしと思いながらも笑い、なのはの居るオフィスまで歩き始めた。三人はその後ろ姿を見て、笑い合いってそれぞれの人物の所に向った。

「あの、なのはさん」

ティアナが、色々な書類上の仕事をしていたなのはの名を、少し気まずそうに呼んだ。

「何？　ティアナ」

そんなティアナを不思議そうに見るなのは。

「えっと、実は、新しい技っていうか魔法の練習をしたいんですけど・・」

それを聞いたなのはは、ティアナが気まずそうにしていた理由が分かった。

「ああ、良いよ。もうティアナは無茶しないって信じてるし、あ、でも・・、やっぱり心配だからフェイトちゃんに見て貰ってよ。ほんとは私が見てあげたいんだけど、ちょっと忙しくてね」

「フェイトさんに、ですか？」

確かにフェイトなら優しく厳しくしてくれるので、魔法の先生として教えてくれるのはとてもありがたいことだが、一つ問題があった。

「あたしはフェイトさんに落されたくないんですが・・」

そう、兎に角フェイトが天然のタラシということだ。マンツーマンで指導を受けたらそれこそあの貴公子にやられてしまうとティアナは判断していた。現に、あの鈍感のスバルがやられてしまったのだ。それからのスバルは元気にはなったものの、フェイトの写真やカード等を持ち歩く様になり、自分もそうなると思うと頬を引きつらせ

るしか出来ない。

「ははは、大丈夫だよ。ティアナって冷静だし、理論的だし。それにフェイトちゃんにもちゃんと言っておくよ。私もあんまり嫉妬ってしたく無いし」

「まあ、フェイトさんも意識して貰えば大丈夫ですよね」

なのはの言葉に安心したのか、ホッと胸を下ろす。そして今度はなのはがティアナに質問をする。

「ティアナが練習したい魔法って何？」

ティアナのアイデアは中々面白い物が多い。ダガーモードを自分で考え、ＦＷ戦の時のシフトも最近は独特な物があり、結構な所まで追いつめられる時もある。そんなティアナの練習したい、という魔法には自然に興味が出るのだ。

「あたしのアイデアでは無くてサンの考えなんですが、幻術に実体をつけることが目標なんです」

「幻術に実体？　確かユーノ君から聞いた事あるよ。昔のベルカにそれを使って戦う人物が居るって、確か・・」

ティアナの発言に無限書庫の司書長であるユーノの話を思い出すなのはだが、その人物の名前が出てこない様だ。中々出てこない名前に気になり気持ち悪い様で、必死に可能性のある言葉を出す。

「幻魔？　幻想曲？　幻覚？　劇？　原稿紙？　え～と「幻騎士です」そう、それ！」

色々出すが全然出てきそうになかったので、途中で答えを出したテ

ィアナ。やっと分かったなのははは凄く笑顔になって叫んだ。そんなのはに苦笑しながらも、聞く。

「えっと、フェイトさんは何時から大丈夫なんでしょうか？」

「ん～、多分今からでも大丈夫だよ。少しの間執務官の仕事は休暇を取って、機動六課の仕事に集中したいって言ってたし、私の代わりに時々ＦＷ陣の事も見てくれるみたいだし・・」

「じゃあお言葉に甘えて、早速フェイトさんの所に行ってきます」

元気良く返事をしてきたティアナに笑顔で頷くなのは。なのはからすれば、一定以上の育てた弟子が新しい魔法を自ら手に入れようと努力するのはとても嬉しいことなのだ。そんな心をティアナは見えたのか、カリムが言っていた言葉を呟く。

「簡単に力を手に入れるよりも、必死に努力して手に入れた力の方がずっと活かせる」

「え？」

自分が言っている言葉をティアナが急に言ったので、なのはは意表をつかれた様だ。

「カリムさんから聞いたんです。多分サンから教えて貰ったと思います。これってなのはさんの言葉何ですよね？」

「う、うん。サンか～、恥ずかしいからあんまり人に教えてほしくは無かったんだけどな～」

赤い頬をポリポリと掻きながら、恥ずかしそうに言った。そんな可愛い上司の姿に少しだけ保護欲が出てしまったティアナは、慌ててその思考を消してなのはに言う。

「凄く良い言葉です。そんなに恥ずかしがる事無いですよ」
「にゃはは、ありがとねティアナ。そろそろフェイトちゃんの所に行ったら？　明日も練習あるから早めに寝る為にも、早く頼んだ方が良いよ」

その言葉にハッとして慌て時計を見ると、時刻は既五時を超えていた。ティアナは礼も済ませずに急いでフェイトの居る執務室へ向った。

「ふふ、ティアナがあんなに急ぐなんて珍しいな。私も本格的に訓練始めないといけないね。ね、レイジングハート」

自分のデバイスにしか聞こえない程度の声でゆっくりと呟くなのは。

『はい、頑張りましょうマスター』

それに答えたのは当然レイジングハートだった。

一方エリオとキャロはシグナムの居る訓練所に来ていた。廃ビルの上空にはシグナムが居り、周りには大量のガジェットが出現している。

ガジェットが一斉にシグナムを攻撃する。まずはエネルギー弾の一斉射撃だった。一発一発が細かい弾をシグナムは一瞬で全てを斬る。そしてシグナムから見て右側に居るガジェットの群に突っ込む。ただ斬る、細かく斬る、大ぶりに斬る、その場の状況を素早く判断しながら次々と撃破していく。

「む？　悪いが此処で終わらせて貰う」

上空からエリオとキャロの姿を見たシグナムは、傍に居るガジェットに向ってそう言った。

「飛竜一閃！」

叫んだ瞬間に右手に持っているレヴァンティンが鞭の様になり、不規則に動く。それは届く範囲内の敵を蛇の様に追いかけ次々と撃破していき、あっという間に全機撃破した。

「凄い・・」

そんなシグナムの戦いを見て、エリオとキャロは素直な言葉を言った。前から隊長陣の強さを知っていた二人だが、やはり自分達とはレベルの差がありすぎる為、そんな言葉が出たのだろう。

シグナムは二人の目の前に降りて口を開く。

「何故此処に居るのだ？　私の訓練を見ても余り面白くないぞ」

「いえ、凄く勉強になります」

取り敢えず後半の言葉から返したエリオはキャロの方を向き、説明を頼む素振りをする。頷きながらキャロは質問に答える。

「実は幻騎士の事について聞きたいのですが・・」

幻騎士と言う言葉を聞いた瞬間にシグナムの表情が戦場に居る時と同じになった。二人は背筋に悪寒が走るが、一文字も逃さない様に

しっかりと耳を立てる。

「私も昔の記憶が曖昧でな、細かくは覚えていないのだが、あの騎士はかなりの強さだった。幻覚から生まれる有幻覚。有幻覚から生まれる幻覚。真実の中に潜む嘘。嘘の中に潜む真実、これがあ奴の口癖だ」

大量の幻覚と嘘という単語を並べられての説明は分からなかったのか、エリオとキャロは首を傾げて必死に意味を求めている。その様子を見たシグナムは口元を上げて説明を始める。

「まあ、簡単に訳すと幻覚から有幻覚が生まれ、有幻覚からただの幻覚が生まれる。真実には嘘しか無く、嘘には真実がある。私は説明するのが余り得意では無いからな、私に求めるならこれくらいで我慢しろ」

未だに首を傾げ、デバイス達にも協力を求めている二人に向ってそう言ったシグナムは、訓練を再開する為に飛んで行った。後に残されたのは、頭を悩ませる二人とそのデバイス、小さな竜だった。

「ヴィータ副隊長！」

スバルは赤い髪を三つ編みにしている小さな少女の後ろ姿を見たので、大声で呼んだ。呼ばれたヴィータ本人は非常に面倒臭そうな顔をしている。

「ああ？　どうしたんだスバル、言っとくがあたしは忙しいんだ、

用件ならとっとと言え」

その気迫に押されながらも、負けない様に踏ん張りその気迫から耐える。

「実は、幻騎士について聞きたいんですが！」

シグナムと同じく幻騎士を耳に入れた瞬間に、表情が戦場に居る時になる。

「あたしは今一昔のことを覚えていなくてな・・・まあ、あいつのことは何となく覚えている。実在する幻覚と実在しない幻覚を使って戦う嫌な野郎だ」

舌打ちをして説明するヴィータに益々押されていくスバルだが、何とか口を開く。

「あの、幻騎士がどうやってその幻術を物にしたかご存じですか？」

「ああ！？　んなもんあたしが知る訳ねえだろ！　ったく、嫌な奴のことを思い出させやがって」

スバルの言葉に怒鳴って返したヴィータはブツブツと呟きながら仕事に戻って行く。廊下に残されたスバルは、今になってヴィータの気迫に負けたのか、ヘナヘナと床に落ちる。

「と、取り敢えず、ティア、の所に行こ・・」

やっとのことで出た言葉はこれだった。

ティアナはフェイトにお姫様抱っこをされており、顔を真っ赤にしていた。こうなった理由は単純であり、以下の通りだ。

「フェイトさん居るかしら？」

フェイトの執務室に向って走っているティアナは自分のポケットにあるクロスミラージュに聞く。

『居ると思います』

簡単で曖昧な返事に苦笑しながらもティアナは走り続けていた。そして曲がり角に着た瞬間に前から急にフェイトが現れ、ティアナが声を上げる前に既に二人は激突してしまった。

「キャ！」

「ソニックムーブ」

ティアナの小さな悲鳴と、フェイトの魔法名を言う凛々しい声が同時にした。フェイトは体制が崩れながらも素早く片足を地面に付けて、そのまま地面を蹴る。背中から地面に落ちているティアナに回り込み、両手をティアナの背中に当て、抱っこする。

ぶつかって僅か数秒でフェイトがティアナをお姫様抱っこしている状態になった。

「大丈夫、ティアナ？」

耳元に口を近づけそっと囁くフェイトの姿は、全ての女性を魅了する者だ。当然その魅了効果はティアナにも効いており、顔を真っ赤

にしていた。それをフェイトに見えない様に顔を下に下げる。

「どうしたの、ティアナ？　もしかして何処か怪我した？」

余りにも引力のある声に、もうティアナの顔は真紅になっている。その状態で一生懸命首を横に振るティアナを見て、フェイトはホッと息を吐く。

「もう、危ない事したら駄目だよ。ティアナの体は、もう一人の物じゃあ無いんだから」

どう考えてもティアナの体に子供が居るとしか思えない発言をフェイトは平気で呟く。

まあ本人は、これからそろそろスカリエッティが動くかもしれないから万全の体で居ないといけない、と言ってるつもりなのだ。しかし、ティアナの耳には自分にフェイトの子供が出来ていると聞こえてしまい、冷静な判断等出来ずにお腹に手を当ててしまう。

「あ、あの、フェ・・・・フェイトさん」

「ん？　何？」

必死に口を開くティアナとは正反対のニコニコしているフェイト。

ティアナは必死に理性を取り戻そうとしており、頭の中では理性と本能の戦争が起きている。しばらく深呼吸を行い、フェイトの目を見ずに天井等を見て、落ち着かせたりしていたら、ティアナの表情が何時も通りになった。

「ぶつかってしまってすいません。あの、フェイトさん、そろそろ降ろして頂けませんか？」

そう言われたフェイトは大切にティアナを降ろして、服に付いている可能性のある埃を手で叩く。

「大丈夫なら良かったよ。でもあんなに慌てる何てどうしたの？」

「実はフェイトさんにお願いがあって、そちらに向っていた途中なんです」

ティアナが、と言うよりＦＷが個人的に隊長にお願いとは珍しい事だ。不思議に思ったフェイトは次の言葉を待った。その雰囲気を読み取ったティアナはフェイトが口を開く前に、内容を言う。

「新しい魔法の自主練習をやりたいので、その監督をお願いしたいと思って。許可はなのはさんから頂きました」

「あ～」

内容を効いたフェイトは納得したようだ。右手を拳にして左の手の平に当て、自分のスケジュールを思い出す。

「うん、大丈夫。慌ててたってことは今から練習したいんだよね。それじゃあ早速シミュレーターの所に行こっか」

いきなりの頼みにあっさりと答え、尚且つ今から訓練を見てくれる事にティアナは驚きながらも頷く。それを合図に二人は歩きだした。

「所でティアナは、何を訓練したいの？」

「実体がある幻術の習得がしたくて。フェイトさんは幻騎士という人物のことをご存じですか？」

練習内容の事に少し驚いたフェイトだが、すぐに質問に答える。

「うん。シグナムとヴィータから一回だけ聞いた事がね。凄く強い幻術使いなんでしょ？」
「あたしも良く分からないんですが、そうみたいです。ほんとはサンからもっと聞きたかったんですが、あっちも忙しいみたいで」
そう言われたフェイトはこの前サンからの通信内容を思い出す。確かにサンはカリムへの会談に同席しなければならないと言っていた。
「でもサンがそれだけな筈無いよね。なのはの言葉の影響かな？」
ティアナは当たっている推理に驚くよりも、家族の絆を改めて実感した。
「はい。簡単に力を手に入れるよりも、必死に努力して手に入れた力の方がずっと活かせる。だからサンは言わなかったみたいですね」
「ほんとにサンらしいな」
二人で笑い合いながら、歩いて行った。

フェイトとティアナが訓練場に来た時、スバル、エリオ、キャロ、シグナムがその場に居た。そして三人は自分達が聞いた話をティアナにそのまま話す。
「幻覚から生まれる有幻覚。有幻覚から生まれる幻覚。真実の中に潜む嘘。嘘の中に潜む真実・・・・」
ティアナが特に気になったのがその言葉だ。文章として問題がある

様な、無い様な不思議なものだったので自然と声に出していた。この意味を必死に考えるティアナだが、何となくしか理解できなく、更には訓練方法も分から無いままなので、心の中で溜息を吐く。

「取り敢えず色々やってみようか？　私は幻術って良く分からないんだけど、魔力の消費量が激しいんだよね。だから、まずは少しずつ幻影を出していこうか」

「確かにテスタロッサの言う通りだな。良く理解していない魔法を見つけ出すなら、それが賢明だろう」

二人の隊長の言葉に頷いて、ティアナは自分の姿をした幻影を生み出す。しかし、他に何をして良いのかが分からずに、何時もの幻影だった。

「えと、他に何をすれば良いんでしょうか？」

何時もと全く変わらない幻影に何を加えれば良いのかを皆に聞くが、誰も分からない様でお互いの顔を見合わせる。

「ん～、サンは魔力配分技術と演算能力が必要って言ってたみたいだから、それを使った幻影って考えるのが一番自然かな」

「なるほど。でも、それだけじゃあ難しい魔法としか分からないですよね」

フェイトの意見に納得したスバルだが、確かにそれだけでは難しい魔法としか分からない意見だった。

「結局の所、様々な幻影を作って試すしか方法が無いのだろう。まあ、気長にやることだな」

何となく嫌な方向で予想していた練習方法を聞いたティアナは頬を引きつらせ、スバル、エリオ、キャロは皮肉な言い方をするシグナムに苦笑いするしかなかった。

「じゃあティアナ、頑張ろうか」

「は、はい」

笑顔のフェイトを見て少し頬を染めながらも、しっかりと返事をした。

それから数時間後、既に辺りは太陽の光は無く月が見えており、その光がティアナとフェイトを照らしていた。

「ハァ、ハァ」

ティアナは息をかなり乱しており、手を膝に当てて休憩している。フェイトは合間に休憩を挟み練習をさせたが、やはり疲れた様だ。

「今日は此処まで。お疲れ様」

ティアナの前にスポーツドリンクを渡しながら言い、隣にゆっくりと座る。ティアナもそれに釣られて地面に座り、ドリンクを飲む。

「今日はありがとうございました」

「ううん、大丈夫。私はティアナの上司だからこれくらいのことは当然だよ」

何時もの優しい笑顔ではなく、女殺しのスマイルでティアナの方を向く。今日何度目か分からない赤面をしてしまうティアナは今日のフェイトの行動を思い出す。

後ろからそっと背中を支えてくれたり、優しく微笑む。また、先程の様な小さな優しさをしてくれる度に笑顔になるフェイトに年頃のティアナ自然とは惹かれてしまい、理性で落されない様にしているが、やはりフェイトの魅力を次々と知ってしまう。

「？　どうしたのティアナ、急に黙りこんだりして」

「い、いえ。何でもありません」

自分の顔を覗き込むフェイトは先とは違った美しさを持っており、そんな姿に動揺しながらも返事をした。ティアナが動揺しているのは分かったが、理由までは分からないフェイトは首を傾げたが、聞かないことにした。そして立ち上がりながら言う。

「そっか、じゃあそろそろ帰ろう。明日の為に沢山食べて沢山寝ないといけないね」

言い終わったフェイトはそっとティアナの前に手を差し出す。その手をゆっくりと手を取った。フェイトは自分の手を握る手を引っ張り上げて立たせる。

「じゃ、帰ろっか」

「はい」

二人はこれからのことについて話しながら、緊急本部の建物へ向った。

「ねえ、フェイトちゃん」

フェイトが自分の部屋に入った途端に、腕を組んで般若の様な顔のなのはが視界に映った。怒られる覚えが全く無いフェイトは恐る恐るなのはに聞く。

「えっと、どうしてなのはは怒っているのかな？」

「この前、スバルにキスしたみたいだね」

キスという言葉を聞いても分からなかったが、リンゴの口移しを思い出して手をポンっと当てる。

「あれはスバルの体調が良く無かったからだよ。決してスバルに恋愛感情がある訳じゃあ無いよ」

フェイトの返事に更に腕を組む力を強くし、青筋を立てる。

「へぇ？　キスしたことは否定しないんだ？」

「だからあれはキスじゃ無くて口「フェイトちゃんの馬鹿！」ええ！？」

何処かずれた言い訳をするフェイトになのはは目に雫を出しながら隣にある枕を投げる。投げられた本人は自分の何が悪いのかが分からず、枕を回避しながら驚愕の声を上げた。

「信じられない！　確かに恋愛感情が無くてもキスはキスなんだよ

!?　せめてすぐ後に言ってくれれば良かったのに、どうして言わなかったの!?」

なのはの叫びを聞いたフェイトはようやく怒っている理由が分かった。単純でとても愛らしい理由だ。

「嫉妬したの？　なのは」

急に余裕そうな表情と口調になったフェイトに顔を真っ赤に、頬を膨らせ、そっぽを向いて呟く。

「そ、そんなんじゃないもん」

その可愛らしい反応を見たフェイトの次の行動は決まっている。そっぽを向いているなのはの頬をゆっくりとこちらに向けて、口を開く。

「私の目を見て答えて。嫉妬したんだよね？　なのは」

全てを見透かされた様なその真紅の瞳に見つめられたなのはは、嘘を吐く事等出来ずに小さく頷く。それを見たフェイトは耳元で囁く。

「何で嫉妬したのかな？　私がスバルとキスしちゃったから？」

分かりきっている質問を態と答えさせるフェイトを必死で睨むなのはだが、涙目になっており全く怖さが感じられない。

そして、動揺しないフェイトに、恥ずかしながらも答えてしまう。

「だって、私はフェイトちゃんのことが大好きで、愛してて、とっ

ても大事で大切な人。その人が別の人にキスしたなんて、すっごく胸が締めつられて苦しい、だ・・から、もう、私以外、の人とキス、何て、しないで」

自分の気持ちを素直に伝えていたなのはだが、途中で悲しくなったのか段々涙声になっていた。そんななのはをフェイトは自分の胸に抱き寄せる。

「安心して、私が恋する相手はなのはだけだから。何度でも何十回でも言う。私はなのはを愛してる。この気持ちを信じて欲しいな・・」

「信じるよ！　でも、フェイトちゃんってすっごくカッコ良いし、魅力的だし、優しいし、他にも沢山あるけど、兎に角モテるんだもん！　私だって、嫉妬なんてしたくないけど、それでもこの気持ちは出てきちゃうの！」

フェイトは自分の胸から上目使いで見上げて来るなのはの言葉を一文字残さず受け止め、そして凛と呟く。

「ごめんねなのは。でも、これが私の地だから、これはどうしようも無いんだ。これからは気を付けるから、許して欲しい」

そう言い終えて純粋な頬笑みをするフェイト。そんなフェイトを見たなのはは、目の前に居る人物が本当に憎かった。自分の弱さや拒否できない部分に漬け込んで来るフェイトが嫌いで、大好きなのだ。

「ずるいよフェイトちゃん。私がその顔に弱いって知ってるでしょ・・・」

「それを含めて謝ってるんだよ。だからこの事件が終わったら何処かに連れて行ってあげる。これで許してくれない？」

自分の髪を撫でながら囁いて来るフェイトの頼みに、なのはは絶対に断れない。

「じゃあ、サンとヴィヴィオも一緒に四人で行こうよ。私たちが満足出来ないと許さないから」

そんなのはの唯一出来る意地悪は、これだけだった。

そして二人は皆で行く為にも、ヴィヴィオを取り戻す決意を一段と強くする。

ティアナが訓練を初めて既に四日が経ち、今日は九月の十八日。

それまで、ティアナは兎に角様々な幻影を出していた。魔力をより沢山使った幻影。表面だけに魔力を流した物、細かな演算を重要とした物、魔力配分に注意して作った物、様々な物を作ったが未だに完全な実体化出来る物はなかった。

明日がサンの誕生日でもあるが、皆そんな事は頭の中には無く、目の前で幻術を作り出しているティアナに目も頭も行っていた。そう、今回は幻術にリンカ―コアを作り、操作するという今までで一番期待出来る案だったのだ。

「ふぅ」

ティアナは一回だけ息を吐いて目を閉じて魔法陣を展開させ、口を微かにだけ動かし、独り言を呟いている。今回の幻術の注意点や重要項目を確かめているのだ。

その数秒後に幻術で出来たティアナが現れた。

「どう、ティアナ？　成功した感じがした？」

「まだ分かりません。取り敢えず試してみますね」

フェイトが質問をして、それを返したティアナが幻術にスフィアを展開させた。そのスフィアは銃口から放たれ、木にぶつかった瞬間に爆発した。

「もしかして・・・・」

「成功・・・・」

「なのかな？」

上からスバル、エリオ、キャロは土煙が舞っている場所を見ながら呟いた。他にもなのは、ヴィータ、シグナムが居るが、声は出さずに表情だけで驚いている。そして土煙が収まり、段々と視界が良くなると、穴が空いている大きな木があった。

「や、やったー！」

成功した喜びの余りに飛び跳ねながら声を上げるティアナ。それを見たスバルとエリオ、キャロは成功したと分かり、ティアナと同じ喜び方をする。なのはとフェイトが一緒に微笑んでいる隣で、シグナムとヴィータはデバイスを構えていた。

「ティアナ」

シグナムとヴィータの二人の声が同時にしたので、呼ばれた本人は何かと思いそちらを見ると、バリアジャケットを展開している二人

が居た。嫌な予感しか感じないティアナだが、恐る恐る聞いてみる。

「あの、どうしてお二人はデバイスを構えているのでしょうか？」

「そんなもの決まっているではないか」

「おめぇと戦うからに決まってんだろ」

その言葉を聞いたティアナは滝の様に冷や汗を流す。そう、三人から聞いた話だとシグナムとヴィータは幻騎士に余り良い印象を持って無い。そして幻騎士と同じ能力を持った人物が近くに居るとなると、ベルカの騎士として自然と武器がそちらを向くのだ。当然二人と戦える程、能力を磨いていないティアナは戦いをやりたくは無い。

慌てスバル達の方を見て助けを求めようとするが、スバルは顔を背けられ、エリオとキャロは同情の目をしていた。

今度はなのはとフェイトの方を見るが、二人は見つめ合いながら恋人繋ぎをしていた。

「ね、ねえフェイトちゃん。フェイトちゃんにも人に教える才能が有るみたいだから、今度一緒に誰か教えない？」

「ありがと、なのは。でも私は才能なんて無いよ。全部なのはを真似してから教えたんだもん」

ティアナからすればかなりの爆弾発言だったが、それを無視して二人は自分達の世界に入り、周りの声や音を全く受け入れなかった。

「私の、真似？」

実感がいまいち分からない様でなのはは首を横に傾げる。

「そう、なのはをずっと見てきた私にしか出来ない、なのはの真似。教え子の事を考えて、大切にして育てる、優しく厳しい教導・・・・」

「フェ、フェイトちゃん・・・・」

甘い囁きと告白にうっとりとしてフェイトを見上げ、フェイトの名前を艶のある声で呼ぶなのは。

ティアナは二人が全く助けてくれないと判断したので、他に誰か居ないか辺りを見渡すが、居ない。

「準備は良いかティアナ」

「な～に、一人ずつだから安心しろ」

「え～と、あたしに選択肢は「無い」ですよね～」

反論しようとしたがあっさり却下されて、諦めてクロスミラージュを構え、幻術を展開した。

「はあああ！」

新人幻銃士と古代ベルカの騎士が激突した。

この日のティアナはボロボロになっており、シグナムとヴィータが艶々した顔になっていたというのは余談である。

幻銃士ティアナ（後書き）

今回は最近出番の無かったＦＷ陣を書きたくて、書いてみました。
そして、いよいよクライマックス直前まで来ました。

これからも、この小説のことをよろしくおねがいします。

それと、誤字脱字、アドバイス、もっとこうした方が良い、等ありましたら感想にお願いします。

九月十九日（前書き）

投稿遅れましたマジですいません。
最近リアルで忙しいというか、人間関係を大事にするために遊んでいたとか……すいません、マジ言い訳です。

それと点についてですが、私は・を使っていますが、本来は…の方が良いようです。前から知ってはいたのですが、報告しなくてもいいかな～何て思ってました。ですが気になる方もいらっしゃるかもしれないので、この小説で、点は・で使わせて頂きます。次小説を書くときは…を使って書きたいです。こちらの方が色々と便利だ……

追伸・前の前書きで書いていた悩みは綺麗さっぱり忘れましたｗｗ
理由としては色々な悪い点を書いて頂いたからです。これからもどんどん悪い点をお願いします（作者はドＭではありません。さすがに十回くらい悪い点だけの感想だと、へこんでしまいますｏｒｚ）

九月十九日

九月十九日、ミッドチルダ上空に時空管理局、次元航行部隊、L級巡回船アースラが飛んでいた。

そして、コントロールルームにはロングアーチスタッフのルキノが居り、周りにある操縦システムを巧みに使用している。ルキノの前には大きなモニターがあり、そこにはフェイトの姿が映っていた。

「ルキノ、コントロールは大丈夫？」

『はい、フェイトさん。この子の、アースラのことは、隅から隅まで知ってますから』

そう答えながらも、しっかりと操縦を行っている。

「そう」

フェイトが居る場所はアースラの会議室だ。そしてそこに居るのはフェイトだけでは無く、なのはとティアナ、キャロ、ロングアーチスタッフのアルトも一緒だ。

「アルトさんとルキノさんが」

「うん、アルトは療養中のヴァイス君に代わって、ヘリパイロット」

「ルキノは、アースラの操舵手」

二人の意外な一面に少し驚いているティアナに、なのはとフェイトはそれぞれの仕事場を言う。

「アルトさん、ヘリのライセンスなんてお持ちだったんですね」

キャロがアルトの方を向いて聞いた。

「うん。元々ヘリは好きだったし、ヴァイス陸曹にも色々教えて貰ってね」

「で、ルキノさんも」

「この船、私の前の職場なんだ。艦船操舵手になりたくてね、此処で事務員として研修しながら操舵ライセンスを取ったんだ」

そんな会話をしていると、会議室のドアが開いて、はやてとグリフィスが入室して来た。

「ああ、みんなお揃いやな」

はやては歩きながら部屋を見渡しながらそう言い、椅子に着席する。その椅子の後ろにグリフィスが立つ。

「ちょうどよかった。今、機動六課の方針が決まったところや」

はやては後ろに居るグリフィスの方を向いて頷く。それを合図にグリフィスは現状の説明を始める。

「地上本部の事件への対策は、残念ながら相変わらず後手に回っています。地上本部だけでの事件調査の継続を強硬に主張し、本局の介入を固く拒んでいます。よって、本局からの戦力投入は、まだ行われません。同様に、本局所属である機動六課にもその捜査情報は公開されません」

「そやけどな、私達が追うのはテロ事件でも、その主犯格としての

ジェイル・スカリエッティでもない。ロストロギア・・・・レリック。その捜査線上に、スカリエッティやその一味がおるだけ。そういう方向や。その過程において誘拐された、ギンガ・ナカジマ陸曹と、なのは隊長とフェイト隊長の保護児童、ヴィヴィオを捜索、救出する。そう言う線で動いて行く。両隊長、意見があれば・・・・」

グリフィスの説明だけを聞くとこの事件には介入出来ない機動六課だが、それをはやてはレリックの捜査を上手く利用して、この事件に介入するというのだ。

「理想の状況だけど・・・・また無茶してない？」

「大丈夫？」

なのはとフェイトは非常に心配そうな顔をしている。確かにこの事件に介入出来るのは、嬉しい事だが、同時にはやてが無茶をしているとなると、自然に心配になるのだ。

「後見人の皆さんの黙認と協力はちゃんと固めてあるよ、大丈夫。何よりこんな時のための機動六課なんや。ここで動けな、部隊を興した意味も無い」

二人ははやての決意ある目を見て納得したのか、頷く。

「了解」

「方針に異存はありません」

「よし。ほんなら、捜査出動は本日中の予定や。万全の体制で、出動命令を待っててな・・・・」

会議が終了すると、はやてとグリフィスは事件の事での確認等、ラ

イトニングの二人は個人的な理由で会議室から出て行った。

「ティアナ、今日スバルは・・・・・」
「はい、今日は本局の方に・・・・・でも、午後にはこっちに合流できるそうです。今日は最終確認みたいです」

やはり昨日も元気だった人物が検査となると、やはり良い顔は出来ない様だ。

しかし、悲しい顔等していられない状況だったので、二人はすぐに仕事の時の表情に変え、お互いのやるべき事を行い始めた。

本局の検査室に居るスバル。それをガラス越しから見ているマリエルは、検査の報告をする。

「うん、神経系は完全回復してるわね。全力で動かしても痛みはないはずよ」
「はい」

スバルはゆっくりと立ち上がり、思いっきり左手でストレートを打つ。そして全く違和感無く打てたのか、左手を見て拳を握る。

「うん、ありがとうございます。マリーさん」
「後は、マッハキャリバーだね」

「・・・・はい」

落ち込んだ表情をしてそっと頷いた。地上本部襲撃の時に戦闘機人戦で壊してしまったのだ。壊したのが戦闘機人なら此処まで落ち込まないが、スバルが理性を失いマッハキャリバーの事を考えずに無茶させたから壊れたのだ。

移動してマッハキャリバーが居る部屋に来たスバルは、目の前で浮かんでいる宝石を見つめながら口を開く。

「ごめんね、マッハキャリバー・・・・あたしのこと、怒ってるよね・・」

『怒る、という感情が、私にはおそらく存在しません。心配は無用です』

そう言われたが、やはりスバルは心が痛む様だ。ゆっくりと頭を下げて目を瞑り、マッハキャリバーとの出来事を思い出す。

「マッハキャリバーは、ＡＩだけど心があるって。一緒に走る相棒だって言ったのに・・・あたしあの時、マッハキャリバーの事、全然考えてなかった。自分勝手に、道具扱いして・・・・こんなに傷付けちゃった」

『いいえ、問題あったのは私の方です。あなたの全力に応えきれなかった。私の力不足です』

その時ドアが開き、マリエルとシャーリーが入って来た。

「あっ、ごめん。大事なお話し中？」

マリエルはスバルの雰囲気を読み取り、一旦外に出ようとしたが、その前にスバルが言う。

「いえ・・・・」
『反省会です』
それを聞いた二人は中に入る。
「シャーリーさん、もう良いんですか？」
「六課が大変な時期だし、デバイス達の面倒も見ないとだし、寝ていられないよ」
シャーリーの目には強い意志が宿っていた。ヴィヴィオが攫われたのは自分の所為だと言い、人に甘えていた自分を捨てて、皆の役に立ちたいと思っているのだ。
「ねぇスバル、マッハキャリバーね、修理ついでにって、強化システムのプランを自分で考えちゃったのよ」
「えっ？」
不思議そうな顔をするスバルに二人は説明する。
「アウトフレームの強化とか、走行強度のアップとか……」
「かなり重くなるし、扱いづらくもなるから、スバルに聞かないとって言ったんだけど・・・・」
モニターに映っているマッハキャリバーのプランをそのまま呟く。
「魔力消費１．４倍、本体重量２．５倍やれます！　この程度なら確実に！」
元気に返答してきたスバルに、二人は頬笑んで頷いた。

「じゃ、このプラン採用。良かったね、マッハキャリバー」
『ありがとうございます』
その後マリエルとシャーリーはプランの為に必要なパーツを貰う為に一旦部屋を出て行った。
『もう一度私にチャンスをください。今度は必ず、あなたの全力を受け止めます。あなたが、どこまでも走れるように』
「・・・・うん。今度は絶対、一緒に走ろう。マッハキャリバー」
マッハキャリバーの優しく、強い言葉に、微かに涙を流しながらもしっかりと答えた。
アースラの廊下で歩いているなのはは、隣に浮いているレイジングハートの方を向いて仕事の事を聞く。
「訓練データの移行、大丈夫だった？」
『問題なく完了しました』
暫くの間アースラで生活することになったので、当然訓練もアースラで行われる。その為、機動六課にあるデータをこちらに移したのだ。その作業も先程終わった様で、既に過去形になっている。
レイジングハートの報告を受けたなのはは小さく頷く。
「あっ、なのはさん、レイジングハート」

なのはの前にリィンが現れ、なのはは昨日フェイトから聞いた話を口に出す。

「リィン。昨日から既に元気になったんだっけ？」

「はいです。おかげさまで完全回復です」

「そっか」

リィンの元気な言動を見て、安心したなのはは頬を緩めて、再び歩き出した。

「シャーリーから、クロスミラージュ達のファイナルリミッター解除を頼まれたですよ？」

「うん、私がお願いしたの」

なのはがリィンの前に手を出すと、リィンはその上に乗り、そのまま肩まで持って行き座らせる。

「本当は、もう少し慎重にいきたかったんだけど、そうも言ってられない状況だからね」

「でもみんな、ちゃんと使いこなせるですよ」

「だね」

頷いたものの内心は複雑だ。本来ならもっと鍛えてからの、ファイナルリミッター解除の筈が、現状の所為でこんなに早くになってしまった。

「なのはさんとレイジングハートの方は・・・・」

「ん？」

なのはが考え込んでいるとリィンが俯かせながら、呟いてきたので横眼で見る。

「ノーマル状態のエクシードはともかく、ブラスターモードは、やっぱり危険ですから・・・・」

それを聞いてリィンの表情の意味が分かったので、なのはは返す。

「使わないよ、ブラスターは。わたしとレイジングハートの、ほんとに最後の切り札だからね」

『その通りです』

「エクシードだけでも十分すぎる威力があるんだし、それで最後までしっかり決めてみせるよ」

『はい』

そしてなのははキリッとした表情になり、娘のことを考える。

【もうすぐだよ、なのはママが、すぐに助けに行くから・・・・】

アースラの訓練室にバリアジャケット姿のエリオと、機動六課の制服のままのシグナムが居た。両者はお互いにデバイスを構えており、緊迫した空気を出している。

少し沈黙が流れ、先に動き出したのはエリオだった。

ソニックムーブでの接近をして、シグナムに攻撃をする。しかし、それを読まれていたのか弾き飛ばされる。

「うわ！」

「はあぁああ！」

エリオは素早く体制を整え、接近してくるシグナムにストラーダを向ける。

「ストラーダ！」

エリオが叫んだ瞬間に、ストラーダの噴射口から魔力のエネルギーが噴射され、シグナムに向って飛ぶ。

両者がぶつかり合い土煙が舞う。

エリオが後方に飛ばされた一方で、シグナムの声は全く聞こえない。

「はぁ、はぁ」

次に来るかもしれない攻撃に備えて、息を乱しながらもしっかりとストラーダを構える。

ピピピ

「ああ、時間だ」

土煙が収まったと同時に、終了のアラーム音が聞きこえたので、シグナムはレヴァンティンを下に降ろす。

「は、はい」

同じくエリオもストラーダを降ろす。二人の戦闘が終わったのを見計らったのか、フリードがエリオの肩に乗った。

「相変わらず何を教えてやれる訳でも無いが、大丈夫か？」

「大丈夫です、色々盗ませて貰ってます」

素直な返事にシグナムは口元を上げる。

「っふ、生意気な。フェイト隊長に心配かけてもいかん。あんまり無茶するなよ」

そう言いながらレヴァンティンを待機状態にさせ、訓練室から出て行った。

「ありがとうございます」

エリオはシグナムの後ろ姿を見ながら礼を言い、頬刷りしてくるフリードの頭を優しく撫で始めた。

訓練室から出たシグナムは、すぐに近くに誰か居ると気配で察知した。そちらを見ると、フェイトの姿があった。

「テスタロッサ、お前か」

「どうも、家のエリオがお世話になってます。シグナム師範代」

態とらしく師範代を付け、呼ばれたシグナムは、何とも言えない表

情になる。

そんな状態が少し続き、その空気が嫌だったのか歩き始めたシグナムは、隣に着いてきているフェイトに言う。

「すまんな、お前の判断を仰がなかった」

「エリオが言い出して、あなたが受けてくれたんですから、良いですよ、私もなのはも。ちょっと寂しいですけど」

親指と人差し指を空けて、ちょっとの部分を示した。ちょっとという割にはやけに広く空いたその指を見て、溜息を吐きながら言う。

「エリオなりにお前に、父親に心配かけたくない一心。勿論母親である高町にもだ。察してやれ」

「ふふ、冗談ですよ。大丈夫です。それで、エリオ成果の方はどうです？」

意地悪そうに言ったフェイトにシグナムは呆れた顔をするが、すぐに何時もの凛とした表情に戻り、質問に答える。

「悪く無い、というより、あの成長速度には驚かされるな。基礎しか知らん子供の割に、見切りと覚えの早さが凄まじい、思考と行動の瞬発力もある」

最もサンと比べられたら、全然だがな、と付け足した。

「サンは既に私達を抜かしてますからね。でも、他と比べると凄く良いと思いませんか？　なのはがそういう風に教えてくれてるんです。基礎と基本でしっかり固めた頑丈な土台と、摸擬戦から学ぶ瞬間の判断力と応用力。今まで積み重ねてきた練習と経験は、あの子

達が、これからももっともっと強くなっていく為の準備。皆が自分で思い描いた通りに、昨日よりもっと、今日よりずっと、強くなっていけるように・・・・って」

真剣に、というより少し怒った表情で言ったフェイトに、シグナムは軽く笑う。

「ッフ、本気にするな。サンと比べたのは冗談だ」

「シグナム!?　あなたは時々そういう冗談を!」

珍しく女性らしく怒るフェイトを無視して、シグナムは歩き続けた。だが、しっかりと口元は上がっている。

同時刻ヴィータは医療室のベッドに横になって居り、シャマルの検査を受けていた。

「シャマル、まだか?」

「うん、もうちょっと・・・・」

「仕事溜たまってんだよ。さっさと済ませて戻らねーと」

「あと少しだから、じっとしてて」

ヴィータにはヴィータの意見があったが、シャマルにも医師として、湖の騎士としての思いがある。

「傷の治りが遅くなってんのとか、蓄積ダメージが抜けづらくなってんのなんて、もう何年も前から分かってることじゃんかよー」

「・・・・再生機能だけじゃないのよ。守護騎士システムそのもの

の異常も、不安なの。私たち同士の相互リンクも弱くなってるし、緊急時のはやてちゃんからのシステム復旧とか、魔力供給も、だんだん出来なくなってきてる」

不安な表情で必死にモニターを打つ。

「別に、そんなの日頃からしっかりやってりゃ何の支障もねぇ。もういいな、行くぞ・・・・」

「ヴィータちゃん・・・・・」

ヴィータはベッドから上がると、上着を着ながら、呟く。

「あたしらの身体の異常さ、多分これ、守護騎士システムの破損とか異変とか、そういうんじゃねぇと思うんだよ。あたしたちが闇の書の一部だった頃から、心のどこかで望んでたことが叶い始めてんだ。・・・・死ぬこともできずに、ただずっと生きてきたあたし達が、最後の主の、はやての下で、限りある命を大切に生きられるようにって・・・・。初代リインがあたしたちにくれた贈り物、それの続きさ。いいじゃんか、怪我したら中々治らねぇのも、やり直しがきかねぇのも。なんか普通の人間みたいでさ」

「シグナムもザフィーラも同じこと言うのよね。最初で最後の私たちの命。だけど精一杯使って生きればいいって」

自然に落ち込んでしまうシャマル。自分は前線に出ないので余り、死、という瞬間は無いのだが、ヴィータ、シグナム、ザフィーラはその瞬間が多々ある。

「シャマルは？」

「私も同じよ。危険は怖くないし、永遠になんて興味ない・・・・」

「でもね。私たちの優しい主、はやてちゃんの事と同じくらい、私はヴィータちゃんやシグナム、ザフィーラ達の事が心配。みんなで一緒に、誰も居なくならずに、はやてちゃんとリィンちゃんの事、ずっと支えていきたいから・・・・」

モニターを消したシャマルは、ヴィータの傍まで歩き、屈んでその強いまなざしを持つ、小さな体を優しく抱きしめる。

「なら心配ねぇ。二代目祝福の風が、リィンが力を貸してくれる。あたしとシグナムは絶対に落ちねぇ。ザフィーラもきっとすぐに目を覚ます。十年の間に、守らなきゃならねぇもんがずいぶん増えちまってな。キッチリ全部守って、ちゃんと元気で帰ってくるさ。心配性で料理の下手な湖の騎士を、泣かせたりしないようにな・・・・」

「・・・・ばかね・・・・」

そっと抱きしめてくれるヴィータの優しさに、シャマルの目には微かに涙が出た。

「ふぅ」

シグナムとの練習を終えたエリオは一息吐いて訓練場を出た。するとすぐ目の前にキャロが居た。

「キャ、キャロ？」

急に目の前にキャロの姿があったので面食らってしまう。

「えっと、エリオ君疲れてるかな、って思って・・・。これ、作ってみたんだけど・・・・」

エリオの前にタッパーが出され、出した本人の顔は凄く顔が赤い。エリオは一瞬自分に気があるのか？　と思ったのだが、単に自分の料理の評価が気になっているのだと判断して、心の中で溜息を吐く。勿論キャロからの差し入れは嬉しいのだが、やはり違う立場から受け取りたいという気持ちがあるのだ。

「えっと、開けていいかな？」

その質問にキャロは何度も首を振って肯定する。

タッパーの中に入っていたのはレモンのはちみつ漬けだった。

「これ、どこかで・・・」

「なのはさんがよく、仕事中のフェイトさんに上げてるのを見てたから。何を上げてるのですか、って聞いたらこれだったの。疲労に効くみたいだから」

エリオは、フェイトの机によく来るなのはの理由に納得して「なるほど」と呟きながらも細く切られたレモンを掴み、そのまま口に運ぶ。

・・・・・・・

物凄い覇気を出して自分を見て来るキャロに、エリオは苦笑しながらも喉を通った物の感想を言う。

「おいしい」

たったこれだけのありふれた言葉だが、キャロにとってはテストで百点を取った気分になれる。

「ほんと!?　頑張って作った甲斐があったよ」

笑顔でそう言ったキャロに思わず見惚れてしまうエリオ。しかしその顔は赤くなっておらず、むしろ真剣な顔だった。

そんな表情にじっと見つめられているキャロは恥ずかしくなり、モジモジと体を動かせ、両手の人差し指を小さく当て合っている。

いつもの二人の出す空気とは違う。

その空気を破ったのはティアナだった。

「あんた達こんな所につっ立って何やってんの?」

「うわ!?」

エリオとキャロの叫び声が重なる。二人は見えない所からの声に驚いたのだ。

「えっと、ティアさん。どうしたんですか?」

「あんた達を探してたのよ。そろそろスバルがこっちに来るから一緒にどうかって誘おうと思ってたんだけど・・・もしかして邪魔だったかしら?」

先程の雰囲気をネタにニヤニヤ笑いながら質問した。二人は頬染めながらも、ティアナの話題を変える為に別の言葉に返事をする。

「スバルさんの所に行きましょう」
「ひょっとしたらもう着いてるかもしれませんから」

そう言って走ってティアナが居る反対方向に走って行った。初々しい言動に微笑みながらも、走っている二人に聞こえる様に言う。

「ちなみにそっち反対方向よ」

それを聞いた二人は同じタイミングで止まり、顔を俯かせながらゆっくりとティアナの方に歩いて来た。

その後ティアナは先程の話題には触れずに、別の話題を出して二人と会話をしていた。当然スバルとの待ち合わせ場所に歩きながらだ。ティアナはエリオとキャロに向けていた視線を前に移動させると、辺りを見渡しているスバルの姿があった。三人を探していたのだ。

「スバル」

未だに気付いていないスバルに向けて、軽く笑いながら名を呼ぶ。その声に気付き、後ろを振り向いたスバルは、三人の方へ早歩きで向う。

「スバルさん、お帰りなさい」
「怪我、大丈夫でした？」
「あたしもマッハキャリバーも無事に完治」

頼れる笑顔で首にかけてあるマッハキャリバーを見せる。

ウーウーウーウー

次の瞬間アラートが鳴り、艦内は赤い光に包まれた。

「んっふっふ～、ふん！」

山岳地帯にある煙を上げているアインヘリアル三号機のすぐ近くに、倒れている沢山の魔導士と笑っているウェンディが居た。ウェンディは足元に居る一人の魔導士を踏みつけて、自分の右腕を見る。

「いや～データ蓄積のお陰で、ずいぶんと楽に動けるようになったッス。ねえオット―、ディード、そう思わねえッスか？」

独り言を言った後に、上空に居る二人の戦闘機人に向って聞く。二人共茶髪、オット―と言われた子は男か女か分からない中性的な顔立ちをしており、髪は肩に当たる程度。ディードは長い髪にカチューシャを付け、両手にはサーベルを持っている。オット―？はディードは？？のプレートを着けている。

二人はウェンディの質問に耳を傾けずにそっぽを向く。

「うぅ、くっそ。こいつら苦手ッス」

全くの無表情での無視の行動に、感情が豊かなウェンディは余り良い印象が無い様だ。頬を引きつらせているウェンディの隣にモニターが現れる。

「ウェンディ、二号機は私とセッテ、ノーヴェが既に制圧した」

「あ～これはお疲れッス」

モニターに映っているトーレに楽な敬礼をする。

「そっちも終わったか？」

ノーヴェのぶっきらぼうな声に対してウェンディはいつもの陽気な声で返す。

「完全制圧ッス。オットーとディードがざっくり本体にダメージを・・」

「そうか、御苦労だった」

珍しくトーレが褒めてくれたので、ウェンディは益々笑顔になりながらも現状を伝え合う。

「えっへへ～。って、一号機はクワ姉とセインとディエチ。私達の中の熟練のバックストリオ」

「問題無く制圧した様だ。これで全て制圧した・・・・」

火と煙を上げる三つのアインヘリアルを映像で見ている人物が居る。スカリエッティだ。口元を不気味に上げながらモニターを見ているスカリエッティの隣に、もう一つモニターが出現した。

「アインヘリアルの襲撃と制圧、ほぼ完了です。妹達も初回出動からのデータを全て蓄積。行動に反映できています」

報告しているのはウーノだった。

「ああ、いいね。素晴らしい、素晴らしいよ」

「失敗が目立つ人造魔導士として、私達戦闘機人はトラブルが少ないですね」

「元は最高評議会の主導で、管理局が実用寸前まではこぎつけていた技術だからね。それを私がずいぶんと時間を掛けて、改良したんだ」

「良質な筈です」

ウーノはスカリエッティとは別の空間に居り、シーツを被せた何かを抱えて歩いている。

「人造魔導士の製造もまた、ゼストやルーテシア、長期活動してくれているおかげで、ずいぶんと貴重なデータを取る事が出来た。彼等の失敗と成功のおかげで、聖王の器も見事の完成を見た」

「聖王のゆりかごを発見し、触れる事が出来て以来、その起動はあなたの夢でしたから・・・・。その為に聖王の器となる素材を探し求め、準備も整えてきた。そして最大の邪魔者である高町サン・・・・」

「だが彼も、私の、それこそ！　欲望の塊であるあいつが相手をしてくれるよ・・・・」

一段と口元を上げるスカリエッティを見ても、ウーノ全く不気味と思わずに、うす笑いする。

そしてスカリエッティの欲望の塊・・・・それはデビル。生体や限界、拒絶反応のことを全く考えずに、全てを飲み込み自らの物にする最高の実験体。

「はい。ジュエルシードと残りのレリック全て・・・・それを我が物にした彼には敵が居ない。そして未だに人の思考をすることの出来る精神・・・・」

そのシーツがはだけ、中に居たヴィヴィオの顔が見える。

「夢が・・・・叶う時ですね」

「まだまだ、夢の始まりはここから何だよ、ウーノ。古代ベルカの英知の結晶、ゆりかごの力を手にして、ここから始まるんだ。誰にも邪魔されない楽しい夢の始まりだ！」

と、その時アラート音が聞こえた。

「私達の方に、侵入者？」

研究所のセキュリティーが異変を知らせていた。

アラートが鳴った研究所内には、スカリエッティが作った物とは思えない犬型の透明な存在が数匹居る。そしてセキュリティーによって攻撃され、霧散してしまった。

「こんな、洞窟の奥に？」

透明な犬が突入した洞窟の入口にシャッハが居り、その後ろには古代ベルカ式の魔法陣を展開しているロッサが居た。

「僕の猟犬を発見して、その上一発で潰した。並のセキュリティーじゃない。ここがアジトで間違いないね」

ヴェロッサが顔をしかめる一方で、シャッハは今まで謎だったアジトを見つけたことに笑顔を作っている。

「すごいですね、ロッサ。こんな場所、よく掴めました」

「シャッハ・・・いい加減、僕を子供扱いするのは止めて欲しいな。これでも一応、カリムやはやてとおんなじ、古代ベルカ式の、レアスキル継承者なんだよ」

「無限の猟犬、ウンエントリヒ・ヤークト。貴方の能力は存じ上げていますよ」

「ま、今回の発見は、フェイト執務官や、ナカジマ三佐の、地道な捜査があってこそのものだけどね」

透明な犬を再び生み出し、ゆっくりと頭を撫でていたヴェロッサだが、茂みの大きな音に反応して立ち上がる。

茂みや森の中に、更にはアジトの周りを管理局に探索されずに警備するプログラムされていたガジェットが、二人の周囲を取り囲んだ。

「奥からも出てくる」

洞窟の中から出て来るガジェットの群を見ながら呟く。

「大人しく帰してくれる気はなさそうですね」

「あんまり戦闘は得意じゃないけど・・・。まあこのくらいなら」

「お任せください」

シャッハヴィンデルシャフトを起動させバリアジャケット姿になり、トンファーを構え、戦闘態勢に入った。

「あなたとカリムを守るのが、私とサンの務めですから」

アースラのブリッジでは、一つの大きなモニターが出現しており、それにはミッドチルダの地図が載っていた。そしてそこにいくつか点滅している。戦闘機人が居る場所だ。

「アインヘリアル一号機、二号機、ガジェット撤収が始まっています」

シャーリーからの報告が上がる。報告と同じで、モニターを見たらアースラからどんどん離れて行っているというのが分かる。

「前回よりも、動きが早い」

「早めに叩かんと、取り返しのつかんことになるけど・・・嫌な感じに拡散してる。隊長たちの投入はしづらいなあ」

戦闘機人達は数人のグループに分かれて違う方向に向っている。全員を逮捕するなら、こちらも戦力分散しなければならない。その時、シャーリーの手元のパネルボタンが点滅し、緊急連絡のサインだった。

「アコース査察官から、直通連絡！」

「はやて、こちらヴェロッサ。スカリエッティのアジトを発見した。シャッハが今、迎撃に来たガジェットを叩き潰してる。教会騎士団からも戦力を呼び寄せてるけど、そっちからも、制圧戦力を送れるかい？」

「うん、もちろんやけど」

「戦闘機人、アインヘリアルから撤収。地上本部に向います」
「あ！　あの騎士も、別ルートから」

そしてモニターにはゼストとアギトの姿が映っていた。そしてシグナムはゼストの映像を見つめていた。

「廃棄都市から別反応。エネルギー反応膨大。これは・・・・戦闘機人。こちらも地上本部に向ってます！　映像が・・・今」

更にルキノからの報告が来る。そのまま皆の前に映像を出す。

最初に映っていたのは、戦闘機人が着ている青いスーツを着たギンガだった。スバルは信じられない物を見る目になる。更にはウェンディ、ディードが飛んでいた。

「ギン・・・姉？」

一方スカリエッティアジト前では、ガジェットの残骸が至る所に錯乱しており、一部の所には小さな山になっている。

「ここに留まるのはきついかな？」

未だに増援の来る気配が無いので、一旦引こうと考えていたヴェロッサだが、シャッハがそれに反対だ。

「何の、まだまだ」

元気に返してくるシャッハに微笑むヴェロッサだが、急に地面が揺れ始め、真剣な表情に戻す。

「さあ・・・・いよいよ復活の時だ」

スカリエッティが両腕を上げて欲望の言葉を吐き出す。

「私のスポンサー諸氏。そして、こんな世界を作り出した管理局の諸君。偽善の平和を謳う、聖王教会の諸君。見えるかい？　これこそが君達が忌避しながら求めていた、絶対の力」

地震が更に激しくなり、震源の中心から地面が割れる。木が生えている地面の一部が切り取った様に上がっていき、その地面の下から巨大な要塞が現れた。それは上にあった地面や木を振り落とし、完全にその姿を、全世界に現した。

「旧暦の時代。一度は世界を席巻し、そして破壊した、古代ベルカの悪夢の英知」

「聖王の・・・・ゆりかご」

シャッハを抱えて地震から逃れる為に上空に居たヴェロッサは、その巨大な要塞を下から見、絶望を呟く。

「見えるかい？　待ち望んだ主を得て、古代の技術と英知の結晶は、今、その力を発揮する」

なのはとフェイトの元にも、その様子は届いていた。聖王のゆりか

ごの玉座の間。その椅子に座っているのは拘束されているヴィヴィオ。

「ママ・・・・パパ・・・・お兄ちゃん・・・・あっ、いたいよ・・こわいよ・・ママァァ・・・パパァァァ、お兄ちゃァァン！」

「ヴィヴィオ・・・・」

「うっ、あああ・・・・！わぁぁぁ・・・・！」

『さあ。ここから夢の始まりだ！　はははははは！　あはははははははは！』

ヴィヴィオの悲鳴になのはは怒りと悲しみの余りにレイジングハートを強く握っている。そしてフェイトはなのはの手を優しく握ると同時に、スカリエッティを殺意ある目で睨みつけた。

聖王のゆりかごの映像が流れた少し後、首都クラナガンから少し外れた森の中にある墓地にサンは向っていた。

『マスター、ヴィヴィオさんのことを・・・・』

「俺だって辛い、だがデビルと戦うことが俺の一番の任務だ。カリムからもはやてさんからも許可を貰っている・・・・」

再び言いかけようとしたリリだが、サンの今までに無いくらいの悔しく、悲しい表情に、何も言えなくなった。

『相棒、誰か居る・・・・』

いつもと違い真面目で静かなオーバーの声。それがサンの緊張を一気に高める。

少し歩くと森の中に少しのスペースがあった。そこには小さな墓地があり、その中の一つの墓の前に、一人の人物がお参りをしていた。

「ずいぶんと姿が変わっちまったなデビル。・・・・・・・・・いや、ラール・グリッド」

九月十九日（後書き）

バナナ「改めまして更新遅れてすいません」
サン「今回から後書きはこんな感じに何のか？」
バナナ「なるべくはそうしたいんだが、ネタ次第だな……」
サン「そんなことだろうと思ったよ雑魚作者」
バナナ「雑魚はひどくない！？」
サン「うっさいカス。それより今回はかなり原作沿いじゃなかったか？　俺は知らんがな」
バナナ「罵倒を「それより」だけで片付けるのかよ！？　……そうだ、今回は大事な話だったからな。更新が遅れたのも原作の会話の中に描写を入れるのが難しかったからなんだよ……」
サン「描写？　そんなカッコイイもんがこの小説にあるか？」
バナナ「めっちゃｏｒｚ」
サン「めっちゃｏｒｚｗ。それよりデビルのことだな……。レリックとジュエルシード取り込みやがったあの野郎」
バナナ「スカリエッティは結構な数持ってたからな～。ヴィヴィオに一個使ったといっても、ほとんど変わらないし、ジュエルシードもプレシアさんの事件で九個、何故か入っていた三型ガジェットに一個。最高で１１個取り込んでる形になるねｗｗ」
サン「おま！？　何その無理ゲー。ってかネタばれじゃね？」
バナナ「沢山取り込んでるってのは書くけど、数までは書かないからね。そんなに問題無い」
サン「ふ～ん」
バナナ「では、また次回で会いましょう」

無限の欲望（前書き）

すいません。今回も基本原作沿いの会話が多いので、サブタイも同じにさせてもらいましたｏｒｚ

いよいよ、最終決戦に入りました。ここからが本番という気持ちと、もうすぐ終わるのか？　という気持ちの二つが一緒に出てきます。

無限の欲望

聖王教会のカリムの執務室でも、聖王のゆりかごの映像は流れていた。

「巨大船、地上より浮上！」

「まさか・・・これは・・・」

シャッハとサンの代わりである二人の護衛が、巨大な船とも要塞とも言える物に驚愕の声を上げる。

「ック」

カリムが悲痛の声を上げた。

そんなカリムのすぐ前に、現場の近くに居るシャッハからの連絡が入った。

「騎士カリム、これが・・・あなたの予言にあった・・・」

「・・・・・踊る死者達、死せる王の元、聖地より帰った船。古代ベルカ聖王時代の究極の質量兵器・・・天地を統べる聖者の船、聖王の・・・・ゆりかご・・・」

アースラブリッジの艦長席に座っているはやての前には、カリムが映っているモニターがあった。

「一番なって欲しくない状況に、なってもうたか・・・」

カリムは悔しい表情をする。自分には絶対とは言えないが未来を読む力がある。それなのに悪い未来を変えられずに、預言の通りにしてしまったのだ。

「教会の・・・・ううん。私の不手際だわ。予言の解釈が不十分だった・・・・」

「未来なんて、分からんのが当たり前や。カリムや教会のみなさんの所為とちゃう。さあて、どなんしようか・・・」

ブリッジに居る全員が見られる程の大きさのモニターに映っている聖王のゆりかごを見て、作戦を練る。もはや此処まで凶悪な質量兵器を出されたら、長期戦など絶対にあり得ない。

考えていたはやての前に、モニターが現れる。

「はやて、クロノだ。本局は巨大船を、極めて危険度の高いロストロギアと認定した。次元航行部隊の艦隊は既に動き始めている。地上本部と協力して、事態に当たる。機動六課、動けるか?」

「うん」

これで策が見えた。はやては本局の援軍と、地上部隊の協力を武器に、これからのことを考え始めた。

一方廃棄都市上空にオットーは飛行していた。その横からウーノの

連絡が入る。

「聖王のゆりかごと器は安定状態に入った」

この連絡は他の戦闘機人にも伝わっており、ウーノは全員に配置を指示する。

「クアットロとディエチはゆりかご内部に、私と交代」

「はーい」

「了解・・・」

「トーレとセッテ、セインはラボでドクターの警備」

「心得た」

「ノーヴェはディードとウェンディ、十三番目と一緒に・・・」

「もう向ってる」

皆既に今回の戦闘の目的を知っているが、最終確認の為にもう一度ウーノは言う。

「ゆりかごが完全浮上して、主砲を撃てる位置に・・・」

「アーンド、二つの月の魔力が受けられて、地上攻撃が出来る位置まで辿り着ければ・・・ゆりかごはまさに無敵」

クアットロも会話に入り、更にはトーレもその説明側の輪に入る。

「ミッドの地上全てが人質だ。それなら、本局の主力艦隊とでも戦える」

「そういや、一個疑問があるんッスけど・・」

「何だ？」

トーレはぶっきらぼうに返したが、内心はスカリエッティの目的の後一歩まで来ているので、内心は快い。

「ゆりかごの中に居る、聖王の器とか言う女の子って、ぶっちゃけ何？」

「フッフッフ、私が教えよう」

スカリエッティがその会話の中に入る。こちらもトーレと同じ様で、かなりご機嫌な様だ。普段から不気味に笑っている人物だが、今は体全体が楽しいと示している。

「今から、十年ばかり前になるかね・・・・。聖王教会にある司祭が居てね。彼は敬虔な心を持ち、高潔な人格者だった。それ故に聖遺物管理という重職についていたんだよ」

「聖遺物？」

「聖王教会の信仰の対象、古代ベルカ時代の聖なる王様、聖王陛下の持ち物だったり遺骨とかのことよ」

ウェンディの疑問に軽くクアットロが答える。

「だが、司祭と言えど人の子だ。彼は、ある女性への愛からそれに手を付けてしまったんだよ。そして、それに付いていたごく僅かな血液から、遺伝子情報が取り出された。古代ベルカを統べた偉大な王。聖王の遺伝子データがね・・・・。そして、聖王の種は各地に健在する機関に極秘裏に複製され、再生を待った」

「あたし達の王になる為に・・・だろ」

ノーヴェはナンバーズの中でも異様に王のことを気にしている。何

か理由があるのだろう。

「生きて動いている聖王は、あのゆりかごの起動キ―何だよ。王と言っても、ただの器さ」

一通り説明が終わった所で、ガジェットに乗って飛んでいるセインが手を上げる。

「はい、ドクター質問」

「どうぞ、セイン」

「レジアスのおっちゃんはいいとして、最高評議会だっけ？　あっちの方はいいの？　ガジェットの量産とか人造魔導士計画の支援をしてくれたのって、あの人達だよね？」

最高評議会、それはそこらの会社のお偉方等のことでは無く、管理局の最高評議会だ。つまり管理局の上はレジアス以外にもスカリエッティとの関係があったということだ。

「ゼスト様とかルー―お嬢様も、評議会の発注で復活させたんでしょ？　評議会には評議会で何かプランとか思惑とかあったんじゃ・・・」

その質問にスカリエッティは馬鹿にするような笑いをしながら、セインに説明する。

「レジアスも、最高評議会も、希望は一緒さ。次元世界の希望と平和の安全。その為にレジアスは計画を頓挫させられた戦闘機人に拘り、最高評議会はレリックウェポンと、人造魔導士計画に拘った。平和を守り、正義を貫く為なら、罪も無い人々の犠牲を出しても良

いと。中々、傲慢な矛盾を抱えておいでだ」

セインやウェンディ等の元気組は今一良く分からい様だ。笑いながらもあっさり分からないと言った。

「ともかく、スポンサーである評議会のことを無視して、あんなでっかいおもちゃを呼びだしたら、怒られるんじゃないのって、あたしは心配・・・・」

「フッフッフ、ちゃ～んと怒られない様にしてあるさ。あの化け物を作ったのも秘密だったし、みんなは何も気にせずに、楽しく遊んで来てくれればいい。遊び終わったら、我らの新しい家に、ゆりかごに帰ろう。そうすれば、世界の全てが我々の遊び場だ」

そう言って映像を切った。ナンバーズの中には不気味に笑う者と苦笑いする者、無表情な者に綺麗に分かれていた。

元々スカリエッティの野望に興味が無い方が多いナンバーズだが、生みの親の言う通りにするしか無いと結論付けて、自分達の指示された場所に向った。

ここは管理局地のどこか。そこは真っ暗で、天井も床も見えずに、地下なのか最上階なのかも全く分からない。

そこにあるのはただ三つの大きなモニターと、そのモニターの真ん中に映っているスカリエッティの写真だけだった。

それらのモニターに映っているのは管理局の紋章とそれぞれ？・？・？と映っているだけだ。

「ジェイルは少々やりすぎたな」

？のモニターから声がする。

「レジアスとて、我らには重要な駒の一つであるというのに」

「我らが求めた聖王のゆりかごを、奴は自分のおもちゃにしようとしている」

「止めればならんな」

？番が言った途端に辺りの映像が急に変わり、今度も建物の中とは思えない空間に変わった。沢山の板の様な物があり、その中心に三つの生体ポット、その中には脳が浮いている。どうやら先のモニターはこの三つの脳が話し合っていただけの様だ。

「ジェイルは貴重な個体だ。消去するにはまだ惜しい」

「しかし、かの人造魔導士のゼストも失敗。ルーテシアも成功には至らなかったが、聖王の器は完全な成功の様だ。そろそろ良いのではないか？」

人造魔導士計画をここまで詳しく知っている・・・・。そう、この脳たちは最高評議会なのだ。

「我らが求むるは、優れた指導者によって統べられる世界。我らがその指導者を選び、その陰で、我らが導かねばならん」

「その為の生命操作技術、その為のゆりかご・・・」

「旧暦の時代より、世界を見守る為に、我が身を捨てて長らえたが、もうさほど長くは持たぬ」

旧暦の時代・・・・少なくとも八十年前から生きていることになる。

しかし、ここまでして生きているのだ。おそらくもっと昔から生きているのだろう。

「だが、次元の海と管理局は我らが見守らなくてはならぬ」

その時三つの脳の近くにモニターが現れ、そこから若い女性の声が聞こえた。脳たちはそれに全く返事をせずに、話を続ける。

「ゼストが五体無事であればジェイルの監視役として最適だったのだが・・・・」

するとその謎の空間を滑る様に流れる一つの板があった。その上には女性が乗っており、板は三つの生体ポットの前に来た。

「みなさま、ポットメンテナンスのお時間ですが」

その女性の印象は酷く薄暗い。カリムが着ていた管理局の制服と同じなのだが、印象は百八十度違う、まさに天使と悪魔だった。

「ああ、お前か」

「会議中だ、手早く済ませてくれ」

三人は女性にそれだけ言って、再び会議を始める。

「あれは武人だ、我らには御せぬよ。」

「戦闘機人事件の情報と、ルーテシアの安全を引き換えに、辛うじて鎖を繋いでいただけだ」

「奴がレジアスにたどり着いてしまば、そこで終わりよ・・・・・」

メンテナンスをしている女性が、モニターを打ちながら言う。

「お悩みごとの様ですね」
「何、瑣末な厄介ごとよ」
「お前が気に掛けることでもない」
そう言われた女性は「はい」とだけ言って、モニターを打つ指を更に早くする。
「レジアスや地上からは何の連絡も無いのか？」
「ええ・・・未だに、どなたからも」
「暫くは慌ただしくなりそうだ。お前にも苦労を掛けるな」
その言葉に女性はゆっくりと顔を上げ微笑む。
「いえ、わたくしは望んで、ここに居るのですから」
十人が十人綺麗と言える綺麗さだったが、どこか裏面のある顔だった。
「そうか。それでラール・グリッドと高町サンだが、あれらは我らの言う事には耳を傾けんだろう」
最高評議会の三人はその裏に気付かずに、話を進める。
「そうだな・・・。だが、高町サンの方は人質を取ればどうにでもなるだろう。ミッドの騒ぎが収まり次第実行よ・・・・」
「ラール・グリッド。奴も貴重な実験素体であり、駒にもなる。だが、高町サンの術式兵装の方が使い勝手が良い。別に死んでも構わんさ」

「異議なし」

一つの脳の発言に、残りの二つは同意した。

アースラのブリッジの艦長席に居るはやては、会議室と通信を行っていた。会議室に居るのはスターズ・ライトニングの全員とリィン、アルトだ。皆は今までで一番の出撃の為に、色々打ち合わせや、最終確認をしていたのだ。

「今回の事件の始まりはレジアス中将や、最高評議会。彼等は異形の天才犯罪者、ジェイル・スカリエッティを利用しようとした。そやけど逆に利用されて、裏切られた。どこからどこまでが誰の計画で、何が誰の計画なのかは分からへん。そやけど今、巨大船が空を飛んで、街中にガジェットと戦闘機人が現れて、市民の安全を脅かしてる。これは事実・・・・。私達は止めなあかん」

はやての言葉に誰も、反論せず口を挟まずに聞いた。未だ絶対的な証拠が無く、憶測であるこの意見だが、誰もはやてが信じられないとは思わなかった。

皆ははやての言葉に頷く。

「ゆりかごには本局の艦隊が向ってるし、地上の戦闘機人達やガジェットも各部隊が協力して対応に当たる」

「だけど、高レベルなＡＭＦ戦を出来る魔導士は多くない。私達は３グループに分かれて、各部署に協力することになる」

もともと余り多く無い人員を更に三つに分けるのは良いとは言えない。しかし、それが一番確実な案だ。一人一人が強くなくてはいけないこの案を、機動六課はやらなくてはならない。

「そして、デビルについては、サンが当たってくれてる・・・・」

隣にある木に背もたれながら、サンは墓の前に居る人物に向って言う。

「ラール・グリッド。魔力資質はB、魔導士ランクB、階級は一等陸士。捨て子な為血縁は不明、保護施設で成長。管理局に属したのは十歳。その保護施設で一緒の女性、ライナ・オールと結婚。その数年後に子供を授かるが、新暦六十九年九月十九日、四時十一分に母親であるライナ・オールが突然死した為に死亡。あんだけ色々やったんだ。これくらいの事は調べられて当然だろ？」

ラールはサンの声に反応せずに、両手を合わせ、頭を下げる。

「以外だな。お前のことだからてっきり俺を殺そうとしてくるかと思ったんだが・・・・」

皮肉な言い方をしながらもラールの前にある墓に近づいて、チョコレートと赤ん坊が遊ぶおもちゃを置く。

「どういうつもりですか？」

「ライナさんはチョコが好きって書いてあったからな。本当に甘い物が大好きで、お前の給料日には必ず甘い物を注文してたんだろ？

子供の方は趣味が分からんからな、これが無難だと思った」

自分の妻を殺した子供が、ライナの事を知っているので青筋を立てる。また、自分が息子と会えなかった、息子の顔を見られなかった、そう思うと更に怒りが増幅される。

「自分が殺した人間に対する行いがずいぶんと軽いですね」

怒りと殺意が混じった言葉を聞いて、サンは溜息を吐く。大人しくなったと思ったが、やはりデビルはデビルの様だ。結局自分に対する逆恨みは治っていない。

「俺も母さんもお前の家族を殺してないし、死に全く関係が無い。だが俺が産まれたと同時に亡くなったのも事実の様だな。実際に当時のデータを見た。このお供え物はあくまで礼儀としての物だ」

「これでチャラにするつもりですか？　自分が殺した人間に対する礼儀がチョコレートとおもちゃとはずいぶん馬鹿にしてますね」

二人は顔を見合せずに墓標を見ながら会話を続ける。二人共全く構えてないが、実際は違う。それは二人の出す闘志と殺意によって、誰にでも分かることだった。

「ったく。甘い物が大の苦手の俺が、あんなに甘い匂いを出す店に行って買って来たんだ。もう少し謝意を見せろ」

「・・・・・ほんとにあなたはむかつくガキですね」

ラールは憎しみの感情を入れてそう呟くが、ポケットに手を入れて途端に、優しい声になる。

「ライナ、待っててね、もうすぐ君の仇を取るから。ほら、君の大好きだったホワイトチョコレート、これを食べながらゆっくり見ててね・・・」

ポケットから出したのは白い箱。ラールがそのふたを開けると、小さく、模様の細かい、いかにも高そうなチョコレートだった。サンはチラッと値段を見ると、自分が買ったのより数千安い物だったので、心の中でガッツポーズをする。

しかし、すぐに表も心も真面目にする。

「お前には何言っても無駄な様だな。ライナさんが数秒でもこの世に戻ったら、終わるんだがな・・・」

そう呟いて沢山の桜の花が咲いている枝の束を、墓標にそっと置く。

「その花は？」

桜色・・・この言葉はミッドにもあった。実際何度か見た事はあったラールだが、その花が持つ意味は知らなかった。

「母さんが生まれた世界の花で、別れと始まりの季節に咲く花」

これはなのはとフェイトに教えて貰った。いや、知ってはいたが、前世での生活ではその様な事を考える程、サンには友達や大切な人が居なかった。

そして両親に教えてもらった優しい花の意味を、サンは死の色に変

える。

「ライナさんに見て貰う・・・・・・貴様が闇魔と出会い、この世と別れるのをな・・・・」

「そうですか・・・・、だったらあなたの知り合いにも上げるといいですよ。先程の発言をそのまま返します」

・・・・・・・・・・

沈黙が流れるが、両者は一向に戦闘を行う気配が無い。

「・・・・ここでの戦闘は止めるか。墓標が壊れたら寝覚めが悪い。お前も同意見何だろ？」

「そうですね。他の墓がどうなろうが知った事ではありませんが、この場所とライナの墓標は壊したくありませんから」

二人はスッと腕を降ろして墓地を見る。二人の意見が合うのは当然初めてだ。

しかし、二人はそんな下らない事は考えずに、そこから見える海の方に向った。

「第一降下ポイントまで、後三分です。第一降下ポイントまで、後三分です」

ルキノが艦全体に放送をする。
なのはは目の前に居るスバル、ティアナ、エリオ、キャロの方をしっかりと見る。

「今回の出動は、今までで一番ハードになると思う」
「それに、あたしもなのはも、多分サンも、お前らがピンチでも助けにいけねぇ」

なのはの隣に居るヴィータも、今回の任務の厳しさを伝える。ＦＷも理解しているので、キリッとした表情を変えなかった。

「だけど、ちょっと目をつぶって今までの訓練のことを思い出してみて。ずっと繰り返してきた基礎スキル、磨きに磨いたそれぞれの得意技、痛い思いをした防御練習、全身筋肉痛になっても繰り返してきたフォーメーション、いつもボロボロになるまでわたし達とやった模擬戦・・・・」

フォワードは皆、今までの辛い訓練が頭に鮮明に出て来ているのだろう。目をつぶりながら辛い表情をして、小さなうめき声を出している。

「目、あけて良いよ」
「はぁ～」

四人共頭の中にあった映像からやっと抜け出せたので、安心の息を吐いた。

「まぁ、わたしが言うのも何だけど、きつかったよね・・・・」
「ははは・・・・」

「それでも、四人ともここまでよく着いて来た」
「え？」
いつもは全く褒めないヴィータが賞辞したので、四人は小さく声を上げた。
「四人とも誰よりも強くなった・・・とは、まだ言えないけど・・・」
「あぁ・・・・」
少し引っ張りのある話し方だったので、期待していたが、違ったので少し残念な様だ。
「だけど、どんな相手がきても、どんな状況でも絶対に負けないように教えてきた。・・・守るべきものを守れる力、救うべきものを救える力、絶望的な状況に立ち向かっていける力、ここまで頑張ってきたみんなはそれがしっかり身についている。夢見て憧れて、必死で積み重ねてきた時間、どんなに辛くても止めなかった努力の時間は、絶対自分を裏切らない。それだけ、忘れないで・・・」
「きつい状況を、ビシッとこなして見せてこその、ストライカーだからな」
「はい！」
二人の助言、励まし、厳しさ、優しさ、それらのことの感謝の気持ちも込めて、四人は敬礼をする。
「それじゃあ、機動六課ＦＷ隊、出動！」

「行ってこい」
「はい！」

ティアナ、エリオ、キャロはすぐに待機しているヘリに向って行った一方で、スバルはその場に残って居た。

「先に行くぞ」

スバルがなのはに対して何かを言いたいと読んだヴィータは、それだけ言ってこの場から去った。

この場から誰も居なくなったのを見計らって、なのははゆっくりとスバルに近づく。

「スバル、ギンガの事もあるし、きっと・・・・・」
「違うんです！・・」

なのははてっきりギンガの事で落ち込んでいるのかと思っていたので、スバルの返事に小さく声を出した。

「ギン姉は多分大丈夫です。あたしがきっと助けます・・・・。今はなのはさんとヴィヴィオの事が・・・・」

途中で口つぐむがなのはには何が言いたいのかが分かった。「ありがとう」と言いながら、スバルの肩に優しく手を当てる。

「大丈夫だよ・・・・。一番怖いのは現場に行けないことだったんだけど、八神部隊長がそこをクリアしてくれた。現場に行って、全力全開でやっていっていいんだったら、不安何て何も無い、心配ないよ」

肩に当てていた手をスバルの頭に持って行き、優しく撫でる。スバルは単純に恥ずかしかった様で、少し顔を赤らめている。
なのはが落ち込んでいると考えていたスバルは、次々となのはの口から出て来る言葉に途惑っている。そんな可愛らしい姿を見て、優しく笑む。

「スバルが憧れてくれたなのはさんは誰にも負けない、とっても強いエース何だから」
「・・・・はい」

「スバルだってうちの自慢のフロントアタッカー何だからね。相棒と、マッハキャリバーと一緒に、負けないで頑張ってきて」

そう言って拳を作り、前に出す。なのはの優しさ・・・・いや、強さに、スバルの目には微かに涙があった。

「・・・・はい！」

自分も拳を作り、なのはの拳にコツンと当てた。

それからすぐにアースラからＦＷを乗せたヘリが降下し、その後すぐに隊長陣も降下する。

「ほんなら、隊長陣も出動や！」
「うん（おう）！」

アースラのハッチが開くと同時に空にそれぞれの魔力光の色が映る。なのは、フェイト、はやて、ヴィータは一人の人物からの通信を受

ける。

「機動六課隊長、副隊長一同、能力限定、完全解除」

通信の相手はカリムだ。カリムは目の前にリミッター解除の魔法陣を展開する。

「はやて、シグナム、ヴィータ、なのはさん、フェイトさん、どうか・・・」

「しっかりやるよ」
「迅速に解決します」
「お任せ下さい」

不安の表情をしていたカリムだが、三人の前向きな言葉に安心したようだ。騎士としての顔に戻り、リミッターを解除する。

「リミット・リリース」

その言葉を合図に、四人はバリアジャケットを纏い、一気に飛んで行く。

「エクシード・ドライブ！」
『ｉｇｎｉｔｏｎ』

なのははエクシード・ドライブ状態になり、姿とデバイスを変えた。ミニスカートだったのがロングに、先に丸型の中にレイジングハートのコアがあったのが、三角をイメージ出来る杖になった。

「なのは・・・」

「フェイトちゃん？」

隣に飛んで来たフェイトはやけに懸念している表情だったので、なのはは首を傾げる。

「なのはとレイジングハートのリミットブレイク、ブラスターモード。なのはは言っても聞かないだろうから、使っちゃ駄目、とは言わないけど、お願いだから無理だけはしないで」

フェイトの中にはなのはに対する心配の気持ちで一杯だった。地上の人や迎撃に当たる管理局員、聖王教会の人。スターズの二人や、ヴィータ。はやてにシグナムや、保護児童で、サンの兄と姉のエリオとキャロ。怖い思いをしているヴィヴィオ。そしてデビルと戦うサン。みんなの事も本当に心配なのだが、なのはの事が誰よりも何よりも心配だ。

「大丈夫。それより私はフェイトちゃんの方が心配。フェイトちゃんとバルディッシュのリミットブレイクだって、凄い性能な分、危険も負担も大きいんだからね」

「分かってる。でも、それでも私はなのはの方が心配。あの時みたいに・・・もしなのはが死んで、私を置いて行く、って思いは、もう絶対にしたくない・・・」

顔を俯かせるフェイトは、きつくて、辛くて、後悔していた。思っていたことはなのはが落ちた事件。結果的にそれがサンを産むことになった事件でも、あの様な悲しみは味わいたく無い。そんな思いが顔に映っていた。

自分を本当に想っていてくれると、もう何度目か分からない実感をして、なのはは頬を染める。

「ほんとに大丈夫だよ。サンともヴィヴィオともフェイトちゃんとも約束したんだよ。サンには博物館に行こうって、ヴィヴィオにはキャラメルミルク作って上げるって、フェイトちゃんとは・・・・その・・・・結婚するって！」

顔が一段と赤くなってしまうが、それでも言葉を続けたなのは。これはただの惚気などでは無く、本当に心からの思いで、信念だ。

「なのは・・・・」

「・・だから・・・・私は絶対に落ちない、絶対にヴィヴィオを取り戻して、デビルを倒すとサンを信じる。このフェイトちゃんがくれた指輪に賭けて」

そっと左手をフェイトに見える様に上げる。

「・・・・分かった。絶対に絶対だからね」

「うん」

「あの～フェイト隊長、そろそろ・・・・」

微笑み合っていた二人の少し上に飛んでいたはやてが、苦笑いしながら言った。その隣に居るヴィータは呆れた顔をしている。

「あ、うん」

「フェイト隊長も無茶すんなよ。地上と空は、あたし達がきっちり抑えるからな～」

「うん、大丈夫。ありがとね」

「頑張ろうね」

なのははそう言ってフェイトに握った手を向ける。

スバルとした様にコツンと合わせる予定だったのだが、それはフェイトの行動によって消された。

飛んでいる状態で、フェイトはなのはを強引に引っ張り、抱き寄せる。そして空では危ないので、ただ合わせるだけの軽いキスをした。

「・・・・愛してる・・・・。ごめんね、不謹慎だとは思うけどどうしてもしたくて」

なのはの耳元で愛を呟いたフェイトは、はやてとヴィータに謝った。

そして、なのはの返事を待たずに別ルートに飛んで行く。

「・・・・・・ッハ、えっと、え～と」

飛びながらも軽く意識が飛んでいたなのはは、自分に向けられる二つの視線に目を覚まし、慌てて言い訳を考えようとしたが、何も思いつかなかった様だ。

「はぁ～、別にええよ」

「おめぇらのイチャつきは今に始まったことじゃねえし」

「なのはちゃんとフェイトちゃんが任務に集中出来るなら、まあええわ。・・・・最も！　今後は仕事中にの戯れ合いは厳禁やからな！」

いつもの穏やかでも、部隊長としての雰囲気でも無く、般若の様に恐ろしいオーラを出していた。なのはは涙目になりながらも必死に

頷く。

無敵のエースオブエースのこんな所を他の部隊にでも見られたら、間違い無く士気が下がるだろう。ヴィータは少々不安になりながらも飛行を続けていた。

そして三人はそのほのぼのした空気を捨てて、エースとしての顔に戻す。

【悲しい出来事、理不尽な痛み、どうしようもない運命。そんなのが嫌いで、認められなくて、打ち抜く力が欲しくて・・・・・私はこの道を選んで・・・・、おんなじ思いを持った子達に、技術と力を伝えて行く仕事を選んだ】

一段と飛行速度を速くし、微かに見えた聖王のゆりかごを睨む。

【この手の魔法は、大切な物を守れる力、想いを貫き通す為に必要な力！】

大切な家族を、絶対に守ると決めた娘を、この手の魔法で、絶対に・・・・

【待ってて、ヴィヴィオ！】

最高評議会の三つの脳が存在する場所。そこで、二回のガラスの割れる音が響いた。

音のした所では、生体ポットから出された二つの脳と、ポットメン

テナンスをしていた女性が居る。ただ、その女性の腕には巨大な鈎爪が装着してあり、その鈎爪には生体ポットの中に入っていた液体が付着していた。

「何故・・・何故だ・・・何故だー！」

余りの急な反乱に最高評議長である一つの脳は、叫び声を上げる。それに対して女性は冷静に・・・・いや、悪魔の様な声で呟く。

「ご老体に無理をされては、良くありませんからね。そろそろ、お休みを・・・・」

髪を託し上げて鈎爪を舐める女性に最高評議長は女性の正体に気付いた様だ。

「貴様は！　ジェイルの！」

そう、この女性はナンバーズ？のドゥーエ。スカリエッティがこの時の為に送り込んでいたスパイだ。

「あなたが見つけ出し、生み出し育てた異能の天才児。失われた世界の知恵と、限り無き欲望をその身に秘めた、アルハザードの遺児。開発コードネーム、無限の欲望（アンリミテッドデザイア）、ジェイル・スカリエッティ。彼を生み出し、力を与えた時点で、この運命は決まっていたんですよ。どんな首輪を付けようと、いかなる檻に閉じ込めようと、扱いきれる筈もない力は、必ず破滅を呼ぶものです！」

鈎爪を上げ、今まで着ていた管理局の制服をナンバーズの着るスーツ姿に変更し、ニタリと笑う。

「馬鹿な・・・馬鹿な！」

「おやすみなさい」

それだけ言って、手を振り下ろした。

ヒュゥルルル～

海風の強い海上に、サンとデビルは居た。周りには誰も居らず、何も建って居ない。両者は無言でここまで来、不意打ちなどはしなかった。デビルの大人しさに不気味に思う事は無かった。

「じゃあ、始めるか・・・・」

「・・・・ここなら良いでしょう」

そして両者は・・・・ぶつかり合った。

無限の欲望（後書き）

バナナ「ここまで見てくれてありがとうございます」
サン「全くだな」
バナナ「相変わらず作者思いの無い奴だな……。まあ良いだろう。そしていよいよ最終決戦に入りました！」
サン「確かにいよいよ終盤だよな。俺とデビルの戦闘も期待しているぞ」
バナナ「なるべく派手にはするが、私に戦闘描写を期待しないでくれ」
サン「え？　最初からしてないけど？」
バナナ「何言ってんの？　的な顔で言うの止めてくれる！？　自覚していても結構きついよ！？」
サン「そっか、それはすまなかった。じゃあ次」
バナナ「絶対反省してないだろっ！？」
サン「え～と、まず、何故に俺が洋菓子店に行った？　そんな暇は無い筈だぞ……」
バナナ「……それは……、まあ……、あらかじめ買っておいたって設定で」
サン「後書きに矛盾点を書く作者でした～」
バナナ「グフッ」
サン「それで次だ。最高評議会のデビルが実験材料にならない点なんだが」
バナナ「それはしっかりと返せる。単純にデビル程の理性を普通の人間が保てないからだ」
サン「ふ～ん」
バナナ「ふ～ん、じゃねえ！　もっとリアクションを取るんだ！」
サン「た、助かった！　俺もみんなも無事でよかった～！！」
バナナ「わざとらしいのも止めてくれる？」

サン「しつこい奴だな。そろそろ終わらせるぞ」

バナナ「了解」

「「次回も頑張ります」」

決戦の序章（前書き）

まずは・・・本当に投稿が遅れてすいませんでした
本　　＿人＿
当　　＞　ｎ　＜　トウッ
に　　Ｙ　Ｙ
・・　「、　―
　　し（ヽ―
　　∪
　　＼＼
　　（　　）
す　　（　／／　）
い　　人　／／　）
ま　　（（／／／
せ　　（（　　’　ズ
ん　　　＼（（ンフ　ザ
で　　／　レ／　ザ
し　　／　　、ノ　ザ
た　　（　　）　―
ー　　レレレ／　・・
ッノレレ／　　
！！　へつ⊂／

夏バテと熱中症のダブルブッキングにあってしまいましたｏｒｚ
これからはここまで投稿遅くなることを無いように頑張ります。

決戦の序章

ミッドで戦闘が始まると同時刻、次元艦隊部隊はミッドに向けて可能な限りの速さで向っていた。

「第一艦隊、第二艦隊、あと三時間でミッド地上に到達します。市街地防衛のフィールド生成を最優先。迎撃艦隊の配置完了まではあと三時間半」

次元艦船クラウディアにも来たその通信に、艦長であるクロノは苦い顔をする。どう考えても時間が掛かりすぎなのだ。
この状態で策を練る為に、クロノはリンディとユーノと通信をしていた。

「ええ。艦隊運用部も通信部も、大騒ぎよ。　ただ、レオーネ相談役が上層部を取りまとめてくれてるし、運用部はレティたちが上手く立ち回ってくれてるから、出動遅延は出ないと思う」

「助かります。ユーノ、そっちは？」

「聖王のゆりかごのデータ、さすがにかなり少ないけど、発掘は無事完了。今送るよ」

「ああ、こちらから、アースラに全てに送信する」
「あの船の危険度は？」

これが一番の重要な話だ。間違い無く普通の質量兵器とは違う。異様な大きさ、異様な起動、異様な人物が求めた物、物的証拠が無くとも異様な物と感じさせる兵器だった。

「極めて高いです。先史時代の古代ベルカですら、既にロストロギア扱いだった古代兵器。失われた世界、アルハザードからの流出物とも・・・」

「・・・アルハザード」

「我が家にとっては、あまり思い出したくない名前だけど・・・」

クロノもリンディも顔を俯かせる。フェイトの本当の母、プレシア・テスタロッサの欲望を思い出したのだ。

本来なら空気を読んで無言になるべき所だが、生憎今はそんな悠長なことをしている場合では無い。ユーノは無眼書庫の館員が調べた結果を報告する。

「・・その真偽はともかくとして、最大の危険は、軌道上に到達される事。軌道上、二つの月の魔力を受けられる位置を取る事で、極めて高い防御性能の発揮と、地表への精密狙撃や、魔力爆撃が可能となるっていうのは、教会の伝承にある通りだけど・・・こっちの調査では、次元跳躍攻撃や、次元空間での戦闘すら可能とある。その性能が完全に発揮されれば、次元航行隊の艦隊とも、正面から渡り合えるかもしれない」

「軌道上に上がる前に、止めないといけないのね」

「対抗策は？」

「鍵となる聖王がそれを命じるか、本体内部の駆動炉を止める事が出来れば・・」

「・・・鍵の聖王、ヴィヴィオは、スカリエッティの戦闘機人に、操作されている可能性が高い」

「スカリエッティの逮捕でも、止まる可能性はあるのね？」

首謀者であるスカリエッティが命令すれば戦闘機人が止まる、そう判断したのだ。

「お母さん、クロノ。スカリエッティの逮捕は、フェイトがやってくれるよ」

「アルフ・・・・」

「フェイトがずっとがんばって、今まで追いかけてきたんだ。きっと捕まえてくれる」

フェイトの人生で一番長い付き合いである小さな少女の言葉に、皆は頷いた。

ミッド上空、聖王のゆりかご周辺。そこではやてが現場指揮、なのはとヴィータを主軸としたガジェットとの戦闘が行われていた。おそらく一度の事件で此処まで集まるのは滅多にないだろう航空魔導士も懸命に戦っていた。

ガジェットの数は数えきれないほど多い。理由としては聖王のゆりかごから大量に射出される為だ。

一旦ガジェットの射出が落ち着いたと思った矢先に、今度は聖王のゆりかご本体からエネルギー砲撃が放出された。

「グアアアア！」

何十人の悲鳴が一斉に響く中でも、現場指揮を行っているはやては冷静で居なくてはならない。

「防御陣計、隊列乱したらあかんよ！」

「は、はい」

【それにしても、大きい。外からやと魔導士が何人集まろうとどうにもなれへんな】

どうしようかと考えていると、再び聖王のゆりかごからガジェットが放出される。

「二十四番射出口より、小型機出現！」

「南側からも９００、市街地降下ルートです！」

「みんな落ち着いて、拡散されたら手が回らへん！　叩ける小型機は空で叩く、潰せるもんは今の内に潰す。ミッド地上の航空魔導士隊、勇気と力の見せどころやで！」

「はい！」

一方聖王のゆりかご表面付近でガジェットを破壊していたなのはとヴィータに、通信が入る。

「高町一尉、奥に進めそうな突入口が見つかりました。突入隊二十名が先行しています！」

「はやてちゃん」

通信を受けたなのははは、すぐにはやてと通信を取る。

「外周警戒は私が引きつける。なのはちゃん、ヴィータ、行ってくれるか？」

「おう」

「了解」

通信を受けた場所に向い、すぐさま内部に侵入した二人はすぐさま内部の異変に気が付いた。二人の飛行魔法がＡＭＦによって消されたのだ。

「ＡＭＦ！？」

「内部空間全部にっ？」

二人はすぐに演算に集中し、飛行魔法を再度行った。

ある程度のＡＭＦは予想していたが、ここまで濃いとは思っていなかった様だ。

これからの戦闘や魔力配給を予測しながら、なのはは目の前の道を睨んだ。

同時刻、廃棄都市上空にＦＷ陣を乗せたヘリが飛んでいた。その後方には数機のガジェットが飛んでいる。

ここまでは難なく来れたのだが、途中でエンカウントしてしまったのだ。戦闘ヘリであり、最新鋭のＪＦ７０５でも、人を運ぶことを考えず、機動力と攻撃だけを優先したガジェット二型にはどうしても機動力が劣ってしまう。

「ごめんねみんな、思いっきり揺れるから、しっかり掴まってて！」

アルトは操縦桿を右に押し倒し、ビルの群に突っ込んで行く。ギリギリの所でガジェットの攻撃を回避出来たが、まだ逃げ切れてはいない。

攻撃を回避しながらもビルの中を鳥の様に飛び、ガジェットの視界から消えた。

「よし、振り切った」

「アルト凄ーい」

「ありがとうスバル。さあ降下ポイントに着くよみんな、準備はいい？」

ハッチが開いた所で、ティアナは最終確認の為にモニターを開く。

「確認するわよ。あたし達はミッド中央の市街地方面、敵戦力の迎撃ラインに参加する。地上部隊と協力して無効の厄介な戦力、召喚士や戦闘機人達を最初に叩いて止めるのが、あたし達の仕事」

「他の隊の魔導士は、ＡＭＦや戦闘機人戦の経験がほとんどない。だから、あたし達がトップでぶつかって、兎に角向こうの戦力を削る」

「あとは、迎撃ラインが止めてくれる、という訳ですね」

「・・・でも、何だか、何だかちょっとだけエースな気分ですね」

エリオの男の子らしい顔に、ティアナは優しく微笑んだ。この数カ月、沢山の事を一緒に行ってきた年下の男の子。そんな子は自然に可愛く見える。

「ガジェットも戦闘機人も、迎撃ラインを突破されたら市街地や地上本部までは一直線です」
「市民の安全と財産を守る管理局員としては、絶対、行かせる訳にはいかないよね」
三人ともしっかりと頷く。

「あとは、ギンガさんが出てきたら・・・・」
「優先的に対処」
「安全無事に確保」
上からティアナ、エリオ、キャロの順に言い、スバルの方を見る。
当然反論は無く、頷いた。

「よし、行くわよ！」
「おう！」

上空に四つの光が現れ、それ等はそのまま地面に舞い落ちる。
スバルとティアナはそのまま着地、エリオとキャロは元の大きさに戻ったフリードの背中に乗り、四人は戦闘機人の反応場所に向って移動した。

その様子を遠くから見ていたオットーはいつも通りの感情の無い声で通信を入れる。

「ノーヴェ、ディード、ウェンディ、例の四人がそっちに向ってる。ただ、前とは状況が違う。正面から戦う気で来ている」
「な～に、望むところッスよ」

「ゆりかご浮上前に地上本部を制圧、司令部を押さえたい。状況に対する不確定要素は、なるべく排除する」
ギンガは何も言わずにスバルが映っているモニターを見る。しかし何も表情に現さずに、先陣を切って行った。

そして、キャロはビルの屋上に居るルーテシアの姿を見つけた。ルーテシアはキャロを一瞬だけ見た後、アルトが乗って居るヘリに向って指を刺す。

それが攻撃の合図だと読んだキャロは慌ててフリードに命令する。

「フリード！」
「グオオオオ！」

主の意図を読んだフリードはルーテシアの居る場所に進行方向を変える。

「キャロッ！　・・・予定変更、こっちを先に捕まえる。良いわねスバル？」
「うん、ウイング――」

ウイングロードを展開しようとしたその瞬間――

「ＩＳ発動レイストーム」

緑色のエネルギー弾がオット―の手から放たれた。スバルとティアナは素早くそれを察知し回避する。
スバルが回避したことに安心している一方で、ティアナはこの状況

に不味いと判断した。

「まずい、全員バラバラ――ッツ！？」

後ろから来たディードの攻撃を回避する。
そしてダガーモードで応戦するが、本命の攻撃によって弾き飛ばされ、廃ビルの中に突き飛ばされる。

「キャアアア！」

「ティア！？」

ティアナの悲鳴を聞きスバルは視線を移すが、ノーヴェの激しいラッシュによりすぐさま視線を前に戻す。
ノーヴェが蹴りを仕掛けて来た。この攻撃を回避したら反撃に出ようと考えていたスバルだが、その蹴りの速度が突如速くなり反応出来ず、壁に叩きつけられる。

「エリアルキャノン！」

その隙をガンナーであるウェンディが逃す訳が無く、スバルに向って攻撃をした。

「ック」

ドドーン！

「スバルさんとティアさんが・・・・」
「合流を――っあ」

エリオとキャロは急いで引き返そうとしたが、前からのガリューの接近によりそれが出来なくなる。

「ホイール・プロテクション！」

ケリュケイオンから放たれたピンク色の渦がガリューを包み、一時的に行動不能にした。

［ティア、ティア！］

エネルギー弾を受けたスバルだったが、それよりもティアナの方が心配らしく、必死に念話で名前を呼ぶ。

［この状況で個人戦は不味いわ！　早く合流を！］

急いで貫通させられた壁から外に出ようとしたが、突然現れた結界により脱出不可能になった。

「あっ！？」

「残念でした～、合流はさせねえッス」

ティアナが下を見ると、ノーヴェとウェンディと数機のガジェットが居た。

この空間には自分と相手しか居ない。そう実感したティアナは一回だけ息を吐き、心を落ち着かせる。

クロスミラージュの検索により、ノーヴェとウェンディの居場所が大雑把だが分かる。ティアナは一本の柱を盾にする様に移動し、敵

の出方を待った。

「ふっふ～ん。ハチマキとコンビでどうにか半人前、四人でやっと一人前のヘッポコガンナーが、仲間と切り離された気持ちはどうッスか～？」

「チンク姉の痛さと悔しさ、ハチマキの代わりにお前に返してやる！」

まだ攻撃しては来ないと予想したので、ティアナは落ち着きながら現状を整理し始める。

【こっちは結界の中、ライトニングもスバルも分散距離と戦力負担はかなり大きい。有幻覚も最後の切り札。もし魔力が空になったらみんなの援護にも行けないし、最悪別の戦闘機人や結界内にいるガジェットに殺されるかもしれない。ここで一番の選択は時間を稼ぐ事。情報が入り相手の数さえ分かれば自然と魔力配給の予測も出来る。有幻覚はそこで使う！】

一通り整理を終えた所で、三人に念話を繋ぐ。

［ライトニング、スバル、作戦ちょっと変更。目の前の相手、無理して一人で倒す必要はないわ。足止めして削りながら、それぞれに対処。それでも十分市街地と地上本部は守れる］

「バッカじゃねえの！　そんなに時間掛かんねえよ」

「あんたは捕獲対象じゃねえッスから、殺しても怒られねえッスからね～」

［念話が聞かれてる？　通信は以上！　全員、自分の戦いに集中！］

スカリエッティラボに突入したシャッハとフェイト。そして少し広い空間に出ると、そこには沢山の生体ポットに入っている女性達が居た。

「これは・・・人体実験の素体？」

「だと思います。人の命を弄び、ただの実験材料として扱う・・・・あの男がしてきた研究は、こういうものなんです・・・・」

フェイトの呟きに、シャッハは苦い顔をする。前から知っていたとはいえ、聞くだけと実際に見るとでは、感情の揺れもかなり変わってくる。

「一秒でも早く、止めなくてはなりませんね」

「はい・・」

二人が話し合っていると、突如洞窟内が揺れ始める。上を見るとガジェット三型が、支柱の一本を壊しているのが見える。

支柱にひびが入り、二人はその場を離れようとする。フェイトは三型の落下地点から素早く回避出来たが、シャッハは足元から現れたセインの腕に足を掴まれ移動できなくなる。

「シスター！」

急いで助けようとしたフェイトだが、突然飛んで来た大型のブーメランに足を止めてしまう。

「はあああ！」

シャッハはすぐに地面に打撃魔法を使い地面を壊し、三型ガジェットの落下を回避した。

［フェイト執務官。こちらは無事です、大丈夫。戦闘機人を一機捕捉しました。この子を確保次第、すぐにそちらに合流します］

［了解しました］

シャッハの安全にホッとしながらも、こちらに向って歩いて来るトーレとセッテを睨みつける。

「フェイトお嬢様、こちらにいらしたのは帰還ですか？　それとも反逆ですか？」

「・・・どっちも違う。犯罪者の逮捕。愛する者の約束を果たす。それだけだ」

ドゴーン！

ミッドチルダの海中心に激しい爆音が響き渡る。
その原因になっているのはサンとデビルのぶつかり合いだ。

「ッチ、圧縮術式二重変更、雷の投擲。二重装填・・・疾風迅雷」

火の状態から電気の状態に変更する。そしてその持ち前の速さでデビルの後ろに付き、手の平を当てる。

「魂送装填、天津ノ獰飆！」

予想ではデビルの体内から沢山の小さな竜巻が現れ、ここで終わる筈だった。しかし、何も起こらずに、サンの体にデビルの打撃が当たる。

サンの体はそれによって飛ばされ、海の表面を何十回も跳ねた。何とか途中で受け身を取る。

「術式が体内で消された！？」

『術式が入った瞬間にそれを解析し、演算を行い、術式を上書きしそれを消す。これが一番有力かと・・・・』

『カカカ、相手はマッドのスカリエッティが改造したものじゃねえか。そんな理屈的なもんじゃねえと思うぜ』

「どっちにしろ魂送装填が効かないとなると、あれが一番有効だな」

やはりデビルは強い。雷速の移動に目が追いついているし、火の状態でも力は向こうが上。火は力のみ、水は分解のみ、風は切断と風圧のみ、電気は速さのみ、氷は固さと再生のみ、これ等が術式兵装の弱点・・・・。

そんなことを考えながら口元をニヤリと上げ、呟く。

「混合圧縮・右腕、雷の投擲・左腕、天上の轟火・・・・霹靂閃雷炎帝（へきれきせんらいのえんてい）」

火と電気を同時に圧縮した。

その瞬間サンの姿が炎髪黄眼になり、周りに炎と稲妻を纏った状態になった。

「面白い、今日こそ貴様を殺す！」
「それはこっちのセリフだ！」

接近してきたのを見計らって、サンは手の平をデビルに向けた。

ドゴーーン！

再び爆音がミッドに響いた。

一方聖王のゆりかごに侵入したなのはとヴィータは、向って来るガジェットを一機残らず破壊していた。もっとも戦闘を行っているのはヴィータだけであり、なのはは激しい戦い方をするヴィータを心配そうに見ている。

そして、また一組みのガジェットをヴィータが破壊した。

「ハァハァ・・・・」
「ヴィータちゃん、飛ばし過ぎると・・・」

「うるせぇーよ、センターや後衛の魔力温存も前衛の仕事の内なんだよ」
「・・・・うん・・」

理に合った言葉に、なのはは頷くしかなかった。

「突入隊、機動六課スターズ分隊へ。駆動炉と玉座の間、詳細ルートが判明しました」

通信映像には、真逆方向にゆりかごを止める鍵となる場所が映っている。

「真逆方向!?」

「ック、突入隊のメンバーは、まだ揃わねえかっ?」

「各地から緊急招聘していますが、あと四十分は・・・・」

なのははどうしようかと悩んでいる。敵地の中をたった二人で居るのに、真逆方向にある二つの鍵。片方の鍵を取ってもう片方の鍵を取るのは、時間的に危険だ。

ほんの僅かに沈黙が流れ、それをヴィータが破る。

「仕方ねぇ、スターズ1・2別行動で行く」

「了解しました。すぐに応援を揃えます」

「ヴィータちゃん!?」

ヴィータの魔力は今までの戦いで結構な量を持って行かれている。その状態の本人が分かれると言ったのだ。

「・・・駆動炉に玉座のヴィヴィオ。片っぽ止めただけで止まるかもしれねえし、片っぽ止めただけじゃ、止まらねえかもしれねぇんだ。こうしてる間にも、外は危なくなってる」

「でもヴィータちゃん、ここまでの消耗が・・・・」

「だからあたしが駆動炉に回る。お前はさっさとヴィヴィオを助けて来い」

心配させない様に余裕な表情で言ったが、未だに心配そうな顔をし

ているなのはに、グラーフアイゼンを見せる。

「鉄槌の騎士ヴィータと、鉄(くろがね)の伯爵グラーフアイゼン。砕けねえもんなぞ、この世にねぇ。・・・・一瞬でぶっ壊してお前の援護に向ってやる、さっさと上昇を止めて、表のはやてに合流だ。それにあたし達でもサンの力になれる。お前も息子を愛してるんならとっとと行け」

「・・・・うん、気を付けて。絶対、すぐに合流だよ」

「ったりめーだ」

なのはは今まで来た道を逆に飛び、ヴィータはその逆方向に手をブラブラと揺らしながら歩いて行った。

その頃ティアナはノーヴェとウェンディと戦闘を行っていた。カートリッジも魔力も余り使いたくない今、主な戦闘方法は回避からのカウンター。相手に大振りの攻撃をさせ、そこをギリギリの所で避け、攻撃する。

【ったく、またサンの助言が助かったわね】

内心で笑いながらもウェンディの弾丸の嵐を舞うように避ける。体全体を動かさずに上半身を微かに動かす、重心を少しずらす、軸足を上手く使う。

そしてウェンディの弾丸雨の間を見つけ、そこに一発撃つ。

「うそっ!?」

自分の弾丸をまるで自ら避けながら来るティアナの弾に、ウェンディは驚きながらも合殺する。

「オラアアアア！」

凄いスピードで突進してくるノーヴェに、ティアナは眉ひとつ動かさずに、ニヤリと笑う。

「こいつ、幻影かっ！？」

接近して来るフロントアタッカーに全く驚かないガンナーに、少し戸惑った様だ。

「弾丸は実弾ッスから本物！」
「なんだよハッタリか」

再び速度を戻し、右手に装備しているリボルバーナックルを回転し始める。

「待つッスノーヴェ！　そいつの近くに魔力反応！」
「っな！？」

慌てて腕をクロスにして急所の攻撃を防ごうとする。この反応はさすが戦闘機人だ。基本的に熱い性格のノーヴェが、攻撃せずに防御の状態になったのも、他人の戦闘情報が入って居るからだ。

そしてウェンディの言った魔力反応が、ノーヴェに当たった。
ノーヴェに当たった物の正体は普通の魔力弾。ただし透明になるシルエットを被せた特殊な物だった。

「こいつ・・・前と全然違う！？」
「おかしいッスね～、あたし等戦闘機人でもここまでの行動変更は難しいのに～」
二人の言葉にティアナは一週間前のサンからの通信を思い出した。

「ティアナ、さっき連絡くれた時に少し言い忘れてたんだが、お前回避行動のシミュレーションでもしたらどうだ？」
「回避行動？　それならヴィータさんと嫌って言いたいくらいやったけど？」

フェイトとの練習の後に突然来た通信だったが、驚くこと無く普通に会話を繋げた。

「え～とな、簡単に言うとその場で回避行動を行う、って感じだ」
「その場でね・・・隊長達はそんな事一言も言わなかったし、やったこと無いんじゃない？」

確かにティアナの言う通り、なのは達の回避行動は移動するか防御魔法を使うかがほとんどだ。
ティアナが教えられたヴィータとの回避行動でも、ある程度間合いを取る回避練習だった。

「まあ俺が言うのも何だが、大抵の魔導士は防ぐか移動しての回避が多いからな。結構危険な行動かもしれないしな」
「あんたはそれを何の練習もしてないあたしにやれってこと？」
相変わらずの突拍子かつ非常識な案に溜息を吐くしかない。大多数

の魔導士が行わないことをサンは自分にやれと言うのだ。

「いや、練習なら無意識の内にやってると思うぞ。六課入って初めのころ、母さんとマンツーマンで弾丸をセレクトする練習やってただろ？　あれもその場待機での行動だったし、それなりに能力はあると思うんだが・・・。それにヴィータさんとの練習も度胸強さの練習に合ってたしな」

「・・・だけど一晩で身に着く能力でもないでしょ？　それに無茶はしないってなのはさんと約束したし」

「あくまでシミュレーションだけだ。一晩で身に着く能力では無い事は確かだと思うが、これはギリギリの所まで冷静に判断したら出来ることだし、自分の癖とか行動パターンとかを潰して行けば自ずと出来る・・・と思う」

最後に付いた曖昧な言葉にカクっと首を下げる。

「だいたい何であたしなのよ。エリオとかキャロの方がポディション的にもいいんじゃない？」

「兄さんも姉さんもまだ子供だからな。お前みたいに自分の癖とか見抜ける程じゃないってことだな。それに兄さんには速度、姉さんにはフリードが居るから一人になっても大丈夫だと思うし・・・まあスカリエッティと戦うことになるまでに有幻覚を習得出来なかった時の滑り止めにでも――」

「大きなお世話っ！　ご忠告ありがとね！　年上好きのマセガキ！」

「ゴラァ！　マセガキとは聞き捨て――」

サンが話し終える前に通信を切る。
再び溜息を吐き、ベッドに横になる。スバルは風呂に入っており、現在この部屋にはティアナとクロスミラージュしか居ない。

「ハァ、あたしに出来るのかしら・・・古代ベルカ騎士の幻術に、魔導士が使わない回避方法」

『大丈夫です、沢山の方に見守られているあなたなら絶対に出来ます。師匠であるなのは様、練習のお手伝いをしてくれるフェイト様。そしてあなたのパートナーであるスバル様』

「なっ!?　何でそこでスバルが出てくるのよ!?」

『特に意図はございません。ただ、マスターはスバル様に特別な感情が――』

「ある訳ないでしょ!?　だいたい・・・その・・今日フェイトさんにときめいてしまったし、スバルはただの悪友だし、えっと、スバルはフェイトさんが好きだし、スバルとフェイトさんがキスしても何も思わなかったし、スバルはあたしのことただの友達って思ってるし、スバルは――」

顔を赤くし、手をモジモジさせて必死に反論するティアナは、フェイトの時とは少し違った雰囲気になっている。

『途中からスバル様のことしか言っていません。一回スバル様のお気持ちを聞いてみてはどうですか?』

「嫌に決まってるでしょ！　だいたい――」

ウィーン

ドアの開く音が聞こえ、ティアナは即座に口を閉じる。

「あれ？　どうしたのティア？　顔赤いよ？」

「うっさいバカスバル！　あたし疲れたから寝る！」

「えええ！？　あたし何かしたっ！？」

・・・話がずれてしまっている。

自分の回想の中だったが、何故かツッコミを入れてしまった。

昨日有幻覚をものにしたティアナだったが、何だかんだで気になった様で、ある程度のシミュレーション練習はしていたのだ。

暇な時間にしていた練習なのだが――

「まさかここまで実戦に使えるとはね・・・・」

ガキン！

「二度目は通用しないわよ」

後ろから現れたディードの攻撃をダガーモードで受け止め、透明シルエット弾を向かわせる。

魔力反応の正体を既に知っているディードはそれの攻撃をかわし、一回間合いを取る。

「・・・・強い・・」

「あんな雑魚にあたし等が手こずってると！？」
「認めちゃったらどうッスか～、あいつはただのヘッポコガンナーじゃないって」

三人の話合いに思わずティアナは笑ってしまう。まだ自分は切り札を切った訳じゃない、魔力をそこまで使った訳じゃない、この十数日地獄の様な練習をした訳じゃない、それなのに強敵と判断される。これ程待ち望んでいたことは無い。

【これなら見返せる、兄さんを馬鹿にした奴らを・・・・】
「だから、証明する為に、あんた達には踏み台になって貰うわ！」

初めて自分から敵に向って行く姿は、勇敢だったティーダ・ランスターに良く似ていた。

ティアナが戦っている同時刻、外ではエリオとキャロも戦っていた。

「あなたはどうして、何でこんなことするのっ？」

キャロの未だに自分に対する言葉に、僅かに眉を動かすルーテシア。

エリオもビルの壁を足場に空中にすっと居り続け、ガリューと打ち合い続ける。

「こんな所で、こんな戦いをする理由は何なんだ！？」
「目的があるのなら教えて、悪い事じゃないなら、私達、手伝えるかもしれないんだよ」
「ック」

ルーテシアはそれだけ呟いてキャロに向って魔力で作ったナイフを撃つ。素早くそれに気付いたエリオは、ガリューの攻撃を上手く回避し、ストラーダの噴射を使って一気にフリードの背中まで飛ぶ。

「ハアアア！」

ストラーダを振り、ナイフを弾く。

「・・・・・・」

「え？」

一瞬だけ寂しそうな顔をしたルーテシアの表情に、二人は気付いた。

一方ゼストとアギトは首都クラナガン上空を飛んでいる。目的地は地上本部に居るレジアスだ。

そしてゼストは何かに感づいた様だ。そのゼストの様子を読み取り、アギトは辺りを見渡す。

遠くて見えにくいが、二人の移動方向にはシグナムとリィンが居る。

「旦那、あいつら・・・・」

アギトは心配しているのだが、ゼストはそれに構わずシグナムの真正面に飛ぶ。

「局の騎士か？」

「本局機動六課、シグナム二尉です。前所属は首都防衛隊、あなた

の後輩ということになります」
「そうか」

敵がすぐ目の前に居るのにも関わらず、二人は淡々と話を始めて行く。その様子が嫌なのか、アギトはゼストを少し睨む。

「中央本部を、壊しにでも行かれるのですか？」
「古い友人に・・・・レジアスに合いに行くだけだ」
「それは、復讐の為？」
「言葉で語り合えるものではない・・・・。道を空けてもらおう」

槍を構えたゼストに対する言葉は決まっている。闇の書事件の時、ティアナとなのはがお互いの気持ちを言い合った時。

結局人との関係は――――

「言葉にしてもらわねば、譲れぬ道も譲れません」

言葉にしないと分からない。

「グダグダ語る何てな！　騎士のやるこっちゃねえんだよ！」

アギトは叫びながら自分の魔力光と同じ球体になり、ゼストの中に入って行く。するとゼストの髪の色が金になった。

「騎士とか、そうでないとか、お話しないで維持を張るから戦うことになっちゃうんですよ！」

リィンはアギトの言葉に返しながら、アギトと同じ様に球体になり、シグナムの中に入る。リィンが中に入った瞬間にシグナムの髪の色

が青紫になった。

お互い火の魔力変換物質を使いデバイスを強化させ、構える。

「行きます」

シグナムが言った途端に両者がぶつかり合った。

そしてスバルは、ギンガと立ち合っていた。

「ギン姉」

妹としての顔でギンガの声を呼ぶが、何も反応せずに、武器のリボルバーナックルを回転させる。

敵意があると判断したスバルは、ギンガが操られていることに落ち込む。しかしすぐにマッハキャリバーを見、ギンガとの戦闘について考え始める。

【ギン姉に怪我させちゃうから、振動破砕は使えない・・・・】

振動破砕・・・・戦闘機人が持っているＩＳもスバルも持っていたのだ。このＩＳはギンガが連れ去られた時に我を忘れ解放した能力。触れただけで大ダメージを与える事の出来る、極めて殺傷能力の高いＩＳ。

【狙うのは、打撃や破壊とかじゃなくて、魔力ダメージでのノックアウト、ギン姉と本気の勝負なんて生まれて初めてだけど・・・・】

「あたしが絶対、助けるから！」

「うりゃあああ！」

ヴィータはギガントフォームのグラーフアイゼンを三型のど真ん中に叩きこむ。

当然ガジェットがヴィータの攻撃を防ぎ切れる訳も無く、三型は爆発した。

「ハァ、ハァ、ここまで来れば、大丈夫」

目の前には既に別の空間からの光が見えている。今まで歩きのペースだったが、なのはの応援に行けそうだ。

「カートリッジもまだある、大丈夫、楽勝だ」

口元を上げながら再び歩き始めようとした瞬間、ヴィータの胸を刃物が貫いた。

「ぁ・・・ぁ・・ぁ」

何が攻撃してきたのかを知る為に、後ろを出来る限りの速さで振り向く。

そこに居たのはなのはが大怪我した原因になったロボット。

雪の積もる中、なのはの血で赤く染まる雪と、ごめんねと謝るなのは。

怒りが溜った。壊したいと思った。

「うぁ・・・・あああああ！」

だからそれを実行する為に、胸に刃物がある状態でそれをグラーフアイゼンで叩いた。

爆発付近に居たのでヴィータは数メートル飛ばされる。

「ぅ・・・ゴホッ」

血を吐きながらも、何とか立ち上がる。そしてガチャガチャと音のする方には、なのはを刺したロボットが大量に接近してくる。

「あの時・・・なのはを落としたのは、てめえらの同類か！　一機残らず、ぶっ壊してやるー！」

「ハァ、ハァ、まさか私をここまで追い詰めるとはね・・・・」

「二つの属性の利点の上昇と、更にもう一つの能力を手にできる俺の最高兵装。火の力、電気の速さ、火と電気を混ぜたことでのプラズマも我が物に出来る」

息を乱すデビルを見て、サンは悪役の様に笑う。もっとも勝ちを思っているのではない、やっと次の段階にデビルを連れて来れただけなのだ。

「貴様も待ち遠しい様だ。第二の形態になってやろう！」

次の瞬間にデビルの人間の皮膚や、爪が剥がれ、次々と竜の身体にあるものが現れてきた。夢を入れたら三度目のその光景にサンは驚かずに、新たな術式兵装を行う。

「さあ、第二ラウンドの開幕だ！」

決戦の序章（後書き）

バナナ「やっと投稿出来た」
サン「……スバティア小説にもなるのか？」
バナナ「当然である！　元々考えていたこと何だよ。ただ、お互いフェイトさんという人がいるからね～。くっ付くのは何時になるのでしょう？」
サン「まあスバティアになろうが別にいいんだが、ティアナの性格若干変わってない？　踏み台って言葉あいつ使うか？」
バナナ「これも一つの理由で、ティアナには若干中二病になって貰いたいんだ」
サン「有幻覚の中二病患者ティアナ。反感受けるのか受けないのか微妙だよな。カッコイイ感じにはなるんだろ？」
バナナ「当然、サンみたいな中二全開とは違う中二だ」
サン「その発言については後で”ゆっくり”語り合おう。それで、ティアナの回避行動だが、イメージとしてはどんな感じ何だよ？」
バナナ「ドラゴンボールのフリーザ編で悟空がギニュー特戦隊の二人（名前忘れた）と同時に戦っている時、動かずに攻撃をかわしていただろ？　あそこまでレベル高くはないがあんな感じ」
サン「なるほどな、確かに俺たちの世界ではあの回避方法をする魔道士は多くないからな」
サン「まだまだ質問、プラズマ能力って何？」
バナナ「ぶっちゃけ俺も頭悪いから理解出来ないんだが、完全に電離した陽イオンと電子で自由に動ける、電流が流れやすい、レーザーが撃てる、原子レベルの細かな作業が出来る……↑チート？」
サン「今頃言うな！　読者の皆さま、今の発言は無かったことにしてください」
バナナ「まあともかく、次回も頑張ります！」

サン「さて、今からプラズマがどれだけのことを出来るか研究するか」

バナナ「取り敢えず私を見ながら言わないでくれる？」

Ｐａｉｎ　ｔｏ　Ｐａｉｎ　（前書き）

また原作と同じ題名です。すいませんでした。

色々なことに才能の無い私ですが、サブタイ考える才能も無いみたいですｏｒｚ

それと今回は視点変更が激しいです。これについては先に謝罪します。

Pain to Pain

王座の間にはクアットロ、ディエチ、そして王座に縛り付けられ、苦痛の表情とうめき声を上げているヴィヴィオがいた。

「クアットロ、正直この作戦、あまり気が進まない」

「あ～ら、どうして？」

暗い表情をしているディエチとは違い、クアットロは笑顔だ。目の前に縛り付けられている女の子が居るのに笑っている・・・・どう見ても異常なのはクアットロだった。

「・・・こんな小さな子供を使って、こんな大きな船を動かして、そこまでしなくちゃいけないことなのかな？　技術者の復讐とか、そんなのって・・・・」

「あ～あれ、あんなのドクターの口先三図、ただのでたらめよ」

「そうなの？」

「ドクターの目標は初めから一つだけ。生命操作技術の完全なる完成。そして、それが出来る空間作り。このゆりかごはそのための船であり、実現の為の力。まっ、今回の件で軽く何千人か死ぬけれど、百年立たずに帳尻が合うわよ。ドクターの研究は～人々を救う力だもの～」

あっさりと大量殺人発言を言い、なおかつ命を物としか見ていない言葉に、ディエチは顔を俯かせた。

「どうしたの～ディエチちゃん？　お姉さまやドクターの言うことが信じられなくなっちゃた～？」

「そうじゃないよ・・・そうじゃないけど・・・」

「ただ、こんなに弱くてちっちゃい命が、それでも生きて動いているのを見ちゃうと、この子達は別に、関係無いんじゃないかって・・・」

「姿を見る前までは平気でトリガーを引けたのに、ねっ・・・・」

クアットロの言葉に何も言い返せなかった。トリガーを引き、ヴィヴィオのみならず、シャマルとヴァイスも撃った身だ。

【これは、偽善以外の何にでもないのかな？】

そう考えると自然に喉の奥がツーンと来る。初めての感覚にディエチは堪え、口を開く。

「・・・ごめん、気の迷いだ。忘れて、命令された任務はちゃんとやる・・・・」

「うん」

「そうしないと、地上のお姉や妹達も面倒なことになるしね」

【お馬鹿なディエチちゃん。あなたも、セインやチンクみたいに、つまんない子なのね】

ディエチが横を通りながら、感情的で情けのある姉妹とディエチを見下す。
そして、ディエチが王座の間から出たのを見計らい、機動六課メンバーの戦闘映像を見ていた。一部に予想外の戦闘状況もあるが、それでも別段気にしなかった。

「うふふ・・・な～んにも出来ない無力な命なんて、その辺の虫と一緒じゃない。いくら殺しても勝手に生まれてくる。それを弄んだり、蹂躙したり・・、かごに閉じこめて眺めるなんて、こぉんなに楽しいのに・・・・ねぇ？」

王座の間に残忍な女の哄笑が響いた。

その頃サンは新たに兵装した火と風の状態で戦っていた。
炎風の刃がサンの周りを生き物の様に動く。

「おらあああ！」

ぶつかりあったサンとデビルの拳。その衝撃にまた、海が荒くなる。

「こっちが本命だ、バックドラフト！」

―ドゴ――――ン！

サンが叫んだ瞬間にデビルを中心に大爆発が起こった。
竜人状態のデビルでも今の攻撃には堪えたのか、体全体を抑えながらサンに突進する。

「バックドラフト！」

サンが叫んだ瞬間に、またデビルを中心に爆発が起こる。

爆発の中心に居たデビルは、自分の周りに大量の防御魔法陣を展開して、爆発から身を守り、イライラした声で呟く。

「バックドラフト・・・・火災の現場で起きる爆発現象。室内など密閉された空間で火災が生じ不完全燃焼によって火の勢いが衰え、可燃性の一酸化炭素ガスが溜まった状態の時に窓やドアを開くなどして、熱された一酸化炭素に急速に酸素が取り込まれると結びつき、二酸化炭素への化学反応式が急激に進み爆発を引き起こすというもの。本来ならこの様な現象を一瞬で起こすのは不可能。術式兵装はここまで便利な能力なのか・・・・」

「悪いな、風と火を混ぜたイメージがバックドラフトだったんだよ。術式兵装はイメージによって能力が変わる」

ポケットに手を入れながら笑って来るサンは悪役としか思えない。だがそれに負けずデビルも悪人の表情になる。

「確かにその組み合わせは強いが、速さが足りなくなる」

次の瞬間にデビルの姿がサンの視界から消えた。目では追えなかった速度だが、感と気配を頼りにすぐにデビルの位置を把握した。

「上か！」

サンの上には赤い宝石の塊を何百も片手で展開しているデビルがいる。更にもう片方の手でも宝石の展開を始め、その数は既に千を超

えた。

「あれはレリック！？」

『違う。エネルギー量がレリックの方がでかい。最も、あいつ本人とレリックを比べたらあいつの方がでかいがな。カカカ』

オーバーの言葉に軽く安心し、サンは再び「バックドラフト！」と叫んだ。再びデビルを中心に爆発が起こり、海面が荒々しく揺れる。だが、攻撃は止まらず爆発地点から大量の宝石がサンに向かって飛んでくる。

「ッチ、天上の轟火」

デビルがこの程度でひるんだりしないとは予想していた事態なのだが、やはり面倒臭い。いざという時の為に自分の手を使わずに、炎の巨腕を使い宝石を弾く。

物凄い量の宝石が海に落ちていくが、それでも勢いは衰えること無く次々と飛んでくる。

「その宝石は囮だ」

デビルの声が後ろから聞こえた瞬間に、サンの背中に激しい激痛が走った。それだけでは終わらず、斬られた感覚、何かが貫通した感覚が一気に体全体を走る。

何とか動く力で体を見ると、沢山の宝石が体の中を貫いていた。

余りの痛さに一瞬気が遠くなったが、戦っている皆や辛い思いをしているヴィヴィオのことを思い出し、何とか意識を戻した。そして

新たな圧縮属性を思い浮かべる。求めるのはこの体を元に戻せる状態。

【圧縮術式変更・右腕、海角天涯・左腕、こおるせかい・・・・とわのめい】

―ガキン！

何かが凍った大きな音が聞こえた。

その正体とはサンの体が凍った音だった。サンの体は彫刻の様になり、氷の術式兵装の姿と大して変わらない。

「その状態でも痛みはくる筈だ！」

氷の状態になったことに面倒とは思わずに、その状態の弱点を素早く付いた。高速のラッシュを行い、彫刻を次々と壊していく。破片が次々と海に落ち、サンの彫刻だった物の現在の姿は、片足しかない状態だ。

そんな姿になってもデビルは攻撃の勢いを落とさない。スフィアを大量展開し海に落ちた破片に向わせ、手の平で砲撃魔法を撃つ。

「ダークエンド・ブレイカー」

パラパラパラ

完全に氷の粒になった。それなのにデビルは攻撃の手を止めない。砲撃魔法を粒一つ一つに高速で撃ち続けている。

「ッチ、これ以上は無駄の様だな」

目の前に集まっている氷と海水を見て悪態吐く。
このような現象が起こるのは当然サンが関係していることであり、
段々人間の形になっていくことから復活していくのが分かる。

集まった海水と氷の粒が、完全にサンの姿になった。もはやここまで来ると人外を通り越している。

最も、これで諦めることなどデビルは考えない。

「今日で全てを終わらせる！　妻と息子が死に、貴様が産まれたこの日に！」

人間の形をした竜はその身に黒の魔力光を纏わせ、復讐の為にとサンを殺す。

「ヴィヴィオを救う為に、両親や兄姉、機動六課（みんな）に心配かけない為、そしてカリムの騎士として、俺は貴様を倒す！」

泣いている少女（ヴィヴィオ）、自分のことを心配してくれている両親、兄姉や機動六課（みんな）に心配かけさせない様に、腕に巻かれているリボンをくれた主（カリム）の為、何より自分の為にサンはこの戦いに勝つ。

ルーテシアとガリューの戦闘を続けていたエリオとキャロだが、一瞬だけ見せた寂しそうな顔が頭から離れない。

ルーテシアの想いを聞く為に必死に声をかける。

「何の為に戦っているのか、それだけでも教えて！」

「でないと、僕達は君達を本当に・・・・」

「ドクターの、お願い事だから・・・・」

ルーテシアはそれだけ言って、周りにいるインゼクトを弾丸の代わりに発射した。

「ウイングシュート！」

キャロは自分に向かって来る攻撃に対して同じく攻撃魔法で応戦した。

お互いの魔法はお互いの防御魔法によって防がれ、辺りに土煙が舞う。

最初に土煙から出たのはルーテシアが乗っていたガジェットとフリード。二人共既に空中には居らず、ビルの屋上に移動していたのだ。

「・・・・ドクターが私の探し物、レリックの??番、それを探す手伝いをしてくれる。だからドクターのお願いを聞いてあげる」

「そんな、そんなことの為にっ？」

キャロにとってのレリックはロストロギアでしか無い。一方ルーテシアのレリックの存在は、母親を復活させられる唯一の存在。

「そんなこと・・・・？」

微かに怒りの想いが籠った言葉を呟き、キャロに向って再びインゼクトを発射する。

キャロは慌てて防御魔法を展開する。

ドーン！

「あなたにとってはそんなことでも、私にとっては大事なこと・・・・」

「違う、違う、探し物のことじゃなくて・・・・」

「ゼストももうすぐ居なくなっちゃう、アギトもどこかへ行っちゃう、でも、このお祭りが終われば、ドクターやウーノ達みんなで？？番を探してくれる。そしたら母さんが帰って来る・・、そしたら私は、不幸じゃ無くなるかもしれない」

「違う！　それは違うよ！」

「あなたと話すの・・・・きらい」

次の瞬間にキャロは自分の後ろから物音が聞こえた。後ろを向くと、攻撃のモーションに入っているガリューが居た。

「でやあああああ！」

頭上からエリオが接近してき、ガリューは一旦間合いを取る。だが間合いを取ったのは自分が攻撃を受けたく無かっただからじゃない。ガリューは速攻でエネルギー弾を展開し、二人にぶつけた。

再び爆音が響き、激しい土煙が舞う。

「ハァ、ハァハァ、違うんだよ。幸せになりたいなら、自分がどんなに不幸で悲しくても、人を傷つけたり、不幸何かにしちゃ駄目だよ！　そんな事したら、欲しい物も幸せも、何も見つからなくなっちゃうよ！」

キャロの言葉に微かに眉を動かす。幸せになりたい為に自分が行っていることが、幸せになれない行いと言われたのだ。ルーテシアの心は自然と揺らぐ。

「私、アルザスの竜召喚士、機動六課の魔導士、キャロ・ル・ルシエ！」
「同じくエリオ・モンディアルと、飛竜フリードリヒ！」

「話を聞かせて！　レリック探しも、あなたのお母さん探しも、あたしや機動六課のみんなが手伝うから！　あなたの名前はっ？」

今まで体験した事の無かった優しい言葉に、ルーテシアはかなり迷っている。それは無表情な彼女が感情を少し出しているので、見ただけで分かるものだった。

その時ルーテシアの隣にモニターが現れ、そこに映っていたクアットロが明るい声で言う。

「あらら～、駄目ですよルーテシアお嬢様ぁ。ガリューさんも。戦いの最中、敵の言うことに耳何かかしちゃいけません。邪魔な物が出てきたらぶっ殺してまかり通る。それが私達の力の使い道。ルーお嬢様にはこの後、市街地ライフライン停止ですとか、防衛点のぶっ潰しですとか、色々お願いしたいお仕事もありますし～」

「クアットロ・・・・でも・・・」

「あ～迷っちゃってますね～。無理も無いです、純粋無垢のルーテシアお嬢様に、そこのおチビの言葉は毒なんですね・・・。と言う訳でポチっと」

クアットロがボタンを押した途端に、ルーテシアの雰囲気が変わった。急に戦闘機人が使う魔法陣を展開し、更にルーテシア本来の召喚魔法陣がエリオとキャロを囲むように展開される。

「ル―ちゃん・・・・」

「ガリュー、これは？」

二人も今までと違う雰囲気に気が付いたのか、敵である二人に声をかけた。だが二人からの返事はなく、代わりに通信のクアットロからの声が聞こえる。

「ル―お嬢様が迷ったりしない様にしてあげま～す。ドクターが仕組んでくれたコンシデレイションコンソウルで、誰の言うことにも聞くことも耳を傾けない、無敵のハートをプレゼント」

その瞬間に召喚獣の雰囲気が変わった。もの凄い怒りと悲しみに溢れた声を上げる。

「お嬢様～、聞こえますか～？　目の前に居るのがお嬢様の敵で～す。全力でぶち殺さないと、お母様と会えませんよ～」

「この・・・」

卑劣な行いに、エリオとフリードはクアットロを睨みつける。

「インゼクト・地雷王・ガリュー・・・・こいつら・・殺して。殺して～～！」

涙を流しながら金切り声を上げるルーテシアに答える様に、召喚獣達は一斉にエリオとキャロに飛びかかった。

「ハァアアア！」

ザンバー状態のバルディッシュを武器に、フェイトはトーレとセッテと戦闘を行っている。状況はフェイトの劣勢だ。二対一なのも理由の一つだが、それよりもＡＦＭが重いのが理由だ。

「ハァ、ハァ、ハァ」

スフィアを展開させながら膝を着く。

【ＡＭＦが重い。早くこの二人を倒して、先に進まなきゃいけないのに・・・。だけど、ソニックもライオネットも使えない。あれを使ったら、もう後がなくなる。スカリエッティまで辿り着けなくなったら最悪だし。逮捕出来たとしても、他のみんなの救援に回れなくなる】

フェイトはこの状況をどうしようかと考えていると、突然目の前に大きなモニターが現れスカリエッティの余裕な表情が目に入った。

「御機嫌よう、フェイト・テスタロッサ執務官」

「スカリエッティ！」

「我々の楽しい祭りの序章は、既にクライマックスだ」

「何が楽しい祭りだ！　この地上を混乱させている重犯罪者が！」

フェイトの怒鳴り声にもスカリエッティは動じずに、煽る様に話し始める。

「重犯罪？　人造魔導士や戦闘機人のことかい？　それとも私がその根幹を設計し、君の母、プレシア・テスタロッサが完成させた、プロジェクトFのことかい？」

「全部だ」

「いつの世でも革新的な人間は虐げられるものだよ」

「そんな傲慢で、人の命や運命を弄んで」

「貴重な材料を無差別に壊したり、殺したりはしないさ。尊い実験材料に変えてあげたのだよ、価値の無い無駄な命をね」

フェイトの中で理性が切れた。自分が辛い思いをしながら知った命の大切さ。それをこの人間は笑いながら無駄と言ったのだ。

考えるより先に体が動き、フェイトはバルディッシュを思いっきり持ち上げる。

パチン

スカリエッティが指を鳴らした瞬間に、地面から血の様な赤い糸が現れ、フェイトの足に絡みついた。

すぐに脱出しようとしたフェイトだが、ゆっくりと聞こえる足音が聞こえ、意識がそちらに行ってしまう。

「フッフッフ、アハハハハ。普段は温厚かつ冷静でも、怒りと悲しみにすぐに我を見失う」

先程のスカリエッティの発言に対する怒りが頭から離れない。その状態のフェイトにスカリエッティは右手に着けている魔法具を使い砲撃を放つ。

「しまっ」

ドカーン！

気付いた時は既に遅く、攻撃をくらい地面に落ちる。
そして再び赤い糸を出し、檻を作りフェイトを中に閉じ込めた。

「君のその性格は、本当に母親譲りだよ。ただ、君の恋愛の時の正確に興味がある。母親であるプレシア・テスタロッサともオリジナルであるアリシア・テスタロッサとも違う、まるで貴公子の様な部分もあると聞いた。私は恋愛には一切興味ないし、一部の感情に身を任せる行動など嫌いなんだがね。言いたいことは、何故君がプレシアともアリシアとも違う一面を持っているかだ」

「・・・お前には一生分からない。愛の強さ、暖かさ、優しさ。なのはが私に全てをくれた、なのはが沢山のことを教えてくれた、なのはに対する人とは違う気持ちに芽生えた。中々気持ち伝えられなくて、一方的な好意と自分で勝手に決め付けていた時の辛さ。一緒に居るだけで幸せになれて、なのはが笑ってくれるのなら私は何だって出来ると思える強さ。愛を受け付けようともしないお前には

一生分からない！」

「返事はＮＯということか・・・・、ではもう少し私の話に付きあって貰うとしよう」

ミッドチルダ上空でシグナムとゼストは戦っていた。どちらが優勢とは言い難い戦いだ。
ゼストは技術や感がシグナムの2、3歩前を進んでいる一方で、シグナムは体調が万全な状態であり、魔力値もゼストより少しだけだが多い。

【さすがストライカー級魔導士。体が危険な状態と聞いていたがそれを全く感じさせない程の強さ・・・・。だが、これなら】

「レヴァンティン！」

凛とした声に反応するかのように、シグナムの手に鞘が現れた。レヴァンティンを鞘の納めカートリッジを使い、レヴァンティに炎を纏わせる。

『炎熱加速』
『「飛竜一閃！」』

今までの攻撃とは威力が違うと判断したゼストは槍を構える。

『炎熱消去、衝撃加速！』

アギトが術式名を叫ぶとゼストの槍に炎が包んだ。

「ハアアア！」

ゼストが槍を振るうと衝撃波が放たれ、鞭状になっているレヴァンティンの動きを止めた。

「っな！？」

「うおおお！」

驚いている隙に接近し、槍を振るう。シグナムは鞘を使って何とか防ぐが、段々と鞘にひびが入ってき、ゼストが一段と力を入れると真っ二つになった。

「うあああ！」

攻撃の衝撃により、下に勢い良く落とされたシグナム。後数メートルで地面と激突する所で、リィンがクッション変わりになる魔法陣を展開し、衝撃をゼロにした。

「ック、しまった」

『ロストはしていません、追いかけるです』

「ああ」

地上本部へと飛んでいるゼストを、自分が出せる限りのスピードで追いかけた。

ギンガは頬に付いた血を手でぬぐいながら目の前に居るスバルを見る。
スバルは既に体もバリアジャケットもボロボロの状態で、足をふら付かせながら何とか立ち上がる。

『ブリッツキャリバー、応答ありません』
「ＡＩユニットを弄られてるんだ。ギン姉・・・・急ぐんだ、ギン姉もみんなも、あたしが助けるんだから・・・・」

スバルは体制を整え、魔法陣を展開する。

「うおおおお！」

スバルとギンガがそれぞれウイングロードを使い、上空に上がった。
ウイングロード使い同士の戦いは、ウイングロードが交差する場所で打ち合いが始まる。

二人の道が重なった。
最初に出たのはスバルで右のストレートを打つが、左手であっさりと止められてしまう。
すぐに左手で攻撃しようとするが、それより先にギンガの右拳が放たれた。

「うわあああああ！」

勢い良く飛ばしたスバルにギンガは追いつき、左手を向ける。

「リボルバー・・・・」

咄嗟の判断でバリアを使い防ぐことが出来たが、ギンガの攻撃はこ

れで終わりでは無い。左手首が回転し始め、それが段々と速くなっていく。数秒後には残像でドリルの様になり、それがスバルのバリアを突き抜けて行く。

「ギムレット・・・・」

ギンガの機械的な手が勢いよく当たり、スバルは地面へと突き落とされた。

「ギン、姉ぇ・・・・」

ずっと優しかった姉が、今自分を感情の無い目で見降ろし、機械的な行動をしている。ギンガのことが大好きなスバルにとって、これ以上辛い事は無かった。

「ギン姉ぇえええ～！」

堪える事の出来ない涙を流しながら、スバルはギンガの名前を泣きながら叫んだ。

ドクン！

スバルが悲鳴を上げた同時刻に、ティアナの心臓に痛みが走った。直感で何か良くないことが起きている感じだ。

「いやな感じね・・・・」

「てめぇ、なめるのもいい加減にしやがれ！」

敵の目の前に居るというのに胸に手を当てながら溜息を吐いていたので、ノーヴェはイライラしている。
リボルバーナックルを回転させながらティアナに突進する。

「別になめてる訳じゃないわよ。ただ結界が破れるまでの時間が欲しいだけ」

ニヤニヤと笑いながらその場で回避するティアナにますます腹が立ったのか、猛ラッシュを続ける。

「ディードも接近お願いッス。あたしは隙が出来たら速攻で撃つから」
「・・・・了解」

接近して来るディードを見て、ティアナは次の判断をする。
攻撃して来るノーヴェに一発だけ弾丸を撃ち、間合いを取らせた。
そしてその隙にノーヴェから逃げる様に走る。

「クロスミラージュ、インヴィジブルショットの術式の解析をお願い」
『了解しました』
「それと誰かと連絡取れた？」

飛んでくる弾丸を先とは正反対に突っ走って避け、接近して来るノーヴェとディードにはスフィアを撃ち接近を妨害した。

『未だにどなたとも連絡が取れません。念話もこちらから一方的にしか』
「その念話も戦闘機人に聞かれる・・・・。結界が敗れるまでもう

少し時間稼ぎが必要みた――」
「ハァアア！」
「ッチ、やっぱ三人相手になるとしんどいわね！」

ディードは前から斬る、ノーヴェは後ろからのストレート、ウェンディは遠距離攻撃を、それぞれ同時にした。ティアナは素早くビルの天上に向ってワイヤーガンを撃ち、天上に向って行く。

【視野の狭いとこでの三人相手は回避に限度がある。三人一斉攻撃のその場の回避行動は難しい。これは結界が壊れる前に有幻覚を使う必要が――――】

「ＩＳ発動、レイストーム」

ドドドーン！

上昇中のティアナに、光の渦がもろに直撃した。

「・・・・ック」

土煙が舞う中で何とかティアナは戦闘機人から隠れられる場所へと移動した。オットーもティアナの移動を察知出来なかった様で、三人をこちらに呼び寄せる。

「オットー、どうしてここに！？」
「あの幻術使いが面倒だと判断した・・・・結界は現状維持している」

「そうッスか、正直助かるッス。ねえノーヴェ？」
「あんな奴あたし一人でも！」

「言い合ってる場合じゃない・・・・管理局の魔導士が来ないうちにあの幻術使いを・・・・」

オット―の正論にノーヴェは黙り込み、早くティアナを殺すべく走って探しに行く。更にディードとウェンディも飛びながらティアナを探し始め、オット―もモニターを操作しながら検索する。

ティアナが戦闘機人に見つかるまで、そう長くは無い。

ゆりかご内部。なのははヴィータと別れた後、一刻も早く王座の間に着くために自分の出せる最高速度で飛んでいた。だが、いくらゆりかご内が広くてもやはり建物の中だ。空中での動きは中々出来なく、なのはは更に焦ってしまう。

また目の前に立ちふさがったガジェットの群れを突っ込みながら破壊した。

そしてヴィヴィオのことを考え、ある時のシャッハとの会話を思い出した。

「遺伝子データの照合で、ヴィヴィオの元となった人物の出身年代が判別しました。約三百年前、聖王時代の、古代ベルカの人物です。ヴィヴィオのママは、その当時の人物でしょうから・・・・」

「もう、この世にはいないってことですね・・・・。ただ、ヴィヴィオはママって言葉を、自分に特別に優しくしてくれる人のことだ

と思ってるみたいですし」

チラッとヴィヴィオを向くと、ボールを持ちながら手を振ってきた。なのははそれに手を振って返した。その様子を見てシャッハは微笑む。

「でも、本当によく懐かれています。このまま、ご自分の娘さんに？」

「正直迷っています。あの子を必要としてくれて、受け入れてくれる温かい家庭で幸せに暮らしてもらうか・・・・」

「あの子は、いやがりますでしょうに・・・・」

「幸せにしてあげる自信がありません・・・・」

「どうして？」

「私もフェイトちゃんも、サンのことを大切に大切に育てました。でも、それが結果的にデビルとボロボロになってまで戦うことになってしまった・・・・。エリオとキャロも自ら望んで管理局に入ったとはいえ、やはり普通の同年代の子供とは少し違います。だからヴィヴィオを、普通の子供に育てられなかったら、ヴィヴィオが危険な仕事を始めて、もし大怪我でもしたら・・・・、そう思うと幸せにしてあげる自信が薄れて行きます。何より、私は空の人間ですから・・・・」

「・・・・縁起でもない！」

少しなのはの言葉の意味を考えて怒鳴ったシャッハ。なのはが言ったのは、自分が空に居るから死ぬかもしれない、と言ったのと同じ

だ。

「可能性の話です・・・・私にはフェイトちゃんもサンも居てくれます・・・・。それでも、同じ場所に居ない限り、フェイトちゃんの想いがどんなに強くても、サンのスピードがどんな速さでも、一緒に居ないと守れない」

「あなたの気持ちは？　フェイトさんやサン、ヴィヴィオの為に絶対帰って来ると・・・・そんな思いは？」

「あります、だけど、それは理想に過ぎません。私がデビルと戦うことになったら間違いなく死ぬでしょう。どんなに想いが強くても・・・・」

シャッハはそれ以上反論出来なかった。自分もデビルとは一発で気絶してしまったが戦ったことがある。どんなに想いが強くても、不可能なことは絶対にある。それをなのはの言葉で思い知らされた。

「ママ？」

アルフと一緒にボールで遊んでいたヴィヴィオが、いつの間にかなのはの足元に来ており、悲しい目で見上げていた。

「うん？」

なのはは屈みこみ、ヴィヴィオと視線を合わせる。

「ヴィヴィオ、どうしたの？」

「ママ、しょんぼりしてたから」

「本当？」

「うん・・・・」

なのはは自分が家族や愛する者を置いてあの世に逝ってしまうことを想像していた。例えの話で、妄想だが、それでもあり得ないとは言えない。そんな思考に居たなのはの表情は、自然と悲しい顔をしていたのだ。

「ママ、いい子」

ヴィヴィオは一生懸命背伸びをして、小さく可愛らしい手をなのはの頭に乗せた。

「・・・ヴィヴィオは優しいね。・・・平気だよ、ヴィヴィオが元気で、笑顔でいてくれたら、なのはママもいつだって、笑顔で元気だから」

優しく微笑みかけると、ヴィヴィオは自然に微笑む。親が笑い、子も釣られて笑う。本当に親子にしか見えない姿だった。

「えへへ」
「あはは、はははは」

「何二人で笑い合ってるの？」
「何かいいことでもあったのか？」

ベンチに座っていたフェイトとサンだが、二人の笑い声が気になった様だ。

ヴィヴィオが説明しようと口を開こうとするが、なのはが人差し指を唇に当てて、説明するのを止めさせた。

「ママ？」
「今の話はなのはママとヴィヴィオの二人だけの秘密だよ」
「・・・・うん！」

どういう意味か良く分からないようだが笑顔のなのはの顔を見て、ヴィヴィオは頷いた。

「父親にも話せないことなの！？」
「父親への秘密何てあってもおかしく無いだろ。それより同い年の俺にも話せないことなのか！？」
「何言ってるのサン！　女だけの秘密っていうものがあるんだよ！　だからフェイトパパには話せるよね？」

ニコニコしながら問いかけてきたフェイトから視線を外し、なのはとヴィヴィオはお互いの顔を見合わせる。そしてクスクス笑って、またフェイトに視線を戻した。

「男の子にもパパにも内緒の秘密。ね～」
「ね～」

なのはに続いてヴィヴィオも唇に指を当てた。

フェイトとサンはがっくりと項垂れ、何とか聞き出そうとコソコソと話し合いを始めた。

その様子を見て、なのはとヴィヴィオは一緒に笑った。

早くヴィヴィオを助け、また家族で笑いあいたい。王座の間に早く着くために、出現するガジェットを、一機ずつ潰していられない。

「いちいち相手してられない・・・・レイジングハート！！」

『了解、スターフレイム』

レイジングハートの先端からエネルギー刃が出現した。更に翼も生え、速度が上昇する。レイジングハートから出されるエネルギー力は、ＡＭＦ内で起こせるものとはとても思えない。

「ＡＣＳドライバー」

なのはがガジェットを通り抜度に次々とガジェットが破壊されていく。突き当りまでの距離を五十機以上のガジェットがいたが、それらが一瞬で崩壊した。

「駄目だクアットロ、手がつけられない」

ディエチの報告と、ガジェットの殲滅数を見てもクアットロは上げている口元を下に降ろさない。

「まあ、予想の範疇よ。あの人の終幕はここ、玉座の間。どこも思ったよりは粘ってるみたいだけど、まっ、時間の問題ね」

クアットロは戦っている六課の映像を見ながらニヤリと笑った。

Ｐａｉｎ　ｔｏ　Ｐａｉｎ　（後書き）

サン「結局ティアナもピンチになったか」
バナナ「ピンチにさせる要員としてオットーに出てもらいました。ディードとオットーのＩＳは強いからね～」
サン「父さんの話も少し違うな」
バナナ「まあ原作と全く一緒なのはなるべく少なくしたいし・・・・エリキャロとシグナム、なのはのシーンが原作通りすぎるからなｏｒｚ」
サン「ハァ。　って、俺が完全に人外になった件だが・・・・」
バナナ「混合圧縮は二つの属性の能力＋混合した二つの物質でサンがイメージする能力を手に出来るからな。発言で起こるバックドラフトや魔人ブウ並みの再生能力。こういうのって書く側としては面白いんだよねｗ」
サン「俺自身としては実際楽しくない・・・・。だいたい余裕な態度とった矢先に大けがするってどんだけ馬鹿だよ俺ｏｒｚ」
バナナ「誰にでも黒歴史はあるさｗｗ　なのはさんのマイナス思考シーンも今の本人にとっては黒歴史みたいだし」
サン「ぁあ、なんか鬱だ」
バナナ「ちょっと！　まだデビルとの戦いは終わってないぞ！　しっかりしろ！」
サン「ハァ、次回も頑張ります・・・・」
バナナ「溜め息吐きながら終わらせないでくれるっ！」

闇の覚醒（前書き）

まずは投稿が遅れて本当に申し訳ありませんでした。
しかし今回はどうしても出来ない理由がありました……。言い訳にしかなりませんが一応言っておきます。

まずこの数週間パソコンに触れることすらできませんでした。なので携帯で投稿しようと思っていたのですがその携帯も状態が悪く投稿するのが困難になってしまいました。

執筆は出来たのですがそれでも時間が掛り、結果的にここまで時間が掛ってしまいましたｏｒｚ

今日はたまたまパソコンに触れれたのでその隙に投稿させて頂きます。

闇の覚醒

王座の間まであと少しの所まで来たなのは。既に破壊したガジェットの数は数百を超えているだろう。

『王座の間まであと少しです』

「うん」

頷きながら、自分の周りに展開されたスフィアを自立行動させた。スフィアはなのはの移動方向とはまったく別の方に飛んで行く。

一方ディエチは王座の間に行く為に必要な道で、狙撃武器イノーメスカノンを構えていた。

「あの小さな子の、お母さん、なんだっけ・・・・」

隣に映って居るなのはの映像を見て一瞬撃つのをためらうが、首を振って戦闘機人としての役目を果たす。

「あんたに恨みは無いけど、5、4、3、2」

イノーメスカノンにエネルギーを溜めながらなのはの出現を待つ。

「1、0」

「！　エクセリオン・バスター！」

なのはとディエチの砲撃が同時に発射された。しかしディエチは数

秒間の溜め、なのはは溜めなしの砲撃だ。どう考えてもなのはの方が不利だ。

―ドドドドド――

二人の砲撃がぶつかりあった。

お互いの威力は半々で、両者一歩も譲れない状態だ。

「「ック」」

ディエチは予想以上の砲撃の強さに、なのはは溜めなしの砲撃の衝撃に苦い声を上げた。

「ブラスターシステム、リミット1、リリース！」

『Ｆｉｒｓｔ　ｓｔｅｐ』

レイジングハートの声と共に、なのはの体が桃色の魔力に包まれる。

「ブラスト・・・シュート！」

桃色の砲撃が一段と大きくなりディエチの砲撃を押しのけ、抵抗する間もなく砲撃が直撃した。

「ハァ、ハァ、ハァ」

「・・・ぬ、抜き打ちでこの、威力・・・・。こいつ、子供と一緒で人外だな・・・・」

「じっとしてなさい。突入隊があなたを確保して、安全な場所まで護送してくれる」

ディエチとイノーメスカノンをバインドでロックし、完全に動けない状態にした。

「この船は、私達が停止させる！」

そう言うとディエチに背を向け再び王座の間に向けて飛び始める。

「ッツ」

先程の砲撃の衝撃で怪我した左腕を押さえる。さすがのエースオブエースでも先程の攻撃タイミングと威力には無傷ではいられなかった様だ。レイジングハートに表情があれば、間違い無く心配している顔だろう。

『マスター・・・・』

「平気、ブラスター1はこのまま維持。急ぐよ、レイジングハート」

『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ』

その姿をモニターで見ていたクアットロは笑い始める。その理由はなのはの切り札と聞いていた物がただのリミッター解放だったからだ。ケラケラと笑いながら隣で呻いているヴィヴィオを向く。

「フ、フフファハハハハ。な～んだ、ブラスターシステムゥ何て、大層な名前が付いてるから、どんなハイテクかと思ったら、馬鹿らしい・・・・。ねえ陛下、あなたのママは相当お馬鹿さんですよ～」

次の瞬間に王座の間の入口が凄まじい衝撃を受け内側に歪み、二度

目の衝撃が来た瞬間に桃色の砲撃がドアを貫通した。
土煙が舞うと共になのはが侵入し、素早くクアットロにレイジングハートを向ける。

「いらっしゃ～い。お待ちしてました」

「・・・・」

「こんなところまで無駄足御苦労さま。さて、各地であなたのお仲間は、大変なことになってますよ～」

六課メンバーの映像が現れた。クアットロの言う通り確かに皆苦戦している状況だ。サンを除いては。

「みんなどんな辛い状況でも立ち向かえる心を持ってる。それにサンが優勢な今、不利なのはあなた達の方」

「そうですかね～？　あのおチビも人質をちょっと取ればすぐに屈服しますよ～」

「・・・大規模騒乱罪、現行犯であなたを逮捕します。すぐに騒乱の停止と、武装の解除」

なのはの冷静な態度にクアットロは益々ニヤニヤと笑い始める。

「仲間や愛する人の危機、自分の息子が脅されるかもしれない、娘のピンチにも関わらず、表情一つ変えずにお仕事ですか。い～ですね～、その悪魔染みた正義感」

そう言ってヴィヴィオに触れようとした瞬間――

―ドドーン！！

なのはは躊躇なくクアットロに砲撃を撃った。

しかしその砲撃を受けたクアットロの姿は消えた。

幻だったのだ。

そのすぐ後モニターが現れ、あざける表情で口を開く。

「でも～、これでもまだ冷静で居られます～？」

「ぁあ！　あああああ！」

「ヴィヴィオ！」

すぐに助けようと駆けつけるが、突如ヴィヴィオから湧き出る虹色の魔力に、進むのを妨害された。

『良いこと教えてあげる。あの時ケースの中で眠ったまま、輸送トラックとガジェットを破壊したのは、この子なの。あの時あなたがようやく防いだディエチの砲。でも、例えその直撃を受けたとしても、物ともせずに生き残れたはずの能力。それが古代ベルカ王族の固有スキル、聖王の鎧・・・・・・。レリックとの融合を経て、この子はその力を完全に取り戻す。古代ベルカの王族が、自らその身を作り替えた究極の生体兵器。レリックウエポンとしての力を・・・・』

「ママ―！」

「ヴィヴィオ！」

「やだママー！　ママァー！」

「ヴィヴィオ、ヴィヴィオ！」

必死に自分を呼んでいる娘に、今すぐにでも近づきたいが、虹色の魔力がそれを許さなかった。

「ぁあああああ！」

「すぐに完成しますよ。私達の王が。ゆりかごの力を得て、無限の力を得た究極の戦士に・・・・」

「ママァー！　パパァ―！　お兄ちゃぁーん！」

「ヴィヴィオー！」

一段と輝く虹色の光が王座の間を包み込んだ。

目が見える程度に光が落ち着くと、宙に浮いているヴィヴィオが居た。

「あぁっ！」

「ねえ陛下～。いつまでも泣いてないで、陛下の家族が助けて欲しいって泣いてます。陛下の家族を攫って行った、怖～い悪魔がそこにいます。頑張ってそいつをやっつけて、ほんとの家族を助けてあげましょう。陛下の体には、その為の力があるんですよ～」

ヴィヴィオの頭にはクアットロの悪魔の囁きが聞こえた。その嘘の

言葉を信じてしまったヴィヴィオは自分の本能の儘に全てを解放する。

「ぅあああ！　あああああ！」

「ヴィヴィオ！」

一段と苦しみ出したヴィヴィオに声を掛けるが無駄だった様だ。ヴィヴィオは自分の本能の儘に開放した。

体が子供から十代後半まで成長し、黒を主張したバリアジャケットを纏った。そのヴィヴィオからは虹色の魔力光が放出され、暗い目でなのはを見つめた。

「あなたは・・・ヴィヴィオの家族を、どこかに攫った・・・」

「ヴィヴィオ違うよ！　私だよ！　なのはママだよ！」

「ッ違う！」

ハッキリと母親ということを否定されたなのはの心は激しく傷ついた。それに気にすることなくヴィヴィオは言葉を続ける。

「嘘つき・・・。あなたなんか、ママじゃない！　ヴィヴィオのママを・・・返して！」

足元に古代ベルカの魔法陣が展開され、一段と虹色の嵐が強くなる。

「ヴィヴィオ！　ッゥ！」

「ふふふ～、その子を止めることが出来たら、このゆりかごも止まるかもしれませんね～」

「レイジングハート！」
『Ｗ・Ａ・Ｓ　フルドライビング』
なのはもミッドチルダ式の魔法陣を展開して戦闘態勢に入る。
「ヴィヴィオのママを返して！」
「ブラスターシステム、リミット２！」
お互い魔力柱で包まれ、王座の間に激しい衝撃が走った。
一方オットーのレイストームを受けたティアナは、右足から出る血を押さえている。
「ック、よりによって足・・・・」
『大丈夫ですか？』
「平気とは言えないけど・・・。それより戦闘機人とガジェットがここを察知するのはだいたいどれくらい？」
戦闘機人達が起こす物騒な破壊音を聞きながらタイムリミットを聞く。出来ればギリギリまで時間が欲しい物だ。
『あと１８０秒は見つかりません』

「三分か・・・・」

少ない時間に溜息を吐く。

ティアナが溜息を吐いている間にも時はどんどん過ぎて行く。

ギュィイイン

戦闘機人の接近音が近づいて来たのでティアナはゆっくりと立ち始める。

【有幻覚は二人、作るリンカ―コアはこれくらいが丁度いい。倒す順番はオットー、ウェンディ、後の接近戦の二人の順】

様々な映像のデータで観察した四人の戦い方を頭の中にしっかりとインプットする。攻めるなら奇襲。そう考えていたティアナは、相手の死角になる位置に移動する。

―ドドン！――　―ドドン！――

その瞬間結界内に大きな音が響き渡った。結界内にいる全員がその音の出てくる方に顔を向ける。

「「「「！？」」」」

「オットー、この音は！？」

「外から攻撃を受けている・・・・」

「とっとと幻術使いを倒さないといけないッスね」

「残りポイントは・・・・」

一斉に四人は未だに調べていない場所を見る。様々な機能を付けた

戦闘機人がここまで時間が掛かったのも、クロスミラージュの使っていた探知妨害のおかげだ。

「ハァアア！」

突然四人の上からティアナの声が聞こえた。上を見るとダガーモードにいくつかのスフィアを展開している。

「戦闘スタイルが変わってもしょせん幻術馬鹿か！」

ノーヴェはＩＳブレイクライナーでウイングロードに似た道を出現させ、空中に居るティアナを殴る。

消えると予想していた皆の期待に外れ、ティアナは吹き飛ばされ壁に激突した。

「本物っ！？」

「レイストーム（エリアルキャノン！）」

確かにあった殴った感覚にノーヴェは驚き、ウェンディとオット―も驚きながらも、追撃を行う。

「ＩＳ発動。ツインブレイズ」

更にディードが高速で移動し、よろけているティアナに止めを刺す。

「うぁ・・・・」

血を噴き出しながら最後の力を振り絞り展開していたスフィアを相手に向わせた。だがその努力もあっさりと消され、ティアナは息絶えた。

「・・・やけにあっけない」

今まで回避し続けていたのにここまであっさり刺せた事に違和感を持った様だ。ディードは自分の固有武器ツインブレズと死んだティアナを交互に見る。

「それより他の姉達の救援に行かなくていいんッスか？」
「あたしもあのハチマキをぶったおさねえと気がすまねえ」
「・・・・行こうか」

オットーの声を合図に一斉に出ようとした。

コッコッコッ

突如何かが転がる音が聞こえ、一斉にそちらに視線を移す。音のした方はティアナの死体がある場所だ。

「あ～、自分の死体見るのって変な気分ね～」

柱の陰から突然出てき、ティアナの死体に近づくティアナは苦笑いしながら自分と同じ姿の死体を見る体全体から余裕の雰囲気を出しており、今まで溜めていた悩みを一気に解決した様にスッキリしている。

「「っな!?」」
「へぇ～、あんたにも感情ってあるのね。オットー、ディード」

おばけでも見る様な目で見てくる戦闘機人達に、クスクスと笑った。正直目の前の姿が信じられなかった。確かに攻撃した触感があった

ティアナを偽物の様に見るもう一人のティアナ。いや、このティアナが幻影かもしれない。そう思ってしまうほどあり得ない。

「さて、あんた達もあたしを攻めるのに飽きたかもしれないし、今度はあたしが攻めてあげる」

コツコツと音を立てながら近づいて来るオレンジ色の髪をした少女は、強者のオーラを発していた。

「ガッ・・・クッ！」

自分の首を絞めているギンガを睨み付ける。優しかったギンガと同じ顔をした、冷酷な人物が可哀想だからだ。記憶を消されスカリエッティ言う通りに動く・・・絶対に助け出したい思いと、卑劣なスカリエッティに自然と睨む形になった。

「抵抗を止めて、動作を停止しなさい・・・」

想いが入っていない声が聞こえた。
スバルは当然抵抗した。首を絞めている腕に攻撃する。

「作業内容変更。行動不能になるまで破壊・・・」

スバルを地面に投げ飛ばす。自分の記憶が無くなる前の名前を呼ぶ妹にも容赦はしない。

よろよろと立ち上がっているスバルを上に蹴りあげ、顎に猛然なア

ッパーを打つ。
今まで耐えてきたスバルも、この攻撃には耐えきれなかったのか涙を流しながら眼光が消えていく。

【やっぱり、無理だったんだ・・・・。私はやっぱり弱くて情けなくて・・・何にも出来ないまんまで・・・・終わっちゃうんだ・・・】

その時思い出したのはなのはとＦＷみんなで食事をしていた時のこと。

「そういえばさ、スバルの強くなりたい理由って何？」

「あ、それは！・・・やっぱり、なのはさんに憧れて」

「にゃははは、それは嬉しいんだけど、そうじゃなくて、強くなって何をしたいのかな？って」

そこで完全にスバルの意識が飛んだ。

気を失ってもなお、ギンガは攻撃を止めようとはしなかった。リボルバーナックルと手首を回転させ、再びリボルバーギムレットを放とうとしている。
スバルの近くまで跳び、リボルバーギムレットを放とうとした瞬間に、マッハキャリバーが声を出す。

『ウイングロード！』

その瞬間スバルの足がマッハキャリバーによって動かされたローラーと出されたウイングロードに操られた。

ギンガの手を弾き、激しい動きをする。そして僅かに怯んだ所で攻撃した。

「ッツ？」

気を失っている筈のスバルが自分を怯ませたことに驚く。一瞬起きているかと思い顔を見るが、確かに眠っていた。

「っえ？」

目が覚めたスバルは自分に間合いを取っているギンガを変に思った様だ。それに答える様にマッハキャリバーが点滅する。

『練習通りです』

「え？　マッハキャリバー・・・？」

『まだ動けます・・・私もあなたも。まだ戦えます。なのに、こんな所で終わる気ですか？　あなたが教えてくれた、わたしの生まれた理由。あなたの憧れる強さ、嘘にしないで下さい』

その言葉と共に、先程の続きが頭に浮かんできた。

「災害とか、争い事とか、そんなどうしようもない状況が起きた時、苦しくて、悲しくて、「助けて！」って泣いてる人を、助けて上げる様になりたいです。自分の力で、安全な場所まで一直線に！」

嬉しそうな表情をしながら言ったスバルの言葉に、なのはは照れ臭そうに笑った。

その日の夜、クタクタになりながらも部屋に戻ったティアナは、いつも通りの元気なスバルに言った。

「しかしあんたってほんとになのはさんに憧れてるのね」

「うん。でも・・・・」

「？　どうしたのよ？」

顔僅かにだがうつむかせたスバルを見逃さなかった。しばらく沈黙が流れ、その間にティアナはスバルが落ち込んでいる理由を考えていた。途中で答えらしきものは見つかったが、本当にこれが答えだったら余りにも馬鹿馬鹿しいと思いながらも聞く。

「自分の持っている力は守る為の力にはなれない、破壊する為にしか使えない。自分の生まれた理由と同じ様に・・・・何て考えてないわよね？」

ティアナの呟きにスバルはど胆を抜かれた。当たっていたことにティアナは溜め息を吐く。

今までここまでマイナス思考ではなかった。おそらく戦闘機人の出現で気持ちが少し不安定になっているのだろう。

ティアナが溜息を吐いたのは相変わらず流されやすい性格に呆れていたのだ。

「あのね、あんたは立派に！　自分の力で！　沢山の人を助けてきた。六課に入る前からね。それは訓練生時代からの腐れ縁であるあたしが一番知ってる。ギンガさんよりも知ってるつもりよ・・・・・・。

だからあたしが言いたいのは、あんたはしっかり守る為の力を持ってるってことよ！」

途中から自分のセリフがキザなことに顔を真っ赤にするが、しっかりと最後まで言い遂げる。顔の赤いままそっぽを向くティアナにスバルは子犬の様な瞳で見つめた。

「ティア・・・・」

「な、何よ？」

いつも以上に変な雰囲気にたじろいでしまう。今までの経験から言って、大抵この雰囲気のスバルは――

「ティア大好き～～！」

「ちょっ！　離しなさい馬鹿スバル！」

抱きついてくる間近のものだ。

【戦うのとか、誰かを傷つけちゃうのとか、本当は、いっつも怖くて不安で、手が震える。・・・・だけど、この手の力は壊す為じゃなくて守る為の力。そうだよね、ティア・・・・】

「行くよ！　マッハキャリバー！」

『Ａｌｒｉｇｈｔ．ｂｕｄｄｙ』

「フルドライブ！」

三つカートリッジを使用し、スバルは近代ベルカ式の魔方陣を展開させる。

「ギア・エクセリオン！」

叫んだ瞬間にマッハキャリバーから青い翼が生えた。それは青い羽根を辺りにチラチラと浮遊させている。

これがマッハキャリバーの一番の形態。マッハキャリバー自身で考えた新しい強化パーツ、更にそれを最大限に使用するフルドライブ。これがスバルの切り札と言ってよい。

ギンガは警戒しながらも、同じく近代ベルカ式の魔方陣を展開した。

僅かに沈黙が流れ、両者からは強い気迫が出されている。

お互いのデバイスの光ると共に、二人は動いた。

「うおおおお！」

二つのウイングロードが正面から交わり、使用者達は拳をぶつけ合った。威力は互角。

更に激しい攻防を繰り広げるが、中々決めの一手が当たらない状態だ。

その時ブリッツキャリバーがカートリッジを行い、ギンガの手首が回転し始めた。その攻撃を身をもって知っている筈のスバルだが、怯えもせずにギンガに突っ込んでいく。

―ズゥーーン！――

二人の攻撃がお互いのバリアにぶつかる激しい音が鳴る。両者は拳を交えずに、相手の本体に向かって攻撃を続ける。

パキ、パキパキ

スバルのバリアにひびが入ってくるが、それでも怯まない。

「一撃、必倒！」

余っているカートリッジを全て使い魔法を展開する。そして更にギンガに接近する。

――バリン！――

スバルのバリアが破壊された。

ギンガはそのままの勢いでスバルに当てようとしたが、紙一重で避けられた。

「うおおおお！」

――バリン！―

その時ギンガのバリアも崩れた。

「ディバイーン！」

「バスター！」

青い砲撃が拳から放たれ、ギンガを包み込んだ。

地上本部レジアス執務室。
そこにはレジアス本人と娘であるオーリス、そして恐らく手伝い係りの人物が一人。

「オーリス、お前はもう下がれ」
「それは、あなたもです。あなたにはもう、指揮権限はありません」

既にレジアスがスカリエッティと繋がりがあった事は一部の人間には伝えられている。
もはや危険な地上本部に居ても意味は無いと、オーリスは言っているのだ。

「わしは、ここに居らねばならんのだよ」

オーリスはレジアスの考えを余り理解できなかった。避難させようと口を開いた時――

―ドドーン――

ドアが荒々しく破られた。

「手荒い来迎ですまんな、レジアス・・・」

「構わんよ、ゼスト・・・」

「・・・・ッハ！　ゼスト・・・さん？」

レジアスの昔の友人の出現に驚く。ゼストは既に十数年前に死んだ筈だった。

しかし二人はオーリスの疑問に答えずに話を始めた。

「オーリスは、お前の副官か？」

「頭がキレる分、我が儘でな・・・・。子供の頃変わらん」

「・・・・聞きたいことは、一つだけだ」

ゼストは呟きながら、机に写真を投げた。そこに写っているのはレジアスとスバルの母クイント、ルーテシアの母体であるメガーヌ、それと数人の部隊員だった。

「八年前、俺と、俺の部下達を殺させたのは、お前の指示で間違えないか？　共に語り合った、俺とお前の正義は、どうなっている？」

レジアスは無言のまま、投げられたもう一枚の写真を見た。写っているのは若い頃のレジアスとゼストの姿、二人は嬉しそうに手を握り合っている。

激しく戦闘を行っているサンとデビル。その戦闘の衝撃によって鳴

る轟音は、一向に衰えない。

だがそれはサンの一方的な攻撃にはよる音だった。混合兵装・・・・これによってサンの不足していた部分を補える。更に混合することによって得ることの出来る能力は、天下無双と言っても過言ではない。

「プラズマボール！」

サンの叫びと共に、数十個の赤紫色に光る球体がデビルの回りに出現した。その球体の正体を先に身を持って知ったデビルは、舌打ちをしながら素早く球の群れから離れた。

『マスター、デビルが特定位置に来ました』

「設置式儀式魔法。天災地変、炎魔の　怒」

突如足元に現れた魔方陣に驚く。しかしデビルには休む暇もなく、魔方陣から生えてきた炎柱を破壊していく。これで決める訳ではなかった。

サンは電気の二重兵装に切り換え、威力の低いスフィアを大量展開する。

「スターライト・ブレイカー！」

炎柱に絡まれていたデビルは回避することが出来ずに直撃した。更にスフィアと雷を落とし、追撃する。

―ドドドドドーン！

まるで砂嵐の中に居るのではと思うくらいの土煙が舞った。魔力を自給自足出来るサンにとってはこの程度で疲れることは無く、更なる魔法を展開し続ける。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド！！！！！！

もはやここまでくると一方的な虐殺にしか見えない。炎が、水が、氷が、風が、雷が、デビルの体に痛みを与え、それが全く衰えないのだ。

サンの中に罪悪感というのは少しも無い。なのはとフェイトを殺そうとした人物・・・・。それでサンは殺して良い人物と判断している。

例えデビルがこの様に堕ちてしまった理由が、自分が産まれたからだとしても、両親が大切な気持ちが強いのだ。更にはヴィヴィオを拷問にかけるとも言った。

自分の家族に酷い言動をした者が今は自分の手の平で踊る様に痛みつけられている。むしろサンは喜びを感じ、攻撃を繰り続けていた。

「ア・・コロ・・・ス」

余りにも一方的な戦いに今まで押さえていた本性を出した。今までのはラールとしての姿、そして今はデビルとしての姿に堕ちてしまった。

「他のみんなの救援に行く。ここで死ね・・・」

「オオオオオオオ！」

「騒ぐな、お前には助かる道など無い」

【いや、あるぞ】

デビルの頭の中で声が聞こえた。地上本部襲撃の時に聞いた声と同じだった。

その声の主はデビルに思考出来るだけの理性がないと判断した為、バカ笑いしながら囁く。

【闇をイメージするんだ。お前の心を立体的に考えればいい。そうだ、イメージだ。あとはそれを外に放出するだけでいい。そうすればお前はあいつを、お前の家族を殺した奴を殺すことが出来る！】

「グアアアアアアアア！」

突然デビルの体が黒くなり、悶え苦しみ始めた。その絶叫に海は震え、風は淀めき、雲は逃げる。

「っな！？」

『相棒！　やべえ、こいつの体からエネルギー反応が消えやがった。それに異常なスピードでエネルギー反応が出てきてる！』

「！？　どういうことだ！？」

オーバーの言葉だけでは理解できなかった。エネルギー反応が消え

ているのに出てきているのだ。あまりの非常事態にサンは攻撃するのを忘れてしまっていた。

『オーバーと同じく私もその様な結果です。その二つのエネルギーが何かまではデータにありません！』

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

悪魔の様な雄叫びを上げながらも次々と体を黒くする。最初は顔だけだったのが段々下に下りて行き、既に太ももまで黒い。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

一段とでかい音を出しながらついにデビルの体は黒色一色に染まった。

――――――――――――――――

何も聞こえない、いや音が出ない。

唯一聞こえた音の根源は、不気味に笑う黒い存在だった。

闇の覚醒（後書き）

や、やっと投稿出来ました……

そして今回は更にティアナのキャラが崩壊してしまいました。ティーダの死体を棺の中で見ている筈なので正直死体を見て苦笑いはおかしいと自分でも思いながら書いていました……。

そこに関しては見逃して下さい……

また次回投稿もしばらく時間が空くと思いますがご了承お願いします。

誤字脱字などありましたら指摘の方お願いします。

家族（前書き）

やっと投稿出来ました。
完全に不定期更新になっている最近ですが、絶対に投げしたりはしません（｀・ω・´）キリッ
・・・・・多分

そしてこの前やっとのことでＴＨＥ・Ｍｏｖｅを見れました！
例え遅いと馬鹿にされようとしてもこれは絶対報告します！　家の近くには健全なレンタルショップしかないから仕方ないじゃないですか！？
それをやっとのことで手に入れたこの感動・・・・・
４８インチの大画面で幼女の変身シーンが親の前で流れた時の気まずさ・・・・・
２が出たら今度は映画館ですね！
そしてやっぱりなのフェイ最高だーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！

って汚れた目でどうしても見てしまう末期患者ｏｒｚ

「――」

言葉にならない。サンの頭の中は文字道理だった。

闇を纏った姿のデビル。外面でさえ人を狂死させる程の恐ろしさを持っているが、それよりもデビルから放出される殺気の方が恐ろしい。

気迫が体全体を圧迫し、体の動きを止める。必死に体に指令を送るが、全く動かない。

恐怖によって体を震えさせるのも出来ない。

今の術式兵装の状態等全く考えられない。何故デビルが急にこの様な姿になったのかも・・・・。

今サンの中にある思いは「死にたくない」この一つだった。

空中をゆっくりと歩いてくる。自分とデビルの距離が縮まる度に生気を失う感覚が出る。

「サン！」

その空間の中に現れたのはカリムの映っているモニターだった。カリムは恐怖で肩を震わせているが、唇を噛み締めて口を開く。

「大丈夫！　あなたなら絶対に大丈夫。サンならすぐに恐怖を乗り越え、ラール・・・・いや、デビルに勝てます！」

必死に語ってくれるが、サンの体は動かない。今まで数度デビルと殺し合い、どこか殺気に慣れた自分が居たが、その自分も壊されてしまった。

「お願いサン！　あなたは戦っているみんなの太陽（ひかり）なの！　六課だけじゃない、陸戦魔導士、空戦魔導士の皆さんも、聖王教会もあなたを・・・それに地上の方々もあなたを頼りにしています」

「茶番劇～もぉ、終りですよぉおお！」

デビルから放たれた拳がサンの体にめり込んだ。更に連続でラッシュをし、サンの体にめり込ませる。
飛んで行くより先に拳が当たる状態が続き、ようやく吹き飛ばされる事を許された。

「ック・・・・」

微かに痛みを感じた声が出たが、それでも体は動かない。

デビルに恐怖を感じていたカリムだが、今までのサンとの違いにイライラしてきた。今まで散々大口を言ってきたのに怖いという一つの感情だけでサンは体を動かせないのだ。
体が感得している恐怖を振り払う。

「いい加減にしなさい！　あなた程の力がない方も一生懸命戦っているのよ！　傷付いたら治れない、あなたみたいに速くないから逃げようと思っていても逃げられない！　それでも逃走報告はないわ！」

ピクピクと動く指。それは闇を見てから何も動けなかったサンには

大きな一歩だった。カリムは再び息を吸い、大声を出す。

「六課のみんなはどんな状況でも立ち向かえる心を持っているとお母様は言っていました。あなたは私の騎士と同時に六課の一員です！　ここで恐怖に負けこの戦いを夜の様に暗くするのですか！？あなたミッドの太陽（ひかり）、これは強き者の使命！　主としての命令です。デビルに勝ちなさい」

「・・・言わせて置けば説教しやがって・・・・」

「サン・・・・」

「俺は説教されるのが嫌いなんだよ！」

まるで狼が雄叫びを上げるように頭を動かし、恐怖を吹き飛ばすのと一緒にカリムへ怒鳴る。

「では最後に一つ、絶対に帰ってきなさい・・・・」

それだけ言うといつものように優しい顔で微笑み、通信を切った。こんな時までも笑みを見せてくるカリムに呆れながらも前を睨んだ。

居るのは闇になったデビル。未だに震える体を止められないが、その目に宿る意志は元に戻っている。

『カカカ、ずいぶん強い主様だな。相棒より心が強いんじゃねえか？』

「余計なお世話だ。だが俺より心が強いことは確かに事実だよな・・・・」

『ケケケ、相棒は女の尻に敷かれるタイプだよな』

「絶対あり得ない。それは断言できる・・・・多分」

『お二人ともいい加減にしてください。オーバー、あなたも別に今じゃなくてもいいことは言わない』

「了解」

『へいへい』

いつもの普通の会話。それは日常の大切さを知らされるものだ。このような戦場でこそそれが改めて分かる。

圧縮術式を電気の二乗にし、足全体に力を溜める。

例え相手がどんな力を持っていても、自分の速さには誰も付いていけない。そう信じている。

――例え相手が異常でも、自らの異常さには敵わない。

「雷速瞬動！」

力一杯空中を蹴り、デビルに接近する。その速さは雷速より更に速い移動方法で、デビルの顔面に拳を打った。

拳は顔を貫通し、外から見たらサンが勝った様に見える。

――オカシイ・・・・

サンの頭にはその思考だけが駆け回る。

貫通したのに感覚がなかったのだ。いや、触れた感覚が無いのは自分の水の状態でも同じだ。問題はそこではない。
今のデビルは水とは決定的に違う部分があった。

――――右腕の感覚が無い！？

そう、触れた感覚が無いのと同時にデビルの中に埋まっている腕の感覚が無くなっていたのだ。まるでその部分だけ切り離された様だ。
デビルの後頭部にある自分の手首を動かすと確かに自分の命令通りに動いている。同じく右肩もしっかりと動く。

ではその間の腕はどうなっている・・・・。

急に吐き気がこみ上げてきた。それは自分が想像していた今の自分の腕の姿と、実際に考えられない感覚がクロスしてサンを襲ったのだ。

その様子をデビルはニヤニヤしながら見ている。先ほどまでと違う圧倒的な立ち位置に堪えきれない笑い。
上位に立っていた者を無様に変えることに背筋がゾクゾクし、更に無様にしようと一段と不気味に顔を歪ませる。

「はぁ～やく抜け出さない～と大変なことになってしまいまぁすよぉ～」

その声と同時にデビルの体の中にどんどん右腕が引きずり込まれて行く。デビルの黒い表面に触れるごとにサンの感じている感覚が少

しずつ無くなって行く。

「黎明の雷傳砲！　壱千重奏の悲命！　雷の投擲！　魂送装填！」

「そんなの～無駄に決ってるじゃぁ～ありませんか？」

デビルの言うとおりにサンの使った魔法全てが触れただけで飲み込まれた。轟音を出していたもの、幾千のも斬撃を繰り出すのも、内部からの攻撃も全て無意味だった。

こうしている間にもサンの右腕はどんどん飲み込まれている。体全体が飲み込まれるのも時間の問題だが、動こうにも動けない。

【右腕が動かねえ。こいつに触れた時点で離れることは不可能って事なのかよっ？】

「アハハハハハ。ずいぶん必死になってぇますねえ？」

デビルの馬鹿にしている声・・・・・。

【こいつのこの声と表情を見るくらいならっ！】

何かを決意したのかサンは剣の形をした魔力刃を空中で展開させる。いち早くサンの考えを察知したリリは止めようとするが既に遅かった。

自身で作り上げた剣で自分の右腕を切断したのだ。

「へぇ」

「がああああああああああ！！」

血の雨を噴出す右腕を押さえつけながら再生の力を持つ氷を強くイメージする。脳が痛い痛いと悲鳴を上げ、イメージが浮かばない。いくらイメージしようとしても一向に浮かばないので、サンは動く左腕で無理やり術式兵装を行う。

仮に失敗したらその術式が体内で暴走する危険があるのだが、今はそんなデメリットに気を使える程、楽な状況では無い。

体が覚えている術式兵装の時の感覚だけを頼りに、イメージを無しに兵装を行った。

―ガキン！

氷結した音と共にサンの体に氷でできた右腕がくっつく。どうやら無事に成功したようだ。

「ハァハァハァハァ」

いくら腕が戻ったとはいえ切断した時の痛みが消えた訳ではない。息を震わせながら吐き体を落ち着かせようとするが、そんな簡単に取れるものでもない。同時に、もし自分の体の中で術式が発動したかと思い、恐怖が込み上げてくる。

安全位置まで間合いを取り、攻撃魔法を複数展開させる。

「おやおや～？　まだ諦めて～いないんでぇすか？」

「と、当然だ。もうさっきみたいな無様な姿は二度と見せねえ。お前が喜ぶことは一切しないってことだよ」

「ではぁぁぁ、自分の右腕を見てもそう言えますか～？」

「生憎既に再生・・・・・・・オーバー？」

急に世界が止った。

まさかと思い必死に念話を繋げる。しかし応答は無く、サンの耳には壊れた笑い声が聞こえるだけだ。

「お、い、リリ。まさか・・・・オーバーは・・・・・」

声を震わせ途切れ途切れになりながら、もう一機のパートナーを呼んだ。そして返ってきた返事はＡＩが出したとは思えないほど酷く悲しい声だった。

「はい・・・恐らく先程飲み込まれたのかと・・・・・」

いつもふざけた声を出していたオーバー。どんな時でもイライラする笑い声を上げ、それでも本当に危険な時は真面目に行動してくれていた相棒。

機動六課に入って初めての任務の時に、ＦＷの新デバイスと同時に貰った大切なデバイス。なのは、リィンフォース、シャーリーに大切に精一杯扱ってと言われたもの。

それを自分の軽率な行動により、最後に何も言わせることも出来ずにただ消えてしまった。形見や思い出になるものも、別れの言葉すら無い・・・・。

―自分の所為だ！

その思いがサンの頭の中を壊れたレコードの様にリピートされる。

そしてリピートの中には。

―お前の所為だ！

と、目の前の悪魔に向かって流れる。

【もしかしてデビル・・・・ラールもこの感覚をっ？】

ラールがサンを恨む理由は宗教的なものだ。この世界で生きて行ける人間の数が決まっており、サンは自分の妻の命を盗み産まれたのだと思っている。

ラールの恨む理由とサンがラールを恨む理由とでは少し違う気がするが、恨むときの心は同じだ。

『お前の所為だ！』

一瞬だがサンとラールの感情がシンクロした。それと同時にサンはラールの苦しみ、怒り等の不の感情が激しく伝わった。まるで今まで自分が知らなかったことを頭の中に叩き込まれた様だ。

実際に誰かをなくして分かる心境。

殺されそうや、傷ついたとは余りに違いすぎる・・・・。

【いまさらこいつに同情するだと!?　冗談じゃない、こいつの被害妄想でオーバーはッ！

そうだ、悲しみを堪えろ！　涙を堪えろ！　冷静になれ！　感情を爆発させるな！

こいつを喜ばせちゃいけない。こいつは俺が無様な姿になることになりよりの喜びを感じている筈だ】

「無様になるかよ！　絶対無様にはなるか！」

「ハハハハハハハハ！　せいぜいがんばってください」

再び二人はぶつかり合った。

もはやこの戦いはどちらかが死ぬまで終わらない・・・・・・・・

同時刻管理局地上本部レジアス執務室

「お前に問いたかった。俺は良い、お前の正義の為なら殉じる覚悟はあった。だが、俺の部下達は何の為に死んでいった・・・。どうして、こんなことになってしまった・・・。俺達の守りたかった世

界は、俺達が欲しかった力は、俺とお前が夢見た正義は、いつの間にこんな姿になってしまった・・・・」

怒りの感情を乗せてゼストは言った。顔を俯かせていたレジアスは上を向きゼストに向き合おうとする。なぜこんなことを自分がしてしまったのか。それは口に出し他人に話しかけるには余りにも汚く情けないものだが、今話さなくてはいけないと確信したのだ。一度は死に、そして殺された相手の命令に動きながらも、自分に会いに来たのだ。

口を開こうとしたその瞬間。

―ズシャ――――

静かな部屋に肉を切る音が響いた。この場に居る全員が音の根源を見ると、レジアスの胸を大きな鈎爪が貫通していた。机には大量の血が飛び散り、レジアスの弱々しい呻き声が聞こえる。

「ッウ！？」

現状を把握する時間も無くゼストはバインドを掛けられ、父を助けようと近寄ろうとしたオーリスは鈎爪を持っている犯人に突き飛ばされた。

「お役目、ご苦労様です。あなたはもう、ドクターの今後の前ではお邪魔ですの」

鈎爪を刺した犯人はドゥーエ。今まで秘書に変身してチャンスを伺っていたのだ。

「ゼスト・・・・ォ。俺は・・・・俺は・・・・・」

最後の力を振り絞って伝えようとしたがそれも虚しく――――――言えなかった。

親友の最後を悔しい半分悲しい半分の顔で見届け、次の瞬間にはどんどん怒りが吹き出てくる。

「俺は、いつそうだ。俺はいつも・・・遅すぎる！」

その一方アギトを説得しリィンと別れたシグナムは、レジアスの執務室に向かってる最中だった。

―ドドーン！――

入り口が見えると所で爆発音を聞き、更に足を速めゼストに近付こうとする。

ドアは壊れていたので中の状況をすぐに見れた。

ボロボロになり散らかっている部屋。ぐったりと倒れているオーリス。机にうつ伏せになり血の水溜まりを作っているレジアス。曲がっている壁とその下に横たわっている戦闘機人。そしてそんな中で立っているゼスト。

「これは・・・あなたが？」

「そうだ、俺が殺した。俺が弱く、遅すぎた・・・・」

悲しみを乗せた声が虚しく聞こえた。

ジェイル・スカリエッティアジト

「以前トーレが伝えたかい？　君と私は親子のようなものだと。君の母親、プレシア・テスタロッサは実に優秀な魔道士だった。私が原案のクローニング技術を見事に完成させてくれた。だが肝心の君は彼女にとって失敗作だった。蘇らせたかった実の娘アリシアとは似ても似つかない。単なる粗悪な模造品
フ、フフフフ。それゆえまともな名前すらもらえずプロジェクトの名をそのまま与えられた。記憶転写クローン技術プロジェクトフェイトの最初の一派、フェイト・テスタロッサ・・・・」

赤い糸の檻に閉じ込められているフェイトに対し罪悪感も無くむしろ楽しそうにスカリエッティは語る。

「フェイトさん！」
「父さん！」

サンとエリオは自分の戦いに集中しながらもモニターを見ていた。

「余所見ぃいいしててていいんですかぁ～？」

「ック、リリ、連続転移で一回間合いを」
『了解しました』

「さみしいのはもう嫌だ」

後ろに白天王を従え、目に涙を浮かべる。

「一人ぼっちは、いやだーー！！」

ルーテシアの叫び声と共に白天王は咆哮を上げる。

「キャロ！」

「天地貫く業火の咆哮、遥けき大地の永遠（とわ）の護り手、我が元に来（こ）よ、黒き炎の大地の守護者」

「僕たちとルーはよく似ているんだ。ずっと一人ぼっちで、誰も守ってくれなくて、誰も信じられなくて、何もわからなくて、傷つけることしかできなくて・・・・。
でも変われるんだ、きっかけ一つ思い一つで、変わっていけるんだ！」

「竜騎招来、天地轟鳴、来（こ）よ、ヴォルテール」

キャロが展開した魔方陣から吹き上げる炎柱から巨大な竜が出現した。

赤と黒を強調する守護竜ヴォルテール。
白と紫を主張する巨大生物白天王。

二体のぶつかり合いにより発生した衝撃が辺りを襲う。

上空から激しい衝撃が来ているのにも関わらずビルの屋上に居る全員はひるむ気配がない。

「あなたのお母さんを助けるのも、私たちがきっと手伝う。ぜったいぜったい約束する！　だからこんなこともうやめて！」

「ウソだ・・・・」

「うそじゃないっ！」

キャロは自分の本心を必死にルーテシアに言うが、心に届かない。クアットロの装置によってルーテシアの心に大きな壁が出現したのだ。

涙を流しながらキャロの言葉を否定し続ける。もはや自分が何をしていいのかも曖昧になってきていた。

ただ目の前に居る二人を殺す。この二人が自分の邪魔をするから、それだけだった。

「ウアアアアアアア」

金切り声をあげ、大量の魔力を召喚獣達へと注入させる。
その魔力と負の感情により召喚獣たちは見るに耐えない姿へと変身する。
白天王は腹に巨大な紫色の目の様なものを、ガリューは体の内部から刃と触手を生す。

「白天王、ガリュー、殺して。私の邪魔をする奴をみんな、みんな！」

「殺してーー！！」

召喚獣たちは一斉に戦闘体制に入る。白天王、ガリュー、インゼクトツーク、地雷王。
その全匹に共通するところは、悲しいと必死に訴えていること。ルーテシアの悲しい心が自分たちに入ってくるのが辛いのではない。ルーテシア・・・主が心を失い、クアットロにいい様に操られているのが辛いのだ。
本当は優しいはずの主が、エリオとキャロの言葉を信じようとしていたルーテシアが、殺せと叫んでいる。
その召喚獣たちの悲しみは召喚獣士でないエリオにも分かるほどのものだった。

「ルーちゃん、召喚士のわがままで大事な召喚獣を悲しませちゃ駄目だよ。ガリューも白天王も泣いてるよ・・・・」

ついには大事な召喚獣までも悲しませていると言われたルーテシアは泣き叫び、この二人を殺すしかなかった。

［エリオ君］
［うん］
それだけを念話で行い、静かにルーテシアの動きを待つ。
殺意と悲しみの感情に溺れているルーテシアの行動は早かった。
「地雷王ォォォォォォォ！」
その叫び声を合図にこの場に居る全員が動く。
「フリード、ブラストレイ！」
キャロはフリードに魔力を送り炎弾で地雷王の攻撃と正面激突させる。お互いの召喚獣の力は互角だった。
だが召喚士の力――――――――――いや、思いの強さが違った。
――ドドドドーン！！
一方エリオもガリューとの決着をつけようとしていた。
「ハァアアアアアア！」
カートリッジを行い、魔力を噴射させ突進する。同じくガリューも地面を激しく蹴り突進する。
体同士がぶつかり合う前にストラーダを振り下ろし、ガリューをビルの中へと叩き落す。

何とかストラーダを受け止めビルの中の落下にエリオを巻き込めたがそれがミスだった。電気の魔力変換物質を使いエリオは自分の右腕に電気を纏わせる。

これがシグナムから盗み取った魔法。本人と比べるとまだまだ未熟だがそれでも強力な魔法だ。

「紫電一閃！」

そしてヴォルテールと白天王の戦いもすぐに終わった。

――ドドドドドドドドドドドド！

砲撃がぶつかり合い爆発が起きる。

・・・・・・・・・・・・・・・

崩れずに立っていたのはヴォルテールだ。

「何とか、なった・・・・・」

崩れ落ちるルーテシアを抱きとめ、一息つく。エリオからの報告もあり、やっとこの場が落ち着いたと思いきや、突然苦しみだしたルーテシアの声により召喚獣達が吼え始めた。

「召喚獣たちが混乱している、ルーちゃんがまだ、戦おうとしているから・・・・」

サンとエリオとキャロの映像は、三人がフェイトの姿を見ていたようにフェイトも三人の姿を見ていた。

みんな良い状態ではない。むしろサンに関しては最悪、今のデビル相手に一対一は余りにも無謀すぎる。かと言って、あの状況を自分一人で覆せる訳が無い。

【私がみんなの応援に行って、みんなでサンを助けないと・・・・】

「ライオット！」

フェイトの掛け声と共にバルディッシュが、ハーケンやザンバーに比べるとコンパクトな剣となる。その剣を一振るいし、先程まで自分を捕らわれの身にしていた赤い糸を切断した。

「ハァ、ハァ・・・・」

「それが君の切り札かい？　なるほど、このＡＭＦ状況下では消耗が激しそうだ。だが、使ってしまっていいのかい？　ここで私を倒してもゆりかごも、ゆりかごの中に居る私の作品達も止まらんのだよ。

プロジェクトＦは上手く使えば便利なものでね・・・・。既に１２人の戦闘機人達には私のクローンが仕組んである。どれか一つでも生き残ればすぐに復活し、一ヶ月もあれば私の記憶を持って蘇る」

「・・・・だったら全員逮捕するまでだ。私の息子を助けるついでに」

フェイトは勇ましく返したが内心ではスカリエッティの考え方に吐

き気がしていた。今生きている自分の命までも代理が効くと思い、命を工場で作れると考えている。

「ずいぶんと威勢がいいのだね。でも、果たして本当にそんなことが出来るのかい？　私の欲望の塊である彼は更に進化しているみたいだ・・・・。もはや私でさえ手がつけられないよ。ほら、また君の息子が・・・・」

「ッハ！」

慌ててモニターを見ると、再びデビルの体に腕が当たり自らで腕を切断しているサン。すぐに間合いを取り、攻撃を続けているが全て体に触れただけでそれらが消されている。

そしてスカリエッティは、気を取られているフェイトに再び赤い糸を地面から生やし、首を絞める。

「ククククク、絶望したかい？　君と私はよく似ているんだよ」

「ッツ」

「私は自ら作り上げた生体兵器達。君は自分で見つけ出し、自分に反抗できない子供、手なずけ、自分に好意を向けさせる恋人。それを自分の思うように作り上げ、自分の目的の為に使っている。君は彼らが自分に逆らわない様に教え、戦わせているのだろう？高町なのはも君が頼むから辛い体で戦っているんだよ。息子も魔力変換物質が多々あるため五歳で管理局に入る様にと教育をした。私もそうだし君の母親もそうだ。周りの人間は自分のための道具にすぎん。そのくせ君等は自分に向けられる愛情に薄れるのには臆病だ。実の母親がそうだたんだ、君もいずれああなるよ・・・・。

間違いを犯すことに脅え、薄い絆にすがって震え、そんな人生など無意味だと思わんか・・・・」

「「「「違う！！」」」」

「無意味なんかじゃない」

「俺達は自分この道を選んだ！　例え父さんが管理局員でなくても俺達はこの道を進んでいる！」

「フェイトちゃんは行き場の無かったエリオとキャロに暖かい場所を与えて上げた！　私に一番大切な場所をくれた！」

「沢山のやさしさを貰った！」

「大切なものを助ける幸せをくれた」

「助けて貰って、守って貰って、機動六課でなのはさ・・・お母さんに育てて貰って」

「やっと少しだけ立って歩けるようになりました」

「父さんは何も間違ってない。そんな犯罪者の言葉に惑わされるな！」

「どんな時でも私達が着いてるよ。どんな辛いことも、悲しいことも、きっちり半分こだよ！」

「もし間違ったことをしたら僕たちがお父さんを叱って連れ戻しに行きます！」

「フェイトちゃんの心からやりたいことは間違えじゃないよ！　絶対絶対、妻として保障します！」

「だから迷うな、脅えるな、親なら息子の様に無様になるんじゃねえ！」

「どんな選択をしても私達はずっとお父さんのそばに居ます！」

「だから・・・」

「「「「戦って！！！」」」」

ヒュゥルルルル～

「っな？」

風の音がする方には金色の閃光に包まれているフェイトが居た。

「オーバードライブ・真ソニックフォーム」

「ごめんね、ありがとね。エリオ、キャロ、サン・・・・なのは。疑うことなんてないんだよね・・・・。私はまだ弱いから、迷ったり悩んだりをきっと、ずっと、繰り返す・・・・。だけど、良いんだ！　それも全部、私なんだ・・・・」

カートリッジを使いライオットの剣を二つに分け、バリアジャケットを可能な限り薄くした。これがフェイトの本当の切り札、防御を捨て攻撃と回避に特化した状態。

同時刻アジト最深部では、ウーノが姉妹全員の状況を見ていた。

「魔力反応っ？」

モニターに赤の文字が現れ慌てて戦闘態勢に入ろうとしたが、それよりも早く緑のバインドが体を締め付けた。

敵のアジトというのにやたら落ち着いた足音で歩いてきたのはヴェロッサだった。

「探しましたよお嬢さん。スカリエッティのもう一つの頭脳、戦闘機人１２人の指揮官、ＮＯ１ウーノ。君の頭のなか、ちょいと査察をさせてもらうよ・・・・」

「ウー姉・・・・、やべえＩＳ、ディープダイバー」

セインはすぐにウーノが捕まったことに気付き目の前のシャッハを無視し、壁を通り抜けて行った。

「逃がさない！　旋迅疾駆！」

セインが壁を通り抜けた時には既にシャッハはセインの前で構えていた。旋迅疾駆はディープダイバーのように長時間物質内部には居られない分、速度は圧倒的に速い。

「こいつ、移動系!?」

「烈風一迅！」

そして聖王のゆりかご、王座の間。サンが居る海上。

「聖王様を無視して旦那の応援ですか～。ずいぶん余裕ですね～」

「僕ぅ～を無視して親の応援とはぁああ～、策でもあるんですか～？」

「余裕がある訳でも」

「策がある訳でもない」

なのはとサンはそれぞれ自分の目の前に見える敵を睨み付けながら答える。全く別の場所に居るというのに答える事、タイミングが一

緒だ。

「「だけど、私（俺）も勇気が出た！　絶対にヴィヴィオを助けて、スカリエッティの策を全て潰す！」」

「行くよ、レイジングハート！」
「行くぞ、リリース！」
『了解です、マイマスター』

ッジ

フェイトの地面を強く踏む音が静かなアジト内に響く。

「装甲が薄い、当たれば落ちる」
「当たったらね・・・・」

絶対に当てることができないと言っているような挑発だったが、決してフェイトの体に余裕がある訳ではない。しかし、家族の温かい言葉のおかげで当たる気がしないのだ。

・・・・ドォン！

スカリエッティが予め仕掛けておいた少量の爆弾で戦闘が再開した。土煙が少し舞った瞬間にバルディッシュがセッテの固有武器を粉々にし、気絶させた。

それをスカリエッティは驚きもせずに赤い糸を生やし、次々に向かわせる。一本一本数えて行ったら軽く数時間は掛かるだろう量を走

りながら切断していく。

―ガキンッ！

今度はバルディッシュとインパルスブレードがぶつかり合う音が響く。押し合いがわずかに続き、フェイトはいったん離れ空中に飛ぶ。

一定の場所に留まる行為は高速戦では自殺行為だ。特に今のフェイトの装甲は肌を見せない、言わばいつも着ている服と同じ役割と言っても過言ではない。

「ライドインパルス！」

二人は激しい空中戦を始めた。

トーレが傷を負ったと思った瞬間に今度はフェイトが傷を負う、一般人にはとてもではないが見ることのできない速さだ。更にここは洞窟内で空が狭い。二人の打ち合う回数は屋外の戦闘の数倍はあるだろう。

フェイトは一撃で決める為にトーレが攻撃のモーションに移った瞬間に、二刀のライオットを重ね合わせザンバーのフォルムに移行させ、そのまま振り下ろす。

――ッジ、ジジジジジジ

「うあああああ！」

余りの威力にトーレは受け止めるすべが無く地面へと叩き落とされる。

既に自分を守る戦闘機人はいないというのにスカリエッティは未だに不気味な笑みを崩さない。

「ハアアアア！」

勢いに乗ったバルディッシュをそのままスカリエッティに叩きつけた。

魔導具でそれを受け止めるが徐々にひびが入っていく。

「フハハハハ、すばらしい、やはりすばらしい。アア、この力、欲しかったなァ！

だが私を捕らえる代償に、君はここで足止めされた。私がゆりかごに託した力、作り上げた欲望は止まらんよ！」

「機動六課はお前たちには負けない！」

一旦後ろに下がり勢いを付け、再び因縁のある犯罪者に接近する。

そして刀身の部分を更に巨大化させ、バルディッシュを横に薙ぎ払いガジェットの模型のある壁に叩きつけた。

「ハァ、ハァ」

既に魔力は限界に近い。濃厚なＡＭＦ内での長時間戦闘はＳランクオーバーの魔導士でもきつい。

バルディッシュがオーバーヒートしないように蒸気を出すと共に、横たわっているスカリエッティに近づく。

「広域次元犯罪者ジェイル・スカリエッティ。あなたを逮捕する」

一方廃ビルに閉じ込められたティアナと四機の戦闘機人。
ティアナを挟むように前方にはノーヴェ。後方にはウェンディとディード。そしてその様子を少し遠くから見ているオットー。

――――――――――

しばらく沈黙がその場を支配した。
わずか数秒の時間が数時間に、数分の時間が十数時間に感じる、いや感じさせられている四機。

全員が相手の出方を待っている時、突然離れた場所に居るオットーの声が聞こえる。

「ッツ、どうやってこっちにっ」

その声に釣られティアナを挟んでいた三機が目を向けると魔力刃を首元に向けているもう一人のティアナがいた。幻覚と一瞬思ったが、わずかに首元から流れている血でそうではないと判断した。
そうなると今自分たちが挟んでいるティアナは偽物と考えたが、何度も幻術でないと組み込まれた機械が言っている。

「てめえ、一体どういう、グアッ！」
「なんスかこいつ、分身でも使ってるんスか！？」

ノーヴェとウェンディの方にもティアナが攻撃を開始してきた。応戦をするものの、目で見えるだけで数人は居るティアナの全員の攻

撃が当たるのだ。

「なんかおかしい・・・・。幻影が実体を持ってる？」

全員薄々は感づいていたのだがやはり信じられなかった。プライド、知識、常識、それらのものが答えを見つけるのに邪魔していた。

そして一番邪魔になっていたのは。

“そうだとしたら勝てない”

という直感だ。

視覚を惑わし頭のキレるティアナはただでさえやっかいな相手だ。故にこうして四対一で相手をしている。

更にはセンターガードの精密射撃型。接近戦は不向きなポジションだが、最低限の動きで回避を取れるスキルも持ち、十分にこの状況でも生かせるポジション。それに加え本物か幻か分からない有幻覚。

これだけの能力の相手にどう戦えばいいのか？

一人一人潰して魔力切れを待つ・・・・・・・最近の魔導士はカートリッジという魔力を補える物を持っている。

本物を見つけて一撃で仕留める・・・・・・・本物がどれかも分からない。幻覚と有幻覚の区別は出来るが有幻覚と本物の区別までは出来ない。第一、一撃で仕留められるのならここまで時間は掛らな

い。

存在するティアナを広範囲攻撃で潰す・・・・・・一見一番良い策に見えるが、このメンバーで広範囲が出来るのはオットーのＩＳだけだが、現在ティアナに捕まっている。それにティアナ自身オットーのＩＳには警戒しているのだ。

つまり軽く王手を取られている。

「考える何てらしくない・・・・・」

一人の有幻覚を相手にしているディードに呟かれ、ノーヴェは舌打ちをする。

「うっせーよ！　オラァ！」
「エリアルキャノン！」

ウェンディとノーヴェはオットーの救出を優先した。オットーを捕まえているティアナも応戦をするが、オットーの激しい抵抗もあり逃がしてしまう。

「助かったよ・・・」
「それよりどうする？」
「広範囲攻撃が有効的。悪いけど僕を囲むようにお願い」

「「「了解　（ッス）」」」

すばやくオットーを守るように移動した三機は接近してくるティア

ナを一つずつ相手する。
その時点で一瞬希望が見えた。
ティアナは回避行動に長けていても自ら攻撃を仕掛けるのに余り優れていない。だがそれも接近での攻撃だけだ。

「甘いわよ」

どのティアナから聞こえたか分からないが、一人が呟いた。おそらく本物のティアナだろう。
次の瞬間に次から次へと弾丸が飛んできた。その一つ一つが単純かつ鋭い弾であり、防ぐのに手一杯だ。

更には接近してくるティアナもいる。

接近して来る中の半分以上は幻影だ。逆に言えば少数だが有幻覚がいる。
有幻覚か幻覚か見極めるのにも数秒だが時間がいる。その時間を攻撃してくる相手が許す訳もなく次々と来る。

「それは幻覚」

空を切ったディードに呟く。

「それは有幻覚から出た幻覚」

空を空しく飛んでいるウェンディの弾に言う。

「それは有幻覚から出た幻覚の弾丸、よってただの幻覚」

防ごうとしていたノーヴェに指摘する。

「そしてこれが有幻覚（じったい）」

今まで呟いていたティアナが一気に接近してくる。このまま本物の攻撃が当たれば間違い無く負ける。しかし全員手が一杯一杯で接近を遮れる程の時間は無い。

これで負けだと三機がそう思った時、背中からオット―の呟きが聞こえた。

「お待たせ、ＩＳ発動、レイストーム」

突如現れた光の渦が次々とティアナを襲っていく。

―ゴゴゴゴゴゴゴ！

ここまで来れば有幻覚も幻覚も回避行動も意味が無くなる。シールドを展開して防ごうとしていたティアナも居たが、それもあっさりと破られ光に飲み込まれる。補助が専門のシャマルのシールドでも長くは持てなかった程の威力なのだ。今のティアナではこの攻撃を止める総べは無かった。

廃ビルもその威力に耐えられなくなり、徐々に床や柱が崩れていく。

辺りを見ると今まで沢山居たティアナの姿が、たった一人だけ残っていた。これが本物と思い、ようやく仕留めたと全員が思っていた。

「上を注意するべきだったわね」

突如上から聞こえた声に釣られ天井を慌てて見るが、誰も居ない。
その瞬間に足場が崩壊し、下のフロアに落ちていく。

落ちる瞬間に数個の弾丸が四機を襲う。

どれも急所に狙ってあり、突然の事態に反応できなかったのでオットー、ディード、ウェンディは空しくも空中で意識を無くした。

辛うじて意識を保てたノーヴェは、一人しか居ないティアナを睨みつける。

「卑怯だぞ、騙しやがったな！」

「これが私の新しい戦い方なの。嫌われようと嫌がられようとこれが幻覚を最大限に生かす戦い方よ」

「くそおおおおお！」

最後の力を振り絞り目の前のティアナに向かってリボルバーナックルを打つが、それも空しく空を切った。

「ッツ！？」

「それも幻影よ。万が一を考えて用意してたんだけど、まさかこんな形になるとはね・・・・・」

「にゃろおお！」

『スカリエッティのアジト、アコース査察官から連絡。戦闘機人の最終配置と現在の稼働状況が判明』

アースラに居るシャーリーからの通信が入る。オットーが気絶したことにより結界が壊れたのだ。

通信によると戦闘機人はあとノーヴェとゆりかごに居るクアットロだけの様だ。

「今動いているのは船の中に居る四番とあなただけのようよ。あんたの事情は良く知らないわ。だけど罪を認めて保護を受ければ、まだ生き直すことは出来る・・・・」

「そんなわけねえ！　あたし等は戦闘機人、戦って勝ち残る以外の生き方なんて、ねえんだよ！」

その瞬間気絶していた筈のディードが斬りかかってきた。

「っな！？」

流石のティアナも予想外なのか目を見開き、すぐに回避しようとする。しかし今度はウェンディの手が両足を押さえつける。

【まずい、獲られるっ！】

「ておおおおおお！」

突如地面から青色の魔力刃が、ティアナをディードから守るように出現した。更にこの場に居る戦闘機人全員に緑色のバインドが巻き付く。

「すまん、遅くなった」
「でも念話が通じて良かったわよ。あなたの事だからみんなの応援に行きたいとか考えて、全力で戦ってないと思ってたの」

「ザフィーラ、ありがとね。危うく死ぬ所だったわ・・・・。シャマルさんもありがとうございます。なんだか見透かされてる気がして少し恥ずかしいですね」

現れたのはシャマルとザフィーラ。結界を攻撃していたのはザフィーラで、ティアナに全力で戦えと念話したのはシャマルだ。

「あんた、ノーヴェだっけ？　一つ言って置くわ。戦うための兵器だってさ、笑うことも優しく生きることもできるわよ。戦闘機人に生まれたけど、誰よりも人間らしく、バカみたいに優しく、一生懸命に生きてる子をあたしは知ってる」

その時の顔は戦っている時の厳しく、少し冷たいティアナとは違い、とても温かく優しいものだった。

ゆりかご最深部

ここに本物のクアットロが居り、モニターで姉妹全員の様子を見ていた。全員が捕まったというのに動揺や悲しみもせずに、平然としている。

「どの子も使えないこと、まあ、私が居れば何とかなります。です

よね、ドクター？
向こうの切り札達も、もうじき潰れますしね・・・・」

クアットロが見ている二つのモニターには、ヴィヴィオの打撃により壁に埋め込んでいるなのはと、いかなる攻撃も無効にされている、傷だらけのサンが映っていた。

家族（後書き）

バナナ「今回も遅くはなりましたが無事書けることが出来ました！」
サン「無事という単語以外は確かにその通りだな」
バナナ「Sの言葉ありがとうございます。大抵こういう場では登場キャラを作者が弄る方が面白いということ知ってるかな？」
サン「＼（＾∇＾）／ガンバ」
バナナ「顔文字ってこういう時無性にイライラするなっ！」
サン「ホラホラ！　弄ってみろやコラッ！　カーッ（゜Д゜≡　゜д゜）、ペッ」
バナナ「これは見たまんまムカつくぞこの野郎が！」
サン「どうしたどうしました～？　バナナさんよ～　（ﾟ∀ﾟ）ｱﾋｬｶﾓｫｫｫﾝ」

バナナ「・・・・ファーストキスが妹、美女の両親にキス、師匠からの一方的なキス、カリムへのだ～れだ・・・・あとデビルでの戦闘での中二技や余裕の状態から急に絶望したり・・・・」

サン「
本　　＼　／
当　　ｎ（゜д゜、∩　トウッ
に　　、、ヽ　ｙ
・・　　「、　　―
　　し（ヽ―
　　　∪
　　＼＼／
　　（（　　））

す　（　／　／　）　／
い　人　／　／　）
ま　（（／／　／
せ　（（　　，　ズ
ん
で　　／（（ンフザ
し　／　レ／　ザ
た　／　、ノ　ザ
ー（　）　ー
ッノレレ／　：
！！　へつC／
」

バナナ「ハッハッハ、良きに計らえ」

サン【殺す！　いつか東京湾にチンしてやる！】

闇への覚醒　（前書き）

前書き　今回のサブタイを見たことある方……勘違いですよ。

デビルの能力なのですが、ワンピースのヤミヤミの実が一番イメージしやすい気がします。ただし物理的なものも吸収可能です。まあぶっちゃけ私自身黒ひげの戦うシーンを見てないのですがね（オイ！）

闇への覚醒

聖王のゆりかご内

この巨大な船の飛行を担っている駆動炉の手前まで来たヴィータ。
襲いかかって来た未確認型のガジェットにより胸を刺され、既にボロボロになっている。昔なのはを落とした復讐心で燃え上がっていたヴィータは、自分の体の事を考えず戦っていたので、リンカーコアにも酷いダメージがあった。

一歩一歩駆動炉に向って歩くが途中で膝を付いてしまう。

「ハァ、ハァ・・・・、だいじょうぶか・・アイゼン・・？」
『問題ありません』

こうは言っているものの、グラーフアイゼンも傷やひびがかなり目立つ。
ヴィータは何も言わずに自分の進行方向を見た。

赤い光がやけに眩しい。壁が高く、床もずっと同じ景色なので遠近感が掴みにくい。

「なのははもう、玉座の間に着いた頃だよな・・・・」
『はい』
「はやても、外で戦いながら船が止まるのを待ってる・・・・」

体に激痛が走らない様に気をつけながら再び歩き始めた。

目が掠れ、頭がボーとしてきている所為か、気が付いた時には駆動炉がある広間に着いていた。血の出過ぎによる貧血症状にヴィータは少しだけ感謝をした。しかし今からは注意を払いながら駆動炉を破壊しなければならない。

頭を激しく横に振り、意識を集中させた。

貧血時に行うと目眩や吐き気に襲われるが、こういうのは気持ちだ。

目の前にあるのは巨大な正八面体のガラス。そして中にはコアであろう赤く光る球体がある。

「こいつをぶっ壊して、この船を止めるんだ！　リミットブレイク、やれるよな？」

『ツェアシュテールングスフォルム』

カートリッジを大量に使用して移行したフォルムの姿は、巨大なハンマーにドリルとブーストが付いた巨大な鉄槌だった。

魔法陣を展開させ、行う魔法は最強の攻撃力を持つ物理打撃。

「ツェアシュテールングス！」

1、2、3、4、次々とカートリッジを使用しブーストから噴射される魔力とドリルの回転速度を速める。

「ハンマー！！」

―ドドドドドドーン！

激しい音が駆動炉に響く。

「えっ？」

破壊を得意とするヴィータと鉄の伯爵グラーフアイゼンがカートリッジを大量に使ったのにも関わらず、駆動炉に付いている傷はゼロだ。

これだけでは終わらなかった。

『危険な魔力反応を検知しました。防衛モードに入ります。これより駆動炉に接近するものは、無条件で攻撃されます』

先程の攻撃に反応して、防衛システムが起動してしまう。駆動炉室内には大量のキューブ状のスフィアが出現し、駆動炉に近づくものを無差別に攻撃するという。この場にいる者はヴィータただ一人。

何百というレーザーサイトがヴィータの体を当てる。

「・・・上等じゃねえかよ。ここでへばる訳には、いかねえんだよ！」

スフィアの攻撃を回避しながら、もう一度駆動炉に向って破壊を始めた。

同時刻ゆりかご外

「次元航行部隊の到着まであと４５分。巨大船の起動ポイント到達まであと３８分・・・・」

はやてはシャーリーからの通信を受け、唇を噛み締める。

「主砲の標準はミッド地上に向けられています。7分あれば・・・・」

「撃てるやろうね・・・・」

このままではかなり厳しい。

外から関与出来る高度の限界も段々と近づいてきている。いくら空戦魔導士と言っても宇宙空間までは無理だし、そもそも大気圏を生身で通過するのは不可能だ。

「防衛ライン、現状維持！　誰か指揮交代！　今から私も突入する」

「えっ？」

「軌道上になんて上がらさへん。地上に攻撃もさせへん」

「八神部隊長っ」

確かにＳＳランク魔導士が突入すると内部での戦況は良くなるが、外は良くはならない。はやての様に、高レベルの戦闘現場を見られる魔導士であり、更には的確な判断が出来る指揮能力を持っている人間などそうはいない。

「割り込み失礼します。こちらロングアーチ3」
「アルト？」
「八神、あともうちょっとだけ待ってください！　大事なお届け物を今そちらに！」

お届け物とはリィンのことだった。
ヘリの出せる最速のスピードを出し、アルトはゆりかごに向う。

「それじゃあ私はもう少し指揮を―「失礼します！」サン！？」

突然サンが映っているモニターが現れびっくりしてしまうはやて。
今のサンに通信をしている暇など無い筈だ。
自分達の戦闘区域に誰も入れるなという、前に一方的な念話が来たが、それよりも更に重要な話の様だ。

「危険魔法の使用許可を！」
「こんな状況でそんな許可がいちいち必要やと思う！？」

サンの言葉につい怒鳴ってしまった。だがミッドが滅びるかもしれない最中で、危険魔法の許可を貰ってきたのだ。はやての気持ちはよく分かる。

「今から使う魔法はここら辺りの生態系を変えてしまうかもしれませんから。早く許可をお願いします！」

「サンっ！？　それは一体どういう魔法「了解や」はやてさん！？」

「そんくらいの責任は私が取ったる」

「助かります！」

それだけ言い終えると、サンとの通信が途切れた。

「まほぉ～おの許可とはァあああ随分冷静ぃですねえ～」

聞きづらいデビルの言葉だが、サンにははっきりと分かった。デビルと戦う内に、口調が何となくだが理解出来るようになったのだ。

「混合兵装・右腕、雷騰（らいとう）の破壊鈴（デストラクトベル）・左腕、天魔波旬（てんまはじゅん）の氷結地獄（コキュートス）・・・・絶対零度天雷（アブソルート シンティラ）」

今度の兵装状態は電気と氷の混合。姿は彫刻では無く、白金の長髪と、辺りに雷氷の欠片を放出している人間の姿をしている。

術式兵装を無事に終え、すぐさま距離を取る。

「我が力にて具現化せよ　雷と氷雪と永遠の女王
咲きわたる銀（しろがね）の百合　動け無き永劫庭園！」

サンの足元に展開された魔法陣はいつも使っているミッド式では無く、はやて等が使っている古代ベルカ式。

この魔法もサンのオリジナルなのだが、ミッドの魔法陣では相性が非常に悪く、優秀な詠唱魔法が多々ある古代ベルカ式の方が、相性が良い。

地上本部が襲撃されてからの１０日弱、サンはカリムに来る客と談話していた訳では当然無かった。混合兵装の開発と、カリムやシャッハから古代ベルカ式の魔法の特徴や、実際自ら魔法を作るにはどうすれば良いのかのアドバイスを貰っていたのだ。

「させるぅ～と思っていたんでェ～すかァ～～！」

当然詠唱中の隙を逃す訳が無く、闇を吹き飛ばして攻撃する。その軌道上にあったバリケードの魔法等はデビルに触れた時と同じように消滅し、その存在理由を完全に無意味にされる。

それでもサンは動じずに詠唱を続ける。

当然である、このサンは幻影だからだ。

その幻影が消えたと同時に、同じ詠唱をシンクロさせて呟くサンが次々と出現する。更には千躰雷囮結界により、電気の魔力によって生成されたサンの姿をした分身が、辺りを激しく飛びまわり、デビルの視界を遮る。

「来れ　永久の雷　永遠の氷河
凍てる雷を身に　善無き悪魔を囚えよ
振るえ無く静寂　銀（しろがね）の百合咲き乱れる　永劫回帰の牢獄
終わりなく輝く九天！！」

詠唱が終わった瞬間に本物のサンの周辺から氷で出来たツタが出現し、デビルに向って突進する。その速度はまさに雷。

動きはシグナムの飛竜一閃を思い浮かべる様に動く。

接近してきたツタをデビルは鬱陶しそうに弾き、海の方へ叩き落とす。

―ガガガガガガガガガガガガ！

そのツタの一部が海に触れた瞬間に半径数キロメートルの海が凍った。先程まで揺れていた筈の大きな海が一瞬にして海面だけでなく、海全てが凍った。

「へぇえええ～」

これほどの魔法の前でも動じずに蚊を振り払うように氷雷のツタを弾かせていく。中には弾くのも面倒なので消されたのもあった。

サンが苦労して詠唱したこの魔法もやはりデビルには無意味だった様だ。それでも攻めの手を休めない。

ガキン！

急にデビルの体が凍った。いや、そう見えるだけだ。実際はデビルを氷の檻に閉じ込めただけで、凍らせた訳ではない。そして閉じ込められた本人はまるで自分を殺してみろと言わんばかりに、動かずニヤニヤと笑っている。

「解放！　雷騰の破壊鈴！」

チリーンと、この死闘の中には似合わない鈴の綺麗な音が氷の檻の中に響いた。だが場違いなのは最初だけ。次の瞬間には檻の中から雷が吹き溢れてきた。雷がわき起きるという“雷騰”の文字に相応しい。

「解放！天魔波旬の氷結地獄！」

もう片方の腕で圧縮していた術式を解放させる。今度の魔法はただ相手を凍らせるだけの魔法。だが熱を発生させる原子の振動を完全にストップさせる程の温度だ。

地獄で最も深い罪は裏切り
裏切り者は地獄の最下層に流れる嘆きの川（コキュートス）に落される
そして永遠に氷漬けにされ、永遠の苦しみを受けている

悪魔をも凍らせるその温度はまさに絶対零度・・・・・・。

「アハハハハハ！　まぁさかこれ～で終わりですか～～！？」

だがそれでもデビルには効かない。自分に触れている冷気を消して、防いでいるのだ。余裕に笑いながら、動かずに次の攻撃を待つ。絶対零度の氷の中で・・・・。

「雷の投的、両腕固定・圧縮、二重装填。疾風迅雷！」

『絶対零度では電気抵抗（オーム）がゼロになります。つまり・・・・』
「電流が永続的に流れる！　両腕解放、雷の投的！」

両腕から解放された雷の槍が氷を貫通し、デビルを貫いた。傍から見たら効いた様に見えるが、実際は前のサンの様にデビルに触れている部分だけが消えているのだ。

「第二効果！　爆音疾呼・雷騰万里！」

槍に向けて上空から雷が落ちる。

電圧は２００万～１０億ボルト、電流は１千～２０万、時に５０万アンペアにも達する。それが電気抵抗の無い超電導で流れているのだ。

流石のデビルでもこれには堪える筈だ。

バチバチバチバチバチ！

サンの荒い息遣いが激しく流れている電気によって消される。魔力消費がかなり激しい魔法を連続で使ったのだ。それに魔力補給をする暇も無かった。

本当は少しでも休みたかったのだが、あとの事を考え、辺りに分散された魔力値を集束する。

この作業をしていると毎回サンは思う。

【母さんのリンカ―コアに似て良かった・・・・】

集束型の魔法を使える魔導士はそう多くはないのだ。理由としてはリンカ―コアの資質にある。リンカ―コアが集束型の砲撃に適している者のみ集束魔法は使用できる。管理局で集束魔法を使える魔導

士と言ったら１００人が１００人「なのは」と答えるだろう。それ程の人物の息子に産まれて、感謝している。

辺りの魔力をリンカーコアの最大値まで集束し、圧縮する。

「ウッ！？」

急に激しい吐き気が襲ってきた。
リンカーコアに不純物が入った感覚だ。

「おやおや～？　僕ぅの、魔力を圧縮して気持ち悪くぅなるなんて、酷いですね～～」

どんな攻撃も闇（デビル）には通用しない。
それが今の二人の“差”

それを否定する様にサンは立ち向う。

――――――――――

「ガハッ！　グ、ゴホッゴホッ！」

だが結果は変わらず、逆に攻撃に専念した結果がこれだ。

「あなぁ～たも、良くやりますねぇ～。これで腕ぇ～の再生回数が、17。腹が6で足が12ですか～。心臓や頭にぃいいい、当たらないのが残念です～～ね」

「い、痛みさ、え・・・・我慢できれば、いくらで、も戦える」

途切れ途切れに返しながら、氷での再生をする。この作業の一回一回を思い出したらどれだけ辛い事だろうか。毎回自らの手足を斬ったり、一部分だけに穴を空けられたりを繰り返している。
体が感じる痛さの他にも、視覚で見たものを脳が痛いと判断して来る痛みも激しすぎる。

「あなたぁ～が、なぜそこまで～するのかがぁ～分かりませんね～？　まだ子供～なのに、そんなになって～、運命呪わないぃんですか～」

確かにデビルの言う通りである。前世の記憶のあるサン。生きている年月はデビルが思っているより遥かに上だが、老人でも子供でも、ここまで痛い思いをして、戦おうとはしない筈だ。
死ぬ覚悟があるのと、死ぬ直前を何度も体験するのでは、心に掛かる負担も違いすぎる。
親の為と言ってもたかが六年だけの付き合いだ、ヴィヴィオやカリムに関しては数カ月、機動六課の仲間もヴィヴィオ達に数カ月足したくらいの付き合いだ。

どうしてサンはここまで戦うのか。相手に絶望をただひたすらに与えたいデビルには、どうしても聞きたい質問だった。

「家族の為？　仲間の為？　想い人の為？　もしかして～、英雄にでもなりたいとか～？　さぁ～どれです～？」

「全部に決まってんだろ・・・・」

「え～？」

「全部だって言ってんだ！
家族！？　当然だろ！　あんなに暖かい物はこの世の中どんなに探しても他にはない！　ちょっと、いや、かなり変わった家族だが、俺には最高の家族だ！
仲間も、短いとか長いとか、そんなのどうだっていい！　一緒に訓練して、任務受けて、仕事して、笑いあう、そんなみんなが頑張っているのに俺だけ逃げるわけにはいかない！　それに八神家の方々には産まれてからずっとお世話になってる。
男が英雄に憧れて何が悪い！？　その二文字の称号はこれくらいやらなきゃ貰えないだろ！

想い人・・・・そうだ！　帰って来いと言ったあいつの元に帰る！
だからお前を倒す！」

パチパチパチパチパチパチ

痛みを忘れ、叫び続けたサンに、デビルはパチパチと拍手を送る。

「すばらしぃ～です～。すごぉおおおいです。

ですが～、想い人を相手に教えるのは、良くありませんよ？」

最後だけがやけに真剣な声だった。

急に静かになったレジアスの執務室。そこに居るのは六人。その中の二人は死亡し、一人は気絶。立っているのはシグナム、アギト、そしてゼストの三人だけ。

「・・・御同行お願いします」

「断る。ルーテシアを救いに戻り、スカリエッティを止めねばならん」

【やはりこの方は騎士と名乗れる立派な心をお持ちだ・・・・。だが、仰られていた通り、少々遅い・・・・】

「スカリエッティと戦闘機人達は既に逮捕。ルーテシア・アルピーノも私の部下達が保護するべく、動いております」

「・・・・そうか、ならば、俺の為すべきことはもう、あと一つだけか・・・・・」

そう呟き、ゼストは自らのデバイスをシグナムに傾ける。

「旦那、どうして!?」

「じっとしていろ!」

慌てて止めようとしたアギトだが、ゼストの覇気ある声に動くことを止められる。

シグナムも同じ騎士としてゼストの考えが分かるのか、何も言わずにレヴァンティンを構える。

「夢を描いて未来を見つめていた筈が、いつの間にか随分と道を違えてしまった。本当に守りたいものを守る、ただそれだけのことが、何と難しいことか・・・・」

シグナムにはその想いが痛いほど良く分かった。十年前闇の書の呪いにより、はやては命の危機に迫られていた。

ただ助けたいと思って、魔導士を襲撃したりもしていた・・・・。

もしゼストに、なのはとフェイトの様に、必死に想いを伝えてくれ、助けようとしてくれる人がいたのなら、この結末にはならなかったかもしれない。

「はあああああ!」

走りながら斬りかかって来るゼストの攻撃を、右にかわす。ゼストのデバイスにより触れたリボンが斬れ、ポニーテールの髪がふわりと下に落ちる。

すぐさま来るゼストの足への攻撃を、空に跳び回避し、落ちる落下速度を利用して斬りかかる。

ガキン！

二人のデバイスがぶつかり合う。

力を精一杯振りしぼり、上からの攻撃を弾き返そうとするが、シグナムの方が一枚上手だった。

ゼストのデバイスが真っ二つに折れてしまう。

「ック。うおおおお！」

それでもゼストは最後まで戦おうとする。武器の無い丸腰の状態でも命乞いもせずにシグナムに向う。

「・・・・紫電一閃」

炎を纏うレヴァンティンが・・・・・・ゼストを切り裂いた。

再び聖王のゆりかご、駆動炉

駆動炉に入った時より更に傷だらけになっているヴィータは、既に片手で数えられる以上の大打撃を駆動炉に食らわせていた。

それなのに駆動炉に付いている傷はゼロ。

「ハァ、ハァ、ハァ、ちくしょう」

ずっと前から体は限界だというのに、それを嘲笑うかのように駆動炉は壊れない。

「うおおおおおおおお！」

―ガガガガガガガガ！

「でりゃあああああああ！」

―ドドドドドドーン！

「なんで、なんでだよ・・・・」

ヴィータの目には未だに傷の付いていない駆動炉。

「こいつをぶっ壊さなきゃ、みんなが困るんだ。はやてのことも、なのはのことも、守れねえんだ！
こいつをぶち抜けなきゃ、意味ねえんだ！！　だから、アイゼン！」

『ギガントフォルム』

再び破壊対象に向ってハンマーを叩きつける。
壊す壊す壊す。そのために更に、更に力を入れる。力の限界と感じたら身体強化の魔法を使い、グラーフアイゼンに威力強化の為に魔力を流し続ける。

「うおおおおおおおお！」

だが、それだけの事をやっても無意味だった。
駆動炉に弾き飛ばされ、もはや飛ぶ体力さえも無く地面に落下していく。隣を見ると、自分と同じく傷だらけのグラーフアイゼン。

「ダメだ・・・・、守れなかった・・・・・、はやて、みんな・・・・・ごめんっ」

地面にぶつかると覚悟していたヴィータが感じた感覚は、やけに柔らかく、暖かいものだった。

「謝る事なんてなんもあらへん」
「は、やて？　リィン・・・・・」
『はいです・・・・』

暖かく抱きしめてくれるはやては、悲しそうな顔と声で呟く。

「鉄槌の騎士ヴィータと、グラーフアイゼンがこんなになるまで頑張って・・・・
それでも壊せへんもの何て、この世のどこにも、ある訳ないやんか・・・・」

ピキピキピキピキピキピキ

確かに聞こえる何かが壊れて行く音。幻聴ではない。
絶対に現実での音だ。

それを証明する為に、音の方へと顔を向ける。

―ドドドドーン！

今までのヴィータの攻撃よりも、小さな爆発音が確かに聞こえ、駆動炉が爆発した。

駆動炉が爆発したことに、当然クアットロはすぐに分かった。
駆動炉の爆発情報をロングアーチに収集させないために、素早くスカリエッティアジトの自爆スイッチを押した。
これにより自爆解除の解析等で、こちらに来る目は少し減った筈だ。

「防御機甲フル稼働、予備エンジン駆動炉自動修復開始、ま、まだまだ」

流石のクアットロも少々戸惑ってしまった様だが、すぐに余裕の表情に戻った。

だがそれも、自分の後ろにある魔力反応によって消される。

「ッハ！？　こ、これは？」

『ＷＡＳ　成功。座標位置特定、距離算出』

「見つけた・・・・」

息を乱しながら呟いた。
今までずっとクアットロを探していたのだ。防御に徹していたのも時間稼ぎの為だ。
なのはは素早くビットを操作し、ヴィヴィオにバインドを掛け、邪魔されない様にする。

「エリアサーチ！？　まさか、ずっと私を探してた！？
だ、だけどここは最深部、ここまで来られる人間なんて・・・・」

どうやら普通の人間では最深部には行けないようだ。だが行かなければ良いだけのこと。
展開した全ブラスタービットとレイジングハートをクアットロが居る最深部に向ける。当然王座の間から最深部までは、沢山の障害があるが、砲撃魔法のエキスパートであるなのはには、超えられる壁であった。

「ブラスター3！　ディバイ―ン」

レイジングハートが次々とカートリッジを行い、なのはに魔力を与え続けている。レイジングハートの先で今か今かと発射を待ち望んでいる桃色の魔力が更に大きくなっていく。

「バスターー！！」

―ドガガガガガガガガ！！

壁を一枚、二枚、三枚と次々と壊して行き、最深部に押し寄せて行く。
その最深部には恐怖と絶望の余りに体を震わせているクアットロ。
どんどん大きくなっていく砲撃音が、悪魔の囁きに聞こえる。

すぐに逃げだした。
ナンバーズとしてではなく、ただ死にたくないという恐怖から。

「ぁ、ぁぁ・・・・あああああああ！！」

悲鳴を押し黙らせるかのように、なのはの砲撃が、クアットロを中心に最深部を飲み込んだ。

クアットロが気絶した直後、各地ではガジェットの停止、暴走していたルーテシアの召喚獣達も理性を取り戻し大人しくなった。

それと同時にヴィヴィオも、うめき声を上げ、頭を抱え始めた。

「ヴィヴィオ！」
「なのは・・・・ママ？
ッツ！？　だめ、逃げてーー！」

近づいて来たなのはに、ヴィヴィオは拳を振った。なのはの事を思い出した筈だ。しっかりと目の前の人物を見て、なのはママと呟い

た。クアットロからの洗脳も既に解けた。

「ダメなの・・・・・
ヴィヴィオ、もう、帰れないの・・・・・」

ウーウーウー！

『駆動炉破損　管制者不在　聖王陛下、戦意喪失。これより、自動防衛モードに入ります』

「ダメなの！　止まらないの！」
「ダメじゃない！」

泣き叫びながら砲撃を撃ってくるヴィヴィオに言い聞かせるように、砲撃で撃ち返しながら叫ぶ。

砲撃は相討ちと思った矢先、回り込んできたヴィヴィオに、地面に叩きつけられた。

「もう、来ないで・・・・
私、分かったの。もう、ずっと昔の人のコピーで、なのはマ・・・・なのはさんもフェイトさんも、サンも、ほんとの家族じゃ、ないんだよね・・・・
この船を飛ばすだけの、ただの鍵で、玉座を守る、生きてる兵器・・・・」

「違うよ」

「ほんとのママなんて、どこにもいないの！
守ってくれて、魔法のデータ収集をさせてくれる人を、探してただけ」

「違うよッ！」
「違わないよ！
悲しいのも、痛いのも、全部作られた偽物。私は、この世界にいちゃいけない子なんだよ！」

ヴィヴィオは全て知ってしまった。レリックの中の記憶が頭に入った。

「・・・違わないよ」

なのはの声は震えているが、優しさ溢れる、親の声。

「生まれ方が違っても今のヴィヴィオは、そうやって泣いてるヴィヴィオは、偽物でも作りものでも無い。甘えんぼですぐ泣くのも、転んでも一人じゃ起きられないのも、ピーマン嫌いなのも、私が寂しい時に良い子ってしてくれるのも、私の大事なヴィヴィオだよ。
私は、ヴィヴィオのほんとのママじゃないけど、これからほんとのママになれるように努力する
だから、いちゃいけない子だなんて言わないで！
ほんとの気持ち、ママに教えて・・・・」

「私は・・・私は、みんなのことは大好き。みんなと一緒にいた

い！
ママ、助けて・・・・」

やっと聞き出せた本当の気持ち。
ヴィヴィオの抱える悩み。

これから少しずつ母親になっていこう。

その為の一歩として、全力全開でヴィヴィオを助ける。

「助けるよ。いつだって、どんな時だって！」

チェーンバインドを巻き付け、行動を封じる。

そして、ヴィヴィオの目線の先には、桃色の塊が三つ。その中の一つはひと際大きい。大きいのはなのは本人で、あとの二つはブラスタービットによるもの。
桃色である優しい色が恐怖に、しかしその恐怖が嬉しさにもなる。

「ヴィヴィオ、ちょっとだけ、痛いのがまんできる？」
「うん・・うん」

「防御を抜いて、魔力ダメージでノックダウン。行けるね、レイジングハート？」
『行けます』

この空間全ての魔力値を三点に集める。
目を瞑りたくなるほど眩い、しかしずっと目に収めたい程の綺麗な

桃色の魔力。

「全力、全開！
スターライト・・・・」

これで・・・終わりだ。

「ブレイカ――――――！！！」

桃色の魔力が三点からヴィヴィオに放たれた。

―ドドドドドドドドドド！！！

「ぅあっ、う、あああああああああ！」

ヴィヴィオの苦痛に耐えている声が聞こえ、徐々に、本当に徐々にだがレリックが胸元から出現する。だが全て出現するより、ヴィヴィオの体に限界に来てしまいそうだ。
だからもっと、もっと、魔力出力を上げて行く。

レイジングハートももう限界に近く、ヒビだらけになる。

一瞬砲撃をためらってしまったが、１０年の相棒（パートナー）の姿が、自分の事は気にするなと言っている。

「ブレイク……シューーート！！！」
「あああああああっ！！！」

ヴィヴィオから完全に別れたレリックが砕け散ると共に、ヴィヴィオを中心に巨大なクレーターが出来ていた。クレーターの大きさが大きさなので、中の様子は近づかないと分からなかった。

レイジングハートを杖に、よろよろと立ち上がり、クレーターに近づく。

「ヴィヴィオ・・・・、ヴィヴィオッ！」

「こ、来ないで！」

なのはの目に映ったのは自分の力で立とうとするヴィヴィオ。何度も転び、地面にぶつかるが、その度に起き上がろうと必死に頑張っている。

数か月前、芝生に転んだ時は起き上がれなかった光景を思い出す。あの時と違い、地面が固く、大人でさえ泣くような怖い思いをして、自分の母親を傷つけてしまって、何より痛い思いをした後で・・・・・・それなのに、それなのに自分の力で一生懸命起き上がろうとしている。

「強くなるって・・・・約束したから・・・・・・」

その言葉を聞き、なのはの目から涙が溢れだした。

すぐさまヴィヴィオに走り寄り、ギュッと小さな体を抱きしめる。

アースラブリッジでは、ゆりかごの異変が観測されていた。

『ゆりかご船速低下、上層速度激減』

『これなら、艦隊の到着の方が早いです。7分差が埋まりますっ！』

このあとの行動は、ただ一人を除いて完璧に動いた。

聖王のゆりかごの防衛プログラムで、王座の間に閉じ込められた、なのは、ヴィヴィオ、二人の救援に来たはやて。Sランク魔導士でさえ魔法が使用できないAMF状況下で助けに来たのは、戦闘機人モードのスバルとバイクに乗って来たティアナ。

フェイトもスカリエッティアジトの自爆を、シャーリーの協力もあり無事解除した。その直後、突然フェイトに落ちてきた瓦礫を、応援に来たエリオが助けようとしたが、フェイト自らの力で瓦礫を破壊した。

キャロはアジト外に居るガジェットの生き残りを潰す作業をしていた。

ヴィータははやての治療のおかげでゆりかごから脱出することに成

功。

シグナムはゼストの最後を見届け、アギトと共に2型ガジェットを破壊している。

その頃サンの目の前で、デビルの手によってカリムが殺された。

何故カリムが此処に、そんな疑問はサンには無かった。
殺されたのだ。自分の想い人が自分の憎い相手に。

サンを支配する感情は“復讐”

「・・・・・・・・アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

人間の出したとは思えない叫びをサンが上げる。

一転にして黒に変わったサンの姿。

何の言葉も考えも無い。

この状態のサンは果たして“太陽（サン）”と呼べる者なのか？

闇への覚醒　（後書き）

バナナ「いや～、あと数話でＪＳ事件終わり。てか次話になるかもですね」
サン「アアアアアア！！」
バナナ「……え～となのは達の脱出シーンは原作と全く一緒なので省きました。同じくゼストやアギト、フェイト、エリキャロもです。いい加減ＪＳ終わらせたいんですよね」
サン「アア！？　アアアアアアアアアアアア！！」
バナナ「……いや～、ネギまのえいえんにつづく九天をマガジンで見て、書きたかったのですが、少々パクリが多かったです」
サン「アア！！　アア、アアアアア！！」
バナナ「アアアアア！　ア！！　アアアアア！！」
サン「アア！？　ア！！　アアアアアアア！」
バナナ「アアアアアアア！　ア！　……って、付き合ってられるか！」
サン「アアアアアアアアアアアア！！」
バナナ「ひい！？　で、ではみなさん、私が生きているのなら次回お会いしましょう！　うおおおおおおおお！　戦略的撤退！」

さかのぼること数分前。

自分のどんな攻撃も通用しないと判断したので、サンは兎に角回避に徹底した。一番速く移動できる雷の状態でデビルから離れる。その闘い方がデビルにはつまらないのか、今までとは比べ物にならない速さでサンに飛ぶ。雷速一歩手前のその速さと、どのようなものも消してしまう闇の攻撃でサンを徐々に追い詰めて行く。

「ハハハハハハハハハハハハ！　そらそら！　ネズミの様に逃げまどうのだ！」

「ック！　すぐに口調の変わる気味悪い奴だ！」

目くらましの魔法を使いながら逃げる。だがそれも、デビルにとってはあっても無くても変わらないものになってしまう。

じわじわと追い詰められながらも必死になって逃げる。

まだ勝機があるのだ。

［奴にアルカンシェルも無意味ではないですか？］

［別にアルカンシェルじゃなくても良い。ロストロギアでも何でも天下の管理局なら持ってるだろ］

そう、自分がデビルを引きつけ、その間に管理局の武器を用意してもらおうとしている。

だがその念話をデビル聞かれ、更に攻撃密度が上昇してしまう。

「ふん！　そんな時間を与えると思っているのか？　俺が貴様を消す時間は長く・・・・・・」

――――――――キーン

この時、デビルの中になにかが溢れてきた。力や感情などではない。自分の意思を迷わせる・・・・・・もう一つの人格が、急にデビルの中に現れた。

【誰だ貴様！】

デビルは一旦戦闘を中断して、頭の中でもう一つの人格に叫んだ。それに答える様に、ケケケと不気味な笑い声が帰って来る。サンを逃がしてしまったデビルはイライラしている。その笑い声を消す様に自分の頭の中の別の人格を対象に、闇の消す能力を発動する。

【ケケケケ、そんなのが効くわけ無いだろ？】

【貴様、あの時の声か？】

あの時とはデビルが闇に覚醒する前に、地上本部襲撃事件でサンとぶつかり合った時のことだ。

もしあの時の声と同じ人格なら、デビルにとって味方であろう。

【そういうことだ。俺はお前の味方であり先生でもあるんだ】

【先生だと？】

【ケケケ、お前にその状態になるコツを教えてやっただろ。それにその前にも一度助言してやった筈だぜ。忘れたのか？】

【・・・・・死ね】

デビルにとって“先生”という言葉は憎悪でしか無い。

この戦いの前にサンはデビルを調べたと言っていた。確かに産まれから育ちまで合っていたのだが、ライナと息子が死んだ当時の自分の所属についてまでは言っていなかった。いや、所属についてはデビルの恨みとは関係が無い。問題はその所属していた部隊に、なのはが教導官（きょうどうかん）として来ていたのだ。

先生でありながらも自分だけ子供を産み、幸せになり、生徒である自分は家族全てを失った。

【ケケケ、お前は負の感情を具現化した様な存在だな。まあ俺がそうしたんだがな。アヒャヒャヒャヒャ】

早くサンを殺したいデビルにとって、この人格がこの上なく鬱陶しい。

サンを殺す瞬間にこの人格が「ケケケ」と笑っていると気分が悪い。

【ケケケ、気分悪くて悪かったな。じゃあそろそろ本題と行こうか・・・・・。

貴様の体を貰う】

【ふざけるな、俺は高町サンを殺す！　あいつは俺が殺す！！】

【それは困るな～。あいつをお前に殺させる訳にはいかないんだよ。あいつはこの俺様が乗っ取るからな】

その言葉と共に、デビルの意識が無くなった。

「よし、デビルからかなり離れた。幻影や分身も大量に展開した。これで大丈夫「それはどうかな？」っな！？」

突如サンの頭上からデビルの声がした。慌ててそちらを見ると、デビルに首を掴まれ必死にもがいているカリムが居た。

「ど、どうしてカリムが！？　は、早くカリムを離せ！」

カリムが何故ここに居るのか、その疑問があったがそれよりカリムの命が大切だった。射る様な視線でデビルを睨みつけ、叫んだ。

デビルがあっさり返してくれる訳ないので、攻撃しようと構えていたサン。

返された言葉は意外なものだった。

「いいだろう。ほら」

なんと掴んでいたカリムをサンに向って投げつけたのだ。
その行動に愕然としてしまったが、すぐにカリムを抱き止めようと腕を広げた。

サンに向って飛んでくるカリムは、怖かったのか涙を溢れさせており、サンに近づくにつれて徐々に表情が希望に包まれて来る。

あと少しで胸に届くという所で・・・・・「ズシャ！」と、肉を斬る様な音がした。

「え？」

抱きとめたカリムの体温はやけに冷たく、腕をだらけさせていた。
まぶたを開かず、口も開けずに、まるで死んでいる様だ。

サンが手の平を見てみると

赤い血がついていた。

「ぁ、ぁ、ぁっぁああ・・・・・・・」

「・・・・・・・アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

この瞬間、サンは闇に呑み込まれた。

—ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

サンの復讐心から生まれた闇の強さの余り、空に居ても感じられる程世界が震えた。

「な、なんや！？」
『サ、サンが、サンがデビルと同じ姿に！』

「「どういうこと！？」」

シャーリーの報告を聞いて誰よりも早く動いたのは、なのはとフェイトだった。二人ともシャーリーが映っている画面に勢い良く迫る。シャーリーはビクビクしながらその映像を見せる。サンの姿が怖いのか、二人の親としての顔が怖いのか、どちらかは分からない。
なのはとフェイトの瞳には、闇に包まれた子供の体格のサンが映っていた。
怪物の様な咆哮を上げ、デビルに向って突進する。

「こ、これっていったい・・・・・」
「サンッ」

二人とも動揺を隠せずに肩を震わせている。

サンを六年間見守って、時には守られてきた二人。
そんな二人の目にはいつも冷静で、大人っぽいサンが居た。絶対に冷静とは言えないが、それでも子供にしては異様なほど賢い子だった。
その六年間という時間で見守って来たものが、たった数秒の映像で撃ち砕かれた感じだ。

・・・・・・・・いや、そんな説明出来る様なことでは無い。ただ悲しいのだ。自分達の息子が、理性を失い、ただ目の前の敵を殺そうとしているだけの獣と化してしまった事に。
産まれた時、抱き上げ、優しく撫でた子供が、負を連想する闇を纏っている。

「ど、ぅして？　どうしてこうなったのッ！？」
『ッヒ！　そ、それは・・・・・・・』

鬼の様な形相でなのはに睨まれたシャーリーは、怯える事しか出来ずに嗚咽をあげてしまう。

「私が説明を・・・・・・」

シャーリーを、なのはの睨みから庇う様に現れたのはカリムだった。

「カリムさん？」

カリムはすぐに話した。
自分がサンに恋愛感情を持っていること、同じくサンも自分に同じ感情を持っていたこと、デビルはカリムの幻影を作りサンの目の前で殺した事、その時サンが闇に呑みこまれたこと。

一部始終しか見ていない前線メンバーは勿論、サンの戦闘を見ていたロングアーチもその話には心底驚いていた。
サンの気持ちを知っていた者も、闇に呑まれる程の気持ちとは思っていなかったらしく、サンの想いの強さに胸を痛める。

――――――

沈黙がこの場を支配する。
皆、発言しにくい状況になった。
両親の前、想い人の前、もしサンを少しでも辱める事を言ってしまったらと思うと口が開かないのだ。

そんな中、ただ一人沈黙を破ろうとする者がいた。

ヘリの中で座っていたスバルは、ガタンと大きな音を出して立ち上がる。

「じゃ、じゃあサンの前で殺されたカリムさんは偽物ってことです

よね？　それならカリムさんがサンに言葉を・・・・・・」
「勿論やったわ。でも、私の声は届かなかったみたい・・・・・・」
「そう、ですか・・・・・」
ショボーンとスバルは縮まってしまい、隣に居るティアナに助けを求めようとする。
「・・・・・・あの、兎に角こうして黙っては何も始まりません。まずは戦闘区域ギリギリの所まで行きませんか？　失礼かもしれませんがサンにはカリムさんだけが全てでは無いと思います。みんな一人一人がサンに言葉をかけてはどうでしょう？」
スバルに続いて沈黙を破ったのはティアナだった。スバルの涙目に釣られてしまい言ってしまったが、かなり失礼な事を言ってしまったと言い終えて後悔した。
ティアナは心の中で上司に土下座をする。
「私もサンに言いたいことがあります。まだ少ししかお姉ちゃんらしいことしてあげてません」
「僕も、僕もサンのお兄さんです。でも、ずっと助けられてばかりで・・・・・・だから今、今度は僕がサンを助けてあげたい」
キャロ、エリオもティアナに続き思いを語った。
「私は絶対にサンを取り戻す。なのはとの約束を破る訳にはいかない。それに・・・・父親として、道を間違った息子を正しい道に戻してあげないと」
「せっかくヴィヴィオを助けたのに、サンが居なきゃ意味無いよね。

私もサンを助けるよ。そして元に戻ったら説教しないとね！・・・・・ヴィヴィオはどうする？」

いつも通りの優しく厳しい親に戻ったなのは。

屈みこんで足元に居るサンの妹に視線を合わせる。

「私も・・・・、お兄ちゃんを助けたい！」

「どうやら決まりみたいやな。他のみんなも異存はない？」

「「「「はい！」」」」

「アアアアアアアアア！！」

サンが吠えながら人格（デビル）との距離を詰める。余りの速さにデビルも目を見開いた。

二人の拳がぶつかり激しい爆音が――――しなかった。二人の闇の触れたものを消す闇の力により、空気の振動そのものが消されてしまったのだ。

サンは攻撃のラッシュを、守りを考えずに打ち続ける。どうやらその攻撃は人格（デビル）にとって有効らしく、徐々に後退さって行く。どうやら闇同士のぶつかり合いではどちらが呑まれることは無い様だ。もっとも攻撃している本人は、そんなことを知っている訳が無かった。もしかしたらデビルに消されてしまうかもしれない、そんな考えがある筈が無い。

ただひたすら、死を与えようとする獣なのだから。

「凄い凄い凄い！　貴様を乗っ取ったらどれだけの力が手に入るだろうか！　もっと、もっと俺に力を見せてくれ！」

人格（デビル）は完全にもう一つの人格に乗っ取られた様だ。今までサンを「殺す殺す」と叫んで来た人物が、今では「乗っ取る」と言っているのだ。そんな矛盾さえも今のサンには気にならない。

コロスコロスと吠えながら、ラッシュを続ける。

「さすがだ！　力も、スピードも、技術も、魔力値も、才能も、全てがこの体より上。もし正気に戻ったらと、考えるだけでゾッとするね～」

人格（デビル）は一秒に何百と来るラッシュを一つ一つ丁寧に弾き返している。ただ殺すことだけを考えているサンの攻撃など慣れればすぐに対処できるものだ。

「アアアアアアアアアアアアアア！！！」

一旦後ろに後退したサンは右腕と左腕をクロスして、体が覚えている感覚だけを頼りに術式兵装を行おうとする。

術式兵装を行うには、術式を発動するのではなく術式を根本から具現化し、手の平に出現させなければならない。

それを潰す。だがただ潰すだけではいかない。その潰した術式が発動しない様に制御しなければいけない。

それらを全て感覚だけで終わらせ、闇を纏まっているサンは雷と業火の二つを装備した。

その雷は黒雷に、業火は黒炎へと変化される。

「おおおお！　素晴らしい、本当に素晴らしい！　闇の魔力変換物質だけで、俺と同じ様に闇を使える！　それに加えて電気の変換物質と火の変換物質を装備するなんて、早く乗っ取りたい！」

その意味など考えずに人格（デビル）へと飛びこむ。右腕、左腕、右足、左足、頭でひたすら殴り続ける。

その攻撃を笑いながら人格（デビル）は弾き返す。

「アアアアア！！」

攻撃が通用しないと自覚したのか、体が覚えている魔法を発動する。

『黎明の雷傳砲』黄色の雷を撃つ魔法が、黒に呑まれた黒雷として人格（デビル）に向って行く。

今までの攻撃とは違い、その魔法には闇の力が宿っている筈だ。そう人格（デビル）は考え、様子見の為に黒球を砲撃に投げる。前までは闇に触れた魔法は抵抗する間もなく消えた。

―ドドドドドドドドド！

人格（デビル）が何となく予想していた通り、黒雷は消えずに黒球を破壊した。破壊した後も砲撃はデビルに向って流れて行く。

「やはり闇の力も手に入れてるのか。最高だ」

能力を見定める為に、あえてサンの砲撃を真正面から受けた。空が振動し、激しい爆音がミッド上空に響いた。

「アアアアアアアア！」

次に黄金の炎を手の平で展開する。しかし黄金の炎は、一秒と経たずに黒金（くろがね）へと変化する。

「アアアアアアアア！！」

その炎を投げようとしたその時・・・・・・・・サンを囲う様に沢山のモニターが現れた。

その一つ一つにサンの大切な人が映っている。

「サン、元に戻って！　いつもはあたし以上に大人っぽいじゃない！」

スバルの声が――

「あんたは考えるより先に行動するけどしっかり指示は守ってたでしょ！　今回も守りなさい！　その姿から元に戻れ！」

ティアナの声が――

「昔から泣かない、怒らない良い子だったでしょ！　しっかりしなさい！」

シャマルの声が――

「お前に拳を教えたのはその様な事を行う為では無い！」

ザフィーラの声が――

「お前ぇがそんなんでどうすんだ！　なのはの心を受け継いだんじゃねぇのかよ！」

ヴィータの声が――

「僕に本当の親を教えてくれた時のサンはそんなんじゃ無かった！　初任務の時に助けてくれた時もそんなんじゃ無かった！　いつものサンに戻って！」

エリオの声が――

「私に甘えてくれた、お姉さんらしいことさせてくれた、頼りない私をお姉さんって言ってくれた！　優しいサンに戻って！」

キャロの声が――

「そんなのサンじゃないです！　ユニゾンした時に自分を盾にしてまで守ってくれた心は何処にあるですか！」

リィンフォースの声が――

「私はその様なお前を好きになったのでは無い！　そしてお前にその様な為に武を教えた訳でも無い！　今までの高町サンに戻れ！」

シグナムの声が――

「聖王教会の騎士としての自覚、誇りを忘れたのですか！　貴方は今までそれを覚え、持ち、大切にしていた！　しかし今の貴方にはその様な心はありません！」

シャッハの声が――

「なのはちゃんとフェイトちゃんの息子やろ！　そないな格好で戦って、そんな心で戦って・・・・二人の息子やろ！　それを忘れたらあかん！」

はやての声が――

サンの耳に皆の声が聞こえた。しかし殺意は止まらない。

「ガアアアア！」

サンは闇をデビルに向けて飛ばす。それをデビルは回避し、そのままサンに接近する。
拳をぶつけ合う。
脚で蹴り合う。
闇を呑み込み合う。

そんな戦いを続けていくと再びサンの耳に声が聞こえた。

「サン！　私は愛する人が居る！　その人に助けて貰って、友達を教えて貰って、他にもいろんなことを教えて貰って、私は学んだ。なのはを好きになって、想いをなのはにぶつけた。その告白が今の私となのはの関係に必要なことだったよ。サンが今やっていることは本当に好きな人の為なの！？　それが分からずにただ走っているだけなら今すぐ止まりなさい！」

フェイトの声が――

それを聞いたサンは一瞬止まる。心に引っ掛かった。本当に自分の行動がカリムの為なのか・・・・。

「良いのか？　貴様が死んだら好きな奴も同じ様に死ぬのだ。俺は死んだ人間でも殺せるからな」

人格（デビル）の声がサンにははっきりと聞こえた。今までの声よりもはっきりとだ。カリムが死ぬというのがサンにはどうしても許せない。

「アアアアアアア！」

再び動きデビルを殺そうとする。間合いを取ったサンは、闇から作りだした大量の鎌を展開する。それを超高速で回転させて、人格（デビル）に向かわせる。人格（デビル）も同じ闇を纏っている存在なので、呑み込まれはしないが逆に呑み込め無いので鎌を回避した。

「サン！　私にはサンの気持ちは分かる！　デビルにフェイトちゃ

んが殺されそうになった時に、私は必死にもがこうとした。倒したいと思った！　でも力が無かった・・・・。サンにはそれが有った・・・・。

でも！　サンにはそれを知って欲しく無かった！　光が生み出す闇の心を、優しい気持ちから生まれる憎悪の心を、感じて欲しくは無かった！　お願いサン、サンにはそんな恋はして欲しく無い！」

なのはの声が――

サンは再び止まったが、デビルがある方向を笑いながら向く。サンにはそれがすぐに分かった。

眠っているカリムの居る方向だ。

「アアアアアアア！」

再び化け物の様に吠えたサンはデビルに接近する。デビルも同じくサンに接近した。両者が激突した瞬間に、半径数百メートルに闇のドームが出来た。

一羽の鳥がそこに入る。

その瞬間に鳥が見えなくなった。

何も聞こえず、鳴かず、抗えず、呼吸すらも許されない。この中はそんな世界だった。

「少々この空間で戦うのはきついな・・・・。だがこいつの魔力も残りあと僅か。何の抵抗も出来なくなった時があいつの最後。この俺があいつとなる」

中にいる人格（デビル）は独り言を呟く。どうやら闇を纏っている人格（デビル）でもこの世界は重苦しい様だ。すぐにスピードを上げて脱出する。ドームから脱出したデビルを追う様にサンも脱出して、ドームを消す。

「サン！」

その声が聞こえた瞬間にサンの動きが止まる。人格（デビル）がその隙を狙って攻撃してくるが、黒い盾を展開して防いだ。

「サン・・・ありがとう。私が殺されるかもしれないから、そこまで怒ってくれるのでしょう？　でも大丈夫よ。私は死なない、貴方という騎士が居るのです。私はそんな貴方に助けられたい・・・・・優しい貴方に。だから貴方はいつも通りに私を守って下さい！　いつも通りのあなたで戦って、勝って！」

その言葉と雫を浮かべているカリムの瞳に、サンの姿が僅かにだけ人間味が戻った。

しかし、闇の存在によってそれは遮られる。

「いつもの貴様で戦えば死ぬぞ？　俺を殺すなら、その状態で戦わないとな～」

「ガアアアアアアアアアアア！」

何度目か分からない獣の叫び声を上げたサン。自分が死んだらカリムまでが死ぬ。そう体が判断してしまうのだ。

だからもっともっと力を欲する。その為に必要なのは更なる負の感情。

髪を闇に染め、爪を伸ばす。

「貴方！　何処まで人の心を堕とせば良いのですか！」

カリムが人格（デビル）に向って叫ぶが、それを無視してサンを向く。

再び打ち合おうとした瞬間に、サンの目の前にモニターが現れる。
そこに映っているのはヴィヴィオ。

「お兄ちゃん・・・・」

サンの悪魔の様な姿を見、ヴィヴィオは悲しみ、喉の奥が酷く痛い。
先程からサンの姿を見ていたヴィヴィオだが、目の前にするとあの優しいサンを忘れてしまう程の邪悪な存在だからだ。
しかし、すぐに強き者の目に変える。絶対にいつもの兄に戻して、人格（デビル）を倒してもらう為に。

「お兄ちゃん！　何してるの!?　なのはママを、フェイトパパを、エリオを、キャロを、カリムさんを、機動六課のみんなを悲しませて、怒らせて！」

今までのみんなの言葉を無視したサンに想いのまま言葉を言う。今までのヴィヴィオとは全く違い、可愛い声でも大人っぽい口調だった。しかしサンは全く耳を立てずにデビルと打ち合う。
闇を出し、展開し、纏い、デビルを攻撃した。

「止めて・・・・・」

サンの異常な行動にもう泣くしかなかった。泣かないと決めたのに泣くしかなかったのだ。

「いつもの優しいお兄ちゃんに戻ってよ・・・・・・明るいお兄ちゃんに戻ってよ・・・・・ヴィヴィオいい子にするから・・・・・・ちゃんとチョコ無しにピーマン食べるから・・・・・・・」

ヴィヴィオの泣きながらの訴えが聞こえたのか、体が止まった。

サンの殺意とは違う、別の本能が止めた。

「良いのか？　貴様の好きな奴が死ぬぞ～？」

「お願いお兄ちゃん！　あんな人の言葉を信じないで！」

自分の言葉（悪魔の囁き）では無く、ヴィヴィオの言葉（想い）に従っているサンに、人格（デビル）は憤怒の表情で攻撃を始める。

【ここでこいつを戻したら水の泡だ！！】

「ッツ、ガッ！」

デビルの攻撃をもろにくらったが、動かずにヴィヴィオを見て呟いた。

「ヴィ、ヴィ・・・ォ？」

理性を失ったと思われたサンに自分の名前を言われた。それが嬉しく嬉しくて溜まらないのか、笑顔のまま涙を流し始める。

そして笑顔になり、明るい声で言う。

「うん！　ヴィヴィオだよ。そんな奴いつものお兄ちゃんならすぐ

に倒せるよ！　頑張ってお兄ちゃん！」

「あ、・・・・ああ！」

理性を取り戻したサンはいつもの顔に戻して人格（デビル）を見る。
ようやくサンが理性を取り戻したのだ。そうさせたのは想い人のカリムでは無く、妹のヴィヴィオ。

しかしその想いは意味無く、いや、逆に更なる闇へとサンを堕としてしまう。

「どうして・・・ヴィヴィオが此処に・・・・？」

サンの瞳に映っているのは人格（デビル）とヴィヴィオの姿があった。あり得ない、先程までヴィヴィオは自分に言葉をかけてくれた。それに今も見てくれている筈だ。そう思い、先までヴィヴィオが映っていたモニターを探した。しかしそんなものはどこにも在らず、ヴィヴィオの悲鳴がサンの耳に入った。

ヴィヴィオは必死の形相でサンに近づいて来る。後ろに居る人格（デビル）を何度も見、恐怖を感じて逃げている。

「お兄ちゃん！　違うよ、私は「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」」

幻術によって消されていたヴィヴィオの姿が映った時にはもう遅い。
幻のヴィヴィオはサンの目の前で人格（デビル）によって殺された。酷い殺し方だ。小さな女の子をまるで人形の様に酷く殺した。

――ヴィヴィオが殺された
――自分の前で、酷い殺し方で
――助けられた筈だ　でも助けられなかった
――二回目
――カリムとヴィヴィオを同じ奴に、目の前で殺された
――幻か現実、どちらでもいい
――復讐したい　殺したい　悪魔を狩りたい
――だったら悪魔よりもっと強くなればいい・・・・・・
――不幸　災いをもたらす存在より　生死を司る神が

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「待ってサン！　ヴィヴィオさんなら此処に・・・・・」

しかし時は既に遅く、サンは更なる闇の進化をする。

背中には堕天使を連想させる黒翼、纏う闇がボロボロコートの様になり、刺々しい黒い巨大な尻尾が生え、瞳には死を連想させる十字架の紋章が浮き出てくる。

「お・・兄、ちゃ、ん」

その姿を見たヴィヴィオは悲しみしか感じなかった。優しい心を持った兄が、復讐の獣となっている。どうして兄がこんな目に遇わなくてはいけないのか、どうして人格（デビル）はそこまでサンを殺そうとするのか、何回、何十回考えてもヴィヴィオには答えは出ない。

「ガガガガガガガガガガガガ！」

サンは目の前に自分が入れる大きさの闇を展開してその中に入る。そして次の瞬間にデビルの後ろに闇が展開され、そこからサンが現れた。未だにサンの存在に気付いていないデビルに向って、闇の剣を刺す。

「な！？」

デビルはサンの存在に気が付き慌てて後ろを見る。サンはひたすら剣を刺し続ける。体に埋め込ませ、新たな剣を出し、それを刺す。人格（デビル）の鼓膜が破裂しそうな程の絶叫が辺りに響き渡る。

「止めて、サン！　さっきのヴィヴィオさんは偽物なの！」

想い人であるカリムの声でさえも、サンには聞こえない。頭の中ではカリムとヴィヴィオが死んだことの悲しみと、殺した人格（デビル）への殺意、この二つだけしか無い。

だが、その二つしか無い思考を増やす事の出来る人物が一人居る。

「お兄ちゃん！」

ヴィヴィオだ。ヴィヴィオの声を聞くと、何故か我を取り戻す。まるで暗闇を照らす光の様に、サンの心を明るくさせるのだ。

「ヴィ、ヴィ、オ・・・・？　止めるな！！　こいつはカリムを！お前を！！」

ヴィヴィオが目の前に居るというのにそのヴィヴィオが死んだと勘違いをしている。恐ろしい程の復讐心で、夢か現実か、本物か偽物か、真実か嘘か、その判断が出来ないのだ。サンの中では目の前のヴィヴィオは自分が作りだした幻。

痛みの余りに過呼吸をしている人格（デビル）にサンは再び剣を刺そうとする。

「待って！　だからカリムさんも私も生きているの！！」
「嘘だ！　カリムは死んだ。お前も、俺の前で・・・・。だから、だから！　俺はこいつを殺す！！」

そう叫び、人格（デビル）に剣を刺す

「痛～～あアアアアアアアアアあ！」

刺された人格（デビル）は身のすくむ悲鳴を上げる。
まるで地獄に居る罪人が拷問されている声と絵。
それを見て怖さの余り体が震えるが、フルフルと唇を震わせながら

必死に口を開く。

「この、前・・ね。フェ、イト・パパから、聞いたん、だ。お兄ちゃんの、名前って、太陽、から取、ったん、だよね」

太陽という単語を聞いたサンは人格(デビル)を刺すことを止めて、ヴィオを見る。

体は震えており、目には涙があり、恐ろしいものを見ている表情だ。

「あああああああああ！」

僅かに攻撃を止めた瞬間に人格(デビル)が隙を見て、サンから間合いを取った。

するとデビルの体の中では再び二つの人格が戦いを始めた。どちらがこの体を操るかの死闘。体で戦うのでは無く、より強い欲望と心がその死闘の勝敗を決める。

「違う違う違う違う、私は高町サンを殺す殺す殺す殺す殺す！」

そう、異常なほどサンへの復讐心を持っていたラールがこの体の所持者になった。うるさかったもう一つの人格さへもその殺意で黙らせ、悪魔(デビル)の名に相応しい絶叫を上げる。

「アアア！！！！！」

ひたすら叫び続けるデビルは、闇を纏った姿が更に濃くなり、巨竜の姿になっていく。
デビルを殺す為に接近しようとするが、ヴィヴィオに止められる。

「待って！　お兄ちゃんは太陽（サン）なの・・・・・星（ママ）と雷（パパ）の二人とも違う光り方をする太陽（サン）。お兄ちゃんの今の姿は名前に合って無いよ・・・・・」

ヴィヴィオが言う太陽（サン）を聞くたびに、頭が冷静になり、殺意が薄くなり、何時もの表情に戻っていく。段々辺りが見えるようになった。

このヴィヴィオは本物で、カリムも死んではいない。
自分は闇の姿になっていて、沢山の人の言葉を無視した。
絶望して、それでデビルと同じ闇の姿になった。

【デビルもこうだった？　大切な人を失って、恨んで、殺したいと思った・・・・・】

徐々にいつものサンに戻って行く。闇の格好をしていても、ヴィヴィオにはすぐに分かる。自分がいつも甘えていた雰囲気に戻った。
何となく、何となくだが絶対と言える自信があった。

そしてヴィヴィオは瞳に溜まっていた涙を拭い、サンに向って笑顔でそのままの気持ちを言う。

「サンお兄ちゃんは光っているのが一番似合うよ」

―ドクンッ！

サンの心臓が激しい音を立てた。カリムとは違う感覚。
今ではっきりと分かるこの気持ち。
言葉では説明出来ないカリムとの違い。その想いが“ソレ”だと自覚する事が出来る人はどれだけいるだろう。
前世でも現世でも良く聞く単語。しかしそれを本当に、心から言うことは難しい。

でも、今のサンなら心から言える。
この感情は、カリムの好きとは違うヴィヴィオへの気持ち――

「これが・・・・・・愛って気持ちか・・・・・」

誰にも聞こえない様にそう呟いた。
このヴィヴィオへの気持ちが恋愛か、家族か、身近な人間かは分からない。前者じゃないとしても、やはり恥ずかしい台詞だ。

恥ずかしいのか頬をポリポリと掻いていたサンの胸から、突如光の玉が出て来た。それは段々と人の形になっていく。

「な！？　リリ。こいつは何だ？」

『やはりまだ問題があるのでしょうか？　私には何も見えません』

リリの淡々とした声がサンの体の中から聞こえる。どうやら理性を失っている内に体の中に引きずりこんでいた様だ。

「ヴィヴィオも何も見えないよ・・・・」

どうやらヴィヴィオにもリリにも見えないみたいだ。

丸い球体は徐々に大きくなり、手足と首が少しずつ生え始める。少し経つと光は女神を思わせる程美しい女性の姿になった。

【！！？　お、落ち着け。ヴィヴィオとリリの言葉からすると少なくとも二人には見えてないということ。こ、ここで驚いたら色々と・・・・】

正直声を上げて驚きたいサンだが、此処でそれをやると完全に病気だと思われるので止める。

だがやはり気になるものは気になる。

怪しまれない程度に女性を見ては逸らし見ては逸らす。結果的にそれが余計怪しく感じるのだが、軽くパニックになっているサンには分からなかった。

その姿を女性は見てクスリと笑い声を上げる。誰もが見惚れそうな光景だったが、自分の体の中から出てきた人物に見惚れる程美女に飢えている訳では無い。

女性はサンの近くに飛び、その絹の様に繊細かつ白い手でサンの頬

をゆっくりと撫でた。
ここで驚いてはいけない、ここで反応してはいけない、そう必死に自分に言い聞かせる。

【大丈夫です、私は貴方の味方です。この声で分かりますよね？】

その声を聞いてサンは目を開く。
すぐに味方だと分かった。
それほど印象強い声で、綺麗な声。
女性の声は夢で聞いた神の雫の声だったのだ。

何故自分の中から出てきたのか、何故今になって出てきたのか、そんな様々な疑問が出てきたが、デビルの巨竜への進化が完成する直前だったので、取り敢えず後回しにした。勿論このままだとスッキリしないので、あとで全部説明しろ、と声を出さずに口を動かした。
それを理解したのか神の雫はコクリと頷く。

そして改めてヴィヴィオの方に振り向く。

「ヴィヴィオ、確かに今の俺は太陽（サン）とは言えない・・・・。だから今から見せてやる。俺の名の通りの姿を！」

「うん！」

・・・・・・・・・・

「ふう～」

サンは一回息を吐き、心が落ち着つかせた。首に掛けてある太陽のアクセサリーを取る。ヴィヴィオから貰った大切なアクセサリーだ。空に浮かんでいる太陽からの光が、アクセサリーを反射してサンの目に入ってくる。

これを見てますますある欲望が大きくなる。

【この太陽の様に光る、いや、光りたい】

頭の中で光のイメージをする。明るい、暖かい、綺麗・・・・・・他にも様々な光に対して持っているイメージを思い浮かべる。こう考えると沢山の光があった。宗教的なものも、見ると何となく光をイメージするもの。別に百人が百人そうイメージするものでなくても良い。サン本人がイメージする光と言うものを考えれば良いだけなのだ。

【大丈夫。俺は高町なのはとフェイト・テスタロッサ・ハラオウンの息子。出来る、イメージだけでも変換物質を・・・・・・

光の変換物質を創れる！】

手の平をゆっくりと開き、自分のイメージ通りの感覚で魔力を放出する。ただ変換するだけでは意味が無い。変換した物質を使った術式を具現化し、それを安全に圧縮しなければならない。
イメージ、演算、処理、知識、発想、それらを平行で行う。

ピカッ

一瞬だが汚れ無き光が手の平から現れたが、闇によってあっという間に呑みこまれた。
どうやら闇の、光に対する拒絶反応の様だ。
つまり今の状態から光の術式兵装を行うには、闇に打ち勝たなくてはならない。サンの闇とは復讐心。二人が生きていると分かっても、体が覚えている復讐心はまだ残っている。
ゆっくりと、しかし可能な限り早く、復讐心を振り払おうとする。
だが復讐心が消えるどころか、ヴィヴィオとカリムが殺された映像を思い出してしまい、だんだんと大きくなっていく。

【落ち着け、落ち着け、冷静に、光のイメージを強く！！】

必死に心を落ち着かせようとするが、それが逆に意識を活性化させてしまい心が荒々しくなってしまう。さらにデビルの一段と大きい断末魔が聞こえ、集中が完全に途切れてしまった。

【――――～～～～ッ！！】

【大丈夫です。妹さんのことを考えながら行えば、あなたのやりたいことは達成できます】

神の雫の言葉に頷き、サンは再び目を閉じた。
今度は心を無にしようとするのでは無く、ヴィヴィオを想い浮かべた。笑って、泣いて、怒って、悲しんでいるヴィヴィオの顔を思い浮かべる。そんなヴィヴィオの隣にはなのはとフェイト、そして少し遠くに自分の姿があった。自分の隣にはエリオとキャロ。なのは、フェイト、ヴィヴィオを微笑ましそうに見ているのは機動六課のみんな。カリムとシャッハも同じ様に優しい笑みで見ている。

だけど何か一つ大事なことを忘れている気がする。
それがヴィヴィオをイメージするのに邪魔をする。

【あなたには一つ心残りがあるみたいですね・・・・。それも自分で・・・・・】

今度は心残りになっていることを考え始める。
スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、はやて、ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラ、リインフォース、六課のみんな、親戚、祖父、祖母、カリム、シャッハ、聖王教会で知り合った人達・・・・・・何かが違う。
戦闘機人、ルーテシア、ジェイル・スカリエッティ、デビル、ラールの家族・・・・・・これも何か違う。
別に今絶対に解決しなければならない問題では無い気がする。しかし今、この瞬間に解決しなければいけない気もする。

――瞳
――悲しい目
――紺と青の綺麗な目をした子

そう、サンの最後の心残りはアインハルト・ストラス。
前に会った時はデビルと戦っている最中だったので気が付かなかったが、アインハルトは悲しい目をしていた。寂しくて、悲しくて、今すぐ泣きそうな。

【最後の悩み・・・・・それは】
【アインの悲しい目をしていた理由を聞くこと・・・。あの目を放ってはおけない】
【・・・あなたの心残りもこれで無くなった様です。さあ】

ヴィヴィオと遊んでいるなのはとフェイト、笑っているみんな、聖母の様に微笑むカリム、悲しい目から優しい目に変わったアインハルト

この光景を見る為に・・・・・俺は、俺は!!

「術式兵装、ｍａｇｎｕｓ『偉大なる』ｇｒａｔｉ『恩寵を受けた』ｌｕｍｅｎ『光』。両腕固定

圧縮――――最高位の太陽

Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ」

そして、光の術式を潰した。

辺り・・・・・・いや、世界が光に包まれた。
サンを中心に、まるで全世界が光に包まれている様な、明るい光が。
まるで人の心を明るく照らす光の様に、サンから放たれた光はミッドを包み込んだ。

「・・・・・・・きれい・・・・・・・・」

誰が言ったのか分からない程小さな声がした。
その人物の目に映っている者は、白い髪に赤と青の瞳、神具を連想させるマントをはおった小さな少年。その少年から出ている光は、本当に人間が見て良いモノかと思わせる程神々しい。

サンは何も言わずに完全に竜と化したデビルの方を向く。
腐っている様などす黒い皮膚、血の様に赤い六つの目玉、顔の七割を占めている巨大な口には惑星さえも噛み砕けそうな程巨大な牙。
体は丸く巨大で、翼は刃の様であり羽の様でもある。
そしてその体はサンに向けられている。

サン瞳には、悲しみと怒りが同時に宿った。

―悲しみは大切な人を失った同情
―怒りは大切な人を殺した復讐心

自分が見たヴィヴィオとカリムは幻影、つまり本物は死んでいない。
それなのにここまで怒りが湧き出てくる。
ラールは本当に大切な人を失った。その同時刻に新たな生命が産まれた。自分も目の前で大切な人を失い、闇に堕ちてしまった。
この二つの思いが重なり、相反し、シンクロし、レジストしあう。

「・・・・・・・・」

だが、今更同情してももう遅い。
デビルも、サン自身も、もう止まれない所まで来てしまった。

「ｊｇ@ｇｊｗ；ｍｐ：@ｍｈ；あ、ｊｈれ：ｊ：あｊ@おｇｗ「ｈ；め：ｊｍ、ｆｊｄｋ「ｐｄ！！」

闇に堕ちた竜はもう言葉を忘れてしまった。ただ怒りを、殺意を、声にして現している。

「デビル・・・・いや、ラール。お前も闇に堕ちた時、誰か言葉を掛けてくれたら、こんなことにはならなかったのかもしれないな・・・・・」

「ｌｌｊｇ@ｍｍ@あおいんｌｍｆｄ；ｍソいｈｊｒ；ｈｌｇｍｊ，ｋんｇｇィィッィｓｈ：；ア！！」

「もう言葉も失った・・・・か」

【私は戦闘では全く力になれません。あなたがその姿になった以上、私が出来ることは全てを話すことだけ。すいません】

【分かった。すまないが邪魔になる。少し離れていてくれ】

神の雫は頷き、そのまま離れて行った。

「ｌｌなｇｐｋなｐｇ@おｒｋｆｇノｈｊｇンｇ@：ァｗｊｈ！！」

デビルの心をそのまま音にした声と共に、その巨大な口から半径３００メートルは軽くある黒い球体が出現した。その球体にはデビルの心が映し出されており、謎の文字や言葉が浮き出ている。

サンは何も言わずに頭の中にある術式をそのまま具現化し始める。術式が余りにも高度すぎる為、もはやデバイスであるリリにもどんな魔法か理解できない。しかしサンのやりたいことは感得できたので、何となくだが魔法の形はイメージ出来る。

「行くぞ、これが俺の全力全開！
天地創造光（てんちそうぞうのひかり）！　Ｓｏｌａｒ　Ｂｒｅａｋｅｒ！！」

サンの小さな手の平から出されたとは思えない巨大な光の球体が、デビルの黒い球体に向けて発射された。

――ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！

光と闇、その両方が互いを消し合おうとミッド全てを揺らし始める。半径３００メートルはある二つの球体。ある部分は光が闇を包みこんでおり、ある部分は闇が光を呑みこんでいる。

「ッグウウウウウウウウウ！！」
「ｊ@ｐｑｗｈｇナｗ@ｇカｂピｎアｊバ！！」

両者一歩も譲る訳にはいかない。一歩でも引くと呑みこまれてしまうと本能が二人に言う。それ程二人の力は釣り合っているのだ。

「うおおおおおおおおお！！」
「@オｊアがｋｇｇｋｆｄｌ。ｓ「！？」

最後の力を振り絞り、サンは自分が出せる全ての魔力を球体に注ぎ注ぐ。一気に闇の球体の七割以上が光に包みこまれた。だが、まだ全てでは無い。

全てを包み込まなくては勝てないのだ。

【ァｊｈｋｆんｈｋｇｈｔｌｍｋｈｇｓｌｌｔｒｌｋｆｄｂｄ！！】

――キ――ン、ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！

今度は黒い球体が急に光の球体を呑みこみ始めた。その球体には更に文字が増えており、デビルの負の感情の増加が見られる。

ビシッ！　神々しいサンの手の平が、デビルの攻撃の威力に耐えきれずに皮膚が破けてしまう。それは一度だけでは終わらずに、腕まで被害が広がって行く。

「ッツ、うおおおおおおおおあああああ！！」

「ｌｌｍｈんｚｌｍｌｒイｈｓｂｃｘｌのうｒ！！」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド！！！

激しい爆音と共に白い球体が半分以上呑みこまれる。デビルの力の源である負の感情がまた増加したのだ。

「ま、まだ・・・・だ。まだ俺はお前に負けるわけにはいかないんだよ！！　デビルッ！！」

サンの頭の中には守りたい人たちが映っている。それだけで、その映像を思い浮かべるだけでサンの体は力を取り戻す。負ける訳には、死ぬ訳にはいかないと体全体が叫んでくれるのだ。

そして再び二つの球体の力が五分五分になる。

もう何分経ったのだろう。それすらもサンは分からなくなった。数秒かもしれないし、数時間経っているのかもしれない。その判断が出来なくなった。魔力の放出量と体の限界、出血量もかなりのものだ。

「！！！！！」

何を読み取ったのか、デビルの球体の力が今までとは比べ物にならないくらい大きくなった。

「っな！？」

意識が朦朧としてしまったのか、デビルの力に対応することが出来ずに光の球体は僅か2割しかなくなっていた。

僅かでも力の差が出たら負けてしまう。そう自分に言い聞かせていたのだが、集中力が無くなってしまったのだ。

これがチャンスと感じたのか、デビルの攻撃力がますます上がってゆく。それだけデビルの復讐心は上がっているということ。

それほどまでに大切な存在だった、デビルにとってライナとは、そのライナとの子供は・・・・。それを失わせたサンは殺すべき存在。

しかしサンにも負けられない理由がある。産んでくれ、育ててくれた両親。最初はぎこちなかったが今では仲の良い兄と姉。赤ん坊の頃からお世話になった八神家。機動六課で一緒に戦った仲間。サポートしてくれた同僚。早く助けてあげたい悲しい目をした少女。騎士にさせてくれ自分を守ってくれた主。自分の不注意の所為で消えてしまったもう一機のデバイス。世界を救ってくれと言った神の雫。そして、愛している妹。

「ま、け、られねえ。想い、の強さで、負けられるかよ！！」

だがサンの力だけではデビルの黒い球体を押し返す事など出来ない。リンカーコアが休みたいと、体も戦いたいがもう無理だと、そう悲鳴を上げている。もはや白い球体は、サンの意地だけで黒い球体を押さえている状態だ。

でも……

もう、限界だ。無理だ。

そう思った時

「サン！　しっかり！」
「ここで諦めちゃだめ！」

なのはとフェイト、二人の声が聞こえた。可能な範囲で首を動かすと、そこには父親と母親の姿が確かにあった。そして二人の後ろには、機動六課前線メンバー全員が居た。

「「「「サン！」」」」

「どう、し」

「しゃべっちゃだめ。私達も何か手伝えると思って！」

球体と球体のぶつかり合いによって発生している衝撃波に逆らい、少しずつなのはが近づいて来る。

「オｂガｐｊｇ，ァｇｈナｇｈ．ｊイィｈがｍｇぁｍｌｋんｚｌ！！」

「キャアアアア！！」

デビルの咆哮に思わず耳を塞いでしまい、なのはは衝撃波の流れ通りに飛ばされてしまう。

「なのは！」

飛ばされているなのはをフェイトはすぐに抱きとめる。その後、なのはと一緒にサンに向って少しずつ飛ぶ。

「――――」

「これ、以上、吠え、させるかよ!!　うおおおおおお!!」

デビルが空気を吸おうとした時に、サンは最後の力を絞り出し、黒い球体を押し返そうとする。

「なのは!」

「うん。今がチャンス!」

二人は衝撃波の中で出せる最速のスピードを出し、何とかサンに触れられる所まで辿り着いた。

その瞬間、優しい空気に包まれた感覚がサンは確かに感じた。改めてサンは思う。自分はこの二人の子に産まれてよかったと。この優しい空気がサンをそう思わせた。

死闘の中の両親の出す空気は、まるで砂漠の中のオアシスの様だ。

『マスターが押し負けたら母上様も父上様も死んでしまいますよ。オーバーの仇をお願いします』

リリの声が聞こえた。ずっと一緒に居る筈なのに妙に懐かしい気がする。そう感じるのは当然である。リリがサンの集中を切らさない様に何も話さなかったのだ。陰から出来る限りの身体能力強化等の

魔法を使用していた。

「父さ、んは、俺の体を、支えて。母さん、は、ここ、ら、一帯の魔力値を集めて。リリ、頭が、痛い。魔法の演算、手伝い」

「「『了解』」」

二人と一機は言葉を重ねた。

フェイトはサンの体に完全密着し、サンの手を支える。少しふれた瞬間に先程までとは比べ物にならない衝撃がフェイトの体を叩く。まるで障壁無しで空を飛んだみたいだ。ソニックブーム一歩手前と言っても過言ではない程の衝撃。

フェイトの手がサンと同じ様に、傷が付いて行く。だがそんなことで怯んだりはせずに、グググと唸りながらサンを支え続ける。

リリは今サンが使っている魔法の解析に専念した。余りに高度すぎる為、自分の力では無理だ、理解するなど不可能。そうプログラムは判断しているのだが、リリは諦めずに解析する。外見から、サンの展開している魔法陣、魔力変換物質、似たようなデビルの砲撃も材料として計算を続ける。ただのインテリジェントデバイスがスーパーコンピューター並みの演算と処理を行っている。

そして努力が実った。

「リリ、だいぶん、楽になった」

『ではもっと楽になる様に演算を続けます』

「父さん、も、サンキューな。無理は……」
「息子が頑張っているのに父親の私が引き下がるなんて絶対に出来ない。死んでもサンを支え続ける！」

なのはは集束魔法陣を展開し、辺りに散らばった魔力値を集めていた。
しかし量が足りない。この場には沢山の魔力値があるのだが、自分のリンカーコアのダメージとレイジングハートの損傷の二つの障害が立ちはだかったのだ。

「ック、大丈夫、レイジングハート？」
『勿論です。私達だけ倒れる訳にはいきません』

レイジングハートの返答と共に集束のスピードを速めるが、やはりほとんど溜まらない。

「お願い、お願い、集まってよ・・・・・・。隣でフェイトちゃんとサンが頑張っているのに、私だけ何も出来ないなんて・・・・・・。そんなの嫌だよ・・・・・・」

「諦めるなんてなのはちゃんらしくないっ！」

そちらに振り向くと、前線メンバー一同がそれぞれの魔力光の小さな球体を両手で握っていた。
それはリンカーコア。

「みんな！？」

「あたし達だけ見守ってるってのは嫌だからな」

ヴィータ

「守護獣であるのにこのくらいの仕事しか出来ずにすまん」

ザフィーラ

「ここにいるみんな、この事件が終ったらしっかり休まないとね」

シャマル

「ッフ、烈火の将である私がリンカーコアを渡すとはな」

シグナム

「ちっちゃいですけどしっかりと魔力が詰まっています」

リィンフォース

「あたしの憧れのなのはさんにリンカーコアを渡すなんて、何だか不思議です」

スバル

「あたし程度の魔力でどうにかなるとは思いませんが、少しでもお役に立てれば」

ティアナ

「お母さん、絶対にサンを助けて下さい。あんなに一生懸命になっている弟を勝たせて上げたいんです」

キャロ

「なのはちゃん、母親として、サンを支えたいんやろ？　でも母親じゃなくてもそうや、みんなサンを支えたい。せやからこのお礼はなんにもいらへんよ」

はやて

「お母さん、お願いします。サンに力を貸してあげたいんです。勝ってほしいんです・・・・・・。

僕達のリンカ―コアを、そのままレイジングハートに送ります」

エリオ

「みんな・・・・・分かった。みんなのリンカ―コア、少しも溢さずにサンに届けるよ！」

なのはは笑顔でそう言い、レイジングハートに全員のリンカ―コアを保管した。そっくりそのまま保管すれば良いだけの作業だったので、今度は楽にできた。

「サン、どうすれば良いの！？」

「俺の、近くまで、それを持ってきてくれ・・・・」

途切れ途切れで弱っているその声に頷き、なのははサンの横へ飛ぶ。

「それで？」

「展開して、後は何も・・・・」

なのはは再び首を縦に振り、言われたとおりにする。

サンの目には、赤、藍白、青磁、紫、白、水、橙、桃、白、黄のリンカ―コアが浮かんでいた。同じ色のリンカ―コアもあったが、どれが誰のだと見ただけで分かった。

一つずつ、ゆっくり動かし、大切に自分の胸の中に入れて行く。

ヴィータ、ザフィーラ、シャマル、シグナム、リインフォース、スバル、ティアナ、キャロ、はやて、エリオ。

全部のリンカ―コアがサンの中に入った。

胸が暖かくここちよい。

弱弱しかったサンの体が、徐々に起き上がって行く。

「・・・これで、終わりにしよう」

右隣りに居るフェイト、左に居るなのは。二人はサンに頷いて答え、サンの体をしっかりと支える。

「「これが俺（私）達の全力全開！！

Ｓｏｌａｒ　Ｂｒｅａｋｅｒ！！　Ｆｕｌｌ　ＭＡＸ！！！」」」

―ドドドドドドドドドドドドドドドド！！

「！？！？！？！？！？！？！？！？！？」

―ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！

白の球体がだんだんと黒い球体を包みこんでいく。

「アアアアアアアアアアアアアアアア！！」

それを押さえつけようとデビルも威力を上げる。
それでも、白い球体を止めることは出来ない。

「デビル、お前はずっと一人だったんだろう？　スカリエッティとどう会ったかは分からない。今のお前を見ていると、あいつらとも上手く行って無かったと思う・・・・。ライナさんが死んで、お前はずっと一人だった・・・・・・」

「あなたには私の様に暖かい手を差し伸べてくれる人が居なかった・・・・・。だから絶望し、嫉妬し、復讐しようとした。そうしないと壊れてしまいそうだったから。きっとあなたもあんな理由でサンを恨むのはおかしいと思っていた筈。それでも、何かの理由を付け、誰かを恨まないといけない。本心を言うと私も同じ気持ちになると思う。それ程愛は大きなもの・・・・・・」

「どうしてあなたは私じゃなくてサンを恨んだのか、それがどうしても聞きたい。そしてもしあなたの本音が聞けたら、その時はあなたを叩きます。私はサンの母親。もしこの子の産まれのことで何か言うのなら、その言葉から子供を守るのが母親の義務であって性。きっとライナさんも子供さんの事で何か言われたら、同じことをすると思う・・・・・・」

「お前はこの六年間ずっと復讐と言う名の闇の中に居た・・・・。だから、最後は！　俺が、俺達がお前を光で包みこんで終わらせてやる！」

黒い球体が完全に光に包まれ、白い球体はそのままデビルに向って飛んで行く。三人の言葉を聞いてもなお、デビルはその光に触れようとはしなかった。小さな闇の球体を大量に展開し応戦しようとした。

それも光に包まれて行く。

「ライナさんと子供さんによろしく・・・・・・」

「ア、アアアアアアアアアアアア！！」

黒い球体が完全に光に包まれ、デビル本体も優しい光によって包まれた。

そこから先の記憶は無かった。

九月二十二日　高町サン六歳の誕生日

この日は歴史に残る大事件となり、後にＪＳ事件、または悪魔の終末、太陽の昇る日として残された。

悪魔の終末　太陽の昇る日（後書き）

アハハハハハハハハハハハハハハ！！
やっと書けた、やっと書けたぞ！　ブルータス！！

投稿遅れてすいませんでした。
これももう毎回言ってる気がしますねｗ
まあ今回の遅れた理由としてはこの分量が大半な気がしますｏｒｚ

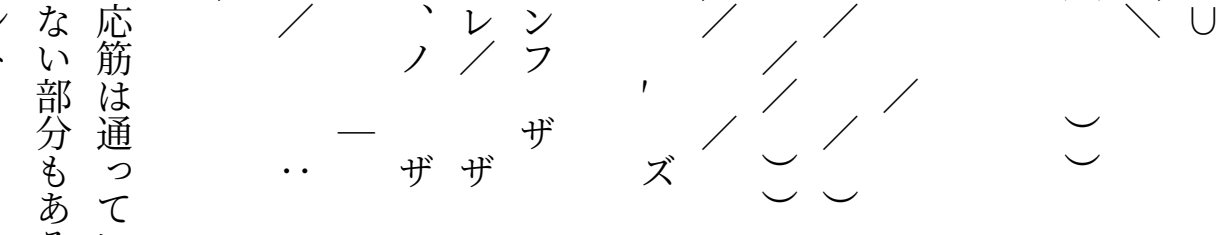
これでも結構抜ける所は抜きました。

今回が大体１９０００字くらいで、最初フハハハ／＼／＼／＼的なテンションで書いた時は大体２６００００くらいに……テンションって怖ぇぇ

しかし最近冷えてきましたがみなさん大丈夫ですか？
私は虫の居ない季節になったので凄くうれしいです（虫好きの方はすいません）

さてさて、やっとＪＳ事件が終わりました。取り敢えず次は神の雫の真実を聞きたいと思いますが・・・・・・酷いです

本　　＼　＼
当　　ｎ（ ゜д ゜、∩　トウッ
に　　、、ヽ　ｙ
‥　　「、　　―
　　し（ ヽ―



自分の中では一応筋は通っていると思いたいのは山々なのですが、文に書ききれてない部分もあるかもしれませんし、ご都合主義炸裂すぎますし、ホント・・・・ざんねぇえええん!!　by侍芸人

その後の展開としてはしばらくほのぼの入れて、アプロディーテさんが下さった案になると思います。

それではここまで読んでくれた皆さま、本当にありがとうございました。まだまだ魔法少女リリカルなのは　術式を潰す少年は終わりませんが、言わせて下さい。（次回の更新が異様に遅くなることはありませんよ！　勿論今まで通りの間にはなると思いますが）

←ここからは作者の下らない話

さて、今回の話ですが本当に大変でした。いや、正確にはサンが術式兵装を編み出し、そこからですかね。
何といっても大変なのは技名。
読者の方には　何それ？　ダセ　厨二ｗｗ　乙　下らねえぞＪＫ
と、どれか想われた方もいると思います（苦笑）
しかし私にも厨二病患者としてのプライドがあります（、・ω・´）
キリッ

四字熟語、知恵袋、ネギま、遊戯王、ＦＦ、画数の多い方から辞書、類語・英語・ギリシャ語・ドイツ語、兎に角あさりまくりました。
結構な数が四字熟語を改良した名前が多いです。
例
輪廻転生の稲妻
人が生まれ変わり、死に変わりすること。
不滅な霊魂は、いろいろな生に生まれ変わるという思想。仏教のことば。
「輪廻」は車輪が回り続けるように、命あるすべての存在が、迷いの世界を生まれ変わり死に変わりめぐること。
「転生」は生まれ変わること。「転生輪廻」とも言う

意味とは違いますが、余は永遠に続く、的な感じですね。

また、今回のＴｈｅ（ザ）　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ（スプレマシー）　ＳＵＮ（サン）は分かる人には分かるネタだと思っています。
技名と言うとやはりネギまは凄く厨二ですね。
サンの切り札術式兵装は勿論、おわりなく続く九天、雷の投擲もネ

ギまから頂きました。ちなみに九天の技は本来は氷雷の薔薇で攻撃しますが、これでは百合です。何故かは分かりますよね？

あとサンの闇とデビルの闇、これについては
サンの闇→心の闇から出来た闇の魔力変換物質を術式兵装した状態
デビルの闇→もうひとつの人格によって、心の闇をそのまま具現化した

こんな感じにちと違います。

サンの集中シーン

何故アインハルトが出てくる！？　と感じた方は多いと思います。
私も感じましたが、人って（すくなくとも私は）集中しても、ちょっと何かが気になった瞬間猛烈にそっちに意識が行ってしまう時があると思います。
サンの場合も何かがひっかかる→周りの人たちを思い出す→アインハルト
になっております。
ついでに瞳に関しては幼少期なのはがフェイトに感じていた様なものですね。

そしてほのぼのに移行する時にサンの弱点、もとい駄目な所を色々書きたいと思います。ぶっちゃけ正直完璧超人のリア充のほのぼの見てもイライラするだけですしねｗｗ。既に書いちゃってるかな？

……

さて、続いてはヴィヴィオへの気持ちです！！（上はスルーですよ！）

カリムが好きでヴィヴィオが愛というのが今回分かりました！

この愛についても私色々と調べました！

何しろ高校になっても一度も告白をしたこともされたこともなく、芸能人も憧れ、二次元も何だかんだで居たら良いな、みたいな感じのま～色気の無い人生を送っていますからね。

愛って結構専門的用語みたいですね。

私も良く分かりませんがやはり異性に対して愛してるって感情と自覚するのは難しいみたいですね（取り敢えずなのフェイは置いといて）

注意　上のものはいくつかのサイトで見たものでの私の感想です。

まあともかく、好きと愛は違うっぽいのでそうしました。

ヴィヴィオ、カリム、アインハルト、この中のヒロインはあなたなら分かると思います！

ついでにアインハルトの年齢はわざと6歳にしてあります。

さて、かなり長ったらしくなりましたのでそろそろ終わりにします。

後書きの誤字脱字は見直すのがメンドクサイのであるかもしれませんw

本編は見直しはちゃんとしたので大丈夫とは思いますが、もし何かあったら報告お願いします。

一週間後　新しい家族は高町家の次女（前書き）

しんじられな～い

何故こんなに早く投稿出来たし……

マジでどうしたし俺……

一週間後　新しい家族は高町家の次女

ピーピーピーピー

一定間隔に同じ高さの音で機械が鳴り続ける。
サンはその音で目が覚めたが、体がダルくて寝足りない気分だ。再び目を閉じて寝ようとするが、ピーピーピーと同じ音が永遠と聞こえる。
イライラし、意地でも寝てやると思った瞬間に眠気が無くなり、仕方なく目を空けゆっくりと起き上がる。

「サン！？」
「ぅ～、母さ・・・・」

言い終える前にサンの顔がなのはの柔らかく福与かな胸に埋もれた。

「サン！　よかった・・・ほんとによかった・・・・」

今にも泣きそうな声。そんな優しい声を聞くと羞恥心など下らないものは消え、母親の暖かい温もりに触れたくなった。

「ありがと、母さん。もう、終わったんだよな？」
「うん、あの事件は全部終わったよ。数人病院通いは居るけど、機動六課はみんな元気」

「そっか・・・。ところで、そろそろ離れてくれる？　息が若干苦しい・・・・」

そう言われてハッとしたのか慌てて離れる。辺りの空気をゆっくり

吸い始めるサンを見て「にゃはは」と苦笑いをする。それを呆れる様な視線からなのはは逸らし、別の話題を持ち出した。

「え～と今はあの事件の丁度一週間後、機動六課隊舎の一部は既に直っているからみんなそっちに居る。ただはやてちゃんやカリムさんは報告とか説明とか兎に角大変で今はあっちこっちを移動してる」

「・・・・カリムが？」

しまったと思ったが、自分から言っておいて答えないのは駄目だ。それにこのカリムの話はサンの闇とは関係無いので、気軽に言っても大丈夫と判断し、明るい表情のまま答える。

「聖王教会騎士としてよりサンの主として働いていられるよ。今回の件で一段とサンの注目度って上がったからね・・・・。管理局だけじゃなくて沢山の大企業もカリムさんに媚び売ろうとしたり、何らかの理由を付けて味方にしようとしたりと」

「あ～、そりゃすまなかったな・・・・」

「全然気にして無いみたいよ。むしろ自分の騎士がこんな騒ぎになるまで活躍してくれて鼻が高いみたいだよ」

どう考えてもその言葉は嘘だ。

なのはが嘘を吐いているのでは無くカリムが嘘を言ったのだろう。しかしそこまで気にする事では無い。カリムも冗談で言っているだろうし、なのはも笑顔で言っていることからカリムの冗談を理解していると考えられる。

「我が主ながら、らしくない事を言うな」

「フフッ、多分その顔にする為に仰られたんじゃないかな？」

隣にある鏡を見てみると、少しいつもの自分になっている。

「もしかして俺、かなり酷い顔だった？」

口元をピクピクと動かせながら聞いて来るサンに噴き出しそうになる。笑いを堪えながらなのはは頭を縦に振る。

別に親にくらい酷い顔を見せても良いが、決して恥ずかしいわけでは無い。ソッポを向いて窓の外の景色を見る。

そんな姿が子供らしく可愛かったのかなのはは隣に座り、よしよしと頭を撫でる。

「サン」

「・・・・何？」

「私、最初はサンが起きたらガツンと怒ろうと思ったけど、何だかそんな気分じゃないな」

「俺としては怒られなくて良かったよ。母さんは怖いからね」

真剣な言葉にふざけて返した。それがわざとでちょっとした嫌がらせというのも母にはちゃんと分かる。ギュッとサンを抱きしめ、口を開く。

「良く頑張ったね」

「・・・・・力有る者の使命、みたいだから。マスターの言葉」

「フフッ、それだけじゃないくせに・・・・。

あと、そのうち説教は覚悟しといてね」

「・・・・遠慮する」

「う～、絶対するからね、絶対絶対！」

ウイーン

なのはの叫び声と共にフェイトとヴィヴィオが入って来た。二人ともまだ若干の怪我が残っている。フェイトは両腕に包帯が巻かれており、ヴィヴィオは所何処ろに絆創膏が張られていた。
それに気付きなのはの方を見てみると、短い包帯が腕に少し巻かれていた。
それ以外にもリンカーコアの傷を感じる。

自分だけこんな大げさな状態が男のプライドを刺激し、立ち上がろうとするが全身に激痛が走る。

「痛っあああああああ！！？」
「だ、大丈夫お兄ちゃん！？」

慌てて駆け寄ったヴィヴィオに勢い良く寝かされる。
体が横になると激痛が無くなり、叫び声が消えたので安心したのか、ヴィヴィオはホッと息を吐く。
ヴィヴィオが攫われる前とは正反対のその光景に親達は微笑ましく笑う。

「・・・ヴィヴィオ、お前大人っぽくなった？」
「え～と、良く分からないけど昔の人の記憶とか、生み出された理由とか、そんな感じ」

笑顔で答えてくる妹に呆れるしかない。痛みが来ない程度に上半身を起き上がらせてハ～と溜息を吐く。

「どんな感じだよ・・・・」
「でも本当だし」

これ以上言わないで下さいオーラを出してくるヴィヴィオに、サン

は何も言わずに手招きをする。首を傾げるが、サンが何も言わないので、手招きが無くなるまで顔を近付けた。

「再会のキスって奴だ」

サンの言葉と同時にヴィヴィオの額に柔らかい感触があった。本当に久しぶりのその行為が嬉しかったのか、ヴィヴィオの瞳に涙が溢れてきた。

数週間ぶりのキスだった。

スカリエッティに怖い思いをさせられ、自分の意識がなくなり、母と戦って、そんな数週間だったのだ。五歳の少女にそれは余りにもキツイ時間で、やっと会えたと思ったらすぐに眠ってしまった。

だからサンのキスは凄く凄く懐かしく、そして嬉しい。

「ほらサン。嬉し泣きでも泣かせっちゃったんだから、男としての仕事をしなさい」

と、男より女にモテるフェイトからのアドバイス。傍から見たら、女性が男の子に微笑ましく助言している様に見えるが、実際の所父親から息子への助言だ。

だがこの家族にはその光景は当たり前だ。

父親のアドバイスに従い、ヴィヴィオをそっと抱き寄せる。

「うぇ、うぇえええーーーん!!」

「良く頑張ったな、ヴィヴィオ」

数分後、ヴィヴィオは泣きやんだ。なのはに強くなると約束したの

に泣いてしまい、申し訳ないのだろうかオドオドしていたが、なのはに頭を撫でられその心配も消えたようだ。

「サン、お疲れ様」

「父さんこそ。スカリエッティアジトで魔力をかなり使ったんだろ？　それなのに更に魔力使って・・・・」

「子供がそんなこと気にしないの。その遠慮がちなのって誰に似たんだろう？」

心から不思議そうにする親に呆れながらも返す。

「ご両親にだと思いますよ」

聞いた瞬間にすぐに誰似だとフェイトには分かった。ヴィヴィオの頭を撫でている愛しの妻を見つめながら口を開く。

「じゃあなのは似だね」

「ええ～？　絶対フェイトちゃん似だよ」

「だってなのは、いっつも遠慮してどこも行きたくないって言うし、ここ数年で行きたいって言ったのって遊園地くらいだよ？」

「そ、それは、私はただフェイトちゃんが居ればどこでも良いだけで、遠慮してる訳じゃないよ！　フェイトちゃんこそ私が晩御飯のメニュー聞く時も何でも良いって言うじゃない！」

非常にめんどくさくなった。この会話の続きはサンには分かった、というより分かってしまう。このバカップルと二十四時間三百六十五日一緒に居たら嫌でも分かるのだ。

ヴィヴィオを呼び寄せ隣にあるテレビのスイッチを入れる。

「ねえお兄ちゃん、ママとパパの喧嘩止めなくても良いの？」

純粋に聞いてくる妹が恨めしい。
サンからすれば、何が嬉しくて両親の惚気を聞けばいいかんのだ、と叫びたいのだ。
「だいじょうぶだヨーー」と棒読みで適当にあしらい、なるべく両親の声が聞こえない様にボリュームを上げる。

「私はなのはの手料理なら何でも良いだけだよ！　だってなのは、いっつも私が好きな物作ってくれるし、それになのはの作る物ならどんな物でも食べるよ！」
「なっ！？　ず、ずるいよフェイトちゃん・・・・」

何でも食べてくれる。料理が下手でも良いと言っている様なものかもしれないが、なのはの耳には「キミの作る料理はどんなものでも美味しいよ」と聞こえてしまう。
いや、おそらくフェイトもそのつもりで言ったのだろう。流石１０年の付き合いともなると、言葉が足りずとも想いが伝わるものだ。

フェイトは顔を赤めながら俯いているなのはに近寄り、そっと抱きしめる。そして先程なのはがヴィヴィオにしていた様に、栗色のフワッとした髪をそっと撫でる。

「ズルいもなにも本心だから・・・・。でも、ごめんね。毎晩晩御飯のメニュー考えるの大変だったよね？　新しい家になったら一緒に考えようね？
いっつも私の好きな物じゃあズルいから、なのはの好きなメニューにしよっか？」
「ううん、私の好きな物はフェイトちゃんが好きな物と一緒だから・・・。それより子供たちが好きなメニューにしないと・・・・」
「クスッ、そうだね」

という会話がニュースのＢＧＭとしてサンの耳に入る。

「キコエナーイ、ナニモキコエナーイ」

「お兄ちゃん大丈夫？」

両親が抱き合っているその隣で、ロボットの様に同じことを繰り返す兄と心配している妹が居た。

「それでは、サンに新しい家族を紹介します！」

イチャイチャが終わったと思った矢先、今度は異様なテンションでフェイトが叫んだ。サンとしては迷惑極まりない。どうせこの二人の事だから特殊なプレイで赤ん坊を身ごもった、とか何とか言い始めるのだろうと、失礼だが否定しにくい考えを持っていた。

「で～何？　その子は何ヶ月後に産まれる？　流石に六課解散した後だよな？」

？？？

半場諦めの境地に立たされた所為か、突然意味不明な事を言った。当然なのは、フェイト、ヴィヴィオには何が何だかさっぱり分からく、なのはは無言でサンの額に手を当てる。

「う～ん、やっぱり少し熱が・・・・」

「人って諦めかけると体が反応して熱を発生するって聞いたことがある」
「？　聞いた事無いよ？」
「今俺が作ったからな」
サンの言動が全く持って分からないのか取り敢えずサンは後回しにした。
「それじゃあちょっと連れてくるね」
散々テンションを上げておいて扉の向こうには居ない様だ。フェイトはなのはと一緒に病室から出て行った。
「・・・・・って、マジで増えたのかよ！？」
「信じて無かったの？」
「普通信じるか？　もしかしてペットってオチじゃ「ないよ」だよな～」
何故か事件前より溜息が多くなった気がする。まるで六課前の生活に戻った感じだ。二人とも六課に入ってからは何だかんだである程度自重していた。
だが溜息が増えた理由はそれ以外にもあったみたいだ。
「さっきは私に大人っぽくなったって言ったけど、お兄ちゃんも大人っぽくなっているよ」
「ハァ？」
そう、サン自身が少し大人になったのもその理由の一つだ。精神年齢では既に２０は行っているのだ、十分大人な筈だ。しかし今まで

の自分を思い返してみると、確かに転生前より子供っぽかった気がする。
体に精神が惹かれた、サンはそれが理由だと一瞬思ったがもっとしっかりとした理由を見つけた。
安心出来る親が居たから、だから少しくらいはっちゃけても良いと思っていた。
そんなサンだったが、復讐と愛を一日に同時に覚え、また成長したのだろう。
そうさせてくれたのはヴィヴィオ。

「お前のおかげかもな」
「？　私の？」
「あくまでだ。そんな真剣に考えるなよ」

そうは言われたものの気になるのかウーンと言いながら考え始める。

コンコン

「どうぞ」
「し、失礼します」

ウイーン

入って来たのは戦いの最中に気になっていた子、アインハルト・ストラスだった。
開いた口が塞がらないとはまさにこのことだろう。確かに体が治ったら向おうとは思っていたがまさか向こうから来るとは思っていなかった。
それにアインハルトは記者のセリオ・シモーナに預けた筈だ。

「どーも、お久しぶりです！！」

次に現れたのはセリオ。この場では全く持って必要無いマイクと、電源の切られているビデオをサンに向けながら入室してきた。この状況からするとどうやらセリオはアインハルトを両親の元に帰して無い様だ。

「ど、どういうことだ？」

「それは私の「あたしが説明します！」あの・・・・」

今回の本人であるアインハルトの声を遮りセリオは無駄に大きな声で語り始める。

「サンさんが「サンで良い、さんを二回言うとややこしい」ではＭｒサンで」

猪突猛進と言うのだろうか？　兎に角一度走り出したら止まらない性格の様だ。今度は更に動作まで付けて語り始めた。

「あのあと、崩れ落ちた町の廃墟の合間を区切って「描写いらない、２０秒で説明」その後この子の住所を調べ連絡したのですが子どもなんか居ないと言われこの子に聞きだした所虐待されていて逃げ出したみたいで、しばらく預かっていると凄い事件が起きてあなたが関係している様なので友達のシャッハに連絡したら特別にあなたの血縁に会わせてくれると言う事なのですぐさま行こうと思ったらこの子がＭｒサンに会いたいとの事なので連れて行き、エースオブエース高町なのはさんがこの子を見た途端に悲しい目をしていると言って優しく声を掛け少しの間高町さんと居ることになりフェイト・テスタロッサ・ハラオウンさんと娘さんのヴィヴィオさんとも会話して仲良くなり、そして改めてアインハルトのご両親に連絡しまし

たが子どもは居ないと言ってそのまま電話を切ったのでなのはさんとフェイトさんが家に来ないと聞いてｏｋして現在に至ります」

まるで無茶ぶりをさせられた芸人と司会者の様な光景だった。あの大事件を凄い事件の一言で終わらせるのが斬新だ。
そしてアインハルトはどうやら虐待から逃げる途中でクラナガンでのサンとデビルの戦いに巻き込まれたのだろう。それが吉なのか凶なのかはどちらとも言いにくい。

「流石プロ、綺麗に２０秒だ」
「あ、あり、が、とう、ございます」

・・・・・・・

「アイン。お前の悲しい目の理由はこの事だったのか・・・・」
「あの、そんなに悲しい目をしてましたか？」

なのはとサン両者を交互に見ながら小声で呟き、それに答え二人は同時に頷く。
こんなに心が通じ合って想いが似ている親子も中々居ないだろう。
虐待されていたアインハルトにとっては、羨ましいと同時に妬ましい気持ちがあった。

でも、それも終わりなのだろうか？
この家族に入ると、いつかはなのはかフェイトに似るのだろうか？

そんな希望も少なからずあった。

こんな気持ちは久しぶりだ。何かが欲しい、何かをしたいという欲が出るのは。

嬉しい、純粋に嬉しい、でも同時に空しい。
あんな酷い親から離れられ、こんなに暖かい家族とずっと居られるようになれる。
でも血の繋がっていない家族、本当の親が居るのに見捨てられた。

「ァ・・・アイ・・・・おいアイン」

自分の名前を呼ぶ声により我に返った。どうやら辺りが見えなくなった様で、みんなの心配そうな顔が見える。
大丈夫です、と言おうとした時、サンの優しい言葉が耳に入った。

「今日からここに居るみんながお前の家族だ。別に今すぐ慣れろとは言わないがゆっくりで良いから家族になっていこうな」
「ちょっとサン、それ家長の私のセリフ」
「私も母として言いたかった。私がアインハルトを誘ったのに～」
「んなもん言ったもん勝ちだろ」

ギャーギャーワーワーと言い合いを始める三人を見て、思わず口元が上がってしまう。その横顔を見ていたヴィヴィオも同じ様にニコリと笑い、アインハルトに声をかけた。

「これからよろしくね、アインお姉ちゃん」
「アインお姉ちゃん？」

聞き慣れない単語なのか、急に言われて動揺したのか、オウム返しをしてしまった。

「そうだよ、私より少し年上だからお姉ちゃん。あ、でも私の正確な誕生日っていつなんだろ？」

アインハルトを置いてけぼりにして自分の頭の中に入ってしまっているヴィヴィオを見て、クスリと笑った。その声が聞こえたのかこの場の全員がアインハルトを見る。先程までの様にオドオドしておらず、純粋に年相応の少女として笑っていた。

そんな可愛らしい姿を見ているとこんな言い合いもバカバカしく感じる。誰か一人が代表として言わなくとも、これからずっと一緒に居るからいつでも良いのだ。

「それじゃあ、パパ、ママ、お兄ちゃん」

「「「せーの」」」

「「「「アインハルト（さん）。今日から我が家の次女としてよろしくお願いします」」」」

どうしてだろう？

親に虐待されていた時は泣かずにいられたのに、今は泣きたくて泣きたくて仕方がない。必死に堪えようとするが、目から溢れる涙は止まらずに、零れ落ちて頬をそっとなぞる。

「ふ、ふつつか者ですが、よろしくお願いします」

「よろしくね、アインお姉ちゃん」

「ヴィヴィオはともかく、サンはやんちゃだから長女としてお世話お願いね」

「アイン、この二人は二十四時間三百六十五日バカップル全開だから今の内にコーヒー飲めるようになった方がいいぞ。口の中が甘くて甘くて仕方がない」

「え？　そ、そうなんですか？」

キョトンと首を傾げながら本人達に聞く。

この二人が付き合い、想い人同士なのは知っている。同性愛が気持ち悪いとは感じないので気にはしなかったが、そこまで冷静なイメージがあるサンがそこまで言うので少し気になったのだ。

「も～、お兄ちゃん。ママ達が仲良しなのは良い事だよ～」

「そうか、そう思うなら一回深夜に起きてみろ。絶対に母さんの「フェイト、ちゃ～ん」っていう甘い声が聞こえる筈だ」

「ちょ、ちょ、ちょっとサン！？　な、な、な、何言って」

ボッと音を縦リンゴの様に頬を真っ赤にしながら、アタフタと動き始める。

なのはとフェイトは恋人で大人なので当然その様な行為はしている。が、少々そのやり方・・・・・大人っぽく言うとプレイだろうか？　それが若干マニアックなのだ。

主にフェイトのお願いから始まるマニアックなプレイは、本人達の希望で余り言えないが、少なくとも寝ている子供の隣でやるというジャンルもある。

「他にも六課前のマンションには何故かナース服があったり、巫女服があったり、風呂にシャンプーでもボディーソープでもリンスでも無い液体があったり、チアガールの衣装があった「「わーわーわーー！！」」なんだよ？」

サンの辞書には遠慮と言うものは無いのだろうか。そんなことを本気で思ってしまう。子供の前で自分達の性癖が次々と暴露されていくのだ。親の威厳などあったもんじゃない。

ヴィヴィオは意味が良く分からないのか「仲良いね～」と純粋無垢な笑顔で二人を見上げ、反対にアインハルトは多少意味が分かるのか、なのは以上に顔を真っ赤にして俯く。
なのはとフェイトはヴィヴィオの純粋な視線に耐えきれないのか、目を逸らしている。

「なるほど～、なのはさんとフェイトさんのプレイは結構なマニアックだと」

そしてこの部屋にはパパラッチが居る事を忘れてはならなかった。
シャッハから口止めされていることは、友としてもサンに会わせてくれた恩としても口外しないが、それ以外なら報道が大好きなパパラッチだ。
メモ帳にサンの発言を一言一句逃さずに、しっかりと書いている。
それを止めようと書かれている本人達はすぐにメモ帳を取り上げようとするが、仕事に熱くなっているセリオを捕まえる事は出来ない。
その様子を見て意地の悪そうにサンが笑っている。

「・・・じゃあサンの好きな人がカリムさんって事も言っちゃうよ？」
「ええ！？　それってほんとですか！？」
「母さん！？　汚ねえぞ！」

恥ずかしいのか単にとっちめたいのか分からないが、体の事を忘れ立ち上がろうとした。当然結果は先程と同じ様に激痛が走りサンの絶叫が部屋に響く。

「お兄ちゃんってカリムさんの事が好きだったんだ～」
「えと、もう想い人がいらっしゃられたんですか・・・・・」

片方は純粋に笑顔で、片方は少し残念そうに呟いている。
そして隣ではメモ帳を取り返そうとしているフェイトとなのは。逃げ回っているセリオの姿が目に映る。
先までは他人事だったので笑っていられたが、想い人の事を知られた以上他人事では無い。いや、むしろ両親のアホな性癖よりも知られたらマズイ内容なのだ。
騎士と主の恋愛が世間にバレたら二人とも聖王教会から追放され、世間では冷たい目で見られてしまうかもしれない。

止めたい所だが体が全く動かずにどうする事も出来ない。
結局最後は性癖を世間に知られない様に走っている両親だけが頼りだった。

「疲れた・・・・」
「私、もう、息が、上がって・・・・」

フェイトは椅子に座り明るい電球を見ながら、なのはに関してはベッドで寝ているサンの隣に図々しくもドサリと横になり息を落ち着かせていた。

どうやら無事にメモ帳は取り返せた様だ。ついでに軽いトラウマを植え付け口外しない様に口止めさせていたのだ。明るかった外も今では暗くなり、外から見えない様にカーテンが引かれていた。

「あの、お二方とも、お疲れ様です」
「あ、ありがと、アイン、ハルト・・・・」
「私はどっちかと言うと精神的に疲れただけだし・・・・」
息が少しだけ落ち着いてきたなのは。それに比べフェイトは息一つ乱していない。
「もしかして、なのはさんは運動が余り得意では・・・・」
「確かにパパより凄くきつそう。魔法では同じ強さなんだよね？」
「母さんは運動音痴だからな。・・・・ここは似たく無かった・・・・」
最後にボソリと呟いたのが少しだけヴィヴィオに聞こえた様だ。
「お兄ちゃん最後何て言ったの？」
「フフフ、サンが偉そうな事言ったけど実はサンも運動音痴なんだ」
・・・・・運動音痴＝運動が苦手＝体力が無い？
良く分からない式が二人の頭の中に浮かぶ。
「「え、えぇぇぇぇえええええええ！？」」
今日一番の叫びかもしれない。それくらい大きな声をヴィヴィオとアインハルトが出した。
「そんなにおかしいかよ？　・・・・」
「だってサンさん「呼び捨て」えと、Ｍｒサンが「呼び捨て」えと「呼び捨て」サンが・・・・」

無眼ループが見事に発生した。別にサンさんと言われるのが嫌いなわけではないのだが、出来るのなら別の言い方で呼んでほしいのだ。特にこれから姉となる人物にさん付けで呼ばれる等気持ち悪くて仕方がない。

「サンが運度音痴って、だって現在世間では次元最強って言われて・・・・」

「次元最強!?　魔法戦ではともかく、魔法無しのスポーツとかだったら秒殺で負ける自信あるぞ・・・・・」

「ええ!?　お兄ちゃんって実は弱いの!?」

「弱いって言うより魔法が無いと普通の運動神経の無い男の子になってしまうって感じかな」

「それを言うと母さんだって同じだろ。魔法使えないとただの１９歳だろ」

「私が守るから大丈夫だよ。小学、中学時代は良くなのはを守ってたから」

「あの、サンは別になのはさんが誰かに狙われると言った訳じゃ無いと・・・・」

「それにすぐ惚気に走るのは止めてくれ」

「ふえ～、じゃあパパってとっても強いの?」

流石家族と言ったところだろうか。トントン拍子で話が進んでいく。

「はやて、すずかもだけど、なのはは一段とモテてたから、無理やり自分の物にしようとか、ナンパが群がって来たりと凄かったよ」

「それでそれで?」

「特に酷かったのが私を待ち伏せして１００人が一斉に襲い掛かって来た時かな?」

「１００人・・・・まだ未熟な、私の覇王流（カイザーアーツ）ではとても不可能・・・・」

「さらっと覇王って言ったけどどういうこと？」
「それは私が説明するよ」

フェイトの話を聞くヴィヴィオとアインハルト。なのはからアインハルトと覇王の関係について聞くサン。

「それで母さん、アインと覇王って・・・・」
「うん、アインハルトは真正古流ベルカの格闘武術覇王流（カイザーアーツ）の後継者。覇王イングヴァルトの直系子孫で、初代覇王の記憶を途切れ途切れだけど伝承しているんだ」
「え？　じゃあ親だってイングヴァルトの子孫だよな？　なぜ初代覇王の記憶を受け継いでいるアインに虐待を？」
「良く分からないけど、昔からイングヴァルトの子孫って事を武器にして色々とやってきた父親みたい」
「不良って奴か」
「うん。ある時執務官が出るくらいの事件を起こして、アインハルトのご両親のご両親。つまりは祖父に当たる人がアインハルトの父親を破門して、親子の関係を切った」
「そして皮肉にも産まれてきたアインハルトがイングヴァルドの記憶を受け継いだ子だったから八つ当たりを・・・・」
「結婚した母親も母親みたいで虐待に何も言わなかったみたい」

少し重苦しい話だったが、これから家族になるのだから知らなくてはならない。それに、嫌な過去とは言えアインハルトの前の家族の事を聞けたのだ。

「俺とヴィヴィオの産まれについては？」
「ちゃんと話したよ。しっかりと聞いてくれてヴィヴィオも嬉しそ

うだった」
「そりゃよかった・・・。ところで向こう、やけに騒がしいな」
「だってあの話だからね」
「ああ、そういやあの話だったな・・・・」
鼻歌をしながら幸せそうに微笑んでいるなのはと、遠い目をして天井を見上げているサン。二人はあの時の事を思い出した。

「ヒハハハハハ！！　ずっとなのはさんへの告白を邪魔しやがって！　女だからって容赦しねえぞ！！」
「それにテメエの所為で一世一代の告白をしたのにフラれたんだよ！　余り人気の無い可愛い子だったのに！！」
それぞれモテない男子が魂の叫びを上げる。その集団には不細工が多い訳ではない。むしろ整った顔立ちの男子が多い。
中学生と気難しい年頃の所為もあるのか、女の所為で女への告白が失敗したのが堪えたのだろう。それに我が学園のアイドルである高町なのはと付き合っているとなると、もう男だろうと女だろうと関係が無い。
目の前の女が同年齢の女性よりかなり身体つきが女らしくても関係無い・・・が、例外も居る。
ヒラヒラと揺れるスカートからチラリと見える健康的な太ももに、鼻の下を伸ばして見るのがちょこちょこ居る。

「私が好きなのはなのはだけだから、その子の事は関係無いんじゃない？」

プッツン

男達の怒りの沸点に達した。

「ふざけるなテメエエエエエエ！！　女の子とぶつかった時に優しく抱き抱えたり、そっと手を差し伸べたりしてるだろうが！！　どうして毎日そんな少女漫画みてえな事になるんだよおおお！？」

「女の子がハンカチ忘れたみたいだったから一世一代の決意で俺のを渡そうとしたら、お前が横から「ほら、ハンカチ。え？　大丈夫、私のはあるよ。女の子だし必要でしょ？　それ上げるよ」とか言っておいて、実際はハンカチ一つしか持ってなくて先公に怒られたんだろうが！　それをその子が知ったんだよ！！」

「体育のキモイ先公が女子の体をいやらしく見ていた時に、硬式ボール顔面に当てて「すいません先生。でもじっと同じ場所を見ていた先生も悪いんですよ。あといやらしく女子生徒を見ないで下さい」って言って女子から歓声貰いやがって！」

「？　別に当たり前の事してるだけなんだけど・・・・」

そう、フェイトは天然のタラシであり、故意にやっている訳では無いのだ。まさに天性のジゴロ、生まれながらの貴公子なのだ。

それに加え成績優秀、運動神経抜群、ファッションセンスも大人っぽく、おまけに綺麗な顔立ち。

ある程度整った顔立ちの男子でもフェイトには勝てないのだ。

「「「このやろおおおおおおおおお！」」」

男子達が一斉にフェイトに向って走って来た。

フェイトは袖をまくり上げボクシングの構えを取り、間合いに入って来た者からストレートを撃つ。
右、左、右、左を交互に戻しては撃ち続けるが、人海戦術には不向きだ。右から突進してきた男子Ａに向けて右から回し蹴りを決める。

バゴン！

人間を蹴っているのか怪しくなる音と共に、男子Ａは吹っ飛んで他の男子達にぶつかる。

「ック」

だが少々きつい。後ろは壁なので、フェイトの死角からなのはを攫われるという事は無いが、同時に逃げることは不可能なのだ。

「フェ、フェイトちゃん・・・・」
「大丈夫だよなのは、心配しないで」

ニコリと頬笑み、再び目の前の男子Ｂを殴る。

「今だ、隙が出たぞ！」

その声と共に金属棒がフェイトの溝にもろに入った。

「カハッ」
「フェイトちゃん！！」

「オラオラオラ」

その勢いを逃そうとせずに沢山の男が一斉にフェイトに向けて拳を撃つ。

「――――～～～っ！！！」

なのはの一歩手前の所でフェイトがバタリと倒れた。

「そんな・・・あなた達酷い、酷いよ！　フェイトちゃんはかっこよくても女の子何だよ！？　それなのに男の子が一人にこんな人数で・・・・」

「しょうがないじゃないですか！！　聖祥の女子、誰に告白しても「ごめんなさい。私、ある女(かた)が好きですから」で終わってしまうんだぞ。それに最近じゃ他校もその被害にあっているんだ！！」

そう、結局はそれが本音。魂の叫びであった。

「だからって、だからって酷い。こんな人達にフェイトちゃんが負けるなんてあり得ない、あり得ないよ！
お願いフェイトちゃん、勝ってよ・・・・」

「へへへ、それじゃあなのはさん・・・・邪魔者が居なくなった所で」

これも本能、悲しい男の性であった。

ガツン

なのはに近づこうとしていた男子の足を、何かがもの凄い力で掴んだ。

「なのはに・・・・触るな・・・・・」

「ば、馬鹿な！　まだ、まだ立ち上がれると言うのか！？」

「私は負けない、なのはが居る限り、なのはが願う限り、私は負けない！！！」

フェイトはヨロヨロと立ち上がり、ゆっくりと拳を構える。

―ゴゴゴゴゴゴゴゴ！！

「な、何なんだこの闘気は！？」

フェイトの出す雰囲気が変わった。男子全員は、まるで覇者の前に立たされた感覚になる。

「今すぐこの場を立ち去れ！　それともこの拳の牙（アギト）に係りたいか！！」

「何なんだよお前は～～！！」

「ふざけやがってーー！！」

一斉に男子が押し寄せてくる。

「なにー！？　三人の攻撃を片手で受けきっているーー！？」

「ハァアア！！」

フェイトの拳から出た衝撃波で一斉に男子が吹き飛ばされた。

「何だこのデタラメな強さは！！？」

「一斉にかかれ！」

「全方向からタコ殴りしろーー！！」

「「「うりゃあああああ！」」」

が、フェイトの残像で見える八つの手により全員吹き飛ばされる。

「うおおおおおおおお！！　引けと言っている！！」

「「「「「「「「ごめんなさい、勝てる気がしません、なんかもうどうでもいいです」」」」」」」」

「って事があったんだよ」

フェイトの話が終わった時、ヴィヴィオとアインハルトの時間が止まった。

取り敢えず男子多すぎだろうとか、道徳に反しすぎているとか、警察が何故来なかったのかとか置いて、最後ら辺もうあんたじゃないよね？　と、喉まで来たが声には出せなかった。

一週間後　新しい家族は高町家の次女（後書き）

改めてしんじられな～い

やっとアインハルトを高町家に入れることが出来ました……。
もしｖｉｖｉｄで親が出てもスルースキルでお願いしま～～す。年齢もスルーでお願いしま～す

そして婚約以外の結婚予約の話で最初のエリオとサンの模擬戦を、魔法無し→強化魔法以外の魔法無し、にしました。
こんな矛盾が出てしまい申し訳ありません。最初は取り敢えずｓｔｓが終われば良いと思っていたので・・・・。本当に申し訳ありませんでした。

今回は最初サンはなのはに怒られる予定でしたが、実際書こうと思うと一週間ぶりに目を覚ました息子に母親が怒るか？　と思いまして今回の説教は無しにしました。

最後のフェイト無双？　のシーンはあるアニメのネタを貰いました。
ネタの分かる方はもう一度元ネタを思い浮かべながら見てみて下さいｗｗ

この世界の謎（前書き）

はい、ついに神の雫の話になりますが、ホントご都合主義です！

え？　今までもそうだった？

じゃあ大丈夫ですかねｗｗ

この世界の謎

シーン

病室が静かになっていた。
みんな六課に帰り、病室にサン一人になったからだ。
九月の後半ともあり、少し冷たい空気が皮膚を刺激する。

「にしても、ヴィヴィオもアインも無事だったか・・・・」

笑顔で病室を出て行った二人を思い出す。
アインハルトはまだ少し遠慮がちだったが、それでも笑顔だった事には変わりない。

「さて・・・・・そろそろ出てきても言いぞ。居るんだろ？」

何も無い空間にサンが呟くと、そこから光輝いた女性が現れた。神の雫だ。

「どうして分かったのですか？」
「何となく、ほんとにただの勘だよ。居なかったら恥ずかしいけどな」

苦笑しながら話すサンに、笑って返す。
この子は本当に素晴らしい事をしてくれたのだ。一週間前からずっと見守っていた。

「それじゃあ、話してくれるよな？」

真顔になり、神の雫に同意を求める。
それに何も言わずに首を縦に振る。

「今から話す事は科学的な物でも無く、常識など全くありません」
「覚悟はしている」

サンはスーと息を吸い、ゆっくりと息を吐いた。その後無言でコクンと頷く。
それがｏｋの合図と理解し、ゆっくりと開口する。

「ある時私は生まれました。親も存在せず、ただ急に・・・・。
そして自分の役目と名前はなんとなく分かっていました。それは光ること、物理的な意味では無くて、心の光として。名前はそのままでライト。私には光る以外にも色々なことも出来ました。人に憑依すること、光を実体化させること、そして一番凄い力は転生させること・・・・」
「・・・・まるで神だな」

サンは簡単で率直な感想を呟いた。一番目と二番目も十分に凄いことだが、この世界でもそれらのことは可能だが、三つ目はこの世界の力では無理だ。闇の書は確かに転生していたが、ライトの様に自由に人を転生させることは無理だ。

この存在が自分を転生させてくれた者だと改めて実感する。

「私は神の様に強い存在ではありません・・・・。
話を続けます。生まれて何百億年経ったかは忘れましたが、ある時闇が出現した。奴らは光から生まれる影の様に出現した。そのまま

の訳でダーク。
奴らは人間の心の闇を作り、その中に入り込む奴です。この前のラールの様に・・・・。
それが悪しき物だとすぐに分かった私は戦い、消滅させました。案外簡単に消滅できたからといって、安心した私が甘かったです。ダークは各平行世界で次々と現れてきました。最初私は戦いましたが、ある時気づいた。力が衰えているということに・・・・。
私の力はあなた達魔導士と同じ、生きられるがリンカ―コアにある魔力は休まないと回復しない。そして力の衰えた私は、人に宿ることで光を貰い、同時に同じ並行世界に居るダークから逃げていた・・・・」

ライトの話が僅かにだが止まる。その瞬間にサンは質問する。

「ライトと同じ存在は生まれなかったのか？」
「そう何度も願いましたが叶いませんでした・・・・。
話を戻します。ある時、増幅していったダークの一匹がある行動をしました。それが神の雫を使っての希望と絶望の操作」

それを聞いたサンはハッと何か思いついた顔をする。そう、デビルから聞いた言葉、サンが産まれデビルの息子と妻が死んだことだ。

「その様子なら気付いたようですね。そうです、ダークはラールの妻と子供になんらかの方法で・・・・、おそらく薬品か何かを使い、二人を殺害した。そしてその同タイミングであなたが産まれるようにした。神の雫で受精した子供がいつ産まれるなんて計算は奴にとっては簡単なことでした。このような面倒なことをしたのは、心の闇を増幅させる為と、ただの娯楽でしょう」

「俺が産まれるのと同タイミングに毒が回ったと。ラールには適当

なことを言って騙したんだろうな・・・・」

「はい。一方私は力が限界の所でした。力を使い、あと一人を新たな命へ導ける程度しかなかった。更にその力を使用すると、体は消えないものの、ダークが現れたら抵抗すら出来ずに呑みこまれる所・・・。そこで行ったのがあなたへの憑依です。ダークが並行世界で一匹しか生きられない、ということに賭けたのです」

「賭ける内容はこうか？　俺がある程度育つまで、ダークに取りつかれたデビルが殺しに来ないかどうか。

だがデビルは元Bランク魔導士、俺の周りには最低でもニアSランク並みの魔導士が居るからこれは余り問題無い。

しかし当然その他にも問題があった。俺の産まれながらの力や能力」

「完全に賭けでした・・・まあ私の勝ちですがね」

そう言ってようやく笑うライト。それを見てサンは微笑みながらも質問をする。

「だが、何故母さんの子供に憑依させたんだ？　ダークが作ったこの体に・・・・」

やはりそこが疑問に思ったようだ。ダークが作った高町なのはの息子に憑依させるのでは無く、他の子供に憑依させた方が心配ごとは減っただろう。

第一、ライトがこちらの大人に憑依するのが一番安全だ。

「これも賭けというのもありましたが色々あるんです。まず私が平行世界を渡るには転生させ、尚且つその転生させた人に憑依しなければいけません」

「面倒な事だな。つまりお前は平行世界を渡る度に人に憑依したっ

てことか？」

その質問に頷いて、再び話を再開する。

「そしてあなたの母親が魔法の才能が有ったこと。その周りの人物の強さ。
最後になのはさんのフェイトさんへの愛・・・・」

「もしかしたら母さんが父さんの血も引き継いだ子を・・・・・・
大魔導士プレシア・テスタロッサの血を引き継いだフェイト・テスタロッサ・ハラオウンとの才能に溢れた子供を産むと思っていた、か？」

サンの答えが合っていた。ライトはゆっくりと頷く。

「はい。この世界のダークが作ったおもちゃは、願い事を一つだけ叶える神の雫と言う名のロストロギア。その代償として子供を産まなくてはならない。この世界のダークは神の雫から産まれる子を、本来は自分達のおもちゃ・・・・つまりはこの世界を混沌に堕とす子供にしようとした。
しかしその理をなのはさんは破った。空を飛ぶことと、愛する人との血を受け継いだ子を産むことです。
そして私があなたに憑依したということにダークは気づきましたが、憑依することでしか現実に関与することが出来ないので、あなたを殺せずデビルに憑依しました」

「はい質問」

サンは手を上げながらそう言う。この大きな話には、色々と矛盾点が多すぎる。丁寧な説明を受けても、理解できない部分が多々あっ

た。

「何でダークはラールに憑依した？　単に医者にでも憑依して暗殺すれば良かっただろ？」

「私とダークには憑依できる心が決まっているのです。単純に善は私が憑依出来て、悪がダークです」

「・・・・俺が善とでも？」

若干頬を引きつらせて質問する。正直自分の心が光とは到底思えない。前世では死ぬ前など、くだらないと、マイナス思考だらけであった。

「本質ですよ。あなたの本来の心は善です。自信を持って下さいよ」

「じゃあ逆にラールは悪？」

「ええ、彼は少し変わっていて、赤ん坊の時の記憶が新鮮にあるのです。捨てられて時の記憶・・・・それがラールの本質を悪にしてしまいました。
それでは話を続けてもよろしいですか？」

ライトの問に首を縦に振って了解した。

「ダークがラールに憑依した事はそこまで悪い判断ではありません。その時のラールはかなりの負の感情があった。ダークという存在が入るだけでそれは何倍にも何十倍にもなった」

二人は長々と話合いをしている。そして当然この話は二人以外に聞こえて無い。

「一方私は無事あなたに憑依しましたが力の使い過ぎで、とてもではないがあなたに事を話せる状態では無かった。まずあなたに術式兵装の能力を教えて五年間貯めていた力を使い切り、そしてあなたが光を微かに掴んだ時、力が少し戻ったのであなたと話した」

「待て、そもそも光とはなんだ？　闇というのは七つの欲望でイメージが湧くが光は・・・・。それにお前は憑依しないと光を貰えないのか？」

これも疑問に思ったことだ。サンがライトの存在を初めて分かった時は、なのはとフェイト、ヴィヴィオにキスをしていた。そこに光があるのか？　と思った。あの時は微かにだが、なのはとフェイトに邪な気持ちを持ってしまった。
更にカリムに恋をしてからは、ライトは現れなかった。これも気になる一つだ。

「はい。あなたの予想通り、私は休むか、憑依した人物の光を貰わないと力が回復しません。
そして光とは、どれかとはっきり決まっていません」
「決まっていない？　つまりその人次第ってことか？」

「そうです。勇気や希望等で、あなたの場合は愛みたいですね。最も愛にもいろんな物があるのですが・・・・」

それを聞いてやっと納得したようだ。確かにあの時恥ずかしながらも、愛というのを感じていた気がした。そしてその前のヴィヴィオの笑顔を見た時も、家族の愛か異性としての愛かは分からないが、愛はあった。しかしあの時の恥ずかしさが強く、余り実感が無い。
そしてライトが自分から出てきた時は、完全に愛と自覚出来た。最

もこれも家族としてか、異性としてかは分からない。

「俺がカリムに恋をした時は、ライトは現れなかった。愛ではなく好きだから・・・・」

「その通りです。しかし、私も長年人に憑依してきた者ですが、あそこまでの異常な好きという気持ちを持った者への憑依は初めてでした。闇に堕ちてしまうとは。

あなたが闇になった時は、あなたの中で私はかなり危険な状態だったのですよ。

最も、やはり愛の気持ちの方が強いみたいですね」

完全に死神と化したサンの姿を思い出す。サンもその言葉で、ライトと同じ映像を思い出す。

「ああ、あの事はほんとに悪かった。ヴィヴィオが死んだ時に、ただひたすら復讐を感じていたから・・・・。

好きと愛の違い、か・・・・。カリムは好きでヴィヴィオは愛。

ヴィヴィオへの愛は家族？　異性？　お前は知っているのか？」

「それを見つけるのはあなた自身です。あなたがどちらの女性を選ぶかも、別の愛する人が現れるかもしれない、誰とも恋人にならないかもしれない。結局あなた自身で決める事なのですから」

「そうか・・・・そうだよな」

ライトの言葉を聞いて、心にあった疑問が無くなり、純粋な笑顔になる。

そうだ。つい自分を転生させてくれた存在の前に居るので、自分の人生全てがライトの手の中にあると思ってしまったが、実際は違うのだ。この人生も、身体も、記憶も、全て自分のもの。

自分が何をしようがどうしようが自由なのだ。

本人も気づかない、心の奥底にあった小さな恐怖が完全に消え、心体スッキリした。

「じゃあ何故俺に光を教えなかった。どうして初めて会った時に言わなかった？」

これもまた疑問だ。サンの発言通りに言っていたらもっと早くこの惨劇が終わっていたかもしれなのだ。

「あなたに本当の光（あい）を知って貰う為です。
確かに光の魔力変換物質ならラールを倒せると助言したら、あなたはすぐに創れたかもしれませんし、デビルを倒すのは簡単だったかもしれません。
しかし問題はその後・・・・つまりこの後のことが関係あります。
それは最後にでも・・・・」

ライトの答えに今一納得できない様子のサンだが、後で知れると聞いたので次の質問に移る。

「じゃあ多分最後の質問だ。この術式兵装とは何だ？」

ライトが与えた力では無いこの能力。レアスキルと言う一言で片づけられるレベルを超えている、余りに異能すぎる力だ。

「先程も言いましたが、この世界のダークは神の雫というロストロギアを作り、それから産まれる子にこの世界を混沌に堕とさせようとした。その為には力でも、頭脳でも、カリスマでも、何かが必要。あなたはその中の力を貰ったようですね。

しかし皮肉ですね。ダークが作ったロストロギアが与えた術式兵装という能力が、私の願いを叶えてくれる鍵になるとは・・・・」

「願い？」

先程ライトの願いは自分に仲間が出来ることだと言った。現在にもライトの仲間は存在しないが、叶ったと言った。

「私の願いは・・・・・私が消えることです」

その願いを聞いてサンは思わず声を上げてしまう。サンにはライトの辛さが痛いほど分かる。いや、実際のライトの辛さはもっともっと巨大な物だ。永遠と言っても過言ではない程の時間をライトは一人で居たのだ。そしてダークと言う悪を生み出してしまい、その存在からずっと追われてきた。

しかし、もしライト消えたらダークが何をするかが分からない。元々力が弱まっていたライトだったが、それでもダーク達にとっては天敵の筈だ。それは存在そのものが脅威と感じる程の・・・・。もしそのライトが消えたとなると、ダークは今以上に好き勝手するだろう。

「安心して下さい。ダークも一緒に消えます。あなたが私とダークを同時に圧縮することによって・・・・・。そして、あなたに本当の光を知って貰った理由がこれ、私が実体化できるレベルの光を貰う為です」

ポクポクポク、今の発言の意味を必死に考えるが全く分からない。圧縮？　実体化？　光？

「・・・・悪いがさっぱり意味が分からん。順に説明してくれ」

「私は光、ダークは闇。それらを混ぜると出て来るものは何もない、つまり消えると言うこと。まあプラスとマイナスの原子が同じ数有ると考えてください。それを結合するということです。しかし結合するにもその実体が無ければ不可能。だから実体化できる光が欲しかったのです。
そして本当の光とは、あなたの場合は本当の愛。仮に私があなたは本当の愛を見つけ、世界を救いなさいと言ったらどうでしたか？
本当の愛は見つけられましたか？」

「・・・確かにライトの言う通りだ。俺は愛を見つけられなかったかもしれない・・・余り納得は出来ないが。
だがお前が消えたらダークが余計に増える一方なんじゃないか？」
「大丈夫です。光が闇に倒されるのは呑み込まれるということと同じことです。逆に闇が倒されるのは光に包まれるという事。ダークが包まれたらただの光となる。ライト（わたし）が呑みこまれると、おそらくただの影になるでしょう。
しかし、闇と光が結合されて消えるのは呑み込まれるのとは違います。つまり光と闇その物の存在が消えるということ・・・・・」

「光が存在して初めて存在する闇も全て消えるということか・・・・。
だがお前は人の心を照らす存在なんだろ？　それが無くなったらやばいんじゃ？」

そう、この話を聞いた時にすぐに気になった。

「私は星の数ほどある平行世界の、人間の始まりの時代だけを照らしてきました・・・・・。つまり一定の時代からは関与していないのです」

「なるほど。だがお前がさっき言った通り、平行世界は星の数程ある・・・・・のか？　まあともかく今、この瞬間から人間の始まりがあるんじゃないのか？」

サンの質問を聞いて急にライトの笑みが消え、声のトーンが微かに下がった。

「そうですね・・・・・。その通りです・・・・・。でも、もう私も終わりたいのです！！　ずっと孤独で、ずっと逃げ回って、あなたの様にこの姿で会話したのが一体何年前だと思っているのですか！？　世界を渡っても赤ん坊から始まり、その赤ん坊も転生した事に喜び、好き勝手にしてしまう！！　もう、これ以上は・・・・・「分かった」・・・・・え？」

「今、この瞬間から新たな人間の始まりがある。その人間達はお前が居なきゃ駄目かもしれない。ひょっとしたら絶滅してしまうかもしれない・・・・・。そいつらの分も背負って俺は生きてやる。

・・・・・それにさ、人間って凄くないか？　最初は言葉も無く、家も、服も、知識も、何も無く、ただ毎日食べ物を探している人間が・・・・・子孫を残し、集団を作り、言葉を作り、家を作り、服を作り、沢山の知識を生み出した。争い、殺し、復讐し、戦争し、それでも今、このミッドチルダの様に平和な世界がそれこそ星の数程ある筈だ。次元世界でも平行世界でも、人間は学んで生きている。きっとお前が消えても大丈夫だと思う・・・・・」

ライトの幻想的な瞳から、少しずつ涙が溢れてくる。神々しい雫が、普通のタイルにポツポツと落ちて行く。ライトにはそれが何のか理解出来なかったのだろうか？　自分の頬をそっと触り、見つめる。

涙

この姿で、本来の自分の姿で涙を流したのは初めてだ。

サンは体に走る激痛に耐えながらも立ち上がり、ゆっくりとライトに近づく。

「だから、もう休め。お前は頑張った」

「グスッ、では、私の願いを叶えてくれるのですね？」

ライトがサンを見つめて聞いて来る。当然サンの答えは「了解」だった。

「・・・・って、肝心のダークがいない！？　ど、どうするんだよ！？」

「大丈夫です。あの時私が見ているだけな訳ないでしょう？　ラールから逃げ出すダークを見張っていたのですよ。案の定出てき、しかも凄く弱っていましたので余裕でしたよ」

ライトの声と共に何もない空間から禍々しい黒の男が現れた。光の縄がダークの手足を縛っており、必死に逃げようとジタバタしている。サンは怖がるどころか逆にホッと息を吐く。

二人は暴れているダークに近づいて、ダークとライトの間にサンが立つ状態になった。

「最後に一つ、お前等を圧縮したら俺の中に新しい何かが出たりするのか？」

「いえ、私も初めての経験なので良く分かりませんが、少なくとも私があなたの中で存在することは無いでしょう。逆にそうでなくてはいけませんから・・・・。ただ、あなたが術式兵装で圧縮した光は心の光ではなく魔力変換物質。私が消えてもその力は残ります。

あなたなら光と闇、どちらも自分の物に出来るかもしれませんね」

サンはそれを聞いてただ、いつも通りに笑った。

「そうか。じゃあ、さよならだな。俺に命をくれてありがとな」

「いえ。私こそ願いを叶えて貰うのです、長年の願いを・・・・。だからお礼をするのはこちらですよ」

ライトが本当に心の底からの言葉を発する。本当に、本当に望んでいたことなのだろう。消えるというのが望みのことにサンは悲しみを感じたが、ライトの心は痛いほど分かったので何も言わなかった。

「――兵装、固定・・・・」

二つの存在が段々と球状になっていく。

ライトは静かに、ダークは叫びながら。

「「さよなら」ああ。・・・・・・圧縮」

ジーーー

先程は気にしなかった機械の小さな音が、やけに大きく感じた。風が窓を叩くほんの小さな音も、コツコツとする足音も・・・・。

コツコツコツコツ！

どうやら足音はこちらに向ってきている様だ。コンコンとノックがしたので、誰かと聞かずに入室を許可した。この足音は誰かとはっきりと言えるからだ。

「ハァ、ハァ、大丈夫ですか、サン！？」
「カリムこそ、かなり息乱れてるぞ」

入って来たのはカリム。いつもの修道服を着ており、今日も変わらずに綺麗だ。
カーテンの隙間から微かに入ってくる月の光が、カリムの綺麗な金髪をより一層美しく見せる。

「ごめんなさいこんな遅くに」
「いや、忙しいのに来てくれてありがとう。それに忙しくしたのは俺だ。謝るのは俺だよ」
「私の騎士が活躍して嬉しいのに謝られたら困るわ。そのペコリはなし」
「りょ～かい」

少し沈黙があったが、すぐに二人とも笑い始める。不思議な感じだ。数秒前に会った気もするし、何年も会ってない気もする。
しばらく二人の笑い声が部屋に響いたが、段々と小さくなっていく。

「なあ・・・カリム」

「私はサンが好き」

サンが何かを言おうとした瞬間にカリムの告白が聞こえた。

―好き　これは友達や騎士などに対する言葉ではなく、異性としてだろう。

嬉しい、嬉しい、しかし答える訳にはいかない。

「・・・俺もお前の事が好きだ。だが、分かっているだろ?」

「ええ、私とあなたは主と騎士。恋人になることは絶対に許されない。こうやって告白する事も本来は禁止」

「そう、それに俺はお前と駆け落ちする勇気は無い。家族や、お世話になった人達に冷たい視線を浴びさせたくない。浴びさせる勇気がない」

「私もない。私を信頼してくれるシスターや、聖王教会に来てくれる方々を裏切る様な事は出来ない。裏切る勇気がない」

二人は再び笑顔に戻る。

「だから」

「私達の恋は」

「「これで終わり」」

「それでも騎士と主の“特別な関係”は崩れない」

「そう、主と騎士も“特別な関係”」

二人は笑顔で同じことを言う。

前にサンが言った特別な関係。これは恋愛の関係では無かった。どんな関係でも特別を付けばそれで良かった。

少し騙しているみたいだったが、カリムもその意味が分かったのだろう。

「でも、やっぱり少し惜しいかな？　こんなカッコイイ方を逃すなんて」
「こっちのセリフだよ。こんな美しい女性を手放すなんてね」
「良く言いますね。闇に堕ちた時に私の声を無視した癖に」

悪戯っぽく笑うカリムに苦笑いしか出来ない。
自分の光が愛だから仕方無いだろう、とは死んでも言えない。カリム自身、自分は愛ではなく好きと言う気持ちを受けていると分かっているだろうが、だからと言って女性に言うことではない。

何とか理由を考えようとするが全く思い浮かばない。カリムから目線を逸らす。

「そ、それは・・・・」
「フフッ、そんなに真面目にならなくていいのよ」

やっぱり惜しい。
こんな素敵な女(ひと)を逃すなんて。

「お前は絶対に俺よりイイ男と恋して、結婚しろ」
「どうして？」
「後悔が完全に無くなるから。その男を見た瞬間に、俺じゃお前と釣り合わないと未来の俺に思わせる為に」

「・・・それじゃああなたも同じ、私よりイイ女と恋して、結婚しなさい」
「フッ、どうして？」
「後悔が完全になくなるから。その娘を見た瞬間に、私じゃあなたと釣り合わないと未来の私に思わせる為に」

「「ップ、ククク・・・・、アハハハハハハ！」」

両者互いに大声で笑い始める。

「カリム、私よりイイ女って、キャラ合って無いぞっ」
「それを言うならサンだって、六歳の癖に自分よりイイ男って」

「それもそうだな。ククッ、ハハハハハ！」
「ッフ、フフフッ、ハハハハハ！」

健康な子供が寝る時間帯の病院の一室に、少年と女性の笑い声が聞こえた。

この世界の謎（後書き）

はい、こんな感じです。
何かすいませんでしたァァァァァアア！！

取り敢えず結構な数読み返して書きましたので、クソデッカイ矛盾は無いと思います。
矛盾がある、この話が書いてない、等ありましたら感想にお願いします。
まあ一番嬉しいのはスルーしてくれる事ですねｗｗ

そしてカリムとの恋愛もついに終わりました。
カリムの急な告白は、主要メンバーに教えたので、だから告白して終わらせようとの決意あってです。

それでは次回も頑張ります。

翌日　（前書き）

俺明日死ぬんじゃないかな？　……学校始ってもこんなに早く投稿できるとは！？？！？！？！？！？！？！？！？？

・・・・大分冷静になりました。

それではしばらくほのぼのとなりますので。

それにしても奈々様かっけぇえええ！　私も信者になってしまいました↑大分前からだけどね

翌日

「お前のセイだ」
「お前が」
「光を消すから」
「タスケテ」
「クルシイ」
「どうして？」
「どうして」

サンの周りを腐りかけた人間が囲む。ずっと同じことばかり言い、ゾンビの様に一歩ずつサンに近づいて来る。

手・手・手・手・手・手・手・手・手・手・手・手

気が狂いそうな程、沢山の腐りかけた手がサンの体を蝕む様に触る。一つが触れる毎に体温が引いて行き、それに比例する様に生気も消えて行く。

「オマエガアアアアアアアア！！」

「うわあああああああああっ！」

ゴツン

頭に何か堅いものにぶつかった。先程まで聞こえていた悲鳴が急に

聞こえなくなり、ようやく夢だと分かる。
頭を押さえながらまぶたを開くと、エリオとキャロが居た。キャロは頭を両手で押さえつけているので、ぶつかったのはキャロの頭の様だ。

「だいじょうぶサン？　凄くうなされてたけど」
「あ、ああ。ちょっと嫌な夢を見てた。今は？」
「まだ朝の１０時。なのはさんとヴィータ副隊長の許可を貰ってこっちまで」
「そっか・・・・。ところで姉さんは大丈夫か？　かなり痛そうにしてるけど」

涙目でゴシゴシとサンとぶつかった所を摩っていた。サンはそこまで痛く無かったのか、今は既に平気そうな顔をしている。

「う～痛い・・・・。サンって石頭？」
「さ、さあ？　頭突きとかしたことないし」
「そんなに痛かったの？」

未だにキャロが痛がっているので、エリオがつい聞いてしまった。サンの石頭論を証明する為にか、ある提案をする。

「それじゃあエリオ君もやってみて。絶対に痛いよ」
「痛いと分かってするの！？」
「俺だって普通に痛かったんだ。第一、病人に頭突きは勘弁してくれ」

ハ～と溜息を吐きながら尤もな事を言った。それに反論出来ないのかキャロはウッとたじろぎ、エリオは頭突きをしなくて良かった様でホッと息を吐く。

そんな光景も久しぶりなのか、三人は何も言わずに笑い始める。

「そういや二人はアインハルトの事を知ってるよな？」

「勿論。あの事件の翌日にセリオさんが来たみたいだから、五日前から六課にいるよ」

「よく僕達の訓練を見学して色々研究しているみたい。これはヴィヴィオも同じ」

「へ～」

昨日アインハルトの覇王流（カイザーアーツ）の事を聞いて、もしかしたら魔法戦に興味があると思っていたので何となく予想していたが、まさかヴィヴィオも一緒に研究しているとは思わなかった。

それにしても昨日といい今日といい、ほんとにヴィヴィオの成長には驚く。

この聖王医療院で初めて会った時とは大違いだ。

そんな事を考えていると、先程までの夢の恐怖が消えて行く。やはりライトが消えた今でも愛は光だと実感する。

「じゃあその本人達は今」

「多分スバルさんとティアさんの訓練を見ていると思う」

「いくわよスバル、クロスシフトB！」

「了解！　今日こそなのはさんとヴィータ副隊長を倒す！」

ビルの合間を飛行しているヴィータから目を離さない様に有幻覚を作る。今回は三つ。その後すぐに散乱弾をヴィータに向けて撃つ。そしておそらく今までの訓練からするとなのははある場所にいると考え数発追跡弾を、そこに撃つ。

「ハズレだよティアナ」

ティアナのすぐ後ろからなのはの声が聞こえ、同時にアクセルシュートが放たれる。

「ッツ」

「危ないティア！」

―ドドーン！

土煙が収まった時にはスバルとティアナの姿が、なのはとヴィータの視界から消えた。

［ティアナはかなり成長しているな。有幻覚有る無しに関係なく弾の威力、精密度、種類が増えてる］

［スバルもだよ。ウイングロードの使い方、マッハキャリバーとの連携、攻撃力も素早さも前とは違う。何より判断力が上がってる］

二人はスバルとティアナを上空から探しながらも弟子の成長を褒める。最も今のままで満足はしない。もっと、もっと強くなって貰う為に、だから二人は厳しくいる。

「見つけた！　バスターー！」

砲撃が一つのビルに突っ込む。
厳しく指導してやると思っていたヴィータも、今の攻撃にはドン引きだった。眉をピクピクと動かしながら、崩壊し始めているビルの中を確認しているなのはを見る。

「クロスファイアーシュート！」

土煙の中からオレンジ色の弾丸が複数飛び出してくる。
ヴィータがそこに突っ込み、なのはが援護する様にスフィアでティアナの弾丸を撃ち落とす。

「うおおおおお！」

ヴィータとぶつかり合う様にスバルも突っ込む。
同じタイミングでなのはを四人のティアナが囲む。

「おらぁあああああ！」

グラーフアイゼンとマッハキャリバーがぶつかり合うと思った時、突然スバルの動きが止まり、オレンジ色の弾丸を撃った。

「っな！？

にゃろ・・・面白い事するじゃねえか、ティアナ」

「バレましたか・・・・」
「有幻覚に幻覚か・・・・。戦闘機人との戦いを見たが、ずいぶんと面白い戦いだな」

「戦闘機人には汚いと言われましたよ。・・・・いきますっ！」

「全力で掛かって来い！」

一方四人のティアナはダガーモードで一斉になのはに突っ込む。スフィアを四つ展開し、それぞれのティアナに向わせ、その後すぐに目の前のティアナに向う。

「ディバイーン・バスタァァーー！！」
「え？」

―ドドーン！

「やった？」

「残念、スバル。まだまだ甘いよ」

後ろにクルリと向き、レイジングハートを構える。目の前に映っているのは確かにティアナだが、ほんとはスバルの様だ。シルエットを使った魔法だろう。

「まだまだァ！」

スバルは一斉に、有幻覚のティアナと共になのはに向う。

この訓練を外から見ている子供が二人。当然ヴィヴィオとアインハルトだ。

「ふぇええ～、みんな凄～い」

「そうですね・・・・。皆さんそれぞれ凄い武器をお持ちでおられます・・・・」

「？　武器って？」

パッと見ると武器とはデバイスと思うが、ヴィヴィオはデバイス＝武器という考えでは無い。なのはやフェイト、サンを近くで見ていて、デバイスは仲間、相棒、パートナーという考えになった。

「なのはさんはやはり砲撃。圧倒的な威力と防御力を持っておられ、集団戦なら動かずにでも戦えそうです。

ヴィータさんはパワー。ヴィータさんの打撃をスバルさんとティアナさんは真正面から受けようとはしていません。

スバルさんはスピード。瞬間の爆発的スピードではなく、一定の速さを持続していられる。あそこまで長時間維持できるのはスタミナがあるからだと。

ティアナさんはテクニック。幻覚魔法と有幻覚という魔法を使い分けています。お互いの姿を入れ替えたりと面白い戦術です」

訓練を見ながら淡々と呟いて行くアインハルトを、目を点にしてヴィヴィオは見る。アインハルトの事を姉と呼んでいるが、やはりどこかで同い年位だと思っていたのだろう。

出発地点がヴィヴィオとアインハルトではかなり違う。

ちょっとした知識だけでもあるのと無いのでは全然違う事がヴィヴィオには衝撃的だった。

「ほう、高町とテスタロッサが見つけた子供とはずいぶんと賢いな」

後ろから凛とした声が聞こえ、二人は振り向く。居たのはシグナム。アインハルトは初見だったのでサッと立ち上がりスカートをパンパンとはたく。

「は、初めまして。アインハルト・ストラスと申します」
「話は聞いている。シグナムだ、よろしく」
「よろしく、お願いします」

二人が挨拶をし終えると、ヴィヴィオが勢いよくシグナムにタックルした。

ヴィヴィオがぶつかりドスンと音が鳴るが、鍛えているシグナムには大した事ないレベルだ。

「む？」
「う～～、私・・・・頭悪い？」

どうやら先程のシグナムの発言を気にしていた様だ。確かにアインハルトだけが賢いと取れなくも無い。
何とも可愛らしい嫉妬だろう。いつもほとんど笑わないシグナムが、必死に堪えている。

「ック、ククッ、ククク・・・・」
「？」
「いや、お前も賢い。大丈夫だ、自信を持て」

シグナムの言葉が嬉しかったのか笑顔に戻り、今度はギュッと抱きついた。一瞬シグナムも驚いた様だが、何だかんだで子供が好きな彼女は、少し乱暴にヴィヴィオの頭を撫でる。その隣に居たアイン

ハルトも例外ではなかった。

「それじゃあお前ぇら、しっかりと反省文出せよ」

「「あ、ありがとう、ござい、ました」」

地面にへばり付き、息を荒くしているスバルとティアナ。結果から言うと良い所まで行ったのだが負けてしまった。

「最初に撃った誘導弾がいきなり来た時は驚いたよ。でもコントロールに集中しすぎて威力が無かったから実用的ではないかも」

へばっている二人の前に屈みこみ、ニッコリと微笑むなのは。なのはの言った通り、最初の方にティアナが撃った誘導弾が途中の乱戦で突然現れた。お互いの姿を変える戦法も面白かったが、その弾丸もかなり意表を付かれた。

「スバルはもう少しパワーと防御を上げないとね。エクセリオンだと負担が大きいからリミット2ぐらいでも結構な爆発力を上げないと」

「「わ、分かりました・・・・」」

「じゃあ反省文はレイジングハートにお願「ママー！」ヴィヴィオ？」

「ま、待って下さいヴィヴィオ」

「アインハルト！」

スバルとティアナに言い終える前に、ヴィヴィオの声とアインハルトの声が聞こえた。振り向くとヴィヴィオに引っ張られているアイ

ンハルトがいた。声は困っていたが、表情は嬉しいのか微かに微笑んでいる。

「二人とも今日も見学？」
「はい、とても勉強になっています」
「私も頑張ったよ」

自分をキラキラした目で見つめてくる二人の娘に笑顔で返す。
自分の子供が一番可愛く見える親バカの気持ちを久々に実感した。
サンの赤ちゃんの頃も親バカ全開だったが、話せる様になってからは子供らしさが異様に抜けていた。勿論今でもサンは可愛いのだが、今の気持ちとは少し違う気がする。

「そっか～、偉いね。
それじゃあ食堂に行こっか？　二人は何が食べたい？」
「え～と、え～と、オムライス！」
「私はどれでも構いません」

二人の反対的な意見に心の中で溜息を吐く。先に振っておいてこう言うのも何だが、この会話は昨日も一昨日もしている。必ずヴィヴィオはオムライスと言い、アインハルトは何でも良いと答える。正直どちらも問題である。

ヴィヴィオの方が一見普通と思うが、毎日毎日オムライスと言う。オムライスは栄養が摂り易い。なのはの頭の中ではたまごでタンパク質を、ライスでエネルギー源、ケチャップのトマトに含まれるリコピンが抗酸化作用があり生活習慣病予防になり、具もしっかりと入っており最近はピーマンも嫌々ながら食べているので栄養面にはそれほど問題が無い。
そう、肝心なのは他の料理に挑戦してほしい事だ。早いうちに色々

な料理に触れ合って欲しい。

そしてアインハルト。この子の言葉はやはり寂しさを感じる。何でも良いが、食べられるのなら何でも良い、として聞こえてしまうのだ。

気になってセリオに連絡したら、やはり何でも良いと答えていたと言う。

なのはの思い込だと良いのだが、出来ればお気に入りの料理を一つでも増やして欲しい。

「あの、なのはさん。行かれないのですか？」

「ママー！　早く早く～！」

「は～い！　今行くよ～！　行こっか、アインハルト」

「はい」

この二人の食をどうするか。これがなのはの普通の母親らしい悩みだった。

そしてその姿を外から見ていたスバルとティアナ。

「やっぱり家族って感じがするね。でしょ？　ティア」

「そうね～。あたしは両親が早く死んだから良く分かんないんだけど」

スバルは自分を憎んだ。何故こんなにも頭が悪いのかと。

ティアナの家族の話は何回も聞いたしずっと前から知っていた。それなのに無神経な質問をする自分が本当に憎い。

どうしよう、どうしようと悩んでいると、頭に手を乗っけられ。

「気にしないでいいわよ。別にもう羨ましがる年でもないしね。それにあんたの無神経さにはもう慣れっこだし」

「ティ、ティア～」

「ほら、犬みたいな声出さない。お腹空いてるでしょ？　早く食べて反省文書くわよ」

ひっついて来るスバルを引き剥がし、素早く立ち上がり、早歩きで食堂の方に向って行く。

【ったく、ほんとにあいつは・・・・。フェイトさんのこと好きならフェイトさんに甘えればいいのに・・・・】

「待ってよティア～！」

母娘の姿を見ていた二人を見ていたシグナム、ヴィータ、シャマルの三人。

「ッフ、これは面白くなってきた」

「あたしはスバルから告白するにアイス４」

「それじゃあ私はツンデレのティアナからの告白に命令権２」

「半々に分かれたか。では私は・・・・テスタロッサにおかず１」

「シグナム、それってありなの？」

「二人をテスタロッサがものにする可能性も無くはない」

「でもさぁ～、折角ならあの二人に賭けようぜ」

「２対１では面白くないだろう。賭けは重ならずに楽しむものだ」

なのはとフェイトを付き合う前から知っていた三人。同じ様な組み合わせを見ると、ついつい遊び心が出てしまう。
ついでに言うと、別の賭けではザフィーラ以外の八神家全員が賭けをしているという事もあったと言う。

食堂のおばちゃんの目の前まで来たヴィヴィオ。当然オムライスを頼む予定だったのだが、先程なのはに「たまには別のメニューにしよ。オムライスより美味しいもの見つけれるかもよ」と言われたので現在は真剣な瞳でメニューを見ている。
そしてそのメニューを真剣な瞳で見ている少女がもう一人、アインハルトだ。この子も「好きな物何でも選んでいいんだよ。むしろ選んでくれた方が私は助かるな」と言われたので探している。

「・・・・・私ミートソース！」
「私は鮭茶漬けに杏仁豆腐を」
「二人とも合格っ。それじゃあ私は日替わりランチ一つ、ちゃんぽんとチャーハンの小を一つずつ」

「はいよっ」

おばちゃんに注文を頼み、次の順番の人に邪魔にならないように受け取り口まで歩く。一人だけ異様に多いが、ヴィヴィオもアインハルトも何も言わない。
二人とも初めて見るメニューに期待し、頭の中がそれで埋め尽くされている。

受け取り口からメニューを貰った三人はいつも座っている席へと移動する。そこには高町家の大黒柱、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンが座っていた。

「はい、フェイトちゃん。ちゃんぽんとチャーハン」

「ありがとね、なのは。

あれ？　二人ともいつもと違うね」

フェイトはテーブルに置かれる食べ物を見て言った。隣のなのはを見ると、左目をウインクさせている。

チュッ

なのはのおかげと分かったので、良く頑張ったね、のキスを頬にする。

「――――～～～ッ！？　フェ、フェイトちゃん！」

「ほらなのは、早く食べないと冷めちゃうよ？　せっかく美味しそうなのに」

「う～～フェイトちゃんズルイ」

「イヤだった？」

「ッツ、ほんとにズルイ・・・・」

なのははそれだけ言うとソッポを向いて食事を始める。

ヴィヴィオはそれを嬉しそうに見、アインハルトは若干諦めの表情で眺めていた。

そして二人が自分のご飯を口に入れると――

「「おいしい！！」」

「マズイ！　何だこの飯！？」

「病院食って美味しくないの？」

「味が全体的に薄い、これなんか味が無いと言っても過言じゃない」

栄養を重視に考えてある病院食。別にそこまで酷くは無いのだが、未だに疲れが取れていないサンには兎に角濃い物が欲しいのだ。体全体が濃い物をくれと叫び続けている所為か、このご飯のほとんどが、水を食べている感じになっている。

「う～ん、作ってくれた人には申し訳ないけど、売店で買った方がいいかもしれないね？」

「さすが姉さん、分かってる！」

「それじゃあこれ僕が食べてもいい？」

「兄さんはさっきドでかい弁当平らげたばかりだろ・・・・。まあ別にいいけど」

ドでかい弁当というのは運動会等でよく家族が持ってくる様な物だ。家族の人数にもよるが、だいたい三人～六人分のが多いだろう。エリオの弁当は六人分の方だった。それを小さい弁当のキャロと一緒に食べ始め、一緒に食べ終えたのだ。

それに加え更に一人分の料理を食べると言う。

「ごちそうさまでした」

「「早っ！？」」
「それじゃあ売店に行こうか」
「お、おう」

改めて知った兄の胃袋の大きさに、謎が大きくなったサンとキャロだった。

右肩をエリオに、左肩をキャロに預けゆっくりと歩いているサン。廊下に出て分かったが、ここはＶＩＰ専用の階の様だ。ニュースに入院中と言われていた有名人の顔がチラチラと見え、痛み声も全く聞こえずに静かで、廊下の模様が異様な程に凝っている。

おそらくヴィヴィオが眠っていた病棟とは違う棟なのだろう。

おまけに、普通なら一階にしか売店が無いが、この階には二つの売店がある。

「ここって入院費いくらだろ？」
「フェイトさんの話だと、サンが寝泊まりしている個室は一日３０万って。ただ保険に入ってたから、ある程度は戻るみたい」
「やっぱかなり高いな・・・・。
結局兄さんは父さんのことフェイトって呼んでるんだな」
「やっぱりまだ恥ずかしくて・・・・。でも六課が終わったら、その時はキャロと一緒にお父さん、お母さんって呼ぶつもり」
「そっか、でもちょくちょく言って上げないと、あの心配症の二人が何をするか分からんぞ」

そんな話をしている内に売店に付いた。

サンが思っていたのはミッドによくあるコンビニだったが、流石ＶＩＰ専用階の売店。見事にサンの予想を裏切った。

近くのコンビニで売っている１００円のおにぎり。そのコーナーと同じ場所に８００円のおにぎりが置いてあった。ジャンクフードも本場の物や、かなり人気のあるものしか置いていない。他にも違う所は沢山あるが、まさにＶＩＰ専用・・・というより金持ち専用のコンビニだった。

「おおおおお、すげえ」
「私達はサンが寝ている時に何度か来たことあるけど・・・・・・いつ見ても凄い」
「取り敢えず歩いて回ろうか？」

と、再び足を進めようとした瞬間

「あの、もしよろしければ車椅子がありますが？」

どうやらこの階のナースだろう。サンは「お願いします」と言うと、すぐに取りに行った。

「ＶＩＰだからかな？　親切だね」
「これはどこでもそうだと思う。しっかりと声を掛けて、患者が辛くないかどうかを確認したんだろ」
「ほ～、随分大人びた少年ですね」

振り向くとそこにはアベルが居た。博物館の関係者のアベル・クローベル。相変わらず紳士的な雰囲気だが、最新の車椅子に座っている為、普通の入院している老人にしか見えなくなっていた。

「ッフ、まだ生きていたのかよ、アベル」

ゴツン、サンの頭にキャロのげんこつが見事に当たり、見事な音がした。

「サン、ご年配の方に失礼な事は言ったらダメ！　ごめんなさい、アベルさん」

「ホッホッホ、気にしておりませんよ」

「どうしてアベルさんはここに？」

「おお、あの時の赤毛の子か。まだ数カ月前というのに背が伸びてますね。

私はぎっくり腰でこの様に痛めてしまったと言う訳です」

アベルは自分が座っている車椅子をポンポンと叩く。

可哀そうにと落ち込むエリオとキャロ、その反対に爺くせえと笑っているサン。

ゴツン！

またまたサンの頭にげんこつがヒットした。

「それにしても世間はあなたの事ばかりです。新聞の一面まであなたの事が書かれている」

「イテテテ。ああ、それなら見たよ。ある程度は覚悟してたんだが、俺自身あそこまででかい戦いになるとは考えて無かった。ミッド全域が揺れるとは・・・・」

「これも定めだと思い諦めてはどうでしょう？　有名になることはそんなに悪い事ばかりでもないですから」

「そ～かな～・・・・」

ガクッと肩を落とした時に、丁度先程のナースが車椅子を持ってき

た。サンはお礼を言い、ゆっくりと椅子に座り、キャロが押して売店内を見回る。

「アベルさんのクローベルのファミリーネームは、ひょっとして三提督の一人、ミゼット提督と何か関係があるのですか？」

「彼女は私の姉に当たる人です」

「「「へぇ～～」」」

「そこまで驚かれないのですね」

「前々から三人とも、もしかしたらと思っていたから。でもあんなに偉い方の弟となると色々と大変だろ？」

「そうでもないですよ。あの博物館のオーナーになれましたし、こんな豪華な病院に入院する事ができました」

そんな感じに話しながら四人は店内を見回る。値段に余り納得が出来ないサンだったが、こんな状態だから良いだろうと思い、どんどんとかごに入れて行く。本当に納得出来なかったのかと思わせる位の量が、エリオの持っているかごにあった。

ピッ、ピッ

バーコードを読み取る音が何回も聞こえ、そのたびに数字が大きくなっていく。既に1万は超えており、買った本人も苦笑するしかない。

「合計で2万3千六百二十円になります」

昨日なのはから受け取った財布を取り出し、丁度の現金を渡す。店員はお金を数え、レシートの要否を確認してくる。当然親から貰ったお金なので、きちんとレシートは貰わなくてはならない。

サンはレシートを、エリオは商品を受け取り、病室へ向う。

「それじゃあアベル、またいつか」
「頑張って腰を治してください」
「そのうちまた博物館に行くと思います」
「それは何よりです。楽しみにしております」
そう言って、お互いの病室へ帰った。

食べ歩きをしながら病室まで車椅子で移動し、病室のドアをガラガラと開ける。

「あ、お兄ちゃん！」
「サン、その、来てしまいました」
「「ヴィヴィオ！？　アインハルト！？」」

中に居たのはヴィヴィオとアインハルト。今日も来たようだが、アポ無しだったので驚いた。
この様子から、どうやらエリオとキャロも聞いてない様だ。

「二人ともどうやってこっちに来た？　父さんも母さんも見えないけど・・・」
「こちらに通っていられるヴァイスさんとザフィーラさんに送ってもらいました」
「帰りはエリオとキャロと一緒に帰る予定」

二人とも活発的過ぎないだろうか？　そんな爺臭い事をサンは思っていた。エリオとキャロの話からすると先程まで二人はスバルとテ

ィアナの訓練を見学していた筈だ。それからご飯を食べ、すぐにこちらに来たということになる。

「そっか、二人ともサンに会いたかったんだ」

「え!?　あ、あの、えと、か、家族として「うん!」・・・・そうです」

顔を赤くしアタフタしていたアインハルトの横から、ヴィヴィオの元気な声が聞こえ、自分も肯定した。

「二人とも、嬉しいんだが無茶しない様に気を付けろよ」

コクンと二人は頷く。
ほんとに大丈夫だろうかと心配はあったが、本人達が大丈夫だと言っているので、何も言わないことにした。

「やはりまだ歩くのが困難ですか?」
「ああ、とてもじゃないが一人で歩けないな。立つだけで結構疲れる。おまけにタオルで体を拭くだけだからな。いい加減風呂に入りたいがご覧の通りだ」

それを聞くとキャロは何か閃いた様だ。

「じゃあ、私達も一緒に入ってサンのお手伝いするのはどうかな?」
「えええええ!?」

それに驚いたのはサンではなくエリオ。

「私も入りた〜い。アインお姉ちゃんも一緒に入ろ?」

「わ、わ、私は、その、余り他の方に、特に殿方に裸を見せるのは・・・・・」

今度はアインハルトがブンブンと手を振り、必死に否定し始める。
確かにサンもエリオもまだ家族になって一週間も経っていない。普通の六歳児なら羞恥心は余り無いだろうが、色々と大人っぽいアインハルトにはあるようだ。
同じく精神年齢の高いサンだが、まだ子供なのと家族ということもあり問題は全く無い。

むしろエリオの方が恥ずかしがっている。

「エリオ君、一緒に行こっ」
「いや、待って！　僕はここで待って――――」

キャロから手を引っ張られグイグイと病室内のお風呂場に連行された。

「アインは行かないのか？」
「わ、私は――」
「アインお姉ちゃん・・・・行かないの？」

少し見上げる形でヴィヴィオが見つめてくる。その純粋過ぎる表情に、どうしようかとアインハルトの中で二つの意志が戦い始める。
冷や汗が出現しヒタヒタと地面に落ちて行く。この場がシーンと静まり、一緒に入ろうよオーラを出しているヴィヴィオと、どっちでもいいから早くしろと面倒くさそうにしているサン。

「サン、は・・・・一緒に、入りたいですか？」
「ん？　そりゃあ家族風呂はずいぶんとしてないし。でも恥ずかし

いなら別に良いぞ。無理にとは言ってない」

家族風呂に入っていない張本人はサン自身。精神年齢が２０過ぎた状態で若い両親と一緒に入るのは精神的に無理だったのだ。だが最近になり、そういう羞恥心が薄れていっている。当然八神家と一緒に入ろうと言われたら断るが、家族であるなのはとフェイトなら別に構わないと価値観が変わった。

そしてそのセリフがいつも家族で入っていたと聞こえたアインハルトは、ゴクリと唾を呑む。冷や汗が止まらずに未だに思考中だ。

【ここで入らなくては家族にはなれないのでは？　いやいや、落ち付きなさい。こんなに優しいみなさんがそんな事で・・・・。でも、もしかしたらっ・・・・】

アインハルトの出した結果は――

「分かりました・・・・。覇王イングヴァルドの名に掛けて、その家族風呂、入ってみせます！」

「・・・・それでいいのか覇王の子孫・・・・」

アインハルト・・・・大人しく大人っぽいこの子は、どこか抜けていると実感した。

翌日　（後書き）

それでは見てくれた読者の皆さま、本当にありがとうございました。

まあ何というかホントにほのぼのだと思います。
ぶっちゃけ魔法少女リリカルなのはの魅力は熱血バトル、想いのすれ違い、別れと出会い、バトルがある中でのほのぼのだと思います。
ちなみに私の魅力はなのフェイのイチャイ（ｒｙ

ネタはいくらでも発掘でき妄想できるのですが、せっかくなので、読者の皆さまが見てみたい少し変わった高町家の日常を教えてほしいです。
いつも感想を下さる方も初感想の方もお待ちしております！

あ、この終わり方だと次回の話が決まって無い感じがするので言っておきますと、次回の序盤はゆったり家族風呂になります。

裸の付き合い（前書き）

う～ん、なぜここまで早く投稿できるのかが未だに不思議だ。何故学校をさぼらず、宿題まで終わらして、友達と遊んでいるというのに書ける・・・・。
やっぱあれですかね？　頭の中でポンポンとネタが思いつき書けるという、絶好調時代。

前の話の続きですが、７０００程度なのでくっつけてよかったか？最近一万文字ないと少し不安な感じがするバカな私・・・・。ぶっちゃけ少なすぎるのもあれですが多すぎるのも駄目ですからね・・・・。

まあいっか！
それではお風呂回です！

返信にも書きましたが、純粋な気持ちで書いています！　ほんとです、ほんとですよ！
大事なことなので二回言いました！

裸の付き合い

「ア〜〜、久々の風呂って最高〜」
「爺くさいよ・・・・」

結構な大きさのお風呂からサンの爺くさい息がする。それにツッコミを入れたのは隣にいるキャロ。流石病院のお風呂ともありそこそこ大きく、バリアフリーになっている。ＶＩＰの階というのも少しは関係あるかもしれない。

「こらヴィヴィオ、狭いんだからはしゃぐな」
「えへへ〜、みんなでお風呂〜」

鼻歌をしながら右へ左へと揺れる。

「この〜〜！」

静かにして欲しいので、ヴィヴィオの腕を引っ張る。バシャバシャと激しくお湯が揺れ、サンの前にヴィヴィオが座る形となった。

「お兄ちゃんもう一回！」
「だ〜か〜ら〜、静かにしろって言ってるだろ。しないなら〜〜」
「しないなら〜？」
「こうだ！」

そう言った瞬間にサンの手の平がヴィヴィオの脇の下に入り動き始める。親なら小さい子供にしたことがあるだろう。そう、笑いながらも説教にはもってこいのくすぐり、コチョコチョだ。

「ウッ、アハハハハハハ、やめ、お兄ちゃん、し、静かに、するから！」
「ほ～ん～と～か～？」
「ほ、ほんと、ほんとにほんと」

しっかりと頷くのを確認するとサンは再び自分の体のマッサージを始める。その前には息を乱しているヴィヴィオがおり、更にその前には顔を真っ赤にしているエリオとアインハルトがいる。
この兄妹、仲の良いのは微笑ましい事だが、裸でのその行動は少々過激な気もしなくもない。キャロは純粋にくすぐってた様に見えるが、エリオとアインハルトには色々と危ない感じに見えた。

「その、お二人は、いつもその様なスキンシップを？」
「いっつも私をいじめるんだよ。静かにしろって」
「あのな～、風呂は静かにボ～とするのが醍醐味なんだからな」
「ム～～」
「ほら、二人とも喧嘩しない。エリオ君とアインハルトの方が静かだよ？」

それを言われてサンも前を見てみると、顔を真っ赤にして俯いている二人。顔の赤さが半端なく赤く、父親譲りのルビーの瞳を連想させる程だった。

この二人が風呂に入って来るのにえらく時間が掛かったものだ・・・
・

ヴィヴィオに車椅子を押されながらお風呂場のドアを開くと、エリオとキャロがいた。どうやら二人ともサンを待っていたようだ。

「え～と、どうすればいいの？」

言いだしっぺのキャロだったが、実際怪我人を入浴させる方法などは全く無知だった。

「何とか脱ぐことはできるから、浴室まで歩くのを手伝ってくれ」

そう言いながら何の恥じらいも無く脱ぎ始める。後ろにいたアインハルトはバッと後ろに振り向き、やはり止めておけばよかったと今更になって後悔する。

【しかし、覇王イングヴァルドの名を汚してしまうっ】

と、全く分からないプライドが逃げるのを許さなかった。チラッと後ろを振り向くと、上半身裸のサンがいる。まだ六歳というのに少し筋肉が分かる。これで運動音痴とは信じられない。
すると今度はズボンに手が掛けられる

再び壁と見つめ合う様に振り向き、汗で微かに濡れている手をギュッと握りしめる。ここまで来たのなら諦めれば早いのだが、それでも羞恥心があった。

「アイン、悪いが先入るぞ」
「は、はいっ！」

「うおおお！　すげー、かなり立派な浴槽じゃねえか！」
「ふえ～、病院のお風呂ってこんな感じなんだ～」
「私も六課以外のお風呂は久しぶりだ～」

三者三様の感動の様である。サンはなのはとフェイトの実家でもミッドのマンションでも普通の住宅風呂には入っていたが、これは結構な大きさの物だ。
ヴィヴィオは六課の広々とした風呂しか知らず、キャロもそこまではいかないが住宅風の和洋式はかなり久しぶりになる。

アインハルトの耳には三人の感動の声が聞こえる。と言うことは必然的にこの場にはエリオと自分の二人だけになる。お互い異性の前で脱ぐのは恥ずかしいのか一向に服に手を掛けない。

・・・・・・

「二人とも～、早く入ってきて～！」

「うおっ！？　ヴィヴィオ、それ水！　水だって！」
「ふえええええ！？　ど、どうするの！？」
「きゃあああ！　ヴィヴィオ、こっちに向けないで！」

「楽しそう・・・・ですね」
「あははは・・・・だね」

会話が全く続かない。まあ今から恥ずかしながらも裸を見せてしまうという相手と、会話が続くのならそれはそれで凄いだろう。

こうなれば仕方がない。

エリオは男らしく一気に脱ぎ、浴室へ向った。エリオなりのアインハルトへの気遣いだろう。

さて、残ったのはアインハルトただ一人。
脱ぐのに関しては問題なくなったが、今度はお風呂に入らなくてはならない現実を付きつけられる。

「ぎゃあああ！　ヴィヴィオ！　今度は熱い！　それ軽く５０℃行ってる！」
「えっ！？　嘘！？　ど、ど、ど・・・・」
「すぐに温度下げるよ！」
「気を付けてエリオ君、鉄の部分が熱くなるから！」
「え？　熱ぃいいいい！？」
「どうしてそこに手が当たるんだよ兄さん！？」

「・・・楽しそうですね」

当然一人なので誰も返してくれない。
ハァ、と溜息を吐き、服に手を掛ける。これも家族としてのコミュニケーションだと思えば良いのだ。と、自分に言い聞かせるのだがそれでも恥ずかしい。
下着を脱ぎ終え裸になると、しっかりとバスタオルを巻き、万が一の為にドアをノックする。
が、騒ぎ声で聞こえないのか返事が来ない。
顔を真っ赤にしながらゆっくりとドアを開ける。

「ハァ　ゞ！　ハァ　ゞ！　ハァ　ゞ！　疲れだ・・・・」

「ご、ごめんね」
「ヴィヴィオ、上に回すと温度が上がって、下に回すと下がるだから・・・・」
「冷水があって助かった・・・・」
どうやら騒ぎもようやく終わったようだ。
お風呂に入っている筈が、何故か入る前より疲れている。

「あ・・・・の、入りました・・・・」
「いらっしゃい、アインハルト。みんな揃ったことだし、まずサンから洗おうか」
「お手柔らかにお願いする」

椅子に座ったままのサンの背中をゴシゴシとキャロが洗い始める。
サンは自分の前を洗い始めるが、足のすねから手が届かなくなる。
それに気付いたエリオが、代わりに洗い始める。怪我をしているとはいえ申し訳なかったが、それ以上に気持ちが良かった。

「サンキュー兄さん姉さん。後は髪だけだから大丈夫」
「それじゃあその間、私がアインお姉ちゃんを洗ってあげる」
「お、お手柔らかにお願いします」
「じゃあ私はエリオ君を「じ、自分で洗えるから！」あっ」

子供が五人、結構ギリギリのスペースだが、それでも洗える大きさであった。
アインハルトの背中をヴィヴィオがゴシゴシと洗い、エリオも半強制的にキャロに洗ってもらっている。

兄弟全員でお風呂に入るのが楽しいのか、ヴィヴィオがフンフ～ンと鼻歌をする。

「うし、髪終了！　アイン、こっち来い。髪なら洗ってやれる」
「!?　○!×‘@!▽??q―。Д。―p!?」
「そ、そこまで驚くか？」

髪を洗ってあげると言っただけなのにここまでのオーバーリアクションをすると、流石に引くしかない。
本人はうれし恥ずかしなのか、サンの前まで移動しチョコンと座った。

「？　良く分からんが洗うぞ？」

コクンコクン

「どうだ？　気持ちいいか？」

コクンコクン

「お前ってやっぱ髪長いな。毎日洗うの大変だろ？」

コクンコクン

「いけね、もうちょっと丁寧に洗わないと。つい自分の髪と同じ感覚で洗ってしまった。
せっかく綺麗な髪だからな」

コクンコクン

「って、俺の話し聞いてるのか？」

コクンコクン

毎回毎回頭を振るだけで何も言ってこないのだ。現在進行形で頭を洗っているサンは非常にやりにくいのでしゃべって欲しいのだが、一向に口を開く気配がない。

泡を立てた手でゴシゴシと力強く丁寧に洗う。首から下の髪は、自分の手をクシの様にして洗う。

ゆすぐ時は丁寧に、しっかりとよごれが落ちる様にゆすぎ、首の後ろや耳の後ろの洗い忘れに注意する。

「よし、終わりだ」

コクンコクン

「ヴィヴィオも～」

「分かった分かった。アイン、悪いが場所変わってくれ」

コクンコクン

もうツッコム気にもなれない。コクンコクンと首を縦に振りながら湯船に漬かりはじめる。どうやらエリオとキャロも終わった様で同じく湯船につかる。

「よし、そんじゃあヴィヴィオの髪を洗って風呂に「まだ体洗ってない」・・・俺が髪を洗っている間お前は体を洗え。一緒に流す」

「!?　お兄ちゃん頭いい!」

「さいですか・・・・」

まさか他人が洗っている姿を見ていただけで自分は何もしていなか

ったとは、さすがに予想外だ。嬉しそうに笑う妹を見ながら呆れ半分、愛おし半分のサンは、ゴシゴシと綺麗な金色の髪を丁寧に洗い始めた。

ここまでがこの浴槽に浸かるまでの時間だった。

何だかんだで自分もかなり騒いでいたと今更思い始める。そうなったのも目の前にいる妹の所為だ。それでも憎いわけではなく、むしろ幸せ。

「？　どうしたの、お兄ちゃん？」

急にヴィヴィオの疑問の声が聞こえたので、どうしたのかと前を見ると、いつの間にか自分の腕がヴィヴィオを抱き寄せていた。

「・・・・べつに、ただ抱きしめたかっただけ」

「クスッ、変なお兄ちゃん」

「ッフ、それもそうだな」

そんな兄妹らしい？　姿を羨ましそうに見ているアインハルト。頑張って裸になり、入浴しているのにそれ以上に兄妹らしい姿を見せつけられるのだ。

こんな嫉妬は初めてだった。だが何をすれば良いのだろうか？　私も同じ様に抱きしめて下さい、など恥ずかしすぎて自分の口から言えるわけがない。

「・・・・・・」

「ひょっとして、アインハルトもサンに抱きしめられたいの？」

隣から耳に囁き声が聞こえた。隣にいるのはエリオだと分かっていたので目を合わせずにコクンとだけ頷いた。

アインハルトのサンに対する気持ちは家族なのか恋愛なのか分からないが、せっかく女の子らしい欲を見せてくれたのだ。兄としては是非とも叶えてあげたい願いだ。

［ねえキャロ、実は――］

と言っても結局はキャロ頼みになってしまった。念話でキャロに現状を説明する。うんうんと頷きながらエリオの話を聞く。

エリオとキャロ、この中で一番年上に一応なる二人だが、それでも九歳の少年少女だ。アインハルトのお願いが、異性としてなのか家族としてなのかが分からない為、ウーンとうなっている。

［どうしようか？］

［う～ん、直接サンに言うのはどうかな？］

［それだとデリカシーが欠けると思って］

［それだったら念話で教える？］

［それが一番かもね］

結局は念話でサン本人に教えるという何とも普通な案になった。

［ねえサン］

［ん？何、兄さん？］

［実はアインハルトもヴィヴィオと同じ様に抱きしめられたいみたいで・・・・］

［ブフゥ！　それほんとかよ？］

［ほんとにほんとだよ］

［姉さんもかっ。
・・・二人は嘘吐かないから信じるが、まさかアインがか・・・・。まあ兄弟として見てくれる様になったのならいいか］
［うんっ。・・・あれ？　でもサンってアインハルトのお兄ちゃん？　それとも弟？］
［そういえばアインハルトの方が年上だよね？］
［それもついでに聞いてみるよ］

話合いが終わった所で抱きしめているヴィヴィオの腕を解く。

「アイン、お前もこっちに来い。お前も抱きしめたい」
「！？　○！×‘@！▽？？ｑ―。Д。―ｐ！？」
「またそれか・・・。ほらこっちに来い。
ヴィヴィオはアインと交代」

それに不満そうに口を尖らせて、ここを離れたくないとヴィヴィオが訴える。独占欲は嬉しいのだが、せっかくアインハルトが兄弟らしいスキンシップをしたいと言ってくれた様なのだ。それに答えてあげたい。
ヴィヴィオの頭を撫で、また今度してやると言うと、納得したのかエリオの隣にと移動する。
ヴィヴィオと入れ違いに歩いて来たアインハルト。

「ほら、ここに座れ」

ぎくしゃくとしながら、言われた場所に背を向ける様にゆっくりと座ろうとする。

「あ～も～、じれったい」

行動が余りにも遅かったので、手を伸ばし強引に中腰のアインハルトを自分の胸まで引っ張る。

「あっ」

「よし、ちょっと窮屈だが問題ないだろ」

アインハルトには問題大有りだった。

自分が願ったとは言えまさか本当にこうなるとは思わなかった。自分とサンの肌が触れ合い、小さく打が心地よい胸の音が聞こえる。すると髪が優しく丁寧に触れられ、頭を優しく撫でられる。優しさの詰まった手が余りにも気持ちよく、思わず目を細めてしまう。

「アインは俺を弟として見たい？　それとも兄として見たい？」

唐突な質問だった。

アインハルトにとってサンとは命の恩人であり、暖かい家族の一員となれた、感謝してもしきれない人物だ。だから弟として見るのは図々しく思え、逆に兄として見るのは余りにも甘えている気がする。だが家族になったのも事実だ。

「べつに無理して決めなくても「兄でも弟でもない」え？」

「兄でも弟でもない・・・・、双子の様な関係になりたいです」

これがベストな答えだった。兄として見るのも弟として見るのも抵抗があるが、家族になりたいアインハルトが一番なりたい関係。

「ダメ・・・ですか？」

ゆっくりと後ろを振り返り、サンと顔を見合わせる。

サンは何も言わずに、アインハルトの背中に手をまわし、そっと引

き寄せる。アインハルトの額がサンの胸と触れる形になり、サンは顔を少し下げて耳元でそっと囁く。

「安心した。お前が俺たちと家族になりたいと思っているのが分かって・・・・」

「それじゃ、サンをサンとして、家族のサンとして見て良いのですか？」

顔をそっと上げ、お互いの鼻が触れ合いそうな程近くにいるサンに問う。

「勿論。それに、父さんは父親として、母さんは母親として、兄さんは兄として、姉さんは姉として、ヴィヴィオは妹として、見て欲しいんだ」

「ッツ、サンは、本当に優しいです」

「みんな優しいよ。俺はお前と会ったのがみんなより少し早いから、一番優しく見えるんだろうけど、みんな同じように優しい・・・・。だろ？」

「え～と、サンみたいに優しいかは分かんないけど、アインハルトを歓迎するよ」

「優しくはないけど怖くもないと思うな」

「優しくできるかは分からないけど、アインお姉ちゃんと一緒にいたいな」

「――――～～～～ッ」

バサッ！

嬉しくて嬉しくて仕方が無かったのか涙が出てしまった。一週間弱しかいない自分を、ここまで家族として見てくれる事が信じられない。本当の親は一度も自分の事を家族として見てくれず、ストレス発散に虐待してくるだけだった。

あの家族が異常だっただけなのか？　それともこの家族が異様に優しいのか？　その答えは、他の家族を見た事のないアインハルトには分からない。

それでも、答えが見つかれなくても、今この家族が自分に優しくしてくれる事は、守ってくれる事は、大切にしてくれる事は、確かだ。

涙を見られたくなかったアインハルトはサンの胸に顔を隠し、フルフルと声を殺して泣いた。

「今なら恥ずかしさで死ねる気がします・・・・」

お風呂から出たアインハルトの第一声がこれだった。お風呂に入ることだけでも恥ずかしかったと言うのに、あろうことか異性と肌を密着させ、抱きしめられ、裸で鼻同士が触れあう程顔を近付けた。更には隅々まで裸体を見てしまい、おそらく自分の裸体も見られただろう。

「お姉ちゃん恥ずかしかったの？」

「・・・・ヴィヴィオは恥ずかしくなかったのですか？」

キラキラした純粋無垢な瞳で見てくる子に一番言いたい言葉だ。自分の行動も少し過激だったかもしれないが、ヴィヴィオとサンの行動はそのもう一歩上を行っていた気がする。

「恥ずかしくはないけど気持ちよかったよ」

「・・・・そうですか」

どうやらヴィヴィオと自分の羞恥心が一致する時は、もう数年先の事だろう。

一方サンはエリオに抱っこされベッドまで運ばれた。最初は自分で歩こうと思っていたのだが、体のダルさが増してしまったのだ。

「サン、お風呂入ったんだしもう寝たらどう?」

「・・・・歯磨き」

「って言われても・・・・、洗面所まで行ける?」

「抱っこ」

既に眠気が強くボーとしているのか片言になり、目がうつろになっている。こんな状態でも歯磨きを意識するとはだてになのはの教育を受けた子供だ。

エリオがサンを抱きかかえ、その横にキャロが付き添い洗面所まで行く。キャロが歯ブラシに歯磨き粉を付けて渡す。

流石甘い物嫌いの子供。子供が使う果物等の味がする物では無くミントの物だ。

初めはゴシゴシと自分で磨いて行くが、段々と力が無くなってきた様なのでキャロが代わりに磨いてやる。
今までのサンとは信じられない程弱弱しい。それほどまでにあの激戦が堪えたのだろう。

うがいが無事に終わり、すぐさまベッドに寝かせる。数秒後には寝息が聞こえ始めたのでどうやらほんとに寝てしまったのだろう。

「ねえエリオ君」
「なに？」
「はしゃいだあとに急に眠くなってしまって、寝てしまうって、何だか昔の自分みたいだな～って」
「そういえばそうだね。なのはさんとフェイトさんに連れてもらった時はいつもそうだった気がする」

気持ち良さそうにスヤスヤと寝ている弟を見ながらかつての自分を思い出す。あの時はなのはに膝枕をしてもらっていたり、フェイトの運転する車の二列目で寝ていたりと、今思うと懐かしい。

「お兄ちゃん寝ちゃった？」
「その様ですね・・・・。そろそろ帰りますか？」
「うん、この様子だと明日まで起きないだろうし」

四人はなるべく音をたてない様に出口まで歩き、ゆっくりと外に出る。最後のアインハルトはサンの眠っているベッドに振り向く。

「サン、本当にありがとうございました。私も家族の一員になれた気がします」

窓から差し込む夕日の光であかね色に染まったこの病室が、やけに

幻想的だったことを、アインハルトはいつまでも忘れないだろう。

裸の付き合い（後書き）

はい終わりました。
う～ん、ぶっちゃけどうですかね？

皆さまが（；´Д｀）ハアハア　してくれたのなら嬉しいですが、出来なかったのならもうちょいマニアックｏｒエロく書こうかな・・・

嘘です！
高１の私にこれ以上どう書けばいいというのですかｗｗ

そして一時期使っていた／／を使うかどうか悩みました・・・・。
実際の所、読者の皆さまはどうですかね？　使った方が分かりやすいという方と、／で赤面を伝えようとするのは良くないという方がいらっしゃると思いますが・・・・。
暇であればこの質問に答えてほしいですｍ（＊＿＿＊）ｍ

さて～、多分ほのぼのがまだまだ続くと思います。何しろｓｔｓはほのぼのが無印やＡｓより少ないですから妄想しやすく、読者の皆さまからも日常案を貰いました。

それでは～アドバイス、思ったこと、案、等ありましたら感想お願いします（＾ω＾）ノシ

無駄な時間（前書き）

今回は６５００と少し短いです。

まあほんと、ここまで短いのは久しぶりだな。

無駄な時間

「久しぶりね、サン」
「やっほー。おじゃましまーす」

家族風呂をしてから数日後、本を読んでいる途中だったサンにアポなしで来たのは同僚のティアナとスバル。せめてノックはして欲しいものだが、向こうからしたら子供としか見られてないので諦めるしかない。そう思うと自然と溜息が出る。

「え？　もしかしてタイミング悪かった？」
「べつに～、ノックしてほしかったとかそんなんじゃないから～」

嫌味丸出しの口調で本を読み始めるサン。スバルはゴメンゴメンと言いながら笑っている。そしてティアナは反対に可愛くないガキだとブツブツ呟いている。
まだ六歳になったばかりの子供がノックしろと嫌味丸出しで言いながら本を読み始める。ティアナの怒りはもっともだ。

「それで、二人は見舞に来てくれたの？」
「まあそんなところよ。あたしとスバルもあんたと顔合わせてなかったし」
「でも元気そうでよかったよ！」
「病室で横になりながら本を静かに読んでいる子供がそう見えるのなら、眼科か脳外科に行ったほうがいいぞ」
「ひ、酷いよサン～」

そう、未だにサンの体力は戻らずに、魔法も念話を使う事が精一杯だ。身体強化をしていたとはいえ、六歳の体であそこまで激戦をし

たのだ。本来ならこうして話す事すら難しい。
リンカ―コアへのダメージも半端なかったが、回復に向っているらしい。

「いつごろ退院できそうなの？」
「体力が戻り次第。その前に体よりも重傷だったリンカ―コアが治りそうだが」
「さすがね・・・・。その反面、体に関しては当然の様ね」

ニヤニヤと少しバカにした表情でティアナが見てくる。最初は何の意味だか分らなかったが、六課には自分の家族がいることを思い出す。
まさかと思い頬をピクピクと動かしながら口を開く。

「ま・・・・さ・・・・か、俺の運動音痴の事聞いたのか？」
「勿論」

語尾に音符が付いていると思わせるほどハイテンションで答える。
この今までに自分に見せた事のない笑顔の理由はこれだった様だ。
男の同僚としてはもう少しマシな理由でこの笑顔を見たかったと、肩をガックリと落とす。

「誰に聞いた？」
「なのはさんから」
「そうか、母さんか・・・・って事はあの人も運動音痴だって知ってるよな？」
「うん。元々はなのはさんの弱点を探そう！　って事になってね・・・・」

「「「「ハァ、ハァ、ハァ」」」」
「それじゃあ午前の訓練終了！　午後はデスクワークだけど体力勝負にもなるからしっかりご飯食べてね」
「「「「は、はい」」」」

ＦＷが崩れ落ち、隊長陣が元気そうに立っているという光景ももう六ヶ月目で、今はすっかり六課恒例となっている。

「ママー！　パパー！」
「「ヴィヴィオー、アインハルトー」」

そして両親の元へ二人の娘が迎えに行くのも恒例になりかけている。訓練を見学している二人が終わったのを見計らいなのはとフェイトの元へ走って来る。
最初は微笑ましく、思わず訓練の疲れが取れていたＦＷ陣だったが、毎日続くと微笑ましいのだが疲れが取れるまでは行かない。つまり過去進行形で崩れ落ちている。

「それじゃあフェイトちゃん、今日はどこで食べる？」
「う～ん、やっぱり六課の中庭かな。楽しみだな、なのはのお弁当」

フェイトは近辺の場所を思い浮かべ、六課の中庭になった。その後なのはの頭を優しく撫でる。恋人が朝早起きしてお弁当を作ってきてくれたので、つい褒めたくなったのだ。

「ふえっ！？　も、もう！　私そんな年じゃないよ！」
「恋人が自分の為に頑張ってくれたからやりたいんだ。私がしたい

からしてる、それだけ」
「でも私も楽しみながら作ったから、ナデナデしてもらうほど偉い事してない・・・・」
「だから～、私がしたいって言っているでしょ？」
「ホントに、イイの？」
「いいの」
「じゃあ・・・・一杯してね？」

フェイトのナデナデになのははすっかりハマってしまい、頬を染めながら頭を少し下げ、フェイトの思うままにされる。

僅か数十秒で固有結界を創り上げた二人。もはやこれは管理局全体での恒例になっている。

「エリオ～、キャロ～」

一方二人を呼んでも反応してもらえなかったヴィヴィオは暇なのか、兄と姉の方へ向う。
そしてアインハルトはスバルとティアナの方へ向い、今日の訓練の実体験を色々と聞き始める。スバルとティアナは質問された事に答えて行く。

「なるほど・・・・勉強になります」
「あたし達が言える事なんて、隊長達と比べたら全然なんだけどね」
「いえ、色々なポディションの方の話が聞けて凄く勉強になっています」

しっかりとメモ帳に、自分達が言った事を書いているアインハルトを見てスバルは感心した。敬語が使え、礼儀もしっかりしており、自分の子供時代とは全然違う。

その思いはティアナも一緒だった。自分が六歳の頃は兄に甘えてばかりで、今思うと迷惑ばかり掛けていた気がする。

「・・・あんたってなんでそんなに大人っぽいの？」

「え？」

子供は敬語というものを知らず、丁寧に話しているつもりでもため口になってしまっている子もいるだろう。

その中でアインハルトは敬語を使い、しっかりと礼儀作法も身についている。

「私の中には覇王イングヴァルドの記憶が微かにですがあります。記憶と一緒にイングヴァルドの感情もあり、気持ちもありました。大切な時には、年上の方には敬語で話す。しかし現在では、これが素の話し方になりましたが」

「なるほど、先祖の記憶が教えてくれたって事か」

「はい。あっ、そろそろお二方の結界も崩れる所なので失礼します」

礼儀を忘れずにしっかりとお辞儀をして、走って行った。なのはとフェイトを見るが先程の光景と何ら変わりない、と思った瞬間になのはが今の時間に気づき慌ててヴィヴィオとアインハルトを呼び出した。

「あのお二人と一緒に暮したら分かるのかしら？」

「アハハ・・・そうなんじゃないかな？」

「・・・これのどこから母さんの運動音痴を探す事になった？」

二人の語りに的確なツッコミを入れる。なのはの弱点の弱の字も出てきてない。

アインハルトの敬語の理由を聞けたのは良かったが、別に後に自分で聞けば良いだけの話だったし、正直言うと時間の無駄使いだ。

「まあまあ、時間は沢山あるんだし、折角だから最後の疑問について聞こうと思って」

最後の質問とは当然、なのはとフェイトの固有結界が崩れる時間がなぜ、アインハルトには分かったのかどうかだ。

サンはいかにもめんどくさそうな表情をする。何度も言うがなのはとフェイトは母親と父親で両親だ。若いとはいえ両親のイチャイチャを見聞きするのは勘弁してほしい。

「その答えが知りたいならあの二人と三日ぐらい一緒にいたら分かる」

「・・・なるほどね」

それだけでも十分な答えになった・・・・・目の前のげっそりしたサンを見ると。

「いつしかティアが、子供は泣いたり笑ったりの切り替えが大変って言ってたけど、サンは呆れたり諦めたりの切り替えが大変だね・・・」

「どっちもマイナスイメージじゃねえか・・・・」

「わ～、凄いママ！」
「・・・・これ程美味しそうなお弁当は見たことありません」
「ありがと、なのは。一生懸命作ってくれて」
「みんなありがとう。沢山あるから一杯食べてね」

「「「「いただきます」」」」

四人で一斉に手を合わせ、いただきますを言う。
弁当の中には色々な具のおにぎり、小さめの肉魚や、カラフルな野菜。一口サイズで楽しめる惣菜もあり、更にこれらのほとんどがキャラ弁になっている。
食べるのが勿体なく思う可愛らしいお弁当だったが、食べないのは逆に失礼だ。
アインハルトはパチンと割り箸を割り、おかずを皿に移す。

「え？　アインハルトって箸使えるの？」
「はい、それがどうか？」
「ううん、ミッドはスプーンとフォークが多いから」
「私の本当の両親が、貴様にフォークを持たせると危ないから、ということで箸を持たされたので」

ヒュンヒュンと箸で風の斬る音が聞こえる。トリプル、ダブルリバース、ダブルアクセルソニック、シメトリカルシャドウ４３―３４、シングルアクセルガンマン、ペン回しの技で箸をクルクルと回転させ、最後には再び正確な位置に戻す。

「もっとも、これも結構な武器になりますが」

キランという効果音と共にアインハルトの流し目が決まった。

「そ、そう、みたいだね・・・・」

思った以上に非常識な娘に苦笑いせずにはいられないなのは。

フェイトも割り箸を割ろうと、箸を口に銜えパチンと割る。行儀が悪いが、それ以上に絵になっているためなのはも何も言わずにボーと見ている。

「ママ～、私もお箸で食べる～」

「じゃあ一緒に練習しよっか」

娘の小さな手に子供用の箸を持たせ、使い方を丁寧に教え始めた。

「ほんと一家団らんって感じね。あんた達はほんとにあそこに入らなくていいの？」

屋上の柵に寄り掛かり中庭の四人を眺めているティアナは、シートの上に座っているエリオとキャロの方に目線を移動させる。

「最近スバルさんとティアさんと食事してなかったので」

「だからって今じゃなくてもよかったんじゃない？」

「あっ！　思い当たったら仏滅ってやつ？」

「バカスバル、それを言うなら吉日でしょ・・・・」

中庭にいる四人の中に行かせて上げたいが、せっかく自分達と食事

したいと言ってくれてるのだ。嬉しい半面、申し訳ない。だから少しでも二人に楽しんでほしいスバルとティアナは、他にも沢山誘った。

「やっほー！　みんなで食べるって聞いたから色々と作って来たよ。ついでにヴァイス先輩も来たけど」
「ついでってお前ぇが引っ張ってきたんだろうがっ！」
「風が気持ちいですね～。海も近くで潮の香りが最高」
「へ～、ここの屋上ってこんな感じなんか～」
「はやて・・・・部隊長ならそれくらい知ってなくちゃいけなくねえか？」
「ここはヘリポートとは違って屋根でしかないのだ。仕方ないであろう」
「あの、僕がご一緒しても良いのでしょうか？」
「部隊長の副官だ。来なくてどうするのだ」

上からアルト、ヴァイス、シャマル、はやて、ヴィータ、シグナム、グリフィス、ザフィーラ。

「エリオとキャロからのお誘いなんて久しぶり～」
「最近エリオとキャロはなのはさん達と一緒でしたからね」
「お弁当作ったのって何年ぶりでしょう？」
「アイナさんもお弁当作ってきたですか？　楽しみです～！」

シャーリー、ルキノ、アイナ、リィンフォース、これで六課全員揃った。

その日の昼休みは、中庭と屋上がやけに騒がしかった。

「って、お前等は病院食を一人さびしく食っていた俺に自慢したい訳か・・・・。帰れ」
「そ、そうじゃなくて、ここからが大切なんだよ～！」
「なのはさん、あの事件で酷い怪我してたのに今はあたし達より元気で、しかも朝早くからお弁当作ったりして体丈夫だな～、って話になったわけよ」

もう聞く事すらめんどくさそうになっているサンに再び話を再開する。暇そうに枝毛を探しているが、キレずにグッと我慢する。

「なのはさんと昔からの付き合いの隊長達がいたから聞いてみたわけ。なのはさんの弱点は何ですかって」
「そしたら、なのはちゃん本人に聞いてみたらええよ。って返されて・・・・・・」

お昼休みが終わり、再び六課は仕事場の雰囲気に戻った。当然それはＦＷ陣も同じで、目の前のモニターと対峙している。
相も変わらずデスクワークが苦手なスバルとエリオとキャロ。三人の合計と同じ量のティアナだったが、誰よりも早く終わった。

「はい終わり」
「「「早っ！？」」」
「スバル、どうせあんたチビッ子達より進んでないんでしょ？　少し手伝ったげる」

「うぅ～、ティア～」

職務中にも関わらずくっ付いてくるスバルを無視し、再びデスクワークをする。

「あんた達もあとで手伝ってあげるからね」

「「あ、ありがとうございます」」

結局ＦＷのデスクワークの七割はティアナが片づけたという、完全に個人の力に頼った結果となった。

さすがのティアナも疲れたのか、一番手伝ってあげたスバルにマッサージをしてもらっている。最初は普通に気持ち良く極楽極楽とオヤジ臭い事を思っていたのだが、現在は非常に危険な状態になっていた。

「ど、どうかなティア？　気持ち良い？」

「え、ええ・・・。ちょ、ちょう・・・ど、ふあっ・・・・」

「？　ひょっとして痛い？」

不安そうな声を掛けてくるスバル。それに首を必死に横に振り答える。そう、逆に気持ち良すぎるのだ。的確な位置に、ちょっとだけ痛く、凄く気持ちいい力で押してくる。

口を押さえて声が出ない様に気を付けているが、思わず声が出てしまいそうになる。

「っつ、ァッ」

「ここかな？」

「！？　――――～～～～！！」

マッサージ終了、それはティアナが色々と失った時かもしれない。
ここは未だにオフィスで、周りには男性局員がいた。
彼等は気まずそうにしていながらもチラチラと本能で見てしまっていた。その視線に気付きながらも気持ち良すぎるマッサージは止められなくなるという、今思うと非常にアブノーマルな行動だった。
おまけに声を押しきれず際どい声が出ていた。
ティアナは真っ白になりながら椅子にぐったりと座りこんだ。

「ティア？　ティア！？　ティアーー！？」

「惚気ですね分かります。カエレ」
「今のどこが惚気よ！　あとスバル、どうしてこの話を！？」
「え？　別にやましい事ないしいいじゃん」
「あ～も～、それでどうなった？」

完全に聞く気がなくなっている。枝毛から読書へと、聞く気の無さがレベルアップした。この二人の話を読書のＢＧＭとして聞くことにしたのだ。

「それで仕事の終わった帰りに・・・・」

自分の部屋に戻ろうとしているなのは。その周りには誰もおらず今がチャンスだった。

「あの、なのはさん！」

「？　どうしたの、二人揃って？」

長いサイドポニーの髪を舞わせ、クルリと後ろを向く。

なのはの目に映っている二人は深刻そうな顔をしている。

【まさか私に大事な話が！？　何だろう？　少し無茶するかもしれないから許可を、とかかな？　あんなに無茶した二人が・・・・。やっぱりなのは流教導は生徒の心に届くんだよ！】

と、一人で暴走している教官。

【や、やっぱり言いにくいな。でも八神部隊長は本人に言ったらいいって言われたし・・・・。でもでも、もしなのはさんの怒りに触れたら！？　そしたらまたあの時の様な・・・・】

と、二人で暴走している生徒。

似たもの同士だったが感動と恐怖、暴走する方向が１８０℃違っている。

「なんや、もしかしてまだ聞いてなかったん？」

「あ、はやてちゃん。聞いてないって何を？」

「なのはちゃんの弱点。最近ますますなのはちゃんの凄さを知ったみたいで、弱点を知りたいみたい」

「あ、あの・・・・」

「無理して言わなくて結構です・・・・。あたし達ちょっとした好奇心で「運動音痴」へ？」

「実は私運動音痴なんだ・・・・」

恥ずかしそうにモジモジとスカートを握りしめている。可愛らしい姿だったが、それ以上に衝撃が大きかった。
管理局のエース・オブ・エースの弱点が運動音痴。もしこれを知らない管理局員に教えたら、おそらく１００人が１００人信じないだろう。

「ちなみにサンも運動音痴や。昔から魔法使わんと運動が残念な子やったな～」

「「へぇぇぇぇ～～ぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」」

エース・オブ・エースと次元最強と言われている魔道士。
この二人は運動音痴だった・・・これは何人が何人信じるだろうか？

「なあ、最後の話だけで十分だったよな？　よな？　よな！？」
「も～、ちゃんとカルシウム取らないといけないよ？」

散々聞かされた結果特別なオチなどなく、本当に本人に聞いて終わりというものだった。
激怒しているサンに、無邪気な笑顔で２？の牛乳パックを渡す。

「生憎骨の再生に全部つかっちまった様だ・・・・。
取り敢えずさ・・・、お前らは・・・・・・・・帰れーーー！！！」

無理やり追い出された二人はバイクで六課に戻っていた。二人ともどうして怒ったのか全く分からずに首を傾けていた。

「どうしてサン怒ったんだろ？」

「う～ん、あたしもよくわかんないけど一緒にご飯食べられなかったのが寂しかったんじゃない」

「それかなのはさんとフェイトさんの惚気が嫌だったとか」

「確かにそれもあるかも。あと話が少し長かったから？」

「そうかな～？　みんなの日常上手く話せたと思うから違うと思うけどな」

色々と理由を考える二人。

たくさん上がってきた理由の全てが、サンの怒りに触れたということを、この二人は一生かかっても分からないだろう。

無駄な時間（後書き）

はい、というわけで最初からなのはの弱点探しを振っておいて、実際は３０秒で終わりそうな事を長々と話すという話でした。何のオチもないというのがオチでしたが……

さて、今回は特に話すことないかな？

なのフェイも普通だしスバティアも普通だったし、エリキャロもヴィアインもいつも通りだったな。

まあ回想時、サンは一人さびしく病院にいたというのが余談ですかねｗｗ

それでは次回も頑張ります。

弱点ｐａｒｔ２（前書き）

さて今回はついに完璧超人フェイトの弱点の話です。

まあフェイトの弱点関連ですから当然イチャイチャしますよｗｗ

弱点ｐａｒｔ２

「・・・パパの弱点ってなに？」

完璧超人フェイト・テスタロッサ・ハラオウン。彼女の弱点、それを興味本位で聞いたのはヴィヴィオ。

このささいな質問がきっかけに、機動六課は騒ぎに包まれた。

証言者１　高町サン

「は？　父さんの弱点？　普通に答えたら母さんだけど、それ以外だろ？　う～ん、母さん関連を省くと無いな。ちょっと精神面で弱い所もあるけど物理的なことじゃないから」

証言者２　シグナム

「テスタロッサの弱点？　フム、確かに無いな。魔法戦でもオールラウンダーであり、キャロの様な補助魔法は使えないにしろ状況判断力と的確な弾丸がある。フルバックも可能だ」

証言者３　ヴィータ

「あいつの弱点か・・・・。ねぇな。一回あいつを近所のじーちゃんばーちゃん達とのゲートボール大会に誘ったんだがよ～、五分でコツを掴んで優勝したからな。流石にみんな悔しがってた。あたし？　ぜんぜん怒ってねぇ。あ？　何だよその微笑ましそうな目はっ！？」

証言者４　シャマル

「テスタロッサちゃんの弱点？　昔地球にある八神家でパーティーしたんだけど、その時の後片付けにGが出て来てしまって・・・・。シグナムとヴィータちゃんは丁度外に出ていて、どうしようかとみんなでパニックになっていると、一瞬で叩きつぶしたものね～。女の子は虫が嫌いって言うのは見当はずれよ」

証言者５　高町恭也＆高町美由紀

「ん？　フェイトちゃんの弱点？　・・・・どうだろう？」
「あの子は魔法無しでも俺達と渡り合えたことあったからな。しかも中学生の頃」
「戦闘関連じゃあ、まず弱点と言う弱点はないと思うよ」

証言者６　八神はやて

「フェイトちゃんの弱点？　この際なら音楽関連でも？　ダメダメ、フェイトちゃんは学祭で歌を歌ったこともある程の天才やで？　その映像がネットに流れてオファーが凄いきたんよ。ほとぼりが冷めるまでの間フェイトちゃん学校側から休めって命令される程やった

な～。今思うと懐かしな～」

証言者7　シャリオ・フィニーノ

「フェイトさんの弱点？　ないない、そんなものあったらとっくにみんなに教えてるよ」

証言者8～100　匿名希望

「運動全て最強」
「ファッションセンス完璧」
「彼女の演技に呑みこまれた……」
「博識！！」
「隣に女性がいると一番絵になる女性？1！　我々百合親衛隊の誇りです！」
「どうしてあのムチムチ身体であそこまでカッコイイのだ！？」
「この間壊れた機械を修理して貰いました！」
「その、不良に絡まれた所を助けて頂き・・・・ッポ」
「前に暴れていて手のつけようのないライオンの檻に入って懐かせた様な・・・・」
「フェイト・テスタロッサ・ハラオウンさん？　確かうちで一通りの運転免許取ってますよ。バイクの大型から小型、トラックや船も同じ様に。最近ヘリの運転免許を練習している噂が」
「前に針灸をしてもらって今はすっかり元気じゃ。あの子元気にしとるか？」
「なんかも～完璧ですね」

息を乱しながら地面にドサリと落ちるＦＷ陣。聞き込みからネットまで様々な方法でフェイトの弱点を探したが、今の所１００人が１００人弱点はないと答えている。同じ人間として普通は嫉妬するものだが、ここまで来ると嫉妬を通り越して呆れてしまう。

魔法、スポーツ、趣味、色々聞いたが全て出来ると答えている。

しかしここまで徹底して出来ると言われると逆に出来ないものを探したくなる。もはや弱点では無く、出来るか出来ないかのどちらかで絞ることにした。

再び自分達の足で聞き込みを、デバイス達にはフェイト関連のサイトを徹底的に調べる様にと命じた。どう考えても科学と魔法で出来た技術の無駄使いだったが、こうなれば使える手段は何だろうと使う。

更にはアルト、ギンガ、暇なサンまでも捜査に協力させた。

そのアルトは機動六課局員にもその話をし、手駒を増やした。

証言者１００～Ｘ（エックス）　匿名希望

「畜生！　あいつの名前は言うな！　借金取りそこなってこっちは大損だ！」

「フェイト・・・おお、フェイト様のことか！？」

「ビリヤードする姿がたまらなかったな～～。クーー、また見たいぜ」

「東京ドームライブおめでとうございます！」

「なんか無我の境地行った事あるらしいけど？」

「高さ５０００メートルの雪山の頂上から雪崩と一緒に滑ってきたぞ」
「阪神の大ファンみたいです」
「一時期家で建物のプラモデル買ったばい。もし知り合いなら新しいの入ったと伝え取ってつかあさい」
「確か弓道部の助っ人やってたわね。あとは射撃、演劇、美術、それと一般的な部活はチアリーディング以外全部」
「なんかも～完璧ですね」

これを調べた全員が頭から湯気を噴き出した。これだけ調べても弱点所か苦手な物一つとして見つからない。それどころかプロ並みの行動まであり、一番酷いのは信者までいた。

流石に完璧超人すぎないであろうか？

こうなればある人に聞くしか他は無い。
もしその人が答えられなかったら、泣き出すと思い避けていのだが、やはりフェイトの最も近い人物だ。

と、その前に大事な人達に聞かなければならない。

証言者９　リンディ・ハラオウン＆クロノ・ハラオウン夫妻＆アルフ

「フェイトの弱点？　え～と、思い込が激しいとか、若干ヘタレとかそういうのじゃなくて？」
「執務官試験に数回落ちたが、それも昔の話だ。今は僕と同じくらい頭が良いだろうな」
「なに～、クロノ君。それって自慢？」

「別にそういうのじゃない。ただ勉強面でも完璧だと・・・・」
「あっ、ただフェイトは片づけが出来ない子だったよ。サボってる訳じゃなかったけど・・・・」

証言者１０　高町なのは

「フェイトちゃんの弱点？　ちょっと今それどころじゃないから」
「なのは～、このしわしわのシャツどうするの？」
「それはアイロンかけるからテーブルの上に置いて。絶対他の物に触っちゃダメ」
「なのは～、ご飯の火が付けっ放しだよ～」
「ごめん止めといて！　あ、ちゃんとカチッって音がするまでね！」
「なのは～、洗濯機が開いちゃった！」
「そのままにしといて、絶対触っちゃだめだよ！」
「ごめんねなのは～、掃除しようと思ったら散らかっちゃった」
「・・・・ごめん四人とも、そういうわけだからこの話はまた今度で！」

この日フェイト・テスタロッサ・ハラオウンの弱点が見つかった。
彼女は家事が全くと言っていいほどダメな様だ。
しかしそれが公表されることはまず無いだろう。
彼女には高町なのはという完璧な妻がいるのだから。

そもそもなぜフェイトの弱点が家事なのか、そして何故フェイトの母親であるリンディと使いまであるアルフが知らなかったのか。

それは闇の書事件が終わった少し後の事になる。

ここは海鳴り市の高町家。テスタロッサ家の目の前にあるかなり大きな家に五人で住んでいるという結構な贅沢をしており、更には道場までもが敷地内にある。

今日はまだ九歳のなのはが、フェイトの家に遊びに行くことになっている。十年後には婚約者の二人だが、まだこの時期では付き合っている訳でも無く、恋愛感情が芽生えていない時期だった。

「なのは～、今日フェイトちゃん家に行くんだって？」

黒色のリボンで髪をツインテールにしている最中に聞いて来たのは姉の美由紀。

その本人はとても楽しそうに鏡の前で自分の持っている服の組み合わせを考えている。まるで彼氏とデートする前の女の子の様な姿に、嬉しい半分不安半分だ。なのはが禁断の恋をする筈がないと信じているのだが、最近では怪しい感じになってきている。

「ねえねえお姉ちゃん。こっちとこっちどっちがいいかな？」

美由紀の前に出されたのは白いパーカーにところどころにピンクの線が入っているもの、オシャレなボタンの付いている白色のコートの二つだった。

どちらもオシャレな上着だったので何とも言えない。チラリと下を見てみると、この時期には少々寒い鼠色のミニスカート。

ウームと声を出して悩む。どちらもなのはの好きな白で、色々と合わせやすい色だ。

普通ならどれにでも合う無難なパーカーと行きたいのだが、折角妹が張り切っているので高度なオシャレでお出かけさせたい。しかしミニスカートに分厚いコートというのは逆に大人ッぽ過ぎる気もしなくはない。

他の小物を見てみるとブーツやらハットやらニット、一年前とは比べ物にならない程沢山あった。

そう言えばここ数カ月なのははファッション系の雑誌を読んだり、親に買ってと頼んでいた気がする。まるで誰かにオシャレな自分を見せたい様に・・・・。

「えっと、コートの下は何を着る予定？」

「うん、この黄色のプリントTシャツ」

指を刺した方向には最近越して来た子の髪色と同じTシャツ。

偶然偶然と自分に言い聞かせる。

「じゃあ後は茶のブーツと、同系色のニット帽かな？」

「このカーディガンはどうしよう？」

「う～ん、ピンクだからちょっと上が目立ちすぎるかな？　それで十分可愛いから問題ないよ」

可愛いと言われたのが嬉しかったのかなのはは顔を赤くしてモジモジとスカートを握る。最近なのはが一段と可愛らしくなった気がす

るが、それも気の所為だ。もしそうだとしても魔法少女が関係している筈だ、決してフェイトは関係がない。

「じゃあお姉ちゃん、私そろそろフェイトちゃん家に行ってくるね」
「はいよ～、行ってらっしゃ～い」
「アドバイスありがとー！」

腕を激しく振りながら家の前のマンションに走って行った。

「・・・・気のせいだよ。きっと気のせい・・・・」
「なにがだ？」
「あ、恭ちゃん。いや、なのはが最近女の子っぽくなった理由」
「・・・・俺も気の所為だと思いたい・・・・」

なのはの兄姉、二人の心配は小さい感じだが割と大きかった。

さて、その頃テスタロッサ家フェイトの部屋では、物の落ちる音や壊れる音が繰り返し続いていた。呆れて聞いているのはクロノ・ハラオウンとリンディ・ハラオウン、アルフの二人と一匹。フェイトがテスタロッサの性を名乗る前から、片づける能力がゼロの事は知っていた。エイミィは呆れているまではいかないが苦笑が止まらない。

今日なのはが来ると言う事で少ない物を片づけているらしいが、綺麗になるどころか散らかっている。

「フェイト～、手伝おうかい？」

「だ、大丈夫だよアルフ。いい加減自分で片づけられるよう、はうっ、また落ちた・・・・」

「・・・・ハァ、なんだってこの子はこうも片づけに見放されてるのかね～」

そうフェイトは出来ないと言うより天から見放されているのだ。片づけようと物を運ぼうとすると、別の所の物が零れたり落ちたりしてしまうのだ。

「えと、ここはこうして、あれはああして」

ガシャガシャン！
ゴロゴロ！

「ええと、えとえと、はうー」

ピンポーン

「わわ、な、なのは来ちゃった。えっと・・・全部押し入れに入れておこう。それが一番だよね、バルディッシュ？」
『片付けが苦手な方がよくする手段です、サー』

自分で聞いておきながら全く耳を傾けなかった。地面に散らばっている持ち物を、なにふり構わず押し入れの中に詰め込んでいく。

後の事は考えずになのはに汚い部屋を見せない様にと片付けて行く。と、その時最近この部屋を掃除していないことに気付く。リンディもエイミィも最近忙しく家事をする時間が余りなかったのだ。そしてこの時代のアルフはまだ家事を出来ず、自分は未来永劫出来ない

だろう。

どうしようかと考える。一番良い手は・・・・・・・思いつかない。

窓を開ける手段もあったが、折角なのはに温ったまってもらいたいと暖房を点けていたのだ。

「ど、どうすれば・・・・・」

コンコン

そんな時にノックが聞こえた。リンディがなのはが来たと言っている。もう言い逃れは出来ず、覚悟を決めるしかない。無駄な足掻きかもしれないが、自分の服に付いているほこりを叩き、ドアを開く。

「いらっしゃいなの・・・・は・・・・」

「うん、お邪魔します、フェイトちゃん」

「それじゃあフェイトさん、お茶菓子を持ってきますね」

「あ、お構いなく」

慌ててなのはは遠慮しようとしたが、リンディは持ってくる気満々だった。

この家には無駄と言っていいほどのお茶菓子がある。当然リンディが好きだからだが、好きのレベルが度を超えている所為か、お菓子を入れる棚が一本あるという少々常識が外れている。

さて、そんなわけでリンディがお茶菓子を用意している間、二人は部屋前で二人っきりになった。そしてフェイトは目の前の少女に目

を奪われている。

寒そうだが、暖かいイメージのある鼠色のスカート。白いコートの下にある黄色いプリントTシャツがとても可愛らしく、大人っぽいがそれが可愛らしくも見える。

目の前の少女が妖精に見える程、綺麗だった。

「あの・・・どうかな？」

「えっ？　あ、う、うん。服の事は良く知らないけど、とっても綺麗で似会ってるよ」

「き、綺麗・・・・？」

いつも可愛いとしか言われないなのはが初めて言われた言葉だ。姉は綺麗と言ったのに目の前の少女は綺麗と言った。どちらが正しいのかは分からないが、少なくともフェイトが嘘を吐いていないのは確かだ。

「うん、とっても綺麗。いつもと違って大人っぽくて、綺麗・・・・でも、いつものなのはの可愛らしさがある」

まだ男らしくなくとも流石はフェイトだ。

まずは気付いたファッションから褒め、心から綺麗と言った。そして最後にはいつも可愛いと取れる言葉を囁く。天然のタラシというのは子供の時から健在だった。

「あ、ありがとね・・・・フェイトちゃん」

「ううん、私は感じた事を言っただけだから」

「・・・・君達。お茶菓子持って来たぞ」

ピンク色の空間を壊したのはクロノだった。
彼は昔、無意識の内に大事な空気を壊したことがあったが今回は意図的にやった。部屋前でイチャイチャして欲しくなかったのが一番の理由だが、なのはとフェイトの空気が非常に危なかったからだ。

彼の故郷ミッドチルダでは同性結婚は可能。理由としては、たくさんの次元世界の中心世界であり、様々な価値観を持っている人が集まる。そんな中で、人生の一大イベントと言っても過言ではない結婚を規制するのは余り良くないとの事だ。
その様な理由で同性結婚は可能だが、風当たりが良いわけではない。
故に、まずないと思うがこの二人がくっつくことは可能な限り阻止したいのだ。

「あ、ありがとうクロノ」
「ごめんねクロノ君」
「別にいいが、君達は学校でもそんな感じなのか？」

そんな感じがどんな感じなのかが分からなかった二人は考え始める。これは聞いても無駄だと判断したので、適当にあしらってリビングに戻る。

「なんの事だったんだろ？」
「さあ？　あ、フェイトちゃん、それじゃあお邪魔するね」
「う、うん」

ギギーとゆっくりとドアが開く音がする。ドアが塞いでいた光景がだんだん広くなってき、フェイトの心拍数も速くなってくる。

一方ワクワクドキドキしていたなのはは、予想以上の物の無さに驚

いていた。フェイトは物欲が余りないと知っていたので少ないとは思っていたが、これほどでとは思わなかった。
なのはの目に映っている物は、机と椅子とテーブル、ベッドだけだ。机の上には鉛筆一本と消しゴム以外には何もなく、テーブルの下に何も敷いておらず座布団すらもない。そのテーブルにポツンと置いてあるバルディッシュがやけに寂しそうに見える。

「へー、ホントに物が何にもないねー」
「う、うん、リビングから座布団持ってこようか？」
「大丈夫だよ、私正座得意だし」

別に正座じゃなくても良いとツッコみたかったが、用意していない自分がそれを言うのは駄目だった。
テクテクと部屋に入って行くなのは。その数歩前にはかなり小さな鉛筆が落ちている。

【このまま行くとなのはに気付かれちゃう！】

「待ってなのは！」
「ふえ？」

突然大声で呼ばれて驚いたのか、可愛らしい声を上げて振り向いた。
そしてフェイトは何と言おうか呼んだ後になって考えていた。
パッと出るファッション関連は言ってしまったし、急に魔法の事になると返って怪しまれる。

ここは――ここは――――

「きょ、今日良い天気だね」
「そうだね」
「・・・・・」
「・・・・・」

どうやら言葉を間違えたようだ。お菓子が載っているお盆をギュッと握りどうしようかと考える。
再び口を開こうとした時――パキン

「ふぇ？　なにこれ？」
「あ、あの、なのは、それは違うの。それはえーと」

この異様な慌て方、あり得ない程の物の少なさ、部屋の隅に視線を向けるとほこりがチラホラと見える。この三つの点から言えることは。

「もしかしてフェイトちゃんって、お掃除苦手？」
「・・・・そう、なんだ・・・・」

将来の万能主婦が始めた事は押し入れの中を整理する事だった。
中を見てみると普通の女の子よりかは少ないが、それでも座布団や絨毯はあった。他にも教科書や、プリント、アリサから貸してもらった漫画やゲーム、そして冬休みのプリントまでもがゴチャゴチャになり詰め込まれていた。唯一フェイトらしいことは、アリサから貸してもらった物だけは傷つかない様に段ボールの中に入ってあっ

た事くらいだ。

「こ・・・・これは・・・・・」

「ご、ごめんね。えと、必死に頑張ったんだけど、散らかる一方で・・・・」

「・・・・クスッ、でもフェイトちゃんにも苦手な事あったんだ」

「え？　私文系全然ダメだし、スポーツも簡単なのしか出来ないし、魔法も一対一でなのはに勝てないし・・・・」

「にゃはは、それでも文系の点数上がってきてるし、初めてのドッジボールで活躍してる、それにフェイトちゃん魔法戦で思いっきり攻撃してない。でしょ？」

どれもこれも自分が実感していなかった。文系の点数が上がっていると言ってもテストはまだ一回だけ、活躍したと言ってもすずかに負けた、魔法戦でも思いっきり攻撃しているつもりだった。

「その顔は信じてないね～。点数は国社のドリル、すずかちゃんは上級生の男の子よりも強いから渡り合えるだけで凄い、昔フェイトちゃんとジュエルシードを競っていた時より攻撃が軽い。全部気付かなかった？」

「う、うん」

「だからフェイトちゃんの弱点見つけられて嬉しいっ」

「よく分からないけど、嬉しいならよかったよ」

「うんっ。さて、それじゃあ早速、お掃除しよっか」

白のコートを脱ぎ、長袖のTシャツの袖を捲りあげる。

「だ、ダメだよ。なのははお客様何だから、これは後で私がっ」

ガラガラガラガラ

フェイトの思いとは相反し、詰め込んでいた荷物が落ちていく。

「み、みんなに手伝ってもらうよ。な、なのははダメだ」

「フェイト、すまんが母さんとエイミィとアルフの三人と買い物行く予定になってたんだ。急ですまん。なのはもゆっくりしてってくれ」

それだけ言い終わると再びドアが閉まって行く。フェイトが言いかける前に、皆玄関から出て行く声がした。

「どうする？」

「お願します・・・・」

こうしてフェイトの部屋掃除が始まった。

まず始めたのは部屋の掃除と換気。籠っているこの空気を新鮮なものと入れ替える作業だった。

フェイトの努力は気付かれる前に、真冬の空へと消えて行く。

「フェイトちゃん、掃除機どこにある？」

「え～と、確かリンディ提督がリビングの「あ、多分あそこだ」ってなのは！？」

言い終える前になのははは部屋を飛び出し、その数十秒後には掃除機を持って部屋に入ってきた。

「え？　どうして？」

「ん～、なんとなく、かな？」

「いや、私が聞きたいよ」

フェイトがこの時期から天然のタラシである様に、なのはもこの時から万能妻としての才能があった。もし自分がしまうとしたらここだろうと考え、それが見事に的中したようだ。

「それじゃあフェイトちゃんは部屋の外で待ってて」

「ええ!?　わ、私も手伝うよ！」

「ん～、でも床の掃除以外はなんてすることないから。まだ引っ越ししたばっかりだし、掃除機で吸える範囲で十分だよ」

この当たり前の意見がフェイトには専門用語に聞こえ、目の前の少女がプロにさえ見える。

なのはの言う通り部屋の外に出たフェイトは、ポツンと体育座りをして掃除をしているなのはを見つめていた。

可愛らしい笑顔で掃除をしている少女は、まるで好きな子の家で掃除をしている姿だ。最もそんな事が今のフェイトに分かるはずも無く、ただただ「なのは可愛いな～」とそれだけを考えていた。

テキパキと掃除をしている途中、フェイトのベッドを見つめる。

「これも後で洗うね」

「え゛!?　もしかして汚かったり・・・・」

「ううん。ただ、しわが酷いから一回洗濯してしっかり伸ばした方が気持ちよく寝れるかな～って」

「・・・・お任せします」

「うん、了解」

まるでなのはが遠い人の様に感じる時間だった。

「あ、じゃあその間、フェイトちゃんシーツを洗濯機に入れてきてくれる？」
「え！？　う、うん、分かった」

つい了解してしまったが、１０年後出来ない事を今のフェイトが出来るわけがない。しかしちょっとしたプライドというか、少しでもなのはに迷惑をかけたくないという優しさから、ついつい洗面所まで持ってきてしまった。

さて、問題はここからだ。

最近の洗濯機の場合は、洗剤を入れて、おまかせ、洗濯スタートのボタンを押すだけで洗濯をし始める。

しかしその簡単な行動すらもフェイトには分からず、綺麗になかと思いバスルームからボディーソープを持ってくる。

次に洗濯機のふたを開けようとするが開かない。ただ持ち上げるのだが、引っ張ろうとしたりスライドさせようとしたりと正解に近づく気配が全く無い。

やっとの事で正解にたどり着き、シーツを入れようとするが、洗う為の水がない事に気付く。洗濯機が水道から運んでくれることなど全く知らないフェイト。今度は水道水からチビチビと洗濯機に入れ始めた。

「・・・・何してるの？」
「え？　何って洗濯機に水を・・・・」

自分を見ているなのはが、凄く奇異な目で見ていることに何となくだが気付いたフェイト・テスタロッサ・ハラオウン九歳だった。

「これはこうして、こうしてこうで・・・よし、洗濯開始っと」
「な、なのはは凄いね自分の家のじゃないのにこんなにテキパキと」
「私からすれば洗濯機に水をコップで入れていたフェイトちゃんの方が凄いかも」
「ウッ！」
「にゃははは、それじゃあフェイトちゃんの部屋のお片付けにレッツゴー！」

ここでもなのはの力が発揮された。
正確にここだと、あそこだと、フェイトの好きな配置に物を置いていく。なのはは左利きなのでいつも左寄りに物を置いているが、ちゃんとフェイトの効き腕に合わせて物を置いていく。

その作業がしばらく続き、ついにフェイトの部屋が女の子らしくなった。

「ふ～、どうかな？」
「凄いよ・・・・、私の部屋に見えない！」
「それもどうかと思うよ・・・・。でもフェイトちゃんって片づけというより家事全般がダメみたいだね」
「・・・・私も今日知ったよ」

今日は掃除洗濯以外にも、ゴミの整理や食器洗いに片づけｅｔｃ。整理等、どう考えてもリンディがやらなくてはいけない仕事をなの

は一人で終わらせたのだ。そしてその全てを手伝ったフェイトだが、全てにおいてダメダメだった。

真上に上っていた太陽も今は地平線の向こうに見える。その太陽をフェイトは空しい眼(まなこ)で見つめている。

そんなフェイトを見て、思わずなのはは笑ってしまう。

「でも大丈夫だよ」

「え？」

「私がいるから。五年後も、十年後も、そのずっとずっと後も一緒に」

「・・・そうだね。だって私たち」

「「友達だから」」

「ってことがあったんだ。その時の私は自分だけがフェイトちゃんの弱点を知ってる、って事にしたかったからその日の家事はフェイトちゃんと一緒にやった、ってことにしたの」

惚気が異様に多い話だったが、これで納得した。

そして今日の苦労は何だったのだろうと、同時に空しさが出てきた。

ＦＷ陣、いや、今回フェイトの弱点を血眼になって探した全員は、地平線の向こうにある太陽を空しい眼（まなこ）で見つめた。

弱点ｐａｒｔ２（後書き）

さて終わりました。

またもサンが空気～～

なんか今回は完全なフェイなのＳＳでした。

そして証言者となのフェイ以外は誰も会話をしていないという妙な事をしました。こういうのもたまにはいいかな～～と、ちょっとした遊び心です。

最近のペースだと後書きで書くこと余りないんですよねーー。しかし少ないのも悲しいという、何とも難しい……

それじゃあ後書き文字稼ぎに、誤字脱字、アドバイス等ありましたら感想お願いします！

無事ではない退院（前書き）

はい更新遅れて申し訳ありませんでした！！

前書きに書くことってあんまないですよね～～。前回の反省点とか、今回の話についてですかね？
え～と、今回はテスタロッサ家がお見舞いに来てくれるそうです。

それではどうぞ

無事ではない退院

なのは、フェイト、サンの三人の弱点が発覚してから三日後。今日はなのはとフェイト、ヴィヴィオ、アインハルトが見舞いに来た。現在エリオとキャロはシグナムとヴィータの二人の訓練を、ティアナとスバルと一緒に受けていることだろう。なのはとフェイトも忙しい筈だが、毎日の様にお見舞いに来ている。理由としては前日や深夜にほとんどの仕事を終わらせたり、はやてや後継人のリンディ、クロノ、カリムの気遣いがある。

いい加減に退院したいと、暇そうにしているサンの所にある悲報が届いた。

それはサンを死刑台に送るのと等しい報せ。

「あ、今日お義母さんがお見舞いにいらっしゃるよ」

コトン

ヴィヴィオにせがまれ音読していた本をポトリと落とし、まるで体全体から生気が失っている様に色が無くなっていく。サンが心配だったのでヴィヴィオとアインハルトはなのはを呼ぶが、返って来るのはのんきな声。ますます不思議に思い、母のお義母さんの娘、つまりフェイトに尋ねる。

「あの、どうしてサンはこのような状態になったのですか？」

アインハルトの指先には、カタカタと病人の様に震え、常ではない程汗を噴き出している不気味なサンがいた。
それを見るとフェイトは苦笑いしながら理由を教える。

「実は私の母さん、リンディ・ハラオウンさんは、甘い物が尋常じゃないほど大好きなんだ」
「そしてサンはお義母さんとは反対に、尋常じゃない程甘い物が嫌い」
「つまり・・・・」
「お兄ちゃんはリンディおばあちゃんが苦手？」

「ククク、ククク・・・・アハハハハハハハハハハハ！！　死にたくない、死にたくない！！　今すぐ退院だ、退院！！」

余りの壊れっぷりに純粋無垢なヴィヴィオもポカンと口を開ける。
体を起こし、手の届く所から片付けを始め、更には狂笑して意味不明な言葉を叫ぶ。まるでデビル本人を見ている様な程おかしくなっていた。

そう、改めて言うとサンは甘い物が大の苦手だ。前にシャッハが出したかなり控えめの甘さの和菓子でさえ、サンにとっては尋常じゃない甘さだったのだ。
そしてリンディは大の甘党。緑茶にミルクと砂糖を入れて飲むほどで、ハラオウン家にはお菓子専用の棚が一本ある。

つまりサンにとってリンディとは、この世で最も危険な人。

「さあとっとと帰ろ「やっほー、久しぶりだね～サン。有名になっちゃって」エイミィさん・・・・ってことは!?」
「こんにちは、サン。凄かったわよ、術式兵装って能力。孫がこんなに有名になっておばあちゃん嬉しいわ」
「・・・あ、あははは・・・・・・、こんにちは、リンディおばあちゃん・・・・」

大の甘い物嫌いがリンディと接触する時は、生死を賭けた激戦になる。

サンがベッドにうずくまりビクビクしている一方で、リンディとエイミィはヴィヴィオとアインハルトを可愛がり、なのはとフェイトはクロノとエイミィの男女双子の子供、カレルとリエラとお話をしている。

「ヴィヴィオとアインハルトだったわね。ヴィヴィオとは通信で一回だけね」
「うん、初めまして、リンディおばあちゃん」
「同じく初めまして。アインハルト・ストラスと申します。おばあさま、おばさま」

しっかりと挨拶をしてくる子供達をよしよしと撫でる。二人とも六歳なのにしっかりした子だ。カレルとリエラも見習ってほしいものだ、そう思いながらチラリと子供達を見る。二人とも持ってきたお

もちゃで遊んでだの、追いかけっこしようだのヴィヴィオ達の二歳年上とは思えない。

それでも恥ずかしい半面、それでも元気で嬉しいみたいだ。苦笑いしているが、子供達を見ている瞳が優しい。

「あの、エイミィおばさんのパパは？」

「パパ？　ああ、クロノ君のことか。少し遅れて来るよ。それより二人とも、君達のパパとママが困っているから息子と娘と一緒に遊んでくれる？」

「余り一般的な遊びは分かりませんが努力します」

「うん、私も遊びたい！」

そう言って四人の方へ向い、子供四人で遊び始める。年齢が近いせいかすぐに意気投合したようだ。

「にゃはは、ごめんなさいお義姉さん。ちょっと話に捕まっちゃった」

「確か戦隊ものだったよね？　あのおもちゃ」

二人の子供が持っている物は赤、青、緑、黄色、ピンクの不思議な格好をした五人組のフィギアだった。今子供には大人気の特撮物なのだが、高町家の子供とは縁のない物だ。

「うん、最初は面白そうだよって私が誘って、ハマったの。最近はクロノ君まで一緒に見て楽しんでるよ」

「あー、ありますねそういうこと。子供が見ている番組に親もハマってしまうって」

「え？　なのはさんとフェイトもあったの？」

ベッドを見ると布団の中から微かに新聞紙が飛びだしている。そんなサンがＴＶを見るとは余り思えない。

「魔法生物に興味があるんだ。それで一時期凄いハマっていて、遅くなる時はよくビデオを置いてたり」

「でも最近はまたニュースとか新聞とか、もう少し子供らしいのにハマってほしいんですけどね」

「家としては羨ましいよ。最近特撮の爆発音が嫌になってきて、偶には別のが見たくってさー」

「あら？　でもエイミィはニュースそこまで好きじゃないでしょ？　サンが息子だったらずっとニュースが流れているかもよ」

「それはそれで嫌だな～」

大人組は大人組で盛り上がっているようだ。久しぶりにあった女同士なので、会話のネタが途切れることはまずない。仕事の話から、最近どうだとか、子供たちの話だと色々あった。

一方子供組は何をして遊ぶかについての話を始めた。子供が仲良くなるには、一緒に遊び、笑い合うのが一番早いだろう。それを無自覚でするのが何とも可愛らしい。

「う～ん何して遊ぶ？」

「僕は鬼ごっこがいいな」

「しかしこの場で走り回るのは少々無理があるかと・・・・。それに病院ですので静かにしなくては」

「じゃあレンジャーごっこにしよ！」

手に持ったフィギアを自慢そうに掲げるが、生憎ヴィヴィオ達はそれを知らない。ヴィヴィオとアインハルトは申し訳ないのか、顔をショボンとさせる。

「ごめん、私達それ見たことないんだ」
「じゃあじゃあ一緒に見ようよ！　ねえママー！　リリカルレンジャーのビデオあるよね！？」
「え〜？　まさかこの場で見るつもり？」
「ヴィヴィオちゃんもアインハルトちゃんも見たことないから、見せてあげようと思って」

そう言われると言い返しにくい。現にヴィヴィオもアインハルトも見たそうにソワソワこちらを見てくるし、なのはとフェイトも見せてあげて下さいと両手を合わせている。
またあの爆発音を聞くとなるとテンションが若干下がるが、ヴィヴィオとアインハルトのためだと思い、リリカルレンジャーのビデオが入ったメモリーカードを渡す。

はしゃぎながら受け取ったカレルは、すぐさま病院のＴＶに繋げる。流石子供、遠慮なくＴＶを占領して、音を上げまくっている。

布団の中で新聞を読んでいたサンには目障りな音だったが、この際甘い物を食べなくて良いのならどうなってもよかった。布団の中にある新聞紙を見る。最近の経済の事など今はどうでもよいので、自分が載っている記事を確認する。反感はないみたいだが、ここまで徹底してサンが正義だと書かれると逆に疑う。おそらく力ある者が圧力をかけているのだろうが、その人物が分からない限り、いつマスコミが自分に対するアンチ記事を報道するかが分からない。

そう考えると落ち着けない気もするが、それ以前に甘い物を食べなくても良いかもしれないのだ。少しホッとしていた所で、ガバッと布団を剥がされる。

「サン君も一緒に見よう！」

「いや、俺は遠慮「お兄ちゃん一緒に見よう！」・・・・分かったよ」

相変わらず愛しの妹のお願を断れない。さすがにこのままだとダメだと自覚しているが、直そうにも直せないのだ。むしろ酷くなっていき、最近はアインハルトのお願も、好き嫌い関係無くＹｅｓと言っている気がする。

これがシスコンの始まりなのかと若干鬱気味になる。更には子供向けの戦隊ものまでも見ねばならない。

オープニングの始めが爆発、途中出演者が出て再び爆発、サビで爆発の連続、終わりに爆発。この作品の監督は絶対爆発マニアだとこれだけで理解した。そして見事に子供達の心を捕まえている。無駄に派手にすることにより、リリカルレンジャーを脳裏に埋め付け、強くてカッコイイとイメージさせる作戦だろう。

サンとエイミィの二人の溜息が重なる。答えは単純、この戦隊ものを見聞きしたくないからだ。そしてサンはベッドの上を子供たちに奪われ、枕を頭に横になることが不可能になってしまう。

その時ひんやりした手が、自分の手と触れた。手の本人はアインハルトだ。目の前に映っているテレビに見入っているのか、サンの手をギュッと握っている。やはり大人っぽくてもやはり子供だ、そう思うと微笑ましい。

サンは少し強引にアインハルトの手を引っ張り、自分の体の近くに寄せる。

「ふえ？」
「アイン、膝借りるぞ」
「っ！？」

突然アインハルトの膝にサンが頭を寝かせた。余りの急な事に金魚の様に口を動かす。
その姿を横眼でチラリと見、クスリと笑う。

「いいのか？　この番組気にいったんだろ？」
「ッハ、そ、そうでした。ところで、サンはずっと私の膝に・・・・」
「嫌か？」
「嫌ではないですけど、少し恥かしいです」
「別に良いだろ。スキンシップスキンシップ」
「は、はあ・・・・良く分かりませんがスキンシップですか」

今一膝枕を知らないアインハルトは、サンの言う通りスキンシップということで済ませた。が、それにしても恥ずかしい。
裸体を見られたことがあるので今更かもしれないが、やはりサンは兄でも弟でもない。あの時は双子の様になりたいと言ったが、実際の所双子の様な関係になっていない。家族だが異性としても自覚してしまうと難しい関係になっている。
それらの思考が頭の中にあるので、とてもではないがテレビに集中など出来ない。

無意識の内にサンの頭を撫でながら、意識が深い思考の海を流れている。

一方大人組がガールズトークをしている途中に、クロノが到着した。

「すまん、遅れたよ」

「久しぶりクロノ君」

「久しぶりだね兄さん。最後に会ったのはサンがカリムさんの騎士になった日だったね」

「ああ。それにしてもサンか・・・・。立派というか凄くなったものだ」

そう言いながら子供達の方を見るが、サンの姿が見えない。キョロキョロと辺りを見渡すが、何処にもいない。クロノが何をしているのかが分かったエイミィは、アインハルトを指す。

アインハルトを見ても何も感じなかったが、よく見てみるとアインハルトの膝もとにサンの顔が見えた。

「膝枕とは・・・・僕の同僚や上司が聞いたら転倒するだろうね・・・・」

「そういえばサンって、クールで無口で、カワカッコイイ天才少年として見られてるんだったわね」

「「ップ、サ、サンが、クールで無口?」」

リンディの言葉がツボにハマってしまったなのはとフェイト。産んだ親として、子供が褒められているのに笑うのはどうかと思うが、サンがクールで無口と言われているのが余りにもおかしかったのだろう。もう限界の様で、大声で笑い始める。

「アハハハハハ!!　サ、サンが無口でクールってっ!　ど、どうやったらそんな噂が?」

「行き過ぎの妄想と言う奴だ。ショタコン？　だったか？　その性癖の管理局員が色々と広めているらしい」

「「・・・・そ、そうなんだ」」

笑い声がピタッっと収まり、今度は逆に苦笑いが止まらない。全く笑えない冗談だ。リンディもエイミィも今の話は初耳なのか、なのはとフェイトと一緒に、サンを暖かい目で見つめる。その本人は呑気にアインハルトの膝枕を堪能している。

「本人には教えない方がいいわね・・・・」

「そうですね・・・・。知らない方が幸せな事が世の中にはありますから・・・・」

フェイトが言える立場ではないが、危ない性癖者の毒牙に刺されてほしくないのだ。それは親としての使命。

「ところでエイミィ。サンとアインハルト・・・・だったか？　あの二人はどういう関係だ？」

クロノが言った二人は今も膝枕をしており、手と手を繋いでいる。仲が良い事は嬉しいのだが、繋いでいる手が恋人繋ぎなので疑ってしまう。エイミィもそれには何とも言えないが一つ言える事がある。

「ん～、よくわからないけど、二人は兄弟のスキンシップしているだけって雰囲気だね。昔のなのはちゃんとフェイトちゃんと一緒だね」

「そ、そうか・・・・。恋人まで親に似ないことを祈ろう」

「昔の私ならそういうけど、今はフェイトちゃんがなのはちゃんを

選んで良かったと思ってるよ」
「まあ二人ともこれ以上にないくらい幸せそうだからな・・・・。そう言われると弱いよ」

二人は見つめ合い、自然と念話を切る。

「ふ～、喉が渇いてきたわね～」
「あ、お義母さん、お茶とジュースがありますけど？」
「お茶をくれるかしら？」

なのはは笑顔で頷き、持参のお茶っ葉を同じく持参のきゅうすに入れる。
コポコポと湯飲みにお茶が入る音が聞こえる。その後リンディの前に、湯気が立ち、真ん中には茶柱が立っている湯飲みが置かれた。

「あら、凄いわね。茶柱が立ってる」
「にゃはは、偶然ですよ」
「ッフ、なのはなら意図的に立たせそうで怖い」
「私の奥さんだもん。そのくらいきっと出来るよ」
「お、奥さん・・・・」
「そうね～、フェイトの奥さんはなのはさん位家事が出来ないと駄目だわ。それで丁度普通の家庭になるから」
「成程、つまりなのはちゃんが１２とするとフェイトちゃんが－１０って事ですね」
「ひ、酷いよ。私だって頑張って練習してるよっ」

リンディはバッグから砂糖とミルクを取りだした。この場の大人全員が使用方法を知っていたので、何も言わない。
角砂糖を取り出し、お茶に入れようとする。

「フオオォォオオ！！」

その瞬間もの凄い金切り声と共に、リンディの目の前の湯のみが消えた。その正体はサンで、まるで信じられない様なものを見る目でリンディを見ている。

「あら？　どうしたのサン？」

「どうしたもこうしたもないですよ！　いつも思いますが何ですかコレは！？　どういう思考になるとお茶に砂糖とミルクを入れるの！？　ってかミルクどう考えても悪くなるよね！？」

「ミルクはしっかりと温度調節してあるわよ」

「一番どうでもいい質問から返さないで下さい！」

「サン、もう母さんのこれはどうしようも無いんだよ。諦めよ？」

「ダメダメダメ！　もしあのお茶の匂いをもう一度嗅いだら俺は死んでしまう！　南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」

「ア、アハハハハ・・・・」

ここまで来るとドン引きだ。そしてそれに構わずお茶に砂糖とミルクを入れようとしているリンディもどうかと思う。

フェイトは急いでリンディの腕を掴むと、突然サンの経が止む。リンディの腕を離すと経が始まる。掴むと止む。

「・・・・」

「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」

「・・・・」

「だ、だいたい苦い物を無理やり甘くしようとする考えが」

「・・・・」

「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」

「・・・・」
「そ、そもそも和の飲み物にミルクを入れようとする考えが分からない。つうかあなたは日本を誤解している！　日本人が想像している、外国人のイメージしている日本の様に誤解している！」
「・・・・」
「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」

「・・・お、面白い」
「もうフェイトちゃん！　趣味悪い・・・・ップ」

今のサンの命綱はリンディの腕を掴んでいるフェイトだ。その腕が離れる度に経を唱えている。
まるでおもちゃの様に掴んで離す、それの繰り返しをしている。
流石に可哀そうになったのか、そろそろ止める。

「ハァ、ハァ、疲れた・・・・」

「それじゃあサン、疲れたみたいだしお弁当食べる？」
「俺の疲労の根本的な原因はリンディおばあさんですよ」

「まあ」

まるで自覚がないのか手を口に当て、女性らしく驚く。

「まあじゃないですって。ハァ、まったく少しは自重して下さ「お兄ちゃん！」うおっ！？」

突然サンの背中にヴィヴィオが抱きついてきた。まだ完全ではない

体で、同じ大きさのヴィヴィオを支えるのは難しく、前に倒れこんでしまう。
慌てて目の前にいたリンディが、サンとヴィヴィオの二人を支る。

「ヴィヴィオ、あまりお兄ちゃんを困らせちゃダメよ」
「・・・はい・・・。ごめんね、お兄ちゃん」
「いや良いんだ。そもそもお前一人支えられない俺が駄目だ。それよりほら、リンディおばあちゃんにありがとうは？」

ヴィヴィオはサンから離れリンディの前に来ると、綺麗なお辞儀をする。

「ごめんなさい」
「いいのよ。サンが言ったけど、サンが支えれないのがいけないのよ。でも、今サンは怪我してるからしばらくは気を付けるのよ？」

「はい！　ありがとう、リンディおばあちゃん！」
「あら～、ホントに良い子だわ！　昔のクロノに見せてやりたいくらい」
「僕は真面目で、しっかりしてただろ！？」
「子供らしさが足りなかったわよ。丁度今のサンみたいに」

大人の子供の頃の話。それは笑うには十分なネタだった。

「そう言えばサン歩けるようになったね」

普通に流していたが、サンはリンディの湯飲みを走って奪ったのだ。つまり走ったという事。サンが退院出来るのは体がある程度治ったからであり、その条件としての歩くという行為を既にサンはすませている。

「ああ、どうやら甘い物への拒絶反応みたいだ。自分でやって恐ろしいよ」

「じゃあサンを退院させたのは私ってこと？」

「ハハハ・・・・否定できそうだけどできない。なんか空しい・・・・」

「サン君！　一緒にリリカルレンジャー見ようよ！」

「サン、今凄く良い所です。是非一緒に拝見しましょう！」

「凄いんだよ！　少し頭冷やそうかとか、疾風迅雷とか、言ってバンバン敵を倒して行くの！」

どう考えても母親と父親のセリフがある。ツッコみたいがツッコんだら負けな気がする。現になのはとフェイトは何も言わずに大人組で話を続けている。

「分かった分かった。続き見るぞ」

サンが見始めたシーンは五人と一匹の怪人が戦っている所だった。正義とか言いながら五対一なのは良いのだろうか？　等と戦隊ものを卒業したばかりの子供と、同じ考えをしていた。そんなサンを無視して、四人は真剣に画面と向き合っている。

「いくぞ！　これが俺等の全力全開！　スーパーミラクルジェットハイパーソードジェネラルビーム！！」

何とも長い名称だろう。カッコよさそうな物を全てぶち込んだ攻撃

だ。余はただの図太いビームだった訳で、ネーミングセンスが無いと自覚しているサンが、これは酷いというレベルだ。せめてスーパーかハイパー、ソードかビームのどちらかに絞れよ、と取り敢えず心の中でツッコミを入れた。

「グワアアアア！！　こん・・・・なん、じゃ・・・・満足、できねぇ・・・・ぜ」

「ついに満足怪人をやっつけたぞーー！」
「「「やったーー！」」」
「す、凄いです！」
「ああ・・・・、何かスゲー人気のある人を倒した気分だ・・・・」

こうしてあっさりとサンの退院が決まった。退院できた理由が甘い匂いを嗅ぎたくないという、医者が納得できない理由だ。
なのはとフェイトはリンディに感謝し、サンは納得いかない表情でその姿を見る。

そして丁度子供たちのお腹が空き始めた。サンとアインハルトを除く子供達は親にお腹空いたとせがみ、そんな子供たちに親はお弁当を渡している。
どうせ今日も病院食だろうと嫌嫌していたサンに、リンディからお弁当が渡された。一瞬感動したが、すぐさま冷静さを取り戻す。リンディが作ったお弁当の中は、サンには未知なる世界と等しい。
フェイトの昔話にはリンディのお弁当が甘かったという話は無かっ

たので、大丈夫だと思う自分。
激甘党のリンディが作ったお弁当なので、甘い物が嫌いな人間に対しても甘い物を作ったと思う自分。

この二つの考えがグルグルと頭の中を廻りまわる。

「大丈夫よサン。あなた好みの味付けにしておいたわ」
「ほんと・・・・ですか？」
「も～、そんなに警戒しないで。いくら私でも悲しいわ」
「ご、ごめんなさい。そ、それじゃあ頂きます」

お弁当の蓋を開けると、白ご飯、ハンバーグ、ポテト、人参等が置かれていた。よだれが止まりそうにない位美味しそうだ。
サンも嬉しそうに喜び、早速ハンバーグを掴み口に入れる。

口の中にハンバーグのとても甘い匂いが駆け巡る。そしてまるでサンのトラウマのチョコレートの様に段々と溶けてゆき、液体となったチョコが下に絡みつく。

「ガハッ！　こ・・・・れ、は・・・・？」
「あっ！？　ごめんなさいサン！　それ私のお弁当だった！」

改めて弁当の中身を見てみると、白ご飯は砂糖、ハンバーグはチョコ、ポテトはリンゴ、人参はようかんで作られていた。
しかしおかしい、何故自分が甘い匂いに気付かなかったのか、それが気絶しかけているサンの疑問だった。

チラリと隣を見てみると・・・・美味しそうな匂いを発している四つの可愛らしいお弁当がある。

バタリ

リンディが毎日このお弁当を食べていないことを微かな意識で、祈るサンだった。

まぶたが重い。意識を取り戻したサンが思った事だ。
意識もまだ朦朧としており、手を動かそうとするが体が言う事を聞かない。おまけに頭痛がし、体が燃えるように熱い。何とかして目を開くと、久しぶりに見る天井があった。

「ここ・・・は？」
「あ、起きたサン？　ここはもう機動六課だよ」
「も～、心配させないでよ。気絶した時はびっくりしたんだから」

フェイトとなのはが安心したように笑うが、サンの瞳にはその笑顔が朦朧としか映らない。
カラカラになった喉を必死に動かす。

「み、ず」
「え　ぇ！？　ま、まさかサン・・・・」

まさかとは思い、なのはは額同士をくっつかせる。すると、自分よりかなり高いサンの体温が伝わってくる。そう言えば呼吸が荒く、

顔が火照っており、汗が噴き出している。

「もしかしてサン・・・・甘い物食べて風邪ひいたの？」

「？　甘い物食べるとみんな風邪ひいちゃうの？」

「違うと思いますよ・・・・。多分サンの拒絶反応かと・・・・」

サンは退院ができた。それは甘い物への拒絶反応からだ。

そして今、同じく甘い物への拒絶反応で、３８℃の高熱を出した。

高町家、平凡そうで平凡ではないこの家族は、退院後のサンの看病を開始する。

無事ではない退院（後書き）

今回も終わりました。

そして更新遅れて申し訳ありませんでした。理由としては画面の見すぎで頭痛がしてしまったんですよねｗｗｗ
しかし執筆したかった私は目を閉じ、まさにブラインダッチでなんとか執筆を成功させましたｗｗ

今回は折角案を頂いたのに、中々書けなかったので退院させました。
まあ普通に退院させるのもあれなのと、いつかテスタロッサ家のお見舞いを書かないといけなかったので、それらを一緒にしました。

サンの甘いもの嫌いは半端ないレベルです！
限界が鯖の味噌焼きと甘い卵焼きですねｗｗ

全く糖分も大切な栄養だというのに、仕方がない奴です。ちなみにリンディさんのお弁当が毎日アレなのかは御想像にお任せしますｗｗ

それでは次回も頑張ります！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3476t/

魔法少女リリカルなのはStrikerS 術式を潰す少年

2011年10月21日04時08分発行